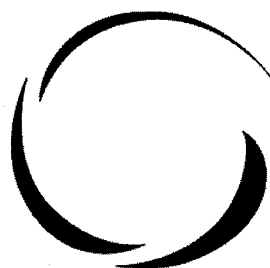

C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

(元外務審議官、元駐西ドイツ大使)



GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

宮崎弘道 オーラル・ヒストリー

目次

〔宮崎弘道 略歴〕……………口絵

《第一回》

幼くして母方の宮崎姓を継ぐ……………	7
小学校時代の思い出……………	9
七年制の府立高校に入学……………	11
高等学校時代の友人と先生……………	13
佐賀出身の父親の知人……………	15
東京大学法学部政治学科へ……………	17
外務省入省、政務局第三課へ……………	19
ソ連の宣戦布告とポツダム宣言受諾……………	22
外交官になろうとした理由……………	26

《第二回》

大東亜省と外務省の関係……………	31
終戦連絡中央事務局のこと……………	34
外務省を辞めた人たち……………	39
アメリカ担当の調査局二課へ移る……………	43
通産省で外貨割当に従事……………	44
外務省と通産省の発想の違い……………	50

《第三回》

サンフランシスコ総領事館での仕事……………	57
当時のサンフランシスコ周辺の日系人……………	60
対米輸出に関連した問題——ワシントンで……………	64
余剰生産物協定の締結交渉……………	70
ガット本加入のための関税交渉……………	71
吉田、鳩山内閣期の外務大臣……………	76

《第四回》

経済局在職中の局長や外相の印象……………	85
ジュネーブ国際機関日本代表部へ……………	89
重要だったガットの国際収支委員会……………	92
ガットのパネルで議長を務める……………	96
国際的な会合でのタクティクス……………	99
ケネディ・ラウンドに乗るまで……………	102
経済外交の第一線から見た東西冷戦……………	106

《第五回》

ガット―一条国移行とOECD加盟……………	111
ケネディ・ラウンドでの交渉……………	115
ケネディ・ラウンドの余波……………	120
EEC誕生のときの外務省の対応……………	123
OECDの各種委員会……………	124
エコノミック・マインデッドの大切さ……………	128
ベルリン総領事時代の東西ドイツ……………	131
国際機関の使い方が下手な日本……………	134

《第六回》

各国のOECD大使の印象……………	141
東京ラウンドの交渉内容……………	145
国交正常化交渉の初の使節として中国へ……………	147
石油危機の際の外交交渉……………	152
ワシントンでの石油消費国会議……………	155

《第七回》

石油ショック後にIEAを設置……………	165
三木内閣当時は極端な少数派に……………	169
ランブイエ・サミット会場での苦勞……………	172
一次産品の問題をシエックで扱う……………	175
サミットの準備段階での裏話……………	178
アルジェリア大使として赴任……………	182
ハイジャック機の受け入れに奔走……………	185

《第八回》

福田首相と大平首相の手法の違い……………	193
空前絶後の牛場対外経済相……………	196
サミットを支えるシェルバの体制……………	199
ボン・サミットでの日独機関車論……………	202

シエルバの役割が格段に大きい日本	207
途上国に対する日本と欧州の政策の違い	211
科学技術協力協定交渉が日米摩擦を緩和	214

《第九回》

大平首相の急死	221
日米賢人会議とイラン革命の影響	223
東京サミットの知られざる一面	225
東京サミットでの原子力問題の扱い	229
東京サミットの宣言を起草	231
エネルギー問題では二つの草案を用意	233
政治問題も取り上げた東京サミット声明	237
サミット主催国のシエルバの苦勞	240

《第十回》

八〇年代初頭のヨーロッパ	247
ドイツの天然ガス・パイプライン計画	251
日本経済にプラスになる外交が基本	256
旧ソ連と西ヨーロッパの関係	261
OECDの歴史と役割	262

《第十一回》

西ドイツのフランク、シュミット政権	269
西ドイツの選挙制度と政治家	273
八〇年代の東ドイツ・東欧の状況	276
SDIと技術開発	278
EU拡大の行方と日独の関係	283
私と台湾とのつながり	287
政治的に重要なドイツ三州	289
(あとがき)：政策研究大学院大学客員教授 佐道明広	293

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第1回 —

開催日：1999年3月9日

10：15～12：08

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■幼くして母方の宮崎姓を継ぐ

北岡 それでは、大使の幼少の頃の話からお伺いできますでしょうか。

宮崎 幼少の頃と言っても、まあ、何と言いますか、一口にいえますと、「一〇で神童、一五で才子」というお決まりのコースがあるでしょう。「二十歳過ぎたらただの人」で、いまはただ以下になっちゃっているんですけどそういうコースで、小説にもならない欠伸の出るような話なんです。

生まれは東京の上野の近くなんです。というのは、私の父親が弁護士をやっております、あのへんに事務所兼住宅を設けておったので、そこで生まれたそうです。私は全然記憶がないですけど。大震災のときは「関東大震災、一九二三年」、これはどういうわけか、体が弱かったせいか母親と一緒に葉山におりまして、父だけ東京にいて完全に焼けたんですけど、私自身はまるっきり記憶がありません。葉山にも津波が来て、母親が私を背負って逃げたとかいう話を聞いたんですが、背負われたほうはまるっきり記憶がないから、なんとも……。

それから、皆様方はもうそういう話はあまりないと思いますが、昔は華族、士族、平民というのがちゃんと戸籍に、履歴書に書く欄がありまして、私の場合は士族だったんです。実は私は養子で、父親は山崎というんですが、母親の家を継いだわけです。宮崎家と山崎家は両方とも佐賀県の鍋島藩の侍だったんですけど、宮崎家のほうが格が上でいくらか財産があった。ところが宮崎家というのは、どうも男の子の育たない家系で、系図を見ますと、何回となく主君の鍋島家から婿養子を、もらわせられたのか頼んでもなかったのか知らないけど、何代かに渡って入っているんです。それで、宮崎家の当主になるはずだった私の母の兄が若くして死にましましてね。東大を出て間もなく死んじゃったんです。それで家系

が途絶えるというので、母親の親戚と父親の親戚が相談して、私は長男なんです。まだ父親が戸主になってなかったのが長男でも養子に出せるというので、母親の「宮崎」という家を継いで、継いだときはいくらか財産があったんですが、いま私の代で全部すっちゃって何もなくなっちゃったということなんです(笑)。そういう経緯があります。

幼稚園のときの友人なんかはあまり記憶がないんですが、幼稚園のときのちょっと変わったことは、親戚のうちの一人に、私の従兄弟にあたるんですが、当時、早稲田の学生でした。皆さんご存じでしょうけど、麻雀というものはアメリカから輸入されたんです。中国のゲームですからアメリカで流行ってまして、たとえばアイゼンハワー夫人とか、アメリカのかかりの人がやっておったんです。したがって、初期のマージャンパイにはこのゲタパイという大きなやつが右肩に、「東」には「E」という字が、南には「S」とかローマ字が書いてあるんですよ。当時、マージャンパイは高かったんです。象牙でね。私のいとこは金がないもので、親父をたきつけてマージャンパイを買わせようという算段だったので。ところが本人と親父とおふくろを入れても、四人いないと成立しないので、私は幼稚園のときからマージャンを習わせられたの(笑)。雀歴で、私より長い人はいないだろうと思っただけ。

北岡 いまは名人でいらっしゃるんですか。
宮崎 名人ではなくて三段です。ただ、三段というのは実力じゃなくて、とにかく免状は持っているということですよ。

上野で震災に遇って、牛込で育ったんです。牛込で幼稚園に行っておりました。私の父親は、弁護士の世界ではセカンドジュネレーションかな。弁護士というものが出てきて最初に、明治の初年に花井卓蔵とか有名な弁護士がいたでしょう。花井卓蔵と同じくらいのときに井本という人がいたんですよ。その井本とい

う弁護士の弟子だったわけです。それで、始めのうちは小さいうちに住んでおったんですが、井本弁護士が引退しまして、父がその家を借りたんですよ。その家がばかでかくて、まだ印象に残っているんです。部屋が三十いくつあったと思うんですよ(笑)。中庭があって、あれは誰が好きだったのか、とにかく動物をたくさん飼っておりましてね。犬と猫と兎と鶏と猿がいたんですよ(笑)。非常に古い家なんです、雨戸の戸袋というのがあつて、戸袋が廊下くらいにとかく長いものですから、お客さんが帰りがけに廊下と間違えて戸袋に入っちゃうんですよ。私は「また入った」って言って、母親に怒られた(笑)。

私どもはそのあと麴町というところに引っ越したんですが、そのあとその家は、宮城道雄ってお琴の名人が借りて道場にした家だったんですね。現在は宮城道雄記念館になっているという話です。

北岡 お父様は何年のお生まれですか。

宮崎 明治十六年だったと思います。

北岡 帝大ですか？

宮崎 いえ、明治です。

北岡 その頃、試験を受けて弁護士になられて。宮崎家に養子に行かれたのは、おいくつのおときですか。

宮崎 まだ記憶にない頃ですね。幼児のときです。

北岡 それは形だけで。

宮崎 形だけです。

北岡 ご自身の中だと、もともとのお家でずっと同じように過ごしたと。

宮崎 そうです。ただ、両親と弟が山崎で、私だけ宮崎で、子供心に不思議だなあと感じていたことはありますけどね。

北岡 その後、宮崎ファミリーと一緒に暮らされるというようなことは？

宮崎 いや、宮崎ファミリーがないから私が養子になったわけですね。

北岡 まったくなかったわけですね。

宮崎 母親の母が生きていたわけですよ。法律で定める、唯一残ったその養子、母親の母・おばあさんの養子ということになってるんですよ。そのおばあさんが死んじゃったものだから、宮崎家は遠い親戚は別として、近い親戚は誰もいなくなっちゃったわけですよ。

北岡 そのおばあさんが亡くなられたのは、大使がまだ小さい頃ですか。

宮崎 幼稚園の頃です。麴町に引っ越してからですから、五歳ぐらいのときですね。

北岡 この広大なお家は、牛込ですか。

宮崎 牛込です。それは借家です。

北岡 上野から牛込へ移られたら、それが非常に大きなお家だったと。

宮崎 上野は、焼けちゃって全然記憶がないんですよ。それから牛込の小さい家に移って、その後隣に移ったんですよ。

北岡 牛込の中で。

宮崎 そう。その隣の先輩の弁護士が引退したんで、父親がその家をまた借りたわけですね。

北岡 ご兄弟はあと……。

宮崎 弟が一人だけです。

北岡 そうすると、山崎ファミリーと宮崎ファミリーはずっと一緒に過ごしたんですね。

宮崎 そうです。ちなみに、佐賀というところはいま何もないところなんですけど、先生方はご存じのように、薩長土肥で維新の第一期は参議というのも薩摩や長州よりも多かったんですね。江藤新平、大木喬任、大隈重信、副島種臣って四人ぐらい、独占でも

ないけど薩摩長州よりも多くいた。というのは、非常に教育県だったらしいですね。えらいテクノクライトが育っていたわけですよ。だから、参議になったわけです。そのまた何代目かだった人が、いま申しました母方のばあさんの亭主ですね。私が生まれたときにはもう死んでいたんですけど、それが裁判官だったんです。最後は長崎だったけど、あちこちに転勤していた。

北岡 江藤新平が日本の司法の元祖の一人ですよ。

宮崎 どうも江藤新平の組に加担しなかったらしいんですよ。佐賀の乱で死にましたでしょう。そのときに、むしろ残ったほうのね。

北岡 そうでしょうね。江藤新平に加担したら危ないですよ(笑)。井上さんのそばかもしれない。そんなことないですかね(笑)。

宮崎 もういまは焼けちゃってね。この前も探しにいったんですけど、どこだったかよく分からないんです。それから牛込から麴町・平河町というところに父親が家を建てまして、そこに移ってしたがって、幼稚園は二つ行っているわけです。ひとつは牛込の幼稚園、もうひとつは麴町の幼稚園で、麴町小学校というのがくっついている幼稚園です。そのときの卒業生は、いまでも時々会うんです。幼稚園のクラス会はないけど、小学校のクラス会はやっていますからね。

たとえば昔、お見合いの写真で有名だった東条写真館。いまは東条ビルになってますけど、あの女当主が同じクラスだったんです。たとえばそういうような、麴町の近くの中小のお店だとか弁護士だとか、それからサラリーマンの息子や娘たちが行っていた小学校です。

北岡 その頃は、みんな幼稚園に行っただけですか。

宮崎 みんなは行かなかったでしょうね。しかし、入るのはべつに難しくはなかったですよ。みんな幼稚園の子供が着るエプ

ロンを着て、お弁当箱を入れる籐のバスケットを持っていくの。ここ(胸)に名札の付いたハンカチを下げて、制服みたいなもので行っていたわけですよ。

北岡 昭和初期にあったモダンさが非常に生きていたところですね。

宮崎 そうでしょうね。

北岡 それは当然、私立の幼稚園ですか。

宮崎 牛込はそうです。麴町は東京市立があったんです。

股野 東京市立麴町幼稚園。ほう……。

北岡 東京市は裕福だったんですよ。

股野 どころへんにありましたか？

宮崎 いまの麴町小学校と同じところ。麴町二丁目ですね。

父親はやボな真面目一方の男で、しかしそれでも「葉隠」や禪に凝ったりして、そっちのほうは私はしょっちゅう反発しておったんですが、母親は当時のモダンガールかなんかで。明治の時代に女学校って少なかったんですよ。日本全国でいくつか、一〇もなかったんですよ。そのうちのひとつ、神戸女学院に通っておったという。

北岡 関西のご出身ですか。

宮崎 いや、母親の父親が裁判官だったもので、当時は神戸にいたんですよ。最後は長崎ですが、あっちこっち転勤して、母親の娘時代は神戸にいた。そこでわりとハイカラだったわけですよ。母親のほうが高ハイカラで、父親のほうはまったく田舎じみていたという家庭ですよ。

北岡 両方とも法律家のご家庭なんですか。

■小学校時代の思い出

宮崎 そうですね。それで法律が非常に嫌いになりましたね

(笑)。

小学校のときの満州事変(一九三一年)は、あまり印象に残ってないんです。ただ、小学校の校長先生が事あるごとに「非常時だ、非常時だ」ということを言っているけど、なにが非常時かよく分からなかった。

もっとも私が小学校の頃に、父親が住宅兼事務所みたいのを建てて、依頼者が来る待合室みたいなところがあつたんですね。待合室に雑誌を置いてあるんですよ。その雑誌が、同じ雑誌を置いていちゃまずいという趣旨なんでしょう。当時は回覧雑誌というのがあつたんですね。お金を払うと、月に一〇ぐらいの雑誌が順々に回ってくるんですよ。そういうのがありまして、待合室に雑誌が置いてあるんです。小学校のときからその雑誌を、新しいのが来るたびに片っ端から読んでいたわけですよ。それは『中央公論』とか『改造』とか『キング』とか、『主婦の友』もあつたかな、一〇あつたわけですよ。その一〇を、なんかよく分からないんだけど、とにかく読んでましたね。だから、その当時の知識程度が、まったくくないのと、とんでもないことを知っているのといふバランスになって、頭がおかしくなってるみたいだったですね(笑)。あまり早熟ではなかったんだけど、そういうものを読んで頭から入った知識というのは、ずいぶんあつたようですね。

北岡 それは、小学校で『中央公論』を読んでいるんだつたらそうですね(笑)。当時は待合室というのは、いまの弁護士事務所をあまりよくは知りませんが、むしろいまよりは病院とか歯医者さんみたいな感じなんですか。

宮崎 いや、そうじゃなくて、二組以上の人が来たときに一人の人を入れておく控えの部屋。

北岡 それは大勢待っているわけじゃないわけですね。

宮崎 ええ。

北岡 その事務所は自宅兼事務所ですね。麴町は、当時は何とい

うんですか。

宮崎 麴町平河町というところにありまして、いまはビルになってますけどね。

北岡 そのあたりは、弁護士事務所はけっこう多かつたんですね。宮崎 わりとありましたね。

股野 小学校も麴町小学校で?

宮崎 麴町小学校です。

北岡 身近なところで生活を。

宮崎 そうです。さっき言いましたように、小学校のときは秀才だったわけですよ(笑)。小学校のときの秀才というのは、皆さんもそうかもしれないけども、ちょっと鼻持ちならないでしょうね(笑)。

股野 『中央公論』を読んでいたら、相当な小学生ですね(笑)。

宮崎 恐慌はよく分からないんですけど、恐慌の影響で父親のほうは仕事が多かつたんじゃないかと思うんですね。破産したりなんかして、民事と商事をやっている刑事をやっているものですか。それで、書生さんというのがいます。父親の事務所のほうに書生さんがいて、奥のほうに女中さんが二人常にいましたのですね。なんというか、その頃は贅沢に育っちゃって何も自分でやる必要がなかつたわけですから、『中央公論』を読んでいるればよかつたんです。何もしなくて、女中さんが全部やってくれたんです。

北岡 お母さまが一種のモダンガールだったら、よく買い物とか観劇とかにいらつしたんですね。

宮崎 いや、それはあまり。したかったらしいですけど、それほどお金があつた模様でもないです。けれども、幼稚園に行く前かなんか、母親がよく出掛けて帰ってきたのをつかかたりなんかしたことを覚えてますけどね。「どうして出掛けるのに連れていかなかったんだ」ということで(笑)。

■七年制の府立高校に入学

北岡 小学校が何年から何年までですかね。

宮崎 昭和三年から九年かな。

〔小学校を卒業後〕中学校と高等学校がくっついている府立高校に入ったんです。府立高校というのとはわりと新しく出来た高等学校で、入るのが難しかったですよ。ですから、小学校のときの秀才が集まったという。試験を受けて、一〇倍とか二〇倍の倍率があったと思います。いまから考えると、非常に変わった学校なんですよね。まず第一に、きわめて都会的な学校で、東京の主流ないしそれ以上の子弟で小学校のときの秀才が集まった七年制の高等学校で、中学校と高等学校がくっついているから……。普通、当時は高等学校に入るための受験——たとえば一高とか三高とかに入るための受験が、とても大変だったわけです、中学校のときに。それがないわけですよ。だから、のんびりしていた学校なんです。

それで、どういう人間……なんていいますかね。私どものクラス卒業生は、不思議なことに役人と学者が多くて、実業家がないわけです。だから、クラス会をやっても「おれが全部引き受けてやる」というのが一人も現れない。必ず出てこなかった(笑)。学者と役人がパイパイして……。

たとえば皆さんがご存じかと思えますのは、一度会社に入ってからまた戻ってきて学者になったのに、法学部だと岡義達。政治学をやっているのが同じクラスです。

北岡 そうですか。習いました。ゼミにおりました。

宮崎 なんか非常にとっつきの悪い男でしょう。

北岡 ええ(笑)。

宮崎 あれは日銀に入って、それからどこかに入って大学院も入り直したんですよね。それから経済学部の館龍一郎。それから文

学部も松島静雄というのが社会学かなんか。それから文学部の山下肇という独文の、一年上かな。そんなような連中が学者仲間ではいるんで、そこからどういうふう想像なさるか(笑)。

北岡 頭のいい人が多かったんでしょうね。わりあいこぢんまりした学校ですよ。

宮崎 こぢんまりしてる。

北岡 一学年何人ぐらいですか。

宮崎 僕らの頃は、高等学校はひとクラス三〇人でした。中学校は四〇人で二クラス。高等学校は、新しくほかの中学から試験を受けて入った人と合流して三〇人の四クラスになって。四クラスというのは、文甲、文乙、理甲、理乙、四クラスだったわけです。

北岡 中学のときは文理なんていうのは分かれてないわけですね。高校に入るときに決められると。

宮崎 だから、いまの館や岡はみんな文甲なんですけど、中学校のときは一緒に、同じ組になったり違う組になったりした。けど、中学校、高等学校でそれほど秀才だったという印象はないんですけど(笑)。だから、あとで偉くなったわけです。

北岡 この七年制は、東京高校とかいくつか出来ましたですね。いつ頃できたんですかね。まだ、そんなに長い歴史があったわけじゃないかもしれませんね。私学にもいくつか……。

宮崎 そう。その他に浪速高校とか、私学は武蔵、成蹊、成城。どこかもう一つ二つあったと思いますけど。

北岡 われわれの先生たちを見ている印象は、「いいところのお坊ちゃんが行ってらっしゃった学校」という印象ですね。

宮崎 本場に「坊やあがり」というね。都会的にすれっからしなだけでも、という感じはある。だから、私よりも上かな、とにかく九州大学というのが出来て九大に行って、当時から軍事教練がだんだんうるさくなってきて、みんなどうやってさぼろうかと

いう。そのうちに教練で射撃というのを、向こうのターゲットに白い紙を張って射撃して、それをあと教官に出さなくちゃいけないんですね。ほかの高等学校の人は、紙を竹の棒か何かでついで穴を開けて出したら、府立のやつは、一人だけ行って、何枚かこうやって張りつけて、一発で穴をあけたりして（笑）、そういう雰囲気はあったかもしれないですね。

北岡 場所はどこでございましたか。

宮崎 いまの都立大学。

北岡 八雲ですか。

宮崎 そうです。

北岡 お家からちょっと距離がございませぬね。

宮崎 そうです。いまはなくなりましたけど、校舎が出来てすぐのときに、私が中学校に入ったんです。だから、まだ一部完成してなかった時期です。

北岡 地元ではなくて、そっちのほうに。お父様のご指示ですか。

宮崎 別にそういうわけでもなかったと思うんですけどね。とにかく高等学校の試験がなくていいというのがいちばんの魅力だったわけです。

北岡 それはそうでしょうね。あの頃も、高等学校受験は相当な受験地獄ですよ。

宮崎 そう。だから、当時から塾なんてあって、小学校の子供はやっぱ塾に行っていましたよ。それから小学校のクラスの中で、中学校を受験する組と高等小学校へ行く組を分けてあって、受験組だけあとに残って勉強させられた経験がありましたね。

北岡 日本はまだ豊かだったんですね。そうすると、高等学校へ入られるのが〔昭和〕十三年ですね。そろそろ本当の非常時ですか。

宮崎 それでも、頭にはあんまりピンときてなかったですね。ま

だ、いわゆる大正ロマンの残骸みたいのがありまして、中学校の頃なんかは遊びに行ったりなんかして、いわゆる、やや頹廢的な流行歌が流行っていた時期ですよ。いまでもよく覚えているんですけども。

二・二六事件（一九三六年）のときにはまさに平河町にいましたので、追い出されちゃったわけですよ。剣付鉄砲を持ったのに一家全部追い出されて、近くの遠い親戚の家に避難したんです。二・二六のときは試験がありましたね。雪が降っていました。當時は、新橋・渋谷間の地下鉄がなくて——浅草・新橋間はあったんですけどね——だから、私のところから行くには、四谷まで歩いて四谷から代々木へ行って渋谷へ行って、それから東横線で府立高校までいくという。平河町から、四谷まで歩いて行ったら電車が動かないし、学校はないというので試験がなくなると。やれやれって帰ってきた（笑）。帰ってきたら「家を退去せよ」ということで追い出されたんで、非常に印象に残っているんです。

北岡 二十六日に、何もご存じなくて学校にいらっしやろうと。

宮崎 そうそう。学校に行こうとして四谷まで行って、それで……。

北岡 お出かけになるときに、お家の周辺は平穩だったわけですね。

宮崎 うん、別に何ともなかったんです。帰ってきたら追い出されちゃったんですね。

北岡 追い出したのは決起部隊ですか。

宮崎 決起部隊です。要するに決起部隊の範囲に入っちゃっているわけです。だから、それからあとはラジオをずいぶん聞いていましたけどね。「今からでも遅くはない」という……。

北岡 決起部隊がやってきて、「いまずぐ出ていけ」という感じなんですか。「少し待ってやるから」とか。

宮崎 「すぐ出ていけ」というような感じだったですよ。だから、

父親はいろいろ依頼された事件の書類なんかを、焼けたら大変だというので書生と一緒にたくさん担いで、親戚の家じゃなくて別のところに避難したようです。私はただ母親に連れられたというか、母親を連れて行ったと言ったほうがいいかもしれませんけど、親戚の家に行ったわけです。

北岡 弟さんとはおいくつ違いでいらっしゃいますか。

宮崎 七つです。

北岡 じゃあ、弟さんはだいぶ小さかった……。

■高等学校時代の友人と先生

宮崎 ええ、ずいぶん下です。

高等学校の頃はいろんな連中と知り合ったし、いろんなこともあったんですが、昔の旧制高校の頃というのは、皆さんお聞きになったことが多いと思うんだけど、本をやたらに乱読するのが趣味だったんですね。それも、人あまり悟られないように読んで、読み終わってから自慢気に話をして（笑）。ですから、その頃もずいぶんいろんなものを読みました。

と同時に、当時は娯楽というものが非常に少なくて、いちばん安くて手頃だったのは映画を観ることね。それから、一部の人は玉突きをやりました。だから、戦前の名画なんてほとんどみんな見ていると思いますよ。だから、孫と女優さんの話をする、すぐ笑われるんだけど、ディートリッヒとかガルボなんて言ったら、いまはもうご存じないでしょうね。

北岡 もちろん知ってますよ（笑）。

大きな違いは、たぶん古いナンバースクールとかは寮ですよ。大使の場合は通っておられた。これは、学生生活として非常に大きな違いでしょうね。

宮崎 そうでしょうね。だから、あんまりバンカラじゃないんで

すよ。バンカラ風に気取って、いちおう恰好はマントを着て朴歯を履いて道玄坂あたりに行っていました。だけど、本質的にはバンカラじゃなくて、スマートだったと思います。

北岡 岡先生はどんな学生だったんですかね。取っ付きの悪い学生だったんですか（笑）。

宮崎 僕はわりと親しく付き合っていたほうなんですけれども、あんまり人と付き合いなかったですね。あれは「久米」と言っていたんですよ。いつだったか、どっちが養子だか知らないけど、ほかに戻ったのか行ったのか知りませんけどね。

北岡 お兄さんのほうは、私の先生の先生で岡義武先生なんですけど、年がだいぶん違うものですから。二〇ぐらい違いますね。こちらのほうも同窓会とかやってらっしゃるんですか。

宮崎 うん。たまにやりますけどね。ただ、岡やなんかは文甲だったから、文乙のクラス。その文乙のほうは、戦争やなんかでずいぶん死にましたけどね。山下英明という通産次官をやったりなんかしたのが同じクラスです。

股野 重明さんの兄さんですか。

宮崎 重明さんの弟。

股野 英明さんが弟ですね。ご一緒ですか。

宮崎 そうそう。いまでもよく碁を打ったりしてる。その他、ずいぶんいろいろないいあれがあって、お互いに影響をしたり影響を受けたりしていますけど、一人、高等学校のときの友達として死んじゃって残念だったのは、鈴木霊海という人がいましたね。群馬県の太田という町は戦争中、中島飛行機の工場があって、そこで「呑竜」という名前の飛行機を作っていたんですよ。なぜ呑竜かという、太田というのは大光院というお寺、呑竜様の門前町で出来たんですよ。その呑竜様の御曹司が私のクラスにいたんです。それとはよく付き合っていたんだけど、いろいろありましたが、二〇年ぐらい前に死んじゃったんです。「おまえが死

んだら俺が葬式をやってやるからな」と言っていたのが、先に去られちゃって困っちゃっているんですけど(笑)。

北岡 この高等学校は、鈴木さんのような方のために寮があるんですか。それとも下宿していたんですか。

宮崎 末寺が浅草にあるわけですよ。呑童さんは大きなお寺ですから、その末寺にお母さんと一緒にいたわけですよ。

北岡 なるほどね。学生は全員、通学なわけですね。

宮崎 そうそう、そう。

北岡 それは非常に大きな違いですね。

宮崎 それから、先生には偉い先生がたくさんいたんですよ。本当にいまから考えると、もっとちゃんと習っておけばよかったと思うような先生がたくさんいましたね。あとで有名になった人は、当時から有名だったんでしょうけども、私どもはあまりそういうことはなく、尊敬もしなくてさぼったりなんかして。

北岡 印象に残る先生はおられますか。

宮崎 たとえば森川智徳という哲学の先生。龍谷大学かなんかの学長にあとでなった人ですけど、この人はお坊さんなんですよね。ところがなかなか面白い授業をやって、たとえばいまのエコロジイという、「重重無尽の縁起」というかな、「重ね重ね尽きるときのない縁起」という仏教の言葉なんですけど、まさにいまの輪廻とかそういう考え方があって、唯識という仏教のそれとフィヒテの哲学と似通っているところと違うところを教えてくださいね。

北岡 難しい授業をしていたんですね。

宮崎 それも非常に面白かったです。また、当時の高等学校の生徒は生意気なものだから、いろいろなものを読んでいるので生半可なあれだと、先生をバカにしちゃうんですね。

それから当時、もちろん岩波文庫の白帯とか青帯というのが、高等学校の頃はそうでもないけれどだんだんと発禁になって、いわゆる左翼的な本がなくなりつつあったわけですよ。したがって、左

翼的なものも関心があって、ずいぶん読みましたけどね。一部、そこに走った人ももちろんいます。

北岡 昭和九年に中学校へお入りになって、そこから七年間という日本が非常に大きく展開した時期ですよ。もちろん二・二六は身近でご経験されたわけですけど、やっぱり生活はだんだん不自由になってくるのか、そういうご印象はなかったですか？

宮崎 それは、戦争になるまではあまりなかったんですね。というのは、細々とだけ父親がまだ生きてましたしね。私は何もしないで小遣いを貰って、小遣いの端境期にはしようがないから三流の映画館に行って映画を見たりしましたけど、金に困ったという印象は当時はなかったですね。

北岡 物が不足してきただけか。

宮崎 物もまだ不足してないです。物が不足してくるのは、もっとあとですよ。

北岡 マクロでいうと、日中戦争が始まってからそろそろ窮屈になりだすんですけど、その頃は都会は大丈夫だったんですね。配給は一部始まるんじゃないですか。昭和十三、十四年？

宮崎 もっとあとでしょう。高等学校の頃までは、あんまり物に不自由したというわけではないですね。ただ、教練がだんだんうるさくなつて配属将校が来てね。教練をサボるのにどうやってサボるとか、そういうことはありました。

北岡 週何時間ぐらいあるんですか。

宮崎 二回ぐらいでしたかね。

北岡 さっき思想統制のことをおっしゃいましたけれども、左翼系の文献を読むのがハイカラだというのは、流行りとしてはあったわけですか。

宮崎 それは一般的にみんな、ある程度までそういう洗礼を受けていると思いますよ。だから、われわれも乱読したうちのひとつとして、そういうものは読めたけどね。

北岡 大使が中学に入られる頃までにはまだあるけども、府立高校を出られるまでに、かなり難しくなっているという雰囲気だと思っただけです。

宮崎 学校の生徒が出している新聞の中にアンケートがあって、「尊敬する人物」というのがありまして、そのうちに一人「レーニン」と書いたのがいたらしいんです。それが見つかったというか、当局からだいたい新聞部が調べられたとかなんとか話がありましたけど、しかし、それは書くほうも書くほうだけでも、載せるほうも載せるほうだと（笑）。そういう時期ではあったんです。

北岡 昔の方に高等学校のお話を聞くと、必ずどういいうサークルというか部活をやっていたか、どんなスポーツをやっていたかという話がよく出るんですけど、大使の場合は？

宮崎 私の場合は、哲学班というのとね。

北岡 なるほど。それでさっきの森川先生の。

宮崎 それから独文班という二つ。それから、スポーツのほうはあんまり得意じゃなくて、卓球部がいちばん楽だと思って卓球部に。

北岡 みんな何か入らなくちゃいけないんですか。

宮崎 そうですね、何かひとつはね。

北岡 やっぱドイツ哲学の系統なわけですね。

宮崎 その当時に読んだものは、そういうものがかなりありましたけど、それこそまるっきり覚えてないです。『Ding an sich』とか『für sich』なんていうような、カントのあの『Kritik der reinen Vernunft』とていうのを一所懸命ドイツ語で読んでたりなんかしてね。分かったような顔をしていたつもりだったけど、全然分かってないんですよ（笑）。

北岡 いまの学生は名前も知らないという（笑）。

宮崎 カントの『純粹理性批判』とか聞いたことないですか。

北岡 われわれは知ってますけども、読んでるかどうかはあや

しいです（笑）。ドイツ語を習われるのは高等学校に進まれてからですか。

宮崎 そうです。

北岡 中学のときは英語ですか。

宮崎 ええ。

北岡 中から高というのは形式的な試験でいいけど……。

宮崎 形式的にも試験はないんですね。ただ、理科と文科と甲と乙とその四つに分かれるんです。それは自分の志望のところを出すわけです。ところが、どういいうわけか平均化して、みんな志望のところに行っちゃったわけです。

北岡 すると、文理英独ですか。フランス語はないんですか。

宮崎 そうそう、フランス語はないんです。小さな高等学校ですからね。

北岡 こういところだと、いまでも六年制の受験校というのはありますけど、外から入ってくるのもいますね。これがけっこうよくできたりするんですけど、外から入ってきた方は、やっぱり多少違いましたですか。

宮崎 やっぱ違う、新しい血が入ってきたという印象があったですね。刺激になりました。ですがお坊ちゃんでしたよね、それで入ってきた子は。どっちかといえば世故に長けているのかな。

北岡 さっきからお名前があがったお友達は大たい、下からずっと一緒の方ですか。

宮崎 そうです。鈴木霊海は違います。芝中学という仏教中学から入ってきた変わり種ですけどね。

■ 佐賀出身の父親の知人

北岡 佐賀のご出身といえますと、その頃けっこう佐賀出身の軍

人が力をもっていたみたいですけど、そういうご印象はありませんか。あれは佐賀の人とか。

宮崎 私の父親がそういう人たちと親しく交際してきてはいるんですよ。たとえば、海軍大臣をやって死んだ吉田善吾が遠い親戚になるのかな。それとか、死んだ古賀峯一というのが親父と中学校の同級生なんだ。それから、二・二六事件で悪名高くなった、真崎甚三郎が父親の中学校の先輩なんですね。

ちなみにそのあとで、学徒出陣に行くときにみんな日の丸に親戚やなんか書いて持っていくんだけど、僕の日の丸には真崎甚三郎だけ。「陸軍大将真崎甚三郎」というのだけ書いてもらったのを持っていったんですよ(笑)。そのまま入っていたらえらいことだったと思うんだけど。真崎甚三郎は、二・二六事件で調べられて大変な……。結局、放免されたけど、かなり関係があったと睨まれたわけでしょう。そういうのが親父の知人としてはいました。

北岡 あの頃は、ちょうどその前に相沢事件(一九三五年)というのがありましたし、法廷闘争をどこまでオープンにするかという問題があって、弁護士はすいぶん活躍したと思うんです。

宮崎 いや、ぜんぜん活躍しないです。それは法務官がやるわけですから、軍法会議は弁護士は関係ないんですよ。

北岡 ただ、民間人で関与したのは……。

宮崎 ああ、民間人で関与したのは……。

北岡 軍人ですけど、真崎は佐賀ですよ。荒木(貞夫)はいちおう戸籍は東京……。けっこう弁護士の方は被告の弁護に活躍されるのがあって、あの頃も鶴沢総明とか有名な弁護士がいて。

宮崎 明治(大学)の総長になった人ね。

北岡 明治だとお聞きしたものですから、何かお付き合いがおありだったかなと。

宮崎 私の父親は商事と民事だけで刑事はやっていなかったもの

ですから、全然そっちのほうとは縁がなかったんです。

北岡 他の政治のほうはいかがですか。法律の關係で政党と縁のある方はいぶんありましたですけども、弁護士で政党政治家になる、それも関係はなかったですか。

宮崎 父親がいちばん親しくして、僕も会ったことがあるのは、さっき言った中では、軍人では吉田善吾。政治家では池田秀雄という人がいまして、民政党の有力者で、これがオールドリベラリストなんですよ。軍に反軍演説をしてどうのこうのという斎藤隆夫と並んで池田秀雄というのがいまして、総動員法を通したときかな、代議士を辞めるといってね。それで近衛(文麿)さんか何か「おまえが辞めると、辞める人がたくさん出てくるから困る」って説得されて辞めなかったという。だから、大変なオールドリベラリストで、それと父親が非常によく親しくしていただいていたようですよ。私も知っています。

北岡 真崎甚三郎から池田秀雄までというと、バラエティがありますね(笑)。

宮崎 バラエティがありますよ(笑)。

北岡 大使も学生さんくらいのとときに直接お会いになったり、真崎さんもよくご存じだったんですか。

宮崎 真崎さんは知らないんです。知っているのは、軍人ではないま言った吉田善吾という人ね。吉田善吾というのはその当時は分からなかったけど、山本五十六の前任者であり後任者なんですよ。ね。

北岡 大物ですよ。

宮崎 大物だけでも、非常に悩んでノイローゼになって決断しなかったというようなことを書いてあるでしょう。その頃、よく家に行ったりなんかしてたんですよ。だけど、あんまり戦争の話とかそんな話は全然しませんでした。向こうも、子供相手にそんな話をするはずもないですけどね。

■東京大学法学部政治学科へ

北岡 大学にお入りになったのは、法科へ行こうと思われたわけですか。

宮崎 法学部の政治学科というところに行ったわけですね。それはそうなんです、法律学科には行きたくないと思って(笑)、それで政治学に。

北岡 いまの学生はものを知りませんが、政治学科へ行って何をやるものかって、あんまり知らないですけどね(笑)。政治学科って何かイメージございましたか？ こんな先生が教えていらっしやるとか。

宮崎 イメージも全然ないことはなかったけれども、やっぱりだんだん厳しくなってきたんで、役人になるか大学の先生になるかどうか、というような感じは漠然としてあったわけですよ。そのためには政治学科がいちばんいいんだろうという、あんまり根拠のないことが入ったわけです。

北岡 さっきの高等学校でやっておられたことからいうと、哲学の勉強でもしようとか、ですね。

宮崎 でも、それじゃ食っていけないだろうって(笑)。まだ物はともかくとして、厳しくなりましたからね。

北岡 じゃあ、法学部ならなんとか潰しがきく、しかし法律は避けたいと(笑)。

宮崎 そうです(笑)。当時の先生、優秀な先生がもちろんたくさんおられるんです。大学二年かな、学徒動員で赤紙が来たわけです。本籍地が佐賀だったもので、佐賀で徴兵検査を受けたんです。そうしたら、いまよりもっと痩せていたので、甲乙丙の丙種合格だったんです。だから赤紙は来ないと思ったら、来たわけですよ。長崎の高射砲部隊。つまり、体はどこもいいところはないけど、目だけはいいから飛行機を見ているのがいいだらうとい

うことではなかったかと思うんです(笑)。いまでも目だけはいんです。他は全部ダメだけど(笑)。それで高射砲部隊に行っただんですが、その頃は、歩留まりを考えて赤紙を乱発してましたね。

例の真崎甚三郎に書いてもらった旗を持っていくはずなのが、なんとなく照れくさくて、長崎の駅を下りるときにはずして降りたわけですね。そして、赤紙に書いてある、どこかのなんとか小学校かなんかに出頭したら、そこに五、六人来ていたわけですよ。軍曹みたいな人が「おまえら、なぜ間違えて来た。駅頭でみんな縛をかけているやつが、ちゃんと行き先変更を申し渡したはずだ」と。こっちは「旗を」かけてなかったもので、申し渡されなかったわけですね。それで、市電みたいなやつに乗り継ぎ乗り継ぎして高射砲部隊に行ったら、もうみんな軍服を着ているんですよ。完全に員数外で、軍医がびっくりして「まだおったか」とか言ってるね。身体検査をして、「おまえはこんな体でお国の役に立つと思うか。体を鍛えて出直してこい」と言われて、それで帰ってきたわけですね(笑)。

北岡 現場でそういう判断をすることもあったわけですね。

宮崎 要するに、もう軍服から靴から全部ちゃんと揃って着ているわけですね。それ以外の人は員数外なわけですよ。だから、五、六人一緒に来たやつはみんな追い返されたわけ(笑)。

北岡 多少余分に取っているわけですか。

宮崎 だから、もう赤紙を余分に出しているわけよ。丙種のやつなんか、軍服を着ているやつはごくわずかで、それ以外のやつは身体検査ではねられたのはたくさんいるはずで。歩留まりを見ても出しますからね。

北岡 そういうときは、ちょっと遅れて行ったほうがいいんじゃないか(笑)。

宮崎 いや、意識的に遅れたんじゃないけど(笑)。旗をつけ

ていかなかったんで、そういうことになっちゃったわけです。

北岡 つけていたら配属されたかもしれないですね。

宮崎 (笑)。身体検査でどうだったか分かりませんがね。それでしょうがないから、途中で友達のところへ行って遊んだりなんかして、母親が心配して、行ったきりなんとも言ってこないとかいって、あっちこち親戚中に電話をかけて(笑)。それで大学に帰ってきたらみんな学徒動員で行っていますから、五体満足の人がほとんどいないですよ。それでも授業は続いていたわけです。

このときにいちばん私がリッチだったと思ったのは、浜尾なんとか総長の奨学金というのがありまして、それを貰うやつがいなくなっちゃったらしいんですね。それで「貰わないか」という話がありますね。「何か義務があるの?」「いや、何もなし」と言うんですね(笑)。それで、貰うことにしたんです。小遣いは親からもらっているし、それを貰っているんで、とにかくそのときはいちばん人生で裕福な感じがしましたね。でも、あんまり使い途がなかったですけどね(笑)。

北岡 そうですよ。物を売ってはいけませんよ。

宮崎 そういうことで、大学の講義はいろいろ面白いのがあったんです。

北岡 どんな科目を面白くお聞きになりましたか。

宮崎 末弘厳太郎という人の民法。法律は嫌いなんだけど、試験に勉強していかなくても、甲が乙を殴って丙がどうかこうとかいう問題が出ることもあると、そういうのはなんとなく門前の小僧で分かっちゃうんですよ。だから、成績はよかったです。「優」をもらったりなんかして。だけど、嫌いなことは嫌い(笑)。よく「東大の三バカ教授」なんて名前をつけていた人は、たしかに講義は面白くありません。

北岡 当時の三バカって誰ですか。

宮崎 その話を、僕じゃないけど、僕の先輩がね。ずっとあとになって相手の人が、「実はその教授の娘をもらっているんですよ」と言われて、一生もう言えないという(笑)。井川さんが、小田(滋)さんという国際司法裁判所の判事の前で三バカ教授の話をしたら、小田さんがその娘をもらっているんですよ。だから、差し障りがあるといけない(笑)。それは、杉村章三郎という行政法の先生です。講義を聞いてても、本当に面白くないんですよ。頭脳明晰、言語不明晰という人ですね。

北岡 でも、行政法ってみんなつまんないですけどね(笑)。岡義武先生の講義はお聞きになりましたか。

宮崎 ああ、義武先生のほうが面白かったですね。つまんなかったのは、神川彦松という外交史。この人はつまんなかったな。矢部貞治という政治学がありました。学問じゃないけど、政治論議としてはおもしろかったな。

北岡 矢部さんの授業は、いま起こっている話をするんですか。

宮崎 いや、そういうわけでもないけども、彼はわりと政治学という学問が本当に成り立っていたか成り立たないかと、あの人の話を聞いているとそういう感じがしたんです。

北岡 なるほど。神川さんは、基本的にヨーロッパの外交史ですね。

宮崎 ビスマルクですよ。それから、丸山真男という人は助教授になりました。東洋政治思想史をやっていた。この人も東洋政治思想史というのは、父親に対する反発が——父親が詳しくなかったものであんまり興味がなかったんだけど、丸山さんの話は面白かったですね。

それから、川島武宜という人ね。それから話は飛ぶけど、南原繁という人。ほかにすることがないんで、わりと大学に出ていて、「二五で才子」「一五じゃないけど、まだその頃まではまあ成績はよかったほうなんです。それ以降は全然だめだった。後

輩はよく知っているんだけど(笑)。

それで、南原先生は政治学史なんだけど西洋のほうで、丸山先生は東洋政治思想史で、その南原先生に呼ばれてね。というのは、義務はないんだけど、そのとき何かのゼミに……。ゼミは矢部さんのゼミに入ったのかな。何か論文を出せという話で論文を出したんですよ。それを南原先生が気に入られて、また若気の至りで勝手な生意気なことを書いたと思うんだけど……。皆さん政治学ですわね、しかし、皆さんはおそらくご存じないと思うんだけど、ノバリスという名前を聞いたことがありますか？

北岡 ドイツ文学の。

宮崎 小説家、詩人でね。

北岡 『青い花』とか。

宮崎 さすがは先生。ノバリスに『ディ・フラグメンテ』という随想みたいのがあるんですよ。当時、岩波文庫で訳が出た。その訳がまったくメチャクチャで、本当に誤訳だらけの。『ディ・フラグメンテ』だとか、シュレーゲルというドイツ・ローマン派の連中の政治思想というのを論文に書いてあるんですよ。というのは、当時ナチスの時代で、ナチスの哲学的背景を。ヒットラーの後ろにいるんな学者がいて、その系譜をずっと辿っていくと、一部がそのドイツ・ローマン派に行くわけです。その中にノバリスがいるわけです。ノバリスは詩人として知られているけれども、その思想は全然知られていない。ところが、ノバリスのそれはまったく断片的なことが書いてあるんだけど、それをリ・コンストラクトすると一つの思想体系が浮かび上がってくる。それは要するに、その前に流行ったフランスの「アンシクロペディスト」というのがいたでしょう。デイドロとか何とか、あれに対するアンチテーゼなんですわね。そういう一種の政治思想を作っているというのを書いて出したら、南原先生が気に入って、それで大学を出る前に「俺の助手になって残らないか」という話

があったわけですよ。それで考えてたんだけど、そうすると、まさに助教教授になったら丸山先生と張り合わなくちゃいけないでしょう。この人と張り合うのは相当しんどいな(笑)。それから、つくづく考えてみると、学者というのは勉強しなくちゃいけない。もともとそういうのより、もっと楽な、いちばん楽なところはないかと思って。当時はまったく売手市場ですからね。学生が少ないんだから、どこでも入れるわけです。大蔵省のどこからでも「来い、来い」というのがたくさんあったわけ。それでいちばん楽だと思われる外務省に入ったわけですよ(笑)。

北岡 そこがよく分かりませんね(笑)。どうして外務省なんだか。

宮崎 勉強しなくて済む、魅力ですよ。もう本はその前にずいぶんたくさん読んだから、もう読もうと思わなかった。

北岡 結局、それは福田敏一先生になっているわけですね。その当時だと、亡くなりましたけど尾形典男先生という立教の総長をされた方が、もうちょっと上ですかね、南原先生のところに残ったんですね。私が習うチャンス逃したという意味で惜しかったですね。

「いちばん楽」というのを本音と聞いていいのかわかりませんが、外務省の仕事は、長い外務省の歴史の中でいいますと、非常に特異な時期でございますよ。非常に分野を縮小して、その前、先立つ数年あるいは一〇年もずっと軍部に圧迫されていて、それでなおかつ外務省をお選びになったというのは、「楽な」という以外に何かいろいろおありではありませんか。

■ 外務省入省、政務局第三課へ

宮崎 その当時は戦争もかなり末期に近づいていたわけですよ。高等学校のクラスメイトやなんかいるんな連中と会って話をして、

当時、学生なりに分析して、この戦争はもう必ず負けると確信を持っていたわけですね。そういうことを言うとは非国民で、たちまち憲兵隊にひっぱられるけども。それで、そのあとに何が残るかという場合に、いまいちばん縮小している外務省が、戦後は必ず必要になってくるに違いないという感じがしたわけですよ。だから、一種の先物買いという面はあったし、なんとなく戦争中は疲れているし、華やかな面もあるかもしれない。その前に家が焼けましたから、なにがしかの財産がなくなっちゃったし……。私の財産じゃなくて親父の財産ですけどね。そういう面もあったんで、いちばんどん底だから、これから上がる一方だろうという感じはあったわけですね。

北岡 それはそうですね、たしかに。

股野 当時、大東亜省があったんですけども、そのときに大東亜省じゃなくて外務省を選ばれたと。

北岡 同期は何人ぐらいおられましたか。

宮崎 それがいまお話があったように、大東亜省採用とあとで合併したわけです。だから、計算の仕方によるんだけど、一五、六人いたと思いますよ。

股野 合併して。

宮崎 そうですな。

股野 じゃあ、外務省に入られたときはもっと少なかったんですね。

北岡 半分ぐらいですか。

宮崎 八、九人じゃなかったかな。

北岡 どっちかというところ、ドイツ文化をやっておられたにせよ、あまりドイツに対してはシンパシーはなかった？

宮崎 シンパシーはなかったんですね。つまり、どっちかといえば、当時から見れば弾圧されるほうにシンパシーがあったわけですよ。だから、特高だとか憲兵隊がよく学生の本を調べにくると

いうので、そんなものは置いておくとかまるといふ。いろんなものと混ぜてね。親父の家だったですからスペースがあったものだから……。結局、疎開したのは別にして、全部焼けちゃったんですけどね。だから、どっちかというところリベラリズム、ないしはもっと左のほうに関心がありましたよね。

北岡 ドイツ語の本でも危険な本はあったわけですか。

宮崎 それはだって、マルクスの本なんて危険で(笑)。

北岡 それはもちろんそうですね。

佐道 お持ちだったんですか。

宮崎 マルクスの本も持ってましたよ。みんな焼けちゃったけども。昔の高等学校というのはペダンティックな面があって、単に読んだというんじゃなくて原書で読んだというところに値打ちがあるんだよね。わかったかどうかは問題じゃない(笑)。

〔外務省に入って最初に配属された〕政務局第三課というのはロシアの課なんです。ソ連の課なんですよね。政務局が地域別に分かれていましたね。ソ連というのは当時、国交のあったわりと少ない国のひとつなんです。政務三課に行つて、そこでロシア語を勉強させられたわけですよ。一年間でテタテ(二対一)でやらされたのね。ところが、とにかくダメだという。ロシア語は発音がどうしても出来ない。「パジャールイスタ」の「ジャ」とか、「モージノ」の「ジ」とか、そういうのがどうしてもできないの。「トリーコ」の「リ」とか発音を直されて、これはとてもダメだと思つたんです。とにかくロシアの課にいました。

北岡 先生はロシア人なんですか。

宮崎 いや、ロシア人を奥さんに持った外務省の人。ロシア語の、それは大変な権威なんですけどね。政務三課は、当時としては外交の仕事が残っている非常に珍しい課。

北岡 唯一の大国ですね。

宮崎 ドイツがありましたけどね。政務四課が、ドイツその他欧

州。一課が全体総合で、二課がアジアかな。満州国とかなんとかまで二課で。はじめて外務省の仕事ってこういうものかというのをしたんですがね。当時、読めといわれたのが、要するにソ連を理解するために、いまはソ連で発禁になっちゃったんだけど、『全連邦共産党小史』という本の訳があるんですよ。それを読んでよく勉強しなさいと言って渡されて。それなんか、持っているだけでたちまちに憲兵隊にとつかまるような本。外務省だから出来たんですが、そんなものを読んだりしておりました。要するに、スターリンの角度から見たソ連史ですね。

ただ、いろいろ印象に残ったことはたくさんあるんだけど、月に一遍、伝書使というのが、クーリエというのがいまでもありますよね。モスクワまで行くんですよ。その伝書使というのが、当時ももちろん公表していなかったと思うんだけど、二人組になっていて、一人はロシア語の人が行く。もう一人はその道の専門家が行くわけ。たとえば軍人さんが、飛行機の専門家が行って、汽車の窓から一所懸命空ばかり見ていて、どんな飛行機が飛んでおったかを見る係が行ったりね。あるときは農業の専門家が行って、畑を見ていて今年の作柄はどうかとか何とか。そういうたように、それぞれの専門家が伝書使でシベリア鉄道を往復するわけね。もちろんなかなか見られないんだけどね。そういうことがあって、「おまえはロシア語が出来たら、伝書使の片方で行かせてやる」という餌に釣られて一年間やったわけですよ（笑）。結局、行かなかったんだ。行くことになっていたのに、喜び勇んでいたから、課長までOKになったんだけど、途中で人事課長から待ったがかかってね。そのときは伝書使になるもうひとつ手前で、ソ満国境を越えてチタという町まで金ののべ棒を運べという。というのは当時、北樺太石油の利権を日本は持っていたわけですよ。で、あそこで掘っていたわけ。それからもうひとつ、オホーツク海でサケを捕ったやつをカムチャツカに日本の缶詰工場があったわけですよ。

よ。で、缶詰工場で缶詰したやつを持ってきていたわけ。その缶詰工場の地代を支払わなくちゃいけないわけ。北樺太の石油利権とカムチャツカの漁業関連の代金を金ののべ棒で払っていたわけですよ。その金ののべ棒を持っていく役。伝書使までいなくて、そのひとつ手前のそういうのをやることになっていたんだけど、人事課長から「待った」がかかってね。というのは、途中で馬賊に襲われたりなんかして取られちゃった場合に、私の一生に傷がつくというわけです。そういうのに若いやつを使うことはあいならん、ということだったらしいんだけど。それで結局、行かなかったんです。代わりに行った男は無事に帰ってきたので、当時は行き損なつたと非常にがっかりしたんですけど。

伝書使で曾野「明」さんというこの間亡くなったけれど、彼の自慢話は、彼は鉄道に詳しいわけね。シベリア鉄道をずつと行つたときに、どことかの駅で支線に入っている列車の標識にナウシキというのがあった。そしてナウシキまで支線が出来たということが確認できたというわけね。それが大発見だという。そういうのは、武力の展開でえらい違ってくるというのね。

その他、鉄道の専門家というのは、機関車の重さで列車の長さが規定されるわけですよ。機関車の重さを支えるために、枕木の間隔とかレールとか、そういうものがどうなっているかによって決まる。それは見てくる係がいたり、そういうのはみんな報告書を作るわけ。当時は中立国やソ連から来る電報を受け取って、それを別の公館に流したり、国内でいろいろなことをやったりするお手伝いをやっていたわけですから、いろいろ面白い経験はしました。これを話しているといくらでも長くなるんですけど。

北岡 入省されたのは……。

宮崎 昭和十九年の九月です。

北岡 九月の一日。それからすぐロシア語を勉強して。

宮崎 はい。ロシアの課に配属になって。

北岡 敗戦がなければ、当分ロシアの仕事をおやりになるはずだったのでしょうか。

宮崎 それはどうか分かりませんが、とにかく外務省はそれだけ投資したんだからそうかも知れませんがね。というのは、昔は昭和十七年ぐらいいまでに入省した人は、入るとしばらくして外国に研修に出されたわけです。われわれのときは、行くべき外国がないし、行けなかったわけです。だから、日本で訓練を受けることになったわけです。

北岡 スペインとかスイスとか、そんなところですかね、行くとする。

宮崎 もちろんロシアとドイツ。スペインはなかった。

股野 一九四四年ですから、もうそうとう日本も弱って。

北岡 だいたい行く途中も危ないですね。

宮崎 同期にもいろんな親しいやつがいますけど、この話をするともた長くなる……。昔のスウェーデン大使をやった越智啓介というのが変わった男で、同期。この間、死にました。一年下に松永信雄というのがおります。こいつとも私は親しくしてただけです。

北岡 松永大使は終戦の年だったですね。

■ソ連の宣戦布告とポツダム宣言受諾

宮崎 そうです。戦後に入ってきたわけです。戦争中に入ったのは、本当にわずかなんです。二十年八月には終戦ですからね。

それで、このときのことを記録しておいたほうがいいのかもしれないという感じがするものだから、お話ししたいことがあるのです。まずひとつは、当時のソ連から日本への宣戦布告は届かなかったという話です。宣戦布告が日本に来る前に、満州にずっと兵隊が入ってきちゃったわけです。というのは、当時、駐

ソ大使は佐藤尚武大使で、外相はモロトフなんです。その前の佐藤・モロトフ会谈でずいぶんいろんなものを見ていたんですが、最後になって宣戦布告を、モロトフが佐藤大使に渡した文書があるんですけど、それは向こう側のいろんなミスなんだと思うんですけど、モスクワ大使館が東京までもう発電できなくなっちゃったんですよ。だから、そこの宣戦布告は来なかったわけ。

他方、在京のマリク大使がアポイントを求めて外務大臣に面会に来ようとしたわけです。ところが、これもまた手違いなんだけど、マリクがソ連大使館を出ようとしたときに、憲兵隊か何かを押さえちゃったらしいのね。来させなかったわけだ。したがって、マリクは結局、外務省に来なかったんだ。したがって、ロシアの宣戦布告を日本政府は受け取らなかったわけ。その間に兵隊が入ってきちゃったわけです。

それをなぜ覚えてるかという、当時の課長、武内龍次さんが、アメリカに占領されて戦犯とかいろんなことがあるだろうから、おまえがいちばん若いんだから、いろんなことを記憶しておけと言って、記憶させられた中のひとつがそれなんです。しかし、これはもちろん意図的にやったんじゃないんで、モスクワでも東京でも両方ともアクシデンタルなんですけどね。

北岡 モスクワでは大使には渡っているわけですね。

宮崎 そうです。

北岡 その佐藤大使が日本に発電するのができなかった。

宮崎 そうそう。

北岡 しかし、これは意図的という可能性もありますね。

宮崎 向こうから見ると、そこまで意図的にやる実益はないです。だから、日本では、たまたまマリク大使が出ようとしたときに、軍だか警察だか知らないけども押さえちゃって、大使館から出られなかったということになっているんですよ。

真珠湾の攻撃のときは日本側のミスだということになっているわけですよ。本件はべつにソ連のミスというわけではない。モスクワの打電できなかったというのはソ連のミスかもしれないけど、東京のほうはそうじゃないんですよ。

北岡 宣戦布告を渡されたというのは、もうソ満国境をだいたい侵入したあとですか。

宮崎 佐藤大使が受け取ったのはその前だと思いますよ。それが来ないうちに、どんどん、どんどんソ満国境に入ってきたということです。

その頃、これも終戦前後のことでご承知だと思うんだけど、あなたは国務指令室というのを聞いたこと、ありますか。

股野 これはちょっと……。

宮崎 要するに、政府各省それぞれの三〇人ぐらいを選んで、信州の松代というところに移転するという話があったわけ。松代までいなくても、三〇人ぐらいは別のところに置くということで、東京の中でも三か所にまとめる。日本銀行と当時の警視庁と、それからもうひとつは第一相互だったと思うんですよ。その三つの建物が地下室に入ると、なんとか爆弾が落ちても大丈夫だということになってる。その三つに移ると。いずれは松代に行くということ。

外務省は、幹部が三〇人ぐらい第一相互に移ったわけですよ。メッセンジャーボーイみたいにいちばん若いのが、僕と別の男が二人、そこに配属になったわけ。普通のお役所の機の配置と全く異なり、第一相互の国務指令室の外務省は、課長ばかりなんですよね。だから、ズラーツと課長が向き合っていて、いちばん末席に僕らみたいな若いやつがいるという状況で。とにかくその前に外務省の本省は焼けちゃったわけですよ。で、文部省に間借りしてたわけ。いまの文部省の建物の何階だったかな、二つぐらいフロアを。本体はそこにいて。そのときの人選も、国務指令室に配

属になったのは枢軸派を除いているんですよ。政務四課長で古内〔広雄〕さんという方がいたんですけど、彼をはじめ枢軸派を全員除かれていたわけですよ。それはあとで気がついたんですけど、そういうところに行っていたんだけど、そのうちにだんだん激しくなってきたね。それで、文部省のほうにも泊まりがけの当番を置くことになって、三人ずつ文部省の大きな部屋に蚊帳を吊って、こういう椅子を互い違いに置いて寝て、やっていたわけですよ。若い事務官が二人で、課長になる前のシニアの一人。たまたま夜、三人で文部省の中で寝ていたら、関守三郎という人がシアアの事務官か何かで、その三人のヘッドだったわけ。夜半に文部省に電話がかかってきて、彼が出たらしいんだ。若い二人は寝ていたんで、彼は真っ暗で戻れなくなったわけ。「大声をあげて怒鳴ったんだけど、おまえたちが起きない」ってあとで怒られたけど、とにかくそのときにポツダム宣言を受諾するという日本側の通告に対する連合国側からの第一報が入ったときだったんですよ。それで、とにかくみんなを起こせということで、幹部は帝国ホテルに泊まっていたんです。起こすというか集める。どうやってやったか忘れたけど、それで集まってきた。そのときに、例の天皇の大権は連合国司令長官に「surrender」というのが書いてあるのね。日本から打った電報が、「ポツダム宣言を受諾するが、天皇の大権は変わらない」という趣旨のことを打ったんですね。

ちなみに、あ那时的訳が「プレロガティヴス」、複数になっていたのね。複数と単数で意味が違ってたね。それでなんか大変問題だったらしいね。どういうふうに違ってたか。僕はあんまり分からないんだけど。

とにかくそれに対して「サブジェクト ツー」の電報が来て、それは当時は情報部で短波を受信していたわけよね。ちなみに短波受信をずっと外務省は取っていましたから、原爆投下とかなんとかかって、アメリカのは全部前に分かっていたわけ。それは別だ

けど、プレロガティブスのサブジェクトが……。だから、「プレロガティブ」にすれば、もっとあたりは柔らかかったという。とにかく「プレロガティブス」と言ったのに対して、向こうが「サブジェクト」という。それは、「従属するものとする」というふうに情報部の人が仮訳してきたわけよね。それを今度は、それぞれ各省へ帰って御前会議をやらなくちゃいけないというので、当時の条約課長が下田武三。前の最高裁の判事をやった駐米大使だった。下田さんが口述するわけよね。それを僕が筆記するわけよ。口述筆記してやったときに、僕自身は「サブジェクト」をな訳すのかなと思っていたら、そこへ来たらしばらく止まって考えて、「制限のもとに置かれるべきもの」というふうに訳したわけよね。

股野 だいぶやわらげてますね。

宮崎 「従属すべきもの」というのじゃなくて。それを外務省は公式の訳としてずっと上に出して、御前会議まで持っていたでしょう。それに途中で軍が「それは訳が違う」とか文句を言ったりなんかした。とにかくそういう……。だから、あれは下田武三さんの訳でした。

北岡 うまい訳ですね（笑）。

宮崎 （笑）。だけど、ちょっと違いますね。

北岡 下田さんってその頃、まだ若いわけですよ。

宮崎 条約局の課長になりたて。その前は政務三課の首席事務官だったわけですよ。それこそ洋行帰りで、モスクワ大使館から帰ってきたら外務省の建物は暖房がなくて、みんな外套を着て戦闘帽みたいのをかぶってゲートルを履いて執務しているんですね。下田さんは帰ってきて、「君達はそうやってやっているのか」ってびっくりしてね。慣れない様子だったけども、しばらくしたら下田さんもそうやらざるを得なくなるのね。首席事務官から課長になって条約課長になった直後です。

北岡 やっぱりその頃といまもそうかもしれませんが、非常時ですけど、それぐらい課長というのは政治的な判断というか行動をするものなんですね。

宮崎 ちょっと、だんだん、だんだん課長の権限がなくなってきた。僕らが課長のときは、課長は偉かったんですね。前にお話ししたかもしれないけど、日本がたとえば関税交渉に入るか入らないかとか、その総指揮官みたいのは課長なんですよね。局長になるともう分からないわけ。課長がピポットなんですからね。ところが、だんだん、だんだん実力が低下しちゃったけれども、昔は課長は偉かったわけですよ。

北岡 そうですね。この一言の英訳が、日本が戦争をやめられるかどうかの瀬戸際ですからね（笑）。

股野 これは下田さん、やっぱり国内を考えたんでしょね。名訳だけでも、ちょっと（笑）。

北岡 軍は気がついたわけですよ、これは相当な意識であるというのを。

宮崎 だから、軍から外務省に文句を言ってきた。ワアワア言っていたのを下のほうで見ましたけどね。

北岡 国務指令室が出来たのは何月頃だったんですか。

宮崎 どうも記憶があまりはつきりしてないんですけど……。できることになって、その第一段階として外務省の場合は第一相互のビルに三〇人、入ったんです。何月だったかなあ……。もう二十年になっていたと思いますけどね。春ぐらいじゃないかな。

北岡 いま出た話なんですけども、さすがにその頃はもう、外務省の枢軸派は元気がなかったんですか。

宮崎 そうですね。

北岡 どういう顔触れを揃えるかというときでも、ドイツが降伏する前かあとかでだいぶ違うと思うんですね。まあ、降伏前でも相当めっちゃやられてましたから。

宮崎 だから、いわゆる枢軸派というのは、単にドイツがいいというだけじゃなくて、陸軍と組んでいたわけですよ。だから、枢軸派対英米派という対立があって、枢軸派というのはかなり横断的に上から下まであります。それで、枢軸派のほうが物が豊かなんですよ。軍から貰っているって(笑)。だから、僕らは入ってしばらくしてから、いろんなところで枢軸派の人から御馳走の呼び出しがかかるわけ。ところが、僕のところだけ来ないわけですよ。というのは、政務三課というのは英米派というか、反対枢軸派の牙城みたいなところだったわけ。

北岡 ロシアがですか。

宮崎 人間がね。課長の武内龍次さん以下、曾野明とか、後に官房長をやった高野「藤吉」さんとかね。そこに属している僕のところには招待が来なくて、ほかの連中が行っては御馳走になって、何がうまかったとか何とか言うのを羨ましそうに聞いていたわけです。

北岡 そうすると、枢軸派というのはまだ健在だったわけですね。宮崎 そう。かなり健在だったわけです。つまり、ドイツは負けても陸軍はまだ力を持っていたわけですからね。枢軸派というのは外交面では独伊だし、国内では陸軍なんです。それに對して英米派というのは、当時、英米と仲良くしようという話は出来ません。ただ、外務省の主流はそうだったし、それをある程度サポートしたのが海軍だったということです。

北岡 政務三課はソ連をやるところなわけですね。そこに親英米派が大勢いたと。

宮崎 まあ、そういうことですね。

北岡 結果的にそうになった。戦争が終わるについては、ソ連経由の終戦に持ち込むか、あるいは当時は外務省の外の人ですけど、吉田茂なんかみたく、むしろ英米の懷に飛び込むかというのは、非常に大きな対立概念だったと思うんですけど、その関係でいう

と、政務三課ってどういうことになるんですか。

宮崎 ソ連経由でやるということに対して、政務三課の、僕は下っ端でよく分からないんだけど、ちらっと聞いたら「そんなことは出来もしないよ」という感じだったようです。専門家というロシアを見ていた人はね。ただ、あれは近衛とかとんでもない上のほうから下りてきたわけでしょう。マリクに重光「葵」があったりなんかして、そのときの通訳は政務三課が出しているわけですよ。だから、そういう機密程度の高い処理は、僕らは見せて貰えないから……。ただ、ソ連経由なんてとてもダメだよ、ということ。

北岡 ソ連経由というのも、とにかく陸軍をいっぺん納得させるためには、これがだめというのを通らないとダメという……。

宮崎 すぐに行けないということでもあったんですけど。

北岡 じゃあ、専門家レベルは、なるほど、よくわかりました。

宮崎 ちなみに、終戦のときに占領軍がいろんなものを文書を押さえられるだろうというわけで、当時の課長とか三席事務官が命じて、みんな書類を持って帰って隠しておけと、僕も割り当てられた書類を持って帰ったんですよ。ところが、引越しのたびにどうしようかと思ってね(笑)。いまはもう黄色くなっちゃって読めないだろうと思うんだけど、そういうのがまだあるんですよ。

ところが、その中に非常に感心したのは、独ソ戦争が始まる前に書いた当時の分析があるんですよ。それによると、「独ソ戦争は開戦は必死である。開戦したらドイツがずっとソ連の中に入っていくだろう」、はしょっていいいますと、「ただし、それでもレニングラードの線が破られない限り、ドイツは負ける」ということを、もうはっきり断定しているんです。そういう調書を書いていたんですよ。それがどこまで回ったのか。

北岡 それはどなたが書かれたんですか。

宮崎 当時の調査二課というところですか。しかし、それはだいた
いそういう感じはあったと思いますよね。つまり、外務省の僕の
いた、とにかく空気は反枢軸で反陸軍だね。

北岡 上のほうは大使人事とか当時は政治で動いてましたから、
立派な分析ですね。

股野 立派ですね。ちゃんと見通してたのにな。

北岡 しかし、書類はどこかに返していただいて(笑)。この間
の中村大臣のようなことを(笑)。

宮崎 それは命令によって持って帰ったわけですよ。要するに、
アメリカ軍が来て全部の書類を引っ繰り返すと大変だということで、
ずいぶん焼きましたよ。

北岡 特に大事そうなものを選んでそれぞれ持って帰ったんです
か。

宮崎 いや、そんな余裕はないんで、「ここからここまではおま
え」と、そういう感じだったですね。

佐道 そのときの命令は、まだ生きているものなんですか。

宮崎 出した人は死んじゃったけどね(笑)。

北岡 その次の命令を出してもらって、回収命令を出してもらっ
て。

股野 しかし、ほかの方も持っている、どのくらいあるんで
しょうね。かなりあるんでしょうね。

宮崎 もっともそれはソ連の課だけかもしれない。

股野 第三課の当時の方の、お亡くなりになった方のお家を探さ
せていただくと、また出てくるかもしれない(笑)。

宮崎 たいがいもうみんな焼いたりしているけどね。僕みたいに
几帳面に引っ越しの度に持っていって。

北岡 どれぐらいの量ですか。

宮崎 ダンボール一箱ぐらいありましたね。というの、ソ連の
関係の資料は特に、つまり当時はマル秘ばかりなんです。警察

や軍に対してもたいへんなマル秘ですから、特別に極秘資料が多
かったわけですよ。

北岡 占領の形というのは、ある程度予測がつかれたんですか。

宮崎 いや、全然つかないですね。ただ、もうそのときは終戦に
持っていくのが外務省としても必死で、大臣は東郷(茂徳)さん
です。要するに、軍が暴発しないように押さえて戦争を終える
ということに全力を注いでいただいたわけで、それから先のことま
ではとても考えてないです。ただ唯一、当時の政府がしたのは
「国体の護持」というかね。天皇の大権——「アレロガティヴ」か
「ズ」か別として——ということだけですよ。それから先のこと
とは考えられないでしょう。

北岡 それはそうですね。

■外交官になろうとした理由

井上 少し戻って、やや細かいことになるのかもしれないんです
が、外交官になろうと思われたとき、この戦争は必ず負ける、負
ける以上は戦後は外務省が必要になるだろうというお話だったん
ですが、今から考えると、戦争が負けたといった場合に、負け方
も普通の負け方じゃなくて、こてんぱんに負けた形での敗戦だと
思うんです。そうすると、その戦争が負けたときに外務省が役に
立つという発想は、単純に文字通りの敗戦処理としてそういうこ
とをやっていくということなのか、それとも、大使にとっては好
ましくないような日本という国家が戦争によって負けるけれども、
戦後は大使なりのお考えに、こういう新しい日本にしたいから、
それに外交の分野で関わっていききたいというような発想なのか。
たとえば同時代的に見ると、負けるという以上はそれこそ国体護
持すらどうなるか分からない段階で負けるという判断であると、
普通はじゃあその後外務省が役に立つだろうというふうにはな

かなか発想がいけないような、そもそも外交が成り立ちうるような国家が前提とされていないような時代になるんじゃないかと思うんです。ですから、その点でなぜ、必ず負けると思われながら、だからこそ外務省にいくんだとお考えになられたところをご説明いただければと思うんです。

宮崎 あんまり深い読みはないんですけど、なんとなくそういう。それは、まさにドイツがそうですね。ドイツの場合は、ナチスが潰れたあとまるっきり継続性がないんですね。コンテュニティは、皆無ですよ。したがって、当時の役人は全部辞めて、新しく出来た政府は全部新しく採用して出来た政府ですよ。アデナウアーというのはケルンの市長だったのが総理になったんですけども。

ところが日本の場合は、私が決して深読みしていたわけじゃないんだけど、たまたま偶然に間接統治になったでしょう。つまり、日本政府を使って統治するという方針をアメリカが作ったわけね。したがって、結果としてコンテュニティはあるわけです。そこまで読んでなかったんだけど、結果としてそういうことに相成ったということで、それまでに敗戦の仕方、それからどうなるかなんていうことは、とてもじゃないけど読みきれないです。だから、一種の賭けみたいなものではあるんだけど、何となくそういう継続があるんだという感じで入ったわけです。

当時、昭和十九年に「大学を」出るときに、金儲けはあまりうまくないもので、民間に行くという感じはなくてね。だから、どこの役所に入るか、学者になるかと、その二つしかなかったわけです。だから、学者になるには勉強しなくちゃいけない、これは大変だと（笑）。

北岡 外交官のほうが勉強しなくちゃいけないんじゃないですか。宮崎 どの役所に行くかという場合に、いまおっしゃったような話からすると、大蔵省だとか内務省、内務省は解体になったわ

けだけど、そんな役所であれば、みんな断絶があるわけでしょう。だけど、外務省というのはいちばんダメージが少ない可能性があるという感じはしたわけです。

北岡 それは大変な見通しですね。いつか岡崎（久彦）大使にも聞いたことがあって、岡崎大使なんかはまだ独立してないときですよ。 「どうしてそんなときに」と言ったら、「いや、いずれ独立して盛大にやるに決まってると思った」というようにおっしゃるんですからね（笑）。 なかなか一学生でそんなことを考えるものかしらと思えますけどね。

佐道 どなたかにご相談になったりは？

宮崎 いや、しませんでした。

佐道 ご自身で。 当時は行政課試験に合格されていて、特別な外交官試験……。

宮崎 外務省に入省試験がありました。 だけど、たとえば「アルミニウムはどうやって作るのかね」とか、「ボーキサイトはどこから入るか」って。「礬土頁岩ばんどけつがん」というのから、非常に能率は悪いんだけど作っていたわけです。 そういうことは知っていたわけですよ。 というのは、新聞や何かをよく読んでたからね。 だから、外務省の試験はみんな出来たと思います。 そういうものを含めて、だけど、「なんで外務省を受けるんだ」という質問はありましたよ。

北岡 それはしかし迂闊なことは言えませぬね（笑）。

佐道 入社試験でもだいたい「わが社を選んだ理由は」とか聞かれるんですけど（笑）。

北岡 いっぺん負けてまた復活するとは言えないですよ（笑）。 その後、試験は別々になったわけですね。

宮崎 昔は別で、またその後も別々になって。

佐道 政務三課は、どのぐらいの所帯ですか。

宮崎 三〇人ぐらいいたんですかね。 というのは、ロシア語の人

がずいぶんたくさんいましたからね。だから、特殊語学なんですよね。

佐道 やはり三課は、政務局の他の課と比べても大きかった……？

宮崎 当時はわりと大きかったと思いますね。だいたい字からして違うわけですからね。

佐道 第三課に配属されて、いちばん最初に心構えみたいなことを言われたことは、ありましたか。

宮崎 別にそういうことはなく、「おまえ、ここに座って、まずこれを読め」と言われて渡されたのが、『全連邦共産党小史』です（笑）。あれはびっくりしちゃってね。こんな厚いの。いまでも持ってますけどね。

北岡 これは配属人事のほうでは、親英米派の巣窟だとすれば、どうやって選ぶんでしょうね。この人はその素質がある、とかなんとか……。

宮崎 外務省というのは、あんまり合理的なところじゃ……。現に、たとえば僕に対する言葉のインベストメントは、ロシア語がいちばん多いわけですよ、一年間。その後、ロシアに一切関係ないでしょう。もう行かないわけですよ。それから、英語は自分で勝手に覚えたというか、SCAP（スキヤップ、連合国軍最高司令官）に通っている間に覚えた。フランス語は訓練所でちょっとやったけど、たまたまジュネーブにいたので、「おまえはジュネーブにいたじゃないか」というのでアルジェリア大使にされたわけだ。フランス語が出来るとか関係なしに（笑）。そういうように、まるきりそんなことは考えてなくて、したがって僕はもう言葉はどれももうまくなかったんですよ。

北岡 そんなことはないでしょう（笑）。

宮崎 たとえばあなたは英語一点張りでしょう。

股野 そうですね、一点張りですね。

宮崎 そういう人に比べるとね。たとえば、ドイツ語のほうがまだ文学を読んだり柔らかい本なんかを読んでね。ドイツ語を覚えるときに、わりと連想するのはいいんですよ。ああやって関連して読むとね。ところが、英語はそういうのをちょっと読んだけど、あんまりマスターしないうちに戦争になったりなんかしちゃった。したがって、文学的な表現というのは分からないです。

だから、ゲートルやなんかは分かるけど、家内と一緒にドイツに最初に行ったときにそういう話をしていたら、食堂に入ってジャガイモはどういうふうにするかとウェイターに聞かれてね。ジャガイモまでは分かっているんだけど、それから先のやつはゲートルに書いてないわけですね（笑）。ゲートルにもカントにも書いてない（笑）。メッシとかフライとかなんとかポテイトってやつですね。その部分になると全然習ってないわけ。

北岡 失礼ですけど、お父様はいつ頃までご健在でおられたんですか。

宮崎 戦後しばらくして亡くなりました。

北岡 そうですか。じゃあ、この終戦前後はまだお家は無事でしたか。

宮崎 家は焼けてましたけどね。

北岡 弁護士業務というのは、どうだったんでしょうね。

宮崎 その頃はもうほとんどなかったですね。

北岡 そうでしょうね。でも、奨学金もあり（笑）。

宮崎 奨学金はたまたまそういうわけで、あんまりお金に苦労しなくて、先祖代々の財産をみんなすっちゃったという……。

北岡 浜尾新ですかね。

宮崎 そうですか。でも、結局は何もしてないんですから、もったいだけという（笑）。だから、もう少し東大にはお返ししなくちゃいけないのかもしれないけどね（笑）。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第2回 —

開催日：1999年4月7日

14：00～16：00

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

伊藤 隆（政策研究大学院大学教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■大東亜省と外務省の関係

宮崎 まず、大東亜省と外務省の関係というのは、直接タッチしたというよりも人の話あるいは上の人の話を聞いたところでは、いろいろ問題があったわけです。というのは、大東亜省が設立されるときの経緯があって、かなり軍部が、殊に陸軍が強引に作っただけです。当時、もともとあった拓務省を中心として外務省と軍で大東亜省を作ったわけです。大東亜省と外務省の権限の分担といいますかね。東亜についても純外交は外務省に残るといような話で、何が純外交かというのがはっきりしないまま大東亜省はできたようです。

大東亜省に入省した人と外務省に入省した人は違いは若干あったんでしょけども、語学の点では外務省に入省したのも本来、下手だったわけですよ(笑)。股野(景親)大使たちとのジェネレーションと違って戦争中ですから、みっちり語学を勉強するような時間もないし気分的な余裕もないということ、そういう意味では下手同士だから、それほど違ったという感じはしないのですが、ただ、目的意識は違ったかと思えます。

大東亜省ができて採用になったのは、昭和十八年が初めだったと記憶しています。十八年には外務省の当時の人事当局が、戦争で半分ぐらい死ぬだろうということで、普段の倍ぐらい採用したんです。ところが、それほど死ななくてみんな戻って来ちゃってね(笑)。私も十九年はそれほど多くなかったわけです。それで戦争が終わってから大東亜省採用組と合体したわけです。但し、大東亜省採用組中の一人、成田君だけは通産省に編入になりました。

当時、外務省の名簿みたいのがあったんですね。『外務省年鑑』というのがあって、初めのうちは大東亜省採用と外務省採用と分けて書いてあったんです。それがその後、一緒になっちゃっ

たわけですね。戦後も両方残っていたんです。

北岡 戦後も別々に書いてあったわけですね。

宮崎 書いてあったのが、いつからか一緒になったわけですね。ですから、それ以降はそれほど目立った区別というのはなかったと思います。

伊藤 いまのお話で、大東亜省採用の人と外務省採用の人は、その後の履歴で何か変わったというようなことはございますか。

宮崎 それはあんまり気がつきませんでしたけどね。ただ、大東亜省採用の人の中では、差別を受けているというようなことを言う人も、いないわけではなかったです。ただ、外務省採用のほうは全然、優遇されているという意識はなかったわけですね(笑)。

北岡 前は拓務省で、「拓務省が」出来たのは田中(義一)内閣の頃で(一九二九年)、その頃から拓務省に入ってきて大東亜省に来た方がいらっしゃるわけですね。

宮崎 そうです。

北岡 そういう方は戦後、外務省に来られて、それで有名な方はいらっしゃるんですか。

宮崎 一、二おられたですね、局長になられた方が……ちょっといま名前を忘れちゃったんですけどね。そのくらいの年代になりますと、幹部になられた方が一人かなんかで、それ以外はたぶんならなかったのが不満があったやに聞いてますけど、私もよりかはるかに上の年度の方です。

外務省の人はやっぱり、大東亜省の課長になって出ていってわけですね。外務省の政務二課がアジアとの純外交をやることになっていたんです。何が純外交で、どこまでやっていたかというのは、隣の課だったものですから、私はあまり詳しいことを知りませんが、満州国ができて満州国大使というのは関東軍司令官が兼ねていたわけですから、対満州の話はほとんど外務省じゃなく大東亜省、というか、陸軍が実質的にはにぎっていたと思え

るんですが、それは私自身が体験したわけじゃないです。そういうような話でした。

それから、ソ連との関係で言うと、私の属していた政務三課とは別に調査局の、二課がソ連を担当していたわけです。政務三課というのはデイリーの、毎日やるルーティンのソ連側とやりあう仕事をやっていて、調査二課はいわゆる調査をやっていました。その時の調査二課の作った調査で、独ソ戦開戦のだいぶ前に「独ソ戦開戦必至だ」ということを見通して、その上で、おそらく最初はドイツ軍がソ連に進入して。しかし、レニングラード、モスクワ、ウクライナの半分の線が破られなかったらソ連が勝つだろうということ予測していた調査があるというのを申し上げたんですが、私は持っているはずなんですが、ちょっとどこにあるかよく分からない（笑）。家捜しすれば出てくると思います。

ただ、政務三課のほうは日常の切った貼ったの折衝ですから、当時の政務三課長は武内龍次さんという、のちに外務次官や駐米大使をやられた方です。在京のソ連大使館と交渉があったわけですが、この方はソ連に対してもなかなかきばきと、かなり強硬にいろいろなことをやっておられたわけです。また在ソ日本大使館への訓令もこの課で起草していました。

「英米派の牙城」といったのは、その武内大使をはじめとする事務官が反枢軸派だったわけですよ。曾野明という三席事務官は反枢軸派の論客でした。ということで政務三課は要するに枢軸派は全然入っていない。政務四課がヨーロッパを担当していた。というのはドイツですね。その政務四課は枢軸派なんです。それから五課はなんだったかな。アメリカやイギリスを担当する課が残ってはいたんですよ、ちょっと忘れちゃったけど。

ソ連に対する認識というのは、かなり地についたものがあつたと思います。具体的な、現実的なものがあつたと思います。ソ連を通じての終戦というか和平工作はまったく上のイニシアティブ

で、政務三課の中でもほんのごく一部の人がタッチしてなかったのでもうあまり話題になることもなくて、私どもはそれが後からどういうものかということも、通訳に行った人から間接的に聞いた程度であつて。ただ、この前も申しましたように、殊にロシア語のサービスの人は、ソ連に対する非常に現実的な見方をしていたから、ソ連がそんなに簡単に日本の言うことをきくはずがないという感じを強く持っていましたし、私自身、当時の在ソ大使館から来た電報を毎日見ていたわけです。前の（林銑十郎内閣で）外務大臣をやった佐藤尚武大使とモロトフというソ連の外務大臣のいろんなやりとりを見て、ロシアは強いなという感じがしました。「モロトフの態度、慇懃なりき」なんて電報の後ろに書いてあつて、慇懃かもしれないけど、決して譲っているという感じはありませんでした（笑）。昔の大使の電報は面白いのね。

股野 描写があるわけですね。

北岡 いまはそんなことは書かないんですか。

股野 いや、時々、少し華を添えるために（笑）。

宮崎 やっぱりシニアの大使じゃないと、そういうところは。

股野 そうです。やっぱりシニアの大使ですと多少、次官より先輩ぐらいの大使ですよ（笑）。

北岡 目下だと「なんだこいつは」というあれじゃないですか（笑）。

宮崎 両外相についての印象は、われわれ下っ端の者にとって外務大臣は非常に雲の上の存在で、よくわかりません。ただ、重光〔葵〕外相から東郷〔茂徳〕外相に変わったときの大臣の挨拶で、東郷外相が「従来の外交基盤がすっかり変わった」というようなことを言われたのが印象に残っています。要するにドイツが降伏しちゃったというので、それが何を意味するのか當時も分からなかったし、いまもよく分かりませんが、東郷外相の秘書官をやっていた加瀬俊一さんという人が、國務指令室に時々来ておら

れた。国務指令室に二つ部屋があって、ひとつは幹部の部屋で、局長よりもっと上の人。ひとつは課長の部屋で、戦後に民社党をやる曾禰益という人が課長の中の最もシニア。その曾禰益と加瀬俊一が同期だったんです。ですから、あまり話を直接聞く機会もなかったわけです。

一年生ですから、外務大臣がどうだったかなんていうのはあんまり関係ないわけですよ（笑）。もう少しシニアの人であればいくらか……。シニアの人でも、かなりシニアの人じゃないと、武内龍次さんぐらいにならないと、あまり直接の関わりはないと思います。

伊藤 ソ連仲介の和平ということをはほとんどお聞きにならなかったということですが……。

宮崎 聞いていましたよ。というのは、ロシア語のサービスのシニアの人が通訳でいきますでしょう。そういう人が出たり入ったりするのは、脇で見ておったことはおったわけですよ。ただ、感じとしては、そんなことをやってとてもだめだという空気はあったわけですけどね。ソ連に対して非常に現実的のものを見ていた人が多かったわけですから。

伊藤 そうすると、戦争終結はどうしたらいいというふうにお考えになられてましたですか。

宮崎 いや、そのときはそういう考えは、私自身はとても及び至らなかったということですけどね。ただ、外務省全体が戦争終結に向けていろいろなことをやっていることは分かりましたけど、非常に怖いわけですからね。そんなことをちょっとやると、すぐ軍部に睨まれて捕まっちゃいますから。

課長レベルの会合でも各省会議というのがありまして、問題が非常に小さな会議に私も列席をさせてもらっていたわけです。たとえていいますと、この前、クーリエのことをお話ししましたよね。日本からソ連へ行くクーリエ。逆にソ連から日本に来るクー

リエがいるわけですよ。それは、東京からずっと下関を通過して朝鮮半島を通過して、満州を通過して行くわけですよ。その間の警備とか接遇や食料、そういうものをどうするかというのを、日ソクーリエ協定の実施面の交渉を在日ソ連大使館と行い、片方でそれに関連する各省の会議をやるわけですよ。そういうときも、事務官で座っていたわけですからね。軍部といえますか、参謀本部と陸軍省のなんとか少佐だったかな、制服を着て刀を持ってやってきて、各省会議というのは軍に對することがいちばん多く問題になったようですね。

ちなみに、幹部の人がいろいろと恐れていたのは、議会じゃなくて枢密顧問のようですね。枢密院というのがありまして、なかなか天皇に提出する書類はそこに出さなくちゃいけないわけですよ。それに一度失敗をして、ロシア語の字はご承知だと思いますけれども、アルファベットのひっくり返ったような字がありますよね。日ソ何とか協定を枢密顧問会議へ出したところ、枢密顧問は一人だけロシア語の字が読めるのがいまして、ひっくり返っていることを指摘して「こんなものを陛下に出せるか」と言って突き返されたとかいう話が伝わってきました、これはひっくり返しちゃいけないなと思って（笑）。

僕はロシア語を一年間やったわけですからね。もうすっかり忘れちゃったんですけども、しかしいま何かやらされたら、ひっくり返すぐらいのことはやるかもしれません（笑）。

北岡 ソ連のことをいろいろおやりになっているときに、省内にソ連問題についてはあの人がいちばんの権威だとか、そういう方は誰かおられましたか。

宮崎 あんまりそういう話は聞きませんでしたけど、やはりソ連在勤の方で、武内龍次もその一人です。それから曾野明。この人は通だということになって。

北岡 その当時でいうと、まだ二人ともお若いですよ。

宮崎 若いです。三席事務官。武内龍次さんは課長です。
北岡 もっとシニアで……。

宮崎 もっとシニアの人はいたんでしようけど、あんまり知りません。それから、いわゆるロシア語の通訳なんかからあがってきた人がゴロゴロいたわけです。そういう人たちは、たしかにシニアなんですけどランクはあまり高くなって、いろいろ教えてもらったわけです。彼らはもちろん毎日のように、ソ連の新聞をクーリエへ持ってきたりなんかして読んでいるわけ。非常にクレムリノロジストみたいな人たちが若い人から年寄りまでたくさんいます、そういう中にどっぷりつかっていると、ソ連が分かったような気になってくるんですね(笑)。だんだんと。

北岡 クーリエというのは、どれぐらいの頻度で行ったり来たりするんですか。

宮崎 月に二回ぐらいあると思いますよ。

北岡 そうすると、現地の雑誌とか書籍はだいたいそれがいちばん早い入手方法ですか？

宮崎 そうですね。郵送しているのもあったかもしれませんがね。若干秘密があったものはなんとかのクーリエでこんな大きなカバンに封印して持ってくるわけですから、あれはお互いの協定で開けちゃいけないことになっているわけです。

北岡 新外務大臣が就任されて外交基盤がすっかり変わったという、それは非常に面白い表現だと思ったんですけど、だいたい日本で大臣とかトップが代わりますと、これまでの人を讃えて今後ますます頑張ろうと言うんですけど、さすがに前の外交に対する批判とか、そういうようなことは……これは一種の批判なんですか。

■終戦連絡中央事務局の1人

宮崎 一種の批判だと思えますね。要するに、東郷外相の重光外相批判だったといえるでしょうね。当時、有田(八郎)、東郷、重光って三人で大臣ポストをグルグル回っていたような時期だったんですよ。それで、東郷さんは鋭角的というか切れるような感じで、重光さんは「まあまあ」みたいな、戦後にも外務大臣になりましたでしょう。

ちなみにその間に私は、月は忘れたんですが、政務三課から何カ月か訓練所というところに入っておりましてね。訓練所というのは研修所の前身なんです、それがいまの(東京)学芸大学の校舎の中にあっただんです。訓練所に当時十九年入省の若いキャリア組が全部行きまして、訓練を受けることになって。そのときに、全員、上北沢の日泰学院の寮に泊まり込みで、当時の人事課長の成田課長が泊まり込みで、二四時間訓練だと称しているんなことをやりました。訓練所にいる間に本省の建物が焼けちゃったわけです。

終戦後、印象に残っていることとすれば、いわゆる各省会議の末席に書記役で出ていました。終戦直後、まだアメリカが入ってくる前ですね。主催したのが、内閣書記官長の毛利という人です。それでその下に、橋本元総理の親父さん——橋本龍伍がいたわけです。だから、毛利さんが主催したり、橋本さんが主催したりして各省会議をやりますと、それに外務省代表じゃなくて外務省代表のお付きで出ていたわけですが、そのときの議題はもちろん、たとえば占領軍が入ってきたときにどうするかという話でね。当時の内務省は、占領軍が入ってきて各地まで占領しますでしょう。それとの接触を内務省の知事がやるのは嫌だ、どうしても外務省の中に入ってくれということがあって、それで終戦連絡事務局を地方にまで設けるといいうのは、そのときの経緯でそういうふう

なっただと思えます。

それから、各省会議では、たとえば占領軍が入ってきたときに、絶対渡したくない建物は隠しておいて、積極的に提供するのはいくらだということを各省の間で議論したりしました。内務省は県庁を渡したくないと。高等学校まで渡せといったら、文部省は高等学校は渡したくないと。県庁よりも高等学校のほうが大事だと言って、わあわあ言っていたから、毛利さんと橋本さんが、占領軍は各省の縄張りなどは関係ないという話にね。結局はつきりしないままに占領軍が来て、占領軍が勝手にこれをピックアップしたわけです。

印象に残っているのは、私なんかはまだ一年生ですから、言われるままに占領軍が来て東京を視察するときに、たくさん設営のために将校が、大佐クラスが来るわけです。ジープに乗って、その道の案内をさせられるわけです。あときはなるべく大蔵省の脇を通らないようにしようとか、いろいろ言われたんだけど(笑)、結局こっちはそんなにコントロールできないんで、大佐かなんかが行きたいところに行ってやっていると、大蔵省をとられちゃうわけよね。中庭みたいのがあるでしょう。あれを気に入ったらしくて兵舎になっちゃったわけです。その他にいろいろ積極的に提供する建物の中に第一相互があったわけです。いろんなこと言われても単なる通訳で道案内で、とても相手のほうが強いわけですから、交渉なんか出来ないんです。東京だけじゃなくて、大佐ぐらいの人が何人かが、特別電車を仕立てて、山手線から大宮まで行きまして、あらかじめ知らせで、大宮の駅長さんが日米の国旗を掲げて歓迎したりなんかしました。

ただ、そのときに感心したのは、たとえば藤(埼玉県)なら藤で、どのくらい空爆で焼いているかを実地検分するという役目もあったようですね。だから、よく知っているんです。僕なんか藤とかあまり行ったことがないものだからよく知らなかったけど、

向こうのほうがよく知っておったんです。いちばん簡単に「おまえ、行け」と言われて行くほうで、拒否できないんですからね。だれもこんなもの喜んでやる人はいないわけですよ(笑)。その当時は専ら、そういう役をやっていたわけです。これは終連が組織化されるもっと前の話です。まず最初の各省会議は、向こうが入ってくる前だから。入ってきてから終連ができて、一部一課に入って。

ところが、一部一課には偉い人がたくさんいまして、名前があとで変わったように、政治部政治課なんですよ。部長は初めは曾禰益。その人が代わって武内龍次さんが部長になって、課長は柏村信雄と言って、前の警視總監だったか長官をやった人です。隣の課の課長は、はじめは小倉という人で、のちに町村金五という人がなった。内務省から来ている人がいて、その下にシニアの外務省の事務官がたくさんいまして、宇山(厚)さんとか加藤匡夫とか沢木(正男)とかね。英語の出来るうまい人はたくさんいて。他方、英語のうまくない人は別の班がありまして、そのトップは曾野明。代議士をやっていた森山欽司の隣に私がいて内務班——国内の各省との会合のあれをやる係だったわけですね。宇山さんとかはスキャップ通いのほうのチームで、そういう体制でやった。スキャップからいろいろ指令が来まして、その指令をどうするか、どこの省に流すかとか。これは流し損なうと戦犯ものになっちゃうわけですから、いろんなことがありました。

たとえばページなんていうのはその当時、あったわけですよ。そうすると、そのページになりそうな人からいろいろ話があるんだけど、われわれのところじゃなくて部長ぐらいのところにはね。しかし、部長でもそうページにするかしないかなんて、あまり手加減できるようなものじゃなくて(笑)、向こうが勝手に決めるわけですから。

ですから、その当時はGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)

へは行かないで各省会議のほうをやっていましたから、当時のGHQの相手というのは知りません。ただ、いろいろ話にはずいぶん聞きました。当時、G二とガバメントセクションとの確執があったという話はちらほら聞いてましたけどね。それで、上のほうで白洲次郎という人が終連の次長になってきて、吉田〔茂〕・当時の外相のお気に入りです。いぶん影響力を持っていたようですが、私なんかは直接にはその当時は関係がなかったわけですね。

北岡 さっき何人かお名前を挙げられた、曾禰さん、武内さん、柏村さん、町村さんという方は、外務省と警察ですよ。混成部隊ですか。

宮崎 政治課と行政課は内務省から課長を受けたわけですね。それからその他に経済部とか何とか部というのがまだたくさんありまして、それにはほかの省から、大蔵省からの人を受けていたんじゃないかと。終連自体にかなり人を受け入れていました。

北岡 大使のお仕事は要するに、GHQから何か言ってくる。GHQとコンタクトするのと、各省に割り振る。つまり、間接統治のちよどつなぎ目みたいなどころをやっておられた。これが第一部第一課の……。

宮崎 政治部政治課というのは、単に第一部第一課じゃ何をいっているのか分からないと白洲かなんかが言って名前を変えただけで、実際は何も変わっていないんです。

北岡 そうすると、これはどの省に持っていたらいいかということが分かる人が、一通り揃っていたということですか。

宮崎 そうです。

伊藤 すべての指令は終連に来るわけですか。

宮崎 そうですね。あとになりますと、殊に経済関係とかいろいろな指令は、直接いろんな省に行くようになりましたけど、はじめのうちは間接統治、まさにマッカーサーのオフィスから終連に来るというルートがエスタブリッシュしたわけですよ。それはど

こでどういうふうにしたか分かりませんが、とにかくそういうふうにごちがもっていったわけでしょうね。私が知っているのは、各省会議の分です。

北岡 それはだんだん変わっていったんですか。

宮崎 それは政治関係はずっと変わらなくて、たとえば公取だとか財閥解体とか、ああいったような問題は、直接終連じゃなくてもやるようになりました。

北岡 最初はしかし、その道筋がつくまでは一括と。

宮崎 そうそう、そうだったと思います。

北岡 ちょっと時期的なこと、さっきも大臣の交代の話をお聞きしたんですけど、今回はまさにもっと交代したわけで、終戦の降伏のときの改まったスピーチとかあったんでしょうか。それからまた大臣が変わって重光さんが来られたり、あるいはまた吉田さんというもう当時外務省におられた方からいうとだいたい昔の方が戻ってこられて、その次は幣原〔喜重郎〕さんですから、そういう様子はどんなふうに眺めておられたんでしょう。

宮崎 正直に言って、上のほうは、下に潜っているとあまり感じなかったんです（笑）。いろんな噂みたいな話は間接的にはずいぶん聞きましたけど。殊に吉田さんになる頃には、ずいぶんいろんなことが変わりました。

吉田さんについて思い出したのは、東久邇内閣が辞めて幣原内閣ができました昭和二十年十月、そのあとで外務大臣になったときの印象がありますけど、その当時の重光さんの印象はあまりないんです。ただ、幣原内閣ができるときに、幣原さんという方はもう外務省をやめちゃってずいぶんになっているわけですし、戦争時には軍部にかなり睨まれてましたし、一人でまったくアシスタントがないわけですよ。その人が突然組閣せいということになりましたでしょう。手足がないわけですよ。それで、どういうわけか私がメッセンジャーボーイに行けという命令を上司から受

け取りまして、行ったわけですよ。行ってただ座っていたわけですよ。けど、玄関番みたいなことと呼び込み役みたいなね。そのときに幣原さんの顧問としてやっていたのが、吉田さん。二人が閣僚を誰にするかって相談していたらしいんですが、北沢直吉という外務省の先輩が吉田さんの下でいて、雑用みたいなことをやっていた、その北沢直吉さん——大先輩ですけどね——の下に私がちょこなんとくつついていたわけですよ。言われるままにいろいろなことをやっていたんですよ。

ひとつだけ印象に残っているのは、吉田さんからは直接じゃなく北沢さんから言われたのは、「おまえはこれから洪沢さんの家に行って、洪沢さんを首に縄をつけてもここまでひっぱってこい」という命令を受けましてね。それで、洪沢敬三（栄一の孫）。そういわれて、ジープに乗ったんですよ。当時そういうものは何もなかったわけですから、ジープをあてがわれたわけですよ。ところが、洪沢さんがどこにいるか、まず分からないわけですよ。電話というのは一切通じないですから、当時は電話もまったくないわけですよ。洪沢さん、洪沢さんとやって、だれかがやっと見つけた。三田綱町か何かにいるというので、その三田綱町までいって、運転手さんにどうやっていけといったらいいか分からないのね。みんな焼けてしまって焼け野原でしょう。とにかく大変だということ、綱町の何丁目にいけということ、ジープの運転手さんに頼んで乗っかっていった。そのとき非常に心配したのは、入省して二年目ぐらい、いちばんの若造が行って——洪沢さんは日銀副総裁をした人で子爵ですよ——まず行ったら追い返されるんじゃないかって、ずいぶん心配しました。行ったら、誰か女中さんみたいな人が出てきて、その人も突破して、その次に執事みたいな人が出てくるだろうから、それに対して、何と言うかと一所懸命ジープの中で考えてね。当時は爵位がものを言う時代ですから、「幣原男爵の使いで参りました。洪沢子爵にぜひお目にかか

りたい」と言って案内を乞うと——断られたらどうするかというのを考えていたら、焼け跡みたいなのところに変なラップ服みたいなを着た本人が出てきちゃったわけですよ（笑）。せっかく車の中で考えたせりふが、全然使わないで。それで……。とにかく来てくれという話で、ジープに乗っけて、来てもらったわけですよ。それが大蔵大臣になったわけですよ（笑）。

北岡 しかしうまく行ったわけですね。

宮崎 それはうまくいったわけ。その他いろいろ、吉田茂さんに叱られた覚えがあるんだけど、なんで叱られたか、いまだによく分からない（笑）。そういうことで組閣本部に行っただけ。それは終連の時代の前かな……。

伊藤 終連はどこに出来たわけですか。

宮崎 外務省の中ですよ。外務省自体は、はじめはいまの文部省に間借りしていたわけですよ。それから今度は大蔵省に。その後移ったり日産館に移ったり、大蔵省の上に移ったり、外務省は焼けちゃってしまいましたから、文部省の上だったと思います。

北岡 いま言われた電話が全然通じなかったというのは、いつ頃から、終戦の前から……？

宮崎 空爆でもって全部焼けちゃったでしょう。電話線どころじゃなかったわけですね。

北岡 焼けてないところでは電話は通じているわけですか。

宮崎 焼けてないところはほんのわずかですよ。東京の中でもごく一部ですよ。

北岡 いつ頃、復興したんでしょうね。

宮崎 いつ頃復興したんですかね。とにかく電話というのは、つけるのが大変だったですよ。私の自宅も電話がなくてずいぶん不自由して。それでも役所では特別早くつけてくれたわけですよ。いつだったかつけてもらったんですけど、普通の人は何年も何年も待たないといつかなかった時代ですよ。電話の回線が非常になかった

わけです。

北岡 いざとなればメッセンジャーを派遣してするしかなかったわけですね。しばらく何年か続いたんですか。

宮崎 何年か続いたんですね。

伊藤 そのジープはアメリカ軍の貸与ですか。

宮崎 どの貸与ですかね。とにかく官邸にありました。きっと借りてきたんでしょうね。

伊藤 日本のものじゃないでしょう？

宮崎 日本のじゃないです。日本のものは何もなかったわけですが、占領軍が入ってくる前の、毛利さんだったか橋本龍伍さん主催の各省会議で、アメリカの指令でトラック何台とか提供せいというのがあったわけですよ。ところが、軍のトラックはほとんど使い物にならない。そうしたら誰かが、道を走っているトラックを片っ端から捕まえて「提供せい」という乱暴なことを言ってる。どうなるかと思ってみていたら、内務省出の人が、最後までそれは絶対にやらないといってがんばって採用されなかったんですけど、そういう時代ですから。

北岡 それはひどい(笑)。

伊藤 そのトラックはどうなったんですかね。

宮崎 結局、全部は員数が揃わなかったと思いますよ。指令通りには出せなかったと思います。

北岡 向こうも呆れたでしょうね。こんなに何もなかったのか、と。

伊藤 さっき全国に終連の事務局をというお話でしたけれども、各県に置いたわけではないでしょう？

宮崎 県じゃないですね。

伊藤 ブロックぐらいいですか。

宮崎 そうですね。札幌とか仙台とか福岡とか、そういったようなところでしたね。

伊藤 あとは県に支部とか。

宮崎 支部はなかったと思います。ただ、だいたいそのくらいのところはアメリカの司令部みたいのが出来ましたから、結果としては合っていたわけですけどね。

伊藤 そういうところに配属された人もいますね。

宮崎 たくさんいるわけですよ。私はたまたま本部のほうにおりましたけれども、各支部に行った人はずいぶんたくさんおります。

伊藤 その時は、外務省から離れてそこに行くということですか。

宮崎 終戦連絡事務局は実際には外務省みたいなもので、外務省の外局みたいな恰好になっていましたからね。

伊藤 内閣に直属していませんでしたか。

宮崎 ちょっと記憶がはつきりしませんけど、実質はほとんど全部外務省の人間ですよ。

伊藤 終連に内務省の人がたくさんいたのは……。

宮崎 それは内務省もおりましたし、大蔵省やなんかの人もいましたけど。

北岡 いちおう外局となっていると「外務省の百年」には書いてあります。

宮崎 外務省の外局でしょう。

伊藤 かなり議論になったと思いますね。

宮崎 おそらくそうだと思います。外務省の外局の終戦連絡。外務省自体は非常に縮小したけれども残っていて、人数からいくとさうとう終連のほうに移っているわけですよ。

伊藤 外務省は、どんどんどんどん外国から引き上げてくるわけですよ。その受け皿にならなければならぬ。その人たちをまた終連に送り込むということになるわけですよ。

宮崎 だいたい終連に。ただし、いわゆる領事警察の人はほとんど全部クビになった——整理したわけですよ。中国に特別領事裁判

権みたいのもありましたでしょう。その関係の人はもうとても収容できなかったわけですよ。それから、在外から引き上げていって

も、残っていた在外交官というのはいわゆる中立国だけですから、人数はそう多くはなかったわけですね。外務省本省が縮小されたから、終連にずいぶん収容したということはたしかですね。

■外務省を辞めた人たち

北岡 外交は、でも大陸からずいぶん引き上げてきたんじゃないでしょうか。

宮崎 ですから、大陸領事館とかたくさんありましたからね。

北岡 大東亜省関係の。

宮崎 大東亜省関係はあったと思います。

伊藤 ヨーロッパやアメリカだって……。

宮崎 アメリカはないわけですよ。

伊藤 そういえば、もう交換船で帰ってきていましたね。

宮崎 もう交換船で帰ってきたのはだいぶ前ですから、残っているのは中立国。スイスとかスウェーデンとか、そんなようなものですよ。

伊藤 最後のほうで日本に宣戦布告したアルゼンチンとか、あっちのほうの国の人たちは抑留されていたわけですから、戦後になつてからでしょう。

宮崎 そうでしょう。ただ、人数は少なかったと思いますよ。

伊藤 人事の問題はけっこう大変だったんじゃないかなと思ったので。

宮崎 大変だと思いますよ。

北岡 あと、旧植民地の、樺太・朝鮮・台湾関係の事務も外務省に引き継ぐことになったわけですよ。その関係の人はもう出ていないわけですね。

宮崎 外地整理事務所とか、外務省の中にずいぶん何かや残ってましたよ。

伊藤 それはやっぱり内務省系統の人がいたんでしょうね。

北岡 それがなければみんな失業したんでしょうね。朝鮮総督府勤務の人とか、どこに行ったんでしょうね。

宮崎 おそらく辞めたんだと思いますよ。いちばん多かったのは領事警察で、人数が非常に多かった。治外法権で裁判権も警察権も領事館が持っていたわけですからね。

伊藤 あれは治外法権撤廃をやったので、なくなったんじゃないんですか。

宮崎 ずっと残っていたわけですね。治外法権というか、中国に対して持っている日本の特権ですよ。

伊藤 治外法権を撤廃したんじゃないんですか。昭和十九年かなんかに。

宮崎 やったかもしれませんが、実質上、人間も残りました。

北岡 この頃、整理以外の理由で外務省を辞められる方はあったんでしょうか。民間に行くとか、当分外交もないから転身するとか、そういうことも若干あったやに聞いていますけれども。

宮崎 ひとつは、元枢軸派の人がやめさせられたという人がいますよね、何人か。それから、やめちゃった人がいる。それから私のクラスでは、食えないから辞めたという人がいましたよ。とても外務省では食えない。辞めて闇屋になったとかね。でも、結局だめだったんですよ。

北岡 それはよっぽど個人的な才覚のある人でないと。食えないから辞めないという人もあると思うんですけどね(笑)。

枢軸派がやめさせられたというのは、いつ頃でしょうね。

宮崎 一人は小川清四郎という人。一人は平沢和重。

股野 小川清四郎さんはまたカムバックしてくるわけですね。

宮崎 役所にはカムバックしてないと思います。小川清四郎はもともというけど。

股野 平四郎さんはもちろんずっとおられましたよ、清四郎さん

もいっぺん戻ってこられて、バチカンの大使をされたという記憶があります。

宮崎 もう一人は平沢和重さんでした。NHKの解説委員になったのは。三木武夫のブレンになって、あとで迷惑したんですけども。牛場〔信彦〕さんもそのときに辞めたわけですよ。

伊藤 自発的に、ですか。

宮崎 だったと思います。平沢和重と小川清四郎の二人は完全に枢軸派だったという理由でやめさせられて、牛場さんは自分でやめたと思います。

伊藤 枢軸派はたくさんいたわけでしょう。

宮崎 たくさんいたわけですよ。

北岡 辞められた方は、おいくつぐらいだったんでしょうかね。中堅、課長クラスで枢軸派の人と、もっと若くてたまたまはずみでそっちに近かったという人も、いろいろあると思うんですけど。

宮崎 はずみでそうだったという人は、辞めなかった人も多いんだろうと思いますけど、上の人はみんな辞めたと思いますよ。

北岡 課長以上クラスですか。

宮崎 小川さんというのは課長だった。牛場さんは事務官だったわけですからね。

北岡 牛場さんはかなり動きも激しかったですからね。そういうのはみんな公的なパージとかではなくて、自発的に居づらいというか、あるいは自分で責任を取ると。

宮崎 公的にやめた人が二人、平沢和重と小川清四郎。

北岡 それ以外はパージでひっかかって飛ばされたって、それは二十一年一月以後ですよ。

宮崎 その前に古い大使はみんな辞めてますからね。

北岡 意外にありませんね、パージで外務省で。

伊藤 戦犯はいますけどね。

宮崎 パージはなかったと思いますね。当然、枢軸派の松岡洋右とかああいう人はパージになっているはずだろうけども、その前に辞めてますからね。それから白鳥〔敏夫〕。

伊藤 これも戦犯ですね。

宮崎 とにかくそれにつぐぐらいの人はみんな辞めてます。

伊藤 重光さんも戦犯で収容されていますし。

宮崎 彼は枢軸派ではなかったです。英米派ですね。

伊藤 あれはソ連の要求で、ということのようですよ。

北岡 上のほうの広田〔弘毅〕さんとか東郷〔茂徳〕さんとか、そういう人は戦犯にはなるけども、パージはなかったと。

宮崎 そういう人たちは枢軸派じゃないんですよ。

伊藤 パージになるようなポストについてないでしょう。

北岡 そうですね。内政ですね。極端な軍国主義の。

伊藤 戦犯になった人たちの面倒をみるという仕事は、終連は関わってないんですよ。

宮崎 関わってなかったですね。

伊藤 外務省がやっていたんですよ。

宮崎 外務省もやらなかったと思いますよ。

伊藤 いやいや、やっていると思いますよ。

宮崎 そうですか。終連はあんまりやったという感じはないですね。

伊藤 そうですか。終連で白洲さんの話が出ましたが、他にはどういう方が。

宮崎 終連では岡崎勝男という人。終連の長官をやっていたんじゃないかなかったですかね。「オニゴン」というあだ名なの。

伊藤 それはどういう意味ですか。

宮崎 要するに、部下とマージャンをやっても何しても勝つでしょう。そうすると、容赦なく取り立てる〔笑〕。それで「オニゴン」というあだ名だったんですよ。

北岡 宮崎大使はマージャンは大丈夫だったんじゃないか？

宮崎 やってもらえなかったわけですよ（笑）。

伊藤 終連はそんなに長いことではないんですね。

宮崎 私は、はじめ政治部政治課で、研修所に入った後政治部軍事課のほうに移ったわけですよ。その前に研修所で何をやったという質問があるんですけども、何をやったか忘れちゃったんです（笑）。ただ、印象に残っているのが、松平康東という人が指導官で、いろいろなことをやっていたわけですけど、論文を書かされたわけですよ。その論文が、たとえば東京裁判についてどう考えるかということ。そういったような種類の宿題があって、論文を書かされたりした記憶があります。

北岡 なかなか生々しいテーマですね。

宮崎 東京裁判なんか怖くてね。東京裁判は止むを得なかったということしか書きようがないと思ったんですが、「あれはけしからん」と書いたらどういうことになったか。ですから、私はそれを書かなかったんです。

北岡 それはいろんな先生が来て講義もされたんですか。

宮崎 講義はあんまりなかったですね。

北岡 そうですか。じゃあ、むしろ自習が中心なんですかね。

宮崎 さっき言いましたように、終戦前に訓練所にいるでしょう。その後半という感じだったわけですよ。だから、三カ月かな、ごく短い期間だったんです。訓練所のほうはまた別のあれだったんですけどね。

北岡 研修所を作るのは幣原、吉田は非常に力を入れて、これまでの外交はいかんから、といって作ったというふうにももの本に書いてありますけども、実態は前とわりあい連続していたわけですか。

宮崎 連続していたって、研修所長は佐藤尚武です。それでその下の主任が松平康東。私どもの主任の教官がね。

北岡 顔触れからいうと、さうとう大物を据えてやったわけですね。

宮崎 そうそう。あまり印象に残ってないですけどね。さぼっていたせいかもしれません。

伊藤 研修所であって研究所じゃないわけですね。

宮崎 ないわけですよ。

北岡 これは茗荷谷ですか。

宮崎 そうですよ。訓練所のほうが印象が残っているんですね。二四時間訓練であれされたし、戦争中ですからスパルタ式でね。フランス語をやらされたんです。渡辺なんかとかという東大の当時の仏文の教授がいましたでしょう。その人がやってきて、こっちはフランス語を全然知らないんだけど、やらされたという記憶（笑）。

伊藤 それは研修所のほうですか。

宮崎 訓練所のほうですよ。研修所のほうはどうもあんまり、とにかく三カ月やって卒業したんでしょう。だけでも記憶がないです。伊藤 そうすると、レクチャーなんですか。それとも今おっしゃったように論文を書く……。

宮崎 レクチャーもありましたよ。

北岡 語学もまたあったんですか。

宮崎 語学は研修所はなかったんじゃないかな。訓練所ではありました。さっき言ったフランス語。研修所はあまり研修を受けたという記憶はないですけどね。

北岡 いまの研修所は当時の佐藤尚武クラスは所長になってまっせんから、偉かったんでしょうね。

宮崎 佐藤尚武の講話というのを、ずいぶん何回も聞かされたですよ。だけど、若いときはそんなものをあまり意に介さないものだから、何を聞かされたか、ちょっと覚えてないですけどね。

北岡 しかし当然、海外事情の講義とかあったんだろうと思うん

ですね。今アメリカはどうなっているとか。

宮崎 いや、あんまりそういう記憶はないですね。

北岡 そうですか。人がいなかったかもしれないし。

宮崎 人がいない。つまり、終戦でひっくり返ってますから、講師はその前の人はダメなんでしょう。佐藤尚武には、エチケットの話を盛んに聞かされた記憶があるんですけどね(笑)。

申し訳ないけれども、研修内容については記憶がないです。ただ、その期間は短かったわけですよ。それが終わってから政治部軍事課に行つてね。軍事課は当時、陸軍省と海軍省が復員省になった第一復員省、第二復員省と連絡を取って、要するに復員の事務とか、戦争が終わったあとのいろんな武器や何かの引き渡しはもうだいたい済んでいるんですけども、復員の事務が多かったです。このときは課長はどっちが課長か覚えてないけど、陸軍の中佐と海軍の大佐と二人おりました、別々の系統になっていまして、私は海軍のほうに属していたわけですよ。それで、同僚が海軍の大尉さん——飛行機乗りと潜水艦乗りが脇にいまして、班長が海軍の宮崎という中佐でした。陸軍のほうは、登(誠一郎)君の親父さん。

股野 いまは内閣外政審議室長ですね。

宮崎 登少佐かなんかだったんですよ。その上にもう一人ぐらい陸軍がいたな。そういう軍人さんの中に入って。電話がかかってきて「宮崎さんいますか」って。「中佐のほうですか」と言ったら「いや、大尉のほうですよ」と、私はいつのまにか大尉になっておったんです(笑)。ですが、復員事務ではあまり印象に残っていることはありません。

伊藤 復員事務はどういうことをやるんですか。

宮崎 復員省が二つあるわけですから、向こうにまだたくさんいるわけでしょう。その人をこっちに戻すまでの間に、いろんなことがガタガタ起るわけですよ。スムーズにスッと帰ってくる

わけにはいかんわけでしょう。その間のいろいろな雑務というか、いろんなものを処理しなくちゃいけないわけですね。その間にスキャップと国内の官庁との間に立っているんなことをやらなくちゃいかんと、そういうことですよ。

伊藤 第一、第二復員省とGHQの間をつなぐという意味ですか。

宮崎 そういうことです。あまり感激するような仕事ではなかったです(笑)。

北岡 しかし、これは非常にお忙しいお仕事でしたか。

宮崎 わりと忙しかったですね。

北岡 終連のときもお忙しい？

宮崎 これは終連です。政治部のときも忙しかったですかね。というのは、スキャップからやたらに指令が来ますでしょう。もちろん英語で来るわけですよ。各省にそのまま回しても分からないこともあるしね。だいたいそのまま回すわけですけども、時々間違えて、誤解すると大変なことになるわけですよ。牢屋に入られちゃう剣幕ですから、そのへんはぜひぶん細心の注意を払わなくちゃいけないということにはあつたわけですよ。

北岡 牢屋に入れられかねないというのは、つまり、不服従だとかサボタージュだという疑いをかけられると。

宮崎 そうそう、誤解ですね。

伊藤 実際にそういうことはあつたんですか。

宮崎 いや、ほとんどなかったと思います。ただ、向こうは脅かすわけですよ。だから、何が起るか分からんという恐怖感があったから。

北岡 そうですね、アメリカはやりますからね。これはテクニカルにはどういう犯罪に当たるとか何とか言つて。

■アメリカ担当の調査局二課へ移る

宮崎 そのあとは調査二課に移る。これがアメリカの課なんです。つまり、政務局がなくなりまして全部、調査局になっちゃったわけです。調査二課がアメリカで、三課がソ連の課かな。四課がヨーロッパ。五課がイギリス。私はアメリカのほうに移ったわけです。

伊藤 これは本省なんですか。

宮崎 本省です。終連じゃなくて外務省です。それに移ったんで、まったく私にとっては意外だったんだけど、ソ連のときに武内龍次課長に仕えていたわけです。終連でも武内部長、曾野さんの下にいた。それで、アメリカのほうには、近藤晋一さんが私をひっぱったらしいんだ。ひっぱったらしいというのは、本人にあとからちらっとそんなような話を聞いたんだけど。曾野さんにえらい怒られてね。「おまえは裏切るのか」と。つまり、ソ連からアメリカに転向する、何事であるか、と。怒られる意味合いが全然よく分からなかったんだけど、自分で画策して移ったというふうに思われて。全然そういうことはなかったんだけど、たまたまアメリカに移っちゃったわけです。ソ連とはそれ以来、縁が切れたというか、ソ連に戻して貰えなくなっちゃったわけです。ですから、破門されたみたいな形になったわけです。本人はその気もなかったんだけど。ですから、ロシア語を全然使う機会がなかったんです。

とにかく調査二課というところで、これはアメリカの政治と経済というのを担当する、調査をやるんですけどね、大河原良雄が政務のほうをやっている、経済のほうは僕らがやっています。ところが、このとき非常に面白かったのは、アメリカの資料——雑誌だとか新聞がどこにも入らなくて、調査二課だけ入ったわけです。伊藤 それはGHQを通じてですか。

宮崎 おそらくGHQを通じてでしょうね。とにかく生の資料が山ほどあるわけです。毎日毎日それを読むわけです。たとえば新聞だと『ウォールストリート・ジャーナル』とか『ジャーナル・オブ・コマース』とか、経済関係ですね。『フェデラル・リザーヴ・ブリテン』とか。政務は政務でそういう資料があって、したがってえらい勉強のし甲斐があるわけです。どこよりも情報があるわけです。他のところはそんな情報がないわけですから、英語の情報なんていうのは、日比谷に米軍のライブラリーというのがある、そこへ行くと見られるという話があった時期があるんですね。

股野 CIEといいましたかな。

宮崎 だけど、そこまでいかないと見られないでしょう。したがって、日本の経済人も学者もなかなか見られなかったわけですよ。情報を独占していたわけです(笑)。

そのときに私はアメリカの経済をフォローしていたわけですが、経済学部の方はいらっしやらないわけですね。もちろん皆さん、先生方だからご存じでしょう。当時のケインズ垂流の『アプライド・エコノミクス』という連中がアメリカで幅をきかしていた時代なんです。ニューディールから参画した連中が残っていて、それがアメリカの経済政策の中心部にいたわけですよ。それがトルーマンの政権の中にもかなり残っていた。学者でいえばハリスとかハンセンとか、そんな連中の。そういうような本が手に入るものだから、一所懸命読んでいたわけです。

当時、「GNP」という概念は戦前の日本にはあまりなかったわけですね。あれはたしかケインズ垂流の発明にかかる観念ですよ。訳していて、「グロス・ナショナル・プロダクト」を「国民総生産」と訳したわけです。それでいま国民総生産になっているんじゃないか、もしかすると、あれは私の誤訳が始まりじゃないか

と。思って。本当は「グロス」というのは「粗」なんですよね。「ネット」「純」に対して「グロス」は「粗」ですから「国民粗生産」でなくちゃいけないですよ。それを私が「国民総生産」と書いて、それ以来みんな書いてるんですよ、いまだ。だから、犯人は私じゃないかと忸怩たるものがあるんだけど（笑）。まさか、直しようがない。

北岡 でも、どうしてそう訳されたんですか。

宮崎 私の浅学非才の（笑）。とにかくたくさん資料があるでしょう。もう片っ端からタンタカタタンタカタ訳していたから、いい加減に訳した（笑）。

とにかく、その当時のアメリカの経済が戦時経済から平時経済への移行がどういうふうなスムーズに行われてきたかなんていうことをつぶさに勉強して、それでいろいろところで講演したり紙に書いたりして、アメリカ経済の最高の権威になったようなつもりだったわけですよ。他にいないわけですから、当時はアツプ・トゥー・デイトな資料がないですからね。だから、経済学者だってそんな資料を全然もってないわけです。「国民総生産」が間違いだって誰か指摘しそうなものだけど、全然指摘されない（笑）。

北岡 今度、経済学者に聞いてみましょう。これはどうしてこういう訳語なんですか、と。

佐道 きっと最高権威がそのように訳したんだと。外部にもレポートとかそういうのは発表されたわけですか。

宮崎 取りに行く、いろいろな経済界とかなんとかの人には調査みたいなものを渡しました。

伊藤 調査月報みたいなものをお出しになっていたんですか。

宮崎 調査月報は出してなかったですけど、都留重人は偉い学者らしいけれども、彼なんかは資料を取りにしょっちゅう出入りしていたわけですよ。近藤課長の友達。

ちなみに戦争末期に経済学者がたくさん外務省にレフュジーとして来ていたわけですよ。いろんなことで、赤狩りとか自由主義はいかんとかやられましたでしょう。外務省で飯を食っていたのは、たとえば脇村義太郎、都留重人、大来佐武郎、そんな連中が外務省の嘱託だとかいう恰好で来ていたわけです。

これは私はいつの時期だったか忘れちゃったけれども、終戦のあと、みんなが本当に何をしたいか分からない、ポカンとしていた時期があるんですよ。そのときに『日本経済再建の処方策』というのを外務省が作ったんです。有名な本なんです。終戦直後昭和二十年。それを作ったのは、要するにそこにレフュジーとして来ていたエコノミストたちを使って作らせたわけです。どういうわけか、私はそういうことの書記みたいなこともやってたものだから記憶に残っているんですよ。

伊藤 それはいつの時代に何をおやりになっていたときに、そういう役割になったんですかね。

宮崎 それが調査局に移ってからかどうか、ちょっと覚えてないんです。とにかく『日本経済再建の処方策』という立派な。それがあとで傾斜生産とかいろんな観念が出てきたわけですけど、いちばん最初のやつです。

北岡 二十年の末にもうポレーの賠償が出てきますから、それに対する反論みたいな恰好で日本側から意見を出していくというのがございますね。そういう動きとこういう処方策は、直接には関係が……。

■通産省で外貨割当に従事

宮崎 それは関係あるかどうかは知りません。ただ、脇村義太郎なんて本当に戦争中にいたわけですよ。ちなみに、これはレフュジーじゃないけれども、高野雄一という国際法の先生が私の二年

上だったと思いますけど、戦争中に外務省に勉強に来ていました。いずれにしても調査二課というところにおいて、それから通産省に移ったわけですが、その当時、通産省には外務省からえらいたくさん人が行ったわけですね。通商監という次官の次のポストに武内龍次さんがいたり、通商局長に黄田〔多喜夫〕さんという人がいて。そのあとは牛場さんとか。課長クラスでもずいぶんたくさん、輸出課長、市場一課長、二課長、三課長は外務省から行ったし、事務官もたくさん行った。私はそのワン・オブ・ゼムで通産省に行ったわけです。当時の通産省は商工省と貿易庁が合体してきた直後、民貿再開の直後だったわけです。

通産省で初めにやらされた仕事は、スキヤップ通いなんです。先ほど申し上げたように、終連では私よりもっと英語のうまい人はたくさんいたものだから、スキヤップに行く必要がなかったわけですね。ところが、通産省へ行ったら「おまえ、スキヤップへ行っってこい」というわけで毎日スキヤップに行きました。

たとえば輸入貿易管理令の改正（一九五〇年）をやったわけです。その改正についてスキヤップのOKを取らなくちゃいけないというので日参しましたね。スキヤップもお役所みたいで、いろんな課があるわけですよ。その課を歴訪していて、一人一人に説明して。当時、テーブルコーダーとかはなかったわけですよ。はじめてテーブルコーダーを回されて、そこで言われて、汗をかいた記憶があるんです（笑）。そういうことで初めはやっていて、そのあとは途中から外貨割当の総元締めみたいなことをやるようになりましたね。

外貨割当といいますが、要するに、当時は外貨資金が非常になかったわけですよ。傾斜生産でやりだしたんだけど、いちばん貴重なものだけを輸入するという。たとえば石油を輸入するとかコメを輸入するとかいうことを、外貨が足りないものだから外貨予算を組んで。外貨予算のことについて、どなたかからお

話がすでにあるのかどうか知りませんが、要するに年間、たとえば当時の私の記憶では、私が通産省に行った頃は、輸入が二〇億ドルの規模なんです。二〇億ドルの中で何をいくら買うかという計算をして、そして枠を決めるわけです。そういう外貨予算の編成作業というのが片方にあるわけですよ。その編成をやるのは、通産省の中で戦争中に物資動員計画なんかをやっていた物動屋という人の末裔みたいな人。各省会議でやらなくちゃいけないですからね。たとえば石油はいくら入れるとか、綿花をいくら入れるとか、コメ、麦をいくらとか、鉄鉱石とか羊毛とかいろいろあるでしょう。そういうのを枠をいくらにするかというのが大変な仕事だったわけですね。つまり、コメのほうが綿花よりも大事か、とか、綿花は布にして輸出するんだから外貨獲得に非常に必要だと。しかし、コメが足りないといくらからと、主な品目について枠を決めるわけですよ。枠を決めていって、枠を決めるだけの量に達しないものを雑輸入といっていたわけですよ。外貨予算がひとたびできると、今度は外貨予算をどういふふうに割当するかということを決めなくちゃいけない、それを私はやっていたわけですよ。

それは割当基準というのを作って、つまり原材料みたいなものはメーカー割当にするわけです。たとえば鉄鉱石は当時の八幡〔製鉄〕にいくら、富士〔製鉄〕にいくらとやっていたわけですね。綿花は数島紡にいくら、なんとか紡に、その割当基準を何で決めるかという、結局キャパシティ——生産能力で決めたわけです。ところが当時は、割当を貰うと儲かる仕組みになっていたわけですね。そういうようなものをキャパシティで決めたというところが、その後の日本経済にえらい大きな影響を与えているわけです。キャパシティを増やせば割当が余計もらえるからということが生じたわけですね。

他方、そういうような原材料ではないものを、たとえば食料な

んていうのはどうやって割り当てるかという問題があるわけですよね。それは結局、輸入業者にね。当時、三井三菱は解体されちゃって、一九万五〇〇〇円の小さな会社ばかり。ニチメンとかトーメンとか、伊藤忠とか丸紅がわりと大きかったから、そういう商社に割り当てるんですが、その商社に割り当てるのは、外国為替管理法に基づく通産省の権限と、食管法に基づく農林省の権限があるから、両方集まって合同で入札をやるわけですよ。何月から何月まで、納期はこれだけでコメは何万トン。それは商社がオファーを持ってきて、それを張りつけて一覧表にして安いほうから落としていくというシステムだったわけです。ところが、実際に割当基準がはっきりしているのはいんだだけでも、はっきりしてないものが出てくるわけですよ。それで、いわゆる雑輸入をどうするかというのが。雑輸入の中でも大きなものがあった、最後にほんのわずか残るのをどこに入れるか。

最後に私は困ったのは、あと額はわずか残っている、どっちにしようかなと。警視庁がピストルを入れたいというのと、上野動物園がオットセイを入れたいとか言って、どっちにするか課長に相談したら、「オットセイのほうが子供が喜ぶから入れてやれよ」って(笑)。

その外貨割当の証明書を持っていかないと、輸入ができないわけですよ。その証明書にサインするのは、私と課長と局長、とにかく三人なんですよね。上の人はしないから、専ら私がやるわけですよ。だから毎期、こんな厚いのをサインしていたわけ。ところが、それはもう一日遅れたら、金利とかなんとかでえらいことになるでしょう。私の座っている前に行列が出来たんですね。通産省銀座の中でもいちばん激しい(笑)。それで外務省の赤谷(源一)という派手な恰好をした人がいたのでしょ。通産省の市場課かなんかにいたんですよ。それほど忙しくないところに。昼飯に誘いに来てツカツカッとやってきたら、並んでいた人から

「後ろに回ってください」と言われてね(笑)。というわけで、大変な。

そのときに、本当に当時の輸入は約二〇億ドルのうちの一九億ドルは私のサインがないと入らないという、輸入できない。だから、本当に大変な権限だったんです。

北岡 いろいろ誘惑とかプレッシャーとか。

宮崎 そのとき、汚職のノウハウを心得ていけば、これは大変なことだったと思うんです。それを知らないものだから、ついに絶好のチャンスを見逃して(笑)。

それは初めは、飯を食うのも遠慮していたんですけど、大きなところで飯を食わないと、業界の情報が入ってこないですよ。だから、紡績協会とか鉄鋼連盟とか、そういうところの飯はしぶしぶん食いました。だけど、個々の商社とか会社の飯は食わないということをしていたんです。

外貨割当をえて行う輸入の他にもうひとつ、無為替輸入というのがあって。ご存じの方は少ないと思うんですけど、表面的には為替を使わないで輸入する。つまり、アメリカの慈善団体なんかから寄贈を受けるといことなんです。古着とかユーズドストッキング、ナイロンのストッキングの古いやつとかね。向こうはただで集荷してきて、こっちに持ってくればいい。それをタダで貰うという。実はその裏で、闇で送金しているんですが、そういうのがもうたくさんあるわけですよ。

北岡 どういうことですか。

伊藤 送金できるんですか。

宮崎 もちろん表向きはできないわけですよ。だけど、それこそ闇ドルを買って送金しているわけですよ。もらったことにしているんです。それは本当にインチキ。つまり、片方でもものすごく統制があるでしょう。外貨資金は年二〇億ドルしかなくて、そのうちの自由に入れられるものはほんの僅かで、あとはみんな割当

でしょう。ですから、うまく外貨を獲得して物を輸入したら、えらい儲かるわけです。それを脱法行為で、たとえば外国の何とか協会とかなんとか慈善団体から洋服の古いやつをもらいます、その許可をしてくださいと言って来るわけです。それはもういかにも危ないんです。それで私は、これは危ないと思ったので、手続きを作りましてね。都道府県知事が、受け入れるほうのたとえば慈善団体あるいは学校法人とか病院とか、そういうものが真に慈善団体である、立派なものだということを証明しろと。そういうものを持ってきて、それと同時に外国からタダで送りますという書類を持ってきて、書類審査だけで合っていれば通す、そうでないやつは通さないとしたわけです。実際は、たとえば古い洋服を輸入しまして、またボロボロにして毛を取って毛布にするというのです。ところが実際は輸入したやつを浅草かなんかで古着のままよく売っているわけです。ああいうのはみんなインチキなんです。

伊藤 じゃあ原材料なんですか。

宮崎 女のナイロンのストッキングなんて、古いやつをまた糸にして日本でストッキングにするというやつ。それがべらぼうに儲かったらしいんです。そういうので学校が出来たんです。ずいぶんたくさん。有名な某女子大学なんて、その金で出来ているんですよ。その儲けは半端じゃないんです。だから、汚職が怖くてしょうがないんですね。ですから、都道府県知事の証明書を持ってこいということにして、書類審査だけにしたわけです。ところが、いろんな地方の警察から呼び出しがかかるんですよ。茨城県の警察から「来てくれ」というけど「忙しいから行けない。必要があるんだったらおまえのほうから来い」と言って絶対行かなかったらみんなやってきて、どういう基準でどういう手続きをやっていますかと聞きにきたわけです。ずいぶん何件もね。それは怖いからそういう手続きを作っているから、汚職をやるんだっ

たら都道府県のほうでひっかかるはずなんです(笑)。そういうのをやったり、さっきの外貨割当なんか基準とか無為替輸入なんか手続きというのは、通産省の創成期ですから誰も作ってないわけです。それに私は最初、為替の勉強をして、そういうものを作ってから、一事務官が作ったのじゃだめですから、もちろん課長を通して局長を通して、でいいのかと思ったら、通産省は法令審査委員というのがあって、各局のシニアな事務官が集まる。そこに行つてそれを通して、その次に庶務課長会議というのを通して、省議を通してやっとものになる。それを全部通したわけです。それを通しちゃうと、私が権限絶大になっちゃうわけです(笑)。ですから、外貨割当については、そういうふうになんものはメーカーはどこであるとか、それからピストルやオートセイに至るまで、ブラッセルのノメンクレイチャーというのがあってしょう。四桁でいたい一二〇〇品目。一二〇〇品目だったら何を聞かれても、当時のどこから入って、日本でどういうふうに使われてどういうふうに使われているかって分かるぐらいに覚えたいです。

北岡 すごくですね。

宮崎 まあ、やる以上はトコトンやりたいというか。それから、為替についてもいろいろ、信用状があるでしょう。いろんな種類の信用状があって、それは私の係じゃなかった。それは別の人がやっていましたけど、そういうのも勉強しなくちゃいけない。ということ、通産省の創成期にそういうことをやって、ずいぶん……。

一方ではその手続きを作つて、そのあとの通産省の何とか要綱の手続きの欄に書いてあるの。僕がせっかく作ったやつがそのまま。印税は貰わないんだけどね(笑)。通産省の規則になっちゃっているからね。

ところが通産省に感謝しているのは、そんなふうになってきて

いるうちに、私の部下が無為替のほうで汚職していたのに気がつかなかったんですよ。本当に汚職しているほうは、服装もお粗末だし、煙草もいちばん安い煙草を吸っているし、汚職しているとはまるっきり感じなかったんだけど、汚職しましたね。そのハシコを誰がついているかというので、私は班長だったんで直属の上司である班長が疑われてね。そのときも外国に行っていましたからね。そのあと通産省の人が、山下英明って同じ課にいた者がいろいろと説明して、私のところまで及ばないで決着がついたという話をあとで聞いたんです。それはさっき申し上げたように、たいへん絶大な権限。このときくらいでかい権限を持ったことはいないと思えましたよ。というのは、現局の局長さんが、私みたいな班長のために陳情にみえたりなんかするんですよ。

その山下なんかがよく言っていたのは、通産省というのは中国みたいところだ、と言うんですよ。戦争中は軍需省になって、軍人さんが来て上を抑えたと。戦後は外務省が来てやっているけど、そのうちに同化されて、いなくなるとまた通産省は無傷で残るんだという。そういうようなところだと言うんだけど(笑)。とにかくそういうことで、一時そういう絶大な権限をもっているにも関わらず、あんまり業界の人の話を聞かないというのでいろいろ評判が悪くてね。心を入れ替えて飯にも出るようになりまして、いろんな人の話を聞くようにしましたけども、どこまで飯食ってもいいかという限度がよく分からないんですよ。だから、むしろコンサバティブにしちゃって、そういうことで、これを利用して金儲けをやるうという気が少しでもあれば、もうべらぼうな金が儲かったと思うんです。

北岡 部下の方は捕まったわけですか。

宮崎 捕まったわけです。

北岡 無為替輸入の場合は闇で送金をしている。それはもちろん違法なわけですよ。

宮崎 もちろん違法です。

北岡 闇で送金して捕まる人は、ほとんどないですか。

宮崎 ないです。闇の送金のほうは別の玄人がいるでしょう。

北岡 それは滅多にあがらないものですか。

宮崎 それはだいたいアメリカ人と組んでいるわけですからね。

北岡 そうですよ。米兵と組んでやっているわけでしょう。そうすると、なかなかそれは上がらないでしょうね。

宮崎 上がらないわけでしょうね。

北岡 それでやっぱり、小金か大金か儲けたアメリカ人はいっぱいいたでしょうね。

宮崎 それは統制をやると、必ず裏があるわけですよ。だから、要するに当時の外貨割当も、キップを貰ったらそれを横流しすれば、何もしないで儲かるわけですよ。食えるわけですよ。だから、自分のところのキャパシティはいくらですと申告して、その分だけ外貨割当をもらって、それをどんどん増大しつつある別の会社のほうにそれを横流ししたら、その分だけ何もしないで儲かるわけでしょう。だから大変な、統制というものがいかに悪いかということがね。無為替輸入なんか、まさにそうですね。そんなにたくさんアメリカ人がタダで物をくれるはずがないんだってね。

北岡 そうすると、ずいぶんいっぱい来たわけですね。

伊藤 手法としては物動なんですね。割当とかキップとか。

宮崎 それはそうですね。つまり、当時いちばん不足していたのは外貨と、もうひとつはエネルギーなんです。エネルギーのほう、電力は割り当てである。それはないから物動にならざるをえないわけ。したがって、エネルギーのあれがあるから「傾斜生産」という言葉が出てきましたでしょう。「傾斜生産」というのは石炭、いちばん先に重点を置いて掘り出して、石炭を掘るために重油が要するというので、重油は特別に輸入している

い。石炭を掘って、石炭から日本経済の復興をスタートさせようという、その「傾斜生産」はまさにもうひとつのエネルギーなんですよね。その二つがえらい足りなかったわけですよ。だから、人間はたくさんいたわけですよ。

北岡 この年間二〇億の外貨というのは、どうやって作るんですか。つまり、輸出で稼いだ外貨は、一か所にまとめちゃうわけですか。

宮崎 そうそう。為替が集中しますからね。輸出した代金は全部集中しちゃう。自分で持ってられないんですね。そういう仕組みで、当時の外国為替は貿易管理法でがんじがらめになっているわけです。それはそうなんですけど、米兵やなんか売っている闇ドルはまた別というか統制外のやつで、そういうものが民間再開しぱらくしてから一ドル、公定レートで三六〇円でしたけども、それまではたくさんレートがあったわけですよ。複数レートが三六〇円になって、それでずいぶん長い間続いていたわけですが、その間に闇ドルは一ドル五〇〇円ぐらいだったと思います。いかに統制というのが歪みを生むかというのが、まったくそうやっていますと、つくづく感じました。

伊藤 その為替とか外貨の管理は、もともとGHQがやっていたわけですよ。

宮崎 いちばん初めはね。

伊藤 そのあと日本側に移りましたけれども。

宮崎 為替という、外国為替管理委員会というのが出来まして、それが管理することになっていったんです。

伊藤 だいたいこれはGHQの傀儡だと、よく言われていますが、

宮崎 いわゆるなんとかボード——委員会が出来て、それが行政あるいは公取委員会みたいな。はじめが外為委員会なんですよね。木内信胤なんていう人がその委員になっていて、その他に委員が四人ぐらいいたかな。あとで牛場さんが、外為の事務局長になっ

て復活するわけですよ。

ところが、外為事務局というのは手足がないわけです。したがって、その集中管理しているあれをどうやって使うかについては、通産省が実際、下請けしているわけですよ。結局は、その下請けが私だったわけですよ。だから、外国為替管理委員会というのが実際上もっている外貨で外貨予算を組んで、予算枠はたとえばおコメは何万トン何万ドルとか、鉄鉱石は、石炭はいくらと組むでしょう。それを割当切符にするのは私の仕事だったわけですよ。それは各現局が実際上割り当てていたわけですよ。相談して、割当企業を決めて、通産省の私みたいな通商局の事務官と当時の鉄鋼局とか繊維局とかいろいろありましたでしょう。あるいは食品については農林省ですよ。そういうのと打ち合わせして、割当基準が決まりましたね。その上で純鉄石の切符は鉄鋼会社には行ってたわけですよ。それから輸入割当の雑は直接私のところへくるわけですから。切符というのは行くことが決まったやつをサインするのが私の仕事で、サインをしてたわけです。だから、たくさん一度にサインをしなくちゃいけない。それが一日遅れると金利だけでも大変なことになるから、お正月の休みなんて、受け取るほうにとってみれば貰わないとえらい損をするということに。とにかくお正月早々から家まで押し掛けてこられて、往生したことがありますけどね。

だから、ああいう切符切りというのはよくないですね。それから切るほうもよほどしっかりした人が、しかも清廉潔白な人がやらなくちゃいけないから、それがいわゆる後進国というのはそういう人がいないわけですよ。だから、よく官僚は悪口を言われるんだけど、何も無いときに何も貰わずにやっていたわけですよ。ノウハウを知らなかったといえれば知らなかったんで（笑）。

北岡 このお仕事は大使のあと、ずっと外務省系の方がおやりになっていたんですか。

宮崎 いや、必ずしもそうでもありません。その仕事は当時は輸入一課というのがやったわけ。課が変わってきまして、編制替えになりましたね。

北岡 外国為替で貿易をコントロールするというのは戦前もあつたわけですけど、戦前はどこでやっていたんでしょうか。

宮崎 戦前は大蔵省ですね。皆様ご存じかな、なんとか有名な映画があるんですけど、マリールベルが出てくる、昔の恋人を訪ねて歩くという。

北岡 『舞踏会の手帳』ですね。

宮崎 『舞踏会の手帳』というのは、戦前に輸入された外国映画の最後なんですよね。それはなぜ輸入しなくなったかというところ、外国為替管理法でなつたわけですよ。

北岡 昭和何年ですか。

宮崎 何年かな。とにかく他の法律じゃなくて、為替管理法で輸入できなくなったんで、大蔵省の役人があれを見て、これだけはいいいいというので、最後にそれだけ別に(笑)、特例として入れたのが『舞踏会の手帳』だったんです。ですから、戦前、外国為替管理法というのが大変なきつい法律だったわけです。私は当時、学生だったんですけど、高等学校の頃かな。当時の娯楽のうちで、映画はたいへんなウエイトを占めていたわけです。殊に外国映画はね。フランス映画とかドイツ映画全盛時代にそれが輸入されなくなつたというので非常に嘆いて、それで外国為替管理法というのを覚えてるんです(笑)。

北岡 それは戦前は大蔵省で、戦後は通産省になつたわけですか。宮崎 戦後は本来は外国為替管理委員会なんですよね。ところが、それが手足がないものだから通産省が実質上はやっていたわけ。

北岡 それは戦前の場合でも、それは物動ですから。

伊藤 それは企画院が囁んでいたはずだと思いますけどね。

宮崎 かなりあとになってからはそうですね。

北岡 外国では貿易というのは、オーストラリアなんかは外務省にくっついてるわけですよ。

宮崎 カナダもそうですね。

北岡 だから、それは実際外務省から大勢いらつしたということ、この問題はどの省にいく可能性もいくつかあつたということですかね。

宮崎 ウーン、まあ……。

伊藤 戦前、通商局は……。

■外務省と通産省の発想の違い

宮崎 外務省に通商局というのがあつたんです。外務省通商局、商工省貿易局、大蔵省為替局の三つの局で連絡をとりあつてやっていたということのようですね。

伊藤 それは貿易省問題になるわけですね。

宮崎 そうです。貿易省問題になるわけです。

伊藤 戦後は、貿易庁、ですか。

宮崎 貿易庁が出来ましてね。貿易庁がいわゆる公団貿易をやっていたわけですよ。民貿再開のときに貿易庁と商工省が一緒になつて通産省が出来たわけです。その前は、要するに商工省というのは戦争中は軍需省になって、軍需省とごくわずか農商省というのがありまして、それが戦後、商工省になつて通産省になつたという経緯です。

伊藤 このときには通産省に行かれたということは、外務省から籍を離れたという意味なんですか。

宮崎 出向ですね。

伊藤 すると、何年か経ったら帰るぞ、ということなんですか。

宮崎 そうです。ですから、いわゆる片道切符じゃなくて往復切符ですよ。

伊藤 それがよく分からないんですが、どういう形で保証するわけですか。

宮崎 どういう形って分かりませんが、片道切符の場合、申し渡されてもいっちゃう人はいるわけですよ。だけど、出向というのには必ず帰ってくるという。

伊藤 そういう辞令を貰うわけですか。

宮崎 辞令はそうじゃないですけどね。「どこそこへ出向を命ず」という辞令をもらっていくんです。

伊藤 片道切符の場合も「出向を命ず」じゃないんですか。

宮崎 まあ、そうですね。しかし、片道切符というのはわりと少ないんです。

北岡 出向って普通、帰ってくるものですよ。

伊藤 普通はね。

宮崎 高橋進先生もそうです。東大から出向を命ぜられて在独大使館で私の部下になっていたわけですよ。それで二年間経ったらまた戻って、東大に帰っているわけです。

伊藤 外務省と通産省は違う……。

宮崎 それはずいぶん違います。

伊藤 何がどういふふうに違うんでしょうか。

宮崎 外務省というのは経済関係にしても何にしても発想法が、「わがほうは」というのは常に日本国なんですよ。日本国というのを考えてやらなくちゃいけないんだ。通産省の場合は、いちばんは、たとえばその業界の利益だとか産業だとか日本経済の利益でしょう。だから、考え方が違うといえは違うんですよ。ただ、通産省に行っている間は通産省のフレーム枠の中でやるものであるわけです。だから、昔外務省の人は、「国内官庁」という表現を使っただけです。大蔵省とか通産省、農林省というのは。自分たちは違うんだという意識がかなりあったわけですよ。だんだんなくなってきたらいるみたいですけどね。

それから、やっぱりお行儀が悪いですよ。戦争中、ゲートルをはいて執務していたんですけども、通産省は当時、会計検査院の建物の中にあつたわけです。寒くなると、そのへんの書類をひっぱがしてきて、みんなダルマストープに加えてね。もうもうと煙が出る。あれでよく通商白書が書けるなと思って（笑）。外務省のほうは少なくとも終戦後かなりごく最近までは、外交団と接触するからどうのこうので、ネクタイを付けてこいとか言われていました。

それから、たとえばオフィスの中でスリッパでパタパタ歩くなっていることは絶対ないでしょう、いまでも。ところが、それは普通ほかの省ではよくあるわけですよ。大学でもそうじゃないですか。

北岡 通産省もありますかね。以前、郵政省で「三流官庁と思われるからやめろ」というのが出たことがありますね（笑）。

宮崎 それぞれの気風が違うというか。他方、いわゆるノンキャリアの人は、通産省のほうは生き甲斐があるわけですよ。私が班長だとしても、班長はどうせしばらくしたら変わるわけでしょう。課長も変わる。ノンキャリアの人はずっとそこに残っているわけです。業界との接触とか顔はもうたいへんなものですよ。顔は効くしね。また、その人に聞かないとその業界のことは分からんという蓄積が出来るんですよ。汚職もできるわけですよ。外務省だとあんまりそういう人は出てこないわけですね。

伊藤 外務省だってノンキャリアはいるわけでしょう。

宮崎 もちろんいるわけです。たとえばロシア語の人とかスペイン語の人とかには、そういう人がかなりいますけどね。ノンキャリアの中では、スペイン語がいちばん恵まれているね。スペイン語ノンキャリアの人は大使になるチャンスがある。南米に国が多いですからね。ロシア語の人はまず大使になれないわけね、ひとつしかありませんから。

北岡 フランス語も危ないですね。

宮崎 フランス語はアフリカにたくさんある。ドイツ語もないですよね。

北岡 拝見していますと、調査局二課の時代は三年おられたわけですね。大使の場合は、二〇代の後半から経済エキスパートでいくというコースがここでもう出来ちゃっているわけですね。だからこの間のお話で、外務省もちゃんと人材を活用しているという気がしました(笑)。同じ頃、同じようにアメリカの経済を勉強しておられて、その経済畑で活躍された方はいらっしゃらないですか。

宮崎 松永〔信雄〕がそうですね。私の一年下のクラスです。それから、千葉〔一夫〕がそうですね。

股野 どちらも調査二課ですか。

北岡 このへんは経済を勉強されたんですね。三年間アメリカの経済の生の情報を読んでおられたということは、大変な勉強ですよ。当時の日本の中では最も先端的の。

伊藤 いわゆる事務はないわけですか。

宮崎 事務はあんまりないんですね。だから、雑務がなくて、研究所みたいなものですね。ただ、たとえば吉田首相なんかは、アメリカ経済がどうなっているかを毎日メモして知らせるか、そういう命令が来るから、たとえば株がどうなっているか、為替はどうなっているとか、大きなことがあったらメモして出すという仕事はあるわけです。だから、アメリカの経済政策の仕組みだとかそういうものはずいぶん、この間に充電させてもらったわけですね。

北岡 これは直接政策提言というふうなことにはならないわけですね。まだ独立してませんしね。

宮崎 直接ではないです。ただ、アメリカ経済がどうなっているかということとは常時、上のほうは関心があったわけですからね。そ

れで、当時の調査二課がいちばん権威があったわけですよ。ほかの省は情報がないんだし、民間のほうも情報は少ないわけでしょう。

北岡 そうしますと調査は何回もあったとすると、圧倒的に二課が重要なわけですね。人材配置もそういうふうな、ここが多いわけですか。

宮崎 多かったですね。調査局はあと、政務局になるわけですね。

北岡 私のメモだと、二十二年四月にこの調査五課制度になったと書いていますね。四月十五日ですから、大使がいらっしゃったのはわりあいすぐ後ですね。

宮崎 それで非常に怒られたわけですが、ソ連を裏切った、と。

北岡 曾野さんはともかく武内さんだつてアメリカになられたわけでしょう。

宮崎 曾野さんはおそらく、ロシアのエキスパートとして自分の後任みたいに育てようというつもりがあったわけでしょう。

股野 ロシア語も勉強されて。

宮崎 ロシア語も勉強したけど……。

股野 枢軸派の牛場さんがよくお名前が出てきますが、黄田さんはどういうお立場で。

宮崎 黄田さんは枢軸派じゃなかったわけですね。

股野 しかし戦後一時、外務省を辞められたんですか。

宮崎 いや、辞めてないです。

股野 外務省から出向して行かれた。

宮崎 通商局長をやつてね。終連というのは外務省自体と変わりにないと思つていいわけですね。

股野 平沢和重さんは？

宮崎 平沢さんが小川清四郎と並んで辞めさせられたほうの一人です。その二人が見せしめのためにクビになったわけですね。

僕は個人的に、平沢和重という人はずいぶん迷惑しちゃったけどね。三木武夫のブレインで、ロクなことをインプットしてないものね。

北岡 三木さんのブレインって変な人が多いですよ。

宮崎 国弘なんとかという人は通訳だったんですよ。それからやっぱり三木さんという人はそういう人だったんだけど、とにかく平沢さんはどうやってNHKに入ったか知らないけど、三木さんのブレインになっていて、あとで出てくると思いますけれども、ランブイエサミットに行くときに、まったく突拍子もない話を三木さんにインプットするんで、ずいぶん苦労したんです。直接本人とも話をしたんだけど、本人は全然分からないわけよ。そうすると、何を言うかと思っていると、テクノクラートから取り上げて政治家がやらなくちゃいけないって、そういう論文を書くわけです。自分で分からないものだから。年度から言うはずいぶん上だから直接関係はないんだけど。僕が外務省に入った頃の課長です。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第3回 —

開催日：1999年5月7日
14：00～16：00

開催場所：政策研究大学院大学
プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）
股野 景親（元駐スウェーデン大使）
井上 寿一（学習院大学法学部教授）
佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）
武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■サンフランシスコ総領事館での仕事

宮崎 まずサンフランシスコ総領事館のことなのですが、私は在外事務所員で発令になったわけです。向こうへ着いたら講和条約が発効したものですから（サンフランシスコ講和条約（一九五二年四月二十八日発効）、総領事館に切り替わったわけです）。

そのときの総領事は田中三男という方です。その下に西堀（正弘）さんという方がおられて、その後任で私は行ったんです。西堀さんの下にもう一人、私より二年上の小林（春尚）さんという人がいたわけです。小林さんは残ったんですが、地味な人です。その他に通産省から石丸さんという方が領事でみえています、その後任が中野さんという方で、いずれもだいたい先輩の人だったわけです。

それから、その間に官補さんが一人と、会計や秘書もやる田島さんという女性のベテランの方が一人。現地職員として男性が二人。そのうちの一人は、あとでジャーナリストになって、東京特派員でならしたケン（ケネス？）石井という人。男性はそのほかにベテランのビザの係をやっていた人ともう一人で三人。女性がタイピストみたいなことをやっている人が二人ぐらいで、当時としてはかなり大きな規模だったわけです。

どのような仕事かということですが、私は経済関係をやることになりました、したがって、初めは石丸さん、のちには中野さんと分担してやっていたわけです。

けっこういろいろなことがあったんです。当時は、日本から商社の駐在員という方が何人かいたわけですが、銀行はなかったわけです。最初に住友銀行——のちに加州住友を作ったわけですが、それに続いて東京銀行でしたが、そういう人が開設準備のためにみえましてね。結局、彼らもまるっきりとっかかりがないものから、われわれがもっている当時の在留邦人——サンフランシ

スコ（市）だけじゃなくてサンフランシスコ総領事館管内の各地域の在留邦人のリストを見せてくれと言って総領事館にやってきまして、それを見せたりしました。のちに加州住友、加州東銀とこのが出来ることになったわけです。私が立ち去ったあとでですけどね。

その他、いわゆる国交が回復したのは私が就いた直後ですから、その間の空白があるので実にいろいろなインクワイアリーが来るわけです。それを整理するだけでも大変な時間がかかってしまっ、大きなことではないんだけど、タイムコンシューミングではあったわけです。

北岡 たとえばどんなような……？

宮崎 たとえば、「何とかを買いたいけども誰に言ったらいいか」とか、「売りたいけど、どうか」とか、「こういうものはあるか」とかね。

北岡 それは日本から？

宮崎 いやいや、在米の米国人からです。

北岡 日本のこういうものを買いたい、とか。

宮崎 買いたいとか売りたいと。誰に言ったらいいかという紹介です。コマール・インクワイアリーと言いますが、そういうのがたくさん来たわけです。

北岡 それは宮崎大使がコマールな方面を担当していらっしやるから……。

宮崎 そうそう、そういうことです。

北岡 他のポリテイカルなインクワイアリーは、よその方に……。

宮崎 うん。あとは文化広報関係ですね。ポリテイカルのほうはあまり総領事館には当時は来なかったわけですけどね。

北岡 それも通産省等でおやりになっていた仕事が非常に活きてくるわけですか。

宮崎 そうですね。ところが、通産省でやった仕事というのは、

この前お話ししたように、位人臣を究めたかと思われるくらい権限が大きかったけれどね(笑)。扱っている企業がとにかく十何億ドルでしょう。それとか、サンフランシスコだとごくチマチマした貿易の話ですから、忙しいけれども、仕事の量は多いけども、中身は本当に雑務だったわけですよ。

サンフランシスコについての印象は、とにかく素晴らしいところだと思いましたよ。戦争で全部焼けちゃって、東京も焼け野が原で何もないうときでしょう。もちろん日本人は、ほとんどの人は外国に行けないわけですよ。サンフランシスコに行ったら、町は整然としているし綺麗だし、あらゆるものが裕福ですしね。テレビなんて、日本には当時なかったわけです。向こうはテレビもありましたしね。

非常に驚いたことはたくさんあるんですけど、一、二例を挙げますと、日本では銀行に行ってお金を下ろす時に、昔は預金通帳を持って行って判子を押して、お金を受け取るまでずいぶん時間がかかったでしょう。アメリカの場合は小切手を持って、たとえば五〇ドルとか一〇〇ドルと書いてサインして窓口に出しますと、残高をチェックするわけでもないしサインをチェックするわけでもなく、すぐその場でお金をくれるんですよ。これはまったく人を信用しているわけですね。というか、そこで逆に何か悪いことをすれば、その人は全部ブラックリストに載っちゃって、口座も開けないし、いろんな不利があるんでしょうけども、私は初めての経験で、これは素晴らしいな、日本とはずいぶん違うなと思っただけです。

それから、たとえばデパートにモノを注文するでしょう。配達してもらいますよね。日本だと、いまでもそうだけど配達員が来て、認めかなんかを押していくでしょう。ところが配達員が、門はないですから玄関の前の、道路と玄関の間みたいなところにポストと置いていっちゃうわけです(笑)。それで何も間違いが

ない。不思議に思って、あとで人に「どうしてそういうことが出来るのか」って聞いたたら、たまには事故がある、というんですよね。だけでも、その事故があったらどうするかというのと、「届かない」と言ったら電話がかかってくると、まったく同じものを届けるんだそうですよ。そのほうがいろいろチェックして調べたりするよりも余程安いというんですね。だから、悪いやつがいれば「届かない」と言ったら二重に受け取れるかもしれないんだけど、そんなやつはほとんどいないんでしょうね。いわゆるゴールドデ・ファイフティーズという時代ですが、素晴らしいと思いました。アメリカ人の日本人に対する感情というのは、一口に言って非常に良かったわけです。一般のアメリカ人のね。私の同僚は交通違反をやったら、おまわりさんが「イン・ヴィュー・オブ・ザ・フレンドリー・リレイションズ・ビトゥイン・ジャパン・アンド・ユナイテッドステイツ」といって放免してくれた(笑)。ただ、私の近辺にそういう知り合いもいないんですけど、人の話だと、結婚とか、そこまでいなくても家を借りるということについては非常に制限があったわけです。

サンフランシスコには、ダウンタウンの一角に日本人街があったわけです。それが戦争中のコンセントレイション・キャンプに移されたでしょう。そのあとに黒人が入ってきたわけです。日本人が戦争後、戻ってきたら、日本人街は黒人街になっていたわけです。それをポツポツと黒人からまた買い取ったのか借りたのか知りませんが、日本人がそこに入って同居していたわけです。われわれ総領事館の人間は、「そこに住むことはよろしくない」ということを上の人に言われましてね。というのは、これはアメリカに限らずヨーロッパもそうですし、場合によっては日本もそうかもしれないけれども、たとえば何かのときに住所を出しますでしょう。その住所の地区でもって、この人はどれくらいの上流か中流か下層かと、住所だけで分かるくらい多いので

すね。したがって、サンフランシスコでも日本人、われわれ総領事館の人は、要するに白人しか住まないクォーターに家を借りるということに務めたわけですね。

私は幸いにして、西堀さんが三十数件探してようやく見つかったという家をそっくりそのまま譲ってもらったので何の苦労もなかったんだけど、非常にいいクォーターの瀟洒な建物だったんです。西堀さんとかそのぐらいの方は、もう大変な苦労をしたわけです。

その他、こういう話が参考になるか分かりませんが、サンフランシスコ総領事の田中三男さんが、いろんな意味で有名な方なんです。たまたまサンフランシスコに、戦争中からでしょうね、ずっと住みついていた蜂須賀侯爵夫人なる女性がおりまして、それがサンフランシスコの名門のミセス・ディッキーという人の家に、どういう資格か知りませんがいたわけなんです。そのミセス・ディッキーというのは、サンフランシスコの社交界の顔役だったらしいんです。戦後初めて総領事が来たというので、蜂須賀侯爵夫人がミセス・ディッキーに頼んで、日本の田中総領事を社交界の晩餐会に招待することになったんだそうです。

ところが、どういう行き違いか、田中総領事は「出席しない」と言っただけで、おまえが行って来い。荒立てないように断ってこい」というわけで、二回ぐらい会いましたかな。とにかく総領事が「行かん」と言っているんだから、しようがないわけですよ。

ところが、それが東京にどういう経路かで伝わって、当時、東京で吉田ワンマン〔茂〕の娘、麻生和子夫人が怒って、外務省に來たらしいんです（笑）。次官から半公電みたいので何か言ってきたわけです。どうするのかなと思ったら、田中総領事はそれでも行かないと言って。ただその代わり、奥村〔勝蔵〕次官はもとより麻生和子さんとか吉田ワンマンとか、いろんな人にボンボン

手紙を書くんですよ。たくさん手紙を書いて、その経緯を説明していたようです。私は知らないんですけどね。

田中さんのやり方にはびっくりしたと同時に、社交界なるものリストを見せてもらったんですね。「ザ・ソサイエティ」って書いてあるんです。名門だと思われる人が四、五十人並んでいるんですよ。いま経済界で活躍しているような人じゃなくて、昔からいわく因縁のある家系なんでしょうね。ずっと書いてあるんです。子供が生まれたらその名前も書いてね。小冊子みたいなものを見せてもらった。いかにそこに招待されることが光栄であるかということ、蜂須賀夫人からえらい聞かされたんだけど、総領事は頑として聞かないと頑張っちゃって、そういうことがあったのが印象に残っているわけです。

結局、それについては総領事が叱責を受けるということにはなかったようですけど、とにかく次官から電報まで来たんです。「早速、ディッキー夫人の飯かなんかでゴタゴタしているようだが、なんとかやれ」とかいう趣旨の電報が届いた（笑）。そういうのは非常にびっくりしたという。

ついでに、ニューヨークで股野さんが仕えたという田中総領事は、外務省の中で非常に有名な方ですね。いま息子がいるでしょう。

股野 はい。どこかの大使をしていましたね。中南米か。

宮崎 チリか何かの大使を最後に、田中総領事自身は亡くなったわけですけど。

股野 トルコです。チリに行かれて、最後はトルコに。

宮崎 その方について、毀誉褒貶が非常にたくさんあるわけですよ。多数の人は「毀」なんです。まず「金に汚い」とか「ケチ」だとかいうところから始まって、いろいろあるわけですよ。

西堀先輩が「非常に恥ずかしかった」と言っていたのは、当時は人をオフィスに訪ねるときに、たとえばこのビルの二階にオフィスがあって、この七階に先生を訪ねるとします。すると、

エレベーターが二階から七階まで上がって来るわけでしょう。そのときも必ず帽子をかぶってなくちゃいけないんです。ソフトです。帽子をかぶっていないのはジェントルマンじゃないわけですね。その帽子をかぶってきて、七階の入口のハットチェックに預けるわけですよ。帽子はいくらかということを書いているんですよ、なんとかフィフティーンとかトゥエンティとか。一五ドルとかなんとかというのを書いてあるからすぐ分かるわけです。したがって、帽子は高いのを買えといって、泣く泣く高いのを買わされた(笑)。とにかくハットチェックに預けてチップを渡すでしょう。それが私もう言われて、当時としては高いんですが二五セント出したわけですよ。ところが、田中総領事は一〇セントしか渡さなかった。それを西堀さんが見ていて、「これほど恥ずかしいことはなかった」ということがあったんです。

他方、非常に感心したのは、たまたま公邸の家主と契約期間が切れるとか何かで若干ゴタゴタがあって、交渉事があったわけですよ。これも私が行かされて、その家主といろいろ交渉しましたね。契約その他から見ても、どう考えても家主の言い分の方が通っているようにみえたんですよ。それで、そういうことを素直に言ったら、自分で出掛けて行って結局通しちゃったわけですよ。だから、日本の外交交渉でも、日本の主張の根拠があまりない場合もあるわけですよ。そのときに堂々と頑張るってやるといって、これはもう外務省に滅多にいない(笑)。

北岡 それは「毀」が多いでしょうね。

宮崎 本当に大変な能力だと思います。韓国との交渉なんかをずいぶんやって、そのときはなるほどと思って、ああいう人だから出来るんだなと思ったんだけど(笑)。そういう意味では能力はある人だと思いましたけどね。

それからもうひとつは、自分の持っているコネクションね。社交界の出席の件に、そのあとに書いている手紙ね。すごくいろん

な人に書いたり、葉巻を送ったり、おそらく吉田ワンマンのところまで行ったんじゃないかな。片方では、麻生和子さんの御機嫌を損ねても、一度言ったことはがんばって出ないということと、そのあとの事後措置に感心したわけですよ。股野さんは違う印象を持っているかもしれないけど。

股野 田中総領事がニューヨーク総領事を離任してチリ大使になられるときに、『ニューヨークタイムズ』が「グッバイ・ミスター・タナカ」というタイトルの社説を書いたんです。これは異例のことで、賛辞なんです。田中総領事は、立派な日米友好のための功績を残されたという。

北岡 何年ですか。

股野 これは一九六一年でしようか。六〇年が日米修好ちょうど一〇〇年になって、いまの両陛下が皇太子と妃殿下として訪米された年に日米修好の記念行事をたくさんしまして、歌舞伎もニューヨークで公演をした。そういうことにたいへん尽力された。それがやっぱり評価されて、日米協会会長のロックフェラーさんともたいへん親しくしておられた。象徴的なのが『ニューヨークタイムズ』の社説ですね。

宮崎 とにかく周りの人にはあんまりいい感じを与えないんだけど、外に対して打つ手はもうちゃんと打っている。あれは「ドーナツ現象」というんです(笑)。

北岡 周りはたまったものじゃないですね。

■当時のサンフランシスコ周辺の日系人

宮崎 側近はダメなんです(笑)。ついでに、田中総領事の下にいたときに、当時の新木(栄吉)大使が管内視察かなんか知らないけど、とにかく見えましてね。サンフランシスコでレセプションをやっているときにコラップスしちゃったわけですよ。われわれ

はとにかく医者だなんだと大騒ぎしてやっていたら、すぐそれが外電に流れて、東京から問い合わせの電報が来たりなんかして。そのときにコラップスの状況をどのように書くのかと思ったら、田中総領事が自ら筆を取って、「新木大使は軽いストロークで倒れた」という電報を打ったのを覚えているんです。「ストローク」というのはよく分らないんだけど、そういう経緯があったんです。ああいうのは、電報の書き方でえらいことになっちゃうんですよね。「軽いストローク」というのは、私はそのとき覚えてたわけです。

それからサンフランシスコの日系人は、さっき言いましたように、いわゆる戦争中の強制移住から帰ってきてポツポツ落ちついてきたというところで、農村地域ではけっこう財をなしている人がいたわけです。

サンフランシスコの総領事館は、管轄地域がカリフォルニアの北のほうだけではなくて、ネバダとかコロラドまで持っているわけですね。それでカリフォルニアのいろいろな町に日系人がいるわけですが、そういうところに総領事のお供で訪問したわけです。そこで成功している人は、たとえば花の栽培をして売っている農家なんですよ。

それがものすごくかかると、車が十何台か何十台か止まっています。それが「あれは何だ」と言ったら、「従業員が車に乗ってきて花を栽培するのを手伝っている。その従業員の車だ」と言うんですね。日本は焼け野原で何もありません。ジーブなんて走っている時期ですからね。それが、何十人の従業員が車で通ってくる、そのオーナーが日系人であるということもあつたし。

それから、別のところで農園を見せてもらったときに車で案内してくれるんですけど、田んぼだという印象があまりなかったんです。雑草が生えているみたいなき感じ。二台自動車がすれ違うぐらいの普通の道を走っていたら、これが畦道だと言うんですね。

雑草が生えているみたいのが田んぼで、飛行機で種を蒔いてコンバインで取るわけですから、日本とはまるきり規模が違うなという感じがしたんです。

総領事の公用車がリンカーンだったんですが、何かの都合で、新車だったんですが、私の私用車がプリムスで総領事のお供をして僕が運転していったことがあるんです。日系人の集まる場所に行ったら、キャデラックばかりずっと並んでいるんですね。日系人はみんなキャデラックで、総領事が館員のプリムスで来た(笑)。

そういうふうには、いわゆる都市外ではすでにかなり回復していた人もいるし、都市の中でも、たとえば大学の講師だとかいろいろ、かなり成功した人がいまして、それぞれの何とか会の幹部をやっているわけです。

前にも話したかもしれませんが、たとえばえらい大きな洗濯屋、つまり白洋舎みたいな洗濯屋ね。サンフランシスコで一、二の工場式をやっている人だとか、リアルエステイトブローカー。要するに不動産のブローカーです。これも日本の私鉄の駅前に六畳何円と書いてある、あれを想像されると大間違いで、とにかく非常に大金持ちの邸宅の売買を斡旋するわけですから、ザ・ソサイエティじゃないけど上流階級の信用がないとできない商売なんですよ。そういうことをやってきたとかいるんな人がいて。ところが、日系人のグループがいくつかに分かれていて、違うグループが出来ているわけです。日米会とか加州仏教会とか何とか会とかいうのが出来て、それぞれ違う人が幹部になっておつた。

したがって、総領事館の課員は珍しいものでよくちよくお呼びがかかるんですけど、上の人から注意されて、ひとつに出ると他のものにも出なくちゃいけないということ……。その他にたとえば岡山県人会とか何とか県人会とかあるわけでしょう。たまにたま東京で知り合いから紹介を受けた人が日米会の会長だった人

で、飯に呼ばれたんですね。それに会ったから、それに相当する他の団体の飯にも出なくちゃいかんということで、県人会は行かなかったですけど、そういうことがあったわけですよ。

日本語の新聞が二つありましてね。『北米時事』と『加州毎日』かな、そんなような新聞があって、日本語で印刷してあるんですよ。一面だけ二世のために英語で書いてある。それは日系人の人が読んでるわけですよ。それこそ記事が少ないものだから、総領事館のほうにもずいぶんいろいろなアプローチがあって、いろいろなことがあったんです。だいたいまえに、『北米時事』だったか何かの方が亡くなったとかいうのを見ましたけどね。と同時に、その編集長かなんかが毎日と朝日の通信員をやっていたんです。だんだんと日系人が日本語を読む人が少なくなって、なくなりましたよ。

北岡 サンフランシスコにいらっしゃったときは船ですか。
宮崎 いえ、飛行機です。

北岡 直通ですか。途中でウエイクとか、ハワイですか。
宮崎 そうそう。いわゆる戦争中に、われわれが爆撃を受けて覚えてるB29を改造したボーイング・ストラスクルーザーという飛行機があるんです。金魚みたいにおなかが出っ張っていて、下がバーのラウンジになっていて。当時は、一等も二等もないんですよ。ストラスクルーザーに乗って、まずウエイク島に行ってウエイク島というのは何もありません。本当に何もありません。そこで給油して、それから今度はホノルルに行つて。

北岡 泊まるんですか。それとも給油だけですか。

宮崎 給油だけです。ホノルルではもちろん下りる人もいましたし乗る人もいたんですが、ウエイク島は止まるだけです。あそこは下りてもしょうがないでしたし、乗る人もいないし。

北岡 下りて給油して、そのまま……。

宮崎 ホノルルへ行って、それでサンフランシスコに行くわけ

です。その飛行機が時間通りなのかもしれないけど、日本から来るのが朝の五時か六時くらいに着くんですよ。日本から偉い人が来たとき、そこへ迎えに行かなくちゃいけないでしょう。それが辛かったですな(笑)。

北岡 向こうで家賃とかお手当とか、かなり窮屈だったですか。
宮崎 私が出掛けたときは、在外事務所のときの発令でしょう。だから、総領事館になってから少し良くなったらしいんですけどね。第一、在外事務所のと看で損したのは、子供がいたんですけど。総領事館になってから、子供がいる者の場合にはお手伝いさんを連れて行って、その旅費を出してくれるということがあったんです。私のときは出ないわけですよ。行事がさかんにあるものですから、ベビーシッターを雇わなくちゃいかん。家賃はわりとリーズナブルだったですよ。前任者がさんざん探したもので、わりとリーズナブルだったんだけど、ベビーシッターとか生活はけっこう窮屈で、だけでも上司から、戦後最初の日本から来たんだからというので、帽子は一五ドル以上とか、安物屋に入っちゃいかん、とかね。たとえばシアーズ・ローバックみたいなところというところはやめて、買い物をするならここに行けとかね。そうすると、あそこへ行ったら安いのが分かっているも行けないとかね(笑)。

北岡 いまでもお手伝いさんを連れていくと、お金を出してくれらるんですか。

股野 あります。

宮崎 旅費をね。

北岡 旅費だけですか。

宮崎 向こうでの手当は本人が出すわけですよ。でも、旅費だけ出してもらえると、ずいぶん違うわけですよ。

北岡 なるほどね。いまでも社交界みたいのはあるんですか。

宮崎 よく分からない。だいたいそこに入り損なつたわけですか

らね(笑)。あるかどうか知りません。ただ、サンフランシスコという町は、アメリカの中ではボストンやなんかと並ぶか、それに次ぐぐらいの古い町なんですね。それで私の記憶ではやたらにブラックタイとタキシードというのか、あるいはスモーキングと
いうのか、英語流と米語流で違うんだけど、のディナーが多かったです。ところが、ほかのアメリカの町はそういうのが少なかつたと聞いています。

北岡 大使は、向こうに行ってから車の運転を習われた……？

宮崎 日本で当時、教習所なんてなかったわけですよ。ところが通産省にいたもので、自動車課から日産だったかトヨタだか頼み込んで、多摩川の原っぱで車の運転をやることはやって。

北岡 やっぱりアメリカへ行く準備として。

宮崎 はい。向こうへ行ってからテストを受けてライセンスを取ったわけです。ちょうど二番目の子供が生まれかかっていたものだから家内を置いていったんだけど、向こうの交通規則を送って、これを読んでおけと言ったら、お産の直後で目が悪くてとても読むどころじゃないとか言って(笑)。しかし、当時は日本で車なんてなかったわけですから、それを向こうへ行って車を、とにかくローンで借りてドライブするというのは、たいへん嬉しかったといえは嬉しかったわけです。

北岡 現地で日系人でコンセントレイションに入れられた人は、敗戦後すぐに釈放されているわけですか。

宮崎 敗戦後すぐかどうか、とにかくわりと早い時期です。

北岡 やっぱり彼らが昔持っていた財産とか取られて、いろいろ争いとかあったんでしょうね。

宮崎 規制はあったようですね。日本は敵国ですから、ずっとあとまで、いわゆる敵産管理といっているんなことが。日本の持っている、たとえば商標権から何から取られていましたから、それにまつわるいろんなことがあったようですね。

北岡 そういうトラブルには関係は……。

宮崎 関係はなかったんです。サンフランシスコではね。ワシントンでは若干関係がありましたけど。

北岡 なるほどね。日系人同士の間の、さっきは「競争」と、やっぱりいろいろトラブルもあったんですね。

宮崎 そうですね。殊にその当時、日本から来た商社の人が駐在していたわけですよ。商社の人は商社のグループを作ったわけですね。何という名前だか忘れちゃったけど。そのグループに日系人も入れたり若干入っていたりいろいろなことがあったんだけど、当時、商社のほうはダウントウンというのか、いわゆる銀行なんかの多いサンフランシスコのメインのところにおフィスを借りてやって、これをダウントウン組とって、日系人のほうは旧日本人街——アップタウンなんですけど、ダウントウンとアップタウンは仲が悪くて、いろいろと困ったことはありません。

北岡 戦前は領事とか総領事がトップにいて、あとは郵船とか朝銀とか物産というのがいて、ある種秩序があったらしいんですが、それがやっぱりすっかり変わって、またある種それが戻ってくる中でいろいろなトラブルがあったようですね。

もうひとつお聞きしたいのは、最初のトリビアルな小さなビジネスがいっぱいあったといいましたが、そうすると、大使のほうからいろいろ商売の道筋をつけるというよりは、いっぱいこれ売りたい、これを買いたいとか、あっちから来るわけですか。

宮崎 そうです。コマースヤル・インクワイアリーといまして、たくさん手紙が来るわけです。ところが、向こうの習慣で、来た手紙に返事をしないということは大変な失礼なことなんですよね。

北岡 大変ですね、全部(笑)。

宮崎 だから、それに答えなくちゃいけないのがけっこう面倒臭かったですよ。

そのほかに当時いろいろなことがあって、たとえば日本がアメ

リカから大麦をたくさん輸入していたわけです。日本は大麦を押し麦というのにして、お米に混ぜて食べていたわけ。とにかくわれわれの記憶でも、お米に押し麦——大麦を混ぜていたものを食べていたことがあったんです。ところが、大麦を押し麦にした場合、ある品種のものは黒く、ある品種のものは白くなるんです。日本の食糧庁は、黒くなるのじゃなくて白くなるものだけ買いたいと言う。アメリカのグレンエレベーターなんかでは、黒くなるうと白くなるうと区別して保管してないわけですよ。それを、ぜひ白くなるやつだけよこせて交渉に行ったわけです。そうしたら、大麦というのは向こうはエサなんですよね。ブタは白くても黒くても文句を言わない、と(笑)。しかし、それはこっち側は大得意なんだから承知せいで交渉にいったって、やっとやってもらったことがあります。

そういった話は時々あるわけですが、その他いろいろ、たとえばストクトンという町がありましてね。川の港なんですけど、日本向けの鉄鉱石とお米の輸出のために、港湾施設にえらい資本投下したわけです。

北岡 戦前ですか。

宮崎 いや、私が行っている頃。ところが、日本はお米をいつからか買わなくなった。買う量が減ったのと、鉄鉱石も別のところ、ブラジルだかどこから買って、あまり買わなくなったわけです。そうすると、ストクトンの町にすれば、川の港ですけど、それだけ港湾施設を作ったにも関わらず、日本が急に買わなくなったんで困るという話があって、それにまた行かされて。要するに「何でも屋」。つまり、文化以外はなんでもやっていたという感じで(笑)。というのは、亡くなった先輩のことを云々しちゃういけないんだけど、私の上にもう一人、二年上に小林「春尚」という人がいたんですけど、その人が田中さんと合わなくて、何も彼のところに持っていかないわけです。なんでもかんでも私のところに田

中総領事を持ってきたものだから、このようなことがあったんです(笑)。

北岡 西海岸の総領事館は、ロスにもあるわけですか。

宮崎 ロスにもあります。

北岡 シアトルにも。

宮崎 シアトルとポートランド〔オレゴン州〕にもあります。

北岡 四つほぼ同じ時期に。

宮崎 そうですね。カナダではバンクーバーにもありました。

北岡 じゃあ、それぞれがわりあい東のほうまで担当するというかっこうだったわけですね。

宮崎 そうです。だから、サンフランシスコの場合は、ネバダとコロラドまで。

北岡 そこから向こうはシカゴということですか。

宮崎 当時シカゴだったかどこだか、どこが担当か知りませんが。コロラドといってもずいぶん先ですからね。

北岡 あの当時ですよ(笑)。ときどきお出かけになりましたか？

■対米輸出に関連した問題——ワシントンで

宮崎 総領事というのは、各州知事を表敬するわけです。ネバダの州知事表敬にはついて行きました。それで、ネバダというところラスベガスとかでリノということをお思いになるでしょうけど、ネバダの州都はどこかご存じですか。まずご存じの方はいないと思うんですけど、知らないでしょう。カーソンシティという、当時人口六、七千の街なんです。リノのすぐそばです。それで州知事に挨拶に行ったら、帰りに一緒に出てきたら、州知事を街行く人はみんな知っているわけですよ。そこは何もないところで、リノに泊まったわけです。

リノというのはラスベガスはすぐ近くにあったんだけど、いまみたいに大きくはないが、けっこう博打場が並んでいました。そこへ行ってカジノで、どうやっていいか分からなくて、最初の晩に僕はみんなすっちゃったわけです。ところが、車の故障で一晩泊まるのが二晩になっちゃったわけです。二晩目はすっからかんで、カジノみたいなところにも本当に処置なしですよ。ところが田中総領事は、徹夜してやっていてけっこう儲けているんですね。やっぱり奥さんが一緒に、奥さんが「うちの主人はどこに行っただんでしょね。探してきてくれませんか」と朝になって頼まれて行ったら、まだやっていて、けっこう儲けた。そのくらいタフなんです(笑)。

ワシントンでは、経済班に私は属してたわけです。その当時のワシントン大使館といいますと、トップが新木栄吉大使で、その下に公使が三人いたわけです。上村、武内〔龍次〕、大蔵省から行っている渡辺、三公使がいました。参事官はたくさんいたわけだけど、経済担当の参事官が井上尚一という通産省の局長をやった人。私が通産省に出向している頃に局長をやっていた、あとで特許庁の長官かなんかをやった人です。その下に書記官が四人いました。いちばんシニアの書記官は松村さんという方で、通産省からみえた一等書記官。この人は経済企画庁の次官か何かにあとでなつた人だと思います。そのほかに、外務省の書記官が沢木〔正男〕さん。それと私。その他に、運輸省から沢〔勇次〕さんという、ロッキード事件でひっかかった、全日空の専務をやっていた人。その四人が書記官で井上さんの下にいて、その井上さんの上には武内龍次さんがいたわけです。当時は局長をやった人みんな参事官で来ていて、つまり外のほうが非常にトップヘビーになっていたわけです。

当時の私の仕事は日本の対米輸出、沢木書記官が日本への輸入、松村書記官が総務、沢木書記官が運輸ということで、分担はしてい

たわけです。ところが、輸入のほうがそれこそ小麦とか大麦とか、コメとか鉄鉱石とか、数量・金額とも大きいわけです。ところが、輸出のほうが、本当にこまごましたものがたくさんあるわけです。したがって、やたらにこまごました問題があるんですね。

といっても、具体例を挙げないとピンとこられないと思いますから、敢えて具体例を挙げますと、たとえば当時、日本からアメリカへの輸出について出てきてきた問題は、ワンダラーブラウスというのが当時の新聞なんかに出ていたんだけど、九九セントでブラウスを売っておったというので騒がれたことがあるんです。それから、女性の巻く絹のスカーフ。非常に薄いスカーフを安く出していたわけです。それは火がつくと何秒以内に燃えちゃう、危険であるというので、そういうものの輸入を止めるという可燃性織物法案という法案が出されたりなんかしまして、その法案が通ると困るということいろいろとゴタゴタしたが結局通ったんです。だから、それに対しては、スカーフの厚みを厚くして、何秒以内に燃えないようなものを出す以外なくなって、そうすると高くなるわけです。かなり打撃だったと思います。

それからたとえば、まったく脈絡なくいいますと、日本から対米輸出の繊維のほかに水産物が出ていたわけです。イワシの缶詰なんかが出ていたわけです。ところが、イワシの中にウルメイワシが入っておると。ウルメイワシはイワシにあらずということで、レットルと中身が違うと、当時のフード・アンド・ドラッグ・アドミニストレーションというところからの指令で、何万ケースか通関できなかったわけ。当時の商社としてはたいへんなことで、日本でウルメイワシはイワシとして扱っている。ところが、ウルメイワシはイワシにあらずというので、日本の魚類学のなんとかいう先生まで来てもらったんだけど、やっぱり分類上そうなんだそうですね。ウルメイワシは魚類学上、イワシ科じゃなくて何か科に属するらしいんですよ。それで、これもずいぶんすったも

んだして交渉したけど、ダメでね。結局その商社はアメリカでひっかかっていたものをキューバかなんかに持って行って売り飛ばさざるをえなかったという、これは失敗例なんですけど、ずいぶん何回も足を運んで結局だめだった。

あるいは、さっきも話が出たけど、戦争中に日本のいろんな資産が、敵産管理で押さえられていたわけです。その中で、たとえば商標権なんかも押さえられていたわけです。たとえば三菱のスリーダイヤとか、あるいはわりと有名な、野崎産業かなんかの芸者印という缶詰が当時は輸入が多かったです。その芸者印の缶詰の商標を取り返してくれというわけで交渉に行っただけ。これは結局取り返して。私はその当時の交渉を、こまごましたものがたくさんあったわけです。国務省ではとても間に合わないわけです。ですから、それぞれの省に国務省に一応話は通して、そこから紹介してもらっているんな省に出掛けて交渉したという、そういうことがずいぶん多かったわけです。

北岡 さっきのワンダラーブラウスって、当時、普通の向こうのブラウスでいくらくらいだったんですか。

宮崎 おそらく五倍か一〇倍くらいじゃなかったんですかね。

北岡 ワンダラーブラウスの主たる問題はダンピングということか、安すぎると。

宮崎 安すぎるということです。ダンピングというのは、アメリカのダンピング法というのはダンピングの定義があるわけです。それから、ガット「関税貿易一般協定」のダンピングにも定義があるわけです。それに該当したものしかダンピングと言わないんですね。ところが、ワンダラーブラウスはダンピングじゃないんです。ダンピングというのは、要するに国内価格を下回って輸出価格だけを下げている。その他いろいろな条件がありますけどね。当時、日本の国内でも、ワンダラーブラウスで売っていたわけですから、ダンピングではない、ただ安すぎるということで、アメ

リカの国内産業に害があるということで問題になったわけですね。可燃性織物法もアメリカのスカーフ業界の圧力で成立したわけですね。

それと同じように陶磁器がありました。ノリタケみたいなディナーセットみたいなやつが安いというので、これは私が関税委員会の公聴会かなんかに、弁護士さんとかいろいろ証人と一緒に行って傍聴したりしてずいぶんやって。たとえば、これは安いけど質が違うんだとか、アメリカのディナーセットとここが違うんだとか盛んにやっただけで、結局ダメだったんです。関税が上がっちゃったのかな。

そういったように、日本の対米輸出でチョビチョビしたものがだんだん出てくるにしたがって、一般的な対日空気が非常に良かったにも関わらず、向こうと直接競合関係にある個々の業界からはいろんな排除する動きがあって、それが議会に行って、議員さんにもずいぶんそういう陳情が行ったりして、議員さんにも会いに行ったりしていました。

北岡 主としていらっしゃるところは、商務省とかそういうところ。議会や議員さんにもいろいろ説明にいらっしゃった……。向こうの法的根拠でいいますと、ガットやなんかの言うダンピングではなくても、業界をきわめて攪乱するような価格のものは法的根拠になるわけです。

宮崎 当時のアメリカダンピング法の規定とガットの規定がどういうふうになっているかちょっと忘れちゃったけど、少し食い違っていたわけですね。それがけしからんといって、日本は大いに頑張っていた時期があります。いまも違うようですね。

北岡 そうですね。アメリカではダンピング扱いにして排除する、あるいは懲罰的というか関税を上げる……。

宮崎 関税をかけるわけですね。いろいろな手順で関税を引き上げたり、単独法で輸入を抑えたりしたわけですね。ダンピング税

をかけるというのは別の手続きです。それがガット違反であるというところで、いまはWTOですけど問題があって、アメリカも少し態度を改める、国際的なルールにしたがうような方向に行くやに見えますけどね。カウンタートヴィーリング・デューティーズというのは、相殺関税というんですよね。これもガットにきちんとした定義がありますからね。ソーシャルダンピングというのは、また別の概念です。

北岡 でも、当時のアメリカは世界で一番物価が高いでしょうから、当時のアメリカから見れば、たいていの国のものはかなり安いわけでしょうね(笑)。だから、日本以外のいろんな国にもそういう事件があったんでしょうね。

宮崎 あったんでしょうね。ただ、日本は戦後の復興過程ですから、賃金は安いし、もともと技術水準はけっこう高かったわけですから、急にモノをつくり出してジャンジャカ輸出してきたので、特に目立ったということはあると思います。

北岡 さっきのスカートも、大使がご覧になると、ちょっと言い掛かりという感じですね。

宮崎 そういう感じですよ。だって、スカートに火をつけて燃やして何秒以内に燃えちゃうから危険だということで輸入を止めるというのは、ちょっと(笑)。

北岡 言いがかりですよ(笑)。

宮崎 しかし、それは議会で通っちゃったわけですよ(笑)。私の説得力がなかったせいかもしれませんけどね(笑)。

北岡 いやいや、それは難しいと思います。アメリカでそういう議論になったら(笑)。しかし、それでずいぶんいろんな人脈は広がられたわけですか。いろんなところに交渉された……。

宮崎 人脈というか、そうですね。だから、ほかのものとまとまった交渉ですと、国務省が中心になるわけです。私はいろんなところでさっきの、イワシの問題だとフード・アンド・ドラッグ

とか、関税委員会とか、国防省に行ったり、とにかくやらいろいろなところに走り回っていました。

北岡 ワンダラーブラウスとか、そういうものを買いたいという業者はいるわけですね。

宮崎 もちろんいるわけです。だから大量に入ってきているわけですね。だけど、そういうのはわりと頼りにならない人が多かったですね。

その他、大使館でいろいろとやっていたわけですけども、われわれ下っ端の者は、新木大使は「贖罪のための大使」だと言っていたんですね。非常に真面目でね。本当に真面目な人ですよ。だから、交渉とかなんとかいうんじゃなくて、初代の大使で本当の贖罪のための大使という感じがしたわけです。したがって、別に向こうの財界と特別関係があるとか何とかいうようなことではなかったと思います。あったかもしれませんが、私どもには見えなかったわけです。

股野 ご本人がそうおっしゃったんですか。「贖罪の」と。

宮崎 われわれ下っ端がそう言っている。「あの大使は贖罪の大使で来たんだ」って。下っ端の人が自分の上司を、どっちかという悪口でしょうね(笑)。能力があるとか何とかじゃなくてね。というふうには、われわれは言っておったんです。

レセプションにいろいろと人を呼んだり、飯にはずいぶんいろいろな人を呼んだりしましたけどね。本野(盛幸)君が大官補——書記官になってない官補で、新木大使のプロトコルをやったわけです。プロトコルというのは秘書ですね。だから、彼がいちばん新木大使のことはよく知っていると思います。

新木大使の息子さんが、あとで福岡銀行の頭取かなんかになられたね。息子さんがやっぱり本野君と一緒に秘書をやっていたわけです。本野君のあとが中島敏次郎ね。みんな当時は外交官補の年限が長かったわけですよ。役所に入ってから書記官になるまで

の年限がね。入りたての留学している人も官補なんだけど、だから、本野君なんかは大官補。彼も僕らみたいなほうが頼みやすいもので、新木大使のブラックタイのディナーに、突然として誰かが出られなくなることがあるでしょう。そうすると、穴埋めにしょっちゅう頼み込まれて、嫌とは言えないものだから、「一五分でブラックタイに着替えてやってこい」とか(笑)。大使のあれだから年配の人ばかりで、そんなところに入って、あんまり飯もおいしくなかった(笑)。

北岡 新木さんは、戦前にアメリカにおられた……？

宮崎 そうですよ。日銀で総裁になったんですよ。ニューヨーク駐在をやったんです。だけど、当時のワシントンの人たちは違うと思います。ジェネレーションがね。

北岡 そうでしょうね、ジェネレーションが違うし、ニューヨークとワシントンでかなり違いますね。

宮崎 違うんです。

池田(勇人)・ロバートソン会談のとき(一九五三年)は、政務と財務がお世話をしていたので、経済のほうには回ってこなかったものです。そういうことが行われていることは知っていませんし、池田さんの飯には呼ばれて出ましたけど。池田さんが何人か大使館の人間を呼んで、大使以下ずっと。それでも大した人数じゃないんですよ。いまでも覚えてるのは、「あなた方は日本に帰ってきたら必ず俺のところに来い。来なかったらリストに×をつけるぞ」と(笑)。あれはもう、もっと上の人の話だろうと思って、僕は聞き流して行かなかったんですけどね(笑)。

北岡 大丈夫ですか(笑)。そういう人脈を強くキープしたいということなんですかね。

宮崎 そうですね。ですから、上のほうの人——公使とかなんとかはピンと来たでしょうね、帰ったら行かなくちゃいけないんだと

というのが。僕らみたいに書記官の下っ端は、「何を言っているんだ」という感じ(笑)。

北岡 局長経験者がおられたり、かなり通産の人が多くですね。大使自身も通産におられましたし。

宮崎 そんなことはないです。僕はたまたま経済班にいたから。大蔵省からは渡辺さんという方が公使だし、杉山さんという書記官に。当時は書記官室は大部屋でして、そこに何班もみんな一緒にいたわけですよ。財務班の書記官は杉山さんで、いちばんシニアかな。その下に大和田(渉)という外務省の二等書記官がくっついて。それから政務は書記官が、はじめ竹内春海さん、そのあとに田中弘人さん、その下に吉岡(章)大使とか稲田(繁)なんかがかくっついていたんですよ。そのほかに、広報に黒田(瑞夫)とかね。広報って、要するにプレスとかなんとかいましたけど。大部屋にみんな書記官はいたわけです。だから、いまから考えると、まったくマニファクチュア的だね。総務参事官が宮崎(章)大使。時々、電話が間違えてかかって、参事官がスイッチできないんですよ。書記官室まで来て「おーい、宮崎君、電話だよ」と、参事官室まで行ってから電話に出て。

宮崎が二人いて、タケウチが二人いたわけですね。武内公使と竹内春海さん。当時、政治家も元気がなくて、田中弘人さんなんか、当時青年将校だった中曾根さんという代議士が来てワシントンをウロウロしていたわけですね。彼は中曾根さんをつれて、アメリカの誰かに会わせて、帰ってから田中弘人が、中曾根青年将校に口述して電報を書かせているわけですよ。そういう時代があった。

それから、経済とは関係ないんだけど、ワシントンにいるときに皇太子様がみえたわけです。いまの天皇ですね。まだ一八かなんかで、クイーンエリザベスの戴冠式に名代として出席されて、ヨーロッパ経由でワシントンに。その、誰がいつアテンドする

かというのも本野君が起案するわけで、宮崎さんが決めるんでしょうけど。それで皇太子様を案内したりしたわけです。

北岡 政務・経済・文化と、やっぱりお互いのことはあまり知らないというか、だいたいそれぞれのことをやってらっしゃるわけですから、本省からの指示とかで記憶にあるようなことはございませんですか。

宮崎 要するに本省からの指示は、総務参事官が割り振るわけですよ。これは何班、と。そこに電報が行くでしょう。だから、みんなに回る電報って当時は少なかったわけです。だから、われわれのところには経済関係の電報しか来なかったわけです。

北岡 それがやっぱり具体的にこまごましたやつが多いわけですか。

宮崎 私のところに来たのはこまごましたやつが多いわけですよ。政務のほうは若干、いろいろなものがあつたと思えますけどね。田中弘人のアシスタントに、吉野〔文六〕さんが一時政務書記官をやっていたんだ。吉野さんは別途、このオーラルをやっておられると思うんですが、書記官室の大部屋にみんな一緒にいたわけですよ。だから、よそが何をやっているかということは、ほとんど分らなかったわけです。たとえば、沢木書記官は何をやっているか、あまり分からないです。彼は輸入で僕は輸出ですから、関係がないんでね。出掛けるところが相手は違うわけでしょう。一緒に行くということがほとんどないわけですね。全部、短騎出勤型で。

北岡 全米にいらっしゃったんですか。

宮崎 全米は行きませんでしたね。だいたいワシントンです。

北岡 いろんな役所とか議会……。

佐道 管内で、たとえば経済班なら経済班の会議とか、いまの業務の状況とかそういうのは……？

宮崎 経済班の中では打ち合わせみたいのはやりましたけどね。

だけでも、内容には入ってなかったわけです。たとえば、当時アメリカの互恵通商協定法〔レシプロカル・トレード・アグリーメント・アクト〕というのがあって、それが延長がなんとかどうとかなって議会でもめて、その結果、日本のガット加入が一年間遅れることになったわけです〔ガット仮加入一九五三年・正式加入一九五五年〕。アメリカの大使館から「非常に残念ながら、日本はガット仮加入で我慢してくれ」という趣旨の連絡があったわけです。

そのとき経済班でみんな集まって、ところが当時、ガット仮加入とアメリカの互恵通商協定とどういう関係があるのか、あまりピンと来なかったわけです。勉強不足といえば勉強不足なんだけども。それは総務の松村さんの担当なんだけど、松村さんも知らないわけですよ。それで東京につないでやった。たとえば、そういうときにはみんな協議するわけです。協議しても、知らんものは知らないので〔笑〕。

今度は本省に戻って、経済三課は、アメリカ、カナダ、中南米、それらの国との二国間の経済関係を担当している課なんです。

私はもちろんアメリカ関係で、最初に帰ったときにはわりと下っ端だったのが、五年ぐらいた間にだんだん上の人がいなくなって、最後は課長もいなくなって、課長心得ということをしばらくやっていた時期があるんです。五年もいますと、なんでもエキスパートになるわけですよ。だから、当時の対米経済関係は、ずいぶんいろんなことがありましたけど、そういうものは、たとえばわりと有名なものは、余剰農産物協定ね。これはいくつかあったその協定の締結交渉をやったりね。締結交渉は在日アメリカ大使館とやるわけですが、その際に日本の中の関係者との交渉がかなりうるさかったわけです。

北岡 たとえば、どんなことでしょうか。

■ 余剰生産物協定の締結交渉

宮崎 たとえば、まず第一に、これは交渉に早く入りたいから、ということから始まるわけですよ。その場合には政治家も関係するわけです。高橋達之助という人が当時経企庁長官にいまして、その人が断然やるべきだということを主張したわけです。要するに余剰農産物協定は、その前からアメリカ側が余剰農産物処理法というPL四八〇という法律があって、それに基づいて日本だけじゃなくていろんなところに余剰農産物処理をやっていたわけなんです。その仕組みは、たとえば日本の場合にはアメリカの余剰農産物を買うのを、一口にいいますと、通常輸入の上積みでなくちゃいけない。通常輸入、たとえば小麦が何万トンとかいままで買っているでしょう。その上積み（オーバー・アンド・アバープ）するという言葉を入れなくちゃいけないんです。その分をアメリカから、一応もらうというか買うというかとかく買いましたね。買ったカウンター・パート・ファンドというか、ドルを払わないでその買った農産物を国内へ売れば円が入りますよね。その円をプールしておいて、その円は日本政府の判断でいろいろな、たとえば灌漑だとかなんとかに使えるという、そういう建前の法律なわけです。その協定に、何に使うかということもたしか書いたと思います。そうすると、何に使うかということも、各省とも連絡しなくちゃいけないでしょう。そういうような余剰農産物協定締結交渉を何回かやったんですけども、それなんかもやっておりましたし、いわゆる対米経済関係というのは、すべて何でもかんでも来ていたわけです。そのときに、やっぱり日本に対して、当時からアメリカはいろんな要求があったわけですが、プレッシャーが。何をどうせいか、もっと自由化せいか、いろいろあったんだけど、いまでもそうだけれども、アメリカはわりとセルフライチャスの面があるんですよ（笑）。やたらにお説

教をする。プリーチする癖がある。

あんまりたくさんいろんなことを要求されたものですから、アメリカのいろんな措置を調べ上げて、たとえばアメリカの措置の中で何法でどういうものがどのくらい輸入制限されているとか、いろんなことをリストアップしたわけですよ。ダンピング法がどうだとかね。それでいろんな人に配っていたら、誰だったか政治家が飛びついてちゃってね。アメリカもこんなことをやっている、けしからん、というやつに使って、だいぶ話が大きくなって、あとでちょっとまづかったかなと。つまり、僕が書いたことは全部事実なだけども、しかしそれは「原則の中の例外」なんですよ。原則はたいへん「自由」だったわけです。ところが、日本は原則が「統制」であって、「自由」になったのが一部分あった程度なんだけれども、一般の人は、アメリカも原則「統制」であるような印象を受けた人がいたみたいで、あとでちょっと困ったなと思ったこともありましたけど。

北岡 もともとアメリカに対して「あなたのところはこんなことをやっているじゃないか」と……。

宮崎 それはもちろん言っているんですけどね。

北岡 そうすると、向こうはどういう反応だったですか。

宮崎 それについては別に反応はなかったです。ただ、アメリカは「参った」とは言わなかったですけどね。

北岡 いまでも言わないですね（笑）。

宮崎 たとえば、州によってずいぶんいろいろなことをやるわけですよ。バイ・アメリカンとかもありますしね。

北岡 だいたい被害があったら申し出ようという国で、被害なんかないですからね。余剰の産物協定というのは、いつ始まったんでしょう。大使の頃、始められたんですか。

宮崎 いや、その前からあったと思います。その頃、ワシントンで沢木書記官が担当していたと思います。

北岡 これは何度か改訂、何度も、というのは毎年やるんですか。
宮崎 毎年。何かの関係で一年休みましたけどね。

北岡 じゃあ、毎年、今年はこれぐらいと。一応、日本は貰うわけですか。

宮崎 まあ、貰うわけですね。

北岡 これはたしか、もらったお金がどうかとこのので、以前、河野一郎かなんかが吉田さんを批判して、何か議論になったことがありますでしたか。

宮崎 いや、ですから、もらったお金がカウンター・パート・ファンドと称して積み立ててあるわけです。そのお金を、なんとかプロジェクトとかいろんなのに使っていたわけです。それは、しかるべき手続きを経て決めていたわけです。だから、あれに対する批判でいちばん大きいのは、「アメリカの農産物をたくさん押しつけられた結果、日本の農業は衰退した」という議論です。ところが、建前は要するに日本が通常買っていたもののオーバー・アンド・アバープだから、つまり通常よりも余計な分だけが貰えるわけです。したがって、余計買わざるをえなくなってきたと。たとえば小麦なんかを余計買ったから、学校給食がパンになっちゃって、日本人はコメを食う習慣がなくなったとか、いろんな議論があったわけですけども、これはしかしオーバー・アンド・アバープなんだけれども、実際はこの前お話ししたように、日本で輸入の外貨予算中に、ある意味では組み込んでいったわけですよ。だから、別にそれ自体が農業を圧迫するよくな恰好で、殊に価格がいまでもそうだけれども、輸入価格と国内販売価格は遮断されていますから、日本の農業に直接影響があったということはないと思うんです。ただ、そういう批判が、殊に左翼系の人からありましたけど。

北岡 これはアメリカに対しては、お金を払ったり返したりというのではないんですか。

宮崎 ないわけですよ。もらいっぱなしで、ただアメリカはカウンターパート・ファンドの使い途については、協定で干渉するということですよ。だから、高橋達之助は「こんなうまい話はない」というので、ぜひやれと言って。

北岡 それはまあ、タダですからね。

宮崎 ところが、反対のは、オーバー・アンド・アバープだから日本の農業に影響があるとか、余計なものを買うことになるから貰うことになるとか、使い途が不透明とか、いろいろなことを言う人がいた。この場合、使い途のほうは私は全然関係ないわけですよ。だけれども、協定の作成にはずいぶん関与したわけです。

北岡 協定の作成で、なにか問題になったような争点はございましたか。

宮崎 その年、その年で何かあったんですけど、あんまりはっきり記憶していません。

北岡 それほど深刻なことはなかったんですか。

宮崎 それほど深刻なことはなかったです。

北岡 アメリカはよその国ともやっているわけですね。

■ガット本加入のための関税交渉

宮崎 そうです。経済三課にいるときにガット加盟の交渉が、つまりさっき言いました仮加入をやって、それから本加入のための関税交渉があったわけですね。

仮加入がなぜ日本にとって不利になったのかということ、仮加入の際に「日本の関税は上げません」という——バインドというんですけれど——かなりのものについて関税を上げませんという約束をしちゃっているわけです。本加盟のときにそれはもうカードとして使えないという意味で、若干損をしたという面があるんです。ただ、アメリカはいまも中国のWTO加盟でゴタゴタして

ますけど、アメリカは当時、日本をせひともガットに加盟させたいと思っただけの努力してくれただけです。そのガットに日本を加盟させるための呼び水として、こういう条項が互恵通商協定法に出来て入っているんですけど、たとえば日本とヨーロッパの国と交渉して、お互いに譲許というかコンセッションを交換しますでしょう。それがインバランスになったと。つまり、ヨーロッパのほうは出しすぎで、日本のほうが出し足りない、貿易構造がそういうことになるわけだ。その場合は、ヨーロッパはインバランスの分をアメリカにツケを回して、アメリカがヨーロッパにその分を関税譲許その他で払いましょうと言うことができるような互恵通商協定法の成立が一年延びたわけです。それで「申し訳ないけど仮加入してくれ」というので仮加入して、その法律が通ったのでいよいよガット加入ということで、関税交渉をやったわけです。いろんな人が代表団でジュネーブに四カ月ぐらい滞在して、私は対米交渉班の次長だったわけです。いちばんのヘッドは萩原「徹」さんという人が。

ガットのことは別の機会に申し上げたかと思えます。アメリカは非常に日本をガットに加盟させたかったわけなんだけれども、これはアメリカの政策で、日本経済を建て直させるためにはガットに加盟させて、そして日本がヨーロッパでもどこでもどんどんモノを出せるようにすることが必要だという感じからきたんだと思うんです。ところが日本は、ガット加盟について賛否両方あったわけです。つまり、農林省は全面反対なんです。ガットに加盟することによって、いろんな輸入自由化とか関税率引き下げとかいう義務を負うと日本の農業に害があるから、一切そういうことは困ると。

通産省は原局と通商局と意見が違ったんだけど、原局のほうが反対が多かったわけです。つまり、まだ戦後間もなくして日本の産業は競争力が十分ないから、そのない段階で自由化しちゃったら、

せっかくの芽が潰されちゃう。したがって、そういう輸入をやらないで、国内でものを作ることに専念すべきであるという観点から反対だね。通商局は、入りたいという気はあったようです。

大蔵省は、当時は為替局というのがあって、関税局がなくて主税局の中の税関部というのがあって、力関係からいうと国際派は少ないわけです。ガットに加入したらどういうことにあいるかということの勉強が行き届いてないわけです。それをなんとかしてガットに加盟したいというのが外務省の先輩、特に萩原さん（当時はスイスの公使だった）と牛場「信彦」さん。この二人がものすごいがんばって根回ししたわけです。当時、外務大臣は岡崎「勝男」……とにかく吉田さんも口説いたんですよ、萩原さん。池田さんにはずいぶん口説いたようですけど、それでやっとならんとガット加入の機運が出てきたところに、ワシントンで仮加入という話だったので、ちょっとショックを受けたようです。知らない、何がショックなのかよく分からなくてね。いずれにしてもそういうことで、加入するという方向が決まって、仮加入を経て本加入の交渉を、「一九五四年」に加入の方向が決まって、五年に関税交渉をやったわけです。

そのときにヨーロッパのほうは、日本とガット関係に入りたくないという国が多くて、いわゆるガットの加入は認めるけども、日本との間のガット関係には入らないというのが、ガット三五条の援用という。それが、英仏ベネルクスを始め、スペインとかオーストリアとかヨーロッパの大半の国、南米ではキューバもなかったかな、そういうことになったわけです。

日本とガット関係に入るといえるのは、ヨーロッパではドイツ、イタリー、北欧それからどこだったかちょっと忘れちゃったんですけど南米の国、その国とは関税交渉をやったわけです。その関税交渉でいちばんでかいのが対米交渉で、対米交渉のチームのヘッドは小田部「謙一」さんという方だったんです。そこで僕は

次長で、通産省、農林省、その他いろいろなところから偉い人と専門家が来てまして、本当に一品目毎、アメリカの要求に対してこっちが応じるか応じないかを、応じられない理由を述べるとか、アメリカに対して日本は何を、何の関税を下げてくれとか、そういう要求を出して、そういうのはリクエストリストというのを交換して、リクエストに対してこっちが出したやつをオファーストという形で出して、それでひとつひとつ、なにゆえにオファードできないかとかいうのを説明するわけです。それを延々とやりましてね。

前に申し上げたように通産省で出向中関税の類表、四ヶタ一二〇〇品目であれば対応は分かっているという話を申し上げたんですけど、そういうことを説明するのは、私はもってこいなんですよ。それでも分からないのがあるわけです。いちばん分からないのが、有機化学製品と機械の一部ね。これは通産省の偉い技官が来て説明してくれるんだけど、一人はとてもうまいんだけど、もう一人は分からない。僕が分からなかったらアメリカ人が分かるはずがないんだから、もうちょっと分かるように説明してくれって言うて。向こうのほうが偉いんだけど僕本人が分からなかったら、あっちを分からせられない(笑)。それで、そういうのを一品目ずつやったわけです。アメリカに対するリクエストもやってくれたんです。

そのときに、これは私がやったわけじゃないけれども、私も関係していましたが、大きな流れとしては、通産省もわりとそのときははっきりしていたと思うのは、機械なら機械、有機化学なら有機化学、何なら何という中で、これは絶対に守りたいというもの。たとえば、機械のほうで言えば、事務機器です。タイプライター、キャッシュレジスターなどが当時の問題だったので、コンピュータないしそのプリンジも将来の問題として頭にあったと思います。これはもう諦めちゃうから、関税をどんどん

下げてもいいですというのもありました。たとえば一例を挙げると、建設機械でタイヤがバットとたくさんついているやつがあるでしょう。何という名前か忘れちゃったけど、キャタピラーが作っているやつ。それはもう作ることを諦めて譲許しましたが、中間のものはそれこそ交渉次第という、そういう方針を持ってきたようですね。

だから、関税を下げる、こっちがオファードするもの、譲許しないものについては、あとから考えるとわりと筋が通っていたと思うんです。ただ、こっちがアメリカ側に要求するものについては、要するにあまり筋が通ってなかった。というのは、ガットの規則で、相手方に関税譲許を要求できるものは、たとえば日本がアメリカに要求できるものは、日本がプリンシパル・サプライヤーという、主要の供給国になっているというものでないと要求できないわけですよ。それではないものはプリンシパル・サプライヤーと組んで要求することはできるけど、ところが日本がプリンシパル・サプライヤーになっているアメリカへの輸出品は、どっちかといえば当時はまだ労働集約的なもので、あんまり先端技術のものがなかったわけですね。そういうものの状況をアメリカに要求していた。繊維だとか雑貨だとか。

ですから、その結果としては、日本が関税交渉の結果、獲得したアメリカからの譲許というものは、それこそ後進国に非常に利益になったけど、日本人にはその後構造が変わっちゃったものだから、あんまり利益にならなかったんじゃないかという感じがするんです。そういう批判をする人はいないですけどね。あんまり関心がないと見えてね。

関税を引き下げるほうは、わりと筋が通っていたと思うんです。引き下げというか、こっちがオファードしたものはね。現にそのあと、たとえば自動車とか、それからコンピュータ関係のやつも、そうとう強いアメリカの要求を蹴飛ばしたという意味で、理屈は

通っていたと思います。

当時は交渉の場合、ガットのものじゃないんだけど、私が経済三課にいて、何回もアメリカに貿易ミッションに同行したり、私自身で行ってあちこちで交渉したのは、限り無いほどたくさんありますけどね。貿易ミッションに同行しても、日本の経済界というか貿易界の偉い人は、当時はものを知らないんですよ。アメリカ人にどういうふうに説明したらウケるかということも、あんまりピンと来ていないような人。

北岡 自分たちが作る製品のこともよく知らないという意味ですか。

宮崎 まあまあ知っているんでしょうけれども、アメリカのことも知らないから、どういうふうにプレゼントすればいいかばんいかということについての考えまで及ばないわけですよ。

私自身がやったものは、いろいろ……。たとえば経済三課で一時間問題になったのは、細かいのがたくさんあるんですよ。金属洋食器——フラットウエアって何というのか、ナイフやフォークの類。燕〔新潟県〕というところで作っているじゃない。それがアメリカで問題になりましたね。アメリカ大使館のやつを燕まで連れていったりなんかしたことがあるんです。

それから合板、アメリカの新聞にマンガで、日本人が合板でもってアメリカ人を殴っているように出たり。あるいは、マグロの缶詰なんかは簡単なようだけでも、じつは利害関係がずいぶん違うわけですよ。まず日本の冷凍マグロをアメリカに輸出しているわけね。冷凍マグロをアメリカの缶詰屋が缶詰にしているわけです。彼らから見ると、冷凍マグロの対米輸出は止めてもらっちゃ困る。しかし、缶詰の輸出は止めてほしいというわけですね。ところが、アメリカの漁師は、冷凍マグロの輸入を止めてほしいわけです。だから、アメリカの中でもずいぶん違うわけですよ。そうすると、そういうものを解決するためには、みんなに会わな

くちゃいけない。ロスの郊外の漁師の事務所まで行きまして、だいたいどこにあるかよく分からなくて、探しに探してようやく行ったら、漁師の住む事務所だけあって、ピンナップガールズのでかいのがたくさん貼ってあって、その前で交渉して〔笑〕。だから、漁師というのはどこの国でも威勢がいいというか、なかなか話に乗ってくれなくて〔笑〕。

日本でも、冷凍マグロにしているほうと缶詰にしているほうでは利害が必ずしも一致しないしね。それから、この場合のいちばんの日本の後ろにある高碕達之助なんですよ。東洋製缶という缶を作っていた会社のボスだと思っただが、そんなことを一つ一つ解きほぐしていくと時間がかかるんですよ。手間がかかる。そういうようなことを、いまみたいに完全に自由化されて政府がタッチしないという意味ではいいんですけども、そうでないとにかくいろんなことをやらなくちゃいかなという問題は出てきたわけです。

北岡 しかし、大変な時間のかかることだったでしょうね。第一、点数がめちゃくちゃ多いし、これは〔昭和〕三十年九月に加盟するとしますと、それより前から交渉を始めて、加入が発効するところでそれをターゲットにしているわけでしょう。

宮崎 〔二九〕五四年に加入についての一応の合意が出来て、関税交渉が行われて発効したときに加入が認められて、それからこうなっているわけです。

北岡 じゃあ、ここで関税が決まったと。

宮崎 関税が決まるのは関税交渉の結果による。それは五五年です。

北岡 それがまとまったので正式に加盟になったということなんですね。

宮崎 そうそう。

北岡 何カ月か……。

宮崎 四カ月ぐらいジュネーブにおりましたね。

北岡 ジュネーブで関税交渉をアメリカとやったわけですか。

宮崎 そうそう、アメリカと。他の国ともね。というのは、その関税交渉は日本とアメリカだけじゃなくて、日本とドイツとか中南米と。それからドイツとアメリカとか、たくさんいろんな交渉のネットワークがあるわけです。

北岡 アメリカのカウンター・パートは、どういう方ですか。

宮崎 セイヤ・ホワイトという人だったです。

北岡 何省ですか。

宮崎 国務省です。

北岡 さっきおっしゃったのは、たとえば漁師と会いに行ったとか、それはいつ頃の……。

宮崎 その前ですから、関税交渉と関係なしに、経済三課のときのいろんなケースの追加です。だから、話としてはガットの加入とは別の分野です。

北岡 しかし、事実としてはセットになっている。さっきから高碕達之助さんというのがけっこう重要なんですかね。

宮崎 高碕達之助と大洋漁業の今太閣といわれた人、中部謙吉さん大洋漁業のボス。水産界の大物と高碕達之助が缶詰と冷凍についてはいたわけです。大洋漁業のほうは冷凍で出したわけです。高碕達之助は日本で缶詰に出したいわけですね。付加価値が高くなるわけ。それと日本の利害に相反するのとアメリカの利害が三つぐらい違っていたわけですね。

北岡 その頃は、そういう直接の利害関係者で大臣とかだったんですね。高碕さんとは満州のほうで仕事をした方ですね。宮崎 しかし、経済界でのしてきたのは東洋製缶です。缶詰の缶を作る会社を作った。

北岡 缶の原料というのは……。

宮崎 要するにティンプレートですよ。はじめはアメリカから

輸入していたわけですね。その後、日本で作るようになりましたけど。

北岡 それはティンは輸入するわけですか。マレーシアとか。

宮崎 そういうことですね。

北岡 高碕さんは、日本の東南アジア外交とかにわりあいいろいろ関係した方ですよ。関係があったんですね。

佐道 かもしれないですね。

宮崎 ティンプレートをアメリカから缶詰にするために輸入して、ウエイストが出来るでしょう。ともかくウエイストでおもちゃができて、おもちゃをまた輸出していたわけですよ。おもちゃ業者に。要するにブリキのおもちゃね。それは、ティンプレートで缶詰を作ったら、どうしても余っちゃって。

北岡 なるほど。おもちゃは当時の重要輸出品ですよ。おもちゃと缶詰は関係があったんですね。気がつきませんでした。

宮崎 ただ、いまはティンプレートってほとんどないですよ。缶はみんなアルミになったから。というのは、これはあとの話だけど、国際錫協定というのがありまして、私は課長になったときに錫協定の交渉にも。錫というのは、地表のわりと浅いところにあるんですよ。掘り尽くしちゃうとなくなっちゃうんです。軽いから深いところがないんです。供給が少なくなってくると値段があがるでしょう。そうすると、あんまり使いやすくなるものだから、アルミになっちゃったわけですね。戦前は錫というのはいちばん安かったわけですね。

茶箱というのをご存じないでしょうね。大きな箱にお茶がたくさん入っていて、箱の中を錫で覆ってあるんですよ。あるいは、煙草ね。ゴールデンバットとか、ああいう銀紙は錫だったわけですよ。子供の頃、銀紙を集めて丸くしているんなものを作って、戦前は錫は非常に安かったわけですよ。

北岡 戦前は製品になってから輸入していたんですね。

宮崎 いや、錫も輸入していたわけです。

北岡 錫を輸入して日本で作っていたんですね。戦後、それはプレートを買うほうになったわけですね。

宮崎 戦後は工場なんて全部焼けてますからね。だから、ティンプレートを買っていただけです。

北岡 若干すれば技術はあったわけですから、出来るようになってたわけですね。

宮崎 そうです。

北岡 ちょうどこの頃かと思いますが、バンドン会議（一九五五年）なんかに行ったのは高橋さんですよ。アジア貿易も熱心でしたし。

宮崎 高橋さんの秘書をやっている人にしょっちゅう会っていましたけど、名前を忘れちゃったんだけど有名な人。もう一人、中部謙吉さん。大洋漁業のオーナーです。マグロの缶詰ひとつとってみても、国内にも向こうにもプレイヤーがたくさんいるわけです。それをまとめるためには、両方うまく持つていかなくちゃいけないでしょう。ということは、小さな問題だけが大変なんです。

北岡 いまのは日米に跨がっているにしても、いろいろなことをジュネーブでやっておられた。すると、向こうの国務省は当事者能力があるんですね。難しい細かいことでも。

宮崎 あるんですね。というか、当時はS T R（特別通商代表）ってなかったわけですよ。だから、対外経済関係は全部国務省なんですよ。

北岡 いまだと、とても国務省の手に負えない話でしょうね。

宮崎 それが議会で、国務省だと、たとえば日本に対してあまり弱すぎるというので、S T Rを作っちゃった。当時は全部、国務省です。対外交渉は国務省じゃなくちゃ出来なかったわけですよ。日本はそれを真似して、「対外交渉は外務省しかできない」とい

う建前でずつつつばねてきたわけですよ。私はそういうのの第一線にずっといたわけですから、その代わり何でもやらなくちゃいけないわけです。いまのマグロの缶詰の問題は、本来ならば農林省とか通産省がやってしかるべきかもしれないんだけど、農林省や通産省なんて全然そんなことはやる意志もなかったし、能力もなかったわけですよ。

北岡 さっきのお話でへえーと思ったのは、ガット加盟は本当に賛否両論だったというお話だったですけど、通産の原局が時期尚早論ぐらいは多少分らないでもないんですが、農林省なんかは反対したって、いつまでも入らないでいられるわけのものではないですよ。

宮崎 しかし、そんなことはとても……そんなことを言ったら農林省でとても持たないです（笑）。

北岡 農林省は、日本全体のことを知らんというわけですよ。

宮崎 それはだって他のどこか、誰かが言うだろうから、それに対して最後に少しずつ折れていけばいいと。

北岡 吉田内閣からわりあい大きな変化がこの五年間の間に、政治も外務省もあったわけなんですけど、それは何かお感じになったことはおありでしょうか。外務大臣も変わりましたし。経済外交では特に影響がないのかな……。

■吉田、鳩山内閣期の外務大臣

宮崎（吉田内閣の）岡崎（勝男）外相というのは官僚ですから、人の言うことを聞いて政治的には無力だったんでしょ。けど、（鳩山内閣の）重光（葵）外相という人は、私どもから見ると頭が古くてね。戦前のことはよく分かっているんだけど、たとえばガットなんていうことは全然わからないわけですよ。ガットとコム（対共産圏輸出統制委員会）が何であるかなんて、いくら

言ったとしてもそういうのが頭に入らないんですよ(笑)。

北岡 そうすると、大臣まで行って、決裁ということがあるわけですね。

宮崎 そういうこともあるわけです。ガット加盟なんていうのはそうですね。だから、戦前はガットもなかったし、コムもなかったし。でも、あんまり印象はなかったです。

北岡 われわれ研究者でも、普通の日本の外交、条約とかそういう方面でも、重光さんでちょっと古いなと頻繁に感じますね。

佐道 大使の直接の経済の所管ではないですが、日ソ交渉ですとか、二元外交批判をずいぶん言われて、重光さんがいる外務省と、鳩山(一郎)首相と違うのではないかという批判が周囲ではおこなわれていたんですけども、そういう雰囲気とか外務省内の様子はいかがでしょうか。

宮崎 河野一郎さん(当時農林大臣)が対ソ外交をなんとか推進したいというので出掛けていったでしょう(一九五六年)。あれについてはずいぶんいろいろな話を聞かされていました。それから、アメリカの新聞なんか、日本の国益と何万トンのデッドフィッシュと交渉したというような話が出ていましたけどね。アメリカは漁業権とかいうのはあまり、向こうではメリットはないですからね。日本は何を譲ってデッドフィッシュをいれた、というのが新聞に出ていた。

それから、河野さんに直接というんじゃないんですけど、法眼(晋作)さんという、のちに次官をやった方が盛んに言っておられたのは、当時フルシチョフに会いに行っていて、そのときに日本の大使館の通訳を断っちゃって一人で行ったわけです。向こう側の通訳だけで話をした。その結果、非常におかしなことになっちゃっているらしいんですね。法眼さんが河野一郎の政治生命に関わると話した、それをちょっと話せば彼はたちまちだめになるという、つまり、外交常識に反するようなことを河野一郎はやって

たわけですよ。こっちの証人がないわけでしょう。向こうの通訳しかないので、向こうのバージョンだけしか出てこないわけでしょう。そういう話をちょっと聞いた。

だいたい河野一郎という人は、国内であれば睨みは効いた。ただ、こういうことはわれわれが言うと、新聞なんかに出すときには非常に語弊があるんだけど、政治家は概して外交交渉は下手ですよ。というのは、自分の任期はだいたい二年ぐらいでしょう。次の選挙が何年後。その間に成果の上がらないことはやらないんですよ。だから、これは「ノー」と言って、五年後に何とかなったほうがいい、というような判断を絶対しないわけです。

これは通産省のある人が言っていたんですけど、「政治家に交渉を任せたら、必ず失敗する」と。たしかにそういう面があるわけですよ。つまり、自分の選挙までとか、自分の任期の間に点数を挙げないと、彼の政治生命がなくなるわけでしょう。ところが役人というのは、自分の任期の間じゃなくてもいいんですよ。長いキャリアの中で「ノー」と言うところは「ノー」と言って頑張ったほうが省内でウケるかもしれないということがあるから、自分の判断で強くやることは強くやる、「ノー」と言うことは「ノー」と言ってがんばっちゃう。政治家を連れていったら、必ずそこで妥協しちゃう。そういう面が余計あったんですよ。これはいまでもあるんじゃないかと思うんですけど、どうかしら。

北岡 あるんじゃないでしょうか(笑)。

宮崎 たとえば北鮮に対する金丸なんかとかかね。それから、北鮮や中国に対する政治家のあれというのは、国益とは関係なしに自分の政治的利益でものを言うことが多いんじゃないかという感じがしますけどね。

北岡 ちょっと戻って、アメリカとの関税交渉をやっていたときに、日本側の守る分には筋の通った議論を貫かれたということだったんですけど、リンケージするようなことはないですか。あな

たがこっちを譲ってくれば、こっちはこっちを譲ると。

宮崎 それはもちろんありますよ。

北岡 当時からコンピュータって大きかったんですか。

宮崎 日本はコンピュータ、つまり事務用機器の一部で、それはぜひ作りたいというあれがあったわけですね。というのは、これは役人じゃなくて、稲垣平太郎さんという横浜ゴムの会長をやっていた人にくっついてアメリカにミッションで行ったときに、対米説明はひとつも関心しなかったけど、彼が言っていたのは、日本が経済をこれからやっていくためには、いちばん重点を置くべき領域として「シュヴァリス・シュトローム」——弱電というんですかね——関係であるということに強く主張していてね。彼は本題はゴムですが、だから要するに弱電関係というのがホープなんだという。現に、たとえばソニーやなんかもみんなそうでしょう。弱電で伸びてきたわけですよ。当時、そういう弱電関係の最終目標としてはコンピュータがあったわけです。

北岡 コンピュータがその頃から視野にあったというのはね。

佐道 もうちょっとあとかと思っていましたけど。

宮崎 事務用機器の中で、アメリカは非常にそういうものを求めてきたわけです。それに対する譲許があまり行われなかったと。

北岡 あれは失敗だったなというのは、何かないですか(笑)。

宮崎 失敗だったのは、日本が要求したもののね。たとえば繊維ですね。繊維は日本が対米の主たる供給国だったんだから、繊維は関税を下げるというやっていったわけだし、下がったものもあるんだけど、いまは出してないですよ。それから当時要求したのは、たとえば農林省関係で言えば、味の素みたいなグルタミン酸ソーダは日本が強くて、あちこち工場を作ったりして。それはもうずいぶんがんばっていった、向こうから譲許を貰ったわけですけど、そういうような。そのほか譲許をもらったもので、今でもたくさん輸出しているというものはほとんどないですね。ただ、

ガットに加盟することによって、アメリカがヨーロッパに譲許して関税を下げたものを、日本は出しているということになるわけですね。だから、ガットの加盟自体はたいへんな成功だと思えます。

つまり、ガットが出来てから、日本が加入する前に関税交渉は何回もやっているわけですよ。ジュネーブ、アヌシー、トッキーなんていう関税交渉を何回もやって、それで日本の関税交渉になるわけです。それまでにアメリカとヨーロッパはおたがいが交渉して下げているわけでしょう。そこに日本が入って、下がったやつをそっくりそのまま輸出面であげたい、その代わり自分が要求して得たものは後進国ですよ。

北岡 日本はNIEES〔新興工業経済地域〕やASEAN〔東南アジア諸国連合〕に貢献したということですね(笑)。

宮崎 そう。日本自身は関税交渉の私の奮闘の結果じゃなくて、ガットに加入するという意志決定をしたということが非常に大事だったと思います。日本をガットという自由貿易体制の国際的枠組みに組み込んだことが最も重要です。

北岡 私は「えー」と思ったのは、戦前あれだけ貿易で苦勞して、ひどい関税をかけられて、ガットみたのが出来たら、あったら戦争はなかったらうといいましたけど、それで尚かつ逡巡といいますが、反対があったというのは？

宮崎 個々の業界の声が強いわけでしょう。

北岡 重光さんは、そんなこと分かります(笑)。

宮崎 つまり、ベステッドインテレストは守るほうにあるわけですよ。出来ている産業を守るために、その声が高くなるんです。将来、輸出ができるかもしれないという期待は、声を出す人はいないわけですよ。日本の輸出の構成から見ると、輸出を大いにやるべきだということを言うのは雑貨屋さんとか、あるいは紡績業は別として、勢力がないですから、通産省がどうしてもそっちのほうに

傾くわけですよ。

北岡 トップリーダーのほうでは、断固入らなくちゃいかんという声もけっこうあったんですか。それはあまりないんですか。

宮崎 あんまりなかった。それで萩原氏、牛場氏あたりがトップリーダー、どこまで行ったか知らないけど、焚きつけてようやっとなんか方向に向かった。

北岡 政治家レベルではあまりなかったわけですね。

宮崎 池田勇人がそうですね。ずいぶん両氏ともアプローチしたということのようです。だから、そういうときはわからんものですよ。重光さんはあまり……(笑)。

北岡 見ておられて、この日本の将来は、池田さんは話が分かる。この人は、向こうも唾をつけた外交官がいるかもしれませんが、見ておられても「この人は有望だ」と、池田さんは良さそうにみえたわけですか。

宮崎 そうです。池田さんでしたか、ワシントンで飯のときには「君達、日本に帰ってきたら必ず来い」という話は、あれは上の人に対して言ったんだと思って僕自身は行かなかったんだけど、ずっとあとになって、ジュネーブへ行って帰ってきて国際機関課長をやっているときには、池田さんのところに何回も行きましたけど。

股野 サンフランシスコからワシントンの時代なんですけど、サンフランシスコにお着きになったときはまだトゥルーマン時代なんですよね。それでワシントンにおいでになって、アイゼンハワー時代が始まるんですが、何か変化をお感じになりましたか？

宮崎 サンフランシスコに行ったときにちょうど選挙でね。「アイク・アンド・ニクソン」という、盛んにみんなバッジを持ってまして、選挙でたいへんなフィーバーだったわけですね。民主党のステイブンソンというのが対立候補で、彼のほうがインテリには人気があったんだけど、アイクというのはもともとジュネ

ラルですから、ニクソンというのは右派でのし上がってきたわけですよ。ヒスを弾劾したりなんかして。僕自身はステイブンソンのほうがいいなと思っていたんだけど、とにかく圧倒的にアイク・アンド・ニクソンに人気があったわけですよ。

政策がどう変わったかというのはいくぶん分らないですけど、ワシントンにいたときには、年にいっぺんですけど、当時の外交団全員がホワイトハウスに、大統領に挨拶に行くんですよ。正月かな。みんなナショナルコスチュームで勲章をつける。とにかく寒い。でも、ホワイトハウスに入れない。当時でも一〇〇人以上いたでしょうからね。大使は別室から入るわけ。われわれ館員はざらっとホワイトハウスの前に並ぶわけですね。寒くて寒くてね。とにかく並んでやっとなんか入ってどうするかというのと、*How do you do, Mr. president?* でシェイクハンドして、それでおしまいなんで。

股野 そういう時代があったんですか。いまはとも考えられませんが。

宮崎 そういう時代があったわけですね。ところが、アイクが病気になるっちゃって、あんまり負担になるといけないというので、次の年からなくなりました。僕は寒い思いをしたけど、握手をしたという……(笑)。

北岡 いまヒストリアンが研究して、アイゼンハワーになってから日本に貿易をさせることに積極的になったと言われていますね。

宮崎 そうですか。いまのそういうことに関連があるのは、いわゆるガット加入についての互恵通商協定のほうの延長問題について議会でゴタゴタやっていた、それで一年間伸びたという、それはアイクの時代ですよ。そっちのほうの議会との駆け引きは、そういうフィロソフィーがあったのかもしれないですけど、われわれはそういうことが見えなくて、その当時の人はみんな、アイク

北岡 別に大使だけではなくて、その当時の人はみんな、アイク

は怠け者のプレジデントだと言っていたんですけど、いまはだいぶ解釈が違ってますね。けっこういろんなことを有能にやった人だという評価が高いんじゃないでしょうか。

宮崎 ただ、取り巻きがいたでしょう。あれがあんまり評判よくなくて。

股野 ニクソンはカリフォルニア出身ですが、当時カリフォルニアにおられて、選挙戦のときはニクソンはかなり注目を浴びておりましたか？

宮崎 もちろんニクソンは大変な活発な選挙運動をやっていたみたいですよ。テレビやら新聞やらによく出てきました。だけど、テレビを見ても、いかにもニクソンって悪玉的なイメージがあつてね(笑)。オールド・ニクソンとニュー・ニクソンの話があるでしょう。オールド・ニクソンに近いですからね。

北岡 若いけどオールドだと(笑)。当時まだ若いですよ。

佐道 ニクソンは二十九年、日本に来ますよね。これは局もあれも違いますから全然関係なく……副大統領として来ますけど。

北岡 二十九年に本省にお帰りになったとき、この年はたしか吉田さんの最後の訪米の年ですね。いまだと総理大臣の訪米というと、外国に行くときにだいたいお土産はどうとかいろいろありますけど、その頃はそんなことはなかったんでしょう？

宮崎 いや、聞いてませんね。さっきの池田・ロバートソンの会合に戻るんですけど、要するに米国内で当時の日本関係は、ごく一部の部課が扱ってきて、それがなかなか上まで問題点を上げられないんですよ。上の人には他にたくさんプライオリティがあるものだから。池田・ロバートソン会談があるというので、これは絶好のチャンスだと、日本関係についてそこまで上げるのは絶好のチャンスだから大いにやろうと。私の関係のことも、いくつかそういうのも出したような気がしますけどね。つまり、そういうチャンスに下のほうで処理されるような事案を上まで上げると

いう。これはいまでもそうですよ。首脳外交のときには首脳自身は何もやるわけじゃないんだけど、来るというので、その前にたくさん、書類の中に埋もれているのをいちばん上に持っていくという効果はあるわけですね。

北岡 そうですね。たしか二十九年の三月頃は造船疑獄で政府はガタガタになっていて、吉田さんが行くはずの訪米がズンズン遅れて、という年ですね。年末に内閣が変わって、着々とその間は経済学をやっておられたと。

宮崎 とにかくそういう上のほうの話は新聞で見る程度でね。雲の上の話っていうのは関係ないですよ、末端の事務官には。若干関係が出てくるのは、課長ぐらいになってからです。

北岡 最近出てくる書簡を見ても、池田さんもそうですが、吉田さんも自由化には非常に積極的だったんじゃないでしょうか。

宮崎 そのへんはよく……。吉田さん付というのが外務省にもいきました。辞めてからもクリーエというか、しょっちゅう吉田邸に行っていた。御巫(清尚)君がそうです。そういう係があつて、吉田さんに対するインフォメーションがあつたと思うんですよ。ただ、彼自身がどれだけ分かってたのか分かっていないのか、見ても分からないですけどね。だから、もちろん萩原とか牛場という人は直接吉田さんまでアプローチしていたかもしれないんですけどね。どこに持っていけばどうなるかということを見るのがいばん大事なこと、力のない人にくら持っていてもだめなんですよ。

北岡 そうでしょうね。

井上 主にアメリカとの経済外交を担当されていたというお立場から、これをどうご覧になっていたのかお尋ねしたくて、特に本省にお戻りになった前後に、日本がエカフェに入ったり(一九五四年正式加盟)とかコロンボ・プランに参加したり(一九五四年)という、アジアでの地域的な多国間の経済協力の枠組みにも

関わりはじめた部分があるんですが、そういうのを主にアメリカの、二国間での経済外交をご担当されていた立場からどんなふう
に、何か多少関心をお持ちになった、あるいは関係があったのか、
そういう……。

宮崎 全然質の違う話だと思うんです。エカフェとかコロンボ・
プランというのは、いまで言えば南北問題というかね。途上国に
対して日本がいかに対処するか、援助したり協力したりするかと
いう話でしょう。ところが対米関係というのは、その元になる
外貨を稼ぐとかそういうあれですから、そっちらから見ますと、ま
ず日本が経済力をつけて、そのためには貿易でいえば対米・対欧
貿易を伸ばして、国内ではっきりとした競争力のある産業を作っ
て、しかるのちに途上国と協力するというのを考えるのが順序だ
と私は当時思ってたんです。ただ、一般の人はそういうことをやる
ことが大事なんだという見解の人がたくさんいて、それがわりと
新聞なんかによく出るものですから、私は日本自体がしっかりし
ないで協力はとてできないという。エカフェって何もやらない
んですから、そういうところに入るのはけっこうでしょう(笑)。
北岡 たとえば、どういう方がそういう主張をしておられたん
ですか。新聞によく載るとおっしゃいましたけど。

宮崎 そのときは別として、一般に外務省の中でも外務省外でも
「南北屋」と言われる人がたくさんいるわけです。たとえば大来
佐武郎なんて南北屋のトップ(笑)。それから外務省には、経済
協力局の関係がみんなそうですよね。

北岡 いまはそれはできるでしょうけど、その頃はちょっと何が
出来るかという……。

宮崎 つまり、恰好はいいですからね。エカフェに入ったとか、
コロンボ・プランでは大いに演説したとかいうのは一般受けする
わけですよ。だから、政治家が喜ぶんですね。自分が行って演説
する場ができたよ。

北岡 それは経済局ではないわけですか。

宮崎 ないわけですよ。

北岡 当時は何局というんですか。

宮崎 当時は国連局だったか、そっちのほうでしょう。

井上 国際協力……。

宮崎 協力局。

井上 まだ国連に入っていないですから……。

股野 そうです。だから、国際協力局が国連もやっていたんで
すね。

宮崎 だから、経済局って当時は非常に強かったわけです。なん
かやっとなるな、という(笑)。全然本体とは関係ないと。そうい
うことを言うともたいろいろ嫌われるんだけど、そういう感じ
だったですよ。

股野 高橋達之助さんはガットも旗を振ってくれたけど、こっち
のほうもやってくれたんですね。コロンボ・プランとかバンドン
会議とかね。日中もやりましたしね。そのへんでは、なかなか幅
のある方だったんですね。

北岡 中国との貿易は、やるとすると経済局の別の課なんですか。
宮崎 ええ、別の課が、経済二課だったかな、共産圏貿易を担当
する課があったんです。ただ、中国との貿易でも、やっぱりいろ
んな……。アメリカは敵産管理規制なんかがあって、中国が共
産圏になってからか、その適用下にあったわけです。だから、日
本が中国から輸入したものを加工してアメリカに出すということ
については、うるさかったわけです。

僕が三課にいたときにいちばん記憶しているのは、人髪という
のがあるんですよ。髪の毛。人髪はブラッセルのノメンクレー
チャーの最初だったか出ているんですよ。人髪というのは何に
使うかという、非常に小さいものでは、昔は金髪のを湿度
計の何かに使っていたんですね。これは量は要らないですよ。

ね。ほんのわずかで済む。いちばん大きな用途はカツラですね。日本では人髪を集荷業はちょっと特殊な人がやっています、お寺に女の人が献納したあれを持ってきたりして(笑)。女の人の髪の毛で作った縄みたいなやつを奉納したものでカツラを作っていたんだけれども、とても間に合わなくなって、中国の人髪を輸入して日本でカツラを作ってアメリカへ出しているのがあったわけです。ところが、それが敵産管理規制でひっかかって、問題になってきちゃうわけです。人髪業者なるものが、これも通産省も何省も嫌がってやらないわけです。僕のところにもたくさん来ましてね。ビロードの玉突き台のあれみたいに緑色の布が机の上きれいに貼ってあるところに何十人ぐらいやってきて、「見れば分かるでしょう。これは中国から入ったものだ。うちで作ったのはこれだ」とたくさん並べられてね。触ったって分かりやしないという(笑)。それで、触って分かるというのは、アメリカの税関にどうやって説明するんだと。

中国から入れた人髪は何センチ以下かな。日本のやつは片端しか切らないというんですよね。自然のやつだからね。ところがアメリカの人は、いずれかの段階で両方切っているというんですよ。両方切っているに違いないというわけね。その議論は通らなかつたんだけれども、それで結局、中国から輸入するものは何センチ以下に切ると。日本からカツラとして出すのは、それ以上の長さのものが出ると、たしかそういうことで決着したと思うんです。

北岡 大変なことですね(笑)。

宮崎 中国との関係は、中国から入れたものを加工してアメリカに出す場合には非常に問題があったわけです。当時は中国だって、農産物しか出すものがなかったわけですからね。

武田 共産国との貿易で何かやりたくないとか、やりたいとか、そういう意見もあったわけですか。

宮崎 それはココムがありましたからね。それから、これはあったことがない、存在自体を否定されたチンコムというのがありません。ココムよりもチンコムのほうがもっと厳しかったんじゃないかな。それは輸出規制ですよ。ココム物資は共産国に輸出をしちゃいかんという規制があったわけです。主な規制はそれだったと思います。ただ、ココムというのがそういうことになっているんだけれども、あれは条約じゃないものですから、国会でしょっちゅう問題にされて、答弁に困った。本当に訴訟でも起こされたら、果たしてどうなったか分からないという。チンコムというのは、存在自体も否定していたわけです。チャイナ・ディファレンシャルみたいなもの。

北岡 存在を否定していたんですか。あるんだと思っていましたよ(笑)。チンコムはあることになっていますがね。

宮崎 国会とかなんかでは一切、あることは認めてないはずですよ。存在自体を否定しています。

北岡 アメリカとの関係では認めているんじゃないですか。

宮崎 アメリカは知っているわけでしょう、チンコムは。アメリカが主張してそういうふうにしたわけでしょう。ディファレンシャルに。

北岡 ディファレンシャルをなんとかしてくれ、という議論は、そのあと、アメリカに対してずっとありますね。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第4回 —

開催日：1999年6月17日

14：08～16：13

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

■ 経済局在職中の局長や外相の印象

宮崎 最初の項目に入る前に、思い出したので前回の追加で言います。

原爆マグロ事件というのがあったんです。ご承知の方もあるかと思うんですけども、ビキニ海域で原爆実験があって、たまたまその近くで操業していた第五福竜丸の乗組員が被爆した事件がありまして、「一九五四年」、一人死んだわけです。それは大変な事件なんですけども、あの近くで、第五福竜丸もマグロ漁船なんですけど、日本の漁船がマグロをたくさん取っていたわけです。そのマグロを主に築地に持ってきて揚げたわけです。

原爆に被爆したマグロが健康上どうなるかという問題は、当時の日本では全然わからないわけです。それでガイガーカウンターというものがあって、初めてアメリカが持ってきてマグロに当てて、どのくらい被爆しているかということ調べた。アメリカがそれを持ってきたのは、対米輸出のマグロについて、被爆マグロは輸出してもらっちゃ困るという発想法から来たわけです。こっちは対米輸出だけじゃなくて、日本の国内で食べるのも調べた結果は同じに利用できるわけです。

とにかくいちおう輸出を止めてくれという話がありました、輸出を止めて、私自身築地の市場へアメリカ人と一緒に行って、ガイガーカウンターはほとんど何も感じないですよ。ところがそれが「原爆マグロ」というので新聞に出て、マグロが暴落したわけです。私はそのときには、これは寿司、マグロを食う絶好のチャンスだと。当時、高かったんです。それが安くなったものだから、えらい勢いでマグロの寿司を食った覚えがあります（笑）。しかし、その輸出を止めるという事件があった。それがまた輸出だけ止めると、国内の問題があるので、国内のほうももちろん調べたわけです。

そんなようなことから、このまえ申しました燕の金属洋食器——ナイフ、フォーク、スプーンの類——の関税引き上げの問題

があって在京アメリカ大使館の係官を連れて燕に行ったわけです。燕のほうでは、市長さんから商工会議所の会頭とかみんな大変な鳩首協議してやった。本当にこれはびっくりしたのは、作っているところが、小さいところは普通の民家の小屋みたいなところの一角で作っていたり、労働者が中学校の制服制帽を着てやっているわけです。それを若年労働者じゃないかと言われるかもしれないけど、これは中学校を卒業しても制服制帽を着ていたいんだとか説明してくれとか何とかいう話で（笑）。

北岡 本当はどうなんですか。

宮崎 本当はそうなんですよ。当時、着るものがなかったんです。いろんなのを見て回って接待して帰したんですけど、ものすごい安い値段で出していたわけです。結局、関税は上がったんですけどね。アメリカで、景品なんかで配っていたらしいですね。これじゃあ、ナイフとフォークを毎日食わないと消費しきれないとか言われて、結局関税は上がったわけです。今度は品質のいいものを出すようになったわけですけど、そんなような細かいことがたくさんあったわけです。

北岡 さっきの原爆マグロの輸出は結局、止めたんですか。

宮崎 一時止めたんです。ガイガーカウンターで調べて、何でもないのでもた出したわけです。

北岡 放射能があるから止めたんじゃないかと、その疑いの為に一時止めて。

宮崎 そうです。あるかもしれないから、と思って。

北岡 国内では、それは補償問題とかになったんですか。

宮崎 ならなかったですね。漁師のほうはなかったですけどね。当時、原爆に関する、あるいは放射能に関する知識はないわけですからね。何とかかさんという漁師だけが死んで……。

北岡 確か久保山〔愛吉〕さんという人ですね。

宮崎 他の人は毎日頭を洗ったりなんかしていてね。頭を洗っていた人は全然なんでもなかった。その人はいちばん不精で、全然洗わなかったんだって。だから、そういうことがあったらしいね(笑)。

北岡 しかし、第五福竜丸事件は、日米関係ではかなり重大な事件だったですね。

宮崎 そうです。政治的に問題だし、経済的にもそういった問題が起こったわけです。

北岡 政治的には北米局がやるわけですか。

宮崎 当時は北米局はあったかな。アメリカ局ですね。

黄田〔多喜夫〕さん、湯川〔盛夫〕さん、牛場〔信彦〕さんの印象ですが、まず黄田さんは、私は通産省に行ったときに、はじめ通商局長、そのあと通商監——次官と局長の間——になった人で、それから経済局長の前に、終戦連絡事務局の政治部長だったわけです。だから、いろんなところでお仕えたわけですが、一言で言えば、竹を割ったような非常に男性的な人で、物事の本質をパツと掴んで、スポツと言うのが非常にうまい人なんですよ。ただ、それだけにものを割り切りすぎるような面が若干あります。持って行き方によっては結論が変なふうになる恐れがある。

そのときじゃなくてずっとあとだと思っただけでも、いまのEUの前身、欧州炭鉄共同体とか関税同盟ができたかかっていった時期です。ガットの例外規定として関税同盟と自由貿易地域という規定があるわけです。その条項で認められると、関税同盟の中で、いわゆるガット一条の例外として、無差別待遇の例外として関税同盟の中だけでは関税を下げたり無税にすることが出来るということになるわけです。その問題について話をしていたら、黄田さんがいきなり「小泥棒はいけなくて、大泥棒はいいということか」とかなんとか言われて、「いや、そうじゃなくて、結婚し

ていればいいんだけども、野合はいけないという意味です」というようなことを言って、それは分かったような顔をしていただけ(笑)。非常に竹を割ったような性格の方ですから、ある政治家と合わなくて、次官になってすぐ辞められたんです。

それから、湯川さんも経済局長のときに私はずいぶん長い間お仕えして、当時アメリカだけ特別で、在京米大使館の参事官にウエアリングという大変な大物の参事官がいます。湯川・ウエアリング会談というのが毎週一回あったわけです。そこにずっと席について、話を聞いたり、ちやうどその頃に前に言いました繊維の問題で、日本からアメリカへ綿製品がたくさん輸出されてアメリカで問題になって、日米の綿製品取り決めの最初の交渉が行われたわけです。交渉はワシントンで、当時の島重信公使とアメリカの誰だったか忘れちゃったけど、との間に行われて、湯川さんは本省で訓令を出す立場にあったわけなんです。いまちょっと名前を失念したけど、通産省の通商局長、繊維局長が国内ではカウンターパートになって、もちろん紡績業界とか綿製品輸出組合とかあっていろいろとやったんですが、その交渉の一端をやられたんです。その交渉や湯川・ウエアリング会談からみても、非常に手堅い方なんです。

どっちかというトブスツとしていて、一緒に横浜まで車で何かのときにお供するとき、これは大変だな、車の中でどうしようかと思っただけ(笑)。だいたい剣道の話とお酒の話以外はニコニコしないという伝説が出来上がっていました。しかし、車の中でずっと剣道の話をしているわけにもいかないしね。この方は手堅いし、頑張るところは頑張るんですよ。

それから牛場さんは何回もお仕えしたんですが、この方はもともとは革新派の官僚の一番下のほうに属していて、私が外務省に入った頃は政務四課——欧州担当、ドイツ担当の課の事務官だったわけです。戦後一時辞められて、木内信胤という、エコノミス

トなんだろうけどいろんなことをやっていた人が戦後、為替管理委員会の委員長になったわけです。その為替管理委員会の事務局長として復活された。それから後に経済局長に、そのあとで次官なられた。経済局長としてだけじゃなくて次官としても、それから対外経済担当が国務大臣になったでしょう。あのときは私、外務審議官で、いろんな意味でお付き合い願ったんですが、この方が戦争中の言動は別として、非常に頭のいい方なんです。頭がよくて物分かりがよくて、耳学問ですが非常に知識は豊富なんです。それから経済界にえらい信頼のあった方です。ですから、辞めてから牛場事務所というのを作って。つまり、辞めた人はどこかの会社の顧問になるのが多いんですけど、牛場さんみたいな人を会社の顧問にするのはもったいないというわけで、経済界の十何社だか何十社が金を出して牛場事務所というのを作ってホテルオークラに事務員を配置して、そこでいろいろ財界の人と、たとえば外務省の私なんかの現役だとかなんかの会合とか、学者だとかなんかの会合の幹旋をしたり、牛場さん自身が考案したり、いろいろなことをやっていた。非常にアクティブに活動していたんですが、それはそれだけ経済界の人に信頼されるようなリソースフルの人だったわけです。

外務大臣に岸（信介）さんがなったこと自体についてははっきりした印象は、あまり覚えてないです。ただ、岸さんという方は、いろんな機会に上司にくっついて話を聞く機会があったんですが、ものすごく頭のいい人ですね。歴代の総理の中で最も頭のいい人じゃないかと思うぐらい、頭のいい人だったと思います。

それから、岸さんは東南アジア、アメリカにずっと行かれるんですが、その当時からもう少しあとかな、「向米一辺倒」という言葉があります、「アメリカに向かう一辺倒」という言葉に象徴されるように、アメリカばかり見ていたのではない、もう少し外交の基盤あるいはホライズンを広くすべきであるというよう

な意見があった。その場合にどうかというと、当時、中国とは別の関係にあったものだから、東南アジアに行くのが流行をなすような時期があったわけで、そういうことのきっかけとなったということだろうと思うんです。

これは話が全然違いますけど、戦後の西独のブランドという首相が後に「オスト・ポリティーク」という政策を打ち出したんですが、それは西側、それまでのアデナウアー以来の政策とちよつと違って、やっぱり外交基盤を広げるという意味で、東との直接対話をしようということを出したのですが、時期としてはもうだいぶちがいますが。そういう意味で、日本としてのひとつの企てであったというふうに思いました。

北岡 岸さんがなられたときに、それまではずっと外交官ですかね。

佐道 そうですね、重光（葵）さん。石橋（湛山）内閣になって岸さんがなられて。

北岡 それ以後は全然外交官は新外務大臣はないですね。特に外交官じゃない人がなっちゃったとか、その印象は特にはなかったんですか。

宮崎 私は鈍感な性格で、特にそういう気はなかったです。

北岡 それからいまのアジアの話ですが、アジアに行っているのはなんとなく恰好がいい、日本がなんかするわけだから。しかし、実際のとこは日本のためにお金を稼いでいたのだというお話がこの間ありましたけども、そういう考えはこの頃もおありだったですか。

宮崎 もちろんそうですよ。というのは、まだアジアの経済はそれほどレベルは高くないわけですよ。日本は朝鮮特需でようやくと経済が上向きになって、とにかく経済の力をつけるということにいちばん大事な時期なんで、それに力を尽くすのが本命であると。ただ、アメリカは他方においているんなことをやってく

れたし、非常に助けてくれたんだけど、例外的に日本に対する要求がいろいろあって、日本からの輸出を抑えたりするようなことも盛んにあったし、アメリカに対するバーゲニングポジションを強くする意味でも、他の国との関係を良くすることは大事なことだという気はもちろんなあったと思うんですよ。

北岡 この間は確か、かなり本音の部分のお話があって、きょうは割合あっさりですから、ちょっと確認したいと(笑)。

宮崎 この前ので非常におかしいと思ったのは、コロンボ・プランなんていうのが出てきたことです。もうとんでもない話だと。物事のウエイトを考えてください、と言いたいがらいなことです。あるいはエカフェ(ECAFE、アジア極東経済委員会)ね。たとえばガット、質問には出てこないんですがアンクタッド(UNCTAD、国連貿易開発会議)というのがこのあとにあるんです。国連のエカフェとかエコソク(ECOSOC、国連経済社会理事會)とか。

その中でひとつだけ、大学で学生にお教えになるときにも考えておいていただきたいのは、つまり国内法との関係なんです。ご承知のようにガットの場合、ガットの第一部は条約なんですよ。絶対、国内法に優先する。第二部は、ガットを成立したときに、もしくはガットに加盟したときに存在しておった国内法で、そのままずっと維持されているものは、その法律のほうがガットの規定にも関わらず認められるという例外があるんですよ。日本の食管法はかなりそれで戦ってきたんだけど、そういうものがなければ第二部の規定も全部条約ですから、国内的にもバインドされるんです。ところが、アンクタッドもそうだし、国連のエコソクにしても何にしてもバインドされないうんですよ。したがって、国内に対するインパクトが全然違うわけですよ。つまり、ガットで何かやれば、たとえば関税を引き下げたらもう上げられない。上げるにはいろんな手続きが要るわけでしょう。自由化したらま

た戻せない。条約上そういうことになるわけですね。ところが、アンクタッドには、たとえば何を言おうと言うまいと、何か言われようと、国内法上はまったく無意味なんですよ。政治的な意味がある場合が多いんですよ。その違いが、外部から見られるとピンと来ないことが多いんです。

これはIMF(国際通貨基金)あるいはOECD(経済協力開発機構)についてもそうなんですけど、OECDのインビジュアルのコード、資本自由化コードというのは条約なんですよ。だから、その条約であるかないかというのは単に法律のテクニカルティのような感じがするかもしれませんが、その結果、国内の法律を直すとか直さないとか、国内にどういう手を使っていくこと、その手が縛られるか縛られないかによってインパクトがまるきり違うということ。

北岡 それは重要ですね。

宮崎 それがよく新聞なんかでも、一部の学者も全然理解がない方があるわけですね(笑)。しかし、それは別として、藤山(愛一郎)外相はあまりよく存じあげなかったです。何回もお会いしたし、どういう人だったかということについては藤山の親父さんのほうは印象があるんです。藤山雷太。藤山雷太さんという人は佐賀県出身の財界の大物になった人で、大日本製糖やなんかをつくった。そこに父親が佐賀県人会のなんとかで年に一回呼ばれて園遊会に行つて、その御馳走を食べるのがもう非常に楽しみだったね(笑)。白金に藤山雷太郎ってでかいのがありまして。

北岡 ご家族でいらっしゃるわけですか。

宮崎 父に私がくっついていったと思いますけど。この藤山雷太という人は偉い人だなと思って(笑)。

藤山愛一郎さんは国会やいろんなところでお目にかかったけども、あんまり印象に残ってないです。

それから賠償交渉ですけど、こういう財界人が起用されたのは

事実なんです、これも一般論として賠償交渉に限らず、何の交渉でもその前の準備段階はものすごく手間がかかるし、膨大なんです。それがある程度できてないと、誰がやってもできないわけですね。したがって逆に言えば、その準備段階ができてほとんど話が決まったときには、サインするために誰が行ってもいいんですよ。

逆に、大物が行った結果、話の糸口が開けるといえることはあるんです。その場合に、それをものにするために大変な交渉が必要であったと。ですから、小林〔中〕さんと偉い人が最後に打ち上げに行くというのは、ちょうど、帝国ホテルなんかの偉いコック長って何もしないで、最後にデザートのカキのいちばん上にちょこんとサクランボを乗っける、しかしいちばん高い月給を貰ってね。それで監督してやっているから。だけど、実際上やるのはそういうことだということはあるでしょう。だから、財界人は国内ではインフルエンスがありますから、その人がやって決めたということは国内では通りやすいわけでしょう。これは財界だけでなく政界もそうですけど、そういう意味で私なんかは誰が行こうと大して感じなかったです。

北岡 交渉は、大使が当時なさってらしたお仕事と何か関係があったんですか。

宮崎 賠償交渉ですか。

北岡 はい。

宮崎 直接はまったくありません。ただ、省内でのいろんな議論は間接的に聞いておりました。

北岡 いまご存命の方で、中川〔融〕さんとかは関係しておられたと思いますね。

■ ジュネーブ国際機関日本代表部へ

宮崎 前に言った田中三男さん。賠償部というのがありまして、その前は太田三郎さんとかね。

外交青書については記憶ありません。係が違ったものだから。コムの規制の緩和は経済二課というところがやっておりまして、このへんについて私は記憶がありません。

東京の話はそのくらいで次にジュネーブです。ジュネーブについての最初の質問は、河崎一郎公使、青木盛夫大使の印象ということなんです。河崎一郎さんという方は非常に外交官で珍しい方だと思っただけで、まず言えることは、非常に語学がうまいですね。英語だけじゃなくて、仏・独・露、みんなできるんですね。それで、外国人をディナーに呼んだり話をしたときに、ユーモアを交えてなかなか社交的なんですけど、日本人が来ると本当にブスツとして何も話をしないんです。脇についていてハラハラして、余計なことを口出して何かするようになります。外国語で話をするとユーモアも出てくるんですけど、日本語で話をするとユーモアを出す気もないという（笑）。

それで、英語で本を書きましてね。『ジャパニーズ・アー・ライク・ザット』とか、『ジャパン・アンマスクド』という本が話題になって、それがひとつのきっかけでアルゼンチン大使を最後に辞められたんですけど、その本の内容も大して深いものではないと私は思います。しかし、本省向きじゃなくて在外向きの方じゃなかったかと思えます。

北岡 本省向きか在外向きか、そういう傾向は基本的にあるんですか。

宮崎 まあ、ありますね。

北岡 いつ頃分かるんですか。わりあい若いうちから分かるんですか。

宮崎 若いうちから分かりますよね。あとで言いますが、そのほかに会議室向きだとか、調査マン向きだとかいろいろ。

北岡 あるいは、そういうのを意識して区別して使い分けておられるんですか。

宮崎 あんまり使いわけてはいないと思う。使い分けていたらもっとうまく行っているだろうね(笑)。なかなかうまくいかないんですよ。いろんなほかの、言葉の問題とか畑の問題があるものですから。

それから、青木さんという方は、戦前の古い時代の青木外相という外務大臣がいたんです。その息子、次男です。だから男爵です。それで金持ちなんですよ。秋田県かなんかに青木農場というのがある。たいへんなお洒落な方で、ジュネーブへ来る前に何かあって、ストロークだったのかな、言葉が不自由だったんですよね。来たときは、どもったりしちゃってね。ちなみにこの方は、牛場さんと一緒に革新派だったんですよ。革新派の人はその他にもいるんだけど、個人をとってみると、なかなか有能な人が多いんですが、青木さんという方も有能な方だと思います。非常にお洒落で、特に物事のウエイトを見極めるのが早かったですね。それから、それを利用するのが。

当時、ILO〔国際労働機関〕の問題で総評とかが騒いで、なにか言うとう組はILOに持ち込むということがあった時代で、ジュネーブの代表ですからILOも担当しているわけです。政治的な問題のときはILOを担いで、国に帰っては調整する。総理にもいろいろ話をしたり、ガットのときはガットでトップに接したり、なかなか使い分けがうまいような方でした。

北岡 当時も「あの人は昔、革新派だった」というのはみんな知っているわけですね。何か共通点はあるんですか。なんで牛場さんは革新派だったんでしょう。

宮崎 それはよく分からないです。その当時はよく考えてやった

というよりも、なんとなく人脈でそうなったという感じが多い……。陸軍とくつついちゃったんでしょうね、酒なんかを飲んでいる間に(笑)。

北岡 大使はその反対側に行かれたわけですよ(笑)。

宮崎 行かれたというか、置き去りにされて一人だけ反対側だったんです。その他、内田〔藤雄〕さんという官房長、ドイツ大使をやった人とか相当優秀な人がいたんです。一人一人をとってみると、どうしてそういう人が革新派になったのかと思うような。

その間代表部には、セカンドが佐藤正二という中国大使をやった人が、参事官兼総領事でいたわけです。この人は後に次官をやったんだけど、アドミニストレーションというか、とりまとめていくのが非常にうまいんですね。しかし、外向きじゃないんですよ。言葉が下手なんです。フランス語なんだけども、フランス語も大してうまくなって。だけど、非常にアドミニストレーターとしては立派な人だし、のちに次官になったような方です。その下にいろんな書記官がいたわけです。

ジュネーブの代表部でカバーしている国際機関はたくさんありまして、国連の欧州本部があってその関係もありましたし、ILOがあったわけです。ILOの担当は労働省から来ていた人で、最初は別の人、次に北村〔久寿雄〕って、オリンピックの1500メートルで優勝した人が東大を出て、十六年で労働省に。

北岡 ロスアンジェルスカななかで。

宮崎 そうそう。その人がILO担当の書記官でいて。それからUPU〔万国郵便連合〕・ITU〔国際電気通信連合〕という郵政関係の書記官が左藤恵——あとで法務大臣をやった——がいますね。それから、いわゆる欧州国連から赤十字とかそういったような関係をやっていた松永信雄がいたわけです。私がガットを中心とする経済関係をやっていたという構成です。

それでガットを一人でやって、その他に手の空いたときには雑

多な会議がたくさんありましてね。たとえば、インターナショナル・スタンダリゼーション——国際標準の会合だとか麻薬会議まで出させられたわけです。そういうのはまったくやる気がないと言っただけで、やれと言われるから出ているんだけれども、麻薬のエキスパートになる気がないものだから、厚生省の人は来ても全然言葉がでないでしょう。いろんな資料をもってきて説明してやってくれというので、ステイトメントを書いて、内容が分からないからその人に聞いて一所懸命書いて。ところが、麻薬の学名が二行ぐらいに渡って、どこで切れているのか(笑)。あるんですよ。それをとにかく読み上げてお役目御免だと思っただけで、レセプションかなんかのときにどこの国のエキスパートにつかまって、「おまえがこう言ったのはどういう意味だ」とかね(笑)。

主たる任務はガットなんです。あとでガットに関することをまとめてお話しします。

ジュネーブはもちろん観光都市でもあるし金融都市でもあるし、綺麗な町ですが、非常にこぢんまりしたところなんです。それで、ジュネーブ人のフランス語は非常にのんびりしたフランス語なんです。ジュヌボアという、歌をうたうような、「ヴレーヴ」というような調子でやってくる。

もちろんその当時いろんなところに行きましたし、いまでもそうかどうか知りませんが、スイスというのはご承知の通り、戦争があるたびに中立を守って、双方に武器を売ったりして、戦争が終わると時計を作ったりして、戦争があるたびにだんだん経済が上がってきたと。オーストリアが戦争があるたびにへこんじゃって、断然格差ができたという国なんです。非常に特別な国で、国民皆兵で、男はみんな鉄砲を自分の家まで持って帰っているんですが、戦争があるたびに食料で苦労したこともあって、アルプスの土手っ腹に穴を開けて小麦を溜めてあるんですね。それ

がどのぐらい溜まっているかなんていうことを調べようとしたところ、この農務官が国外追放になったぐらゐの国家機密なんです。ところが、溜めておくのと古くなるでしょう。したがって、古くなつた順にその小麦を使ってパンを作る義務があるんですよ。したがって、スイスのパンはまずいんですね(笑)。だから、ジュネーブのすぐ隣は、出るとフランスですから、よく隣町までパンを買いに行つて。スイスは、いろんな意味で非常に面白いところ

です。それから、スイス人の人生観がちょっと変わっている感じがしたんです。これは科学的根拠ではなくて僕の偏見ですけど、だいたいヨーロッパの国でいま以上にでかくなかつた国はほとんどないんですよ。ノルウェーとスイスぐらいです。あとは、たとえばデンマークもかなり強かつたし、ポーランドなんか占領していたり、イタリーはもちろんローマ帝国があつたし、スペイン・ポルトガルは世界を制覇していたし、オーストリアは大帝国だったし、フランス、ドイツだってそうでしょう。スウェーデンだって盛大なときはロシアと喧嘩したり。フィンランドは小さかつたですかね。しいて言えばベルギーね。しかし、ベルギーもコンゴを領有していた。その小国民意識というのが共通として感ぜられたわけですね。

特にスイスの場合は、金儲けというのは非常に大きなウエイトを占めるんですね。スイスに、非常に大きな有名な芸術家というのは少ないんですよ。もちろん、いないことはない。たとえば文学では『緑のハイネリッヒ』を書いたなつかいものとか、それから建築でコルビュジエとか、ないことはないんだけど、わりと少ないんですよ。したがって、子供のときに大統領になりたいたいなんて気を持つのはわりと珍しい。大統領はカントンごとの輪番制で順番になるんですよ。私が行っていたころの大統領は、郊外からベルンの町まで電車で帰っていたわけですね。その当時、

電車に一等車、二等車、三等車とあったんです。いまは一、二等しかないと思いますが。そうしたら、大統領はいつも三等車で帰っておった。「なぜ三等車で帰るんですか」と、大統領「四等車がないから」という(笑)。そのほか、スイスはいろんなところが面白い国ではあるんですけどね。

北岡 昔、『第三の男』という映画の中に、スイスの何百年の平和は何をつくり出したかという「鳩時計だ」という有名なセリフがありますよね。

宮崎 まあ、時計をつくり出したですね。精密機械ね。しかし、武器も作っているんですよ。

北岡 マッカーサーが「日本は東洋のスイスタレ」ということを言ったときに、スイスが全然誤ったイメージで日本に伝えられたわけですよ。どうしてそんなふうに思ったんでしょうね。スイスは武装中立ですよ。

宮崎 スイスは武装中立で、東工大の政治学の先生、永井陽之助さんの本に確かあったと思うんだけど、スイスというのは山国で、スイスを通して攻め込むのと迂回するのと、コスト、ベネフィット、アナリシスを常に攻め込む側に対してマイナスにするように、少なくともそれだけの兵力を常に有するという政策をとっていた。だから、ヒットラーですらもスイスを通していくのを躊躇したというよりやらなかったわけでしょう。その前の、たとえば三〇年戦争ぐらいのときから、もうずっと長い間スイスはそういうことで中立を保ってきたわけです。だから、ハリネズミみたいなところですよ。日本が東洋のスイスタレということになったら、ものすごく武装しなくちゃいけません。

北岡 大変なことなんです。

宮崎 マッカーサーは知らなかったんでしょう。

北岡 長年、日本の国民の好きな国というと、トップリストにスイスは必ず上がっていたんですよ。

宮崎 景色はいいですよ(笑)。

北岡 景色はいいですけど、しかし住んで徴兵があるのは大変だと思います(笑)。

宮崎 それから、アイクの訪日がダメになったとかこういう話ですが、テレビで見ている、全学連なるものが騒いでいたでしょう。ところが、外で見ているとまったく分らないですね。革マル派だとか中核派だとか。

北岡 まだそれはなかったです。当時は全学連ですね。

宮崎 全学連か。何か知らんけど、全学連は何を主張して何をやるうとしたか、全然分からなかったですね。それから安保でも、安保改定でしょうか？ いい方に改定するわけですよ。前に比べたら、日本にとってプラスになるような感じ。それに対してどうして反対するのかと、全然わからなかったですね。

北岡 外国の方との間に、それが話題になることってありましたですか。

宮崎 あんまりなかったですね。というのは、ジュネーブにおりますと、あんまりそういう人の国の内情について話をしないような空気があったわけですから。

北岡 やっぱ国際都市特有のそういう……。当時、アメリカに對してはやっぱりいろいろ聞かれて困ったようですよ。いったい何が起きているんだって。

■重要だったガットの国際収支委員会

宮崎 ガットといっても、年がら年中会議をやっているんですよ。その会議というのは細かい会議で、なんとか委員会、なんとか委員会というのがほとんど毎日のようにあるわけです。ちなみに、ガットで回数を勘定してないんですけど、OECDの場合は年間、私のいた頃で一五〇〇回あるわけですよ。そういう会合が積

み上がってきて、OECDの場合は理事会に行くわけです。ガットの場合は、理事会に行ったりいかなかったりする。そういうたぐさんの会合というのがあって、その中で、いわゆる注目のようなものはわずかしかないですよね。だけど、そっちが重要かという点も必ずしもそうではないんです。それが、外部から見ると会議室は何をやっているかということが分からない、ひとつの大きなポイントだと思えます。

ガットの場合は、総会は年に一回、理事会というのは年に二回以上あったと思います。閣僚理事会というのが何年かにいっぺんぐらいあったと思います。いろんな委員会があって、その当時、日本としてわりと重要だった委員会に国際收支委員会というのがあったんです。BOP委員会。それはなぜかといいますと、この前、関税交渉で日本が関税譲許をしたという話をしましたけど、当時アメリカとの関税交渉のときアメリカに、アメリカは日本に対する関税譲許はキャッシュである。日本がアメリカにくれる関税譲許は手形である、ということがよく言われたんです。というのは、日本は当時、国際收支が悪いので、国際收支上の理由で輸入を制限することができたわけです。これはガット一二条というのがある、それで日本はほとんどすべて輸入を制限していたわけです。

前に通産省のことでお話ししたように、二〇億ドルの輸入規模のうち、一九億ドルは私のサインがないと入らないという。その後はだんだん緩んできたわけです、貿易量も増えたと。だけど、量的輸入制限は規定はなんでやっていたかという点、ガット一二条の国際收支上の理由で輸入を制限していたわけです。

ちなみに、ガットの建前というのは、ガット二一条で輸入数量制限はやっぱりいけないことになっているんですね。国内産業の保護は関税でやりなさい。ただし、いろんな例外がくっついていて、その例外に該当する場合には輸入制限をやってもよろしいと。

輸入制限をやるなかでいちばん大きなのが一二条。当時はドイツ、日本をはじめ多くの国が国際收支上の理由で輸入を制限していたわけです。したがって、国際收支がよくなれば輸入制限はだんだん解除しなくちゃいけないわけでしょう。したがって、バランス・オブ・ペイメンツ委員会というのは非常に大事な委員会だったわけです。

つまり、日本に対してやられる場合もあるし、一国を責める場合もあるんですよ。たとえば、ドイツを責める場合もあって、ドイツが日本よりも先に国際收支状態がよくなったから、自由化を迫られたわけですね。そのドイツのバランス・オブ・ペイメンツ委員会のドイツ部会というのかな、ドイツを対象にした委員会をやったときにドイツまでメンバーが全部行きました。ところが、ドイツが対応したのは、エアハルト経済相自らが出てきた。そのくらいのウエイトのあった委員会なんです。日本は、ドイツがだんだんどうやって自由化をやっていくかというのを見ながら、日本のこれからのスケジュールを考えるとというようなよすがになったわけです。

そういうようなことがかなり問題であったのと、それからいわゆるその差別待遇というかな、三五条の問題とかね。これはヨーロッパの主な国が三五条を援用して、撤廃問題がありました。それから、制限的商慣行のパネルというのがありまして、要するに公取やなんかのやっているようなパネルにも私はエキスパートとして出て、「事務局のやつが、ここにたまたまジュネーブにいるやつがどうしてエキスパートなんだ」って、「いや、これは通産省にもいて何とかにいてエキスパートだ」って川崎さんかなんかが言って、強引にエキスパートとして出て、当時の公取委員長がたまたまいなくて公取委員長代理と、在仏大使館の書記官だった両角（良彦）という（のちに）通産次官になった、その三人で出て、私はスポークスマンで勝手なことをベラベラ喋って、公取委員長

代理は本当に言葉がわからないわけです。「全部頼む」というので頼まれてやったり、ダンピングの委員会のエキスパートのパネルも出たわけです。

ダンピングとここでもお使いになるんですけど、ダンピングは厳密な定義があるんですよね。その定義以外はダンピングって言わないんです。よくアメリカが日本に対していろんなことを言ってくる場合に、ダンピングで攻めてくる場合、ダンピング税をかけるというやり方でしょう。ところが、さっき言った金属洋食器なんて、関税を上げるといやり方ですよ。それから綿製品はクォーターを作っちゃうという、自主規制をやるというやり方でしょう。まだたくさんあるんですけども、ダンピングというのは、一言で言えば日本の国内価格よりも安い価格で輸出しているという場合。その他二つ三つ条件があるんですけど。ですから、日本の国内価格、いくらで売られているか。それと比べて輸出価格が安いんだということを証明しなくちゃ、本来ダンピング税の課税はできないんですよ。したがって、ダンピング税の課税は、簡単にはできないことなんです。

ところが、日本に対してアメリカが何か制限するというと、すぐ「ダンピングか」という話になるんですけど、ダンピングでやられたという例は非常に稀なんです。ただ、ダンピングが非常に難しいのは、為替が変動するでしょう。そうすると、ある時点では国内価格を割るとか、いろんなことがあるわけですよ。だから、非常に難しいわけです。ちなみに、日本はダンピング税を外国に対してかけた例はほとんどないですね。

北岡 いまのお話は、大使の長い経歴の中で、初期の頃と最近と非常に違うと思うんですね。為替の変動もそもそも以前とは違いますし、いまはどっちかというところ、アメリカがダンピングをかけるかというの脅しといいますか、それは比較的近年のことですか。

宮崎 ダンピング税というよりも、日本からの輸入を押さえるためにいろんな手を使ってきたという。可燃性織物法というのはまさに量的に押さえちゃうという意味でしょう。それから綿製品取り決めというのは、二国間の協定で枠を決めて、綿製品ごとに何を幾らと。たとえば別珍は幾らとかなんとかは幾らというふうに決めるという包括製品協定、これは二国間の取り決めですよ。それで攻めてくるとか、いろんな攻め方をしているわけですよ。その場合に、アメリカが日本に対してきたのは、ダンピングというところで非難したんじゃないかと、要するにたくさん入ってきているのが困るんだという国内産業の保護ということであって、それです。それから、それに対する手段もたくさんあるわけですよ。また、日本の対応もたくさんあったわけですね。それはだから、輸入制限運動と言ったのが、包括的にはそういうことだと、いちばん正確だと思うんです。アメリカの対日輸入制限運動の中にダンピングもあったという。

北岡 この当時の仕組みのことはいろいろ具体的に分かりやすくおっしゃっていただいたんですが、大使が初期にジュネーブにおられた頃、日本の場合は具体的な品目や相手国で、どうい問題が大きかったんですか。

宮崎 日本の場合いちばん大きいのは、日本の輸入はがんじがらめに輸入制限していた国際収支、それを外せということですよ。

北岡 早く外せと。

宮崎 それがいちばんでかいですね。

北岡 じゃあ、それを防衛しておられたわけですね。

宮崎 そうそう。それから外す場合にも順序があるでしょう。それがいちばん国内でも問題だったわけですね。

北岡 そうですよ。対外収支の不均衡はひとつですけども、物はたくさんあるわけですよ。それがどういふう調整といいますか……。

宮崎 国際収支の理由でいわゆる自由化して、輸入制限している品目がたくさんあるわけですよ。逆に、日本の都合のいいものを、入れなくちゃいけないものを自由化していたわけですよ。たとえば原料ね。綿花とか鉄鉱石とか、そういうったようなもの。それから、日本ではとても作れないような餌用のトウモロコシとか、そういうものを自由化しておいて、マニファクチャーズというか、農産物と製品はほとんど輸入をpushしていたわけですよ。それをだんだんに自由化していかなくちゃいけないわけでしょう。それは国内でも順序を決めてやっていかなくちゃいけない。タイミングの調整が非常に難しかったわけです。

北岡 向こうでデフレンドしておられるときも、これはなぜと、国内の動向を睨み合わせて議論されるわけですね。

宮崎 そうそう、そうそう。

北岡 そろそろ回復してきたんだから早く自由化しろ、というふうなことは、いらっしやったのは五八年、昭和三十三年ですが、その頃からかなり強いプレッシャーが……。

宮崎 はじめのうちはなかったですけどね。

北岡 では、いつ頃からでしょうか。

宮崎 いつ頃からかはちょっと記憶してませんが、初めのうちはドイツが槍玉にあがっているのを見ていたわけです。自由化せいで言われて、エアハルトなんかが出てきたりする。それで日本に来るなどということを感じて、東京に対して「覚悟せい」ということで尻をひっぱっていたんですけどね。

当時、日本はもっと長い間それでひっぱれると思ったわけですよ。ところが、IMF八条国になっちゃうと、まさにこっちのBOPは使えなくなるんですよ。いろんなことがあって、いずれそうなるんだぞということ、さかんに問題を提起しておったということです。

その他たくさん委員会がありましたし、それから、つまり輸出

というか、日本の国内では盛んにさわがれた、アメリカのいわゆる対日輸入制限運動というのがありまして、それが新聞に出るだけでも、それはマクロ経済的に言いますと大きな問題じゃないんですけどね。金属洋食器が少しでなくなっても、燕の人には大それたけども、日本経済に対してはそれはどうってことはないわけですよ。だから、コロンボ・プランが別にどうってことないのと同じようなことですよ(笑)。

北岡 (笑)。それはそうでしょうね。

宮崎 ところが、自由化というのは、日本の経済の産業構造にかなり大きなインパクトがあるわけです。ガットの効用はそういうところであって、それが早く行われるか遅くなるかによって、ずいぶん違ってきたわけです。その場合に、いちばん対応が遅かったのが農産物問題。農産物問題のうちのひとつは、いわゆる食管問題ね。食管がガット上認められるという議論を展開せざるをえなかったわけです。ずいぶん私はやりましたけど、ステイト・トレーディングの規定というのがガットにあるんです。それに順応してやらなくちゃいけないということになるわけですが、食管法の場合は、日本がガットに加入する前からあったわけですよ。戦争中からあった。ところが、その後、何回も改定しているんです。ガット加入後の改定したやつは、果たしてガットに優先するかしないかという問題は、法律的には非常に問題があったわけです。しかし、それをがんばっちゃって食管はいんだということにしちゃったものだから、ずいぶん後々まで。いまだに残っているでしょう。その他の農産物で非常に早く自由化したのは、うまく行っているんですよ。たとえば鶏卵とかニワトリ関係は自由化したから。

北岡 そうですね。値段も低い位置で安定していますね。

宮崎 それからたとえばオリーブなんかはそうですね。オリーブというのは、池田勇人の英断で自由化したんです。これはなく

なっちゃったという意味で、だけでも。もっと古い話だと、明治の時代で完全に国産を諦めたのは綿花ですよ。輸入に切り換える、綿製品を作って輸出するというのは、明治何年かに大英断ですよ。綿花の農家は大変だと思うんだけど。

北岡 オリーブは難しかったんですか。

宮崎 難しかったです。

北岡 それは、どこにどういう影響が。

宮崎 小豆島とかね。

北岡 しかし、コメと比べて……。

宮崎 だってコンニャクが自由化されなくて、最近まで残っているでしょう。あれは福田（赳夫）、中曾根（康弘）、上州連合に阻まれて。

北岡 昔、「バノコン」という言葉がございましたね。

宮崎 そうそう。バナナ、コンニャク、ノリ。

北岡 コンニャクはまだ残っているんですか。

宮崎 いまは知りません。ごく最近まで残っていたんですけどね。北岡 食管法は要するに、マイナーなディビジョンであるか、根本的に新しくなっているかというところで議論が図れるわけですね。非常に大きく変わっていけば太刀打ちできないわけですね。ちょっと修正だから古い制度なんだと言ひ張られたわけですね。

■ガットのパネルで議長を務める

宮崎 そういうことですね。そういうことを言わなかったほうがよかったんじゃないかと思うんだけど、国内からすれば、そんなことでも言って、とにかく自由化を少しでも遅らせることが、当時それは大変な圧力ですから。当時の経済界からみても、輸出産業は当時は繊維とか雑貨でしょう。労働集約的なもので力がないんですよ。それから、輸入で打撃を受けるのは、鉄鋼を始め

とする自動車、機械、化学、大変なものですからね。まさに戦後復興しようとしているときにですから。

その後、本省に帰って課長になってからずっとケネディ・ラウンドをやっていましたから、そのときにまとめてお話ししたほうがいいと思います。

当時問題があったのは、アンクタッドが非常に新聞なんかには大々的に出ていますし、いわゆる途上国のほうの意向を代表するものとして、大変なプレッシャーだったわけですよ。初代の事務総長がプレビシュという、アルゼンチンの大蔵大臣なんかをやった人なんです。事務局は専ら途上国を援助するために作っているものなんです。アンクタッドの会合もジュネーブで行われたことがあるんです。全部じゃないんですが、一部が。そういうのに出ていたけど、そういう会合に出ると、本当に嫌になるくらい、途上国は先進国に対して悪口雑言の限りを尽くすという。援助する政治的意志がないとか援助するのは義務であるとか、大変な剣幕なんです。そういう論に対して、あまり正面切って反論すると火に油を注ぐようなことになるので、先進国も表向きには反論しない。ただ、言うことをなかなか聞かなかったわけですね。

アンクタッドの事務局が当時、主張していたことがいくつあるんですが、プレビシュがいちばん重点を置いたのは、ひとつは一次産品の価格の安定ないし上昇ということ。それから、途上国の国内産業の育成。それから、途上国の製品輸出に対する特許関税の設定、こんなようなことを言っていたわけですね。ただ、結果として、プレビシュがいちばん重点を置いた一次産品の価格上昇とかは、つまり国内産業を作るといえるのは、途上国は国際収支が慢性的に悪い、それを改善するためには、先進国から買っているものを国内で作ったほうがいい。たとえば、ブラジルに鉄鋼工場を作ったでしょう。先進国で作って輸入しているものを後進国で作って、輸入代替産業を作るといえること。それから、輸出のほう

ザット」とかね。日本語で何というんだろう。

股野 「以上、申しましたが」ですね。

宮崎 あるいは Nevertheless とか However とか、それから先に本音が出てくるんですね。前のほうだけ聞いていると、全然本音と違うことを言っているわけ。だから、それは間違える。

もうひとつ、もっと大きな間違いは、会議でよく後進国の代表はワアワア、ワアワア言うんです。それを聞いて感心しちゃって、日本はなんでもっとワアワア言ってくれないんだということをよく言うんです。ところが、第二点の間違いの基本は、会議というのは考えれば分かるだろうと思うけど、だいたいにおいて議長と事務局と主要国が前の日か前の晩に集まってシナリオを作るわけです。この会期でどこまで進んで、どのへんに話を落とすとか最後までまとめるかとか、その場合にこういう反対が出るだろうけど、これをどうやって裁こうかなんていう打ち合わせするわけですよ。打ち合わせ参加できなかったか、もしくは打ち合わせで結局敗れたほうが、会議の席上でワアワア言うわけです。いちばんワアワア言うわけですよ。というのは、ワアワア言わないと国に帰って言えないわけでしょう。だから、ワアワア言うのが非常に立派なのじゃなくて、負け犬の遠吠えだということが多いんです。

北岡 松岡洋右みたいですね(笑)。

宮崎 それがよく誤解されるわけなんです。最初に私がガットのことをやっていた当時は、本当に一人でやって、あとで吉崎君という、のちに通商局の次長からテキサスインストゥルメントの会長になった通産省の男と、私の二年下かな、それから滝口君というのちにベネズエラの大使になった大蔵省の男と、杉本君というガットの専門家がアシスタントに来てくれた。

最初のうちは一人で書類の整理からやっていたんだけど、その当時は前の晩の打ち合わせ、議長を中心とする主要国の打ち合わせ

せに参加できないわけですよ。ガット三五条で、ヨーロッパの多くは日本をボイコットしているわけでしょう。だから、翌日何があるかということが、その前の晩の打ち合わせを聞かなかつたら本当に分らないんだということが分かったわけですよ。それを聞き出すために誰に聞けばいいんだと。個人的にというのもあるんだけど、日本といちばん利害が一致する回数が多かったのがカナダだったんですよ。わりと自由貿易のほうでね。それでヨーロッパとかはかなり対立して、アメリカとも一線を画している。ときにアメリカ。そういった事前の会合に出た人からその話を聞いて、やるということをしるを得なかったわけですね。そういう時期がずいぶん長い間、続いたわけです。だんだんに日本も旦那衆になって、会合に出られるようになった。いまでは、出たくなくても呼びにきますけどね。コソボなんていうのは、出たくなくても呼ばれているわけでしょう(笑)。当時は、本当になけないの金をはたいて飯を御馳走したりなんかして取材するわけですよ。

国際会議は必ずそういうことがあるんだということは、日本の国内で業界の会合ね。たとえば紡績業界とか鉄鋼業界とか、いまは独禁法の関係で大した結論を出さないんだけど、そういう会合をやるときには、事務局と十大紡とか、鉄鋼でいえば新日鉄とどこごと五社とか集まってでしょう。その他大勢が何といつてもこういうふうに分らないか決まるわけですよ。国内の政治もある程度、根回しみたいのがあるでしょう。国際会議でそういうことがあることがどうして分らないんだ、というのが不思議なんですよね、われわれは。各省の人も新聞社も分らないし。

北岡 各省の人が分らないんですか。

宮崎 分らない時期がずっと続いていたの。

北岡 最近少し違いかもしれない。

宮崎 最近はずいぶん違いかもしれない。

北岡 日本が三五条の当時でカナダから話を聞かなきゃいけない。しかし、前日に打ち合わせは、かなり遅くまでやっているんじゃないんですか。

宮崎 やっているんですよ。

北岡 そのあと時間を作って？

■国際的な会合でのタクティクス

宮崎 朝。それから、いわゆる議長というものの役割が、国内と国際的にはずいぶん違うと思うんです。国際的な会合で、議長の権限によってずいぶん方向が違ってくるんですよ。だから、なんかの会合のときにどういうふうにするかということは、議長がどういうふうを持っているかというのを掴まなくちゃいけない。しかも事務局は議長にインプットしているわけですから、事務局の担当官ともずいぶん一所懸命仲良くするようにして情報を取ったりして、初期の段階は大変な苦労がありました。

それから議長をやって、その当時は日本は、「JAPAN」という札を立てて発言できるのはガットぐらいしかなかったわけ。国連なんか偉い人しか出ない。だから、若いときからやらされたという意味では、僕は非常に珍しい例だと思う。その場合の会議というのは、いろいろタクティクスがあるんだけど、会議屋というのは先輩は萩原さんぐらいまで会議屋なんだけど、それから断絶があるわけですよ。

会議屋が育っていなかったんだから最初から開拓しなくちゃいけないんだけど、会議屋というのはたとえば本省から訓令みたいに来るでしょう。訓令が来たときに、さっきの議長や事務局やら何やらで日本の立場はどこにあるかということを見極めて、日本の立場が、例えばいろんな出てくるメンバーの中で最左翼であると思いますね。その場合は、いちばん先に手を挙げてワーと

言っておかないといけないんです。そういうと、今度は反対の声があがり、だんだん議論が収斂してくるでしょう。だから、それをのんびりしていると、議論が収斂したあとにこっちの議論を出す立場違いになってくるわけ。ところが、日本のだいたい中道ぐらいなところで、日本がちょうどいいところにあるんだというような場合は、なるべく頃合を見て発言して、まとめるほうに努力してやって、いろんなやつに恩を売るわけですよ。その恩は必ず返してもらえなければならぬから、そういうようなことが会議屋としての第一歩です。

それからもうひとつは、マルチの会合というのは、二国間の交渉、テタテ（一対一）の交渉と全然違うんですよ。人によっては三日経ったら非常にいい知恵が出てきたという人がいるでしょう。調査マンとかなんかにはそういう人が必要なんだけど、会議屋というのは三〇秒でリアクションしなかったら、そのときにリアクションしなかったら流れていっちゃうわけです。二国間なら「ちょっと待った」と言えるんだけど、会議屋は非常にリアクションの早いやつじゃないといけないということをつくづく感じたんです。だんだんせっかちになってくるんですね。

北岡 大使は、しばらく断絶があった戦後の会議屋さんの第一号という感じになるわけですね。

宮崎 まあ、そんなようなものです。

北岡 会議は、言葉は英仏混交ですか。

宮崎 英仏両方ですね。私はフランス語はうまくないんですけど、会議の言葉は限られているんですよ。もちろん通訳が入るんですが、初めは同時通訳じゃなくて逐語訳。通訳も創成期ですから、ムッシュ・クレメという有名な人がいまして、いろんな偉い人の英仏の通訳に出ていた。自分はどんな偉い人で英仏の通訳のナンバーワンで出ているんだという話をしたら、友達がそんなこと信用しなかったって。その友達と一緒にローマへ行ってね。ク

レーメさんが、この友達が信用しないんで見せてやろうというので、そうしたらたまたま法王様が出てきた。それでレーメさんがつかつかと行って法王さんと握手した。友達はさすがにびっくりして、たまたまその隣に立っている男に、「あの握手しているのは、おまえは知っているか」と言ったら、「片方はムッシュ・クレメだ。もう一人は知らない」と言ったという伝説がある程有名な人だったわけ(笑)。その人は本当に名通訳だったですよ。コンセクティブだったわけね。

当時の通訳で非常に出世した人にロワイエーという人がいて、ガットの事務局の次長になった人です。この人はとにかく非常に立派な人だったと思います。

結局、会議屋の場合は、代表として出た場合は人の言うことを全部まともに聞いてあげて、「ハビング・セッド・ザット」が出てくるまではボケッとしていればいいです(笑)。それから、こっちが発言するときに、国内から「これはぜひ言ってください」というのがあるでしょう。後ろで見ているものですから、言ったことにしなくちゃいけない。ところが、それはいかにも場違いなときは、長い演説の中にチョコンと言うわけですよ。分からないように。それで「言ったじゃないか」ということになる。

それからもうひとつは、場合によるんだけど、たとえばアメリカに分からせたいんだけどインドには分からせたくないというようなことを、どう言い回しでいけば分かるかということを研究するわけです。事前の話ももちろんするんだけど、それはたいがい通ずるんですよ。通じるというか、うまく行くんですよ。

北岡 具体的にどんなふうなことでしょ。

宮崎 それはオーケストラの指揮者が転調というのかな、主要な聴衆にさえ分からせればいい、その他大勢には分からせなくてもいいというのがあるでしょう。あれと同じことですよ。その言い方があるわけですよ。そういうような会議屋になるためのマ

ニユアルは、学生が必要になったときには先生が教えてあげてください(笑)。

これは本当に国際会議の場合は、そのタイミングを逸したらだめですよ。それから、いちばんいいタイミングにいちばんいいことを言わなくちゃいかんと。そうすると通りやすいとかね。議長というのは、これから日本は議長をやるが多くなってくると思うんですけど、私はそのときの議長をやったお蔭で、ずいぶんいろんな議長をやらされていたんですが、あとのほうではサミットの準備会合のシエルパの議長ね。特恵の議長の時もずいぶん辛かったし。

それから、途中で国内に帰って国際機関一課長になってからもジュネーブに通って議長をやっていたわけです。出張旅費がないもので駅前ホテルみたいところに泊まっていたら、夜討ち朝駆けで大使がやってきて、通すところがないのよね。部屋は小さいし食堂みたいなところはないし、もう本当にこれはいかんと思っていて、その次から自腹はたいもう少し立派なホテルに泊まらざるをえなかったというよな。日本の国内では、議長に関する理解はなくてね。

北岡 そうですね。議長旅費というのはないでしょうね。

宮崎 手当てもないしね、本当に……。

北岡 特恵関税の大使が最初に重要な議長をやられたところで、結局いくつか実現したんですか。

宮崎 私は途中でケネディ・ラウンドの主管課長だったもので辞任したんです。ジュネーブ通いがとても勤まらなくてね。かなりまとまるころまで行ったんですけど、全部実現しているわけですよ。日本もECもアメリカも特恵関税を実施したわけですよ。いまでもやっているんじゃないですか。

北岡 どんな産品ですか。典型的な一次産品ですか。

宮崎 やっぱ労働集約的な産品が多いですよ。逆に言うと、そ

れは実績があるんだけど、とっても作れそうのないもののほうが、安心して特恵関税を出せるわけですね（笑）。

北岡 なるほど。

宮崎 ただ、たくさんあると思いますよ。その中で利用されているのが少ない。

北岡 じゃあ、ガットの一条をそこで修正しちゃったわけですね。

宮崎 一条の修正じゃなくて、ガットの第三部に途上国の規定を作りまして、その中に特恵が入ったわけですね。

北岡 なるほど。そこでたとえば自動車とかを作っても大丈夫なわけですね。来やしないわけですね。

宮崎 ただ、特恵の議論としては卒業論というのがあってね。たとえば韓国なんて特恵関税をやったわけです。それが途中からやめになったけど、いろんな規定が特恵についてはある。それはガットの規定を改定して、特恵関税をやってもよろしいということまで行ったわけで、そのあと今度はOECDでどういう特恵関税を与えるかということを進んで議論したわけですが、それはあとでOECDに行ってからです。

北岡 最初のこの頃は、会議は何力国ぐらいでやっておられたんですか。数十カ国ですか。

宮崎 数十カ国ですね。ガットの加盟国は全部出てきてましたからね。

北岡 特恵は重要な問題ですからね。

宮崎 でっかい部屋で。

北岡 この決定はコンセンサスですか。

宮崎 コンセンサスなんですけどね。

北岡 不承不承の人も……。

宮崎 だから、まず問題のインベントリーを作って、一つずつ議題を作ってやっていくわけですよ。

ちなみに、「アジェンダセッティング」という言葉、「議題設

定」が日本は下手なんです。やっぱりアジェンダセッティングがいちばんうまいのはアメリカです。アジェンダセッティングの前に、いつこういう会議をやるかということを決めて招集して、それでどういう議題でどういうふうにするかということを決めるのは、いちばん大事なんです。ところが日本の感覚は、誰かが作ったアジェンダで、何日某日に何とかをやるから出てこいというので出ていくとか、そのまえに農林省みたいになんでもいから、「つっぱねることだけはとにかくやってこい」という訓令をもらって出てくる人がいるわけですよ。国際会議でもなんでも、こういうことを、いつ、どういうメンバーでやるかということを決めるのがいちばん大事なことで、まだ日本ではなかなか分かってないんじゃないか。映画で言えばプロデューサーというのかな。監督は誰にして、俳優は男優であれ女優であれどういうシナリオでなんとかかというのを決めるのは、プロデューサーですか。

北岡 そうなんでしょうね。

宮崎 映画でもなんでもそういう人がいるわけでしょう。それがなかったら映画はできないわけ。だから、国際的な仕事でも、そういう会議を作るところか、あるいは国際機関を利用してこういう議題をこういうところで議論させよう、そのために議長は誰にすればいいとか、そういうことをやるというのが非常に大事だと。国際政治はまさにそういうものだと思うんですけどね。ひとつはEUの中で、EC以来のEUは大変な勉強になった。毎週のように閣僚レベルとか局長レベルとか事務官レベルで会合をやっているでしょう。ヨーロッパ人は特にいろんなアイデアが豊富だから、議論してやっているから、練習を非常に積んでいるわけです。政治家でも官僚でもね。だから、アメリカのほうがたじたじになるほど論理の展開とか何か。それをやる機会がいちばんないのが日本。だいたいヨーロッパ人というのは、子供のときから議論させ

るでしょう。日本はそういうのではないでしょう。ディベートだ
んとかいうのは。セミナーで闊達な議論がありますか。

北岡 せいぜいやらせなくちゃいけないと思っ
ていらっしゃるんですが(笑)。

宮崎 私はセミナーに生徒として参加させて
いただければ(笑)。

北岡 ぜひ、そうですね、会議の仕方とか
国際交渉の現場とか、やってみますか
ね。この頃、アセアンなんかの国も会
議をしょっちゅうやっていますから、
上手になってきたんじゃないですか。

宮崎 上手になってきたんですよ。それは
前とは大違いです。いわゆる最初の頃
の中国は、そういうことはまるっき
り下手だったんですけど、だんだん
上手になってきたのが、政治家レベ
ルで、それから役人レベルでいるん
なことがあって上手になってきていま
すよね。

わりとそういうセンスがないのは、
ジャーナリストね。日本のジャーナ
リストというのはわりとセンスがな
いんですよ。どう

北岡 ジャーナリストは理解がないとい
うことですか。そういう会合に出
て、うまく活動できないということ
ですか。

宮崎 理解がないということですか。

北岡 そうでしょうね(笑)。

宮崎 学者はいかがでしょうか。

北岡 国際会議で、ほどほど喋る人は
います。数は少ないですけど。

宮崎 それこそ国際会議でアジェン
ダセッティングをやるところまでは、
なかなかいかないでしょう。

北岡 そこまではなかなかいかない
ですね。

宮崎 皆さんがそういうふう
に仕向けていかないといけないん

じゃないですか。

北岡 余分な話ですが、日本人で
それができるのは、日本に
関係のあるテーマなら
できるんですけども、
グローバルとかいう
とやっぱり全然だめ
でしょうね。

宮崎 それはちょっと寂
しいですね。

北岡 まったくですね。

宮崎 大使なんか、飯の
ときによく女性が両
方に座るんだけども、
本来は日本の関係
ある話を別にす
る必要はないん
でね。関係のある
話をしてもいい
んだけど、その
前に相手に喋
らせることも
必要だし、相
手の状態に合
わせていくこ
とも必要な
んだよね。そ
のために、相
当幅広くない
といけないわ
けでしょう。
日本に関係
のないところ
で大いにぶ
つとつという
のが、やっ
ぱりいちばん
面白いんじ
ゃないですか。

北岡 日本人はしかし、
外国生活が長い
人でもパーティ
は疲れる。ヨ
コメシは疲
れるという人
は多いですね。

宮崎 私は疲れたことは
なかったけど、食
いすぎたため
に病気になる
ちゃったす
ね。あんまり
リッチなもの
ばかり食べた
ものだから、
心臓病にな
っちゃった(笑)。

北岡 長くて、三時間、
四時間食べ
ますからね(笑)。
デザー
トとか、体
力があります
よね。

宮崎 それで遠慮して
るんですよ。だ
から、遠慮す
る気にな
って出てい
けばいいん
ですよ、飯は。

■ケネディ・ラウンドに乗るまで

北岡 先ほどケネディ・ラ
ウンド(一九六四〜
六七年)のことは
まとめておし
ゃったので、も
しよろしかった
ら。

宮崎 ケネディ・ラ
ウンドの前に
日本のガット
加盟のための
関税交渉が五
五年にあり
まして、その
次の関税交渉
が、アメリカの互

惠通商協定法で、アメリカ政府が議会から関税を下げてもいいというマンドートをもらったときに、だいたい交渉が行われていたわけです。それでデロン・ラウンドというのが行われたんです。それは規模はそう大きくないんですけども、内容は忘れちゃったですけど。

そのあとケネディ・ラウンドはかなり画期的なものであったんですが、ケネディ・ラウンドのいままでの交渉といちばん違うところは、いままではお互いにリクエストリストというのを出して、たとえば日本がアメリカに対してプリンシパルサプライヤー——主たる供給国になっているものについて、繊維なら繊維について「繊維の品目を下げる」というのがリクエストリストでしよう。それに対してアメリカが「下げます」と言ってくるのがオファーリスト。そういうふうなリクエストリストとオファーリストを交換する方式でやっていたのを、ケネディ・ラウンドの場合はい律引き下げという方式を取られたのがいちばん大きな違いなんです。その一律引き下げの例外は、ちょっと日本語で忘れちゃったけど、ケプト・トウ・ザ・ベア・ミニマム・ネセシテイティッド・バイ・オーヴァー・ライディング・ナショナルインタレストかな。日本語で言うと、なんとということなんですかね。

北岡 ベア・ミニマムですね。国益上。

宮崎 国益に必要な最低限にするというのが画期的なんです。したがって、ベア・ミニマムでないやつが全部一律に何パーセントか忘れたけど下げるといのが原則になって、その原則を合意するというのがいちばん大きな山だったわけですね。国内では大変な騒ぎになったわけですよ。それに乗るか乗らないかというのが、非常に大きな問題。

日本に帰ってからの最大の問題が、いわゆるケネディ・ラウンドに日本が乗らなくちゃいかんということを主張して結局乗ったわけですが、その乗るまでがまず大変だったわけよ。乗ったあと

も大変だったんですけどね(笑)。

北岡 「乗らない」という選択肢もあつたんですか。

宮崎 もちろんあつたわけでしょう。私は帰ってきて、当時私は課長で、局長が関守三郎という変わった方でインドが大好きで、「ガットは先進国の集まりだから、そんなものは脱退しちゃえ」というところから始まるわけです。局長がガット脱退論で、そこでケネディ・ラウンドに乗ると持っていくのが、まず大変だった。それから、他の省でもそういう原則を、つまりいまの大原則を適用されたら、とつてもうちはやっていけないと。そういうのをベア・ミニマムの中に入れるとか入れないとかで、とにかく乗るよりに持っていくというのは大変な騒ぎだったわけ。

北岡 私が聞き出したのは、つまり、もっと大局を見ますと、アメリカが言い出してヨーロッパが乗ってくるのに、日本が六〇年代乗らないというのは、はっきり明白な決断として乗らないというの、なかなか難しいんじゃないかという気がするんです。

宮崎 しかし、国内政治的には農林議員とか、国内産業保護論が強かったわけですよ。

北岡 省益、業界益から言えばそれは分かりますけども。

宮崎 それを政治家が突き上げるわけでしょう。だから、それは大変な騒ぎです。

北岡 局長さんは別に政治家には関係ないんですか。

宮崎 それは関係なくて。

北岡 そうすると、推進力は、たとえば池田〔勇人〕さんとか。

宮崎 そういうことですよ。

北岡 他の方面にもあつたんですか。これはやるべしという、経済界とか。

宮崎 経団連とかなんかが一所懸命言っていて、説明したりなんかしましたけど。あの時は大臣が誰だったっけな。

北岡 小坂〔善太郎〕さんとか大平〔正芳〕さんとか。

宮崎 大平さんはもうずっとあとですよ。

北岡 昔ちょっとやっていますけど。

宮崎 大平さんは非常に大変だったんですよ。大平さんと田中角栄さんね。田中さんは大蔵大臣だったかな。

北岡 大蔵大臣をやっていますね。池田内閣ですよ、これは。

宮崎 池田さんと大平、田中角栄の三人が頼みでね。それに対する敵というのは、河野一郎農林大臣以下、大変な反対があったわけです。そのときに、これは誰にくっついていたのかな。とにかく池田さんのところまで、課長ですから自分一人で行けないんで誰かと一緒に、大蔵省の関税局長がいます、それを焚きつけて、池田さんのところにもずいぶん何回も行って。池田さんはわりと分かりますよ。

それから田中角栄という人は、そういうところのセンスがあるんですよ。

北岡 佐藤〔栄作〕さんなんかはどうだったんでしょうね。

宮崎 佐藤さんはもつとあとの話だけど、牛場さんと一緒にずいぶんいろんなことを頼みに。佐藤さんという方は、人から聞いた話で私もまったくその通りだと思ったのは、とにかく「待ち」なんです。だから、こういう意見とこういう意見とあると、それはどっちが勝つかを待っていて、こっちが強くなったときにはじめてこちらに決断すると。そうすると、いいことに、負けたほうが佐藤さんを恨まないで、こっちを恨むというわけね〔笑〕。だから、「待ちの佐藤」ということで、とにかく待つわけ。池田さんのときは持っていて池田さんが引き受けてくれるといいんだけど、佐藤さんの場合は牛場さんと一緒に行って、佐藤さんいろいろな頼むと、「よし分かった。おまえがそれでみんな各省をまとめてきたら、俺はOKする」という言い方なんです。だから、まとまらないから来たのに〔笑〕。それでげっそりするんですけども、他の承認も佐藤さんもだいたいいいようだとか言って

もっていくんだけど、とにかく全然アプローチが違うんですよ。

北岡 しかし、この件では別に反対ではなかったんですか。

宮崎 特に佐藤さんは関係なかったと思いますね。

北岡 次の総裁、首相候補という感じで、あまり要職には就いておられないですね。

宮崎 当時は、党なんていうのはあんまり……もちろん関係あったんだけれども、そういうのまで直接行くんじゃないで、やっぱり外務大臣というか、「ケネディ・ラウンドに乗る」という結論を出すためには、たしか池田総理と大平、田中角栄ね。経済閣僚懇談会を何回もやりました。それにしてもらったんだけど、大平さんは口があまり流暢じゃないんだけど、何か言ったら田中角栄さんがペラペラしゃべって、河野一郎が反駁しそこなって通っちゃったことがあります〔笑〕。だから、非常に田中角栄という人は大変な人だなと思って見ておったんです。

北岡 その頃でしょうか、あるいはその前でしょうか。池田さんはヨーロッパに行って、例のトランジスタラジオのセールスマンと言われたの言われぬのという説がありますけども、ということとは、日本のそういう製品がヨーロッパに出始めていた頃ですね。

宮崎 もちろんそうですね。

北岡 大使はそういうのを現地で見られておられた、日本の産業が徐々に労働集約的なものじゃないのが出てきたと。

宮崎 ジュネーブに行った最初の頃は、たとえばイタリーの代表と話をして「日本と取引するなんて、火星と取引するような印象がある」と言うのね〔笑〕。そういうところから始まるわけだから。

北岡 じゃあ、ずいぶん急速な変化ですね。

宮崎 そうそう。ですから、ケネディ・ラウンドの頃になると、日本とEECとアメリカの三つが主要国になっていろいろ打ち合わせをするというような恰好になってきているわけです。それ

までの日本の経済力の伸長はすごかったわけですからね。

北岡 その頃、池田さんは「自由世界の三つの柱」ということを言いまして、国内から言うとなんか寝惚けたことを言っているんじゃないか、ちょっと思い上がりじゃないかという部分がありましたが、現場におられると、そろそろそういう方向に動いてはいたわけですね。

宮崎 そうそう、そうそう。

北岡 岸さんが五九年かなんかで行ったあとは、池田さんが六二年かなんかにヨーロッパに行ったあと、あまり行ってないですね、日本の総理大臣は。佐藤さんはヨーロッパに行っていないですね。ですから、行ったのは、池田さんにはある程度、教育的な効果があったのかなと思っっているんですけどね。

宮崎 そのときの在外にいた萩原さんとか何とか言う人がずいぶん池田さんにインプットしたはずですよ。牛場さんはどこに行ったのか、ちょっと覚えてないけど。

北岡 放っておくと、日本の政治家はアメリカしか知らないことになりがちなんです。乗ってから大変だというお話もいろいろ続くんですけど、やっぱり日本と同じような立場で乗らなかった国ってあるんですか。

宮崎 結局、この原則を受けなかった国があるんです。たとえばカナダとか豪州とかね。

北岡 カナダ、豪州は入らなかったんですか。

宮崎 入らなかったというか、いまのベア・ミニマムという原則を受けなかったわけですね。ねばりにねばってね。それが認められるというのが加豪の参加の条件だったわけですね。

北岡 それは受け入れなくて、これに入っていくことは可能……。宮崎 中程度の国は出来たわけですね。後進国は全部入っていないですよ。

北岡 でも、カナダとかオーストラリアがそうだったら、日本も

別にいいんじゃないかという……。

宮崎 でも、それは三極になっちゃったわけ。日本とE.Cとアメリカとその三つがそのまま開ければ、とてもケネディ・ラウンドは成立しないということになっていたわけですね。

北岡 そうすると、その局長さんの立場も分らないです。つまり、経済の規模からいいますと、日本もカナダ、オーストラリアの比じゃないんですけども、しかしあっちのほうは先進国だということ意識がまだあったんじゃないですかね。

宮崎 そうですね。メンタリテイとしては。

〔宮崎氏中座〕

北岡 会議屋の系譜というのはいろいろあるんですか。宮崎大使は戦後派の会議屋の第一号みたいにおっしゃってましたけど。

股野 そうですね。宮崎大使はまさにそうですね。先ほどの話で印象的なのは、萩原大使のあと、ずっと外務省は意識的にそういう人事をしてこなかった。やっぱりその間の国際会議に日本がだいたい出てなかったということですね。

北岡 あとはどういふ方が、著名な方は。

股野 それからは宮崎大使の世代になってくると、国際会議で活躍されたのは、経済畑が多いですね。つまり、ここでヒアリングをなさっている諸先輩は、かなりそういう意味では会議練達の士ですね。そういう点では、宮崎大使はその早い段階では。吉野大使もまさに。吉野〔文六〕大使は北米局長もされたから安全保障のご苦労もありますけども、しかし経済に強い方ですね。だいたい経済局長として経済担当の外務審議官の経歴を持っておられる方は、そういう意味では会議の練達の士に皆さんだいたいいられています。

最近の若手では、ジュネーブにいる赤尾〔信敏〕君ね。彼は国連の何かの議長もやっていますから、彼も専ら国際会議。これは若手のほうですね。

佐道 環境問題の権威ですね。

〔宮崎氏戻る〕

股野 彼自身が別に環境の専門家じゃなくて、会議屋で環境問題にひっぱりこまれて、その結果、勉強してなったと。

宮崎 牛場さんの秘書をやったのね。

股野 ええ、そうですね。

宮崎 僕の弟子の弟子みたいなものだな。

股野 二世代あったですね。

宮崎 松浦〔晃一郎〕とか、OECDで。

北岡 松浦大使は、大使のお弟子さんぐらいなんですか。

股野 そうですね、ちょうどお弟子さんですね。

北岡 今度の作業は大変らしいですね。

股野 なかなか大変なんです、小淵〔恵三〕さんが自ら。学習院で松浦君と同級生だったんですね。ですから、自分は同級生のためにやっている。「学校の成績は松浦がいいけど、選挙は俺のほうが強いんだ」と小淵さんは言って、自分の同級生のためにユネスコをがんばると言っておられるようです。

■ 経済外交の第一線から見た東西冷戦

井上 漠然とした質問になってしまっただけで恐縮なんですけれども、年表風にいきますと、この時期が冷戦時代ということになってしまっただけでも、経済外交の第一線でいろいろおやりになられている立場からご覧になって、冷戦状況みたいなものがどんなふうにあるかとしておありになったのか。あるいは冷戦というよりも、まず経済のレベルでの国家間の利害関係の調整が国際政治の基本であって、あまり冷戦というファクターはそういうところでは影響してこないのか、それともやはり何らかの影響があるのか、そういう点で何か思いつかれたことはございましたか。

宮崎 その影響はなかったことはないと思うんですね。ただ、それは非常に上のレベルには大きな影響があったと思います。下のレベルでは、かなり実務家の間ではそれほど意識されないで、いわゆるガットもあとのほうになると米欧の議論、欧というのは当時のEC、それに日本、豪州、カナダなんかの議論があって、いわゆる東側のほうはステートトレーディングカントリーズということで全然別の扱いになっていたし、ガットにはチェコだけ加入していたんですね。チェコが原加盟国だったんです。それで共産国になってからもいたわけですね。けれども、別に共産国としてのビヘイビアはなかったんですね。だから、東西関係は別の問題であったと思います。

というのは、東側というのは経済的に世界経済に対するインパクトという面からみますと、非常に少ないんです。思ったより、よっぽど少ないと思います。数字的にもいろいろ計上できるもので。最初のサミットのときに三木総理が、いわゆる南北問題をサミットで取り上げるのにワアワア言って、東西問題、南北問題と云ってるけど、僕がそんなことをする雰囲気じゃないんだということをいくら説明しても分からない。新聞記者のオフレコの会見のときに、「東南北北は端パイだ。サミットはメンタンピンでいくんだ」という話をしたら、面白がって書いてくれたんです、オフレコを（笑）。三木さんに怒られるかと思ったら怒られなくて。

世界経済全体のマネジメントということをいうと、東南北北は端パイなんです。世界の資本の移動とか技術とか金融だとか通貨だとか貿易だとか、投資が特にそうですけど、それは日本とアメリカとEUの間の方向で動いているわけでしょう。だから、ソ連が崩壊しちゃってロシアになって、最近になってようやくG8になったわけですね。政治面は別として。政治面では安保理の五カ国があるでしょう。非常任理事国がしょっちゅう問題になるんですけど、経済面で言うと、私が話した時代じゃなくて、

いまに近くなった時代では、アメリカと日本とドイツの三極ですよ。ドイツはいまEUをひっぱっているけども。ロシアは、経済的に見るとドイツよりも質はうんと下でしょう。途上国全部を合わせても大したことがないんですよ。経済的な観点からすると、東南西北は端パイなんです。たしかに政治的には全然違いますけどね。ロシアは冷戦構造とかもちろん大変なことだし、次元が違うんですけども。

股野 そういう経済外交が、言ってみれば市場主義経済を強化してきたということで、結果的に東が崩れる力を西側がつけた。こういう経済交渉が、その実力をさらに高めるひとつのシステムにもなったわけですね。結局、垣根を取ってもっともお互いにやりましょうということをやっている、最初は大変だったんでしょうけど、結果としてはそれが東西冷戦での勝利の一因になったと。

宮崎 ただ、ロシア——当時のソ連と東側は全然関係ないわけですからね。かなりの市場経済で、お互いが関税を下げたり自由競争で競争力が強くなって成長が高くなったでしょう。ところが、ソ連東欧諸国はまったく増外になって、いちばん典型的なのは東独ですよ。東独は西独と同じレベルからスタートしたけども、その格差は全然違ったわけですよ、最後に吸収になるまで。私は、ずっとあとでドイツに長いことおりましたから。もともと東独は、西独との関係でECの条約上ちょっと特殊な位置にはあったんだけど、その他の東欧の諸国よりも得をしていた面はありますけどね。

国際会議で、アンケートみたいところで後進国の代表が大演説をぶつのを聞いて感心する日本人がよくあって、ジャーナリストがね。あれは、大演説をぶつたって通ると思っただいんですよ、国内に帰ってこういう演説をしたって。それで代議員に立候補したり大臣になったりする、そのためにやっている。そんな

のを聞かされるほうはかなわんですよ(笑)。

北岡 やっぱ聞いてるんですよ。

宮崎 聞いていないですけどね。だけど、議長だと聞かざるを得ないわけでしょう。

股野 議長はいなきやいけませんね。

北岡 本当に長いですからね、社会主義国とかの演説って。時間制限はあるんですか。

宮崎 ないです。それは議長の裁量でなんだけど、しかし会議の性格にもよるんですよ。

北岡 そうですよ。実務的なものではそんなふうに長い演説は、宮崎 それから、だんだんと長い演説をぶつのが恥ずかしいようなふうになっていくことはできませんけどね。

北岡 大使が直接関係されたかどうか分からないんですけども、日本では五〇年代からずっと中国との貿易をもうちょっと開きたいというような欲求というか主張は、政治の一角とか経済界の一角には常にありますね。あれは、どういところで扱われていたんでしょう。

宮崎 経済局経済二課というところが前にありまして、共産圏に対する貿易を担当していたわけです。それから中国との国交回復とかの問題は、アジア局中国課でやっていたわけです。たいへんな中国に対する憧れとか期待感があったわけですよ。私は当時から、中国のGNPが当時幾らだったか忘れちゃったけど日本の何分の一かで、社会主義国ですから自給自足体制を取るんで、貿易依存度が何パーセントで、成長率を掛けると何年先にはこのくらいの規模の市場にしかならないんだということを感じて、ずいぶんいろんな人から批判されたんですけど、結果はその通りになっているんですね(笑)。だから、フィーバーがありましたね。

北岡 大して買うものがないんですよ。

井上 数字上はたしか一九六五年だったと思うんですけど、中国から見た場合の貿易相手国の第一位が日本になって、六六年に日本から見た場合でも中国が四番目か五番目ぐらいの貿易相手国になっていると。ですから、数字上も六〇年代の高度成長に比例してということなんでしょうけども、幻想をもちたらずような土壌はそのへんにもあったのかなとは思っています。

宮崎 要するに途上国一般がそうなんだけど、途上国から買うものは一次産品が多いでしょう。ずっとあとで石油危機のところでお話をするチャンスがあるだろうと思うけど、一次産品というのは、いくら買っても値が張らないんですよ。だから、途上国はいつまでたっても貧乏だということになるんだけど、付加価値の高いものでないと値が張らないんですよ。

日本の輸出構成がどんどん、どんどん変わってきたわけでしょう。明治の時代の日本の二大輸出品目というのは、生糸とお茶なんですよね。それが綿製品にとって代わったのは、さっき言った綿花は国産はやめるとかが必要だったから、かなりあとですよ。それでもアメリカに対して、どっちかというと言えば入超で、スターリング地域に対して出超で、中国に対しても出超で、スターリング地域に対する出超分でドルに代えていたという。中国に対する出超分が対中投資になって残ったという、大雑把にそういうあれだけでも。当時の日本に輸出品は、最初は生糸・お茶から綿製品になって、繊維が中心になったですね。その後は雑貨なんかだんだん出てきているんですけど、生糸というのはずいぶんあとまで主要輸出品だったですね。ナイロンが出てきてからダメになったけど。

北岡 そんな四、五番になってますかね。

井上 ええ。ただ、絶対量が全然違いますから、順番に並べたら四番目か五番目ということで、いちばん上とはすごい差がある。

宮崎 中国にもあとで何回か行って交渉もしましたんですけど、

そういうことを言うと迫害されるんだけど、それこそ「佐渡へ佐渡へと草木もなびく」というおけさ節みために、「中国へ中国へと草木もなびく」という風潮だったわけです。それに逆らってそういうことを言ったらだいたい風当たりが強くなったんです(笑)。

北岡 いまだって経済規模はカナダぐらいでしょう。

股野 カナダより大きくなりました。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第5回 —

開催日：1999年8月4日

13:05 ~ 15:17

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■ガット一一条国移行とOECD加盟

北岡 質問票にだいたい沿って、かつそこに出ています〔IMF〕八条国とか〔ガット〕一一条国とか、そのへんの概念なども簡単な説明を交えながらお話をいただければと。

宮崎 両方とも、基本的に言えば、国際収支の理由で輸入制限とかその他のいろんな制限をすることが認められている段階を卒業したということですよ。国際収支の理由による輸入制限を日本がずっとやっていたわけですね。ガットの一一条国ということは、それを、もうやることができなくなった〔日本のガット一一条国移行、一九六三年〕。したがって、一一条に基づいて輸入では自由化をしていかなくちゃいけないということになるわけですね。

北岡 その国際収支は、マクロの国際収支？ トータルバランスです。ええ、そうですね。

北岡 この頃は、まだ輸入超過ですか。

宮崎 輸入超過だったかどうか、ちょっと記憶がないんですけどね。朝鮮特需というのがありましたでしょう。朝鮮特需以来、だいたい日本の国際収支パターンが変わってきているわけですよ。朝鮮特需がなくなってきたから、そのときに弾みがついているんで、ずっといい方向にきているわけです。輸入超過だったかどうか、ちょっと覚えていませんけど、年によって違うと思いますけどね。北岡 六〇年代中盤ぐらいまでは輸入が多かったように思いますが、しかし六〇年代の後半になってずっと輸出が増えてきたような気がしますが、これは国際収支が堅調かどうかというよりは、基本的な体力でそれを理由にしているかということですね。

宮崎 そういうことでしょね。ですから、IMFの八条国というのは、実益とすれば直接の影響はそれほどないですよ〔日本のIMF八条国移行、一九六四年〕。ところが、ガットのBO

Pリーズンが適用できなくなるといことは、直ちにモノの自由化ということ、輸入の自由化をやらなくちゃいけない。そこで、この前後だと思えますけど、外国為替貿易管理法の大改正をやりましてね〔一九六四年〕。原則と例外が変わっちゃって、輸入も原則は自由なんだと、輸入以外のいろんな取引も自由なんだと、例外的な場合のみ制限するというような建前の変更をやっているんですよ。それがこの前後ですが、いつだったかはっきり覚えていません。

それでも、輸入制限を一度に外すわけにはいかないんで、残している品目があるわけです。それが毎年、ガットの審査というか、いろんな国のコンプレインの対象になるわけですね。それは、日本の経済界にとっても大変なことだったわけです。いままで輸入を制限されていることによって、かなり戦後のいろんな産業が出てきた、新しい産業が育ってきたのが、今度はあれが外れるわけですからね。温室育ちの温室がなくなっちゃうということですから大変なこと、自由化していく順序、何から自由化するかというこの順序を決めるのはやっぱり大変な問題で。

北岡 なんでもコンプレインの対象になるというのは、だいたい概算でどれくらいの品目の数があるんですか。何百とか何千とか。宮崎 品目の数というのは、勘定の仕方がずいぶん違うんですよ。ブラッセルのノメンクレーチャーというやつで、四桁だと一〇〇〇なんです。六桁になるといくらか忘れたけど、もう何倍かになるわけですよ。その関税分類表でいきますと、つまり六桁というのは枝番がついているわけです。ちょっと覚えておりませんけど。

とにかく全部制限しておるといのが原則だったのが、全部自由化して、例外だけ自由化しないということになりました。それがそのときじゃないんですが、ずっと後になって、制限されている品目、これは日本だけじゃなくて他の国もあるわけ

すよ。それはいわゆるガットに違反する恐れのあるものもあるわけですよ。それで、自らガットの規定に違反して輸入制限を維持していると認めているものを「残存輸入制限品目」と言ったわけです。「残存」というのは、英語では「レジデュアル[residual]」という言葉を使って、普通の残存というのじゃなくて、いまいったような定義があるわけです。当該国がガットに違反していると認める輸入制限品目を残存輸入制限品目ということにして、それについての協議をお互いにやることにしたわけですね。

そのときに、この前もちょっと言いましたように、日本はコメとか小麦を残存輸入制限品目に入れてないんですね。というのは、食管法は日本がガットに加入する前からあるので、そっちのほうにガットに優先する、したがって食管法の対象になっているからコメや小麦は残存輸入制限品目じゃないと。

しかし、いろんなひっかかる条文がありまして、たとえば衛生の問題ね。日本で言えばリンゴや牛肉ね。牛肉は口蹄疫という病気があって、それを防ぐために、というようなこととか、リンゴはなんとかい虫がいるんですね。それを防ぐというところで、そういうのは残存に入れてないわけですよ。

北岡 なるほど。これも入らないわけですね。

宮崎 うん。それからもちろん、ガット上制限を認められているピストル・麻薬の類は当然、制限していいことになっているわけです。これは二〇条だったかな。それからポルノの類ね。そういうのは当然、輸入制限をしいわけだから、残存輸入制限じゃないわけです。だから、どれにもひっかからないで輸入制限をやっているのが残存制限品目で、そのリストを出してね。

すると、ヨーロッパはたくさんあるんですよ。殊に日本に対する対日差別というのはたくさんありまして、それはみんな残存輸入制限品目になるわけです。そういうものについて毎年協議するというか、そういうことになってきて、日本は自由化計画を立て

て、だんだん輸入制限品目を外していったわけです。だから、最後に残ったのはいくらだったか忘れたけど、農産物が主でした。

北岡 要するに残存というのは、こっちは後ろめたいわけですね。宮崎 自ら認めているわけですよ。

北岡 具合が悪いと。コメは後ろめたくないと、最初からつっぱねているわけですね。

宮崎 そうなんです。

北岡 仮に、これを一つ一つ外していくときに、どういうふうな国内プロセスをおやりになるわけですか。

宮崎 それは直接には通産省なり農林省なり、厚生省もあれば大蔵省もあるわけです、お酒なんかはね。いろんな関係者の会議で、外務省は専ら「こうなったんだから、全部、輸入制限を外さなくちゃいけない」ということばかりですよ。原則論で。関係省は「そう言っても、なかなか業界の事情とかなんかがあるから」というので、それぞれなるべく遅らせようとするわけです。それを各省会議でやって、大蔵省も「それはあんまりひどいんじゃないか」とかいろんなことを言っていて、だんだんに順位がついてきたというところで、そのバックにはもちろん業界があって、とにかく業界は輸入制限を外してもらおうのは困るという心情がものすごくあったわけです。

北岡 そこに政治家も介入してくる……。

宮崎 もちろん介入した。

北岡 そうとう強力なものですか。

宮崎 強力なものですよ。

北岡 そうしますと、そこでやっておられて、もうそろそろこれは寄り切られるかな、これはギブアップしようかと思っているわけで、国内を説得して何年後に自由化というのは、やっぱり何年かかかるわけですか。

宮崎 たとえばコンニャクなんていうのはずいぶんあとまで残っ

たのは、政治的な圧力です(笑)。

北岡 それはもう政治家ですね。

宮崎 農民がもちろんいるわけですけどね、群馬県に。ただ、コンニャクというのはインドネシアなんかはコンニャクいもが自生しているんですね。ただ、集荷、流通の組織がないのです。日本が輸入することになれば、それこそインドネシアにたくさん作らせていけば、えらい安く入るわけです。いまだにやってないでしょう。というのは、コンニャクいもというのは荒れ地に出来るんだそうですね。ほかに代替作物がないということのようです。

北岡 もうひとつ。こうしたレジディアルというのは、コンプレインがあって初めてテーマに上がってくるわけですか。

宮崎 いやいや、そうじゃなくて、レジディアルは自ら申告しているわけですから。自分で申告している、それに対して「まだ他があるじゃないか」というコンプレインは、もちろん出しうるわけですよ。

北岡 リストにあるけども、どこの国もそこを自由化しろと言ってこないということもありうるわけですね。

宮崎 まあ、関心がなければね。それは、いろんな不思議な話がたくさんあるんですよ。マーシャル・プラン(一九四七〜五二年)のときにヨーロッパにOECE(ヨーロッパ経済協力機構、OECDの前身)というのが出来て、OECE単位でマーシャル・プランの受け入れの機構を作ったでしょう。昔、OECE内だけの自由化という品目があったわけです。それに対してアメリカは文句を言った。

というか、当時のガットのコンセプトといえばハードカレンシー。ドルはハードカレンシーで、ヨーロッパ通貨はハードカレンシーじゃなかった、コンヴァーティブルじゃなかった。ハードカレンシーからの輸入を抑え制限するというのが、かなりあとまで残っていたわけですよ。そのOECEの自由化というね。

ハードカレンシーのドルは除く自由化というやつが、ブラッセル・ノメンクレーチャーがざあっとあるでしょう。水なんてあるわけですよ。そうすると、ドイツの水をフランスに入れるのはいんだけど、アメリカの水をドイツに入れることはできないわけですね。

北岡 ミネラルウォーターですか。

宮崎 いや、普通の水。あるいは氷なんているのは、雪とかね。そういうのはまったく、OECEの域内の自由化をざっとやると、自由化してないやつがみんな残るわけでしょう。すると、まったくノミナルに残っちゃったというやつがずいぶんあるんですよ、欧州にはカナダの雪は輸入できないとか。笑い話みたいな。

日本の場合もそういうものがありましたけどね。たとえば関心がないのは、あまり問題にならなかったというのではあるわけです。原則論としてけしからんという議論はできませんけどね。

OECD(経済協力開発機構)の加盟(一九六四年)というのは、やはり池田総理の存在が非常に大きいんです。池田総理を焚きつけたのは、萩原(徹)大使と牛場(信彦)さんの二人なんですよ。

OECDに入るということは、先進国の一員となるということですよ。認められるということ。その入る前に、OECDの中のDAGというグループがあるんですよ。デイベロップメント・アシスタント・グループかな。最初にDAGのグループに日本が入ったんです。というのは、日本はかなり援助をやっていましたから、援助政策のすり合わせということで最初にそこに入ることが認められたというか、そこに入って。DAGはのちにDAC(開発援助委員会)になるんですけどね。

それで今度は本体のほう、OECDの加入については、要するにOECDに加入した場合の日本側の利害得失。得のほうは、いま言いましたように先進国の一員として、先進国のメンバーが結

局、世界経済のマネージメントをやっている、そのマネージメントに参画できるというメリットがあるのに対して、その当時みんなにデメリットと思われていたのは、OECDには資本自由化コードと、インビジュアル取引の自由化コードの二つがコードとしてあるわけです。これは条約ですから、入れればその適用を受ける。その場合に、資本とインビジュアル取引の自由化ということが、当時はまだ難しいという時代だったわけです。ちなみに当時は、外国資本を日本に入れる場合には、原則として全部許可が要ったわけですね。その許可は具体的には、外資審議会だったかな。要するに僕はそれに幹事として出ていたんだけど、ちょっと名前を忘れちゃって……。

北岡 それはインター・デパートメントなんですか。

宮崎 インター・デパートメントだけど、輸入は大蔵省ですね。それで、山際正道なんていう人が議長で、たとえば技術導入をする場合はロイヤリティーを払って、どこの会社がどこそこから技術を導入する。一件一件審査するわけです。資本直接投資もそうだけでも。

北岡 大変なことですね。

宮崎 大変なんです。もう忘れちゃいましたけど、一件一件審査するわけですから事務局がいて、事務局が審査の結果を報告して、よかろうということになると各省はみんな幹事がいますから、そういう体制だったわけです。資本自由化のほうはね。

北岡 一件一件って見当がつかないんですけど、何万ドル以上とかそういうものはないんですか。

宮崎 そういふのはなかったと思いますね。

北岡 そうですか。じゃあ、ごく小さなものもやはりあった……。

宮崎 そう。だけどね、わりと単位が大きかった。というのは、大きな会社しか外資導入なんて考えなかったわけです。外資導入でいちばん多いのは技術導入ですよ。ロイヤリティーを払って技

術を導入する。その技術で日本経済はずいぶん復興が早まった。

それから、資本のほうはもちろん外資法という法律によって規制されてしまったから、外国資本が取りうる比率は何パーセントとか決まっていたし、それ以上、外国資本を取る場合に許可が要るとかね。それから、業種によって外国資本の流入を認めないのがあったわけですよ。それはちょっと忘れちゃったけど、日米通商航海条約に留保分野として書いてあるんです。列記してあるんですよ。農業とか金融とか石油とか、条約に明記してあるわけです。その分野は一切、外資の導入は許可なしにはできないという。ほかのは外れてもそれだけは残るといふような建前だったんでしょう。日米通商航海条約は、留保分野以外は入れちゃいかんとは書いてないですよ。ただ、これもさっきのIMFの八条との関係で、国際収支の理由で外資も資本の導入も押さえていたわけです。というのは、ポルトフォリオなんているのが入ってきてウワーツとまた出ていくと、国際収支がえらい悪くなってパンクしちゃうと。したがって、国際収支上の理由で外資の取引というのは、資本の流出には規制するというのが原則だったわけですよ。

それからOECDに入るとなると、ますますもってそういうようながんじがらめの規制が出来なくなってくる。そこにいちばん問題があったわけです。ただOECDのほうは、資本取引の規制緩和はわりとゆっくりということが分かったんで、いちばん最後までOECDに入るときの問題として残っていたのはインビジュアルで、インビジュアルの中の海運なんですよ。海運に関する日本側の留保を認めないと言ってノルウェーが最後まで頑張って、なかなか入らなかったわけです。

それで、原田〔昇左右〕さんというなんとか大臣をやった運輸省出身の人がいるんだけど。

股野 建設大臣ですね。

宮崎 あの人(指す)が運輸省関係の何かについて、一所懸命がんばってましたよ。しかし、それだけでも結局、妥協がついて、というか OECDに加入することになったわけですよ。だから、OECDに加入した最初のほうは、いまのインビジュアル・コミッティなんかの残っているやつをいちいち審査されるでしょう。それが大変だったわけですよ。資本取引も委員会があってやっているということだったんです。OECDの加入後のいろんなことは、またあとに譲ることにします。

北岡 たとえば資本取引の自由化をやらなくちゃいけないとして、日米通商航海条約に例外が書いてあるわけですね。金融は入れちゃいかんとか、たぶん金融とか通信とかそういうのがだめなんじゃないかね。何パーセントまで入れていいという分野もあるわけですか。

宮崎 条約にはないですよ。

北岡 条約にはないですか。条約は資本取引を自由にする許可が要るところと要らないところが分かります。その日米通商航海条約のレベルをもっと越えて自由化しないといかんですね。

宮崎 そういうわけですね。ただし、というのはOECDは日米通商航海条約に縛られないわけですから、原則自由にしなくちゃいけないわけですよ。

北岡 本当は農業に資本が入ってくるのも自由化しないといかんと。

宮崎 まあ、本来はね。ただ、各国もかなりいろんなことをやっていますから。

北岡 農業なんかは常識的な制限があるわけですね(笑)。

宮崎 だから、それほど大したことはないという、そういうことがあるんですね。

北岡 なるほど。でも、現実には他の国が何をしているかよく見て、これまでにいけるかと。日本の海運は強かったんじゃないんで

すか。

宮崎 当時は強かったんだけど、しかしノルウェーとかデンマークとか、ああいう国に比べると劣っていたんじゃないですか。ギリシアとかね。

北岡 なるほど、わかりました。

■ケネディ・ラウンドでの交渉

宮崎 それから次はケネディ・ラウンド(一九六四〜六七年)ですよ。ハーター代表が日本に来たと。これは池田・ハーター会談というのがきっかけなんです。ハーターという人は、その前に国務長官をやっていた人なんです。だから、非常に大物なんです。国務長官やほかの長官もやっていたかと思うんですが、辞めて初代の通商代表になって池田総理のところ(指す)に最初に来たわけですよ。私は陪席したんです。

ハーターという人は当時、車椅子に乗っていたんです。それで官邸に頼んで、いつも総理の会見室は二階なんです、一階の部屋にしてもらって、そこで会って。そのときに、ハーターという人はなかなか立派な人だと思ったのは、最初に「アメリカというのは非常に特殊な国で」、その当時、互恵通商協定法だったか通商拡大法だったか、名前が変わっていたかもしれないんですけど、「議会から法律によって関税を下げてもいいというマンデイトをもらって、それから交渉を始めるというのをやらざるを得ないんですよ。今度、こういうマンデイトをもらったから、ぜひやりたいと思います」と、最初はそういうようなことで切り出したわけですよ。それは当然のことなんですけど、われわれ当事者は当然そういうことを知っているし、ガットの関係者はみんな知っているわけです。

アメリカが行政府が議会からマンデイト——関税引き下げ権限を貰ったときに関税交渉が行われるという慣例になっていたの。

だけど、考えてみるとおかしな話でね。日本なんかはそうじゃないけど、関税交渉をやったあとでそれを議会に持って行ってOKしてもらおう。ほかの国もだいたいそうです。それはおかしなというのが、ハーターには恐らく聞こえていたんでしょね。最初にそういう言い方で、「マンデイトを貰ったので、せひやりたい」と。それで「日本の参加がこの交渉を成功させるキーなんだ」というようなことを言ったわけです。

例外リストの話なんですが、その前にね。この前の日本のガット加盟のときの関税交渉なんかでちょっと話したんですけど、舌足らずだったかと思いますが、当時の関税交渉は、まず第一に、例えば日本がアメリカに対してプリンシパル・サプライヤーである品目ね。たとえば綿製品だとかなんとか、日本がアメリカに対して第一の輸出国——第二、第三がほかにあるかもしれんけど——プリンシパルな輸出国になっているものについてのみ、向この国の当該品目の関税引き下げないし据え置き〔注：据え置きとは関税を上げないという約束〕を要求することができるリクエスト・リストに載せることができる。日本がプリンシパル・サプライヤーでない場合には、プリンシパル・サプライヤーと一緒にあって、その当該品目の関税引き下げないし据え置きを要求できるといふことなんですね。今度はアメリカが日本に対して要求してくるのも、同じ原則で要求してくると。だから、ちょっと前に言ったように、結果としては労働集約的なものの関税譲許を取ったというのは、そういう原則がありますから止むを得ない面もあるわけです。

そういうリクエスト・リストの交換をしまして、それに対して「これは下げましょう」、あるいは据え置きしましょう、というのはオファー・リストというんです。オファー・リストを出して、それをまた見せ合って、それから交渉が始まるわけですよね。その場合に、「お前のところのオファーは足りない。わが国のオ

ファーよりももっと貧弱だよ。もっと出せ」という交渉になるわけです。

じゃあ、何を基準として足りるか足りないかということを見るかというのと、当時は三つぐらいの要素があったわけです。ひとつは、その当該品目の貿易量ね。トレード・カバレッジというんです。それからもうひとつは、関税引き下げの幅ね。デプス・オブ・カットですね。三番目は、将来伸びるかどうかというポテンシャルティ。その三つの要素を勘案して、このオファーはこれぐらいの価値があるとかいうふうにお互いに、日本がオファーしたものについては大いに売るわけです。たとえば綿花はゼロ関税に据え置きます。引き上げません、というオファーを米国に出しました。トレード・カバレッジは大きいけれど、米国からみれば日本が綿花ゼロ関税を引き上げる可能性はないということ、あまり評価しなかった。他方飼料用とうもろこしの据え置きオファーは評価しました。これだけポテンシャルティがあるんだとかね。そういうようなことでやりとりをやって、結局ネゴをやつてまとめるということになるわけなんです。そういうやりとりでは行くところまで行っちゃったわけです。お互いにリクエストしてオファーするというようなプロセスをやっても埒があかない段階まできちゃったということ、それは交渉のタクティクスとしても、テクニクとしてもそうだし、もうひとつは、それぞれの国内でこの品目はオファーしてもいい、この品目はオファーしづらいかんとというような区別をつけることがなかなか難しくなってきた。そこで、ケネディ・ラウンドの画期的なのは、一括一律の関税引き下げ方式というアクロス・ザ・ボードに、五〇パーセントかなんか引き下げるといふことをやるうじやないかということ、アメリカの提案の中にすでにあつたわけです。

その例外はベア・ミニマム。まったくのミニマムで、「ネセシティティッド・バイ・オーバーライディング・ナショナルインタ

レスト」ということでやるうということが原則で決まったわけですね。そこでハーターが、「その原則に乗って日本が入ってください」ということを言いに来たわけですよ。その当時はすでに、貿易量から言ってもGNPから言っても日本は非常にでかくなっていますから、アメリカとEECと日本のその三つが入らない限り交渉の体をなさないといいことであって、カナダや豪州が抵抗していて乗らなかったというけど、それは貿易のパターンとか貿易量を見るとよく分かると思います。

それで交渉になったんですけど、いま言いましたアクロス・ザ・ボードというのはいろんな意味があるんですけど、その他にもう一つ考えなくちゃいけないのは、当時EECができて「正式発足は一九五六年」、ローマ条約ができて「一九五七年締結」、だんだん共通関税というのができて来ましてでしょう。共通関税にだんだん収斂していくということなんですけど、当時はどこまで行ったか忘れちゃったけど、ともかくEECの域外に共通関税というものができるわけですよ。その共通関税ができますと、独仏だとかの間の貿易やモノの流れは国内と同じように自由になるのに対して、アメリカからドイツに輸出する、あるいはアメリカからフランスの輸出は、関税障壁で阻まれちゃうということもあるんで、当時アメリカの国内でそれをなんとかタイドオーバーするために、EEC内に工場をつくり生産するというようなEEC向けのアメリカの直接投資がえらい増えたわけです。国際収支も悪くなって大問題になったわけです。そういうことがあるものから、アメリカとしてはEECの共通関税のレベルを下げさせることによって、対EEC投資による国際収支の混乱も避けられるし、いろんな意味があってそれをやるうと思いついたわけだと思ふんですね。その前にアクロス・ザ・ボードじゃないと具合が悪いくらいこともあったんだと思います。

そういっただようなことがあって、というのはみんな後から分

かっていることです。想像はかなりしていましたけど、そこで日本がこれに乗っかるんだということを決断するまでが大変だったわけです。まず外務省の中をかためなくちゃいけないということです。

結局、池田内閣だったから出来たと思いますけど、ハーターがそのためのあれをやりて説得に来たわけですよ。ですから、例外リストの作成というのは大変だったわけですよ。ベア・ミニマムでなくちゃいけない。しかし、日本ではわんさか例外が出てくる。それを一つずつしぼっていかなくちゃいけないというので、当時は関税交渉も各省みんな慣れてないでしょう。だから、私のところは各省の課長を集めて、一つずつ吟味していったわけです。大蔵省の関税局がかなり助けてくれましたけど。前に申し上げたように、私はブラッセルのノメンクレーチャーで二二〇〇、だいたい頭に入っていることが、その時はとても便利だったわけですね。いい加減な説明をすると、通産省の担当官より私がよほど知っているということがたくさんあったわけですよ。通産省は当時、いろんな原局、化学局とか鉄鋼局とか繊維局だとかあって、化学局の化学を長いことやっている人に対してはかなわないけど、化学局の人が繊維局の話をするより私のほうが強いわけですね(笑)。だから、全部に強い人はここにはいないわけですから。それで得意になって一所懸命やって、ベア・ミニマムを作ったわけです。

北岡 どれぐらいの時間がかかったわけですか。

宮崎 何カ月かかかりましたね。

北岡 一遍に数カ月で、大変な濃密なスケジュールだったんでしょうね。毎日ですか。

宮崎 毎週何回かやっておりましたね。林(貞行)君というのが次官の後、駐英大使をやっていましたね。

股野 まだやっています。

宮崎 あれが入りたての官補で、僕の鞆持ちで毎週ついできていたわけ。

ケネディ・ラウンドはいま言いましたように、かなりアメリカとしても意図するところがあって、通商拡大法というか互惠通商協定法、これは法律を見れば分かるんですけど、いつから通商協定法になったかちょっと覚えがないんですけど。ところが、EECはまたEECでいろいろ思惑があったわけですよ。EECがいろいろなことをケネディ・ラウンド交渉のときに言い出したんですよ。そのうちの一つのことを「エクレトモン」というフランス語があるんですね。本来の意味は、トサカかな。関税が高いのと低いのがあってしょう。そのトップのほうを切っちゃってそれからスタートするという。五〇パーセント引き下げも既存のやつを五〇パーセント下げらんじゃなくて、関税の飛び出して高いものをまず切って、それから一律引き下げでいくんだというね。アメリカの関税には非常に高いものがあつたのをねらいうちしたわけです。

「エクレトモン」という、当時は流行した言葉なんだけど、特別なことはそういうことを主張したりね。これは対米交渉の武器としてもち出したものです。それから、これは農業農産物について、モンタン・ド・スーチアンという、支持の総量というのかな、モンタンってアマウントです。スーチアンはサポートですよ。モンタン・ド・スーチアンというのは、農産物について当該国の国内農産物の価格と国際価格との差を、支持の量とみなすわけですよね。その支持の量を減らすということを交渉のアジェンダにしたんじゃないかと。いずれもアメリカを狙った戦術でね。アメリカの関税は、本当に突拍子もなく高いやつや低いやつがこうなっている。これに対してEECは、初めは六カ国だけど、共通関税を作るのにみんなが平均したでしょう。だから、だいたい平準化されているわけですよ。そこから下げるといふ意味で、ア

アメリカがこんなになっているのを、まずここを切ってから下げるといふこと。

それからモンタン・ド・スーチアンというのは、要するにアメリカも国内の砂糖法だとかなんとか法で、かなり国内の農産物価格が高くなっているやつがあるんですよ。EECは共通農業政策でかなり高いけど、その支持の量を、モンタン・ド・スーチアンの支持の幅を固定しましょうというアイデアを出したり、いろんなアイデアが出てきたわけですよ。それはいわゆる戦術面についてEECというのはいろいろ知恵者はあるんで、いろんなことを言っている。だから、日本としてはエクレトモンはやってもいい。あんまり高いのはないですからね。ガット仮加入、それから加入のときの交渉で、宝石類とか突拍子もなく高いのもないことはないけど、ほんの僅かなんですよ。だから、これはやってもいいと。モンタン・ド・スーチアンは農林省は絶対にだめだと言ってますね。そういうことは別として、EECはいろんなことでアメリカにぶつけるでしょう。とにかく初めて三角、トライラテラルの交渉になっているわけですから、日本がどっちにつくかかなり影響するわけですよ。この関税交渉の細かいことは、もうほとんど私一人だったんです。だいたい上は、全然わからないわけですよ。ね。

ところが、その一言だけ、どうしてもね。僕は、戦術的にEECと組んだほうが楽だという問題についてEECと組もうとしたんだけど、当時の中山（賀博）局長は「EECと組むな。アメリカと組め」という、それだけは守れという指示があつて、大筋はその通りにしたんですけどね。

北岡 その指示は、具体的に「この件についてどうでしょうか」というと「だめ」という事ですか。

宮崎 そうじゃなくて、一般論で。

北岡 時々はいいいわけですね（笑）。

宮崎 だから、あんまりお伺いを立てなかったです(笑)。本当にいま考えるとワンマンなんですよね。上は分からないし横は分からないしね。ガットなんて知っている人がいないんですもの。北岡 そうでしょうね。事実としては、国の成り立ちからいったらアメリカというのは巨大な人工国家ですから、ヨーロッパと組んだほうが自然なことっていろいろあるでしょうね。

宮崎 ただ、E E Cが出来たということについて、当時のアメリカは政治的な観点もあって、対ソ関係とか原則としては歓迎するという姿勢を示しているわけです。ただし、経済的には脅威になる面もあるわけですよね。殊にさっきの共通関税が外に張り巡らせる関係で、アメリカの対E E C投資がえらい増えちゃって、アメリカ国際収支が悪くなるといったような問題もあったんで、E E Cの共通関税を下げさせるのがケネディ・ラウンドの主たる目的だったわけです。したがって、主戦場はアメリカ・E E C関係なんです。ただ、そこに日本が第三者として引き入れられたという恰好でね。だから、そのアメリカと一緒の交渉のいろんなやりとりをつぶさに見ることができたわけです。

さっきのモンタン・ド・スーチアンとかエクレトモンなんていうのは、外から見えないんですね。たとえば他の国はそういう交渉に参加してませんから、それについていちいち日本がどうするかということを考えてやっていたんだけど、国内はいろいろ、殊に農業ロビーは強いですからね。モンタン・ド・スーチアンを固定化するというE E Cのあれに乗ったら、非常に日本の農業もすっきりしたと思うんですけどね。

北岡 そのときは、大使ご自身の判断はどうだったんですか。

宮崎 乗ったらいんじゃないかと思ったんですけどね。

北岡 それはダメと。

宮崎 ダメ。絶対にこれは農林省はテコでも動かない。

北岡 これはアメリカにとっては重要な問題でしょうからね。

宮崎 アメリカも乗れないんです。だけど、乗るといふ姿勢を示すと、アメリカに対する一つのバイイングパワーが増えるわけですよね。下りるかわりに、おまえのほうもこれを下りるというところがね。そういうタクティクスもあまり使えなかった。

その当時だったかな、伊東正義という外務大臣をやった人がいますね。僕が課長をやっているときに農林次官だったんです。あとで外務大臣になって来て、僕は外務審議官だったかな、とにかく「俺が農林次官のときに、おまえにさんざんやられた」って言っているわけです。こっちは課長、向こうは次官ですよ。

北岡 政務次官ですか。

宮崎 いやいや、事務次官。だけど、大変な脅威だったらしいですね。それから、森本さんというのちに農林次官になった人が参事官だったわけです。農林経済局の次長ね。その人は、農林省の人に聞くと「何を持っていても三時間かかるといふので参事官なんだ」と言うんだけど、えらい慎重でね。話が分からないので、課長さんと交渉して、僕は「あなたのところには直接行く」と言っていて、森本さんに電話をかけたの。そうしたら、「いや、プレスもいるし来てもらっても困る。俺が適当な場所を設定するからそこで会おう」とかなんとか言って、そこへ行って会ったんです。なかなか慎重で大変だったです。しかし、農林省から見ると、わけの分からない人間がワアワア言って大変だって、上を下への大騒ぎだったことは、当時の伊東次官のあとで述懐したことでわかります。

カナダというのも、アメリカにひっついていきますからね。アメリカの一〇分の一ぐらい。農産物輸出国という意味では小麦が主なんです。他の農産物は輸入だし。それから、産業はアメリカの資本で出来ているとかね。豪州は、当時は工業がほとんどないんですよ。だから、両国がベア・ミニマム一律引き下げの例外を頑張って認められたのも、ある程度しよるがないことだと思います。

ケネディ・ラウンドについては、ずいぶんいろんなことが長いこと続きましたし、いろいろありますけども、話しているとキリがないぐらい、いろんなエピソードがあります。しかし、そういうことはもうないですよ。一課長がすべてのことを、いちばん下が知っていて、上は知らない、横は知らないで。

北岡 しかし前にも、局面は全然違いますけど、そういう経験をされましたよね。物動みたくない、何を輸入するかしないか。大使は二度もすごいところにおられたんですね。

宮崎 要するに、戦後の流動期の妙なところに、ポコンポコンとそういうところにはまりこんじゃったという。

北岡 先端を行っておられたんですね。このあと、たぶん日本としては、私は覚えていますが、池田さんが池田内閣のときに「西側世界の三本の柱」と言ったときに、普通の国民はえらく背伸びしたことを言っていると思ったんですけども、実感としてこういう感じは現場にはあったわけですね。

宮崎 あったんです。

北岡 それをやっておられて、池田さんのメッセージはよく分かりました。なるほど、という感じですね。

宮崎 米・EECに比べればガタンと落ちますけど、それ以外の国と比較すると、三極がえらい高いということは、貿易量からもGNPからも非常にはつきりしているんですね。

北岡 こうしたマルチの場で日本を背負って交渉しておられた。そのあと、大使のあとにはそういう世代が大勢育ったわけですが、この間も「会議屋さん」という話をされてきましたけど、あとはだんだん日本の外交が発展してきたと。

■ケネディ・ラウンドの余波

宮崎 そうそう。それでケネディ・ラウンドの最後の段階で、宮

沢（喜一）さんが大臣（経済企画庁長官）でジュネーブに来たわけです。米・EECの閣僚、アメリカの閣僚はたくさん来て、最後の交渉をやったわけです。そのときにその交渉の取りまとめに関与したのは、ウイングダム・ホワイトというガットの事務総長なんです。この人はイギリス人ですけど、いわゆる国際機関のヘッドとしては、これほど政治性があって有能な男というのは僕は見たことはないぐらい大変な男でしたね。それがかなりイニシアティブを取って、いろんなことをやっていたわけです。

国内問題としては、最後のベア・ミニマムで何を下ろすかという、最後の閣僚レベルの段階ですね。たとえば鉄鋼が例外だったのを例外じゃなくするというようにして、通産省の課長が、本当に血相を変えて宮沢さんに食ってかかったんですけども、結局それは例外にしないということで、最後でずいぶんベア・ミニマムのミニマムを減らして、最後の交渉をヘッドだけでやったわけです。ウイングダム・ホワイトの事務総長の部屋で、アメリカ・EEC・日本の三極のヘッドだけですね。

そこで、途中まで行ったところでだいたいいいだろうということ、シャンパンが出たんだそうです。シャンパンを飲んで、みんなウイングダムの言うことでもう出来たと思って帰ってきて、宮沢さんもそうやって帰ってきた。ところが、アメリカはその時、閣僚が何人も行ったんだけど、ひとつだけそのときなお、ペンディングだったから解決しなかった問題があったわけです。それはケネディ・ラウンドの本筋の話じゃないんだけど、いわゆる後進国に対する食料援助という項目があったわけです。いろんな経緯で食料援助をみんなしてやりましょうという合意が原則としてあったわけです。それについて、アメリカは専ら小麦をもっといくと。ところが、日本は食料援助で出すものはないでしょう。だから、アメリカから小麦を買って援助に出すか何かしなくちゃいかな。それはどうも好ましくないというので、日本はがんばっ

て、小麦じゃなくてもいい、米だったらたとえばタイから買ってインドネシアに持っていかできるんで、米を入れると。それはまだいいんだけど、そのほかに日本が出せるものとして農薬とか肥料を入れる、と言ってがんばっちゃったわけですよ。がんばっちゃったんだけど、アメリカはそれを飲んだ覚えがない。日本ががんばっちゃったつもりであるという。そういうのがはっきりしないときにシャパンが出ちゃってね(笑)。それで、みんなこれで出来たと言って帰ってきて、宮沢さんも帰ってきて、やれやれというわけで翌日ゴルフに行っちゃったんですよ、宮沢さん。当時の経済局次長の加藤さんや何人かが一緒に。

僕が留守番をしていたら、アメリカの代表がやってきて「宮沢はどこにいるんだ」って盛んに言ってくるわけ。だから「いま、いない」と言って頑張ってる。要するにそれは解決してないんだということを言いに来て。ところが、宮沢さんはゴルフで足を滑らせて怪我しちゃったわけです。加藤さんがおぶって帰ってきてね。新聞社に知れると大変だから、階段で足を滑らせたとかなんとかいろいろやって、とにかくゴルフで滑らしたんだけど、そういうことがあって足が痛いんだけど、そういう話がありましたということ報告して、それは適当にやっというてくれということになってね。

それでジュネーブを引き上げて、日本に帰ってきたら、当時のジョンソン大使がジョンソン大統領の親書を持って、佐藤総理なんですよね。最終段階。佐藤総理のところに来るといいうので、それは何だといったらいまの話で、「農業肥料なんかはだめだ。食料の援助をやるということがアメリカの了解だ」ということを言いに来るといいうんですよ。つっぱねたので終わったつもりだったのがそういうことになって困るので、もちろん宮沢大臣、それから大蔵大臣だったか誰か。宮沢さんに言ったら、「外務大臣、大蔵大臣、みな賛成するんだったら蹴飛ばしてもよろし

い」と言うんだよ。それで大蔵大臣のところに行って、「こういう話があるんだけど、蹴飛ばしていいと思いますか」と言ったら、「宮沢さんはどうだ」と言うから「宮沢さんはいいと言ってます」と。すると、大蔵省は「それじゃあ俺もいい」と言ってね。三人目もそれでいいと言って、みんなが蹴飛ばすことをいいというので佐藤さんのところに行って、「そういうことになっております」と言って。

それで、ジョンソン大使が親書を持ってきて、いまの話をして、そうしたら佐藤さんがね、これはまたするんだな。「蹴飛ばさないで、それじゃ牛場に行く」と。牛場外務次官に。それですぐ牛場次官に行けというんでジョンソンが行くんで、これはしめたものだと思って、帰ってきて牛場さんに……。前に牛場さんにも話していたんだ。「蹴飛ばしましょう」といって蹴飛ばしたわけですよ。それで決着。

それまでECにしても何にしても、日本がアメリカに最後までがんばって、言い分を蹴飛ばすなんていうことは考えられないというのが常識だったのが、日本がアメリカの大統領の親書まで蹴飛ばした最初の例であるということなんですよね。そういうのは知られてないんだけど。

北岡 それは何年になりますか。

宮崎 ケネディ・ラウンドが出来たときですがね。ちょっと忘れちゃったけど。

北岡 宮沢さんは外務大臣とおっしゃいました？ 通産大臣じゃないですかね。

宮崎 それはもつと前だか後だ。田中角栄の前に宮沢さんは通産大臣だった。ケネディ・ラウンドのときは宮沢さんが外務大臣です。

北岡 そうでしたっけ。そうすると、池田内閣で……。

宮崎 池田内閣から佐藤内閣になったときね。最後は宮沢さんは

ジュネーブに行っていたわけだからね。

股野 宮沢さんが外務大臣のときには三木内閣ですね。

井上 三木内閣の最初に宮沢さんが外務大臣だったと。

宮崎 じゃあ、ジョンソンは三木さんに会いに来たのかな。とにかく総理に会いに来たわけですよ。それで、三木さんには……。

北岡 三木さんのときはニクソンですよ。

股野 ジョンソンは前に駐日大使だったと思いますが。

宮崎 大統領もジョンソンだったんですよ。

北岡 ジョンソン大統領は六三年……。

股野 宮沢さんは当時、何だったのかな……。

宮崎 たしかに外務大臣だったですよ。僕はくっついていて。

北岡 特使かなんかですかね。佐藤内閣のときの外務大臣は、最初は椎名〔悦三郎〕さんですか。それから三木〔武夫〕さんがやっていますね。

武田 次が愛知揆一。

股野 宮沢さんは経企庁長官じゃありませんか。

宮崎 ああそうかな……ああ、そうだ、そうだ。

武田 経企庁長官に六六年になられていますね。

股野 きっと、ご一緒にお出でになったときは経企庁の長官だったんですね。佐藤内閣で経企庁長官ですね。

宮崎 そうかもしれない。

北岡 経企庁長官はそういう役回りをやることもありうる？

股野 宮沢さんのことだから、あり得たんでしょね。ちょうどそういうタイミングで行くと、ジョンソン大使だと宮沢さんは経企庁長官ですね。

宮崎 すると三木さんかな。

股野 三木さんが外務大臣。

宮崎 それじゃあ、三木さんに言ったら、大蔵大臣とかなんとか大臣がいいというんだったら、というね。宮沢さんも入ったと。

宮沢さんとなんとか。

北岡 三木さんならよく分からないから、そんなことを言ったかもしれないですね〔笑〕。

宮崎 それで、こっちに行ったら「三木さんはいいと言っています」と言ったら「それじゃ俺はいい」というので、三人ともいいと言ったんで、総理のところを持っていったわけですよ。

北岡 しかし、大変なことだったんですね。大統領の親書を持ってくるっていうんですから。

宮崎 そうそう〔笑〕、それをひっくり返しちゃったから。

北岡 これは要するに、日本が農薬や肥料や何かで援助することを認めたら、アメリカから日本が買う量が減ると。そういう……？

宮崎 それから、ほかの国にもそれを認めてあげなきゃいけないでしょう。これはアメリカに認めさせて、そのあとだったって、EECが「俺も」と言ってきたのは。「それは知らんよ」という

て。だから、EECとアメリカでどうなったか知らないんですよ。アメリカはがんばったと思いますよ。EECはそういうふうに明示的に交渉してませんでしたから。

北岡 やっぱりそのときの勢いで、日本には認めちゃったんだからしょうがない、ということ。

宮崎 しょうがないというか、がんばるとは思わなかったんでしょね。

北岡 なるほど。食料で援助するかどうかというのは、アメリカにとっては重要なことでしょからね。

宮崎 そのときのアメリカ側の記録を見ると面白いと思うんですけどね。しかしそういうのは……。

北岡 いろいろ批判が出てくるかもしれないですね。「宮崎というのはこういう頑固なやつだ」とか〔笑〕。

■ EEC誕生のときの外務省の対応

宮崎 (笑)。そういうようなエピソードがあったわけですよ。

それからその次に、国際機関二課長、統合課長、いろいろ役目は変わったんですけど、この頃、経済局の主になっていたわけですよ。経済局に五年もいたんですよ。課長。経済局に五年以上いたのは、極めて少ないですよ。だから、名前が変わっても実際上のボスでね。国際機関一課長には手島〔冷志〕君。僕の腹心だった彼をして、二課長には誰かを据え、統合課長って新しいのができたので自分がそこに行つて。当時はまだ年度の関係で参事官になれないんですよ。それで名称だけ参事官——名称参事官というのがあって、参事官の名称を与えられたわけです。したがって、課長の上にしたわけですよ。国会答弁なんかは「宮崎参事官」と言つて、説明委員でやっていたわけです。したがって、あまり課の名前が変わつたというのは、それほど影響がないわけです。ボスだったわけですよ。

北岡 名称だけというのは、いまでもあるんですか。

宮崎 いまはないんじゃない……。在外はありますけどね、名称公使。北岡 給与その他は課長と同じと。われわれの客員教授みたいなものですかね。

宮崎 EECの誕生については、これまた話が非常に長くなつちゃうんですけども、エピソードをひとつだけあげるとすれば、EECができた、これに対して日本側の考え方はいろいろあったわけですよ。EECという新しい特恵的なグループが出来ちゃう。そうすると、いままで対独、対仏、対英なんか——イギリスは最初入ってなかったですけど——輸出したのが輸出しにくくなるということ、日本にとってはマイナスだという意見のほうが多かったと思うんですね。ところが私は、EECが出来て、EECの各国の経済成長が高まれば、マーケットとしてますます大きく

なる。つまり、アメリカという太陽が世界にひとつだけあったのが、太陽が二つあったほうが日本にとっていいじゃないかという議論をやっていたわけですよ。あんまり支持してくれなかったですけど、私はいまでもそれは正論だと思つてます。

当時、そういう議論でやっていたんだけど、その中のひとつのエピソードとしては、EECの共通農業政策というのが当時非常に大きな問題だったわけですよ。共通農業政策を調べようというわけで、外務省にわずかに予算があつて、その予算でミッションをいくつか出せる。そのミッションのひとつに、共通農業政策を調べるミッションというのを作ることにしてしまつてね。なぜそんなものを調べに外務省の金を出すんだなんて意見もあつたんだけど、共通農業政策は今後大変なんだということを言つてOKを取つて。

それで誰を出すかということで、当時課長だったんだけど、農林省の先輩がいいだろうと思つたのね。東畑四郎という、前に農林次官をやつた農林省の大ボスがいるんですよ。米価審議会の議長もやつてね。当時農業なんかか研究所の所長室に東畑四郎を訪ねて、「こういう企てがあるので、あなたは団長になりませんか」と談判したら、たまたま彼はいろんな他の事情で米価審議会の委員をやめたいとか委員長をやめたい、いろんなことがあつたらしくてOKしちゃつたわけですよ。

東畑四郎はあれだから、別に農林の先輩の小倉武一という、いまの韓国大使の親父もメンバーに行かせようとした。農林省が、それこそ森本参事官がえらい抗議をして、「俺たちの先輩を勝手に使ってもらつては困る」というの(笑)。たしかに農林省とすれば米価審議会の委員長を別の人に変えなくちゃいかんと。それで東畑さんに逃げられちゃ困るとか、いろんなことがあつたと思うんですね。東畑さんにすれば、逃げたいために乗つたわけだけども(笑)——だろつと思つただけ。抗議が来て、そ

れでもがんばっちゃって行かせたわけです。その結果「緑のヨーロッパ」という調査書を作ったわけです。名著だと思います。そのメンバーが、当時の共通農業政策でだぶん調べて分かったやつを。統合化について思い出すことは、そんなようなことがありました。

北岡 これまで三極のアメリカ・ヨーロッパ・日本というお話だったんですけど、ヨーロッパの中の温度差というか意見の違いとか、そういうのはどうだったんでしょう。

宮崎 もちろん、えらいあるんですけどね。

北岡 フランス、ドイツ、それからイギリスはまだ最初のほうは外にいたわけですね。それぞれの意思とか利害は、どんな交錯をしていたんでしょうか。

宮崎 それぞれの意思・利害はもちろんたくさんあったんだけど、ケネディ・ラウンドに出てくる限りは、EECのコミッションが代表になってくる。フランスとかドイツは、その後ろに控えているわけです。スポークスマンはコミッションで、それ以外のメンバーは発言できないわけですよ。ただ見ているわけですから、そこで何かやったら、内部ですったもんだしてやっていることはもう目に見える。それから、われわれも時々、直接そういう情報は取っていました。

特に、わりと日本と近い意見を持っていたのがドイツなんですね。だから、私はドイツの連中とずいぶん親しくして、EECの内部の情報をドイツから取っていた。というのは、EECの内部の関税をなくすことによって、工業製品についてはドイツがフランスの市場を取ったわけでしょう。そのかわりフランスの農産物保護を認めてやって、フランスの農産物を、高いものをドイツが買うという恰好になっているわけ。ただ、ケネディ・ラウンドで関税が下がると、ドイツにとっては第三国に対する輸出も増えるし、農産物に対する補助が減ればドイツの経済負担は減るので、

アメリカや日本にわりと近い立場にドイツがなった。それに対して対極的なのがフランスだったわけです。農産物の保護は続けた。関税はあまり下げたくない。非常にシンプリアイしていえばそういうことですよ。その他に、ベネルクスとかいろいろの意思がありまして、ものすごくせめぎあい関係がドロドロしたもので、それをどういうふうにあセスするかというのは大変なことだったんです。

ところが、そういうことを一人で悩んでいるんだけど、部下には話したけれども、東京なんかだと全然話し相手がないんですね。

北岡 そうでしょうね。

宮崎 だから困っちゃうんです(笑)。非常に感謝したのは、上は中山局長。「アメリカと組め」ということは言ったけど、それ以外は一切言わなかったし、全部任せてくれたし。

それからOECDについては、加藤さん、鶴見さんの印象はそのあとにして、OECDがどんなことをやっているかというのは、皆さんもちろんご承知なんでしょうね。

北岡 いやいや、ちょっとサラッと行っていただくほうが、実感が湧いてくると思います。活字の上では知っていますけど。

■OECDの各種委員会

宮崎 おそらく活字の上といちばん違うと思うのは、毎日毎日五つか六つの委員会やその下部のワーキング・パーティなどの会合があるわけですよ。それで、各委員会がだいたい二日ですよ。年に千何百回か委員会があるんです。だから、その委員会の中で大事なものと大事じゃないものもあるし、日本に関係のあるものと関係のないものがあるでしょう。そういうことを毎日やっているんだということは、だいたい外から見えないですよ。新聞は

報道しないし、関係者以外は全然知らないわけですね。

その中で日本にとってわりと主な委員会としては、経済政策委員会というマクロの経済政策を議論する委員会、これがOECDでいちばんメインの委員会ですね。それと別にEDRCって委員会がありまして、各国の経済政策を審査する委員会。だから、日本も年に二回審査を受けるし、各国を審査するのやるわけですね。これはちなみに、審査するときには二カ国が審査国になり、事務局とともに相手国に対して質問するんですよ。これは面白かったですね。相手国だってみんな次官とか局長クラスが来て、一所懸命やるでしょう。こっちは素人なんだけど、質問をするだけ。質問をするほうが楽ですよ(笑)、答えるよりは。それで非常に面白かったですね。

北岡 どこをやられましたか。たくさんやられましたか。

宮崎 アメリカをはじめたくさんやりましたけどね。

北岡 計算から行くと、ずいぶんたくさんやるのですか、何カ国も審査を。

宮崎 年に一回だか二回でグルグル回るわけですから、当時何カ国だったか忘れちゃったけど、ずいぶんやるわけですよ。

北岡 OECDだと二〇ぐらいですか。

宮崎 当時、もう少し少なかったと思います。

股野 半分ぐらいに分けて、半分ずつやるんですな。

宮崎 そういうEDRCというのがあって。それから、貿易委員会というのがけっこう大事だったわけですよ。ガットは後進国も含めたけど、OECDのほうは先進国だけでしょう。その貿易委員会の中で特惠部会というのがありまして、後進国特惠。この前、ガットの特恵委員会の話をしたんですが、今度はガットの情報の改正が行われて、後進国に対してどうやって特惠をやるかということ、日米EC等の間ですり合わせるのをOECDの貿易委員会で行ったわけですね。だいたいそのときの結論にしたがって、日

米ECとも特惠を与えることにしたわけですね。その委員会なんかはかなり実のある議論があった。

そのなかで日本に関係があったのは、造船部会。作業部会ですけどね。WP六という理事会の作業部会の第六作業部会。というのは、造船に対する輸出補助金とか、クレジットを日本の場合には輸銀の融資というか、各国とも補助金を出している。それをハーモナイズするというので、当時、日本にとっては造船はいちばん大きな輸出品目のうちのひとつだったわけですから、大変な交渉だったわけですよ。

私は日本代表団のヘッドになってOECDでずいぶん何回も議論したんだけど埒があかないので、単身、いちばんうるさかった相手が三カ国なんですよ。ドイツとスウェーデンとイギリスね。その首都をグルグル一人で回って直接話をして、その結果このへんだったら大丈夫だというのを持って帰って造船部会でまとめたという。それも大変なエネルギー消費型の交渉だったんですけどね。

北岡 委員会は何種類ぐらいあるんですか。

宮崎 大きな委員会は六つか七つあって、その下になんとか作業部会とか。それから、独立の特別なパネルとか何とかいうのがあつたわけですね。

それから、日本に関係するのは貿易委員会。EPC(経済政策委員会)、EDRC、貿易、造船。それから環境というのができかけていたわけですね。今は各国で環境省もできているし大変な騒ぎなんですけど、環境問題というのは当時は日本とアメリカとごく一部スウェーデンと、その三つの国内で騒いでいただけで、ほかの国はまったく関心を示してなかったわけですね。

それぞれ別の理由で、アメリカはマスキー法とか環境のロビーがあつて、ごく一部の環境問題についてワアワア言っていたし、日本は水俣病とかなんとか病つてあつたでしょう。

北岡 イタイイタイ病。

宮崎 ああいうことがきっかけになって、ヒステリックに騒いで、環境基本法が出来たかどうかの時期。スウェーデンという国は、僕の聞いた話では——間違いかもしれないけど——国土は土壌の厚みが少ないんだってね。

股野 その通りですね。花崗岩が。

宮崎 岩がたくさんあって、その上に乗っかっている土壌が少ない。それにルール、ザールとか西ヨーロッパの主な工業地帯で出す煙の中にいる、硫酸とかいろんな酸、NO_xとかSO_xとかが入った煙が出てきて、気流の関係であっちに行っって雨が降る。で、酸性雨についていちばん最初に問題にしましたのは、酸性雨と湖のなんとかっていう問題を言い出したのは、スウェーデンなんですよ。間違っていたら訂正してください。

したがって、その部分だけなんですけどね。三か国で非常に環境問題がやかましかったわけ。OECDで議論しようということ、僕もかなりそういうイニシアティブを取ったんだけど、それに対する一般の国の反応は、アメリカや日本のように環境ヒステリーの国と一緒に議論するのはどうか、というような調子だったわけです。しかし、他方においてヨーロッパでも若干いろいろな問題ができていた。で、見えてきたんで、いまのうちからやろうじゃないかというので、環境委員会をつくらうと。当時なかったわけですね。事務局にも環境局をつくらうという。当時、科学局というのがあって、科学局の一部だったわけです。それじゃあ環境委員会、環境局をつくらうということになって、どういう方法論で問題に対してアプローチをしたらいいかって、まるとつきり見当がつかないんですね。それで、とにかく委員会を作って委員長を決めてスタートしようじゃないかというので、委員長を決めたら、さっきのハーターの息子がアメリカの政治家になっっていたんですよ。それが何か知らんけど、とにかく俺がなり

たいと言って、それがすることにしたわけ。

ところが、彼はOECDには全然来ないのね。アメリカの国内政治に忙しくて。僕は副委員長だったわけです。副委員長の職権で事務局を使って、金がある限りいろんなエキスパートを集めたわけです。それこそドクターからWHO「世界保健機関」の専門家から、エコノミストはもちろん、システムアナリストとかシステムエンジニアとか、ものすごくたくさんエキスパートを集めてヒアリングをやったわけです。聞けば聞くほど環境問題については、当時、知識がいかにないかということがよく分かったわけ。「エコロジー」という言葉がありましたよね。日本語では何と

いうんですかね。

北岡 生態学とか生態系。

宮崎 植物生態学とかね。だから、エコロジーというのは学問の根拠が非常に浅いんですね。過去三〇年か五〇年にわたって植生がどうなったとかなんとかいうのが若干資料があるだけで、ほとんど過去の蓄積がないんですね。したがって、「エコロジーをやっています」ということは、学者は恥ずかしくて言えなかった時代なんです。そういうときになんかやってみて、いかに知識が足りないかということを感じた。

ちなみにそのときのヨーロッパ大陸の感じ方としては、あとのベルリンに行ったときの話なんですけど、日本の環境の調査団が来て、ベルリンの当局に会わせるといふから会わせただけど、質問したらベルリンの当局が、要するに「重金属など汚染物質が水に溶けているらしい。それを魚が食って、その魚を野鳥が食う。だから、野鳥の健康に害があるんじゃないかと心配しています」そういう返事だったわけです（笑）。全然違うわけですよ。

北岡 人は魚を食べないんですか。

宮崎 まあ、あんまり食べないですよ。ドイツ人は特に食べないんですけど。

北岡 海の魚は食べますよね。

宮崎 ネコの餌ぐらいにしかな心得てない。だから、およそ感覚が違ったわけですよ。

北岡 環境委員会の発足は何年でございましたか。

宮崎 何年だったですかね。

北岡 向こうに行つて、もうだいぶ落ちつかれてから。

宮崎 もう末期です。私の……。

北岡 たしか私の記憶では、日本で環境国会なんていわれて環境の立法をやった国会は七〇年だったように思いますね。佐藤内閣の最後のほうで、たしか楠田實さんの話だと、沖繩が六九年に決着がついてほつとして佐藤内閣がちょっと虚脱状態になっていたときに、亡くなられた高坂（正堯）先生がヨーロッパを回って帰つてこられて、これからは環境が大変だというふうに言っていますよといわれて、じゃあ次はそれをやらなくちゃというので、七一年はニクソンショックで大騒ぎだったと思うので、七〇年の秋の国会で環境基本法とかやっただけというふう聞いたことがありません。もちろん水俣病が古いですけども、四日市ぜんそくとか、自動車の排気ガス、光化学スモッグとか、そんなことじゃないですかね。井上さんはご近所だったんじゃないですか。

井上 ええ、柳町の。

北岡 あれは七〇年ぐらいですか。

井上 ええ、そうです。

北岡 ヨーロッパはライン川の汚染とか、そんなのはなかったですか。

宮崎 オランダが騒いでましたけどね。重金属はたくさんあるんですよ。重金属というのは、人間は飲んでも大丈夫なんですよ。魚に蓄積されて、その魚を食べるから水俣病になるわけです。オランダが騒いでいるのは塩なんです。ライン川にフランスの工場が塩をたくさん入れるもので、ライン川の水を飲んでいますか

らね。

北岡 そうすると、川自体の汚染とか大気の汚染とか、そういうのはまだ大して騒ぎになっていなかったんですか。

宮崎 塩は騒ぎましたけどね。ライン川の塩はオランダあたりが大気の汚染が騒ぎになったのは、酸性雨というのが非常に顕著になったのはだいぶあとです。それまでは、そんなことは全然騒いでなかったんですよ。したがって、エキスパートを集めて方法論を決めて、どういうアプローチをするかというので、ハーターが来ないもので私が議長になって一、二回やったと思いましたが、話が進まないわけです。当時の大陸ヨーロッパの感覚はそんなものだったんです。他方、日本はあまりにもヒステリックだったんですよ。環境基本法というのは、かなり悪い法律です。フランスが取れてないんですよ。それが、日本の国内がガラツと変わったのは石油ショック以降です。石油ショック以降、もう少し現実的のものを見るようになったと思いましたが。しかし、それがOECDの主な委員会というよりも、日本に関係のある委員会は、まだその他たくさんありますけどね。先ほど申しましたインビジュアル委員会とか資本取引委員会とか、これはもちろん大事だし、経済政策委員会の中にWP三というのがあって、国際收支問題をやっている非常に重要な委員会です。その他たくさんあって、それぞれの人が各省ほとんど全部関係あるんですよ。

たいがいヨーロッパの国はみんな、その道の専門家が主幹局長とか何とかが飛行機で飛んできて二日間会議をやつてサツと帰っちゃうわけでしょう。日本はそんな簡単に来られないわけです。だから、いちおう各省の代表みたいな書記官をずらっと置いて、そしてなんでも屋の私が代わりにやっていたわけです。そういうことではほとんど全部の省から派遣されたわけです。公取まね。

北岡 来ておられるのは、どのレベルの方ですか。当時。

宮崎 だいたい大蔵省が公使他二名。通産省が参事官他二名かな。あとは農林省、運輸省、それとか、とにかく公取までね。科学技術庁、文部省、閣議が出来るくらい(笑)。

北岡 みんないるんですね。文部省は……。

宮崎 文教委員会というのがあるんです。さかんにやっていた。だから、文部次官をやっていた文部省の大御所なんかも来ていましたね。

北岡 今度はしかし、直接ではないですが、宮崎大使を通さないところの参画はちょっと難しいんですか。

宮崎 いや、そんなことはない。この当時は、はじめは参事官で行って、あとで公使になったわけです。公使というのがヒョロヒョロというんな委員会に出られるんです。大使というのは偉いから、他の委員会に出られない。理事会とかなんかには大使が出なくちゃいけない。だから、公使で行ったときに環境委員会を作ったりいろんなことをやっていたわけです。

そのときに来ていた書記官が、ずいぶん各省の次官になった人がいます。というのは、「JAPAN」という名札を持って発言できるというのは、いまは委員会がたくさんありますから、各省の人にとってはほとんど唯一の場なんですよね。それで、委員会から上がってきて政策委員会とかになると、要するに私が引っぱり出されて出ていったことが多いんです。いちばんトップは閣僚別の委員会があるわけですね。その他、理事会というのが大使の理事会がある。委員会はそんなふうな……。

ただ、やり方が国連と一番違うというのは、だいたい各委員会、どんな難しい問題でも二日なんですよね。だから、四セッション。それであるわけです。それから、事務局がものすごく能力がいいんです。国連の事務局は本当に能力が悪い。それから、国連の場合は一ヶ月ぐらいかかるんです。まったく要らない演説

ばかり。

北岡 二日間四セッションって、朝、昼、朝、昼と。

宮崎 そうそう、午前・午後。

北岡 夜はフリーなんですか。

宮崎 たいがい最初の日の夜はダイナーで、一緒に主要国が打ち合わせをしたりなんかしますけどね。

北岡 もうほとんどワーキングダイナーみたいなものですね。

宮崎 そうそう。

北岡 だから、朝から次の日の解散までびっしりという感じですね。

■エコノミック・マインデッドの大切さ

宮崎 夕方までね。OECDの機能としては、事務総長の代わりというのは、初めはクリステンセンというデンマーク人の、大蔵大臣をやったり大学の教授をやっていた人なんです。専門はなんとか経済学といった。この人の時代のOECDは、どっちかといえどシンクタンクみたいな機能がかなり強かったわけです。そういうふうなエキスパートがたくさんいるし、環境委員会を作るというのも、すぐどうというよりもシンクタンク的な機能の一環として出来ているわけですからね。

ところが、それに対するアメリカが非常に不満をもっていたわけです。そんなものじゃだめだ、もう少しアクション・オリエンテッドなものにしたいというので、いろいろ紆余曲折があったんだけど、ヴァン・レンネップというオランダ人の事務総長を持ってきたわけですよ。ヴァン・レンネップというのは、オランダの大蔵省に長いこといた男で。クリステンセンというのも頭がかなり切れたんだけど、茫洋として哲学者みたいなので、あまり細事に拘泥しないという。ヴァン・レンネップは、テキパキものをやって

いく。OECDはだから、どっちかといえばシンクタンク的なものからアクション・オリエンテッドなもの、アメリカの注文に沿ったような恰好で改装されていったわけです。

私はもう一度OECDに行つて、そのときはまた別になります。そこで鶴見大使、加藤大使。両方とも非常に優秀な方なんです。ただ、極めて違った点は、加藤大使という方はインプットが非常に難しいんですよ。新しいことを持つていくとインプットが非常に難しいんですけど、ひとたびインプットしちゃうと、アウトプットは素晴らしいんですよ。飲み込みは遅いんですけど。飲み込むまで一所懸命やって、ひとたび飲み込まれると、たとえば外国人に対して喋るときに、実に見事に議論を展開される。鶴見大使は逆なんです。インプットは易しい。非常に飲み込みが早いです。けど、淡々としていてやることにメリハリがないんですよ。日本の政治家にメリハリだけという人もいますけど、この人はメリハリがない。だから、ちゃんと聞いている人はいいんだけど、聞いてない人はよく「あれ？」なんていうことがある。しかし、両方とも非常にセンスのある方で、特にエコノミック・マインデッドネスのある方なんですよ。

エコノミック・マインデッドネスがある方の系譜というと、牛場〔信彦〕さんがそうだけど、それから、中山さんはポリティカル・マインデッドなんだな。非常にズバリと物を言つて、政治的センスがあるんだけど、経済的にはマインデッドネスはないんだ。ちなみに、私は大学に入って、最初に末広殿太郎という人の民法の講義に行ったら、「君達は民法第一条に何が書いてあるか、大学を出ちゃうと忘れちゃうだろう。民法を延べ何時間かやるんだけど、それで覚えておいてもらいたいのは、リーガル・マインデッドネスだ」というんですよ。リーガル・マインデッドネスとというのはどうということかというのを覚えていけば、民法第何条に何が書いてあるかというのを読めばいいんだからって言われたん

だけど、経済もそうですよね。エコノミック・マインデッドネスのない人にいくら経済の話をしてもダメなんですよね。

外務省の系譜の中では、加藤、鶴見両大使は、本当にマインデッドネスがある。ところが、そういう方が断絶があるんですよ。私どもが見ている、この人はとても大変だと思つていたような、たとえば佐藤健輔、経済局次長、在仏公使をやってなくなりました。また、永井三樹三という人ね。経済局の次長をやって死んだんです。それから稲垣一吉という人も、牛場さんのあとの外国為替委員会事務局長なんかをやった。その人も亡くなっちゃったしね。そういうふうにはエコノミック・マインデッドネスのある先輩が、断絶があったわけです。そのあとで出て来たのは、加藤、鶴見さんぐらいじゃないですか。

北岡 これは天与のものでしょうか。それとも、経験、職業……。宮崎 天与というか、関心の度合いですよね。おそらく法学部の先生方は経済に関心がないと思うんです。だって、株式欄なんて読まないでしょう。

北岡 読む人はいません。外務省は経済学部の出身もいますよね。そういう人が経済畑に。そういうことはあんまり関係ないですか。宮崎 そんなことは関係ないですよ。私は経済に関心があるので経済畑が長いんだけど、法学部ですから。

北岡 ええ、政治哲学ですね。

宮崎 政治学科ですけどね。だけど、そういうわけで両大使とも亡くなられたんですけど、非常に惜しい……。そのあとが平原〔毅〕大使という、亡くなったけど、あの人はエコノミック・マインデッドネスがないんだよね。先輩の悪口を言っちゃいけないんだけど。だから、私はずいぶん人を育てたつもりだから、下にはたくさんそういうのがいます。人材豊富。

北岡 難しい問題は、政治家との接触がずいぶんいっぱい出てくるわけですけど、政治家にもそういうエコノミック・マインデッ

ドネスのある人ない人が非常にあると思うんですけど、池田さんが非常に大使のご評価が高いので、池田さんは非常によかったんじゃないかね。他の方はどうですか。

宮崎 田中角栄さんはあるんですよ。

北岡 そうでしょうね。

宮崎 あの人は本当に「コンピュータ付きブルドーザー」という異名があったんだけど、ものすごく勤がいいんだけど、インプットを間違えたら大変なことになっちゃうわけね(笑)。で、大蔵省が為替統計かな、通産省が関税統計で何かものを言ったらいいんだね。それが田中さんの頭のなかでこっちゃんになっちゃって、間違った数字が出てきて、訂正するのに困ったという話が(笑)。

それからやっぱ福田(起夫)さん、大平(正芳)さん、こういう人たちは。全然ないのは三木武夫。鈴木善幸。

北岡 宮沢(喜一)さんはどうですか。

宮崎 宮沢さんはありますよ。宮沢さんがいちばん長いおつきあいがあって、二〇年以上、課長のときからお付き合いはあるんですけどね。宮沢さんはもちろんありますけど、インテリ的なシャイなところがあってね。

北岡 政治マインド、経済マインドと分けますと、三木さんと鈴木さんは経済マインドがない代わりに政治マインドがあるとも、必ずしも言えないような感じですね(笑)。しかし、田中、福田、大平、宮沢、皆さん、あれですね。田中さん以外は、皆さんやっぱり官僚出身の、大蔵省経験の長い方ですね。

股野 OECDにこの時期におられたころのDACはいかがでしたか。

宮崎 DACはややマンネリ化しつつあった時期です。いわゆる援助屋の集まりみたいな色彩が強くなっちゃって、DACとか、あるいは援助担当大臣会議の決議がなかなか通らないという、だんだんそういうときに差しかかってきたわけですよ。というの

は、援助の論理は、DACに集まる人はもちろん援助しなくちゃいかんというあれで、殊に北欧のスウェーデンとかノルウェー、デンマークあたりとオランダ、非常に援助に熱心な国がワアワア言って大国の尻をひっぱたくわけよね。

ところがアメリカは、出てくる人は前向きなんだけど、議会がかなり言うことをきかなくなってきたりして、日本は当時はまだ相当前向きで、どんどん援助量が増えている時期だったんですけど、ただし質があんまりよくなかった。

北岡 この頃は世界的に言うところ、まだニエオとかプレビッシュ報告とかそういうコンセプトがものを言っていた時代ですか。

宮崎 ものとは言っていないけど、あったことはあったね(笑)。

北岡 学者の間には影響があったけど、実務では結局あれはうまくいかなかったコンセプトですからね。それから、日本はいちばん最後に入ったわけですが、それ以外の国は基本的にみんな植民地を持っていた国ですよ。植民地に対する援助とか、それが中心だったんでしょうか。

宮崎 フランスとかなんかがいちばん顕著なんですけどね。けど、スウェーデンなんかは植民地はなかったわけですから、非常にジェニユインに。スウェーデンの代表なんかを聞いてみると、本当にそう思っているのかと思うくらいジェニユインにね(笑)。一所懸命大国の尻をひっぱたこうとしていましたね。

北岡 それは股野大使、いかがですか。

股野 ジェニユインだと思います。植民地がまさにありませんで、理念的なものがかなりあると思いますね。

北岡 そうとう長い伝統なんですね。

宮崎 だから、キリスト教の伝統とか、いろいろなことがあるんじゃないかね。

北岡 同じレベルでもずいぶん違っていたんじゃないかな。北欧系の小国のそういう思想と元植民地を抱えていてやっている国との

間にそうとう大きなギャップがあって、停滞したんでしょかね。宮崎 それからやっぱりアメリカですよ。この前に僕がアメリカにいたときに、アイゼンハワールの時代に流行った言葉に、これは互恵通商協定やなんかを作ったりしたときのキャッチフレーズで、「Trade not aid」という言葉があったんです。その頃からあって、アメリカの援助予算が伸び悩んできているわけですよ。キャッチフレーズだけで実際上あまり実現されていなかったんですけど、互恵通商協定とか通商拡大法を通すために、そういうキャッチフレーズを作ったんでしょうね。

北岡 結果的にはそのあとケネディ・ラウンドに行ったわけですから。

■ベルリン総領事時代の東西ドイツ

宮崎 まあ、そういうことですけどね。

その次は全然質が変わって、ベルリンなんですけどね。ベルリンの総領事というのは、当時はもちろん西ベルリンのことをいろいろフォローしているわけですが、もうひとつの重要な任務は、当時の東独の政治経済状況をフォローするという任務があったわけですよ。

これは言うのは簡単ですけど、けっこう大変なんですよね。ああいう国ですから、いつ何が起こるか分からないでしょう。そうすると、それをいちばん早く知るためにはラジオなんです。東独のラジオはいくらでも聞けるわけですから、常時官補を一人残して聞かせていなくちゃいけない。だから、代議士さんが来て大勢で人が払うときも、必ず一人残して東独のラジオを聞かせていたし、僕自身も努めて東独のテレビを見て、新聞も毎日、『ノイエス・ドイッチュランド』という東独の機関紙があるんです。ちなみに、これのつまらんことってね、本当に読むのが嫌になってき

た(笑)。いままで読むのがいやになった新聞は二つあってね。一つは、そのあとにアルジェリアへ行ったときの『エル・ムチャヒード』というアルジェリアの党の機関紙なんです。一つしか新聞がないんですよ。これはフランス語。それから、東独の『ノイエス・ドイッチュランド』ですね。当時はウルブリヒトからホネカーに代わる時だったんだけど、ウルブリヒトの演説なんて一ページ全部書いてあって、その目玉がどこにあるか分からないし、「万雷のような拍手」とか時々出てくるんだけど、これを全部読むのはとても大変なんです(笑)。ところが、翌日の西独の新聞を見たら、実にうまい具合にサマリーが出ているわけ(笑)。本当に東独を観察するというのは大変なことだったわけですよ。

北岡 長いですからね、演説が。五時間とかやったりしますからね。

宮崎 当時は東独には行けなかったわけですよ。東ベルリンまではわれわれは行けたわけですけどね。チェックポイントチャリーリを通してね。東ベルリンまでは何回も行って、オペラを見たりなんかして。オペラは良かったんですけど、デパートに行っても物が全然なくて、東西格差というのは歴然たるものがあつたですね。

当時、私が行くちょっと前までは、ブランドが西ベルリンの市長だったわけですよ。それが首相になっていっちゃって、そのあとの市長がいたわけなんですけど、当時東独と西独との交渉が始まっていたんです。西と東と両方が交互でベルリンで。その西側の代表はバールという人で、あとで社民党の何か大臣になった人ですけども、毎週一回だったかな、非常に頻繁に会っていました。時代的に言うとうるブリヒトという人が退任してホネカーが出てきて就任した時期で、ホネカーが出てきたときに、いくらかいろんなことが変わるんじゃないかという期待があつたけど、変わらなかったわけですよ。

ちなみに、オストポリテイクというブランドの東方外交とい

うのが非常に有名だったんで、オストポリテイクに関する評価というの、もつとあとで別のときに私の二種類の評価を申し上げたいと思うんですけど、とにかくその結果、両独の交渉が行われてきた。その前に四か国の取り決めが行われて、それに基づいて両独の交渉が行われたんです。

余談ですけど、四か国の取り決めが、英語と何語で出来たのかな。四か国というのは米英仏ソから出来て、それに基づく両独の交渉が始まったんですけど、それをドイツ語に直した場合、東独ヴァージョンと西独ヴァージョンと違うんですね。それが非常にクリティカルなことが違うわけ。見てみると、これがどっちにも訳せるんだな。「ビンドウング」と「ファエビンドウング」とか。「フェアビンドウング」と「ビンドウング」がどれくらい違うのかというのが、語感としてはなかなかかわれわれには分からないんだけど、それが非常に重要な意味を持つわけですよ。

北岡 どのくらい違うんですか。

宮崎 つまり、「ビンドウング」のほうが強いのかな。要するに西側との結びつきが、西ベルリンと連邦、ブンデスリプブリクとの結びつきの問題なんかについて、片方は「ビンドウング」でかなり直接的で、片方は「フェアビンドウング」で、もう少し薄められたというようなね。そういうった類のあれがたくさん出てきて。だから、英語をドイツ語に直すのもそのへんが難しいんだなと思って、われわれがなかなか直せないのは無理ないなと（笑）。弁解だけ。

北岡 正文は英語とロシア語ですか。

宮崎 フランス語があったかどうか知りませんがね。

北岡 ドイツ語は正文ではなくて、それぞれを東西に国内向けに。宮崎 そうそう。因みに、パールさんが何をやっているかということを知りたいと思ってね。忙しくて、ボンから出掛けてきてこういう会談が終わるとすぐ帰っちゃうでしょう。だから全然わか

らないですよ。結局あんまり結果は出なかったけど、パールの女友達というのがいてね。諸先生はお若いからご存じないと思うけど、田中路子という名前を聞いたことがありますか。

北岡 ええ。

宮崎 案外ませておられるんですね（笑）。

北岡 （笑）。歴史上の人物ですから。

宮崎 田中路子って戦前の日本の女優でね。たとえば戦前に早川雪洲と共演して、『ヨシハラ』という映画に。その人が早川雪洲と別れてウィーンのコーヒー王と結婚して、ナチスが崩壊する当時にベルリンにいたんですね。ウィーンのコーヒー王と別れていのかどうか知らないけど、ベルリンにいて、当時のベルリンにいろんな国から逃げ込んできた日本の外交官の若い人をずいぶん世話しているのよね。飯食わしたりなんかして。おそらくそのときに来た人は、みんな世話になっているんだろうと思う。

その人がそのあとはデ・コバという有名な舞台俳優と結婚して、ベルリンに住んでいたわけですよ。それがどういう加減か、岸元総理と非常に親しくなっちゃってね。どういうわけか知りませんが、岸総理の口利きでいろいろなことをやったわけですよ。ベルリン総領事は田中路子女史といかなる関係を持つべきか、二派に分かれちゃってね。亡くなった曾野（明）駐独大使と法眼（晋作）さんという次官をやったこの二人は、田中路子ともう徹底的に喧嘩しちゃったのね。他方、田中女史にべつたりの人もいたし、僕はどうかするかどうかで「つかず離れずで行きます」と言っていて、本当につかず離れずにしたんだけど、当時はデ・コバさんというご主人が病気になるっちゃって、舌癌。路子女史も非常に寂しかったのかな。私は親しくなかったけど、家内が親しくなってるね。なんか突然電話をかけてきて、「いまから飲みに行っていくか」とか言っちゃってきて、ブラッディメリーを飲んだりなんかしてこぼしてただけど、その彼女がパールさんと非常にいい仲だとい

うんですよ。それからベルリンの当時の市長とも仲がよくてね。市長なんてなかなか来てくれないんです。ところが、田中路子が来るというので、彼女と一緒に呼ぶと来てくれるんだな、飯に。それは岸さんだけじゃなくて、ドイツの政界に非常に強力な。

北岡 すごいですね。華麗なるものですね。

宮崎 オペラの歌手を志して日本からやってくる女の子に教えているというのが本職みたいだったけど。ところが、そういうふうな女傑だけあって、ベルリン在住の人の中で、あるいはベルリンのドイツ人の中で、えらい敵対者がいるわけね。彼女に対する両方があって面白い女性だと思って、ああいう女性は僕は見たことないから。亡くなったんですね、たしか。

北岡 当時、田中路子さんておいくつぐらいだったんですね。まだ若い方ですか。

宮崎 もう六〇にいったか、いかなかったじゃ……。

北岡 そうでしょうね、もう戦前から有名人ですから。しかし、そんな年齢で、まだそんな親密な関係の方がいろいろおられたわけですね。

宮崎 そうなんです。

北岡 すごいですね。実感として分かるという感じだったですか。

宮崎 いや、市長を呼ぶときに彼女と一緒に呼ぶと来てくれるのは、これは実感ですね。

北岡 結果でなくて見て、やっぱり魅力的な女性だと。

宮崎 ウーン……やっぱり年も年だから、あんまり魅力的だとは思わなかったけど(笑)。しかし、やっぱり才能はあったんでしょうね。

北岡 曾野さん、法眼さんというのは日本の外務省でタカ派の方ですよ。それと関係ないんでしょうかね。

宮崎 それと関係はないと思いますけどね。岸さんはけっこうタカ派だけどもね。

北岡 タカ派で親しい人も敵対的な人もいるわけですね。宮崎 しかし、そうとう激しかったようですよ。

東独に持って入るのがいちばんいけないのが、当時はピストルだとかなんとかいうんじゃないかと、新聞・雑誌なんですよ。西独の新聞・雑誌を持って入るといことは、もう厳禁だったわけですよ。われわれは外交官だから別だけど、人の話を聞くと、新聞・雑誌を持って入ったら捕まっちゃって、えらい目に遇ったって、そういうドキュメントですね。それからもうひとつは、当時から東独のマルクは闇で西ベルリンで四対一ぐらいだったわけです。闇レートがね。東独マルク四マルクが西独マルク一マルク。したがって、西ベルリンで換えた東独マルクを持って入って、向こうで買うものでいちばんいいのはレコードだったんですよ。レコードだけはいいものを、古いものでいいものがあって、レコードを買って帰るといちばん安かった。だけど、それが闇で換えたマルクを持って捕まると大変なことになった、というような時期ですね。

それから、入国はそう難しくないんだけど、出国がえらい難しい。壁を乗り越えようとして射殺された人が大勢出た時期ですよ。東ベルリンの郊外にシェーネフェルトという空港があるんですよ。僕がなにか出張で西ベルリンからポーランドやチェコやなんかをグルッと旅行する用があって、それに行くときにはシェーネフェルトから行くとポーランドがすぐなんです。で、シェーネフェルトには行けたわけ、当時。飛行場だけはね。行って飛行機に乗ろうとしたら、パスポートで捕まっちゃったわけですよ。それはどうしてかという、いままで各国何十回まわってどこの国でも捕まらなかったのを、見たら、宮崎のアルファベットで書いてあるどこか一字が消して打ち直してあるというんだよね。それを見て、これは打ち直してあるから出てくれないんですね。ワイワイワイって、だんだん偉いのが来てね。だって、顔を

みたら東独人じゃないことはわかりそうなものだと思うんだけど(笑)、とにかくそういうところは能率がよくてね。それで結局、ギリギリでやっといちばん偉い人に交渉して放免してもらったんだけど、驚いたね。それ以外の国もずいぶんそのパスポートでグルグル回ってるんだけど、ゴムで消してもう一度タイプで一字打ち直してあるというのを見つめる能力は大したものだと思うんだけど、とにかく出国はそれほど厳しいわけですよ。日本のパスポートで一字違っているからって出国させないでどうするつもりだったのかな、なんて思ったくらい。しかし、出国は大変で入国はそれほどでもなかった。

西独のテレビは東独では、当然のことながらアジャストすると見えるんですよ。それをアジャストするといけない。それが見つかると大変なことになるといふ時期がずいぶん続いていました。だから、ちょっとホネカーになって変わったのが、それまで厳禁だったロックミュージックというんですか、やかましいやつね、あれが認められるようになって、東独のテレビやラジオに出るようになったから若干の変化はあったんだけど、とにかくそういうメディアの輸入厳禁という時期だったんです。

それで、本当に物がなくてね。東ベルリンに行っていることは、オペラを見ることがね。これはよかったですよ。それから、古いやつだけでもレコードを。そのくらいです。

北岡 このソ連圏、東欧圏では東独というのは優等生と言われてたんですけれども、実は七〇年代の初めころはそんなものだったんですね。

宮崎 もう歴然たる格差ができてますね。そのあと僕はボンにいたときに、また東独を旅行したんですけど、そのときの東独大使は村上(謙)君というね。彼ともずいぶんいろいろ意見を交換したんだけど、このときには東ベルリンより先にはいけなかったんだけど、ヒットラーが作ったアウトバーンが、西独のほうは補修

して拡張して直している。東独のほうは、それがそのまま残っているんだよ。まるっきりレベルが違うんですよ。それから、民家がみすばらしいことね。とにかくこの格差たるや、大変なものだと思います。

ドイツの話はまたあとですることがあると思いますけど、駆け足で、まだたくさん挿話みたいなものはたくさんあるけども、そんなことを話していたら日が暮れちゃうから。

北岡 挿話みたいなやつはなかなか聞く機会がなくて、このへんは大変楽しんで聞かせていただいているんですけど、ご本人からするとそんなの当たり前だと思われるかもしれませんが、われわれは本当に思い出されるお話、いちいち面白く伺っております。

股野 年表によると、大使がおいでになった七一年にウルブリヒトからホネカーに変わって、数カ月でまたウルブリヒトが国家評議会議長として再任されるんですね。

宮崎 それは形式的なことだけでしょう。

股野 そうですか。ホネカーが国家評議会議長になるのは、もうちょっとあとで。

宮崎 しかし、それは名目的じゃないですか。何かの事情でそういうような体裁を整えただけだと思いますよ。当時、報告を出したのを覚えていて、社長が代表権つきの会長にまずなつたと。そのうちに、代表権なき会長になるだろう、というような報告を出したことがあるんですけどね。だから、代表権つきの会長の時期があるわけですよ。ウルブリヒトは本当にスターリニストで、スターリンの弟子の中で最後まで生き延びた人ですよ。

■ 国際機関の使い方が下手な日本

北岡 先ほど、OECDに各省から来ておられた方々が「JAP AN」という札を立てて発言するのはなんとなく嬉しいというお

話があったんですが、そういう方々はそれぞれの省の中ではわりあい国際派の方なんですか。

宮崎 そうでしようね。ですから、ここに来ていた人で、次官になった人はずいぶんいますよ。各省に。

北岡 あるいは、ここで経験しているうちに、さらにまた国際派になって、ということはある……。

宮崎 うんまあ。それから、各省によって違いますけど、在外ポストが少ないところでは、いちばんのエリートを出したんでしょうね。国際派であるかないかに関わらずね。

北岡 もっと昔には、一部の省では国際派であるということはマインス要因であるというところがあったようですけど、もうこの頃はそうでもないわけですね。

宮崎 まあ、農林省なんかはね。大蔵省とか通産省とか、在外にたくさんポストを持っているところはそうじゃないんだけど、OECDにしかポストがないような省がいくつかあるわけですよ。そういう人はやっぱり優秀な人を出してきていたわけです。だから、現にそのあとでそこに、たとえば科学技術庁なんかの書記官をやっていたのが次官になっていますね。あとで出世している人がたくさんいますよ。

北岡 なかなか全部で、いまはどれくらいですかね。相当大きな所帯ですね。

宮崎 そうそう。

北岡 その頃もかなり大きかったですね。

宮崎 大きかったですよ。

北岡 これだけ一緒に会議をやっていると、みなさん仲良くなるんでしょうね。

宮崎 それでスタッフミーティングをやって、いちおういろんなことを。OECDではいろんな委員会があるでしょう。結論というか、デシジョンメイキングに類することは理事会上がってく

るんです。そういう意味ではピラミッド型で、理事会というのは大使が出るやつです。理事会と執行委と二つあるんですけど、そこに上がってくるので、わりとどの委員会が何をやっているかということがつかみやすいんですよ。エッセンスはそこに来ますからね。

ただ、どの程度アクシヨン・オリエンテッドかということになりますと、OECDの基本的な弱点は、各国が拒否権を持っているんですよ。だから、全会一致じゃないとまららないんです。それが、アメリカなんかにとっては非常に物足りないんでしょうね。

因みに、国際機関の盛衰の背後には、アメリカといまではEUですけど、EUなんか一部の国の意向がずいぶん反映するんですよ。アメリカがOECDに非常に力を入れた時期と、まったくデタッチトの時期があるわけです。それから、アメリカはたとえばIMFには常にわりと関心を示しているんですけど、ガットについてはかなりデタッチトのときと関心を示しているときが。アメリカはIMFを非常に重荷というか、平均的に見て常に重視しているのは、ボーディングのシステムが決まっているでしょう？ 何パーセントか忘れちゃったけど、難しい計算によって、アメリカは二五パーセント持っているんじゃないかとか。OECDでは一票しかないでしょう。それから、国連を非常に嫌うのは、国連総会は一票ですよ。

ガットも一票なんですけど、ガットが非常に伸びてきたのは、初代の事務総長のウイндаム・ホワイトが非常に政治的にうまくやったわけ。そういうような状態にも関わらず、主要国の意見をプロポーシヨネットに反映させるような枠組みというか運用をやっていた。それがつまり、ガットの歴史を申すつもりはないけど、ご承知のように、ガットはインテリム・コミッティ・オブ・WTO〔世界貿易機関〕なんです。プレトンウッズ体制で、

IMF・世銀と並んでWTOというのが出来た。だが、アメリカがWTO条約を批准できなかったのかな。とにかくWTOが発効しないんで、そのインテリム・コミッティとしてガットが出来たわけです。ガットが出来て、初代の事務総長がウイングダム・ホワイトだけでも、ガットの運用を立ち上げるときから非常にうまくやったというか。「うまくやった」というのはいいほうで、悪く言えば、力のあるほうになびくというかね。だから、力がないと無視されるわけです。日本の最初の時期——加入の時期はまさにそう。まったく無視されていた時期があって、経済が伸びてくると三極の中に組み入れられた。それもウイングダム・ホワイトにあずかっている力がずいぶんあると思う。

たとえば宮沢さんはウイングダム・ホワイトを非常に高く評価しているんです。

北岡 さっきアメリカは、力を入れた時期とそうでない時期があるとおっしゃいましたけども、それはだいたい政権によるわけですか。何政権は力をいれたとか。

宮崎 必ずしも政権にもよらないと思いますけどね。

北岡 じゃあやっぱりイシュー、イシュー……。

宮崎 イシュー、イシュー、ですしね。たとえば国務省・財務省は、どの国際機関を一番のウエイトを置いて使うかということに、かなり影響力を持つんですね。それはまた、事務総長のあとを誰にするかなんていうときに非常に露骨に現れるんです。だから、日本もだんだんと国際機関をどういうふうに使おうかということ、本来は考えていくべき時期。一つ覚えみたいに国連、国連、国連中心主義なんて言ってるのは、どうかという気がしますけどね。

北岡 まったくその通りですね。

宮崎 というのは、国連にメリットはあるんだけど、デメリットもたくさんあってね。

北岡 おっしゃる通りですね。

宮崎 国際機関ってたくさんありましてね。その中で、どの国際機関にどれだけのウエイトを置き、何をやらせるかということを考えなくちゃいけないんですね。前にアジェンダ・セッティングということを行いましたけど、国際機関をどうやって使うか、どの問題をどの国際機関で扱うか、どの問題は扱わせないかとか。これはサミットも含めて。

北岡 アマチュアっぽい質問なんですけども、OECDは要するに「白人金持ちクラブ」ですよ。そこへ初めて日本が入ったことについての違和感というか、最初の障害とか、そんなことはあったんでしょうか。

宮崎 真実はあったかも知れないけど、どこの国も少なくともそういうのを顔に見せないようにしていましたよね。ただ、腹の中は分かりませんが。それは仕事の面でもそうだし、付き合いの面でもね。よく呼んだり呼ばれたりするんですけども。

それから、なんといっても日本がOECDに加入するくらいには、日本の経済がかなり強くなっていましたから、無視するといけないとか、敵に回しちゃ困るといようなこともあったかも知れませんが。

北岡 最初にガットの加盟が問題になった頃の戦争の記憶というのはだいぶ消えてて、本当に力がついてきてて、腹の中はともかく、そういう扱いだったんでしょうね。

宮崎 ある委員会でチャットとそういうのが出てきたことはありました。それは、ドイツに対する反感が飛び出ちゃって、そのとばっちりが日本に来たというようなことが。あれはたしかエキスパートのパネルでしたよ。だから、制限的商慣行、公取グループのエキスパートの会合だったかなんかのときだったと思う。ノルウェーかどこかのエキスパートが、ちょっとスリップ・オブ・タングみたいな恰好で。

北岡 たしかこの頃、六〇年代の末じゃなかったですか、天皇陛下

下の訪欧があつて、天皇陛下にとっては皇太子時代以来の訪欧で、そのときやっぱり行き先のいくつかのところで戦争の問題だとかです。ね。

宮崎 オランダとか。それはこのあと、私がベルリンにいるときです。

股野 七〇年代のはじめですね。

宮崎 ベルリンからボンに呼ばれて行って、お迎えするため手伝えというところで行ったわけですけど、何を手伝えていいか分からなくてウロウロしておったものだから。そのときはオランダとイギリスでちょっとね。オランダは伝統的にそういうことがあるんでね。インドネシアを取られちゃったから、恨みに（笑）。

北岡 もうひとつだけ素人的な質問で恐縮ですけど、アジアのほうから見ていると、六〇年代半ばというのはちょうどベトナム紛争の頃なんです。ね。こういうことは、経済の実務の世界にほとんど影響がなかった、関係なかった……？

宮崎 ベトナム戦争自体の影響は、経済面では出ているわけですね。アメリカの経済が、ベトナム戦費を賄うためにいろんな歪みが生じていますでしょう。それがいろんな恰好で議論になっていたわけですよ。アメリカに対する批判というかな、いろんな兆候がありましたね。シンプトムじゃなくてコーツを直すべきだなんて、フランスの閣僚は盛んに閣僚理事会で言っていたことはありますけど、戦争自体は議題の外ですからね。

北岡 あの頃、アメリカをサポートした国は、基本的にOECDの外の国なんです。ね。韓国とか台湾とか、オーストラリアとかタイとかね。ですから、ヨーロッパの主要国、元来アメリカと親しい国は、ベトナム戦争では冷たかったです。ね。日本はその狭間で苦勞したんだと思うんです。

宮崎 遠い存在ですからね、ベトナム自身が。だから、ヨーロッパ人にとっては、昔はもちろんフランスの植民地だったんだけど

も、フランスの記憶も少なくなっているでしょう。ただ、ベトナムにアメリカが関わっているためにいろんなことが、他のことができなくなっている、それから経済がぐちゃぐちゃになっているということ、そっちの面ではOECDで盛んに議論されています。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第6回 —

開催日：1999年8月27日

14：15～16：12

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■ 各国のOECD大使の印象

宮崎 経済局長は三年もやって、経済局長としては牛場（信彦）さんに次いで長いんです。その間にいろんなことがありましたので絞って、日中国交正常化（一九七二年）の最初のミッションで中国に行ったときの話と、石油ショックのあとの話、その二つを中心に少し時間をかけて申し上げたらどうかと思います。ですが、それ以外のところは非常に簡単に飛ばしていききたいと思います。

実にたくさんいろいろなことがあったわけです。三年あまり局長をやっていると、毎日いろいろなことが起こりますから。もっともみんな覚えていてるわけでもありませんし、また申し上げる価値のないことも多いわけです。しかし、非常にたくさんあったというよりは事実なんです。

OECDは影が濃くなったり薄くなったりしているんですけど、いまでもあるわけです。しかし、基本的にはOECDというのはOECDから発展したもので、欧州の色彩が非常に強いわけです。アメリカ・カナダがOECDに入ってOECDになったわけですが、数からいっても欧州勢が圧倒的に多いです。事務局も欧州人が多いですし、発想法というかもそのやり方が欧州的です。それで、ECが出来てだんだん拡大していくと、欧州勢のメンバーのうちの大半がEC——いまのEUの加盟国になってしまうわけですね。そうするとOECDの役割は何だというのが、やはり前から問題になっていたわけです。

ただ、ガットと違うのは、OECDではECの委員会の代表が出ておるんですけど、それがスポークスマンではないんです。EC委員会に關することはその人が話をするけれども、それ以外の問題はすべて各国の代表が話をするということで、ある意味では、その違いも分かるし面白いという面もあるんです。

このOECDの活動をどういうふうに持っていかということでは、いちばん大きいのは、欧州勢はだいたい自分たちのものだとしよう。うな感じを持っているわけです。それに対してアメリカがどういうふうにかこれを使うかということ、だいたいウエイトが違ってますけど、日本がどのくらいここに力を入れるかによって議論がかなり違ってくるわけです。

この前、環境委員会を作ったということを上げましたが、これが日本のイニシアティブで出来ているわけですし、もっとあとになって私は二回目にOECDの大使になって行ったときもいろいろイニシアティブを取ったことがあります。そのあとも、たとえばOECD諸国と、エイジアン・ダイナミック・エコノミーズという言葉があるんですよ。NICs（新興工業国）と言われていたことがある韓国・台湾・シンガポール・香港、こういう国々との対話をやるうというのを、日本のイニシアティブで通して実現したことがあるんです。そのように、アメリカがどういうイニシアティブを取るか、日本がどういうイニシアティブを取るかということ、それからウエイトはアメリカのほうにももちろん多いんですが、それによって変わってくるということがあるわけで、国際機関における日本の地位の向上に従ってそういうこともあると。逆に日本の政府としては、どういうようにこの国際機関を使うかという発想法で動くべきなんです。必ずしもそういうふうにはなっていないんです。いまはどうか知りませんが。

つまり、国際機関というのは所用のものであって、よく「ILOに提訴」とか「ガットに提訴」なんていうのが新聞に出たんですけど、「提訴」なんていう言葉は本当に当たらないと思うんですかね。

各国の代表で印象に残っているのは、アメリカの代表。最初に私が公使で行ったときの代表はグリーンゲワルドという人で、経済畑が長くて、たしか経済担当の次官補なんかもやった人なんです。

す。

ちなみに僕のまったく個人的な印象を申しますと、接触の範囲が違ふから人によってずいぶん違ふと思いますが、国務省も含めてアメリカの行政のいるんな人は、たとえばヨーロッパのお役人さんに比べて、実におっとりしたお人好しの人が多いんですよ。ところが、そればかりだと組織が締まらないわけです。所々に、要所要所にわれわれが「殺し屋」というあだ名をつけた、ものすごく出来るやつがいるわけです。その出来るやつの何割かはユダヤ人なんですよね。毛並みはよくないんだけど非常に実力があって、地位に関わらず、その政策の実権を握っておると言うような人がいるわけです。だから、たとえば国務省なら国務省の中で、誰が実力があるかというのを見分けるのが非常に大事なんです。局長よりも次長のほうが実力がある場合もあるし、課長のほうが実力がある場合もあるし、それをどこに持っていくかによってずいぶん違ってくる。

グリーンワールドというのは、前から殺し屋みたいな非常に有能な男で、OECDの大使になってからもいろいろなることをやっていたわけです。

北岡 その「殺し屋」というのは、日本人の間でつけたニックネームですか。それとも、ヨーロッパ人の間でも「キラール」とか、そういうふうにならなんでしょうか。

宮崎 いや、私が見つけたニックネームです(笑)。

北岡 どの国の人が見ても分かるんでしょうね。あの問題のあの国はこいつだ、と。

宮崎 分かる場合もあるでしょうしね。

北岡 こういう人たちはキャリアの人ですか、それとも……。

宮崎 キャリアもキャリアでない人も、両方いますね。

それから、フランスの代表大使は、ポール・ヴァレリーという有名な文学者の息子なんです。外務省の重鎮になるんですけど、

あんまり役人的じゃなくて非常に哲学的なことを発言する。しかも非常にきれいなフランス語で、僕はフランス語はそれほど堪能じゃないんだけど、「なるほど。フランス語ってこういうふうに喋るものか」と思うような、なかなかしっかりした男だったんです。

それからいろいろな人がいたんですが、スウェーデンの代表にフォン・プラーテンという人がいました、この人もなかなか出来る人なんです。この前、造船の話をしましたね。造船のときにフォン・プラーテンがスウェーデン側の代表で、日本は私が代表みたいになっちゃった。フォン・プラーテンのアシスタントとして、スウェーデンのストックホルムからやってきた若い男なんですけど、とても出来ると思ったディンケルシールという男がいたんです。その後、外務大臣になったんです。若いときからすごいなと思った。ものすごく頭の切れる男がね。たまにそういうのがいるわけですが、時々そういうのにぶつかるんです。

スイスもこの代表じゃなかったんだけど、ドウンケルという若い男がいます、DACなんかにも出ていた。これも非常に頭の切れるなと思ってみていたら、あのあとでガットの事務局長になったわけですよ。そういうような、大使に限らずいろいろな会議に来て、そういうやつとコンタクトが出来るというのは、面白いといえば面白いですよ。

他方、ドイツの大使はハルデンベルクという人だったんですが、ナポレオン戦争のときに活躍したドイツの將軍の末裔かな。ハルデンベルク公爵って二軒あって、どっちかなんですけどね。話は全然別なんですけど、日本の大使公邸はみんな、お皿の模様が決まっていますね。皇后様の桐の模様がついている。お皿から茶碗から何から全部、規格統一というか文様まで統一されているわけです。ときどき禿げたりなんかしちゃってみっともないんで、新しいのを買っていかなくちゃいかんとかいろいろ。ところが、

ハルデンベルク大使の公邸にご馳走になりいくと、フォン・ハルデンベルク家の模様がついたお皿がザーツと出てくる(笑)。それから、掛かっている絵も、先祖が戦争をしたときの絵がかかっておったりとか。さすがにヨーロッパの貴族というのはこういうものかなと(笑)。ドイツの元貴族は、外交官と軍人が多いんですよ。そういう余談をやっているとキリがないんですが。

豪州がOECDに入った時期なんですよ。豪州が入る前に、慎重にいろいろOECDに入る場合の利害得失や問題点を詰めていたり。殊に日本の意見を聞きたいというので、ずいぶん何回もいろんな人が入れかわり立ちかわり聞きにきました。私はざっくりばらんに話をすると同時に、豪州が入るといことは欧州色がいくらか薄まるという意味で日本としても歓迎すべきことだと思っただけに勧めてみたんですが、結局、入ることになったわけです。ただ、さっき言いましたように、OECDというのはEECからECになってEUになって名前がどんどん変わるんですけども、当時はECだったんですが、ECの内部で議論してあること、していることも、OECDの委員会において議論されるわけですよ。ところが、ガットや何かだと、貿易というのは完全にローマ条約によってECは委員会に、コミッションに権限があるわけです。その他の問題は、ローマ条約に書かれていることによって権限がこっちにあたり、だんだん移ったりするんですけども、だいたいにおいて各国が持っているわけでしょう。それを調整しようという企てがずいぶんいるところであるわけで、ほとんど毎週のようにECの各国はコミッションを入れて、ブリュッセルやいろんなところで幹事国の首都なり何かで打ち合わせをやるわけですよ。それはいろんな問題について、課長レベルから局長レベル、次官レベル、大臣のレベルまで毎週みたいになっているでしょう。その初期の段階からだんだん見ていると、そういう練習をしているものですから議論が非常にソフィステイクイトされて

いるというか、その前に練習して完全に議論してきますから、筋金入りになっていくんですよ。一度そういう方向が出ちゃったやつを崩そうと思うと大変なんです。アメリカはがんばってもなかなか崩れない。だから、ECに対して何か持っていくときは、その議論が煮詰まる前に持っていくかなくちゃいけないという面が出てきていたわけです。その場合には、OECDの委員会はわりと都合だったんですよ。まだ意志統一してないときに議論して、こちらの意見なりアメリカの意見なりをインプットされたものをまた議論するというプロセスがあり得たものだから、その意味で面白かったといえれば面白かったです。

私はOECDに二回勤務したし、ジュネーブにいろいろな彼らとの接触が深かったんですけど、さっきちょっと名前を挙げたように、いろんな各国の政府の代表の中で、本当にこれだと思いうようなすごい人間だと思ったのにはずいぶん何回もぶつかっている。見ているとそういうのはみんな、だいたい各国は、よく昔の日本みたいに官僚出身の大臣が出るでしょう。大臣になったりいろんな要職についているんですよ。そういう連中は若いときから議論の中で鍛練されたということのほかに、素質があるという気がしました。

他方、大半のやつはボンクラだと思ってください(笑)。そういうことを言うと叱られるんですけど。

北岡 日本は平均点がいんですよか(笑)。

宮崎 日本は棚に上げて、ですけどね。だから、そういうふうには光るやつがいて、本当にすごいなと思うのに何人もぶつかった。これは会議屋の特権ですよ。というのは、OECDなんかは本国から来るでしょう。委員会によって、だいたい局長さんクラスが。その国に在勤していると、その国の局長しかぶつからないんですよ。そういう目で見ていると面白いと思うんですけど、いまはどうなっているか。今度、OECDの大使は西村(六

善) 君に代わるんですよね。

股野 はい、そうです。

宮崎 OECDの大使は向き不向きがあるのよね。大いに遠慮する人と……。辛く感じたら本当に辛いですよ。というのは、大使というのは、ご存じの方もあるかと思うんですけども、私もドイツ大使やいろいろ大使をやったんですけど、各書記官がいて参事官がいて公使がいてというピラミッドの頂点にいます。何も起こらないときは、あんまりやることはないですよ。新聞を読んだりなんかして。ただ、起こると、大使自ら出なくちゃいけないことが多い。その点が、他の省の次官・局長と違うんですよ。盲判をついていけばいいというのが多いんですけど、何か事が起こると大使じゃないと大臣に会えないとか何かありますから、事が起こった場合には大使が自ら出て行って交渉することはたくさんあるから、あんまりのんびりは出来てないんですけど、何も無いときは、わりと勉強できたり、学者になれるんじゃないかというほど本を読めたりね。

ところが、OECDの大使は一週間に二回必ず会議をやるんです。その会議で議論するためには、各委員会でやっていた議論を吸収しなくちゃいけないでしょう。その委員会は、この前申し上げたようにたくさんあるわけですよ。たくさんあって、その各委員会にいろんな担当官なり東京から来た人が張りついてやっているとか、その結果を聞いて出ていかななくちゃいけない。なかには、なかなか難しい問題もある。そういうのが気苦労だと思う人は向かないんです。それから、そこに出て会議をエンジョイするつもりじゃないとね。

ということ、向かない人には非常に気苦労だと思えますよ。まず言葉がね。私も下手なだけで、ある程度……。私は、少なくとも人の言うことはほとんど分かるんですよ。たとえばガットで、ニュージーランド人が喋ったりインド人が喋ったりパキスタ

ン人が喋ったり、アメリカのテキサス人が喋ったり、それがみんな分かるんです。ところが、イギリス人なんかは、それが分からない人がたくさんいるわけですよ(笑)。だから、会議をやっている、喋るほうは自己流で喋るから、あんまりきれいな英語では喋らないですけど、聞くのは全然差し支えないので。聞くのが大変な人は向かないですね。もうくたびれちゃってね。外務省の後輩たちは、みんな聞くのも喋るのも僕よりうまいだろうと思えます。あなたの英語は聞いたことがないけども、そうとう上だと思いますけど。

股野 いまのお話で、私がストックホルム時代に外交団の会合がよくあるんですが、インド、パキスタン、スリランカの大使というの、なかなかみんな弁が立つんですね、英語で。で、英語でやるんですが、そうするとオーストラリアの大使——女性だったんですが、私のところにいつも来てね。私は標準的な英語を話すので、「あれが英語だろうか」と言うんですね。「股野さん、分かりますか。あの人たちが言っていること」って。宮崎大使がおっしゃったけど、われわれはああいう英語にもかなり慣らされるものですから、分かるんですよ。それがどうも、このオーストラリアの大使は相当苦労していたようです。「あなたは英語が母国語じゃないか」とよっぽど言いたかったです。だから、母国語の人にとっては、ああいうふうに英語を話されるとかえって辛いらしいですよ。このオーストラリア人は、オーストラリア訛りの英語でなくて非常に綺麗な英語を話す大使だったんですね。だから、かえってこの人たちには、僕らにない苦労があるんだなと。われわれのほうは、ああいう英語でやられても英語だと思って聞いてますからね。宮崎大使がおっしゃるのはよく分かります。本当のオーストラリア訛りはひどいですけど(笑)。

■東京ラウンドの交渉内容

宮崎 オーストラリアも「アイテムアイ・オブ・ザ・パイパー・ファワ・デレガイション・サブミテット・トゥダイ」と言うのね(笑)。そうじゃないんですね。そうじゃないんだけど、誇張して言えばそういったような。「アイ」というのは、一所懸命見ると「A」なんですよね。そういう人もいる。

それから東京ラウンド(一九七三〜七九年)のことですが、その間にガットの事務総長が代わったわけですよ。ウインダム・ホワイトという、この前申しましたように大変な能力のある人で、古狸だったし政治性もあるんですが、そのあとに事務総長をどうするかというのでいろんな経緯があったんですが、スイス人のロングという人がなったわけですよ。これは、いろんなことでそういうことになった。スイス人のもう一人のジョレスと言う人ですが、私もよく知っているんですが、スイスに持っていったらその人になるだろうという期待がかなりあったのに、ロングさんになっちゃった。

このロングさんはわりと……「ノンシャラン」という言葉はなんといいたらいいのかな。

股野 そのままでいいんじゃないでしょうか(笑)。

宮崎 ノンシャランな人で、あんまり政治的に動かない。ウインダム・ホワイトは、何かあるとワシントンに行って国務省や財務省の幹部と話をしたりしていったんだけど。ウインダム・ホワイトはイギリス人です。アングロサクソン。ロングはより欧州的かつ腰が重い。国際機関もさっき言いましたように、主要国がどう使うかによって違うんだけど、ガットもやや自転車操業みたいなところがあって、走っていないと、倒れはしないけどもあんまり……権威があるかというか、そのケネディ・ラウンドの次をスタートしようというのが前から問題になっていたわけです。私が

ちょうどベルリンにいた頃です。この間、スタートにはブランクがあるんですけどね。

何かやらないと、一方においてECが自分たちの中で固まってしまうということ。もうひとつは、アメリカの孤立感が深まるというようなこともあって何かやるうという機運があって、それだまたまアメリカの法律を通すという機運もあったものだからやろうということ、日本が閣僚会議をひっぱってきたわけです。東京でやって、東京ラウンドという名前がつくようになったわけです。

東京ラウンドの準備は、さっきいきましたように、私は必ずしも詳しくない。実際に東京ラウンドの閣僚会議をやるときには、私は局長でいたんですが、大臣がたしか小坂善太郎(経済企画庁長官)さんだったんです。小坂さんが議長なんですけど、まったくの素人の大臣が議長を務めるのは事務方にとっては大変なんです。厚いマニュアルを作って、マニュアルだけじゃだめで議長の後ろに誰だか張りつけて、一回一回「今度はこう」というふうにしなくちゃいけないので大変だったんです。

思いがけないことが時々起こるもので、これまたエピソードです。ちょうど東京ラウンドの閣僚会議が行われているときに、チリのアジェンデという、ピノチェトを倒して共産政権を作った人が暗殺されたんです。暗殺されたのについて、中南米をはじめ後進国の代表が、閣僚会議で弔辞を読むかなんかしてくれ、とにかく哀悼の意を表してくれということを書いてきたわけです。直接言ってきたんじゃないくて、私のところにいる各国代表が言ってきて、他方アメリカは、そんなアジェンデが殺されたことで弔辞なんか、哀悼の意を読んでは困るということを書いてきましたね。それでどうしようかと思っただけで、結局ある午後のセッションの冒頭に、黙祷をしましょうということをお大臣に進言して、始まった途端に大臣が立ち上がって、アジェンデ大統領が亡くなっ

たので黙祷をしましよとかなんとかいう趣旨のことを言うことになって、そういうふうに取り進めたわけです。

遅く来た人がいたりして会議がまだザワザワしているわけですが、いきなり大臣が立ち上がって何か言った。ところが、ちょうどそのときだけ同時通訳がうまくいかなかったんです。通訳の施設がどういうわけか故障して。だから、誰も何か分からないけどとにかく大臣がみんな立ち上がったから立ち上がって、それで終わって座ったら通訳の施設がなおった(笑)。その人はあとで、アメリカ人がやったんじゃないかと。いや、実にうまい見事な働き方だと言って米国代表があとで褒めたんだけど、その故障はまったく偶然で(笑)。

北岡 小坂さんはもつと前に外務大臣はやられたことはあるわけですね。でも、やっぱりこういうとこに来るとまったくの素人で。

宮崎 それはもう全然。

北岡 これはやっぱりキャリアの外交官の方じゃなければ務まらない。

宮崎 少なくともいままではね。これからはそういう人も出てくるでしょうけどね。

東京ラウンドも長いこと関わっているわけです。ケネディ・ラウンドも実務は当時の課長であった私がほとんどやっていただけと申しましたけども、このときも実務の大半は、当時の国際機関一課長の宇川〔秀幸〕君に任せて。だけど、宇川君は忙しいのに「方向感覚をご指示ください」とかよくやってきて、いろいろなことを言っっては来ましたけれども、実際上の実務を彼に任せていたわけです。

残存輸入制限が外されたことについて、この間にすいぶん世の中が変わったということを申し上げたいんです。ガット一条国になった頃は、まだ日本の経済の回復過程がそれほどでもなかった。ところが、この時期になりますと大変な経済の伸長があって、

黒字基調が定着したのはいつからだったですか。ものすごく黒字基調が定着している時期なんです。

北岡 六〇年代の末ですね。

宮崎 それで、毎年毎年黒字が増えてくる。したがって、輸入制限などをするよりも、黒字問題についての対処をどうするかということのほうに政治的ウエイトがかかってくる。世論もそうだし、国内の経済観もそういうマインドになっていったんです。マインドの切り替えということがあったわけなんです。

そのマインドの切り替えというのは言ってしまうえば簡単なんです。実際に私が日本の経済界、業界のインターナショナル・マインド・マインド・マインドを見ていると、いちばん先に国際的なマインドになったのは繊維業界なんです。綿製品ね。これは綿製品取り決めとか、ガットの繊維協定とかいろんなものがある、それをものすごく勉強して。したがって、それについてどうすればいいかということを経済的に見るのが、いちばん先に身についた業界なんです。

ちなみに、自主規制という言葉があったのをご承知だと思うんですけど、自主規制と相手国が輸入制限をするのとどういふふうの違いかということ、業界の立場だと大違いなんです。まず輸入制限というのは関税や何かと違って、関税だとプライスメカニズムが働くんですよ。関税率を乗り越えるだけの競争力があれば、輸出は可能なんです。ところが、輸入制限というのは量的に何ドルとか何ヤード、何スクエアヤードとか決まっちゃいますから、とてもそれにプライスメカニズムが働かないわけです。量的制限は、向こうが制限するのと自主規制と両方あるんだけれども、自主規制をやるといふことは、日本側でどの会社はいくら、どの会社はいくら、どの商品はどのくらいということを決めることが出来るわけです。ということは、相手国には需要があるわけです。その枠内であればかなり高い値段で売れるわけ

す。

したがって、自主規制のほうが業界としては輸入制限よりももう意味があるというか……。ないほうがいい。ないと、完全な自由になってくる。競争ですけどね。自主規制というのは、ある意味では日本の業界の体質にマッチしている面もあるんですね。自主規制が始まったのが、いちばん最初は繊維なんですよ。自主規制をやるということは、誰かがたとえば商品ごとに、あるいは会社ごとに決めなくちゃいけないでしょう。ということとは、なんとか組合というのが非常に力を持つことになるわけです。たとえば繊維製品輸出組合とか。ということ、そういう組合を中心としたいろんな会合が度重なって行われることによって、インターナショナル・マインデッドネスが出来るということ。

ずっと飛ばしていいです。その次に鉄鋼ですね。鉄鋼もアメリカでいろんなことが起こって、それについてマインデッドネスが出てきた。その次は造船なんというのがありますが、自動車はもっと遅れたんです。電気機器なんというのがもっと遅れたわけです。しかし、それにも関わらず全体は黒字基調ということ、問題の重点が輸出振興でなくて、アメリカの国際収支が悪くなって課徴金に関するとかいろんなことが行われてきた時期もあるわけですから、むしろ黒字基調に対してどういうふうに対処したらいいかというほうに経済界というか、あるいはマスコミも変わってきた。インターナショナル・マインデッドネスがずっと浸透してきたということです。したがって、その時期になると日本の輸入制限をやめるのがわりと楽だったということですよ。

■ 国交正常化交渉の初の使節として中国へ

宮崎 日中国交正常化なんです、国交正常化交渉はアジア局が事務局でやっていて、大きなことをやる場合に主管課長というの

にウエイトがずいぶんあるんです。そのときの中国課長は橋本^{ゆきす}。アジア局長は吉田健三。条約局長が高島〔益郎〕。私は経済局長だったんですが、橋本が本当にたいへんなエネルギーで走り回っていたことを脇でよく見ていたわけです。

当時はフィーバーがあったわけですね、中国。私は「中国、中国と草木もなびく」という（笑）。経済的に見ると中国は、ポテンシャルイテイとしてはかなりのものがあるにしても、現実問題としては大したことがないというのが私の持論で、いまでもそうなんです。ところが、そういうことを言うと非常に風当たりが強い時期だったわけです。結局、田中角栄首相と大平〔正芳〕外相のときに国交正常化の交渉が行われたわけです。そのときに周恩来が高島、当時の条約局長のことを「法匪」だと言ったのが伝えられたでしょう。あれは大変な褒め言葉なんです。日本ではあれを貶したというふうに受けとられることが多い。貶した面もあるんだけど、「そういう人が中国に欲しい。ところがいい」という意味で法匪だと言ったということのようです。

それは私は直接には関係していませんが、とにかく国交正常化のあとに、まず大使館がまだ出来ないときに経済関係からスタートしましょうということ、日中双方が経済・貿易について制度を持っていますよね。それから各国との協定とか、そういうものをお互いに説明して理解して貿易を伸ばしていきたいまじょうということ、政府派遣の第一回のミッションが中国に行くことになったわけです。その団長が、当時、外務審議官だった東郷〔文彦〕さんで、副団長が経済局長の私だったわけです。そこにたとえば通産省から、あとで次官になった小松勇五郎。大蔵省から松川君。当時、関税局長だったかな。農林省、運輸省その他たくさんいろんな人が来て、北京に乗り込んで行ったわけです。当時は大使館がなくて、LT事務所というのが、廖承志・高崎取り決めに基づく事務所があったんですが、そこに、あとで

インドネシア大使になった藤田（公郎）君が一人だけ外務省から行って駐在していたわけで、大使館はなかったんです。そこで交渉のために北京に乗り込んだんですが、東郷さんという方はあとで次官や駐米大使になった方なんですが、経済のことに興味がないとかあんまり経験もないものだから、「経済の問題は君に一切全部任せるから」と言って会議に全然出てこないわけです。大臣に会うときだけ出てきたんだけど、向こうとの毎日の交渉はまるっきり任せる。だから、小松君や松川君を連れて、私はスポークスマンでやっていたんですが、そのときの印象が強烈だったものだから、いくつか申します。

そのときはだいたい文化革命の末期なんですね。こっちには私が入って、いろんな人が日本側に並んで、そちら側（向かい側）に中国側の、その議題によっていろんな省の局長が私のトイメンに座って並ぶんですよ。ところが、その後ろ——バックベンチャーに二〇人ぐらいいるんですよ、紅衛兵みたいのが。それで、私のカウンターパートの代表、各省の局長は、まるっきり権限がないとか、何をどうしていいか分からんというような感じだったわけです。

たとえば具体的に言いますと、日本が第三国と結んでいる取り決めなどを説明のために二つ出すでしょう。そうすると中国が、たとえばソ連と、あるいはどこかと結んでいる協定とか、薄っぺらいやつを二つ出す。ただそれだけなんです。こっちがいろいろ説明して、「この点について中国側が関心がおありであれば、専門家もたくさんおることですから、さらに詳しく説明しますが、いかがですか」と言うと、向う側の代表が、「日本側のご都合がいい」と。いや、日本側はどちらでもいいんで、この問題にあなたのほうに関心があるのであればさらに話をするし、なければ次に移りたいと思うんですが、いかがですか。「ご都合のいいように」。要するに、関心があるともないとも言えないん

ですね。あるといたらどうなるか、ないといたらどうなるか。紅衛兵に睨まれるとかね。だからまるっきり、なんというか……ああいう交渉はまったく初めてだったんですかね。

北岡 向こうが問題の性格をよく理解できなかったとか、そういうことはないですか。

宮崎 そういうことはないと思います。簡単な話です。理解できなかった問題もあると思います。だけでも、いま言った点は非常に簡単なことなんです。理解できなかったと思われのは、金融とか通貨に関してね。通訳もあんまりうまいとは思わなかった。たとえば、IMFにSDRというのがあってしょう。

股野 スペシャル・ドローイング・ライツ。

宮崎 「SDR」は、日本語では「特別引き出し権」というんですよ。それを中国語に直すと、タンスの引き出しかなんかになるんじゃないかって思ってね（笑）。顔を見ていると、わかったような顔をしてないんですよ。だから、こっちの通訳がさかんに一所懸命やっている。たとえばIMFの用語とかそういうものの用語になると、向こうは文化革命でブランクでしょう。だから、これが全然わからないのも無理ないと思うんですけど、さっき言ったのはもっと簡単なことなんです。

私は中国語が全然できないんですよ、まるっきり。で、全部通訳に頼るんですけど、それでも通訳のうまいのとまずいのと分かる気がするんですよ。英独仏は「おまえ、通訳せい」と言われると非常にだめなんだけれども、局長あるいはそれ以上、大使になると、閣僚との会議で若い書記官なり課長補佐ぐらいの人が通訳するのを脇で聞いているでしょう。そうすると、てめえの手下なことは棚に上げて、通訳が入ると本当にイライラ、ハラハラするんですよ。

英語のほうはやっばり層が厚いのね。宇川（秀幸）君が通訳してくれるときは安心して居眠りができる。私の年代以上では、山

中駿一という人、それから赤谷というこの二人は抜群にうまかったな。それ以外は、われわれの前後はうまい人がいないんですよ。あとになるとうまい人はたくさん出てくるんだけど、その中で宇川君が非常にうまくて。

あるとき、田中角栄首相がカナダに行ったときに、僕はヨーロッパから途中で呼び寄せられてカナダに飛んだのですが眠くてしようがなくて、田中角栄がカナダ側と話をして、そのあとに外人記者とのインタビューがあったんですね。眠くて後ろに控えていて、田中角栄が日本語で喋っているのに、何を言っているんだかさっぱり分からないんですね。宇川君が通訳したほうがよく分かるんです(笑)。本当に、実にうまく分かる(笑)。

北岡 先ほどの中国の通訳は、中国の人ですか。

宮崎 両方です。こっちが言うのは日本人の通訳。

北岡 どっちもあんまりうまくなかったですか。

宮崎 うん、どっちもあんまりうまくなかったです。初期ですからね。いまは中国語はうまい通訳がたくさんいます。

股野 東郷ミッシェンがおいになったのは何年でございますか。

宮崎 直後ですよ。国交正常化の。

股野 じゃあ、七二年の秋ですか。

宮崎 うん、寒いときだった。冬かな。だって大使館も出来てないんだから。とにかく万里の長城に行ったとき寒くてしようがなかったんですよ。

しかし、それでも英語のほうはいいんだけど、フランス語はたとえば不思議だけど、加藤吉弥君。ベルギー大使かどこかやっていて。彼がフランス語の通訳をやってくれるときは安心してられるんだけど、フランス語の通訳になると、だいぶ人数が限られてくる。ドイツ語になるともっと少ないんですよ。だからハラハラのし通しだったんだけど。ところが、こっちが何か口を差し挟むと、通訳がガタツとなっちゃってどうしようもないから、どんな

下手でもハラハラしても、絶対口をきかない(笑)。

サイマルティニアスの通訳を専門にしている人があるでしょう。日本でも有名な人。あの人たちの通訳は、とっても間違いないですよ。というのには、通訳というのは言葉がうまいということよりも、その問題についてよく詳しい人がやったほうがマッチベターなんですよね。ところが、サイマルティニアスの通訳はその内容をあまり知らないでしょう。言葉はうまいんだろうけど。したがって、誤解に基づく誤訳というのがあるんですよ。ところが、日本の政治家ってそういうことが全然分らないでしょう。これは困っちゃうんだと思う。自分が言ったことが全部、通訳で向こうに意志が通じていると思ってるんだから。また、政治家は通訳しにくいのがいるんですよ。河野一郎なんていうのは非常に通訳しにくかったですよ。

北岡 そんな古い時代も、大使が直接……？

宮崎 僕がやったわけじゃないですけどね。僕は緒方竹虎の通訳をやらされてね。副総理で北海道開発庁長官なんかをやっていたのね。それで突然として通訳をやらされて、世銀借款のことで。そうしたらアメリカ人だか世銀のやつが来てやっているうちに、「カンセン」と言うんですよ。カンセンっていう英語はあるかどうか、全然僕は分からないんです。それがキーワードでね。それが分からないためにガタガタになって、本当に参っちゃったわけですよ。そしたら、「カンセン」というのは根室釧路原野で、根釧原野の開拓のね。アメリカ流に言うから「カンセン」になるわけですよ。それが分からなくてね(笑)。それで通訳でもすっかり落第。落第というか、あんな汗をかいたことはないんですよ。自分が出来ないくせに人の通訳に文句を言いたくなるというのは悪い癖なんです、中国語の通訳なんていうのは、まさにまったくできないわけです。それでも分かっているという感じがするんですよ。

北岡 それは分かりますよ、分かっているかどうかは。いまでもやっぱり、それは質は上がったと思えますけれども、中国とのときはだいたい国際会議でも事前に要旨を必ずくれと言われますね。そうでないと不安だと。こっちも不安ですから(笑)。アドリブなんかはやってくれるな、と言われますし、難しいんじゃないでしょうか。

宮崎 もっとも嬉しかったのは、ホテルの部屋の番号をね。キーをどこかに預けたのね。キーを貰いにマージャンを思い出して「バーサンロー」って言ったら、ちゃんと八三六番を(笑)。これは嬉しかった。

それから、街を歩いていて「銀行」って書いてあるんですよ。これこれ、と思っ、お金を替えるとかね。まったく言葉ができないところで、そういうのは嬉しいですよ。

向こうの当時の外務大臣の姫鵬飛が代表団で会うことになって、人民大会堂へみんな行っただけです。そのときに問題になってしたのは、先方から「日本は台湾との間に週何便飛行機を飛ばしますか」と言うんだよ。運輸省の人は即座に答えられないのね。だから、向こうが知って「何十便」とか言っていて、これはけっこう多いわけね。中国と国交が回復して飛行機が飛ぶようになったときに、台湾の飛行機と中国の飛行機が翼を並べて同じ飛行場に着くのは嫌だと言います。そのとき東郷団長が、立派だったのは、「それじゃあ船はどうなんですか。世界各国で船がたくさんいるんな港に行って、中国の船と台湾の船が並ぶことがあるでしょう」と言った。それについては向こうは、なるほど思ったかどうか知らないけども何も答えなくて、とにかく飛行機はダメなんだということをがんばっちゃってね。中国の飛行機は成田に、台湾の飛行機は羽田ということになったのは、その結果なんですよ。

北岡 でも、航空協定というのはちょっと時間がかかりましたね。

七二年から七四年ぐらいですよ。

宮崎 そのときにいろんな話し合いの芽が出来ているわけです。話が双方の説明会みたいなものでね。い言ったように、その説明会の相手方が暖簾に腕押しというか、ピンとこないような人ばかりで。

紅衛兵は何をしているかという、たとえば日本側から資料を出すでしょう。関税六法とか為替六法とか、通産省や大蔵省で作っている何とか六法というのがあるんですよ。それを資料として渡すでしょう。そうすると、向こうの局長さんがサッと後ろに回す。そうすると、それを紅衛兵が見て「中華民国」と書いてあるものを見つけて、局長に渡して抗議するんですよ。専らその係でもって大勢いるんですよ。中華民国って書いてあるというのは国交回復正常化直後でしょう。だから、法令なんかはまだ直っていないのがたくさんあるんですよ。殊に印刷なんかしてないわけでしょう。だから、古いままのやつがもちろんあるわけで、そういうことを言ってもいうことをきかないんだよね。それで、さかんに抗議されて、こっちはムツとしたから「これから直すんだ。国交正常何カ月で急には直らないんだ」って言った覚えがあるんですよ。それから、局長を監視しているんですよ。大変な交渉だったんですよ。

ただ、接遇はとってもよかったですよ。向こうが一所懸命やってくれたことは分かるんだけど。たとえば、交渉のない日に紫禁城の中にある故宫博物館に案内してくれたのはいいんだけど、その当時は故宮の展示物が一ブスごとに文化革命の宣伝があるんですよ。漢の時代のなんとかとかいうのが置いてあって、次は文化革命の宣伝があって、また次は古いやつがくる。ところが、案内人の若い女性は文化革命の宣伝のコマばかり。その前に止まって長々と説明するんで、もううんざりしたという(笑)。そういう時期だったわけですよ。

先方は一所懸命接遇してくれたようで、たとえば万里の長城に案内してくれるとか、いろんなところに案内してくれたんだけど、そのときは団長は紅旗という車で、副団長以下は忘れちゃったけど、紅旗ほど大きくない車で。私の場合は、私のお相手の——そのときによってちがうんだけど——局長と通訳と運転手と三人で、私のために車を走らせていくわけです。万里の長城までけっこう時間がかかるんですよ。寒いときだったんだけど、特別の靴を買って帽子を買って登ったら、説明の女の人が、大平さんはくたびれちゃってここまでしか来なかったって、田中さんはあそこまで行ったとかって（笑）。じゃあ、その田中さんの行ったところまで行かなくちゃいかならうって言ってくれて（笑）。

その間、長いこと時間がかかるので車の中でいろんなことを喋って、相手の局長さんに聞いたたりなんかするんだけど、通訳というのはどうもはっきりしないとその時もつくづく思ってた。万里の長城に行く途中で、龍の彫刻だけじゃなくいろいろな彫刻が並んでいるところがあるんですよ。中国人はなぜ龍というものをコピーしたかというような話をして。他方、虎は実在の動物ですよね。「龍虎相搏つ」という言葉が中国にあるようですが、片方は実在の動物で片方は想像上の動物、それが相搏つというのは非常に面白い発想だという話をしていたら、どういわけか龍虎料理というのがうまいという話になってきてね。それは何かというと、龍は蛇なんだそうです。虎は山猫で、それがうまいんだそうですよ。というふうになっちゃって、通訳を介して話をするのはもうダメだと思って（笑）。

それから、東郷さんという人は不思議なことに動物が好きなのね。当時パンダはまだ日本にいないで、有名だった時期なんです。万里の長城の帰りがなんかに東郷さんが「パンダを見たい」と言ったら、本当にその点は立派だと思ったんだけど、ずっと車列があるでしょう。それが、北京動物園なんかのパンダの檻の前

にたくさん人が群がっているのをみんな追っ払っちゃって、車をピタッと付けるんですね（笑）。だから、見ている人は本当に可哀相に追っ払われちゃって、本当に独占的にパンダを見たんだけど。そういうことがあったり、いろいろ一所懸命ご馳走してくれたりね。

中国料理というのは、ホストが丸いテーブルで長い箸で取って分けるでしょう。あれをやって、こっちがお返しに夕食会を翌日やることになって、大変だったの。あの長い箸で取り分けるの。練習しなくちゃとか言っていたら、そのときに向こうの誰だったか、閣僚だったかどうか分からないけど、開口一番「今晚は自力更生で行きましょう」と言ってくれて助かった（笑）。だから、接遇はともよかったんですよ。ご馳走がたくさん出た。ただ、そのときにいろんなことがあって、藤田君なんかにも聞いたんだけど、ホテルに長いこと泊まっていた……。ちなみに、ホテルに鍵がなくて、鍵はどこかに預けっぱなしだから、やたらにお茶を持ってくるんですよ。喉が乾くことはあるんだけど。それから、チップを取らないですよ。藤田君みたいに長いこと滞在していてもチップは取らないんですよ。どうするんだといったら、感謝状を渡すんだそうですよ。「服務員なんかか殿」って、「あなたは非常にこうやってくれて感謝します」って。それをたくさん集めると少し出世するらしいんですよ。だから、チップは貰っちゃいけないというので一切金を受け取らない。いまはずいぶん違ってきました。だけど、当時はそういう状況だったわけですよ。

そのあとに上海やら広州に行ったんです。上海の郊外の幼稚園に行くと、幼稚園の子供がお遊戯なんかをやっているのをやめて挨拶してくれるんですね。その挨拶が、北京で聞いた挨拶とまったく同じ。「一衣帯水」云々で「熱烈歓迎」というのを、幼稚園の子供が北京で聞いたのとまったく同じ言葉というのは、本

当に嫌になっちゃったですね(笑)。

そんなようなことがあって、とにかく第一回は行われて、そのあとで大使館ができて、どんどん、どんどんいろんな取り決めが次々に結ばれて行ったわけです。

■石油危機の際の外交交渉

宮崎 次に、石油危機で日本が一種のパニックに陥ったわけですけど(「第一次石油危機、一九七三年」、そのうちの一つの要因は、日本がアラブから見ると非友好国になるという説が流れて、そのために石油の輸出が全部ストップして、日本はものが作れなくなっ

て、ものがなくなるといふことで、トイレットペーパーがなくなったり大変なパニックになったわけなんです。

ちなみに、日本のパニックはまったく論理的じゃないパニックだという気がしたんです。その前、フランスで五月危機というのがドゥゴール時代にあって(「一九六八年」、ナンテールの大学生が蜂起したのをきっかけに大変な騒ぎになったことがあるんですね。私はちょうどパリに在勤していたのですが、そのときは労組が全部加担してすべて、たとえば電気、ガス、水道、それから銀行、お札から何からかから全部止まっちゃったわけです。ガソリンはもちろんない。そのときに店屋からものがなくなるんですが、ものがなくなる順序が極めて論理的だという気がしたんです。たとえば粉とかね。米なんかあんまり食わないんだけど米とか、蠟燭とか乾電池、食用油とか、そういうようなものが徐々になくなっていく。なくならないものは、いつまでたってもなくならないんですね。

ところが日本の場合、いちばん先にトイレットペーパーがなくなったりね(笑)。なんか、まるっきり論理がないようななくなり方。日本はパニックに慣れていないんですね。ところが、ヨー

ロッパ人というのはしょっちゅう内乱があったり革命があったり、それから戦争でいろいろ逃げたりすることを先祖代々からやっているから、そういうことに慣れてるんでしょうね。

ちなみにフランス人の金選好なんていうのは、そういう革命やら戦争が終わったときに金を持って逃げるといふ。そのために金はカーペットの下に隠しておくというのが習慣になっていたんだけど、日本は海に隔てられて逃げられないから、そういう発想法はないんでしょう。

しかし、あのと時のパニックは私はまったく予想外だったんですが、非友好国と、本当に真面目に言ったかどうかは別として、アラブは考えていたかどうかというのが非常に疑問だと思うんですよ。当時から私はそう思っていたんですけどね。それで他方、日本は石油はほとんどメージャーから買っているわけですね。メージャーズルでね。メージャーという石油会社。アラブは国内的に、メージャーの石油も抑える措置を取ったんですが、アメリカとは非常にすったもんだなっていたし、ヨーロッパの間で問題が起こっていたわけなんです。そのときに、アメリカとの関係を、メージャーを含めてどういふふうに持っていかということにウエイトを置く考え方と、アラブとの非友好国じゃなくて友好国にするというアラブとの関係をもっと改善するようにあらゆる手を討つべきだという意見と二つあって、二つの意見が対立したというところとオーバーなんだけど、両方あったわけです。その当時、大平外相と宮崎局長はメージャー派、田中総理と誰とかはアラブ派だと言われた。

当時から想像していたんだけど、あとで分かったことは、あの当時の通関統計を見ると石油の輸入は減っていないんですね。だから、あのパニックというのはまったく想像上のパニックなんですよ。ところが、あれだけパニックが起きちゃって、かつアラブに対して何かやらなくちゃいけないということが国内の世論とし

て非常に強いし、田中総理からは木内君が秘書官でわいのわいの言ってくる。そこで何かしなくちゃいかん、国内向けのジェスチャーとして何かしなくちゃいかん。そのためには、ジェスチャーとしてやっぱりアラブに誰か人を送らなくちゃいかんだろう。しかし、ジェスチャーとして送るんであって何かやってもらっちゃ困るんだ、いちばん害のない人を送ろうということで、いちばん害のないのは三木さんという副総理がいるから、あれがいいじゃないかと大平さんに言ったんですね。それでまた経済に強くない東郷さんをつけて出しましょうって言ったら、それはスツと通っちゃったんです。だから、三木さんは国内のパニックを抑えるダミーとして出したつもりだったんですよ。

やってもらいたくなかったことは、石油についての値段の交渉、それから援助のコミットね。それをやってもらっては困るわけですよ。だけど、あんまり行く前にタガを嵌めるのはいけないんで条件をつけずに出したんだけど、あのとときの石油というのは、石油が来ないという恐怖感から、どんな高くても石油輸出さえつかまえればいいという感覚があったわけです。三木さんにもあったと思うんだけど。そういうことであるんな人が動いたわけですよ。政治家なり、訳の分からない人がね。

ある政治家は、リビアの石油をコネがあって押さえた、外務省が一本リビアの大使館に電報を打って「頼む」と言ってくれたら出来るようになってるんだ、だからそれを出してくれということとを大平さんのところに言いに来たわけです。大平さんは僕を呼んで、二人で話をして。ところが、リビアというのはホットオイルと言われて、当時、ヨーロッパとの関係で係争中の油で、かつ、聞いてみたら値段がものすごく高いんですね。そんなものは、まずは係争中の石油でダメだということで断ったら、大平さんは用事でもっていなくなっちゃって、その政治家とお供のなんとかというのが五、六人いてがんばっていたけど、「おまえは国賊だ」

と言われたんですよ。だけど、それはがんばって出さなかったんです。ところが、もしもその石油をつかまえていたら大損しちゃっていたんです。みんなカッカしているから、値段なんかいくらでもいいというような感じがあるんだけどね。

たとえば三木さんが向こうに行っているんなことを言っていて、あの尻拭いが大変だったんですけどね。しかし、バイタルなことはコミットしてないのでね。だから、質問票にまず「三木特使を中東へ派遣」と出てくるのは、なるほど国内から見るとそこがいちばん重点があるんだというふうにお考えになったと思って、本当にびっくりしたというかね。本当にダミーのために。だって、三木さんの出番じゃないでしょう。通産大臣でもないし、副総理で環境庁長官だったんですよ。だから、いちばん害のない人を出しましょうというので大平さんと相談して(笑)。

北岡 三木さんが大した役割でないということはある程度知られていると思うんですけども、そのとき外務省側におられてどういうふうだったかなという感じでたぶん佐道さんは書かれたと思うんです。大使は非常に冷静に見ておられたようなんですけども、外務省全体ではどうだったんでしょうか。

宮崎 外務省全体では、中近ア局(中近東アフリカ局)のほうはやっぱアラブとの修復というのに熱心になったし、いちばん困ったのは、田中角栄さんが国内的配慮からやいのやいの言ってきた、それで何か手を打たないといかんというので三木さんを送ることにした。ただ、大平さんはやっぱり非常に意志が強かったんですよ。国連決議のどういうバージョンだったか忘れちゃったんですけど、アメリカに対してアラブとの関係で「こうしたいが」という協議をするのか、「こうします」と通報するのか、だいたい議論があったわけです。それで大平さんは、アメリカと協議をするというふうに決めたわけです。それで法眼「晋作」さんがいて中近ア局長がいて僕がいて、たしかに大平さんはアメリカ

と協議をするようにという趣旨だったと思うんですけど、それを法眼次官が安川〔壮〕大使に電話で連絡して、そのときに「通報する」というふうに変わっちゃったわけですよ。あとでその話がまた出てきて、「協議じゃなくて通報にしました」という話を法眼さんが大臣にした。いずれにしてもおそろくそれが原因だと思うんですが、大平さんはその直後に法眼さんをやめさせたんです。

北岡 この頃、キッシンジャーが日本に来ましたね。

宮崎 それはもつとあとだと思えます。

北岡 正月の頃だからもうちょっとあとかもしれせんが、キッシンジャーのメモワールの中に出てきますね。アメリカは西側の消費国の連帯というのが大事だったと言ったら、日本のほうで、じゃあアメリカが石油の供給を保証してくれるのか、というような議論をしたという話が載っていますが。

宮崎 それはこれのあとで、キッシンジャーが呼びかけて、先進国の外務大臣、経済大臣の会議をワシントンで開いたんです（一九七四年二月）。開く会議を呼びかけたわけですよ。それが第一次石油ショック後の世界経済を非常に大きくあれする、たいへん大きなイベントだったんですね。それには大平さんと森山欽司科技庁長官という人が、私は主管局長で全部いろんなことをやったわけですけど、キッシンジャーはその会議の招集のために走り回ったことは走り回った。

井上 七三年十一月十四日キッシンジャー来日とあります。

北岡 それはかなり早いほうですね。

さっきの通関統計で結局、日本の輸入が減ってないというのはおっしゃる通りなんですけど、その予測も省内でも意見はいろいろあったんですか。とにかく石油戦略は初めてのことですよ。宮崎 そのときは分からなかったですね。輸入が減っているか減っていないかは。

北岡 大使の読みでは、そんなに簡単に減るものじゃないと。

宮崎 というのは、アラブは長いこと石油禁輸を続けられないと思っただの。

北岡 それはそうですね、冷静に考えればそうですね。

宮崎 それから、必ず日本には売ってくると思っただんです。だから、何もそこであわてふためく必要はないと思っただけど、国内でパニックになっちゃっているし、それはもう本当に大変なことですからね。

北岡 非友好国という扱いだっけ、大した理由はないわけ。

宮崎 ぜんぜん大した理由はないんだし、本当に言ったかどうかははっきりしていませんよ。

井上 ただ、エピソード風によく、田中首相が「石油の備蓄量はどのくらいあるんだ」と聞いたなら「流通しているのを含めないといくらぐらいしかない」と言うのにショックを受けて、それじゃあ困ったなという。いつも引用される例なので……。

宮崎 そんな、一日なんてことはないですよ。どこかで間違えてる。

井上 純粋な備蓄量はそれぐらいしかないんだ、みたいなのでなっちゃったというのがよく出てくるんで。

宮崎 そんなことはないですよ。ただ、この石油危機を利用しようとする人がいたことは確かだね。千載一遇の好機だとかなんとかいって。それから、さっき言ったように、パニックのなり方が本当に非常識的なパニックだった。

北岡 このときは、マスコミの報道がやっぱりすごかったですよね。

宮崎 そう。だから、僕らは何と言ったって聞いて貰えない。大平さんは立派だと思えますよ。最後まで僕の言ったことから一歩も出なかったしね。

北岡 あのと、たしか中曾根さんはかなりアラブ寄りのことを言っていたんですよ（笑）。

宮崎 そうなんですよ。それから田中角栄ね。大平・宮崎ラインというのは孤立しかかっていたわけです。

北岡 じゃあ、外務省の中でも首脳でしっかりサポートしている方は宮崎大使ぐらいで。法眼さんもそうだったというのは、ちょっと意外ですね。法眼さんはアメリカとの関係でしっかりしているかと思っただんですが。

股野 法眼さんが交代するに至った経緯の背景には、これも歴史の検証に待つんでしょけども、ワシントンで安川〔壮〕発言というのがあったんですね。

宮崎 天皇の。

股野 ええ。

宮崎 いや、あれは安川さんが辞めればいいんであってね。

股野 いやいや、そこが政治のあれなんで。

北岡 何の発言だったんですかね。

井上 天皇の訪米の時期の問題です。

股野 記者会見で安川さんが「賭けてもいい」という発言をされた。マスコミが安川さんを叩いたんですね。そういう体制である外務省の責任を次官に取ってもらおうと。

宮崎 そうじゃないと思います。ずっとその当時は次官とちょっと会う会っていたし、次官が言っていたのね。協議じゃなくて通報だということをお自分が安川さんに電話で連絡しましたと言って、大臣がムツとしたような恰好で、その二、三日後です、やめるといわれたというのは。それがやっぱり原因だと思います。なぜやめるといったかというのを聞きになりましたかというのと、聞かなかったって。本人がね。けども、おそらく次官はその点だということふうに感じたに違いないということです。

安川発言に関しては、安川さん個人のデメリットとして相当叩かれていたので、僕は本当にそう思いますよ。

北岡 安川さんはそのあと何かあったんですか。

宮崎 結局、辞めたんですよ。

股野 その時期が違うんです。

北岡 もっと前にも事件がありましたね、安川さん。

股野 それは吉野さんがこの間お話になったことですね。

宮崎 あれで外務省の人事がずいぶん変わったんですね。その前は森治樹次官、法眼審議官、安川審議官のときでしょう。これは直接に話を聞いたんだけど、森さんから中山賀博さんに次官をバトンタッチすることになって、二人でいろんな人事配置なんかを相談していたらあの事件が起こっちゃって、森さんがやめることになって法眼さんが次官になったという経緯があるんですね。これもまた直接いるんな人から聞いて。だから、法眼さんの場合はアクシデントでなったし、東郷さんもまたアクシデントでなったという経緯があるんです。

北岡 結局、三木さんが向こうへ行行ってやられたのは、国連決議のなんとかなかで、もうちょっとアラブ寄りの姿勢を取るということと、あと経済援助するという約束をされたんですかね。

宮崎 そう。国連決議の何号だったか忘れちゃったけど、なんかの解釈というのがね。国連決議の問題は、東郷さんがやってたわけでしょう。

北岡 それも出来れば避けたかった。

宮崎 それについてのアメリカの了解を得てなかったわけですね。

北岡 そうですね。見切り発車でやったわけですね。

■ワシントンでの石油消費国会議

宮崎 見切り発車です。だから、それが非常に大変な問題なんです。それで次官を辞めさせたわけ。というのは、大平さんも当時、追い詰められていたわけです。次官更迭は、その後にも前にも法眼さんと何回も話をしているんです。だから、僕が言ってい

ることのほうが真相に近いと思いますよ。

キッシンジャーの話が出てきたんだけど、キッシンジャーは石油危機に対処するために先進国の何カ国か忘れたけど、外務大臣、経済大臣両方を集めたワシントン会議というのを開くと言ってきたわけ。ところが本人じゃなくて、当時の駐日米大使。とにかく駐日米大使というのはよく大臣のところに来るけど、局長のところには来ないですよ。それが僕のところに来たわけです。そういう会議をやるから日本は出てくれということ言ってきたわけです。そのときに非常によく覚えてるんだけど、当時、田中総理はタイに行っているわけです。外務審議官の鶴見〔清彦〕さんがそれにくっついていった。それから、副総理の三木さんはニューヨークだかどこだかに行っていたんです。中曾根さん、通産大臣もどこかに行っていたわけ。大平さんは風邪をひいて寝ていたわけです。それで総理の臨時代理が保利〔茂〕さんという人。大使が僕のところに来てその話を持ってきたので、僕の判断はこれを受けて出席すべきであるという判断で、大平さんは風邪のところを叩き起こしてそういう話があるというので通報して、タイの鶴見さんに連絡して田中総理に了解を取ってくれと言って。それから保利臨時代理のところに掛けて行って、祐天寺に自宅があるんです。珍しく豪勢な自宅じゃないんですね。寒いときだったんだけど、しばらく待たされて、その応接間も小さいので暖房施設が完備してなくて、変なストーブがある。寒くてしょうがなかったんだけど、とにかく保利さんに話をしてOKで。田中角栄は鶴見さんからOKが出て、大平さんには病床に電話で連絡してOKが出て、二、三日後に駐日米大使を呼び出してね。

股野 アーミン・マイヤーですか。髪の毛がウェーブがかかった大柄な方でしたらマイヤー。

宮崎 それで、日本は出席するという返事を大使にしたわけですよ。ところが、問題になりましたね。

ひとつは、三木さんと中曾根さんには連絡がつかなかったわけです。つかないときにそういう会合に出るということを決めたのはどんなものか、というね。あとで、それも政治的な関係であってか、大平さんや田中さんに文句を言うんじゃないかって、私のところに間接的にそういうご意向が伝わってきたわけですよ。他方アメリカのほうは、日本からの回答がいちばん早かったって。ヨーロッパに比べて。で、非常に喜んで言ってきたわけですよ。三木さん、中曾根さんはその時期も外遊していて、これはインテリショナルじゃないんだけど連絡がつかなかったために、その話は了解を得ないでやったわけです。

それでワシントン会議が開かれて、たとえばドイツは外相のゲンシャールと経済相のシュミットが出てきたし、フランスは外相のジョベールと誰かが出てきて、そういうふうな外相と経済相が出てきた。日本は、これは僕のサジェスチョンじゃないんだけど、どういうわけか中曾根通産大臣じゃなくて森山〔欽司〕科学技術庁長官を大平さんは連れていくことにしたわけですよ。それで大平・森山が出掛けていったわけです。

北岡 どうして森山さんなんですか。

宮崎 だから、それはどうしてかよく分からない。森山さんが僕の先輩で、外務省では三年上なんだけど、外務省にはほんのわずかしらないなくて、小学校のときの先輩なんです。それで前からよく知っているんだけど、非常に扱いにくい人で有名なんです。彼はなんでもかんでも僕のところを持ってきて困ったこともあるんだけど、大臣をやっているときに、普通は大臣が部下の局長に命じて、その局長から僕のところに来るのに、交渉を頼むなら頼むのでやるのが普通なのが、いきなり料亭で酒を飲んでるときに「森山大臣から電話です」って呼び出されたことが何回もあった。

若干、交通ルール無視のこともあったんです(笑)。彼はたいへんな核拡散防止条約反対派で、当時の国連局長にさんざん文句を

言うんだけどね。国連局が何かを持っていくと絶対きかなかったわけよ。何か経済局関係で持っていたときに、国連局の問題でさんざんわいのわいの言って、主管が違うんだといってもきかないんだ。

それは別として、とにかくそういうことで会議がありましたね。石油ショックのあとで、一部のNATO諸国の先進国が石油ショックのために経済的な苦境に立つ恐れがあった。それをお互いの援助で防ぐためのセイフティネットが必要なの。セイフティネットというのは、サーカスのブランコの下に張るやつね。セイフティネットを作るといふことが必要だというようなことで議論をして、それで結局、徹夜でコミュニケを作ったわけです。通産省から天谷君というのが随員で来ていたのね。それから、斎藤〔邦彦〕君が条約局の課長かなんかにくっついてきてくれたの。駐米大使をやっていたの。やっているのかね、いまでも。

股野 はい。
宮崎 徹夜でやってコミュニケを作って、それについてフランスだけが留保したわけですよ。つまり、アラブとの対決姿勢をとりたくないといういちおうの口実でね。これまたフランス的なあれで、本当にそうであるということではないという感じがしますけどね。

日本はどっちかといえば国内はそういうあれがあるんで、アラブとの対話、コンサルテーションというか対話をやりながらという点を非常に強く主張したんですよ。つまり、ハト派なんだな。ところがキッシンジャーは、こちらに力がなくて、ある程度のバーゲニングパワーがなくてただ対話とか協議とか言うことは、要するに「願います。頼みます」というだけなの。その結果は何も生じない。したがって、先進国側——石油輸入国側にある程度の連携ができてバーゲニングパワーをもつことが先決なんだというところで非常に強く頑張って、コミュニケの内容は忘れちゃった

けども、妥協ですけどね。どっちかと言えばキッシンジャーのラインが参み出ているようなコミュニケだったと思います。自分で作っておいて忘れちゃったのもあれなだけだ(笑)。

北岡 日本側のトップは大平さん、森山さんですが、お役所のほうからは外務省以外に通産もちゃんと局長が行ったんですか。

宮崎 随員としてね。だから、全部私が交渉、天谷は後ろに座っていたわけよ。

北岡 天谷さんはその頃は局長でもないですか。

宮崎 局長じゃなかったでしょう。

北岡 科技厅は別に役人は大した人は行ってないんでしょうね。

宮崎 出してないです。

北岡 森山さんて三木派ですよ。それで核不拡散に反対というのは、どういう？

宮崎 どういうわけか分かりませんがね。とにかくワシントンに森山さんを連れていったのは、三木さんに対する懐柔策かもしれないですけど、その点は分かりません。それはもうまったく僕の進言じゃなくて、大平さんが決めたことですからね。

北岡 当時、核不拡散反対の人は、どっちかという自主防衛路線の方ですか。

宮崎 森山さんは、どっちかといえば右なんです。三木派というのはやや左なんですよ。

北岡 ええ、そうですね。三木派の中でも方向は少し違う……。

宮崎 違います。ワシントン会議で決まったコミュニケ、原文を見ればもっといろいろなことを思い出すと思うんですが、それが第一次石油ショック以降の世界経済の方向を決めた非常に重要な会合なんです。それをあとで話す機会があると思うんだけど、産油国・消費国対話という、ジスカル・デスタン提案のシークという会合がありましてね。それは長々と続くんだけど、私は四つの委員会の共同議長に選ばれた。

それから、そのあとでIEA〔国際エネルギー機構〕というのが出来る〔一九七四年十一月〕。これはみんな一連の発想法は、石油危機みたいなときに先進国が団結しなければどうにもならないというキッシンジャーの命題のフォローアップみたいな恰好でそういうのが出てきて、それでやっているうちに産油国側のほうがぐたびれちゃって、石油危機はなくなつて。第二次石油ショックというのはまるっきり性格が違うものです。というのが大きな世界経済の流れなんですよ。ところが、おそらく外から伺っていると、全然そういうことに気がつかなかつたと思うんですね。

北岡 これは大使がご覧になっていて、全体をリードしていったのはキッシンジャーだという印象ですか。

宮崎 そのときはね。

北岡 それに比べると、ドイツとかはくつついていったほうですか。

宮崎 そう。ドイツはわりとアメリカにくつついていって、フランスだけがちょっと違っていているから。

北岡 イギリスはどうでしょうか。

宮崎 イギリスはくつついてきましたよ。日本がいちばんハト派的な、対話はコンサルテーションという、アラブとの関係を悪くしたくないという一点張りだったわけですよ。だけど、言うことは言ったんだけど、私はつっぱねても、とてもどうにもなるものじゃないと思って、結局最後はコミュニケでどういふふうに書いたか忘れちゃったけども、若干顔を立ててもらって妥協したわけです。徹夜のあとで大平さんに「こう妥協しましたから」と言つて。

質問票を見て思うのは、外務省というかPRが足りないという面もあるんだけど、大きな流れがどこで作られたかということとが、必ずしも外から見るとはつきりしないということはあると思うんですね。だけど、キッシンジャーの行ったワシントン会

議は、そういう意味で歴史的なものなんですね。ただ、そのコミュニケはもちろん出ているんだけど、その歴史的なウエイトというか意味合いは必ずしも理解されていなかったという。そういうことはよくあるんですね。

殊に日本の場合には、たとえば大西洋憲章〔一九四一年〕――アランティックチャーターというのがあるでしょう。出来たのがいつだったか、ずいぶん前なんだけど、雲を掴むように抽象的なことが書いてあるんです。それは僕もそうなんだけれども、日本では誰も重要視しなかったわけ。そういうフワツとしたものがだんだん詰まっていってNATO〔北大西洋条約機構、一九四九年設立〕が出来たわけです。だから、NATOが出来る前の礎石はそのときにあるわけですね。ということは当事者しか分からない面もあるんだけれども、殊に日本の場合にはそういうことがピンとこない。非常に具体的なものがないと。もちろん報道はされているんだけれども。

北岡 おっしゃる通りですね。日本は、抽象的な原則がもたらす意味合いの広がりということについて鈍感ですね。特にマスコミはおっしゃるとおりだと思います。このワシントンの会議も、キッシンジャーのメモワールには特筆大書でよく出てきますからね。

宮崎 ああ、そう？

北岡 大きなメモワールですけども、日本に行ったときは誰がどうこうだった。あのワシントンの会議もキッシンジャーにとつては、石油危機をどう食い止めたかが彼の大きな業績のひとつだと自分で思っていますから、メモワールの二巻目ですか、ハワイトハウス・イヤーズかなんかに詳しく載っていたような気がします。もう、うろ覚えなんですけど。

宮崎 キッシンジャーは、アメリカの財務長官かな、誰かが出てきたんですね。キッシンジャーは会議で、経済大臣は経済大臣

で議論して、その結果を外務大臣に報告して外務大臣がとりまとめるようなことを議長として言ったわけです。そうしたらドイツは、経済大臣がシュミットで、外務大臣がゲンシャーでしょう。

シュミットのほうが政治的には強いんですね。だから、外務大臣に報告するなんていうのはおかしいと随員がブツブツ言っていたんだけど。彼はまったく当時の財務長官かなんかを問題にしないで、自分が全部取り仕切ると。それに対していちばん抵抗したのはフランスで、アラブとの関係をよくするという名目で、その点はあとまで響くんですよ。これはさっき言った、フランス、ジスカール・デスタン、産油国・消費国会議も出てくるし、IEAに当初フランスが加盟しなかったというところでも出てくるし、いろんなことの伏線になってはいるんだけど、フランスに次いで日本がハト派なんです。ハト派を標榜せざるをえなかったわけですね。田中さんはともかくとして三木さんとか中曾根さんは、それじゃなくてもだいたいぶ機嫌が悪くなってきたわけだから、あんまりそれをがんばるべきじゃないと思っただけで、かなりがんばってはいたんですが、最後に夜中のコミニケで妥協したという記憶があります。

北岡 また経済局長時代のお話は追加でお伺いすることがあるかと思うんですが、質問や関連することはいまお伺いしておければいいと思います。

中国にいらっちゃったとき、具体的にはお話の中身は、あんまり大した中身が出てこなかったんですか。接遇がよかったとか通訳の話は出ましたけども、どういいう物資を欲しいとか。

宮崎 なかった。要するに「日本側の貿易、経済体制、制度はこうなっております」ということ。

北岡 それを向こうは知りたいと。

宮崎 それを説明し、向こう側は向こうのなんとか会社がどうのこうのという説明をするという情報交換です。もともとそういう

目的です。

北岡 それまでの日中の貿易は非常に特殊な形でやっていたんですね。

宮崎 LT協定があったでしょう。

北岡 これからやっぱり変わるわけですね。

宮崎 それが変わるわけですが、具体的に何をいくら買うなんていう話は全然なし。

北岡 まだそこまで行かないんですね。以前、人髪の話をしていたのを覚えていたものですか（笑）。中国も自力更生といいますが、閉鎖経済でやってきたわけですから、いきなり何が要るということはすぐにはなかったのかもしれないね。

宮崎 だって、まだ文革の最後の段階で、混乱状態ですからね。

それこそ何が欲しいなんていうことをうっかり言ったら、紅衛兵にやられちゃう時期だから（笑）。

北岡 向こうでは、毛沢東、周恩来にはお会いになったんですか。

宮崎 いや、会いません。姫鵬飛までです。

北岡 向こうからも日本に来たんですか。

宮崎 いや、そのときは来ませんよ。そのあと大使館が双方に出来て、どんどん交流が深まっていったわけです。いま言ったのは、大使館のできる前の。

北岡 大使館が出来たあとは経済活動は徐々に、大使の管轄のお

仕事は中国とは増えましたか。

宮崎 すぐには増えなかったですね。期待倒れの面がずいぶんあったわけです。それからやっぱり投資が行われるようにならなると、本格的な経済関係ができませんでしょう。投資は急には行えないですからね。

北岡 そうすると、七八年の日中条約よりあと、と。

宮崎 統計的に見ると分かると思うんですけど、ちょっといま覚えてないです。しかし、ムードはすごかったですよ。中国は中国

で、とにかくそれに対して私が常に冷たい態度を取っているという批判が非常に強かったです(笑)。

北岡 あの頃は、つまらない話なんですけど、大学で中国語を勉強する学生が急に増えたんですよ、たちまち。それくらい大きな影響がありましたね。

オイルショックは七三年に起こったわけなんですけど、その予兆というのはいんでしょけども、中東の紛争はいつでもありうるわけで、そういうときにもし起こったらどうなるんだろうか、石油の輸入に障害が出やしないかなんていうことは、事前の研究とかそういうのはあったんでしょうか。

宮崎 あんまりなかったでしょうね。いまの経企庁長官をやっている堺屋(太一)さんが、『油断』という本を書いたでしょう。あれがいつだったですかね。オイルショックの前ですよ。

北岡 この頃ですね。

宮崎 彼は元通産省の役人だったわけですね。とにかく自由化論争のときにも、たとえば農産物の自給率をいくらしなくちゃいかんという、安全保障上もいけないという議論があったんですよ。ところが、日本の農産物というのは油漬けなんです。ハウス栽培が石油で、電力の場合もあるでしょうけど、それから日本の経済全体が石油がなければどうにもならないという構造になっていましたから、本当に石油が来なくなった場合にどうするかというようなことを本格的に議論していくと、袋小路に入っちゃうんですよ。だから、あのときに一日しか備蓄がないということはないんですよ。どうするんだというのに対して、第一次石油ショックからあとだったけれども、天谷君がエネルギー庁長官になってくるとき、それこそその当時はIEAで備蓄を増やす国際的な義務が生じていたので、だんだん増えてきたんですよ。その備蓄の石油の枕に、千早城みたいに籠城するしかないという話があったんですけど(笑)。

つまり、ワシントン会議の結果生じた路線というのは、先進国間で協調して、一方ではIEAで備蓄を増やし、いざというときは融通するという取り決めなんです。他方では、お金がなくなって産油国の衛星国みたいに成り下がる国がいたときに、金融的にお互いに援助しましょうというセイフティネットのほうが、ワシントン会議のときのキッシンジャーの主たる狙いだったんだけれども、そっちのほうができなかったんですよ。前者のほうはいろいろ曲折があったんだけど出来て、備蓄をお互いに増強しましょう、いざというときに融通しあいましょうということによって、次の石油危機が生じても何年間かがんばる体制を作りましょうというのがIEAの目的だったわけですね。そういうことが片方ではだんだん出来つつある中で、産油国のほうはOPEC〔石油輸出機構〕が割れちゃってね。だから、石油危機なんて今は昔のことみたいに思うけど、今だってありうるんですよ。日本なんかすつかりだらけちゃって、また石油消費が増えていきますよ。当時は、備蓄をすることと石油の消費を抑えるということですね。石油の消費を抑えることは、他のエネルギーを使うということとエネルギーの消費自体を抑えることと両方あるわけけれども、そういうことを詰めていきましようということとIEAが出来て、これは別の機会に。IEAの理事会の議長を私は長いことやっていましたし、IEAの条約を作るのに当事者だったものだから。

北岡 それはまた次のときに是非。

この間、円があがるという、長年三六〇円でやってきたのが七一年から変わったわけですけど、それは日本の貿易には当然影響したわけなんですけど、大使のお仕事の上ではそういうものに影響を受けられたことはありませんよ。

宮崎 非常に影響がありましたよ。

北岡 それにどう対処されたかとか。

宮崎 私は、円が上がって当然だと思っていたんですよ。したがって、輸出業界のほうからコンプレインがあったりいろいろなことがあったんだけど、ほとんど聞かなかったんですよ。なぜ円が上がって当然かというのは話せばまた長くなるし、かつ……。

北岡 あれで黒字基調が定着してきましたからね。

宮崎 それから、競争力やいろいろな観点から当然、円は上がるべきだと思っていた。スミソニアンでいろいろな会合があって、円を上げるといふ話があって、大蔵省がもちろんやっていたわけですけどね。私は、そういう意味で結局フロートに対してどう対処するかを日本の国内でやればできるし、かつそれで問題はないと。非常に極端に言えば、大きな問題はないというふうに確信していましたから。

北岡 でも、少数派だったでしょうね。

宮崎 そうです(笑)。常に少数派ですけど、しかし結果から見れば全部正しいことになっているのは歴史的に証明されていると思いますよ。

北岡 おそらく大使は、日本の経済の実力がどんどん上がっていくのをいちばん現場で、前線で見えおられたので、実際、西独はマルクの切り上げをやっているわけですし、当然次は日本の番だろうというのを見ておられたと思うんですけど、これに対する日本の取り組みは、国全体で遅かったですね。

宮崎 それは自由化もそうですけどね。自由化も当然やらなくちゃいけないのを遅れて、遅らせるほうにももちろん交渉なんかはやっていただけでも、円も切り上げは当然だと。ただし、フロートについてはちょっと問題があるとは思いましたけれどもね。北岡 学者でも、もっと小刻みの切り上げという提唱もありましたし、経済局長の時期は二度目のときですよ。ちょうど三〇八年に移行する時期ですよ。だから、いずれも日本はもう後手後手で、大蔵省の中のごく一部ではやられていたんですよけど、

それが省内の体制にはなかなかならなかった。まして、外務・大蔵・通産とかで一緒に相談するようなことはなかったんですよ。ね。

宮崎 なかったですね。

ずいぶんいろんなことで少数派で、よく首がながっていたと思うぐらいにね(笑)。中国問題もそうだし、石油問題もそうだし、自由化もそうだし。いちばんの敵は内部にいたわけですよ。関局長だとかね。

それから吉野さんの話ですが、吉野さんと私は生き方が全然違うんですよ。吉野さんの後任は二回やっているんだけどね。ところが、フィロソフィーが違うものだから、個人的には親しいんだけども路線は違うわけですよ。

北岡 最初のほうに経済協力とか南北系なんていう言葉が出てきたときに、日本の活力の基礎は宮崎路線にあったという話が出てきて、われわれには非常に分かりやすい話で、また次回続けさせていただきます。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第7回 —

開催日：1999年9月24日

15：30～17：45

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■石油ショック後にIEAを設置

宮崎 質問事項をいただいています。話の都合で少し変えさせていただきます。時間があればこの事項に及びたいと思うんです。

といいますのは、まず第一に、一九七三年末に石油ショック〔第一次石油危機〕があったんですが、石油ショック後の日本ならびに世界の経済、政治も含めて最大の問題は、政治的に見ても経済的に見てもエネルギー危機にいかに対処するかということだったわけですね。したがって、そのアフターマスに関する仕事は政府としても非常なウエイトを置いておいた。私にとっても非常にウエイトがあったということなんです。ですから、この質問には必ずしもそういう点がなかったんですけども、当時のバックグラウンドとして経済状況を思い浮かべていただくと、つまり石油ショックのパンニックで、直後はそれこそイレットペーパーがなくなったり大騒ぎになったわけです。そのあとで今度は、しばらくしてからなんです。大変なデフレになるんですね。

いまでも覚えているんですけども、七四年の夏だったかな、官民合同会議——なんていったか名前ははっきり覚えてませんが、ど会議を毎年やっておったんですが、いまはどうか知りませんが、駐在している商社とか銀行とか、いろんなメーカーの支店長あるいは現地法人の社長と、大使館、それから、総領事、それから本省から経済局長が行くという会合が、アメリカとカナダの両方であつたわけです。

その当時、石油ショックのあとで、アメリカの人もそうだったけれども、特にカナダにいる商社の人、「自分は資源確保のため第一線で働いているんだ」と大変な意気込みだったわけです。当時の日本は石油ショックのあとで、資源ハングリーの面がありましたしね。それに対して私がたまたまその会合の席で、もともとズバズバものを言うほうなんで、「銅とか木材とか、あなた方

ね、そんな原材料をいま買ったら大損しますよ。値段は必ず下がるといふことを言ったわけですよ。「どうしてですか」と言うから「そんな買い手がいないでしょう。世界を見渡したって金がないうんだから」。そうしたらその商社の人びくくりして、本社に電報を打ったわけですよ。日本に帰ってきてから、どなたも知っているその某大商社の社長とある席で会ったら、「あなたもそういうことを言ったもんで、買い控えたんです。おかげで、何億円か何十億円か損をしないで済みました」ということを言ったことがあるんです。

当時は、石油ショックに対する日本の国内のリアクションが、必ずしも経済合理性に沿ったものじゃなかったということも申したんですけど、商社の人もそうなんです。それに対して、いま私が言うようなことを言う人は、ほとんど一人もいなかったわけですよ。だけど、必ずデフレになるだろう。現に、銅にしても木材にしてもその他原材料は、その後えらい値下がりにしているんです。そういうような経済の状況下において石油の問題は、しばらくは政治的にも経済的にもそうとうウエイトを占めた問題だったわけです。

そのためというか、これは半分以上国内向けのジェスチャー。国内向けのジェスチャーというのは非常に大事なんです。それがまた新聞にでか出てきてね。政治家なんかは非常にそういうことに左右されるといふこともあって、この前申し上げた三木さんを派遣したなんてまさにジェスチャー。

ちなみに、あのときに三木さんが持っていたのが、国連決議何号だったかな、二つあったんですよ。そのうちのどっちかを日本が認めていなかったのを認めるということをやアラブ側に言うてよいという決定したわけです。その決定の前に、大平〔正芳〕さんは「アメリカにその点を相談しろ」と言ったわけですよ。ところが法眼〔晋作〕次官は、相談するんじゃないと「通報しろ」と

いうふうにな川〔壯〕大使に電話で話をした。それで大平さんは非常に怒ったという。国連決議の二〇何かのほうです。それを申し落としたので。

そういうこともあって、アラブの閣僚を呼んだわけです。私は主管局長ですから呼べるわけです。呼べるというか、大臣にももちろん相談するんですけど。それで呼んだのが、結果としては、もともとホームコンサンピションが主な目的のつもりで呼んだので、それ自体は別にどうってことなかったんですけど、外務省のやり方としても、テクニカルには二つ大きなミスティクをやったわけです。これは自己批判みたいなものですけどね。

呼んだのは二人。一人は、OPEC〔石油輸出機構〕の他にアフリカの石油国の集まりでOAPPEC〔アラブ石油輸出機構〕というのがあるんですが、OPECの議長だったアルジェリアのアブデスサラームという人と、この人はわりと名前を知られているんですけど、サウジアラビアのヤマーニという、両方とも石油大臣です。この二人を呼んだわけです。アブデスサラームのほうがOPECの議長だし、社交順位では上なんです。ところが、日本の政治家にはあんまり合わせなかったんですけど、ジャーナリストはヤマーニ、ヤマーニで大変なんです。アブデスサラームが若干むくれたという。自分を少し軽視しているなと思ってる。これは日本のプレスの反応は当然そういうふうになるだろう、だから、二人を一緒に呼んだのはどうかというのがひとつの反省です。

もうひとつは、大平さんや何かに会わせただけで、私はよく知っているんですけど、ヤマーニは英語がとてつもないです。アブデスサラームはアルジェリア人で、フランス語がうまいんですよ。ところが英語ができない。で、ヤマーニはフランス語ができない。二人に共通の言葉はアラブ語だと思っていたんです。それでアラブの通訳をつけたわけです。ところが、ヤマーニはだいた

いた分かったようだけれど、アブデスサラームのほうは——これはあとで僕がアジアに行ったときに本当に痛感したんですけど——いわゆるベルベル人と言われている人で、アラブ語が出来ないんです。それで、これまたちょっと御機嫌を害したわけで、それを取り繕うのいろいろな苦労したんですが、それはどっちかといえどテクニカルな問題で、それこそ外部には出てないわけですよ。けれど、そういうこともあるんですよ。両方ともアラブ人で片方は英語、片方はフランス語だったから、通訳を二人つけるというのはとても難しいんですよ。時間的にも。そういうことがあったわけです。それで、いわゆるアラブの産油国との関係はどういうふうに持っていくかというのが、当時の大きな問題点であったわけです。

いろんなところで、一つはエネルギーの問題と、もう一つ、通貨の問題が出てきます。その二つがやっぱり非常に大きな問題であったわけです。石油会議コミュニケの九項にフランスが同意しなかったというところに、包括的行動計画が必要だ云々ってあります。その他に一六項で調整機関の設置とか何とかあります。ここに書いてあることは、これからフランスは別として、協力をするためにいろんなことをやりましょうということをやっているものなんです。だから、一言でいえば「エネルギーと通貨が大事だ。今後、一致団結してやりましょう。そのために機構も作りましょう」ということなんです。その機構を作りましょうというのが、いわゆるIEA交渉となったわけです。インターナショナル・エナジー・エイジェンシーとあとで名前づけられた——当時は名前がなかったわけですよ。——国際エネルギー機構。それを作るといのが問題になったわけです。それが、OECDのファシリテイを使ってパリでやったわけです。私はこのときの首席代表で、通産省からはエネ庁の次長かなんか、その他いろんな人が来ていたんですが、アメ

リカはエンダースという国務次官補がヘッドで、これはもうたいへん有名な男なんですけど、いまはあんまり有名じゃないかもしれないけどものすごくでかい男で、非常に強硬論でね。IEAは何を目標にするかということ、さっき言った通貨の面は除いて、通貨の面はセイフティネットと別に話が進むわけですが、石油とかエネルギーについて、一つはみんな先進国が協力して、石油を節約しましょう、それから備蓄をしましょうと。それから、いざ石油危機が起こったならばお互いに融通しましょうというふうなことを趣旨とするネゴシエーションであったわけです。その場合にフランスが入らないというのは、あとで本当の理由を説明しますけども、とにかくフランスは表面的にはOPECとの対決は好まない、対話を望むんだ、したがって先進国のIEA交渉には入らないんだという建前を貫いていたわけです。

日本はこのまえ申し上げたように、やっぱり対話派が国内に多いんですね。「アラブとの対話」ということに重点を置く。しかも当時は、国会が保革伯仲の時代で、いろんな法律や条約を通すのにえらい時間がかかったり、あるいは通らなかつたり継続審議になつたり、そういう時代であったわけです。そこで、IEAの交渉は国内でいわゆる産油国との対話派、協調派から見ると、具合が悪いんですよ。好ましくないわけです。つまり、どっちかといえば先進国で団結して産油国に対して対処しようという考え方ですから、したがって国会は通らないかもしれないし、少なくとも一年目は通らないということは確実だと私は読んだわけです。

それでどうしたかということ、これまた独断なんだけど二正面作戦を取りましてね。ひとつは、日本の国内で、備蓄を何日かしかくちゃいけないとか、融通も節約も義務なんです。だから、本来は条約なんだけれども、条約だと国会を通さなくちゃいけない。国会に持っていけば一年間はだめだという状況だったので、ひと

つは条約上の隠れ蓑として、フィクションとして、IEAというのはOEC Dの傘下の機構であるというふうにしたかったわけですね。

それからもうひとつは、いま言った備蓄・節約・融通、これらの義務を努力目標というか、行政権の範囲内ですべてをやるといふような趣旨に書き直すということに。この二つは、外に對する交渉なんですね。他方、内に対しては努力目標であるというし、OEC Dですでに批准されている条約の傘下だから国会に出さなくてもいいということ、法制局その他を納得するように部下に言って、国内でやらして。外での交渉は私が必死にやっています。

いま言った二つのことについては、二つとも大変な障害があったわけですね。そのうちのひとつは、努力目標にするということは非常にルーズになっちゃって、いざというときに発動しにくくなるんじゃないかという議論。これは本当にもっともなんです。もうひとつは、OEC Dの傘下の枠内にするということについての反対論。

その反対論は、非常に筋が通っているんです。というのはOEC Dというのは各国一票もっているわけです。したがって、クイックデシジョンがなかなか出来ない。それぞれの国の政府が、キャピタルが「うん」と言わない限り決定が出来ない。ところが、その後で来たIEAについては、いまいった備蓄にしても、殊に融通になると急いでやらなくちゃいけないわけでしょう。それがOEC Dの手続きでは出来ないというのは非常に強い意見があった、特にアメリカが強かったわけです。

そこでひとつは、そのへんが非常にデリケートなだけでIEAを半独立機関みたいにして、IEAの意志決定手続きは、ある程度マジョリティで出来る。かつ、各国によって票数が違うようになると。この票数の計算は、各国の石油の産出量とか消費量

とか輸入量だったか何か忘れちゃったけど、そういったような指標で票数を決めるわけですよ。そうしますと、票数からいうとアメリカが第一位になって、日本は第二位になるんですよ。それからドイツかな。フランスは下のほうに行っちゃうわけですよ。それでフランスは、途中までいろいろと魅力を感じて情報を取ったりなんかしてたんだけど、その点がフランスの国是に反するんですよ。つまり、アメリカや日本、ドイツ云々の下にしか位置づけられない票決方法は絶対にいかんという。フランスが入らなかったのは、いろんな表面的なアラブの対話とか協力とか言っているんだけど、実際やってやしないですよ。あれは本音じゃないんです。その点が、フランスが入らなかったいちばん大きな理由なんです。

他方、アメリカがOECDの枠内に対しても、ものすごい反対したのがその点なんです。そこで、IEAはOECDの事務局だとか人だとか予算だとかいろいろなものを利用するんだけど、別の意志決定手続きを持つ半独立機関であるというようなフィクションを作ったわけです。その交渉が非常に努力をした点でね。対外は、アメリカやECに対して説得して中央突破しなくちゃいけない。非常に難しかった。国内はそういうことでOECDの予算の枠内、アンブレラなんだから国会に出さなくてもいいということを確認させるのがね。ということで、そういうことになったわけなんです。

そのあと国会で、共産党のなんとかっていう弁護士出身の人がいるでしょう外務委員会で。その人にずいぶん「なぜこれは条約じゃないんだ」と質問を受けて。たとえばIEAの中に「石油が非常に不足すると予見されたときに、こうこうする」というのがあるんですよ。「予見されるって誰が予見するんだ」とかね。「役人が勝手に予見して決めるのか」とかいろいろ言ってます。

それは予見できるんですよ。というのは、日本の輸入している

のは、だいたい中近東が主でしょう。あそこでなんかストライキが起きたとか革命が起きて輸出が止まったら、石油が日本まで来るのに二〇日以上かかりますから、予見は非常に確実にできるんです。ということは分かり切っているんだけど、あえてそれを答えなかった。宮沢「喜一」〔外務〕大臣が、僕が説明したら「それはまったくその通りだ。なぜそれを答えないか」と言ってます。「それを答えると、ほかのことまで懇切丁寧に答えなくちゃいけなくなる。そうすると具合の悪い点がある。だから、こっちが勝ち目のあることも答えなくて、とにかくがんばっちゃうということにしたんです」といったら「そうか」と言ってます。それでだいたいやられたけれども、国会に出さなくて通して、他の国はそれぞれ国の手続きにしたがって国会を通したりして、IEAが発効するということになったわけです。後にアルジェリア赴任前大平大蔵大臣に挨拶に行ったとき、大平さんは「宮崎さんは慎重な人だ」と思っていました。ときには思い切ったことをするのですね。しかしそれが正解でした」と言ってます。IEAを国会に出さなかったことに理解を表してくれました。

発効することになったあとで、それはだいぶ時が経ったあとなんです。IEAの議長と事務局長をどうするかということについて、また例によってもめたわけですよ。そのときに私はドイツは非常に立派だと思ったのは、IEAの議長と事務局長は、まったく純然たるインポーターであるドイツとか日本とかベルギーとかイタリーが占めるべきであって、アメリカとかカナダとかイギリスとか国内の石油の生産が多い国ではなくて、もう輸入しかないという国、国内産がない国に限るべきである。アメリカ、イギリス、カナダ、ノルウェーこういう国は国内生産があるわけじゃない。それは利害が違ってくるんだ、ということでは。ちゃってね。日本もそうだと行って、初代の事務局長にはランツケというドイツ人。それから初代の議長にダビニオンとい

うベルギー人。ダビニオンはいまでも活躍してますけど、ランツケという人は死にました。それを据えるということでも合意して発足したんです。もうちょっとあとになって私自身がまたつかまつてその議長になったんですが、それはあとの話です。

そういったことがあってIEAの交渉がとにかくまとまって、それがOPECにもビンビン響くわけです。だから、そういうことで、エネルギー問題についての実質的な手が打たれたわけで、人を送るとか呼ぶということと違う基礎が出来たんです。

■三木内閣当時は極端な少数派に

宮崎 エネルギー問題自体はだいたいそのくらいにして、当時の国内ないしは国際的に最大の問題がエネルギーの問題と通貨の問題であったということ、そのバックグラウンドの上でいろんなことが行われていたということがいま申し上げたいことで、質問状からそれが全然伺えないもんですからね(笑)。せっかくわれわれが徹夜してIEAの交渉をやったり、首をかけて国会に出さないなんていうことを考えてやっていたことが外には全然見えないうんだね。これは外務のPRの仕方が下手だったのかもしれませんけどね。ちょっと私も反省していると同時に、非常にびっくりした点の一つなんです。

通貨は、要するにデフレになりました、デフレの問題はまた別にあるんですけれども、と同時に通貨が非常に乱高下するという状況になったわけです。この質問状にはアメリカとの関係が書いてあるんですが、これは日米だけの問題じゃなくて、もちろん世界的な問題ですよ。その二つがいかに重大だったということは、その二つのためにジスカル・デスタンがランブイエのサミットを提案したわけなんです。この二つの問題を中心として。それがまた国内では全然理解されていなかったし、いまもされていない

んじゃないかと思えます。

また三木(武夫)さんの悪口になるんだけど、当時、三木首相だったわけですね。宮沢外相、大平蔵相だった。三木さんという方は協同党という小党出で、「バルカン政治家」と言われた方なんです。ある意味ではバルカン政治家でのし上がってきただけの手練手管を持っているんです。「クリーン三木」なんてとんでもないんですよ(笑)。だけど、そういうイメージを作ることはいまいいですね。ただ、本当に少数派からのし上がってきた人の悲哀だと思ったのは、ブレインにいいのがないんですよ。私に言わせれば、大変な、とんでもないやつがいた。ひとりは平沢和重ね、外務省の先輩。あと、他にもたくさんいたんですが、国弘(正雄)という通訳をやっていた人。社会党なんかの何かになった人ね。そんな人が私的ブレインだったわけです。

それから、官僚機構を自分のシンクタンクとして使おうという発想法が全然ないんですよ。経済局長のときに毎月二回、前から——いまもやっていると思うんですが——主な商社と銀行と船会社とかの専務クラスの人を呼んで懇談会をやっていたんですよ。その会合がよかったのは、代理を認めないということにしたの。したがって、たとえば専務が忙しいから平取締役なんていうことは絶対ない。忙しくて来られなかったらその人の会社は来ないというようにして、わりと密度の高い議論が当時ではできたんです。また、いい人が来ていたわけですよ。その会合に出ていた人が、後にそれぞれ社長になっている人が多いんです。そこで話をしたことは絶対漏れないといういい習慣があったわけです。現に私自身もそれを何回も経験した。ところがある時、そこで昼飯のときに話したことが、夕方に三木さんのところに情報が行っているというんです。そういうことを言っている、注意したほうがいいよということがある人から注意を受けてね。こんなことは初めてなんです。だから、そういうのを張り巡らして情報網を持って

いたんでしょね。それはバルカン政治家のひとつのタクティクスか何か知らないけど。

それはともかくとして、何回も三木さんにブリーフしたわけですよ。主管局長ですから。ちなみに、三木さんにブリーフするときは絶対トイメンに座ること。隣に座るとね……。

股野 膝ですか。

宮崎 膝を握って、「そんなこと言ってもね、君……」って丸めこまれるという話があったんだけど、もちろん私はトイメンに座って一所懸命やっていたんだけどね。あんまり自分に気に入らないことを喋っていると、寝たふりをするといい癖がある人で。

世界経済ないし日本経済の状況下に、またジスカル・デスタンがなぜサミットを提案してアメリカをはじめみんな受けたかということのバックグラウンドには、さっき言った石油危機後のエネルギー問題と通貨問題。これはインフレなき成長という成長問題ももちろんあるんだけど、成長問題についてはマクロの経済政策というのはいろいろ議論が分かれるところで、通貨は何かしなくちゃいかんという切迫した状況があったわけ。その二つのために招請したということ、われわれはいろんな判断から。それを三木さんに言ったんだけど、全然分らないですよ。三木さんは、無理に何か宣言を作らなければならぬ法三章——中国の言葉にあるでしょう——みたいなものがないとかね。それで、援助の問題、南北問題を自分も一つぶつ気だと。それから、ソ連やなんかの東西問題もやりたいということ、言うんですよ。で、もう口を酸っぱくして「そういうことは主要議題になりません」と言っても、そういうことをプレスなんかに言うわけですよ。それを焚きつけている人もいたんだと思うけど、さっき言ったブレインの平沢とかなんとかの他に、大来佐武郎さんも若干そういう気配がある。それから吉野〔文六〕さんにもあったわけだ。日本が

たくさんの援助を出すと金を持って行って、そこでみんなをワックヤワックさせてやるという気があった。

ところが、私がさかんに言ったのは、とにかくサミットには出てくるのは当時は六カ国から五カ国の首脳であって、それぞれの国内問題として何がいちばん問題かというのは、さっき言った二つがあるんだと。それからもうひとつは、サミットにはソ連も後進国の代表も出てない。来ないんですよ。自分たちが抱えている大きな問題をみんな議論しようというのがサミットの場合であって、出てこない人の話をするとは考えられないということ、をさかんに言ったんだけど、分かってもええないらしいんですよ、そういう議論が。

だから、たとえば学者になぞらえて言ったら、国立大学の学者が集まって大学一般問題を議論する、それは当然のことでしょう。特に国立大学の問題を議論する。だけど、私立大学の問題をメイニンッシュューとして議論するというのは考えられない。ジェスチャーとして私立大学の問題も含めていろいろ議論しましたというのを発表するかもしれないけど、それをメインテーマにしたというはずはないでしょう。あるいは、東京の大学の学長の会合で、地方の大学のことをメインテーマにするはずがないんですよ。というように何をいろいろ言ったんだけど、三木さんにはどうしても分かってもらえなかった。

そこであんまり腹が立って、これまた新聞に「東西南北（トンナンシャーペー）は端パイだ」と言ったんですね、もちろんオフレコでね。僕はわりとプレスに信用があって、オフレコといったことは全然書かれない。バックグラウンドはさきいふん言ったんだけど書かないという信用があったんだけど、そのことが面白かったという、囲みで書かれちゃってね（笑）。

ちなみに南北問題は、毎回のサミットの議題になっているようになっていでしょう。それでコミュニケには必ず書いてあるん

です、なんとか宣言には。だけど、僕の知っている限りでは、最初のランブイエ、サンファン、ロンドン、ボン、東京、それからもう一巡ぐらいまでの間に南北問題が首脳の会談の席で議論されたことは一回もないですよ。ただ、コミュニケには書かないと具合が悪いんですよ。それを、われわれみたいなシエルパが書くわけです。そのときの状況でうまく書くわけです。それは首相に書かせるよりよっぽどいいものが書けるわけです(笑)。それを通すということですから、全然議論されてないわけです。また、されるはずがないんです。それが本格的に議論されるようになったのは極めて最近で。ひとつは、ソ連との関係が非常に政治的に変わってきた時期ね。それから、南北問題も政治的に非常に変わってきた時期から議論されているんですけど、それまでは議論されてない。コミュニケを見ると、みんな議論されたように書いてあるでしょう。それはコミュニケを作るために。もし書いてなかったら、誰かが文句をいいますよね。新聞が叩くでしょう。コミュニケというのは、何が書いてあるかということ、何が書いてないか、それから書いてあることの中で何が目玉で、何が単に書いてあるかということが問題です。必ずどのコミュニケにもそういうことがあると思うんです。それは本当はコミュニケの起草者に聞いてみなくちゃ分からないですよね。

北岡 三木さんとお話になるときは、三木さんの脇には誰かいるんですか。

宮崎 誰かいるんです。官房副長官とかね。ときには外務大臣。当時の官房副長官は海部さんだったんです。そういう人がいるわけですよ。こっち(向かい側)には私どもがいるわけですけどね。北岡 それはいわゆる大使以外にまだ補佐の方たちが。

宮崎 いたし、他の省の人がいたかどうか覚えてませんけどね。しかし、私は専ら説明役だったんです。

北岡 混成チームなんですか。他の省も……。

宮崎 いや、その当時はほとんどいなかったな。

北岡 ほとんど外務省。

宮崎 はい。当時はね。

北岡 それからブレーンの話で、国弘さんはあとの軌跡から見ると、社会党の……。僕らから見たら、もともとは国際政治なんていうけど、あの人は通訳じゃないって、言葉は悪いですけど思っただけで、平沢さんはどうだったんでしょうか。

宮崎 彼は戦争中は枢軸派で、外務省をクビになったわけでしょう。戦後はNHKの解説委員をやっていましたよね。解説を聞いていても何を言っているかさっぱり分からなくて(笑)、ああいうのが素人ウケするんでしょうね。

北岡 語り口はソフトでウケがいいと。

宮崎 まあ、ネクタイもいいのをしているし、テレビに出るときには分かった顔をしている(笑)。しかし、フィロソフィーがどうなのかはよく知りませんけどね。ただ、しようがないからサミットのブリーフに行ったわけですよ。で、彼は理解できないわけですよ。殊に通貨の問題なんかは理解できない。理解できないでどうするかというと、「そういうことを官僚に任せてはいいん」というものを書くわけです(笑)。

北岡 (笑)。たぶん三木さんは、先進国同士が協力して相談して問題を共通に解決していくということについては、そもそもほとんど関心がないといえますか理解のない人で。

宮崎 理解のない人だったですね。

北岡 外交というのは要するにポーズというか、それに尽きると思っている人なんじゃないですか(笑)。

宮崎 そういう気配がある。またそれを焚きつける人がいるからね。大来さんは、僕は個人的にいるんな面で非常に親しかったし、尊敬する面もあるんだけど、事これに関して、大来さんがかなり焚きつけた。三木さんが頼んだのか知らないけど、そういうこ

とに傾斜していったわけですよ。

北岡 しかし、これは単に外務省のプロなら分かっているというわけではなくて、外交のプロの中にも比較的に理解の薄い人もいたと。

宮崎 いたわけです。先輩にもいたわけですよ。

北岡 それにさっきの前半のほうに出たお話ですけども、オイルショックのあと次はデフレの局面が来るなんていうのもほとんど言っている人がなかったというお話だったんですけども、外務省の中でも大使は非常に少数意見で、まだ余波が続くようなことを思っていた人が多かったということなんですか。

宮崎 石油自体の問題の重要性は変わらないわけですよ。というのは、OPECはまだ健在ですから、また何か起こったら大変なことになるといいます。それとの関係をどうするかというのが非常に大きな問題。だけど、経済としては、つまり石油の価格がボンと上がったということは、産油国にそれだけリソースが流れるわけでしょう。産油国がそれを援助にしても貿易の面でも世界に還流することが限られている。従って、世界が非常に金詰りなわけです。したがって、そんな金を持っている国はいないわけだから大変なデフレになるというのが、私の非常に強い確信だったわけです。

北岡 それはですから、拝聴して、さすが専門家と思いましたが。私はその頃は学生で覚えていますがけれども、やっぱり世論はそんな議論は全然なくて、数年後に振り返ってみてそうだったということを言う人は大勢いましたけど(笑)。当時は、大使の周辺の普段ものを分かっているような人の間でも、かなり少数派だったということなんですよ。

宮崎 そうそう、極端な少数派です。私は常にそういう少数派の道を歩いてきたよクビにならなかったと思います。だけど、あんまり遊泳術がうまくないが、議論ではクビに出来なかったんで

しょうね。

北岡 それはクビになるって(笑)。だいたいしかし、物事を深刻に大袈裟に言っているほうが勢いあるように見えるんですよ、ああいうところは。

■ランブイエ・サミット会場での苦勞

宮崎 それでランブイエなんです(「ランブイエ・サミット、一九七五年」)、ランブイエは何かの機会に申し上げたこともあるかと思うんですけど、首脳だけランブイエ城に入りまして、外相と蔵相その他随員はパリのホテルだとかなんかに泊まっていたわけですよ。これは、日本にとってもアメリカにとっても非常に難しい問題が生じてくる。というのは、アメリカがさかんに言っていたことは、これはフランスの策略だと。つまり、首脳と外・蔵相を隔離するということが、フォードとキッシンジャーを隔離するということ。そうすると、フォードとジスカル・デスタンとテタテ(「一対一」)でやれば、ジスカル・デスタンが必ず勝つということ、そういうふうなアレンジメントをしたんじゃないかとアメリカが言ったんです。

日本にとって困ることは、三木さん一人でポコンと城の中に入っちゃってどうなるか分からんということが心配なんです、それ以外に、官僚と大臣が隔離されるということも非常に困ったわけです。とにかくランブイエ城にはみんな行くわけです。外・蔵相がホテルから車列を組んで。そのときにはまたフランスが警察国家で全部ハイウェイを止めちゃうんです。対面交通もしないで、何車列でいったんでしょ。車列を組んでいくわけですね。宮沢さんは三木さんに冗談に「われわれはこれを『登城する』と言っています」って言ってただけど、そういう感じだったわけですよ。

確かにそうしたのは、いま言ったアメリカの推測が当たってないことはないかもしれない。というのは、当時、ドイツはたしかもうシュミットになっていたと思いますが、シュミットとジスカール・デスタンはとも仲がいいんです。ところがさっきの話じゃないけど、ジスカールはとも英語がうまいですね。私は直接何回も聞いた。それからシュミットも英語がうまい。これは直接本人に何回も会っていますからね。ところが、シュミットはフランス語ができない、ジスカールはドイツ語ができないんですね。で、しょっちゅう電話をかけて英語でやるんですね。それをフランスにはフランス語を使わなくちゃいかんという国是みたいなものがあるでしょう。だから、フランスの新聞にはジスカールはシュミットと毎週か毎日か「英語でチュトワイエしている」ということを書いていたんですが、シュミットとも仲がいいし、首脳だけの話だとフォードは明らかに孤立するわけですよ。そういうことになる恐れがあったんですが、とにかく首脳の話では結局、何か外に出すコミュニケーションを作るのに、パラグラフ何から何までは外務大臣が自ら筆を取って書け、と。それから何項から何項までは、大蔵大臣が自ら筆を取って書けということになったわけです。それで私は宮沢さんにくっついていって、大蔵省は吉田太郎一財務官がくっついていたんです。そこで私は早速、外務大臣の果たすべき何項から何項までのコミュニケーション案を作って、いくつかの案を宮沢さんに渡して朝、説明した。夜、徹夜みたいにして作って、外相同士の話には私にくっついていったわけです。

ちなみに、このとき吉野さんがいたんですけど、別に私が決めたわけじゃないんだけど、吉野さんは海部さんと一緒にPR係になっちゃって、お城に籠もってこういうものを書いたりするのが私になっちゃったわけです。吉野さんが嫌がって逃げたんだと思うんだけどね(笑)。とにかくしょうがないから宮沢さんにそういうような案を作って渡して。ところが實際上、外相会

議が行われてみると、これは本当にわずかな人数ですよ。六人かな。もちろん共通語は英語です。英語でやると、明らかにキッシンジャーとそれに対してゲンシャアの二人の独壇場になっちゃうわけです。フランスはジョーベールだったかな、ちょっと忘れちゃったんだけど、影が薄いんです。普通はフランスってしゃしゃり出るんだけど、フランスも口を差し挟む余地がないくらい、最初からキッシンジャーが「こうやろう」ということを言って、ゲンシャアが「こうやろう」と言って、結局その二つをくっつけたことにしようということに非常に簡単になっちゃったわけです。だから、宮沢さんにせっかく出したのを切り出す余裕もなかったし、そう大して違ったものじゃなかったからいいでしょうということを申し上げて、それでそういうふうになっちゃったんだけど、それが——ちょっと忘れちゃったけども——ランブイエ宣言の何項から何項かまでです。

今度は蔵相が作るべき項目を議論しているときに、どういうわけだか大平蔵相が途中で出なくちゃいけないかったですね。日本に帰るのかな、とにかくサミットを中座したんです。どうしてそういうことになったのか知らないんだけど。それで吉田太郎一が出ていたんだけど、通貨の問題についてフランスとアメリカがとことん対立したわけです。フランスはそれを通すためにランブイエ会議を招集したような感があった。ところがアメリカもアメリカのフィロソフィーをどうしても貫かなきゃいけないというのがあって、これは後から聞いた話で、蔵相会議で議論しても、とてもまとまらないんだって。そこで通貨の問題は、フランスとアメリカの担当者——誰だったか忘れちゃったけど——次官クラスに交渉させようと。その交渉の結果を聞いた上で認めようということになり、他の項目の議論になったわけです。そうしたら、吉田太郎一が「全然わからん。おまえ、来てくれ」と言って、外相会議が早く終わったんで、私は今度蔵相会議のほうに行った。私が

蔵相代理なんですよ。そうすると、あとは政治家でしょう。ランブイエ宣言に貿易の項があるんですよ。貿易の項はそれほど議論されたわけではないが要するにこういうことです。エネルギー危機があって通貨もガタガタしている。その上に貿易について制限をすることになると大変なことになるぞ。したがって、それを防ぐためにOECDだとかガットだとかいろいろなところでやっているのをみんなよく守りましょうという趣旨だったと思うんです。その起草は、大臣方よりも私のほうが余計に知っているわけで、わあわあ言って私が書いたものがそのまま通って、何項だったか残っているんです。そういうような経緯があって、通貨のほうは結局、両方の妥協しかできなかったわけです。ランブイエ宣言に非常に微妙な表現で書いてあるわけです。

この質問にあるフロートについて、大蔵省との意見交換というのはあまりなかった。情報は知っておりましたけどね。それからこの問題は、大蔵省も結局、米仏の間に入ることを躊躇しちゃって、その結論がどうなるかを見守るという態度を取ったわけです。その結果、妥協がランブイエ宣言に出ていたんだけど、妥協の文書にもかかわらず、実質はアメリカの案が通ったということです。フランスはせっかくジスカールがそういう会議をしたにも関わらず、フランスの主張は貫徹できなかったという結果だと思います。したがってフロート制がずっと続くわけで、それから為替に関する問題は、いろいろあとまで議論になるんだけど、フランスの意向はあまり通っていない結果になったわけです。

ランブイエ・サミットについて、さっきいきましたように、途中で私がお城の中に入っちゃってそうやっていたのですが、城の情報も直接、三木さんや宮沢さんや大平さんが新聞に流すわけじゃなくて、海部さんと吉野さんがプレスに会うわけでしょう。その情報の「種」は私しかないわけですよ。私が何か言ったことを海部さんと吉野さんが、お城を離れてパリのホテルへ行って新

聞記者に話をして、どんな話をしたか知りませんが、それが新聞に出るわけです。したがって、時間がもう本当に数分しかないんですよ。その時に何を話したか忘れちゃったけども。

それで二日目だったかな、三木さんが僕に「やっぱり君ね、南北問題は議論ならんよ」と言ってる（笑）。それまで三木さん、自分がそれをやるんだとか流してらっしゃるでしょう。そのプレスに対する切り替えね、見通しが悪いんだというのを言えないの。どうするのかと心配だったんだけど、そのへんは海部さんと吉野さんがうまくやってくれるだろうと思って、どういうふうになんかに流れたか、あとはもうくたびれちゃって新聞をよく読まなかったんですが、あんまりそういう問題意識がジャーナリストにもなかったようなので、急に切り替わったということは新聞には出てなかったと思います。だけど、実態はそういうことであつたわけです。

ちなみに、お城に入る——入城するのが大変だね。各国に五枚かな、パスしかないんですね。日本は何十人というお役所の人が来ているでしょう。何もすることはないんだけど（笑）、ホテルにいてもしょうがない、お城の中に入りたいたいので、加藤吉弥君というフランス大使館の参事官がいて、彼が自ら「下足番」といって、その五枚を入れ代わり立ち代わり適当に渡して、入りたいという局長を控室まで少しづつ入れたりしてね。ところが、アメリカも五枚なんだけど、ひどいものでボディガードのパスを使って入ってきたりね。日本はそこまでやらなかったんですよ。

サミットの前にエネルギー問題で、産油国との関係をどうするか。いまのは先進国同士の協力の問題で、IEAができる系列でいちおう完成するわけです。産油国との関係をどうするかということ。「産油対話」という名前です。新聞に出ていたと思いますけど、「産油国と消費国の対話」というのが、われわれが呼んでいたことで、ところが産油国のほうは産油対話じゃなくて「産油国を含む途上国と先進国との対話」である

というふうにしよとして、ずいぶん途上国を巻き込む。つまり一言でいえば、「OPECの力を持って先進国から援助をたくさん引き出してやるから、途上国は俺についてこい」ということなんでしょうね。それをキッシンジャーは「ノン・ホーリー・アライアンス」——非神聖同盟といってね。

実際には、さっき言いましたように世界がデフレになったでしょう。殊にいろんな一次産品に依存している途上開発国、後進国がえらい経済的苦境になったわけです。先進国も経済的余裕がないから、援助を増やすことができないんですよ。それでOPECは金をたくさん持っているわけです。OPECも少しはばらまいたみたいだけど、俺が先進国から金を出さしてやるということでも途上国を引っ張っていきまして、その対話をどうするかということ。対話をやるかどうか、どこで誰がやるのかということも大変にもめたわけです。その裏の交渉がずいぶんありましてね。

■ 一次産品の問題をシエックで扱う

宮崎 全部すっ飛ばして結論だけ言うと、あとでシエック、CIECという名前が付けられる会合が開かれることになったわけです〔国際経済協力会議、一九七七年〕。これまたジスカール・デスタンがイニシアティブをとって、先進国と産油国と途上国の代表を集めて、わりとこぢんまりとした会合をやることになったわけです。先進国代表がアメリカとECと日本なんですよ。産油国代表が、サウジとイランとアルジェリアだったかな。ほかにもいたかもしれません。非産油の途上国代表が、ペルーとインドとどこか何カ国かで、全体で十数カ国の会合だった。その名前をつけることすら議論があって、この会合で何をやるかということについても議論があった。

先進国側としては、産油国が油の問題について安定供給をする

という保証を取りつけることが問題でしょう。安定供給というのは、量の他に価格ね。よく無視されるんだけど、価格というものがたいへん大事なことで、最近また二〇ドルぐらいになっているようですけどね。それが目的でエネルギーの会合が一つある。それから、途上国も金に困っているし援助も欲しいから、金融とか資金に関する会合が一つ。それからもうひとつは、産油国以外の途上国にとって大きな問題である石油以外の一次産品の問題がひとつ。それで、それぞれの双方から議長を出すことになったわけです。アメリカ、EC、日本と並べると、経済的実力から言ってもその順番なんですよ、どうしても。政治的なそういう発言。殊にエネルギーの問題はいちばん問題なので、それはアメリカが取ったわけです。アメリカとサウジだったかな。それから、通貨を含めた資本の問題はECとイランかな。一次産品の問題は日本とペルー。日本というよりも、個人だから私と、ペルーのデラプエンテという、当時は外務次官か何かをやっていた人が共同議長になることになった。

一次産品問題は、前にちょっと言ったと思うんですが、プレビッシュというUNCTADの事務総長になった男ね。アルゼンチンの大蔵大臣。プレビッシュ構想の一つの柱は、一次産品について交易条件を改善する。一次産品の価格を上げるということですね。ということによって途上国の経済を豊かにするというのを世界的に認めようというのが、プレビッシュの主張です。もうひとつ別に、特惠の問題もありますけどね。その一次産品についてつまり石油が上がったんで、他の一次産品をこの機会に上げようという動きがあった。

ちょっと時間的前後を忘れちゃったんだけど、メキシコの大統領のエチェベリアという人が「国家の権利義務憲章」という案を出しまして、国連か何かで議論しかかったのかな。日本の新聞に一部、騒がれたんだけど、国家の権利義務憲章というね。ちなみ

に当時の日本の新聞の中には、極端に言えば、アメリカや何かの言うことは悪であって、途上国の言うことは善である。それから、ソ連圏の言うことは善であって、自由主義国が言うのは悪であるというバイアスがかかっているような取り上げ方をするのがあったのですよね。だから、オイルショックのときにも「アラブの大義」なんていうのが盛んに新聞に出ていたでしょう。アラブの大義なんて全然ないわけなんでね（笑）。ということその当時、言ったら大変な袋叩きになるんでね。

しかし、いずれにしても、エチエベリアの国家の権利義務憲章を見ると、いろんな不都合な点があるんだけど、ひとつだけ言うと、たとえば外国の資本が途上国に投資するでしょう。直接投資を例に引いて、直接投資をして工場を作るとかなんとか。その会社も国有化するということは、受け入れ国の権利なんだと。それで、国有化する場合には補償金を出さなくちゃいかんと。そこまではないんです。それに関する最終的な決定は、途上国の裁判所だったか何かが行うと書いてあるんですよ。したがって、私に言わせれば、そんなことを見て投資する人がいるかと。またそれを言うとな怒られるんだけど（笑）。でも、それだけエチエベリアの国家の権利義務憲章は、先進国としてはこそって否定すべきであると。別に新聞にワアワア言わなくてもいいんですけど、殺さないうちに自然死するように持っていくのがいけばいいんだということを言っていたんです。紆余曲折あったんだけど、それは自然死することになって。そういった背景のもとにシエックがあって、当時の途上国の中にはプレビッシュの主張もあったし、エチエベリアのフィロソフィーも、時間の前後は別としましてだったので、大変だったわけです。一次産品の問題もね。

ちなみに当時、途上国の誰が言ったのかな。持てる国と持たざる国と、ノン「ホーリー・アライアンス」のほうで言ったの。それを聞いて僕が思い出したのは、「持てる国と持たざる国」とい

うのは戦前に日本が言ったんですよね。近衛内閣のもっと前、戦争する前かな。それで、持てる国はアメリカ・イギリス、持たざる国は日独伊なんですよね。当時、一応ナチスが強かったし、日本も武力があったわけです。その武力をもってした第二次大戦によっても、持たざる国が持てる国からふんだくるといことができなかったわけでしょう。それを口先だけで、どうやってやるつもりなのかと思いました。ところが、それが初めて出来るというイリュージョンを与えたのがOPECなんですよね。つまり、OPECが団結して値段を上げたわけでしょう。そうしたら、世界経済はこんなになっちゃったわけで、それと同じことを他の一次産品についても。つまり、日露戦争で日本が勝ったというのは世界的に非常にショックを与えたのと同様に、OPECの団結がこういうことになったということが、大変な経済的のみならず政治的な影響を与えたわけです。そういうことがあって、一次産品の議論も、議長としてずいぶん大変だったわけです。

先進国としてはエネルギーについてOPEC側が価格はこれにしますとか、安定供給はこれにしますということを何かコミットしない限り、一次産品にしても援助にしてもコミットできないというところ、委員会は別なんだけど、議長同士がパラレルでいこうとやっていたんです。全体の議長はドゥ・ギランゴウというフランスの外務大臣になった男です。

ところが、そのエネルギー委員会では、OPECが一切譲歩しないということ。だけど、とにかく会合を始めて産油国との対話をやっているんだということをみんなに示しておかなくちゃいかんという面があるので、エネルギー委員会で成果が出るまでは、とにかく議論は進めていたわけです。その議論を進めるためにずいぶんいろいろ苦労をしたわけで、一次産品がなぜ世界的に価格が低迷しているかというのは、いろいろあるわけです。たとえば工業原料の一次産品というのは、代替品が出来てきた。古

くはナイロンと生糸とか、合成ゴムとゴムとか、たくさんあるでしょう。その結果、価格はおさえられて来た。それから、一次産品は所得弾性が少ないですよ。所得が増えても、その分だけ一次産品の消費が増えるわけじゃない。あるいは、唯一後進国にとって実効がありうるのは、日本で米価審議会方式です。米価審議会では他の物価委に合わせて米価をあげるでしょう。世界的には米価審議会はないわけですよ。だから、世界的な米価審議会を作れというのが後進国側の主張なわけです。それはできないというのが先進国側の主張でね。ない知恵を絞っている議論長さんが、とにかく引き延ばさなくちゃいけないんで、引き延ばしをしていたわけです。

ちなみに、それがあるのでアルジェリアに行くことになっちゃったわけです。アルジェリア大使になっても、ずっとその議長を続けていたわけ。だから、一年ぐらいい、月のうち一〇日はパリにいたわけです。そんなようなことがあって、とにかくシエツクという交渉が難航していたということが質問には全然出てないんだけど、たいへんエネルギーを使ったことなんです。

通貨について私自身、全面的な変動相場制については個人的な疑問を持っていたんです。日本がついていけるかということがあって、非常に躊躇したわけです。また、大蔵省もどうなるかわからんというので、どっちかというとき言ったフランスに近い立場をとったんだけど、結論からしたらアメリカのほうが勝ったわけですよ。

日米経済摩擦は、かなりタイムコンシューミングだったわけです。ただ、これはひとつずつ話をするとうるるので、私の考えた一番のポイントだけを申し上げますと、当時の日米経済摩擦は、まだそれほど大したことじゃなかったわけです。というのは、まだアメリカ経済が力を持っていたわけです。アメリカ経済が力がなくなると、本当に困ってきてその結果、日本に対してやつあた

りで、ものすごくプレッシャーをかけてくるのは、もっとずっとあとですよ。

アメリカというのは、個別産業とか個別地域の人が、たとえば有力セクターを動かすと、それについてプロポーションを離れて非常に強く主張するということです。逆にこれを利用することもできます。ある関税交渉のときに、どこかの州のセクターで、名前は忘れちゃったけど非常に有力な人がいてね。その州が七面鳥の産地なんですよ。それで、とにかく七面鳥の関税を下げるというのを強く言ってるね。それを下げるからといって、他の形でたくさん代償を取るんですよ。そういうところを利用したこともあるんだけど、アメリカというのは大変な個別産業ないし個別地域の声が針小棒大に伝わってくるという面がある。このときのニクソンもそういう面があって、日本に対する貿易不均衡を指摘してきて、安保にも影響するとなると日本は米のいうことを全部聞くだろうという、そういうニクソン一流のハッタリのおいがありました。

したがって、私はずっと真面目にアメリカにお付き合いしていたけども、これは本当になんとかしなくちゃいかんとは思っていませんでした。本当に何かしなくちゃいけないということになると、いまは関係ないからもう明かしてもいいんだらうと思うんだけど、まず経団連の幹部に意志を伝えてやってもらうということ。それから、個別業界の問題は個別業界のトップとアクセスがあるし、向こうからよく来ましたからね。当時は経済局長は偉かったわけよ。それから最後は新聞なんです。これも経済部長レベルと論説委員レベルと、霞クラブと三つに分けて、同じ問題でもみんなバードとやっていたわけです。ところが、日米についてはアメリカが大変だというので、真面目につきあっている顔をすれば大したことない、というのが、一言で言えば私の基本的な考え方で、真面目にお付き合いしていたわけです(笑)。

だけど、日米摩擦問題は時間はとても取られましたけど、ほかの問題に比べれば……。私はヨーロッパとの関係が長いんで、この話をすると長くなるんだけど、アメリカと日本が交渉すると、ECは必ず日米だけでうまいことをやって、そのつけをヨーロッパにも回すんじゃないかという、常にそういう疑惑の目で見るとは。日本とアメリカが何か話をまとめると、必ずそのあとやってくる。そういうのがずいぶん続いています、この段階はまだその段階なんです。それでワアワア言ってきた。これまた、真面目にお付き合いをしたという。

それから、東ドイツ（との貿易協定）は記憶がないですけど、もし私のところに課長が持ってきたら、「おまえなぜこんなことを局長まで持ってくるんだ」と言って怒鳴り散らして盲判をついたということになったと思うんですよ。本当にそれはどうだったか分かりません。というのは、社会主義国との貿易取り決めはたくさんパターンがあるわけです。東ドイツは、実は西ドイツを通じて裏口からいろいろやっていたわけ。新しく東ドイツが「貿易」協定を作って、いったい日本経済にどれだけ影響があるか、世界経済にどれだけ影響があるかということを、単位で言えば一〇億ドル以下のことは局長の考えることではないということ、これはもう全然私には記憶がありません。たぶんハンコはついたと思いますけど、そのために課長がいるわけで、なんでもかんでも局長に持ってきてはいかんという部類のことです。

それからベトナムの問題も、ベトナムも結果、アメリカ経済のポディブローがきて、もうたいへんな……。世界経済にいろんな影響が出てくるわけです。まったくこれはそのポディブローが来るタイミングでいろんなことが出てくるわけですね。それが大事なんですよ。

■サミットの準備段階での裏話

北岡 さっきの一〇億ドル以下の話と同じで、大事なことをたくさん喋っていたけどほうがいいですから、むしろさっきのサミットの話とか、追加でお聞きしたいことがあって。サミットは、最初から毎年一回やるという話でもなくて、最初は日本が入るかどうかも分かりませんでしたし、その準備段階、情報がどういうふうに入ってきて……。そういうのはどうだったんでしょうか。

宮崎 サミットはランブイエの時代になると、日本抜きでフランスでも、そういう発想法があったわけです。したがって、いろんなルートから連絡があったわけですね。つまり、日本抜きに考えられないというのは、さっき言ったエネルギーの輸入でも、日本はアメリカに次いで二番目かな。本当の輸入国で、アメリカは産油国でもあるんです。

北岡 しかし、事実としてはフランス、ドイツ、アメリカのわりあいアンティームな会合は時々やっていましたし、世界経済を再建するにはやっぱり日本も入れてやらなくちゃいけないということ自体がひとつの決断なわけですよ。

宮崎 そうです。

北岡 それが実際、あそこで決断されてそういうのが開かれるようになったということは、日本にも大きな影響があったと思いますし、世界にも大きな影響があったと思うんです。日本側の、もうじき会合があるらしいとか、どういう形になるだろうとか、議題は——三木さんがいろんなことを脱線はしたでしょうけども———という話題になって、そのときにはどういう体制で臨むというようなことは、わりあい早くから分かっていた……？

宮崎 内々の意向はなくてインビテーションが来たわけですよ。来るだろうということは間接的には分かっていましたけど、正式

にはインビテーションが来た。そのときには議題も何も書いてないわけです。ただ、忘れちゃったけど、世界経済がこういうふうになっているから、それについて相談したいとか、そういうことですよ。つまり、ヨーロッパのほうはECの中で、英独仏がしょっちゅう話をしているでしょう。だけど、アメリカ抜きでは話ができないでしょう。当時は、アメリカに次いで日本がGNPでも二番目なんですよ。石油の輸入も二番目だし、あらゆる意味で日本なしに世界経済は議論できないというところは、OECDやいろんな議論からだんだん首脳にも浸透していたわけです。

ちなみにジスカル・デスタンという人は、大統領になる前に大蔵大臣だったんです。それで、大平さんにくっついていって会ったことがあります。非常に頭の切れる男でね。したがって、彼自身も日本ということに関する認識があったわけですよ。それはサミットの前、蔵相時代ね。

したがって、そういうインビテーションが来たんだけど、議題なんか書いてないわけですよ。非常に漠然たるもので。だから、三木さんは宣言は法三章でいいとか、いろんなことになっちゃったわけです。何も書いてないけど、私の判断ではさっき言ったようなことしか議論になるはずがないと考えて、何回言っても御嘉納にならなかったと。

北岡 そういうインビテーションが来るときに、もちろん情報は外務省にいちばんあるわけですけど、どういう体制で対応するかと。たとえばシェルパって制度は、いつ頃からそうだったんですか。

宮崎 シェルパが出来たのは三回目かなんかで、吉野さんもシェルパだったね、たしか。吉野さんの前は鶴見〔清彦〕さんなんですけど、鶴見さんは長かったんじゃないかな。

北岡 いま現在の外交が非常に複雑になっている、それはトップで決めなくちゃいかん、しかしトップはサポートがなければやっ

ていけないという、いくつかの矛盾というか難しいと考えた問題ですよ。それで三木さんを担いでいくというのは、たいへん難しい話だったと思います（笑）。

そうすると、どの国も基本的には、ジスカルさんでも何でもトップがこういうのをやるうということを行くわけですよ。日本は宮崎大使のほうから、これはこういう準備をしなくちゃいかんというふうに、そうとうお尻を叩かないと動かないと。外務省の中でいくつかの考え方とか、あるいは他の省庁はどうだったとか、そのへんはいかなんでしようか。

宮崎 初期の段階、ランブイエのときは全然分らないわけですよ。議題も分らない。だから他の省も、とにかく人は来るけど相談するわけにも。それは、議題がないから相談もできないでしょう。だから、ぶっつけ本番になるわけです。局長さんがほかの省からも来たけども、ホテルで待機していて、加藤君から下足札をもらう順番待ちで、もらった人だけがお城の中に入って、お城の日本代表団控室まで行くんだけど、行っちゃってまた帰らなくちゃいけないという状況であったわけです。

北岡 じゃあ、もうだいたい推測で、これくらいの人が行くべきだということで用意して行ったわけですね。

宮崎 それは用意するというか、みんな来たいというから切れなくて大勢になったわけです。アメリカ、日本はしょっちゅうそういうふうになるんですよ。ところが、向こうで入場者数を制限するでしょう。だから、そういう結果になっちゃうわけ。

北岡 最初のジスカルもシュミットも、とにかく少人数で徹底して議論するということを重視してましたよね。

宮崎 少人数で徹底的に議論されると、いちばん困るのは日本で、その次はアメリカなんです（笑）。アメリカがそうだったから、フォード大統領をキッシンジャーとかは全然信用してないわけですよ。

北岡 最初がフォードでカーターですから、しばらくアメリカは困ったはずですよ(笑)。

宮崎 日本は困ったわけですよ。どういう体制で臨むかとかなんとかいうのもまったく分からないから、初めてのことでしょう。私はよく初めてのことにはぶつかると、初めてのことだから私の思う通りにやらしてもらおうという。また、そういうふうになったわけですよ。

北岡 それでぶっつけ本番的に宮崎大使が中心になって対応されたのが、その後の日本の対応の原型を作っていたということになったわけですね。

宮崎 まあ、そういうことです。

北岡 やっぱりこの議題しかないというのはその通りだし、さっき申しました三木さんというのは、先進国の協調で何か物事を決めていったりサポートしていくという考え方は、そもそもない人だと思っただけですよ。

それからもうひとつ、シエックのほうでお聞きしたいんです。私もあの頃は同年代的に覚えているんですけど、一次産品の価格を上げるといふようなことを言っていたって本当に出来るのかというのがですね。

宮崎 それはできっこないですよ。

北岡 私もそう思ったんですけども、日本ではさかんにマスコミに載っていました、英米・フランス・ドイツなんかでは真剣に受け止められていたんですか。

宮崎 フランスはジェスチャーとして後進国にいい顔をしたいのではっきりとは言わない。アメリカは絶対反対です。ドイツも反対でしょうけども、「反対」というと後進国に睨まれるわけですよ。するとまた何かされるといふので、したがって「反対」といふ声をPRするということは避けていたと思えました。ただ実際上、マルクス経済の理論で、シエールの議論というのがあるで

しょう。一次産品というのはさっき言ったように、需要の面で工業原材料の一次産品はどうだとか、所得弾性の問題とかいろいろ、経済学的にも言い尽くされた議論がある。それを変えたいというのには、OPECというのがそれに対する一種のカルテルで、それを打ち破ることができたわけですね。石油の問題については、あとでシエックの議長になっていろんなことがあったときにまとめて申し上げたとか、石油というのは非常に特殊なコモディティで、アクシデント・プローン・コモディティなんです。ごく一部の地域に産出量の大半が集中していて、いろんな意味で特殊で、またそこにOPECという特殊な国際カルテルが出来て、それがポンと価格を上げることになったわけですね。バレル二ドルとか三ドルだったのが、二〇ドルぐらいたったわけでしょう。日本の経済なんていうのは、「安い石油」を基礎にして成り立っていたわけですから。戦後の経済政策で、通産省のときに申し上げ損なったけど、あのときの通産省は、電力は火主水従、エネルギーは油主炭従という方向をずいぶん早くから打ち出したわけです。石炭から油へ切り換えるというのをね。電力はその油を使って発電するという前提で来たので、油が上がるということはまったく考えてなかったわけでしょう。アメリカなんて自分の国に石油がありますから、若干複雑。ドイツ、日本、イタリアは、イタリアなんてものに困ったわけです。OPECでそれが出来たら他の一次産品でもできるはずだと。したがって、この際それをやろうというのが途上国の考えでした。

北岡 (笑)。できるわけがないと思っただけです。

宮崎 「ノン・ホーリー・アライアンス」、できるわけがないのが罷り通っていたのが、当時の風潮なんです。エチエペリアの国家の権利義務憲章も出来るわけがないのが、真面目に議論していいましたよ、日本でも。

北岡 メキシコはオイルショックでちょっといい思いをしたから、

そういうところまで発想が飛躍したんでしょかね。

サミットの第二回では、第一回の経験はどういうふうに引き継がれたんでしょうか。

宮崎 私は、二回三回とブランクなんですよ。外に行ってましたから。その次にはシェルパですよ。だから、二回三回については間接的にしか聞いてないんです。二回目サンファンは、結果から見て非常に失敗だったと。

北岡 二回目は本当に急に集まって、すごく短かったですね。

宮崎 それで準備も出来てなかったしね。サンファンのときはまだシェルパがなかったんじゃないかな。

北岡 だから、毎年続くというのは、最初からそう思ったわけでもないですし、サンファンでやったんだという感じで、第二回は非常に印象の薄いサミットですね。

股野 ロンドンには、キャラハンになってました。

宮崎 東京はサッチャーなのね。だから、ロンドンの次のボンをキャラハンだったわけ。

股野 そうですね、キャラハンの最後です。

宮崎 ちなみに、それはもっとあとの話なんですけども、さっきの質問があって、ジスカールはなぜ日本を入れたかというところ、そのあとの、たとえばボン・サミットにしても東京サミットにしてもマクロ経済政策があるでしょう。ボンのとき機関車論とか主役は日米独なんです。フランス・イギリスは全然問題外。通貨の問題になるとフランスが出てくるんだけど、マクロ経済になると彼らに発言権がないんですよ。それぐらいに日本のウエイトが高くなっていった。したがって、日本なしに世界経済を議論するということは考えられないということがもう定着していたと思います。純粹のNATOの問題とかは別です。ベルリン問題とか、当時の東西問題の中ではいろいろありましたでしょう。それは日本は入れなかったわけですよ。だから、日本にとって見れば、東

西問題を日本が議論したって誰も相手にしてくれないだろう。だから「東西南北は端パイだ」と言ったの(笑)。

北岡 何新聞に載ってるんですか。

宮崎 産経だったかな。囲みに出ちゃったんですよ、記事じゃなくて。

北岡 特定の、というわけじゃないんですけど、本当に重要な問題だったら、この時期の七〇年代前半の日米経済問題は真面目な顔をしていただいただけとおっしゃいましたが、本当に重要な問題はまず経団連と業界のトップと新聞の有力者。こういうところでは非常によく物事もわかり、影響力もあった新聞記者とか、そういう方が何人かいらっしゃいますか。

宮崎 新聞記者はだいたい経済部長です。経済部長は特定の人は覚えてませんが。それから霞の記者でも、私はかなりざくばらんにものを言うほうで、バックグラウンド・ブリーフィングでは間違っちゃいけないと思うので、ずいぶん際どいところまで言っておフレコをかましてね。だから、かなり信頼されていたわけですよ。経済部長のどの人ということじゃないんだけど、いろいろと一所懸命説明すると分かってくれるわけです。新聞のサポートを得ると、錦の御旗を立てたみたいで非常にやりやすいんですよ。たとえば自由化が世界の大勢だとか、そういうようなことをぶちあげると、本当にやらなくちゃいけないというときは一所懸命、必死になってやるんですよ。つまり、国内に対する根回しね。ここ「質問票」にあるようなことについては国内の根回しをしなくて、通産省や何かに言ってきたことを基礎にしてキャッチボールをやっておった。真面目な顔をしてね。それが破綻を来さなかったからよかったわけ、真面目な顔をして時間をつないだわけですよ。

北岡 いつでもその時代にとっては大問題だなんて言ってますが、あとから見ますと七〇年代の末とか、あるいは八〇年代になって

からの経済摩擦に比べれば、どうってことなかったと思いますけど、当時あってこれは十分凌げる問題だとかいう判断は簡単ではないでしょうね。

宮崎 そうそう。だけど、それは人には言わなかったですよ。言ったらもう大変なことになる(笑)。

北岡 さっき新聞について言われましたね。つまり、大使が腹を割って話すと、新聞の経済部長クラスはよく分かってくれたというのと、分かってくれたけども、しかし新聞の経済問題では必ずしもなくても、新聞に出ると南北問題がどうか、そういうふうに出るわけですね。

宮崎 それは風潮として、記者クラブの人も言ったけど、とにかく南北問題で途上国の言うことは正しいということを書いていけば、新聞に掲載しますよと言っているわけです。それは流れとしては、基礎的な流れとして私が言っている通りなんですけど、当時のジャーナリズムも含めた日本の流れはそうではない。そういうのは歴史的な大きな流れから逆流する現象が時々出てくるというようなことが常にあるのでね。

北岡 それはそうですね。韓国だって南と北は対等に取り上げたり、ドイツも東西を対等に扱おうなんていう姿勢はありましたがどね(笑)。

宮崎 文化革命を礼讃したりね。文化革命を礼讃するなんていうのはまったくおかしいと思うんだけど、当時はそんなことを言う人は少なかつたし。

■アルジェリア大使として赴任

宮崎 「ここは地の果てアルジェリア」という歌をご存じの方がありますか(笑)。「カスバの女」という、ご存じの方は歳を取ってるね。「ここは地の果てアルジェリア」というのは、私が赴任

する前に流行っていた歌なんです。ところが、実際上は歴史的に見るとそんなことは全然ないですね。アルジェリアというのは地の中心なんですよ。というのは、ローマの前にフェニキアの植民地でカルタゴが出来たでしょう。カルタゴがあつたのへんを占めていたんだけれども、カルタゴに反抗したのがあって、アルジェリアというのはその頃からすつたもんだしていたわけです。それからカルタゴに結局やられたんでしようが、半植民地みたいになった。それからローマが来て完全にローマの植民地になっちゃって。それからあとでも、民族移動のときにバンダルが来たり、ずつと先になってアラブが来て、サラセンの一部ですから。それからトルコが来て、最後にフランスが来たのかな。その間の歴史の重層があるんですよ。というのは、地の中心だからそういうのがあるんで、日本というのは地の果てなんですよね(笑)。文化的に見てもどっちかといえばそうなんですけど、その話は別として、そういうようなところなんです。

行く前に、行ってくれないかと言われて「僕はフランス語が得意じゃない」と言ったら、佐藤(正二)次官に「俺と一緒に君はジュネーブにいたじゃないか」と言われてね。いたらできるといふのはとんでもない間違いなんですけど、片言ぐらいいはできたんですけど、いまは片言も話が出来ない。とにかくそういうことで、アルジェリアに行けという。そのひとつの理由が、シエックの議長を東京から毎月行っていたわけです。あれは痺れを切らしたほうが負けで、とにかく続けなくちゃいけないわけだね。フィルバスターみたいなものでね。その議長を途中で代わるわけにいかない。それで、アルジェリアだとすぐだから行ってくれといわれて、行ったわけです。

行く前に人に言われたのは、アルジェリアという国は、アラブの悪いところと社会主義の悪いところとフランスの悪いところと三つ兼ね備えている、という話を聞かされたんですけど、たしかに

その面はあったんです。それに加えて、戦争をした、内乱を一年間ぐらいやったでしょう。何百万人が死んだんです。そういうことの記憶がまだ残っていて、親戚が必ず誰か死んでいるんですよ。したがって、三人集まれば腹を割って話をしないという習慣があるわけ。僕らはとてもだめなんだけど、アラブの他の国の外交官が、アルジェリアでは友達ができないというんです。話をしてくれないというんだけど、僕はそこで友達になるほどアラブ語もできないし、付き合いもなかったんだけど、そういう話を聞いたわけです。それで、社会主義の悪いところもいろいろなところに出ていたわけです。

『ペペルモコ』という映画をご存じかな。あれでアルジェの街が出てくるんですけど、街の佇まいはカンヌみたいところで、海産物がとてもおいしいところだったんです。オマールというエジは有名でした。ところが、僕が行ったところはエジがなくなった、食べられないというんです。「どうしたの?」といったら、社会主義になったのでエジが逃げていったっていう話。というのはもちろん冗談で、社会主義になってから気の利いた漁師が、洋上でエジをフランスやイタリーの船に売っちゃうわけです。それがひとつと、少し持ってきたやつは偉い人のために確保されちゃうから、一般の市場には出ないということになっていたわけです。

それで、日本との関係では、私の行ったところはプラント輸出を伸ばそうと思ってるいろいろ画策はしたんですけども、だいたい一〇億ドルくらいのものが、プラント輸出の輸出先としては、かなり上のほうに行くまでになったわけです。

ところがそこで問題なのは、当時これは途上国一般にプラント輸出について、ターンキー方式というのを主張して——フランス語で「クレアマン」と言うんです——工場を作って、その工場の鍵を渡すまで全部面倒を見てくれるという、それが原則だということになったんだけど、私のいる頃には、さらにクレアマン

じゃなくてプロディアという。つまり、工場が出来て生産して、生産物——プロディアが出来るまで面倒を見るという主張になってきたわけです。そうしますと、クレアマンだと工場を作って鍵を渡せばいいわけでしょう。生産物を作って売れるまでするというのは、大変なんですよね。何年間というのじゃなくて、それを全部するというのは大変なんで、それは無茶だという話をしていたんだけど、なかなか……。

ああいう国は出入国も非常にうるさくて、殊に出国が大変なんです。急病になった人が出国するというのに書類が揃わないというので、日本人が大変なことになったというのがいくつかあるんです。だから、しょっちゅう出国のための書類を揃えておけるということも言っていたんです。アルジェリアについてはその他いろいろ、たとえばさっき言ったプラント輸出をたくさん伸ばすようになってから、輸銀の融資がずいぶん増えたわけです。

私の頃は、アルジェリアはプーメディエンという大統領だったんです。プーメディエンというのはご承知のように、アルジェリア独立直後のベン・ベラを倒して大統領になった男で、一党独裁なんです。新聞というのは党の機関紙しか出てないわけ。『エル・ムジャヒード』というアラブ版とフランス版があって、私はアラブ語が出来ないからフランス版を読んで、これは激しくて、ソ連圏のいいこと、アラブ圏のいいことは書く。それから、資本主義国の悪いことは書く。資本主義の中に日本も入っているから、日本も悪いほうに入るわけです。本当に読んでいると腹が立つ新聞しか出てないわけです。しかし、それしかないからそれを一所懸命読んでいたんだけど。

そういう社会主義の悪いところというのは、あるいはアラブの悪いところかもしれないけども、せっかくプラント輸出をしても、日本の場合じゃなくて他の国の場合も含めて、たとえばフィアットのバスがたくさんあるんですよ。ピカピカのやつがね。それが

全然動いてない。どうしたんだと思ったら、どこか壊れちゃって、メンテナンスが出来てないから動かなくなっている。

それから、ビルにエレベーターが動くところは、僕のいた頃は五つに一つくらいで、動いているエレベーターも鍵がかかっていて、新しい大使やらが昔からいる大使に表敬に行くでしょう。その事務所がたとえば五階なんかにあると、下で部下の人が待っていて、私が行くとエレベーターの鍵をあけて私を入れてボタンを押して、本人はツーッと駆け登っていくんですよ(笑)。それで、五階で鍵を開けて出してくれる、それで向こうと話をします。それはいいほうであって、他のところでは、エレベーターは全部ビルに残っているんだけど一つも動いてない。そのように、大変な予想外の問題があるわけです。

たとえばプラント輸出をやるでしょう。部品をどこか倉庫に入れておきますと、その警備が大変なんです。というのは、アラブの慣習か何か知らないけど、たくさんあるものを、たとえば一〇〇あるものを五〇持っていったら泥棒なんです。それは小麦でもそうです。公邸の台所にある油や小麦が少しずつなくなるのは、文句を言うくらいのことになっちゃうので、文句が言えないわけです。僕が心配したのはマージャンね。あれはパイを一つでも持っていかれちゃったら困ると思ったんですけど(笑)。

とにかくそういうことで、プラント輸出も含めてだいたい、輸銀の融資が出るようになった。したがって、澄田(智)さんという人をよく知っているんだけど、輸銀総裁だったんですよ。ブーメディエンが会ってくれた日本人が二人、僕がいる間にね。一人は澄田さんね。もう一人は、丹下健三。丹下健三という人は、飛行場の設計なんかで来ていたんだけど、要するになぜ会ったかという、かつてアルジェリアから要人——秘密警察のボスが日本に来た。そのとき別のなんとか大臣が来ていたので、大使館はなん

とか大臣のほうの接待に追われて、その秘密警察のボスは接待を丹下さんに頼んだらしいんですよ。それで丹下さんが接待したらいい。ところが、秘密警察のボスというのは、当時ものすごく力があつたんですね。それが口を利いてくれたんで、スツとブーメディエン大統領に会ったんですよ。丹下さんは結果としてうまくいったんで、それをまた読んでいたとしたらこれは大したものだけ(笑)。

そういうようなことで、社会主義の影響は悪影響がたくさんあるんだけど、その他、さっき言いました途上国のナショナルリズムの一方なだけけど、「アラビザシオン」ということが流行ってね。アラブ語化というの。テレビなんかでもアラブ語じゃなくちゃいかんとか、フランス語の放映は何時間に制限するとか。それから、道路標識を書いてあったのが、アルファベットを消しちゃったわけです。アラブの字しか書かない。これは本当に困るなと思っていただんだけども、しばらくしたら、今度は小さくアルファベットを書き加えた。というのは、中年以上の人はアラブ語の字が読めないんですよ。交通事故が増えてしょうがないんです。すると一度消してまた書くので、ペンキがなくなっちゃって大変な(笑)。

その他、ものがなくなるといふのはしょっちゅう。コメがなくなったり粉がなくなったり、トリがなくなったり。だから、それを見越して備蓄しておかなくちゃいけないわけですね。そんなようなことが。

アルジェリアについてはいろんな人もあつたし、当時のブーテフリカという外務大臣はブレイボーイで、それがいま大統領でしょう。ブーテフリカというのは僕は全然感心しなかつたんだけど、当時からブレイボーイで、フランスに行つては女を抱えていたという、フランスの警察が全部それを知っているという話だったんだけけど。

とにかくそれで、月のうちの一日はパリでシエックの議長をやって、あと二〇日はアルジェリアにいらんなことをやっていたんですけど、貧乏性なもので何もしないというわけにはうまくいかないものだから(笑)。

■ハイジャック機の受け入れに奔走

宮崎 それで国内に帰る命令が出たあとに、ハイジャックが起きちゃったわけですよ(日航機乗っ取り事件、一九七七年)。ハイジャックの飛行機が。要するに福田(起夫)内閣のときで、「人命は地球よりも重い」というので、福田さんの命で超法規的なんとかで、牢屋に入っていたやつを出したでしょう。それでそのハイジャックされた飛行機をどこの国も引き受けてくれないんですよ。とにかく引き受けてくれないと、人質がたくさんいるでしょう。人命に関するので、とにかく頼み込み頼み込みという電報電話が毎日毎晩のように来るんですよ。次官が有田(圭輔)さんで、松永(信雄)が官房長だったかな。

それで、しようがないからアルジェリアの当局に、ハイジャックされた飛行機を引き受けてくれって言いに行ったら、嫌だと言うんですよ。もう引き受けないことにした。というのは、その前にOPECの閣僚をウィーンかなんかで拉致しちゃってね、まあハイジャックですよ。それを人質にしたときに、OPECのみんなの国に頼まれてアルジェリアが引き受けて、それで大臣を解放したというのね。そのとき、事前の話で一切条件をつけないというところでそれをやったら、そのあとでえらい文句が来た。同じ同僚のアラブの国に。その他OPECの国から、犯人を渡せとかなんとかいろんな注文が来た。それ以来、方針としてハイジャックの飛行機は引き受けないということに決めたんだということですね。「そこをなんとか」っていうのが言いにくいのは、日本

語でも言いにくいのに、「そこをなんとかひとつ」って英語では何て言うんですか(笑)。それをフランス語で言わなくちゃいけないんだから、大変な話で。それでもお百度を踏むように頼み込んでね。そうしたら向こうもいろいろ同情してくれて、「それじゃあ一切条件を付けないなら」と。それも文書にして出してくれというんだよね。それでももちろん東京に言って電報でやりとりして、「そういう紙を出しますよ、そういう条件ですよ」と言ったら「それで出してよろしい」というOKが電報で来て出したわけですよ。そのときに今度は別の人、ある局長かが「あなたの言うようなことをやっていたら、ハイジャックはほかに行くところがなくてみんな断られちゃった。全然ないからあなたのところにいきますよ」という電話をわざわざかけてきた。それが分からなかった。とにかくそういう経緯があって来ることになったわけですよ。そうしたら、いろいろ思いがけない問題がたくさん。ひとつは、ハイジャックされた飛行機を追いかけて救援機と称する飛行機が後ろに来ていたわけですね。石井一代護士という人が団長で、橋本恕が領事移住部の次長で、その他運輸省とかの役人が乗っちゃって、何が救援機か知らんけど、とにかくハイジャックされた飛行機を追いかけていくわけですよ。それが来るという。その間に新聞社の、みんな各紙東京の本社の社長から僕宛に電報が来て、「本社のどこそこの駐在員の誰かとかが、ビザなしで行くからせひ入れてくれ」と。ところが、アルジェリアというのは社会主義国で、殊に新聞社に入れないんですよ。それでみんな牢屋に入れちゃうわけね。それはまた大変だということです。しかも困ったことに、社長の電報は、何の誰がしが行くというんだけど、年齢から生年月日からパスポートのナンバーから何も書いてないわけね。だから、どんな人が来るか分からないわけ。それは、こういう日本人の記者が何時から何時までに来るから、とにかく入れてくれと頼み込んでそういうアレンジをして、それから今度は飛行機が

来て人質が釈放された場合の泊めるところ、それから炊き出しね。炊き出しも何回もやったんだけど飛行機の来るのが遅れちゃって、二回ぐらい握り飯を腐らしちゃったんだけど、炊き出しのために在留法人の奥さんを動員したり、それから公邸と日本人学校とどこそかに泊めるためのいろいろ準備をして。ところが最後の最後になって、アルジェリア政府が郊外のホテルに泊まっている人を全部追い出しちゃって、ここがまた社会主義国なんだけど、ほかの人を追い出して、そこを確保してくれたんですよ。しかし、そこに泊まった某省の人が、水が出ないって文句を言って、「何を言ってるんだ」って。もともと水が出ないのはアルジェリアでは当たり前なんです(笑)。ともかくそういうことで来てね。

飛行場に詰めて、アルジェリア当局の人がハイジャッカーと交渉するのを脇で見ていたという。それで結局、全員釈放されたわけです。一人一人僕が挨拶して、それが日本のテレビに映ったというので、友達が「おまえも殺されるんじゃないかと心配した」とか言ってたけど、とにかく釈放されちゃってね。ところが驚いたことは、新聞記者はとにかく入れてもらったんだけど、釈放された時に間に合ったのは一人もいないわけ。ところが、あとで新聞を見ると、夕暮れの黄昏のなんとかのときに、しずしずとなんとかでどうとかっていろいろ書いてあるの(笑)。見たら、みんな各紙とも。

北岡 全部嘘ですか。

宮崎 全部嘘ですよ。だって一人も間に合わないんだもの。それから、石井一があとから来たわけですよ。そのときはもう釈放されてた。僕は、人質釈放をしてもらわなくちゃ困るんだけど、できれば石井一が来たあとでしてくれたほうがいいなと思ったけど、遅らせてくれというわけにもいかんしね、釈放されちゃったわけです。そのあと来たわけ。だから、彼はすることがないわけですね。しょうがないから、向こうの人に「お礼を言ってください」と連

れて行ったりはしたんだけど。

ところが、福田さんから電報が来て、石井一に対してたいへんな謝辞が来ているわけよ。僕には何も来なくてね(笑)。それはいいとして、釈放されて日航機が二つとも飛び立ったあとで、日本政府から「犯人がどこにいるか知らせろ」とかね。金を持っていったわけですね。金を返してもらうとか、そういう交渉をせいでいい電報が来たわけですよ。これは本当に腹が立ったな。そのために書き物まで入れているんだけどね。書面まで入れて「条件を付けない」と。これはまたあとで、帰ってからずいぶん文句を言ったんです。後で聞いた話ではハイジャッカーは金を持っていなかったというんですね。どこか途中で停まった時に降ろしちゃったらしいな。そういう話です。

それから、犯人たちは、アルジェの郊外のどこそこにいるというのを、アメリカのCIAの情報に通じているアメリカの大使が、ドイツも同じような情報を、その二つの大使がこっそり教えてくれたわけですよ。しかも教えてくれたのが、向こうの大使館の防音装置がついている特別な部屋でね。ところが、そこにいるということを経験したら、そこへ行って会ってこいと言うだろう(笑)。だから、言わなかったんだけどね。そういうことがあったんで、これまた初めての経験で。

そのときにいろんな……。私自身は飛行場に行っていたし、それからスタッフが大変で、夜中まで働く。タイピストがもちろんいないわけでしょう。日本から何か来て夜中に向こうの当直のオフィサーに言う「書き物を出してくれ」というの。公文書にして。ところが、タイピストがいなし、フランス語も……。しようがないから、滝口君というあとで大使になった人と二人で夜中にペンで書いて、大使館のハンコだけ押して持って行ってね。そういうことをやったり。

それから、ホットラインをつけることになっているんですけど、

ところがホットラインなんて簡単につかないんだ。アルジェリアの場合は、ホットラインといっても、要するに普通の電話局のラインを借りきってつないでいるだけなの。ところが電話局が、会話が途絶えると切っちゃうの。だから、常に会話してなくちゃいけないわけ。

僕らが電話番号として残したのは某銀行から出向してきた人で、外務省じゃない人。東京のオペレーションセンターへ「電話で何か話をしてよ」と言っているんだけど、「お天気はどうですか?」とか何とか言ってもすぐ話題がなくなっちゃうわけ(笑)。あとで東京で、そういうときはオペレーションセンターの東京の人間が入れ代わり立ち代わり出てきて、何でもいいからしゃべればいいじゃないか。現地の人は一人でポツンと置いてね、しゃべろといったってだめだ。いろんなことがありましたけど、そういうことがアルジェリア時代にはあったわけです。

アルジェリアのほうは別にそういうことばかりやっていたんじゃない(笑)、向こうの経済関係の閣僚からひっぱりだこだったわけです。行くときに中本孝君という、いまだこかの大使にあったフランス語の、当時は若い書記官だったのを通訳に連れていくわけよね。ところが、向こうも急ぐしこっちもそうで、向こうが言っていることはだいたい分かったわけ、当時は。それで、こっちがワアワア言って、車に乗ったら中本君が「大使、いくらアルジェリアといっても相手は大臣なんですから、少しは敬語をお使いになったら」とか(笑)。フランス語で敬語を使い出すと、たとえば「ブードゥリエ」と言ったら、あと全部動詞を条件法にしないでいいじゃないでしょう。そんなのとてもできないのに(笑)。ドイツ語だって、年代は違うけど、われわれが習ったドイツ語みたいのは使わないですよ。たとえば女性をつかまえて、「マイネ・グネーディゲ・フラウ」なんて言ったら笑われちゃうわけです。そんな古典的なドイツ語は使いませんと幾回も言わ

れた。新しいドイツ語を習いなさいといわれました。

北岡 いや、そうでもないですよ。ドイツは、特に戦後は非常に簡略化が進んだんじゃないでしょうか。ナチス時代に非常に古典を強調した反動もありましたし。

いまのハイジャックで一点だけ。日本はハイジャック問題で外交関係になったのは、よど号はありますけども、それ以後これが最初ですか。

宮崎 どうかあんまり……。ハイジャック問題について、あまり経験がないというか覚えがないんですけどね。

北岡 宮崎大使がおられた時期にアルジェリアは基本的にみんな断っていて、受け入れはもうそれ前後は日本だけだったわけですね。あれはダッカから来たんでしたっけ。

宮崎 そう、ダッカですね。

北岡 これは、受け入れ可能国と思われることは決して名誉なことではないわけですね(笑)。

宮崎 ところが新聞を見ると、「宮崎大使の咄嗟の思いつきで、どうのこうの」というようなことが書いてあるのもあるんですね。とんでもない!(笑)。思いつきでそんなものやって、ハイジャッカーと心中する気はないですからね。

北岡 私もあれを新聞記事で見ていると、とにかくこも引き受ける国がなくてやっとな引き受けてもらった、それでも無条件で全部お任せします、というような感じだろうと思っていれば、あとでいろいろ注文とかしているみたいで、こんなことしたら外交関係が悪くなっちゃうんじゃないかと思ったことがありますね、新聞を読んでいて。

宮崎 同僚の大使がそのあとで、「おまえ、どんな面してこれと言いにいったんだ」と(笑)。さっきの東独のは局長マターじゃないということ言いましたけど、だいたい昔の外務省の電報というのは全部、大臣発大使宛なんです。だから、課長が書いた

りするんでね。でも、大臣名で出るわけですよ。あとになってから局長までクリアしているというのを示すサインが出来るようになったんですけど、それは比較的事のこと。

こういう話を知ってかしら……。幹部会でいろいろ議論していたら、なんとかの大使が何か言った。なぜ彼はそんなバカなことを言うんだという話になってね。そうしたら主管局長がそういう訓令を出したようです。課長が出したんだろ。そうしたら、だいたい訓令を聞く大使がいるかと(笑)。訓令をそのまま聞く大使はバカだ。そういう話になった。だから、ウエイトをつけるというのは、受けても課長止まりで出しているというのが、だいたい分かるでしょう。部下にやらせるのと自分でやるのとは、そのケジメを間違えたらえらいことになっちゃうんだけど。

話はまた全然飛ぶんだけど、経団連とかなんとかにいくという話をしたでしょう。財界やプレスとの会合の他に僕が主に学者との会合をやっていたんですよ。学者は、政治学者と経済学者の両方ね。名前を挙げると問題がある……。

北岡 もう大丈夫ですよ、名前を挙げて。もうみんないっぱい出てます(笑)。ポロポロ。

宮崎 もう亡くなられた方も多いんだけど、学者の方がカレントな情報を得ることをメリットとして来られたんですよ。また現にそれだけサービスしたわけです。だから、ほとんど欠席なかつたんです。それから、われわれのほうは学者の知恵を拝借したいと思って催したんだけど……。

北岡 あまり役に立たなかつた(笑)。

宮崎 どうもこっちの生徒のほうの頭が悪いもんで、あまりいい知恵を授かつたという覚えがないんです(笑)。

北岡 まさか岡義達先生ではないでしょうね。

宮崎 いや、彼ではなかつたです(笑)。

北岡 これは役に立たない、と(笑)。

宮崎 ただ、そのときに一つだけ面白かつたのは、われわれの前で、何かのときにエコノミストと政治学者で論争が生じちゃつたんです。エコノミストが、要するに経済のほう馬だ、政治は騎手だ。いくら騎手がよくても馬がだめだつたらうまくいかないんだ。あるいは経済は女房で、政治は亭主で、ときどき亭主はゲッコツを振り上げたりするけど、結局長い目で見ると女房に飼いは慣らされているんだという話をしていて、これはエコノミストのほう。それに対して政治学者のほうの反応があつただけで、ちょっとそっちのほうは覚えてないんで。

北岡 その時期で言いますと、もうちょっと前の佐藤内閣時代に、佐藤さんは非常にいろんな学者がずいぶん会っていますね。定期的な会合をしていて。当時でいいですよ、集められた人は高坂〔正麿〕さんとか三〇代の学者もいて、こんな若い人と会つていたんだと、いま日記で見れますと思います。

それから、きょうお話を伺つた、もうちょっと近いところだと、学者のほうは当たつていたことも稀にはあるかなというの、円を切り上げろという議論をしていましたよね、近経の学者は。これは大蔵省よりは柔軟だつたかなと。むしろ前にお聞きした宮崎大使のご意見に近いエコノミストはいたかなという感じですね。大蔵省は非常に頑だつたですね。

宮崎 うん……大蔵省は局によるんですよ。当時の国金局、日銀も井上五郎さんかな、私の先輩なんですけど、大蔵省は……。柏木僕の代ぐらいが細見さんだけでも。たとえば井上さんと話している、円が上がるということを意識してなかつたんで、何かで彼自身がドルで持っていたというのね。円で持つという発想がなかつた、ということ、ドルが下がるということが考えられなかつた、ということ、ドルが下がるということ、戦後からの常識から言えば、ドルというのはいちばん強いんだという神話があつた時代でしょう。それが揺らぎ出したのは、現象面で見れば一ドル三五オンス

の金のリンクを外したときね。あれはニクソンのときだったっけかな。それから、ベトナム戦争のボディブローが強くなってきた。アメリカの経済が本当にだめになったな、弱くなったな、これじゃアメリカの言うことを聞かなくちゃいかんなという思いになったのは、あとで私が外務審議官になったときはそういう感じはしました。

北岡 これはまだ次回にお話を伺うことにして、どうもありがとうございました。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第8回 —

開催日：1999年10月15日

15：40～17：40

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

■福田首相と大平首相の手法の違い

宮崎 最初に一年目という質問項目ですが、七八年と七九年に年をまたがったり逆になったりするような、記憶もはっきりしてないものですから、どっちがどっちだったか時々逸脱するかと思えます。

北岡 その前に、外務審議官はいつ頃からある制度なんですか。

股野 初代は島重信さんですか。

宮崎 そうですね。

北岡 比較的新しかったわけですね。そうすると、何代目になりますか。

股野 次官になる前に外務審議官というポストができて。

宮崎 それで二人になったんですね。

北岡 そのとき二人になったんですね。

宮崎 いや、牛場さんのときまでは一人。あとで二人になったわけですよ。

股野 森（治樹）、近藤晋一両氏。

宮崎 それから、法眼（晋作）・安川（壮）かな。

北岡 たしか私の記憶でも、宮崎大使は二人になってからまだあまり間もない、二、三代目ぐらいじゃないかと思っただけですか。これはだいたい両方一緒に代わるんですね。それともずれて代わるんですね。

宮崎 政治と経済、全然関係ないですよ。

北岡 いまはどうですか。

宮崎 いまもそうですね。一緒には代わらないですね。

北岡 意図的にずらしているんですね。まったく偶然ですか。

宮崎 意図的にじゃなくて、そのときの都合ですよ。

北岡 短ければ一年ですか。

宮崎 いや、一年の人はいないでしょう。普通は二年です。

経済担当をやる審議官はサミットの役割もあるものですから、少なくとも二年、二回やらないと卒業させないというようなしきりになっちゃったわけですね。

北岡 そうすると、経済担当の審議官ができたのはサミットが始まってからですか。

宮崎 いや、その前です。鶴見（清彦）さんがそうだった。

ここに質問はないけど、思い出そうとして考えてみたんだけど、外務審議官時代でも局長時代でも、自分で責任を持ってなんかしなくちゃいかんと思ってやったことは記憶に残っているんですけど、盲判をついていたこととか、どっちでもいいやとやっていたことは、あまり記憶に残ってないんです。というのは、外務審議官でも局長でも、一日にそれこそ何十件という案件を判断するわけでしょう。だから、年にすると大変な数があるんですね。もちろん継続しているのもあるんですけど。そうすると、これは自分がなんかしなくちゃいかんとか、国内でも米ソの首相と交渉しなくちゃいかんとか、対外的には自分が乗り出していかなくちゃいかんということは、わりと覚えていっているんです。やったことはね。それ以外のことは非常に記憶が薄らいでいるということに改めて。前からそうですね。

北岡 それはご記憶本位で。

宮崎 牛場さんという人は死ぬ直前まで日記を書いていたんですね。だから、「牛場日記」というのが出ると、とても面白いと思います。どうなったのか知らないけども。おそらくいちばん最後に近いときに会ったのは僕だと思っただけで、ボンで病院に入ったわけですね。僕は日記もつけてないものだから。

さて、最初はわりと大雑把な話で、福田（赳夫）さんと大平（正芳）さんの手法の違いは、私の印象を申し上げると、福田さんは頭脳明晰、言語明晰。自分自身に非常に自信を持っていた方で、何でも自分が率先してやるというか、自分のイニシアティブ

でものを動かそうとするタイプの総理だったんです。その系列の総理は、私の知っている限りでは、たとえば田中角栄さんがそうです。もっと前は池田勇人さんがそう。ところがそうでない、たとえば佐藤栄作なんて人はそういうことをやらないんです。「待ちの政治」ですからね。それから、三木「武夫」さんはもちろんやらないし、鈴木善幸なんていうのもやらないし、大平さんもどっちかといえば自分でひっぱっていくというようなタイプじゃなかった。

福田さんはそういう意味で能動的な方で、殊に経済については自信を持っておられた。主計局長をやられたわけでしょう。戦前にフィナンシャルアタシェで、ロンドンに駐在していた。サミットのときにその当時の経済の問題になって、何かのときに昔の話になって、福田さんが「俺はそのときいたんだ」と言ったらみんなシーンとして黙っちゃったというんですね。たしかにその時に、ロンドンにいたわけです。そういう方なんです。

私も非常に立派な首相だと思ってるんですけども、感心したほうを言うと、ボン・サミット（一九七八年）の前にアメリカの誰か偉い人が来たんです。総理官邸で福田さんと会合をしたときに、私はとにかくくっついていたわけです。そうしたら、当時ボン・サミットで問題になるんだけど、アメリカ側からたしか日本の成長率を高めてほしいという趣旨の発言があったんですね。そのときに福田さんは「これは異なることを承る」ということを言って（笑）。われわれのころは使う、親しみやすい表現ですけど、今はあんまり聞いたことないでしょう。要するにそれは「そんな話は聞く耳を持たん」という趣旨です。それで蹴飛ばしたというのが印象に残っています。福田さんにちょっと欠けていた点を二点だけいいますと、ひとつはボン・サミットに、ドイツのシュミット首相に会って中距離ミサイルについて話を聞いて「目から鱗が落ちた」というようなことを言われた、という

のが伝えられているでしょう。あれは非常にがっかりする発言ですよ。そういうことを、どうして防衛庁なり外務省がブリーフしてなかったんだと。一国の総理たるものが、そういうイッシュューについて、シュミットに言われて初めて目から鱗を落とすというのは何事であるか、ということを経個人的に感じたことがあるんです。

もうひとつは、非常にプロポーシオンを失したと思うのは、この前申し上げたハイジャッカーについてね。超法規的な措置とか「人命は地球より重い」というのは、私はアルジェリアでさんざん苦労したせいもあるんだけど、私は取らない一言なんです。

それから大平さんは、本人が哲学者なんです。非常に忙しいときでも、各局はいろんな調書を上げたりなんかしてくる。ブリーフしたりいろんな人と会ったりする、その時間の間のちょっと空いたときに飛び込んでいくと、調書じゃなくて本を読んでるんです。たいへんな読書家なんです。僕はあるとき、どういふふうにして本を選ぶのかといったら、もちろん書評なんかも読むけど、自分で虎の門の何とか書店に行って一度に一〇冊くらい手当たり次第買ってくるんだそうです。それで好きなやつを読んだり。それはわりと思想的な本が多いんです。

福田さんとはびきり頭がいい、頭脳明晰なんです。大平さんは決して明晰じゃないわけじゃないです。言語不明晰だという一般の評価になっているでしょう。「あーうー」というね。私はそうじゃないと思うんです。

ちなみに、頭脳明晰・言語明晰の福田さんみたいな人が学者の中にもいますけど、頭脳明晰・言語不明晰という人もいます。ね。東大の杉村章三郎という行政法の先生はまさにそうなんです。言語不明晰で講義を聞いていると本当に嫌になっちゃうんです。本を読むと、ちゃんときちんとしているんですね。東大の三バカ教授の一人と一部の学生が言っていたんです。私が言っていた

わけじゃないんだけど。あとの二人は、説によって違うんだけど、舞出長五郎という経済原論の先生。それから神川彦松という外交史。

政治家には、言語明晰・頭脳不明晰という人がたくさんいるんですよ(笑)。

大平さんは頭脳明晰・言語不明晰なような印象を与えたけども、決してそうじゃないと私は思います。というのは、「あーうー」と言うのは、言葉を選んでるんです。プレスだとか国会答弁のときにいちばんいい表現を使おうとしてやっているから「あーうー」になるんです。二人だけで話をする時は、決してそんなことはないです。実際にきばきとして、言語明晰なんですよ。

またタイプとしては、福田さんと違って全部自分でやるというのじゃなくて、いわゆる組織・官僚を活用するタイプですよ。だから、人を使うのがうまい。私は両方の個人代表をやったわけですから、シェルパというのは首脳自身のパーソナルプレゼンタイプでシェルパと首脳との間には誰もいないわけですよ。次官はほぼ同列なんでしょう、外務大臣とかほかの省の大臣がいるでしょう。それをすっ飛ばして直接ですから、個人で話をするので、特にその二人については印象が深いです。そういうこともあって、大平さんは特に人を使うのがうまいものだから。

また、よく何回も夜、私邸に行っただけです。ところが、玄関から入ると、私が行ったということが翌日の新聞に出ちゃうんですね。プレスの張り番——当番がいますから。そうすると、よその省の大臣やら何やらからいろいろと「何を話した。どうした」とうるさいものだから、いま代議士になっている大平さんの娘婿がいるでしょう。森田一氏の、つまり娘婿の家が大平さんの家の裏にあるんです。そこから入って細い塀を伝わっていくと大平邸に入れるんですよ。警護の人の案内で夜はそこから入って中に行ってやってきたんですけど、大平さんは、「君ねえ、これは難

しい問題だね。園田〔直〕に話しても分からないからね。君と二人でやるうよ」とか、そういうようなことで人使いがうまい。たしかに、園田さんに話したって全然分かってもらえないから、これはまったくその通りなんだけど(笑)。

そういうわけで、大平さんと福田さんは両方とも個人的にもたいへん違うし、やり方でもずいぶん違ったわけですよ。

北岡 福田さんのところには、私邸にはあまり行かれなかったですか。

宮崎 行かなかったです。時間が短かったし、福田さんはわりとドライなんですよね。あんまり早く話すと「ちょっと待てよ」とか言って。福田さんは頭がいいから、このくらい早く話しても大丈夫だと思って、トットトコ行っただけ(笑)。そんなようなことがあって。

ボン・サミットのとときかな、当時は特別機はなかったから日航機をチャーターして行くわけですが、みんな随員や何かがついていく。福田さんがよく飛行機の中で「おい、宮崎君」と言うんです。そうすると、三人立ち上がるんですよ。私がいちばん御用が多いんだけど、そのほかに宮崎勇という当時、経済企画庁の調整局長をやっていた。それからもう一人、国際金融局長をやっていた宮崎というのが後輩なだけで、東銀の副頭取かなにかになったのがあるんですよ。福田さんが「宮崎君」と言ったら三人で立ち上がるので、しようがないから、普通に「宮崎君」というと私のことで、勇のほうは「宮崎博士」と言う。それからもう一人は、福田さんが何といったか忘れちゃったけど、だから、その二人についてはいろいろほかにもいろいろエピソードがあるんですよ。

園田さんという人は元落下傘部隊の兵隊なんです。よくその話が出てくるんだけど、福田内閣で官房長官をやっていたわけですよ。ところが、官房長官を安倍〔晋太郎〕さんに取られちゃって、

横滑りで外務大臣になった。彼はすいぶんそのことを恨んでいたような感じがしました。

福田さんに誰かが「なぜ、園田を切らないんだ」といったら、「あれには悪いのがたくさんついていてからな」というような話をしたと間接的に聞いたんです。しかし、第一回目の外務大臣で来たときは、自分が何も知らないし分からんということが分かっていたものだから、ほとんど口出しをしないんですよね。だから、私もやりやすかったし。秘書官が佐藤行雄なんです。

股野 いまの国連大使ですね。

宮崎 秘書官がやってきて、もう少し園田さんにブリーフしてくれとやるんだけど、忙しくてめったに。ブリーフをしたことはしたんだけど、しても分かってもらえないことは期待しないで(笑)。二国間の会合の場合は、あらかじめブリーフしておく、とにかくいちおうやりとりは出来るわけです。やっぱり政治家としての勘があるんでしょう。だけど、多数国間の場合は、とてもじゃないけどどうにもならんという感じの人でした。

北岡 なぜ園田さんが外務大臣かと、私も当時ちょっと疑問に思ったことがあるんですけど、本人は外務大臣というポストに非常に興味があったんですか。

宮崎 いや、そうじゃなくて追い出されたんですよ。

北岡 ポストは、園田さんだったら農水省とか内政のほうが似合いますよ。園田さんだしたら農水省とか内政のほうが似合いますよ。

宮崎 僕が海外に行っているときに二回目の外務大臣をやったんですよ。そのときの話を聞くと、「二回目俺はよく分かっているんだ」というので、ずいぶん下の人が苦労したようですね。そのときは僕はいないから分からない。僕の場合は別に害はなかったわけです。やっぱり安倍さんは福田さんの腹心ですから、腹心を官房長官に置きたいということか。それで園田さんを出し出して、その場合に悪いポストだと左遷だとなるから、という

ことなんじゃないかと。これはまったく推測です。

北岡 まあ、そうでしょうね。園田さんは、福田さんが辛いときに福田さんのところへ駆けつけてくれた人ではあるんですけども、周りにいろいろ悪いのが切れなかったんでしょうね。

宮崎 もともとは河野派かな。河野派が二つに分かれて森派と中曾根派になって、その森派のほうなんですよね。

北岡 行動力はある人だったんでしょう(笑)。でも、二度もなったのには驚きましたね、あの頃おぼえてますけど。

■空前絶後の牛場対外経済相

宮崎 牛場さんは前にもお話ししたけども、戦争中は枢軸派で戦後、外務省をやめた人で、それが復活してきた、カラツとした人なんですよね。頭がともいいんですよ。なぜ枢軸派になったのかよく分からないんだけど、もっともあのときの雰囲気若いと枢軸派になった人が多いわけですからね。とにかく対外経済相というのになったのは、福田さんの高等学校の後輩かな、何かで一緒だったんですよね。それで福田さんの強いひきでなつたわけ、つまり福田さんが自分が使おうということでしたわけです。初めてですよ。

牛場さんという人は非常に頭がいいから、インプットが非常にやりやすいんです。アウトプットが大きい。対外経済相をどのように見るかということなんだけど、牛場さんは非常に適材適所でよかったという感じがするんですが、妙な人がなると非常に困るポストなんですよね。というのは、いま日本は対外的な、閣僚が出なくちゃいけない会合がたくさんあるにも関わらず、国会にしなければ出られないでしょう。それを自由に飛んで出られる人が必要なんですよね。それが対外経済相であれば、外との関係は非常にいいわけですよ。その代わりというか、ずっと松永(信雄)

が政府代表というのでやっていて、松永が毎回記録を寄越してくるのね。だから、ずいぶんよくやっていると思うんですよ。牛場さんも対外的には非常にいろいろやったんだけど、何しろ対外経済相がこういうふうにはポコンと任命されて、党内の基盤がないわけでしょう。国内の政治力がないから、国内を動かすことが出来ないですよ。その点が非常に問題で。牛場さんの場合は、要するに福田さんという非常に強力なバックアップがあったから務めを果たせられたということ、宮沢〔喜一〕さんとわりと仲がよくて、当時、経企庁長官だったと思いますが、よく組んでやっていたわけです。

ただ、変な人が来ると非常に困ると思うのは、皆様方ご存じだと思っただけ、対外関係、外交というのは、それこそずっと昔からの何十年、場合によっては何百年にわたるいろんな経緯があるわけでしょう。条約とかなんかのネットワークがたくさん雁字搦めになっているわけですよ。それを急に思いつきで何か言われても、非常に困るわけです。それを変えようというのはもちろんひとつの識見だけでも、変えるためには総理をはじめ内閣全体がそっちのほうに向かわなくちゃいかんし、世論もあるしね。それを、自分になったときに何か手柄を立てようということでもやられたのでは、とてもかなわんという気がするんです。そういう人がなるんだったら、ならないほうがむしろ私には思います。

ちなみに、当時オーストラリアから「サミットに豪州を入れてくれ」という話があったわけです。私のところにも来たんだけど、とてもダメだといって断ったんです。ところが、園田さんは向こうに行って、当時のオーストラリアの首相が何か言われて「やりましょう」と言っちゃったわけです。それで日本に帰ってきてから「やってくれ」という話があって、それはとてもだめだと思ったんだけど、とにかく外務大臣が向こうの誰かにコミットしたからやらないわけにはいかないの、いろいろ根回しをそれと

なくやったんだけど、どことして賛成する国はないんですよ。当然のことだと思うんだけど。たとえば、イギリスあたりは「うん」と言うんじゃないかという気がして。イギリスは「俺がノー」といったからダメだという恰好には絶対にしたくない。俺がノーと言わないで、おまえのところでもノーにしてくれ」ということですよ。アメリカもほぼ同様で、要するに話しかけてみたらみんなノーだったという恰好ではなくて、その前におまえのところでも止めてくれという、当然予期されたようなことなんです。ずいぶん苦労したんだけど、それは園田さんが一言、向こうで言ったためにそういうことになって、そんなものは出来っこないわけですね。GNPから言っても貿易量から言っても何から言ってもね。そういうことをやられると非常に困るという問題があるので、対外経済相もそういう面があるわけです。

北岡 それは東京でやるときに呼びたいということだったわけですね。

宮崎 そういうことだったでしょうね。

北岡 たとえばヨーロッパのほうでやっていたときも、最初はイタリアとかは入っていませんでしたか。

宮崎 そうそう。あれはジスカール・デスタンが強引に入れたわけです。日本はあんまり賛成でなかったんだけど。というのは、当時イタリアが国内の政局が共産党内閣が出来そうになって、放っておくとすぐになると。だから、ここに入れることによってそれを防ぐんだ、ぜひ目をつぶってくれといわれて、目をつぶったわけです。その次、アメリカがやったときには、アメリカは強引にカナダを入れたわけです。だから、日本でやるときに豪州を入れてくれという。ただ、カナダと豪州との間の経済力は数字を見ると非常に……豪州はオランダと同じようなものですね。

北岡 人口が少ないですからね。二〇〇〇万ないですから。

宮崎 それは対外経済相じゃなくて一般論ですが。

北岡 対外経済相というのは、牛場さん以外ないですね。

宮崎 ないです。空前絶後。

北岡 このときは、牛場さんが任命されたときは、やっぱり驚かれましたか。

宮崎 いや、驚きませんでした。牛場さんであるせいもあるんだけども、非常にうまくいったんですよ。牛場さんとは分業関係が非常にはっきりしていて、牛場さんは僕がやっていることをまったく一言もインターヴィューしないし、僕も牛場さんのところにはOKを貰いに行ったことはないしね。ただ、よく会って話しましたけどね。

北岡 そのときの外務大臣が園田さんですか。

宮崎 そうです。園田さんはまったくだめだからね。

北岡 うまくいく特別の理由があるわけですね(笑)。宮崎大使と牛場さんが非常にいい関係で、ちょっとダメな外務大臣がいて。これはなまじ有能な人が外務大臣だったら難しかったかもしれないですね(笑)。

宮崎 難しかったでしょうね。まず牛場さんとぶつかったでしょうね。牛場さんが日米の関係でアメリカに行くときに、福田さんかなんかのところで打ち合わせてそういうふうになった。園田さんは自分で行きかけたんじゃないかと思うんだけど、新聞記者に「まず牛場を斥候に出し……」とかなんとか言っていていたんです(笑)。とにかく仕事も、このあとに出てくる日米貿易摩擦問題を牛場さんがほとんど引き受けたという感じなんです。アメリカで牛場・ストラウス会談が何回も行われました。だから、私はほとんどタッチしなかった。牛場さんの下に経済局長の手島(冷志)君がついて、手島君はフウフウ言っていましたけどね。牛場さんも時々、なんとかかかんとか文句を言っていましたけど。そっちがくっついちゃって、僕は書類に盲判を押すだけで、牛場

さんがやっているからインターヴィューする必要はないんですね。という恰好で、逆にサミットやなんかについては一切干渉してこないし、僕がいろいろ他のことをやったけど全然関係ないような恰好で。大先輩なんだけど、よく僕のオフィスにみえてました。

北岡 牛場さんの対外問題経済特別大臣のオフィスはどこにありましたか。

宮崎 四階の幹部会室というね、外務省の中です。

北岡 外務省の経済局やなんかがその下にくっついて、大臣がもう一人いるようなものですね。

宮崎 そういうことですね。外務大臣だと思えばいいわけですかね。園田さんは全然すつとばすという(笑)。

北岡 たしか、空前絶後でしたし、ひとつ余分な大臣をつくるために他は誰か兼任しなくちゃいけないんですよ。

宮崎 そうそう。牛場さんと一緒にやったのはいくつもあるんだけども、EC関係で、どういうわけか僕はかんでいたわけですよ。ハーフェルカンブというECの対外経済の関係の委員と、デマンという対外総局長がやってきたわけですよ。それで牛場さんと僕が、まだ誰かいたかもしれないけど。ところが、ハーフェルカンブというのはドイツ人で、デマンというのはイギリス人なんだけど、とつてもドイツ語がうまいんです。牛場さんもドイツ語がうまいんですよ。牛場さんは英語もうまいけど、英語よりもドイツ語のほうがうまいんじゃないかな。途中からドイツ語になっちゃって、脇にいる人はみんな困っているわけだ。僕はいいいんだけど。だから、四人は分かるわけですよ(笑)。しかし、そうなる困るのは、何があったかということ僕は人あとで話さなくちゃいけないんですね。これが面倒臭かった(笑)。

北岡 そういう時は普通、誰かがノートを取っているわけですか。

宮崎 取っているわけですよ。

北岡 その人は困りますね(笑)。

宮崎 とにかく牛場・ハーフェルカンパ会談で一種の合意が出来て、ECとの関係が一段落するわけで、それをコミュニケーションケかにかに出したわけです。そのときは僕はつきあっていただけでも、内容はあんまりよく覚えてません。

それから、中国問題は盲判を押しました(笑)。だから、あんまり記憶してない。記憶しているのはつまらんことだけど、これまた七八年〜七九年、大平総理に付いて中国に行ったことがあるんですよ。中国の迎賓館みたいところに泊まって、僕は格の上でして次席ですから。向こうと話をしたんだけど、ところがこれを誰かにやらせていたから何を話したか記憶がないんですよ(笑)。ただ記憶があるのは、飯がまずいということね。

というのは、最初に国交正常化の直後にミッションで行ったときは大使館もなく、向こうでホテルに泊まって交渉したという話をしたでしょう。そのときは飯がうまかったんですよ。ところが、迎賓館に行ったときの飯は……。通の人に聞いたら、コックがいなくなったというのね。文革が進んじやってコックのいいのが、逃げられるのは香港とか台湾とか日本に来て、残ったのはろくなのがないという説がひとつ。それから、悪平等みたいなんだよね。いいコックだからいちばんいい迎賓館のコックをしようというのじゃなくて、順繰りかなんかなでしようね。

全然話が違うんだけど、在外国大使はお互い同士、呼んだり呼ばれたりするでしょう。アルジェリアの中国大使に呼ばれたんですよね。こっちも呼んだんだけど呼ばれたから、あそこは豚が食えないし、中国料理店がない、支那飯がないということを書いてみました。だから、きょうはうまい飯が食えるなと思って飯を食うのを楽しみにして行ったら、まずいんですよ。聞いてみたら、コンパウンドみたいところに全員大使以下入ってあって、コックが四人いて、その四人がコンパウンドに入っている全員に

代わりばんこに飯を出すらしいんですね。だから、お客さんが来ようが来まいが、順番に当たった奴が作るわけで、これがまずいんです。それと、迎賓館で食った飯がまずいというので、どうも革命というのはよくないなと(笑)。

北岡 アルジェリアで、やっぱり中国大使館で豚なしで作っているわけですか。

宮崎 豚はあったよ。その豚は外交特権で。

北岡 そうでしょうね。中国人は豚肉なしではなかなか難しいでしょう。

宮崎 買ってきたの。豚はありましたよ。というのは、僕のもフランスで豚を買ってきたのです。飛行場地下のスーパで、ハム、ソーセージ、ベーコンを含め豚関係食品をボストンバッグに詰め込んで。CIECの議長の帰りに、毎回たくさん。ただ、使用人は嫌がっていじらないですよ。だから、豚を入れる冷蔵庫とそうでない冷蔵庫を分けておかないとダメ。

北岡 なるほど。

■サミットを支えるシエルパの体制

宮崎 それから、サミットが体制的にも整ってきたという話をします。

あとで思い出したんだけど、ロンドン・サミット(一九七七年)のときはシエルパ的なものがあったようですね。そのシエルパ的な者が準備して紙を作ったわけですよ。長い紙を作った。ところがそのときのイギリス首相キャラハンは、キャラハンだけじゃないんですよけど、そのとき集まったシユミットやなんかもそうだと思うんだけど、シエルパ的な者が作った紙が全然気に入らなくて「こんなものダメだ」と言って、突っ返すんじゃないかって自分たちで書こうというって、サミットに出ている人たちが自分

たちで書き出したらしいんです。そうしたら、シエルパ的な者が非常に怒って、俺たちはそれこそ何カ月もかかってお互いの国の……。というのは、短いものを作るって難しいんですよ。長いものを作ると、たとえばフランスの主張はここに入る、日本の主張はここに入る、その代わりドイツの主張をここに入れるなんていうバランスが取れているわけでしょう。それを崩しちゃって、別のものを首脳が作るのは困るといふ猛烈な反発があって、その結果、紙が二つ出たんです。ロンドン・サミットだけです。

ダウニング街首脳会議宣言というのと、ダウニング街首脳会議宣言付属文書というのがあるんですよ。付属文書というのがもつと長くて、シエルパと言ったかどうか知らないけど、それが作った紙なんですよね。長いほうには議題も全部、その当時の議題の定番であったマクロの話から貿易から、エネルギーから南北関係まで出ているわけ。相当長いんですよ。ところが、首脳宣言は非常に短いわけです。それからカバレッジも少ないわけね。そういうような経緯があって、これはサミティアーズとサミットクラットの喧嘩だと言って、私にその時は関係ないんだけど、そういう話だったそうです。

北岡 日本はどなたですか。

宮崎 吉野〔文六〕さんですね。吉野さんはあまりそういうことを口伝しないほうで、あの人は大局を見たり発想法はいいんだけど、事務的なことを口伝する人じゃないから任せたんでしょ、きつと。

北岡 このときの付属文は一応あることはあるわけですか。

宮崎 だから、ここに出ているんです。

北岡 その拘束力はどうなるわけですか。

宮崎 もともとこれは条約じゃないですから、あまり本質的には、政治的には有効でしょうね。つまり、ここにしか入っていない国の主張が、持って帰って「ここに入れたんだ」というこ

とを国内で言えるようになっていくわけですから。

北岡 だから、二段階出来ちゃったわけですね。短い首脳サミティアーズの文書とサミットクラットの文書と。

宮崎 そうそう。だから、そういう経緯があったのをちょっと思い出したわけです。そういう文書を作ることについて、当時サンファン〔サミット、一九七六年〕のあとでしょう。サンファンでうまくいかなくて、それで事務的に作るということになったわけでしょう。ところが、ボン・サミット〔一九七八年〕のあとだったか前だったか、米英独仏四か国のグアドループの会合というのがあったわけです〔一九七九年〕。ちょっと年代は忘れましたけど、これもジスカール・デスタンがイニシアティブを取って、ベルリン問題とか東西関係を議論するというので四か国だけで集まったわけです。

ちなみに東西関係を議論すると、いつもそうなんですけど、ベルリン問題を議論するということになると日本は入らないんですよ。ベルリンの町は、あとで条約ができるまですいぶん長い間、法律的には四か国の統治下にあったわけです。だから、ベルリンの市長さんは四か国の下にあったわけです。「シュッツ・メヒテ」と言っていましたけどね。だから、ベルリン問題を議論することになると、ソ連を別にすれば米英仏だけなんですよね。それにドイツが関連するからドイツも入れるというので四か国という話を、都合のいいときは時々それを持ち出したんだけど、グアドループの会合があったときの失敗だったということは、おそろしくま一般的に認められていると思うんですよ。

というのは、あれはそれこそ書齋みたいなところで首脳だけが集まって話をする、それがいちばん大事なんだということをよくいろんな首脳が言うんだけど、グアドループはまさにそういう恰好だったわけです。したがって、合意された文書がないわけですよ。何を話したか、結局四通り出てきちゃって全然分らないわ

けですよ。ただ、ひとつだけはっきりしているのは、トルコに対する援助をやらなくちゃいかんということ。つまり、NATOの南翼のトルコを何とかしなくちゃいかん。非常に窮地にあるので、それに対して援助をしなくちゃいかんということだけは、四か国ともみんな認めた結論だったわけです。

そのアフターアウンスがあって、どういうわけで僕が行ったのか忘れちゃったけど、園田さんと一緒にドイツへ行ったときにドイツの外務大臣から、「グアドループの話はこうで、トルコに対する援助をやることになった。ついでには日本もぜひ参加してくれ」ということで話があったわけです。そのとき園田さんを唯一立派だと思ったのは「そんな話は聞けません」ということを即座に言ったことね(笑)。「よそで決めたことを日本も乗れというのはおかしい」と言って断ったわけです。ドイツが日本に頼む役割になったらいいですね。そのあとでずいぶんドイツから人が説得に來たりして、結局、なにがしかでお付き合いましたんです。しかし、そのときのグアドループは文書がない。

コミュニケとか何とかがついているのは、それぞれ国に持って帰って自分の主張がこういうふうに入ったとか何とかいうことを説明する面があるわけです。したがって、ロンドン・サミットは、付属文書のほうには少なくとも各国の言い分が全部通っているはずですよ。だから、首脳の文書のほうは、首脳がぼんやりしてれば何も入らないわけ(笑)。そういうことで、ボンのサミットのときはロンドンのに懲りてきちんとやりましょうということになって、シェルパが非常に確立したわけです。そういう意味で私は、いろいろ労の多いシェルパの初代だったわけです。

ちなみに、コミュニケとか、サミットのあとに必ず宣言とかが出るでしょう。こういうのをつくるのは、日本人は非常に下手なんです。というのは、役所でもこうやって文書を作る、発表文を作ったりなんかするのは、課長ないしそれ以下の仕事

だって。局長はそんなものに手をつけるべきじゃないということ。を、よその省なんかはよく言うんです。アメリカも若干そういう気配があるんだけど、ヨーロッパのほうはそれこそ立派な文書を作るドラフターじゃなければ、いちばん上まで上がれないという、むしろそういう恰好で。たとえばジスカール・デスタンなんていうのは、あとで東京サミットのときに私は直接話をしたんだけど、大変なドラフターですよ。しかも英語で。それからシュミットもそうです。コールはそうでもないけども。アメリカの大統領はそういう訓練をあまり受けてないので、どっちかといえば。それから、トップの官僚から閣僚から首脳まで、ここを直したほうがいいとかやるのは得意なんです。日本だとエンピツなめるのは課長以下だということ。いまだかつて、日本で首脳でこんなことが出来る人はいないでしょう。おそろくないと思いますよ。

北岡 宮沢さんとかはダメなんですか。

宮崎 宮沢さんは、私が案を三つぐらい作って渡しただけ。言う機会がなかったんですね。だけど、宮沢さんはバイの交渉はとてもうまいですよ。マルティの会合は慣れてないですよ。マルティの会合はタイミングだとか、どういうときにどういう人と組んで発言するかというの別の問題ですから、言葉の問題じゃなくて、そういうことでサミットは、首脳だけの話になると、日本にとつて具合の悪いものなんです。

そこで一所懸命、ボン・サミットの前かな、私が苦労苦心惨憺していたら、ある有名な大蔵省のOBの次官を長い間やった男が、「おまえ、いつまでそんな過保護ママみたいなことをやっているんだ」と(笑)。「受験準備までいいけど、試験場に行ったら本人にやらせる以外ないじゃないか」と。だけど、過保護ママじゃないんだけど、本当にどうなるかわからないという。というのは、通訳付きで第三項の三行をこう直すなんていったって、絶対にそれは通訳を通してフォローできないですよ。ドラフティングに

なったら、日本はアウトだと思わなくちゃいけない。つまり、首脳レベルのドラフティングをやったら絶対アウトですよ。だから、それまでに日本の主張を全部この中に突っ込んでおかないと、ちゃいけないわけ。それが、シェルパないしそれ以外の補佐する人のいちばんの苦勞ですよ。

北岡 そういうわけで日本に、宮崎大使のような有能なシェルパが必要だとよく分かるんですけど、他の国にとってのシェルパの重みはどんなものなんでしょう。

宮崎 それは時代によって違うんですけどね。

北岡 アメリカは必要なのかもしれませんが(笑)。

宮崎 アメリカは、私のときはヘンリー・オーエンという、カーターの側近です。チャキチャキした男。フランスはベルナル・クラピエと言って、フランス銀行、つまりフランスの中央銀行ね、日本の日銀みたいなものの総裁なんです。その人は、どこかの大学でジスカールの一年上か何かで、ジスカールとはとても仲がいいんだそうです。それがシェルパになってやってきた。それからイギリスは、ハント、内閣の書記官長みたいな人。セクレタリー・オブ・ザ・キャビネットという日本の戦前の書記官長みたいな人ね。官僚の一番偉い人ですよ。そのあとサーなんとかになった人です。

北岡 だいたい分かります。

宮崎 ドイツはピーター・ヒースと言って、ベルリンのブンデスバンクの総裁。そんなのが私のカウンターパートになるわけ。

北岡 銀行が多いですね。わりあい。

宮崎 そうですね。だけど、それは当時のシュミットに近かった側近でしょう。だいたい側近を持ってくるんですよ。しかし、彼らも初めてなものだから、いろんなことがあったんです。

それで、ボン・サミットなんですけど、三木さんと福田さんは全然比較にならないから話は省きます。

北岡 それはそうですね(笑)。

■ボン・サミットでの日独機関車論

宮崎 「ボン・サミットが開かれた」当時の経済のバックグラウンドを思い起こしていただくことが必要なんですけど、そういうのは外交史というか政治史ではあまりやらないですか。これはまた余談になって申し訳ないけど、キッシンジャーの名著『ピース・レストアド』だったっけな。「メッテルニッヒとキャッスルレイ」っていう副題がついた。あれを読んでみても、いかにメッテルニッヒが活躍したかと、外交的な手を打ってどうこうした、それにキャッスルレイというのはまたどうしたというのがよく分かるんですけど、その当時の経済情勢とか社会情勢とか、あるいは国内の世論とか国内の力関係が全然、捨象されているでしょう。そのあとでメッテルニッヒは、国内問題で首相をクビになるんですね。だから、外交史というのはこういうものかと思うんですけど、私に言わせると、そういうことを抜きにして外交史は語れないんじゃないかと。

北岡 それはその通りです。

宮崎 キッシンジャーに対する批判ですよ。

北岡 キッシンジャーはそれを抽象して、彼は歴史と理論と両方かかっていったので、そういうものになっているんじゃないかな。純然たる歴史だと、やっぱりあれはおかしいと思います。

宮崎 だから、ボン・サミットのときの当時の経済情勢は、非常に大事なわけですよ。そのときのいちばんの問題は、マクロの経済政策なんです。そこで問題になったのは機関車論なんです。日本とドイツが機関車になって世界経済をひっぱってくれという議論が非常に強かった時期なんです。それについては、その前のOECDの閣僚理事会とかいろいろところでいろんな議論がある

わけです。ちなみに、マクロの経済政策は必ずサミットの議題になるわけですね。それが無いサミットはないわけです。それに就いてはあとで別のときに申したほうがいいのかもしれないけど、OECDがそれに対してどう対処するかということが、OECDのほうでも大変な議論になってね。私はシエルパのときにヴァン・レネツプというOECDの総長と何回も議論したんだけど、閣僚理事会をサミットの前に開くのがいいか、あとに開くのがいいのかということについて、私はOECDが何か役割を果たすならサミットの前に開くべきだということを言って、そうだったわけです。というのは、サミットの前に開いて、OECDというのはひとつのたいへん大きな国際的なシンクタンクみたいなもので、閣僚理事会で世界経済についてのひとつの見解を作るわけです。それをサミットにインプットするほうがいいだろうというので、そういうことになりかけていたか、なっていた時期なんです。OECDでもその議論があったわけです。日独機関車論に対してどう対処するか、というのが。これは、理論的にも機関車だけで走っても、後ろの車が脱線したら動かないじゃないかと、いろんな議論があったんだけど、とにかくそういうことが。つまり、首脳レベルでも分かる問題ですよ。また、首脳レベルじゃないと解決がつかないということで、そういうのがサミットの本当の議題になるわけです。

そこで、シエルパの間で議論したときに、これだけはどうしても妥協がつかないわけです。私もとても機関車論で日本のGNPを何パーセントあげるとかコミットできないし、コミットしたら国内で大変な手を打たなくちゃいけません。役所はもちろんのこと、役所以外に打たなくちゃいけない。独断専行は好きなんだけれども(笑)、そんなものほどもやれたものじゃないでしょう。それで非常に強く反対して、ドイツも強く反対していたわけです。ドイツはシエルパ会議の議長なんだけれども、した

がってシエルパの会合の議論は、最大の問題はそこだったわけですね。

北岡 この問題は、その前の年にも議論にはなったと聞いています。

宮崎 ロンドンですか。それはそうかもしれませんが、私はよく知りません。ただ、覚えてないんじゃないかと知らないんです。アルジェリアに行ってみましたから。

股野 一昨日、私はシュミットの話、いま東京に来ているものですから聞く機会がありまして、話のテーマは円とドルとユーロの将来ということだったんです。たまたまシュミットさんがロンドン・サミットの話に触れられまして、懐かしそうにロンドン・サミットで実はローコモタイプ論というのが出た、ということを言われましたですね。

宮崎 ロンドン・サミットでは、それに対する結論は出ていないでしょう。

股野 はい。ただ、あそこでローコモタイプという話が出始めまして、ということでした。そこでエネルギーのほうが大きなあれだったんですけれども、ローコモタイプという議論がロンドンであったということをおられました。やっぱりあそこへんで始まっているんですね。

北岡 だから、コミットメントになったのはこのボンのあとですね。

宮崎 まあ、そこだけじゃなくて、OECDでもそれが一般のジャーナリズムという……。

北岡 国別でいうと、この議論を強く言ったのはどこでしょう。

宮崎 それはアメリカですよ。

北岡 アメリカもやや高めに成長するという含みもありましたか。

宮崎 いや、そのときはなかったですね。

北岡 そのときは日独だけですか。よそにやらせようということ

ですか(笑)。

宮崎 だから、ボン・サミットのシエルパの会合でも、日米独の議論がもう圧倒的に多いわけです。それで、英仏はインターヴィーンにする余地がないんですね。というのは、GNPからいって米日独の順で圧倒的に多いわけでしょう。英仏なんか二つ足したって日本に及ばないぐらい。それから、日本は成長率も高かったし、石油危機を乗り切ってきたでしょう。この前、なぜ日本がランブイエに招かれたかというお話があったけど、少なくとも経済問題は日本なしに議論はできないと。東西問題は別ですよ。

それはいいんだけど、ところが福田さんは私に対してそういう状況だったものだから、「日米独の首脳会合をおまえ、アレンジせい」と命令されて、僕は「それはとても出来ない。そんなことは政治的に見て不可能だ」と直言したら、「それじゃあ、おまえのレベルでやれ」と。「おまえがアメリカとドイツのシエルパを呼んで会合を開いて、いまいったような問題をはじめ、なんとか解決の目処をつけろ」という趣旨だったわけです。

そこで、それもとて出来ないと思っただけけれども、その場で直接断るわけにいかなくて、ワシントンに行ってみずアメリカに相談したわけです。そのときアメリカは、いくらかわかったような顔はして、少なくともニュートラルだったんですね。ところが、その会談を終えて翌々日かな、飛行場まで電話をかけてきました。「あれはやっぱり無理だ」と言ってくるんです。で、どうしたんだといったら、やっぱり例によってイギリスのハント、当時のセクレタリー・オブ・ザ・キャビネットは地位からいっても非常に偉いわけです。官房長官みたいなもの。それに電話したらいいんだな。そうしたら「無理だ」と言って。イギリスに電話するというのは、おまえは抜かすということを了解を得るつもりかどうか知らないけど、とにかくそういうことでダメだという話を飛行場までしてきて。

それで日本に帰ったら、机の上にフランスから電報が来てましたね。「あなたが今度、シエルパの会合の飯をごちそうするような話をチラッと聞いたんだけど、その次はパリでのシエルパの会食をぜひ俺にやらせてくれ」ということがフランスから来ているんですね。だから、イギリスヘメッセージがいつて、イギリスからフランスへ行行って、そういうことがタタターッと来るわけです。それはやっぱりアメリカとヨーロッパのつながりとか、アメリカとイギリスとフランスのつながり、そういうことを考えると、日米独はたしかにでかいし、私も申し上げたようにその通りなんだけれども、そういう会合をやるといことはまた別の要素が働いたということなんです。ということで、福田総理にも話をして承を得たということなんです。

ボンでの議論はもちろんロミュニケに書いてあるように、マクローの経済はもう圧倒的に重要で、それから通貨、貿易、エネルギー、もちろん南北問題も書いてあるわけです。そういうふうな、ロンドン・サミットのシエルパが作ったやつにも南北問題がちゃんと書いてあるんだけど、議論された形跡は絶無ですよ(笑)。

北岡 毎回同じようなことを?

宮崎 まあ、似たようなことだけど、それは少しは違う仕事。違ったように新しい文章を書くわけです。そのためにいるわけですから。

結局、いまの機関車論に関する問題は、とてもシエルパのレベルでは解決がつかなくて、直接ボンに行ったわけです。ボンでもアメリカ大統領の直接の圧力にも関わらず、福田さんは相当強くなばって抵抗していたわけです。ところが、最後の最後になってシュミットが降りるとい話になって、降り方は忘れちゃったけど、ボン・サミットの宣言に書いてあるでしょう。ドイツのコミットに具体的に書いてあるんです。

北岡 ドイツが先に降りたんですか。

宮崎 いや、降りたというか、降りるのは一緒なんですけど、降りるといふ情報が入ってきたわけですよ。降りそうだといいね。

「ドイツ代表団は経済的均衡の世界的な攪乱を回避することに資するため、八月末までに立法府に対して需要を著しく拡大し、成長率を高めることを意図した国民総生産のパーセントまでに相当する、数量的に相当大きな追加措置を提案する旨、表明した。云々」とあるわけです。だから、議会に出すということね。GNPのパーセント。それが伝わってきて、すると日本だけになっちゃうわけですよ。それで、福田さんも日本に電話をかけたかなんかしたようだけれども、さっき自分のイニシアティブでやるということを行いましたけど、福田さんのイニシアティブで日本も降りたわけですよ。それが、「実質成長率について内需拡大を中心として、前年度実績を約一・五パーセント、ポイント上回る目標を決定し、その達成に努力していることに言及し、必要ならば適切な措置を取り、その目標を実現したいとの決意を表明した。総理は八月または九月に追加措置が必要かどうか決定するであろう」分かったような分からないような話なんだけれど、しかしとにかく数字が出ているんですよ。一・五パーセント。「これは異なることを承る」、承っちゃったわけですよ。

ちなみに、ボンの宣言を見ると、その中にアメリカはどうする、フランスはどうする、イギリスはどうするって書いてあるんですよ。それはシエルパ族の知恵で、そうすることによって日本だけやったんじゃないという恰好をつけるために。だけど、他の国もアメリカももっともらしいことを書いています。フランスにしても、イタリーまで書いています。だけど、その目玉は日独なんです。わけの分からないシミュレーションにみんながコミットすることになったから日本もやっただとって、そういうふうにごまかしも出来るわけなんだけれども、実質はそういう

ことであって、福田さんの結論で、福田さんはまた国内に帰ってそういう方向に行ったものですから、その結果、赤字国債を出すことになったんです。だから、政策の大転換ですよ。これは福田さんの結論で、私ではないわけですよ（笑）。これは私の権限をまったく越えた問題なわけです。

北岡 私の記憶では、ドイツという国はインフレに対するアレルギーが非常に強い国なので、こういう余分なコミットメントということには非常に抵抗して、むしろ日本のほうが先に降りたのかと。

宮崎 いやいや、そうじゃないですよ。それと同時に、ドイツは当時はシュツツ・メヒテの、アメリカに対する政治的な借りがものすごく多いでしょう。ずっとあとに出てくる、それこそ福田さんがシュミットに言われて目から鱗が落ちたという問題（「ミサイル問題」）が、ドイツにおける最大の問題ですからね。

北岡 なるほどね。それでアメリカに対して非常に弱い立場だったわけですね。

宮崎 日本は、ドイツが降りたら一人だけがんばるといふわけにはいかん。

北岡 それはちょっと難しいでしょうね。

前後いたしますが、このへんで私が大変興味があるのは、政策大転換とまさにおっしゃったとおり、このときに福田さんがコミットしたことは、大平さんが福田さんのこのコミットはよくないと、大平さんが福田再選にチャレンジした大きな理由のひとつになったのではないかと思っっているんですけど、いかがでしょうか。

宮崎 それは大平さんがそういうことを言ったかもしれないけど、実質的にそれにチャレンジしたわけじゃないことは、その後の経緯を見れば分かるでしょう。

北岡 ああ、そうですね。ただ、総裁選はもともと福田、大平密

約説というのがありまして、一期二年で代わるという約束があって、それがボン・サミットの年の秋の総裁選挙だったわけですね。そのときに少なくとも大平さんの選挙声明を出しますよね。あるいは、こんな政策でやると。その中には、福田さんのときのコミットに対する若干の批判はあったように……。

宮崎 もちろんそうでしょう。というのは、福田さんが思い切ってやらざるを得なかった国際的な雰囲気で決めたわけでしょう。福田さんも、そういうことはやる気がなかったわけです。だから、国内ではさうとう無理なんですよ。当時の国内の世論の根回しもなかったし、国内に対する党だとか各省を含めた準備はなかったわけですよ。

北岡 サミットの現場に行ってから、本当に最後のほうで決まったんですね。そうすると、当時は大平さんは幹事長ですよ。大蔵大臣はどなたでしたか。

宮崎 誰だったかな。

佐道 村山達雄。

宮崎 あんまり影が薄くて覚えてないですけどね。

北岡 とにかく国内体制もさうとう無理のある決定だったわけですね。

宮崎 そうそう。つまり、そういうことを考えてなかったわけですよ。というのは実際上、当時、赤字国債を出さないと達成できないような目標であったわけですよ。

北岡 ええ。だから、日本の政治だと、そのあとは仮に誰がなくても、だいたい国際コミットメントをいちおう守ろうという姿勢を貫くと思いますけども、したこと自体はいろいろ議論になったと思います。

それから私が覚えているのは、サミットよりちょっとあとなんですけど、大平か福田かという争いになったときに、牛場さんがどこかで「福田さんがぜひ再選されるべきだ」ということをテレ

ビかなんかで言っておられたのを覚えています。外国の信頼が非常に高い、厚いということを書いておられて、特にそれはこのコミットに関係していると思うんですけども、日本の福田さんの当時のよそからの評判とか信頼とか、どうだったんでしょうか。

宮崎 福田さんは頭脳明晰・言語明晰ですから、非常に外国人に分かりやすいプレゼンテーションをしたし、言ってきたわけですから、信頼度はあったと思うんです。他方、大平さんはその前に外務大臣、大蔵大臣をやっているけど、それほどライムライトを浴びたわけじゃないし、余所の人は知っている人は知っているけど、知ってない人は知ってない。だから、福田さんはもちろん総理でもあるから余計知られているということは確かにあったと思いますよ。

北岡 福田さんが自分で言っていましたね。「世界が福田、福田と呼んでいる」とかなんとか言って総裁選に出ましたね(笑)。しかし、これは事後処理が大変だったでしょうね。

宮崎 大変だったんですよ。しかしこれは私のところに批判はこなかったです(笑)。私の一存で出来ることではないですから、ほかの文書を書くのはともかくとして、こういったようなことはもちろん福田さんが決めたあとは文書を整理するのはお手伝いしましたけどね。

北岡 事後的には機関車論というのは効果があったんだろうかどうだろうかという議論がありますけども、あったんでしょうか。

宮崎 つまり、日本とドイツがとにかく拡大成長政策を取るということで、アメリカがなんて書いてあったか忘れたけど、ここに書いてあったこととは別に、アメリカの政策もややそれと同調するものをやったわけですね。世界経済回復したと。機関車だけでやったというわけじゃないけども、そういうムードが出来たということはたしかですね。つまり、こういうことになったので世界的に何かしなくちゃいかんというムードが出来て、それがなんと

はなしにそっちのほうに行っちゃったということはあると思いますよ。

北岡 純数量的な計算では何か研究があったと思うんですけど、純数量的な分析ではこれが効果があったかどうか疑わしいんですけども、サイコロジカルな要素はあったんでしょうね。

宮崎 そうそう。それは公定歩合を上げたり下げたりするかどうかということを非常に理論的には問題だけど、公定歩合というのはいたいサイコロジカルな面が多いですからね(笑)。それと似たような意味で、サミットでここまで議論してこうなったんだということが大きなインパクトを与えたと思うんです。

北岡 全体に福田さんの決断を、大使はどう評価されておられるんですか。

宮崎 これはやっぱりしようがないなと思ったんです。ここまで来たらね。

北岡 日本の経済に悪影響はあったんでしょうか。

宮崎 その直後にはなかったですね。ただ、そのときに赤字国債を出さないという方針を緩めたために、その後けじめがつかなくなっただけというような意味ではね。つまり、それ自体じゃないですよ。それから福田内閣自体で出した国債は大したことはないんだけど、それまで出さなかったががんばっていたのが出すようになったという意味では、悪影響があったでしょうね。

■ シェルパの役割が格段に大きい日本

北岡 なるほど。それからさっきお聞きしたことの補足ですけども、日本の政治家のこういう会議外交に対する不慣れは、ヨーロッパの方は特にヨーロッパ諸国の間でしょっちゅう会議をやっているわけですから、マルティの会合をですね。とくに日本は苦しいんですけども、そうするとシェルパの役割は日本は格段に大

きいということになりますね。

宮崎 そうそう。これなしでどうやってやるのか(笑)。これはあとから聞いた話で、私自身が関与したんじゃないんだけど、鈴木善幸さんという方が総理だった時期があるでしょう。「カセットテープ」というあだ名がついたんだそうですね。

というのは、いろいろとブリーフするでしょう。「こういうふうに言ってください」と言うと、ここからここまで、それはちゃんと言ってくれるんだって。ところが、その時の状況で前半を切って途中からスタートするとか、後ろを切るとか、そういうようなことが絶対にできないんです。カセットテープだから、最初から最後まで(笑)。

それでどうするかというので、私の後任のシェルパが、カナダのサミットでカナダに各議題の冒頭に鈴木さんにやらしてくれて頼み込んでね。すると、各議題の冒頭に鈴木さんが、カセットテープが体をなすわけですよ(笑)。ほかの人の言ったあとでそれをやったら本当に場違いで、おかしなことに。そういう苦労があったんでね。鈴木善幸さんはわりと特殊ですが、いちばん具合が悪かったと思います。僕自身は当時はボンに行っていたのかなとにかくシェルパじゃなかったんですが、カセットテープだということあだ名がついているんだということを当時の責任者から聞いたんです。

北岡 日本で制度化されたのはボンのときからということになりますけど、必ず経済担当の外審がシェルパをやることになっているわけですか。

宮崎 そうしたわけですよ。

北岡 それは宮崎大使の頃からですか。もっと前から……。

宮崎 その前は吉野大使がたしかシェルパだったと思う。私が福田さんのシェルパになったわけですよ。これは次の話題なんですけど、さっきの福田さんと大平さんが交代するときに、その前に

ボンのサミットで、今度は日本でやりますとインビテーションを出しているわけですね。ところが、そのあと変わっちゃったわけですよ。そこで一番の問題は、東京サミットのシエルパの会合は、すぐ直後にやることになっていたわけですよ。それでしようがないから、有田（圭輔）次官と一緒に行ってくださいと頼んで、大平幹事長——まだ引き継ぎしてないから幹事長——のところに言って、「あなたが総理になるときに三つだけOKしてくれ」と言ったんです。まず第一は、東京サミットをやることを、招請しているのを引き継ぐかということね。

北岡 それは引き継がないと困りますね（笑）。

宮崎 まず引き継いでくれなくちゃ困る。それから、すぐ準備を始めるので、私をシエルパとして任命するか、と。三番目が、東京サミットの日にちね。日にちについてはいろんな考慮があるから、だいたいのはあるけど、あと細かいところは任せてくれるかという、大平さんは言語明晰に、全部三つとも非常にクリアカットにOKを言ってくれたんです。

北岡 そんなことをノーと言われても困りますよね（笑）。

宮崎 ノーと言われたらどうだったかね。ちょっと分からないけど。

北岡 そうしますと、つまりサミットでシエルパをやることを念頭に起きながら経済外審というのを決めるんですか。

宮崎 私からあとはね。私のときは、おそらくそんなことは決まっていなかったと思いますよ。

北岡 決まっていたかも知れませんが。

宮崎 それ以来、ずっと経済外審がやることになったわけですよ。これは妙な人が、中央銀行の総裁、日銀の総裁やなんかになりましたら、やっぱり困るんですよ（笑）。政治問題もあるしいろんなことがあるから、経済担当の外審がいちばん向いていると思いますけどね。

北岡 準備の会合は、どういう会合がどれぐらいの時間をかけて進むのかという話を、もうちょっと……。

宮崎 それは各サミットでずいぶん違うと思います。

北岡 だいたいの議題は、いつ頃……。

宮崎 議題はもう決まっているわけですよ。さっき言ったようにマクロの経済とか、通貨、貿易、エネルギー、それから南北問題を何か書かなくちゃいかんとかね。それ以外の議題が出てきたことはない。ただ、ボン・サミットでハイジャックの話が出てきたんですけど、そういった突発なことを除けば決まっているわけですよ。

北岡 そうすると、だいたい七八年の七月にボンのサミットが終わると、そのときはまだ福田さんと思っているにしても、次は一年後に東京だと。宮崎さんは続けてシエルパをやられると。そうすると、何の議題があって一年間どういうふうな準備していくのか、ほとんど分かっているわけですね。

宮崎 すぐそこで、その時には決めなくちゃいかんわけですね。それこそ何回やるかということと、それからどこでやるなんていうこともなんですよ。東京に全部集めるのは、なかなか大変なんです。

北岡 遠いですからね。

宮崎 遠いから。

北岡 やっぱりお出かけになる、ずいぶん。

宮崎 東京でもやりましたよ。だけど、何回やるか、どうするかというふうなことも、すぐその場で計画を立てなくちゃいけないわけですよ。内閣が代わった直後に第一回のシエルパ会議をやる予定をもう組んでいたわけですよ。だから、大平さんに「ノー」と言われたらどうということになったか、東京サミットに招待するのを取り消すなんて言われたらどうということになったかな、なんていう（笑）。

北岡 もちろんシエルパ同士の会議の下に、もっと下の官僚の会議はいろいろあるわけですよ。そうすると、シエルパ同士が集まる会合は、かなりハイレベルの会合ですよ。何回ぐらいあるんですか。

宮崎 四、五回だったと思いますね。ボンも東京も。その後少し少なくなったり、シエルパの会合もっと組織化されちゃって、サブシエルパとかなんとかいうのが出来ちゃって、その会合でシエルパ自体が集まるのが少ないとか、いろんなことが後になって出てきたけど、僕の場合はサブシエルパはなかったわけですから、まったくこの省の次官だろうと何であろうと、そんなものは関係ないわけですよ。もちろん相談はしましたけどね。

北岡 他の官僚組織、他の省庁もいっぱいいるわけですよ。その中のシエルパと他のビュロークラツとの役割関係は、いかがなものですか。

宮崎 他の省庁からインプットは受けます。だけど、あまり相談はしなかったね。そこは相談できないわけですよ。それから、個人代表だから総理に直属でしょう。他の省の大臣をすっ飛ばしてもいいということになっているわけですよ。それでなかったら……。つまり、サミットというのは首脳の会議ですから、首脳の代わりとして出てくるわけだから本来首脳の代弁者であって、首脳の言うことだけ聞いていれればいいわけです。建前は。

北岡 日本の場合には首脳が個人であんまり喋られると困るということですね(笑)。これには他の大臣も、ボンはどなたが行かれましたか。

宮崎 サミットに出るのは、外務大臣と大蔵大臣なんですよ。だけど、日本とドイツだけは、そのほかにドイツは経済大臣、日本は通産大臣が行って、大蔵大臣の会議にごくわずか通産大臣が交代して出るという恰好になっているわけ。

北岡 そうですね。あのときは園田さんですか。

宮崎 ボンのサミットの時は、外務大臣は園田さんですよ。

北岡 だから、あまりご記憶にないというか、大して役には立たない(笑)。

宮崎 当時は福田さんと私とその二人しか会議場にいないわけですよ。全体会議のときには外務大臣と大蔵大臣が脇にいますけどね。北岡 ボンのサミットは、正確にかどうかは分かりませんが、比較的にも日本でも報道はされましたね。ロンドンはどうだったですかね。とにかく印象にないのはサンファンの会議ですけどね。

宮崎 ボンのサミットのときは、森(喜朗)さんが官房副長官だったんです。この人がプレスのをやったわけだ。

北岡 なるほど。

宮崎 ただ、森さんに私が話をする時間は極めて限られてね。シエルパというのは大変な首脳会議に出ているでしょう。首脳はすぐ、やれ飯だなんだとかどこかに行っちゃうわけでしょう。そうすると、私しか知らないわけですね。私は次に紙に書いたりなんかと、ものすごく忙しいでしょう。そのごく短い時間に誰かに話をするわけですね。それを引き延ばして新聞社に話をするわけだから、サミットの報道は、そのときの報道はあんまり正確じゃないものが多いですね。

北岡 これは何日間あったんです。いつも何日ぐらいですか。

宮崎 飯を入れて二日。

北岡 わりあい短いんですね。

宮崎 短いから大変ですよ。まず寝られないですから。

北岡 ほとんど寝る時間がないですか。

宮崎 寝る時間はないですよ。

股野 ロンドン・サミットでは、塩川(正十郎)官房副長官がプレススポークスマンだったんです。私は官房副長官にアテンドしていたんですが、官房副長官の大きな悩みは、内容もさることな

から、発表の時間が日本の新聞の門限との兼ね合いでどうなるかという、この調整が大変だったと。結果的にうまく行ったんですけど、その詰めを私も、新聞社の代表と立ち会って交渉してしましたけれども、やっぱりそういうことがむしろ官房副長官には大事になってくるんですね。

〔宮崎氏中座〕

北岡 そうでしょうね。それも大事なことではあるんでしょうね。股野 ちょうど時差があるものですから、発表時間帯が朝刊に載るか載らないか、なんですね。そういう点で、実質事項になってくると、シエルパの皆さんの活躍になりますね。

北岡 最近読んでないんですけど、以前だとパットナムのサミットの本が標準的な本だったですかね。『ハンギング・トゥギャザー』という。日本だと、船橋〔洋一〕さんが書いた本がありましたね。

股野 船橋さんはいつ書いたのかな。

北岡 だいぶ前の本ですね。

佐道 そうですね。八二、八三年ぐらいじゃないですかね。もう文庫になっていきますよ。

股野 だいぶ前ですね。まだサミットの第一ラウンドを終わったぐらいですね。

北岡 終わった直後ですね。

佐道 最初にその本を出されて、そのあとにチヨコチヨコツと書かれたものを足して文庫になったと。

〔宮崎氏戻る〕

北岡 質問項目の五番目には、私はあまり聞き覚えがないんですが、「総合的戦略」という言葉があったり、レビュー会議があったんですが。

宮崎 レビュー会議はもちろんなったわけですよ。

北岡 いつもあるんですか。

宮崎 これは僕のしている頃はしょっちゅうありました。

北岡 そうすると、ほぼ半年後ですね。十二月にあったんだと。

宮崎 そうですか。いつあったかは、ちょっと忘れちゃったです。

北岡 それは、そのとき申し合わせたことがうまく行ってるかとか。

宮崎 そうそう、そういうことですよ。というか、それもやるけれども、次の会合の準備ということももちろんやるわけですよ。北岡 ああ、そうですね。それも一緒にやるんでしょうね。

よその国のシエルパって何年ぐらいやるんですか。

宮崎 首脳が代わってシエルパが代わらなかったのは、私とイギリスの書記官長だけなんです。あとは首脳が代わったら、当然のことながら代わるわけです。

股野 そうすると、サッチャーが登場しても彼はまだやっていないでしょうか。

宮崎 そうですね。

股野 ほう、それはすごいですね。

宮崎 だから、労働党から保守党になったわけでしょう。それでも彼はシエルパだったわけです。それはエックス・オフィシオというか、当時はね。いまは違いますけど、要するにセクレタリー・オブ・ザ・キャビネットというのは内閣書記官長みたいなもので、非常に偉い、官僚の最高峰ですよ。

北岡 ただ、首脳が同じならシエルパも同じというわけではないんでしょうか。

宮崎 だいたいそうですね。

北岡 そうですか。でも、長い人がいますよね。コールさんとかサッチャーさんみたいに長い人が。

宮崎 コールのときは途中で代わっていますね。

北岡 ええ。でも、五年や六年やるんですか。

宮崎 やる人もいるでしょう。

北岡 そうですか。それは長いですね。

宮崎 だから、本当にイギリスや日本、それからカナダが若干うなんだけど、カナダも外務省の高官がやるわけですけど、なんというか、エックス・オフィシオでやるのと、首脳が自分の腹心をやるのと両方。たとえばミッテランはアタリというのを任命したでしょう。ジスカールはクラピエ。クラピエなんていうのは、あまりえらすぎて、事務的にルーズで困ったんですけどね。ボンのときも議長がドイツでしょう。それでいろいろと言うんだけど、「You can invite me なんとか。だけど、私は答えられない」とかね（笑）。そういうようなことがしょっちゅうあって。要するに、中央銀行の組織と関係ないでしょう。私の場合は、外務省の下の働く人がいるわけですよ。クラピエの場合はジスカールの友達だからなっているんであって、中央銀行の人を使うわけにいかないでしょう。だから、非常に事務的には困っていたようですね。

■ 途上国に対する日本と欧州の政策の違い

宮崎 C I E C というのは、この前申し上げたように、キッシンジャーから見れば「ノン・ホーリー・アライアンス」、先進国から見れば、なんとかして石油の安定供給の確保を目指したいというところで始まったんだけど、石油についての O P E C からのコミットが得られないんで。したがって、始めはしたけれども、先進国側もいわゆる何らの代償を支払わずに逃げきるということに目標がなっちゃったわけですよ。それで結論だけを言うと、逃げきったわけですよ。逃げきったことがそれほど騒がれないようにして、つまり後進国や産油国を刺激しないような恰好で幕を閉じたというのが、C I E C の最大の成果。

たとえば、そのあとにコモンファンドというのに言及がありませんけど、私が議長を務めていた一次産品委員会での最大の問題はコモンファンドですよ。つまり、一次産品の価格を安定し、あるいは上昇させる、あるいは取引条件を改善するためにコモンファンドを作って先進国がたくさん金を放り込んで、その一次産品の価格が下がったら買い支えをするとか、そういう構想なんですよ。

北岡 この間お聞きした通り、そんなことがワークするんですかといったら、しないという明快なお返事だったものですかね（笑）。

宮崎 いや、若干例はあるんです。国際錫協定というのがありまして、私が課長のときの国会に持っていたのかな。錫については、今はどうなっているか知りませんが、当時は各国が金を出し合ってバツファーストックを国際的に持っているんですよ。それで、錫の価格が下がったら買いに出る、上がったら売りに出ると。その売りに出ると買いに出る価格のレンジまで協定で決まっている、商品協定はたくさんあるんですけど、そういうものがあるのは当時の錫協定だけだった。その他に、コーヒー協定とかコア協定とか。私は国会にコア協定なんかは出したんだけど、何が書いてあったか全然覚えてないです（笑）。国際コア協定というのを出したんだよ。

北岡 一応できたわけですか。

宮崎 できたわけですよ。だけど、しかしそういうのは、出して通ったら忘れちゃうという性質のものだと思います。

北岡 なるほど。非常に明快なお答えで（笑）。

宮崎 C I E C というのは結局何もしないで、先進国をコミットせずにおしまいにしたことなわけです。

だから、コモンファンドというのは、私自身も全然意味がないと思っていたし、出来なかつたわけですから。途上国の債務問題

というのは、このときも問題になったけれども、ずっといまでも問題なんですよね。国際問題だけじゃないんだけど、そのあとのUNCTADや何かにも関連して途上国問題について、ちょっと気がついた点を申し上げたいと思います。

途上国に対する関係は、誰の言葉だったっけな。ちょっと忘れてたんですけど、温かい心だけど冷静な頭脳で対処しなくちゃいかん、と。「ウォーム・ハーテッド・バット・クール・ヘデッド」でなくちゃいけないという。ところが、往々にして途上国との関係をやる人は、「ウォーム・ハーテッド・アンド・ウォーム・ヘデッド」になっちゃうんです。途上国をやらぬ人は「クール・ヘデッド・アンド・クール・ハーテッド」になっちゃうと。だから、本当に「ウォーム・ハーテッド・バット・クール・ヘデッド」で扱うべきものだと私は思っているんですよ。ところが、往々にして両方あったかい人のほうが多いんですよ(笑)。

私はウォーム・ハーテッドのつもりです。途上国に対する基本的な政策が、日本とヨーロッパと非常に違う点があるんですよ。それで私は何の会合かな、ずっとあとに国連関係の賢人会とかいうのに、中国とかソ連だとかインドだとか後進国問題について出たことがあるんだけど、そのときのヨーロッパとわれわれとの違いは、話を簡単にするために極端な恰好で言いますと、ヨーロッパの考え方は、後進国援助というのは、どっちかというところベシック・ヒューマン・ニーズね。基本的、何ていうんだろう……。

北岡 ベシック・ヒューマン・ニーズと言っております。

股野 そうですね。あれはまだ適語がないんですかね。

宮崎 ベシック・ヒューマン・ニーズをとにかく満たすために食糧を持って行ってやるとか、なんとかかんとかそういったようなことに重点を置くべきである。したがって、グラントでね。その裏を返せば、そのベシック・ヒューマン・ニーズの食料を

持っていったりなんかしても、途上国が工業化して工業製品をヨーロッパに売ってきて、ヨーロッパが困るということは生じない。したがって、逆に言えば日本がやっているように、工業化を促進するなんていうのは非常に迷惑である。工業化を促進して後進国が工業製品を作るようになって、それを日本だけ引き受けてくれるんだったらともかくとして、ヨーロッパに來たりアメリカに來たりする。そういう戦略は非常に迷惑であるというのが本音なんですよね。だから、そういうことは言わなくて、いいほうを言うとベシック・ヒューマン・ニーズになるわけ。

ところが日本は、私の感じでは、ベシック・ヒューマン・ニーズでやっておれば、後進国はいつまでたっても後進国である。浮かび上がれない。だから、浮かび上がるようにするためには、先進国がさらに一歩先に進んで、その次に中進国がいて、そのあとに後進国が来るという。これも誰かの言葉で、私の発明じゃないんだけど、雁行の形で行かなくちゃいけないんだと。政府の政策というより私の意見ですが、だいたいそういうような方向で来ていることが多いと思うんです。雁行で行くということは、つまり中進国を先進国まで持っていくし、後進国を中進国まで持っていくということであれば、後進国問題は解決しないという。しかもそれが、欧州が言うように必ずしも先進国にとってマイナスにならないというのが私の考えなんですよね。つまり、そこにまた新しい所得が生ずれば、また新しいマーケットが出てくる、また先進国は現状より更に先に進むべきであるという考えなのです、とてもそれは通らないんですよ。ヨーロッパというのは、どうしてもステイックな、つまりいま築き上げた地位に安住したいというところがありますから、それを妨げるような、もう日本が妨げては大いに迷惑なんだけれども、第二第三の日本が出てきたらとてもかなわんということなんですよね。

北岡 はっきりよく言われるようになったのは八〇年代の半ばぐ

らいからでないかと思うんです。特にNIE S——当時はNIC Sといいましたが——の発展が目に見えるようになった頃からなんですけども、大使はそれより前からわりあいそういうお考えははっきり持っておられたという感じですか。

宮崎 そうそう。

北岡 そうですか。当時はヨーロッパはそれには冷たかったと思いますね、きっと。

宮崎 非常に冷たくて、いつまでたっても議論が合わなかったわけです。

北岡 そういうお考えをよくぶつけられたのは、たとえばOECDの前におられた頃からもずいぶんあったんですか。

宮崎 いろんな公式の場じゃなくて、飯のときや何かによく議論したんですけどね。

北岡 たしかにグラント・エレメントをどう考えるかとか、プリア・カントリーズかプリアレスト・カントリーズかという議論に、いちばん貧しい国にベーシック・ヒューマン・ニーズということは、要するに発展は考えないということですよ。それはかなり古くからそういうお考えで。

宮崎 そうそう。だから、それに対して冷たいんだよね。おまえは後進国に対して冷たいという評価が出来ちゃったんだけどね(笑)。

北岡 もうひとつ、いまの対立で、アメリカはどうなんですか。

宮崎 アメリカは中間ですね。だけど、どっちかといえばヨーロッパ的な傾向が強いでしょうね。国内を考えればね。そこで、日本の場合はどうしてもグラントが少なくしてローンが多くて、そうするとグラント・エレメントが少ないのでそれが問題になるし、債務救済の場合でも大蔵省の弁護をするわけじゃないんだけど、債務を打ち切るとその国に対し次の援助が出しにくくなるんです

よね。だから、日本の場合は債務キャンセルじゃなくて、その債務に相当する新しい援助を出すというような恰好を取らなくちゃいかん。ところが、それがなかなか他の国は取りにくいという問題があるわけです。途上国問題は、私は別にクール・ヘッドだけどもクール・ハーテッドじゃないつもりなんですけどね(笑)。

北岡 大変よくわかりました(笑)。

井上 「雁行」という言葉は、同時代的に使われたというか、大使がお使いになってから……。

宮崎 初めてじゃないです。誰かのをいま借りているんですけどね。便利な言葉だから。

北岡 よく使うのは八〇年代ですよ。この頃からお使いになったのは、かなり早いですね。

宮崎 私はベラベラ喋るから、とにかくそれを聞いて、また言ったそっちのほうに著者になったという場合も多いですけど、しかしとにかく別に著作権をクレームするつもりはないです(笑)。

北岡 七〇年代というと、また日本は援助大国というほどのことではないですよ。

宮崎 いや、しかし相当だったです。UNCTADというのも、さっき行ったコモンファンドにも関連するんだけど、いつか話したと思いますけど、プレビッシュというUNCTADの初代の事務総長の言ったことをやった国は、全部だめなんですよね。私もはじめからそう言ってただけで、プレビッシュのアイデアはやっぱりコモンファンド、一次産品問題と輸入代替産業の育成というやつね。それと反対のことをやったのは、さっき言ったNIE S、NIC Sなんですよね。輸出主導型の成長を遂げた。それがいちばんいかんわけですよ、ヨーロッパにとっては。だから、それはどうしてもヨーロッパとは対立することになっちゃうわけです。ところが、ヨーロッパ人のほうがPRの力もあるし、あれもうまいから、その意見が罷り通ることが多いですよ。

UNCTADの会合にも外務審議官時代、最初の年か後の年か忘れたけれども行きました。ところが、あそこはご承知の通り一ヶ月ぐらいかかるんですよ。つまらない演説……つまらないといっってはいけないけども、演説をね(笑)。後進国の代表なんて、あそこで演説したというので、国に帰って演説のテキストをばらまいて選挙に出るとかね。そういうのを聞かされるほうはかなわれないわけ(笑)。あんまり演説は聞かなかったんだけど、ところが演説じゃなくても、最後の詰め段階に入っても、外務審議官が会議場にあんまり来られると、必ず捕まっちゃうというんです。捕まってるギョウギウイわされると困るから、ただし連絡がつかないと困るからホテルに待機してくださいというの。下の人はそう言って、「そうか」と言ってホテルに待機していたんだけど、退屈なんですよね。でかけるわけにいかないしね。

北岡 捕まるというのは何ですか。何か援助の要請とかそういうのですか。

宮崎 要するにコミットを求めてね、たくさん飢えた鮫みたいのがあるから、そういうところに首席代表がヒョコヒョコ出てきてもらっては困るといふので。

北岡 それはそうかもしれないですね。

宮崎 概ねホテルにいて、何かコミュニケーションの作成か最後のところだけ出ていってたんです。そういうときになると、さっき言ったアルジェリアは非常に有力なんですよね。フランス語はうまいしね。

それから、よく新聞なんかもよく、UNCTADとか国連の議論が大変な影響力を持っているように書いてあるんだけど、どこの国でもUNCTADで何か通したとか、だいたい先進国に大事などころには反対するんだれども、途上国は自分の主張が通ったと言っていましたね。だけど、それは各国の国内法に対してバインディングが全然ないんですよ。何か通ったら国内法を變

えて、あるいは予算をつけて何かしなくちゃいかんという戒律的な義務が生じないわけですよ。その点が往々にして誤解されているんですけど、国連の決議もそうですよね。ECOSOCの決議なんかもそうです。ところが、ガットだとかOECDのインビジブルコードだとか何とかがっているのは、条約的な意味合いがあるわけですよ。それから、サミットの決議は法的拘束力はないけど、政治的には非常に強い効力があるという。ところがUNCTADというのは、さっきのCIECの話じゃないけども、いかにして「ノー」と言う回数を少なくして「ノー」に持っていかうという話なんです。それがどうしても日本人には分からないわけ。不思議なんです、あれは。

北岡 本当は分かっているのかもしれないですけどね(笑)。新聞がそう書かないだけで。言っている分には立派に聞こえますからね。

■ 科学技術協力協定交渉が日米摩擦を緩和

宮崎 それから、総合的なドル防衛策。これは課徴金なんかを作ったわけですよ。たいへんな騒ぎだったです。

外務審議官というのは、サブキャビネットミーティングってアメリカとの間の会合が定期的にあって、向こうの国務省の経済担当の次官とこっちは何人か各省の人もそれを行って時々会ったりなんかして、こういうものをみんな議論してました。アメリカの特に課徴金は非常に響いたですね。それを外せと言ってワアワア言ったということも。それ以外に、いわゆる貿易摩擦のほうは主として牛場さんがやっていたんです。したがって、私自身はサブキャビネットミーティングではワイワイやったけれども、実際上、牛場さんが経済局長を使ってやっていたから、あまり印象に残っていません。

それから、福田・カーター会談（一九七八年）に私は随行していなかったわけです。日米関係で思いつくのは、この年だったか次の年だったか忘れましたが、大平・カーター会談（一九七九年四月）のその年の次ですか、カーターが日本に来たわけですね（一九七九年六月）。つまり、そのときにももちろん日米関係が経済的にぎくしゃくしていたんですが、大平・カーター会談でエネルギー問題がそのとき相当ヘッドエイクだったわけですね。エネルギー問題とエネルギー以外の科学技術協力の協定を二本作りましょうという話になったわけです。

それで、私がヘッドになってアメリカとその二つの協定の交渉をしたわけです。交渉相手は、アメリカの閣僚級だそうですけど、当時フランク・プレスという大統領の科学顧問というのがいて、サイエンティフィック・アドバイザーかな、いまでもいますけどね。OECDの科学大臣会議なんかには必ずこれが出てくるんですが、当時はフランク・プレスという学者がヘッドで、エネルギーの日米協力の協定の会議をやったんですが、おそらく新聞なんかに出てないでしょう。国内でも大変な騒ぎだったわけです。というのは、日米双方で協力してやるのに、どのプロジェクトに優先順位を置くかということで日米が合意しなくちゃいけない。そうすると、日米でそれぞれ意見が違うのみならず、国内でも大変な意見の違いがある。つまり、その意見の違いは、役所だけじゃなくて学者の間の対立がすごいですよ。それから経済界、それを応援する政治家、その四つぐらいのプレッシャーグループから、俺のプロジェクトの優先順位をトップにしてくれという陳情をものすごく受けるわけです。政治家が来たり、経済界の人が来たり、学者の先生も。法学部や経済学部の学者じゃないんですよ。

北岡 そういふのはあんまり役に立たないと（笑）。科学技術のほうの学者ですね。

宮崎 科学技術のほうのね。それで「俺のプロジェクトをいちばん上に持ってきてくれるか」というんです。たとえば、その中で役所がまた分かれているんですよ。だから、相談相手がいないわけですよ。それで本当に困ったんです。途中の段階まで聞きおくだけにして行くでしょう。アメリカで同じことが行われているわけです（笑）。そのうちに、それぞれのプロジェクトの日米の共同戦線がでまっちゃうわけ。これをトップに持ってきてくれと、それが政治家まで入って、本当に往生して。往生したことは覚えているんだけど、内容は詳しいことは忘れちゃって。

ただ、いまでも覚えているのは、国内では最後までもめた挙げ句、日本のトッププライオリティに核融合を持ってくるか高エネルギー物理を持ってくるかと、その二つの対立が最後まで残ったの。高エネルギー物理というのは、高エネルギー物理研究所というのがあるんですよ。私はそれについていぶんブリーフィングを受けたから権威になったけど、いまは忘れちゃったけど。大臣までやっている某代議士が高エネルギー物理のほうのサポートで私のところにきて、とにかく核融合をやるためにたいへん大きな力でコンテインしなくちゃいけないでしょう。強力犯である。高エネルギー物理というのは知能犯であると。知能犯のほうがよくばど効率がよいとかね（笑）。そのほかたくさんあって、石炭液化・ガス化、とかね。

それでアメリカと突き合わせたところ、結局どうしても一致しないわけですよ。両方のリストをつくりましょうと、両方をひっつけたわけね。日本側のトップが核融合になったわけです。アメリカのトップが石炭の液化・ガス化というかな、ガスイフィケーションというやつ。それがずっと続いて。

それはなぜそう騒ぐかというと、予算が絡むんです。予算がつかると大変なことなんです。ところが、その結果、最初はアメリカのほうにとにかく金をつけてくれということで、石炭の液化・

ガス化、アメリカに日本も協力しようということになって、日本も予算を、とにかくつけるべく努力したわけですよ。

ところが、アメリカは政権が代わってカーターがひっくりかえっちゃって、途端に全部ポシャ(笑)。協定は残ったんですけど、リストのほうは、アメリカっていうのはそういうことが時々あるんでね。大きくは国際連盟加盟をやめたり、最近で言えば核実験が政権が代わったために。そういうようなことがあって。

しかし、この協定交渉をやっていることで日米の間のあつれきが若干ガス抜きされたということがあるんです。

北岡 なるほど。これはアメリカのほうがつぶれると、どうなるんですか。日本の核融合についての援助は続くわけですか。

宮崎 続かないです。

北岡 これは全部ダメになっちゃったんですか。

宮崎 全部だめになっちゃった。石炭のガス化は日本は予算を取ったのかな。アメリカがつぶれちゃったものでね。

北岡 両方お金を出すとということが大前提なわけですね。それは一方がつぶれたらおしまいと。そうですか。たしかに意味があるでしょうね、こういう技術の新しい試みですよ、これは。

宮崎 そうそう。それからもうひとつの科学技術協力協定は出来まして、それは私が去ったあとに出来て、一〇年ごとに二、三改定されて二〇〇〇年のいまも続いていると思います。私は辞めてからハイレベルアドバイザーコミッティのメンバーになっていたから、そのあとのこともかなり詳しいんですけどね。私が最近いちばん詳しくかったのは、核融合を含めて科学技術なんです。科学技術政策委員会の委員だったし、科学技術庁の顧問だったし、ずいぶん学者先生とお付き合いさせられて(笑)。

北岡 こういう分野は公的な資金がつかどうかは死活問題ですからね。われわれ文科系の研究は、別に予算がついてもつかなくとも大した額じゃありませんから何とかなるんですよ(笑)。

前に出ました課徴金の問題ですけども、国際法的にはこういうのをやってよろしいんですか。

宮崎 よくないですよ。手続きをふまなくちゃいけないんです。それこそガットを。

北岡 ちゃんと明白な証拠がなければ、やってはいけないことなんですすよね。

宮崎 そうそう、そう。それを一方的にやっちゃったわけだね。だから、それはいけないんだけど、アメリカはよくやるわけですよ。

北岡 よくやりますよね(笑)。アメリカ以外の国はなかなか出来ないんですけど。それは、ガットに対するバイオレーションであるということは認めないわけですか。

宮崎 役人は分かっているんですけど、大統領とか議会とか、そういうところへ行くと認めたがらないですよ。

北岡 そうなんです。そういうのは認めない国ですから。しかし、向こうも内心は後ろめたいわけですよ。

宮崎 どうですかね。もうあのときは背に腹は代えられないということだったんでしょうね。国際収支が悪かったわけですから。国際収支が悪いし、その当時は財政も赤字だし、貯蓄率は低いし、アメリカ経済は大変な苦境にあったわけです。

北岡 そうですね。カーター時代は最悪だったですね。

宮崎 したがって、そういうときは対外的にはいろんなことを要求してくるし、これに答えなくちゃいかんという面があって、さっきのエネルギー協定なんかもそういう面も若干あるわけですよ。しかし、とにかくそういうものは誰かほかの人がやってもらわないとかなわないと思って。タイムコンシューミングで。

それから、最後に「日米防衛協力のための指針」は、私の直接の担当じゃないから、話は聞きましたけど申し上げることはないです。だいたい自分がしゃかりきにやるようなことではないのは、

記憶がぼんやりしているんですね。だから……。
北岡 それはそうだろうと思います。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第9回 —

開催日：1999年11月2日
10：10～12：10

開催場所：政策研究大学院大学
プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）

股野 景親（元駐スウェーデン大使）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

■ 大平首相の急死

宮崎 大平首相と福田首相なんですけど、大平さんは最初、池田内閣の外務大臣でいたんですよ。そのとき私は課長だったんです。ですから、そのときから、ちょうどケネディ・ラウンドの末期で大臣にブリーフすることがずいぶんあったものですから。前に申し上げたように経済閣僚懇談会をやる時には、大平外務大臣と、田中、当時の大蔵大臣、その二人が頼みなんです。大平さんは口が重いものだから、あまりテンポよく話をされたいんだけど、田中さんは鉄砲玉みたいに話をして、なんか分からないけど、とにかく賛成しているということだけはよく分かるように（笑）。河野一郎農林大臣から反対が上がったんだけど、田中さんに押しまくられてあんまり発言しなかったということがあるわけです。当時、大平さんは池田派ですからね。池田さんが総理なんです。で、われわれにしょっちゅう言っていたのは、「おやじさんが言うことはみんな聞け」と。官邸から出てくることは、相当……。つまり、池田さんに対しては非常に尽くしていたという感じがします。いろいろ政治家として、単に哲学者だけじゃなくて情勢判断というのとはたしかにすごいと思うのは、日米の繊維交渉があったんですね。そのときは自分が中に入ってどうしようということをしなくて、専らアメリカの言うてくることを日本の業界に伝え、日本の業界の言っていることをアメリカに伝え、両方くたびれてくるまで待つ、というね。自分でもそう言っていたんですが、そういう態度を取っていたんです。間を置くのがうまい人ですね。

北岡 その繊維交渉というのは七〇年、佐藤・ニクソンのあとです。ね。

宮崎 第一回目の大平外務大臣。

股野 それでは六〇年代ですね。

宮崎 うん。非常に古い……。

股野 そうすると、課長をやってこられた……。

宮崎 国際機関課長だったと思います。

股野 それではもう六〇年代の繊維交渉ですね。

宮崎 池田内閣です。それから二回目は外務大臣でみえて、いろいろあったわけですけども、いちばん親しく話をせざるを得なかったのは、サミットのときのシェルパ。私が大平さんのシェルパになったわけで、このまえ申し上げたように、こっそりと夜、私邸を訪ねると、たいがい大平派の代議士が何人か待合室みたいなところに待っているんですよ。そこへ行くと顔を合わせるわけでしょう。その代議士さんたちには、私が大平派であると目されたいですけどね。

大平さんに感心していたのは、代議士が待っていて、私がいくといちばん先に私に会ってくれるんですね。だけど、実際には別に何派でもなくて、仕えたのはたくさんいるわけですから、それこそ古くは池田さんから佐藤さんから……。また時々、省によつては何派に、政治家と密着している人がいるけど、外務省はほとんどないですね。

北岡 お仕事上、結果的には池田、大平、宮沢という池田派系とお付き合いが多かった……。

宮崎 そうですね。その他に、田中、三木、佐藤、中曾根……。

北岡 福田さんの話もこの間出ましたね。

宮崎 そう。だから、派閥横断的な（笑）。

北岡 その頃、大平さんの側近でよくいた代議士ってどういう人ですか。

宮崎 たとえば小坂善太郎とか。当時の大平派は……。ただ、宮沢さんは大平さんと合わないんですね。

北岡 宮沢さんはいないんですね。

宮崎 いないですよ。

北岡 加藤紘一さんなんかいたんですか。

宮崎 いや、あれはまだ子供だったから、私邸に行くような身分じゃなかったでしょう。

北岡 伊東正義さんとか。

宮崎 そうね、あまり記憶はしてないんですけどね。それから、こっちが見られるのも困るから、相手の顔をなるべく見ないようにして、コソコソと(笑)。

福田さんはこの前、申しましたように、自分のイニシアティブで動くほうのタイプの人で、それからわりと対人関係がドライな人ですよ。だから、それほど親しくはならなかったし。ただ、非常に頭のいい方です。

大平総理急逝の前にチトーの葬式があったんですね。どこかから急遽行って、その前から不整脈が出ているところへ無理しちゃったんだけど、それで亡くなったのを外で聞きました。もちろん惜しい人が死んだなという気が。次のサミットの直前ですからね。

それから安川〔壮〕政府代表の話ですけど、これは大平さんが任命したわけです。大平外務大臣のときの駐米大使ですよ。この前話があったのは、いろんな経緯で法眼〔晋作〕次官をやめさせ、安川さんもその前の問題もあって、しばらくして辞めたんですよ。それで、政府代表ということになったわけです。したがって、経済閣僚懇談会なんかのときは、閣僚側に座っているんですよ。事務方がこっちでね。私がこっちで向こうに総理なんかいるときに、総理の右だか左だかに座っているんですよ。

これはまったく個人的な考えなんです。立派な先輩ではあるんだけど、そのときの発言はあんまり感心しない。辞めてから三井物産の顧問をしまして、三井で聞き込んだことをそういうところでよく発言するんで、そういうのはちょっと場違いだという気がしたわけです。

駐米大使はちゃんとやっていたようですね。大平外相にくっ

いてアメリカへ行ったときに、キッシンジャーと朝飯会があったんですよ。それに私がくっついて行って安川さんがいて、向こうはハビーブかなんか。そのときにだいたい私が、キッシンジャーが非常に答えにくいようなことを言うんですね、嫌なことを。だから、横を向いちゃったりなんかして(笑)。そうしたら、「That is a good question」ということを言ったんですね。あと

で安川さんが「That is a good question」とキッシンジャーが言うときは、詰まったときだということですよ。非常に答えに窮したときにそういうことを言うって。キッシンジャーとわりと親しくしていたみたいです。ただ、政府代表としては、牛場さんとはまるっきり格が違うという感じがしました。なんといっても、経済についての経験とか見識が、牛場さんとは段違いだったという感じがします。

北岡 これは対外経済相と対外経済担当政府代表というのは、一方が閣僚、こっちは閣僚ではないわけですね。

宮崎 じゃないです。

北岡 対外経済担当国務大臣というのは、前からあるんですか。

宮崎 ないんです。牛場さんを辞めさせて、そのあとに閣僚のポストは党で取らなくちゃいけない。

北岡 自民党のほうにいっちゃうということですね。それに似たようなものを作ったと。

宮崎 似たようなものを作ったわけですよ。

北岡 いまは政府代表ってございますね。

宮崎 いまは有馬〔龍夫〕ね。その前に松永〔信雄〕。

北岡 松永さんは長くやっていましたね。あれには対外経済担当というのはいないですね。このときはついてはいたわけですか。

宮崎 ついてはいたわけですよ。

北岡 これが最初なわけですか。

宮崎 そうですね。

北岡 政府代表というものもこれが最初なんですか。

宮崎 そうですね。政府代表はもちろんアドホックにたくさんありますけどね。

北岡 ややパーマネントなものとしてはたぶんこれが初めて、牛場さんを降ろして辞めさせた代わりにこんなものを作ったんでしょうが、これは外務省の中にオフィスがあるわけですか。

宮崎 そうです。

北岡 それでその次が松永さんですか。

股野 いえいえ、大来佐武郎さん。あの方は外務大臣になったんですけど、大来政府代表という時代が。

北岡 これは対外経済担当だったんでしょうか。

宮崎 そうですね。

北岡 何年かやられたわけですか。

股野 安川さんのあとですね。

北岡 そうすると、安川さんはわりあい短かったですか。

宮崎 大平内閣だけですよね。

股野 そうですね。

北岡 大来さんは新自由クラブから出馬して落選されて、大来さんは外務省の方ではないわけですね。でも、こういうのをやって、外務省の中にオフィスがあった……。

宮崎 そうです。戦争中にリベラリスト的なエコノミストがたくさん外務省にたむろしていたわけですよ。脇村義太郎とか都留重人とかたくさんいるわけです。大来佐武郎はそのときのOffice Chiefで、外務省にいたわけですよ。前に申し上げたような、終戦直後の「日本経済再建の処方策」という文書の起草に携わった一人だったんです。だから、外務省と縁がないわけじゃない。北岡 縁はあるわけですね。その大来さんの次が松永さんですかね。

宮崎 しばらく切れていたでしょう。なかったです。

安川さんについては、法眼・安川外務審議官時代であったでしょう。私の経済局の先輩の加藤匡夫とか鶴見「清彦」さんとかそういう人たちは……。つまり、法眼・安川ってあんまり事務的じゃないんですね。しかも、どっちかといえば経済的センスがないんです。あの二人が外務審議官になってどうなるんだとか何とか、さかんに。つまり、エコノミック・マインデッドネスがないわけですよ（笑）。だから、どうなるかって盛んに心配してました。それからあとは政務と経済と外審が分業することになったわけです。法眼・安川のときは、どっちが何をやっているのかわからなかったから（笑）。

■日米賢人会議とイラン革命の影響

宮崎 それから、日米賢人会議は日米の経済関係が貿易を中心として摩擦があつて、非常にギクシャクしてましたでしょう。貿易だけが経済関係じゃないんだ。もっと経済の面は他にたくさん分野があつて、それについて協力する分野もあるし、というわけで、日米の場合の討議の内容を、もっとうんと幅を広げるということをすべきであるというのが私の意見だったわけです。そのために賢人会議を作りたいということ、いろいろ画策していたんです。その結果、出来ることになったんだけど、牛場さんがちょうど辞めたあとだったんで非常に都合がいいし。たしかメンバーは全部で五人だったと思うんです。ちょっと記憶がはっきりしないけど、はっきりしているのはソニーの盛田「昭夫」さんがいたんです。それからもう一人、私が最後まで迷ったのは、牛場さんと何回も話したのは、金融界代表を誰にするかということですね。つまり英語が出来る人でなくてはいけませんね。英語が出来る金融界の人は、三菱銀行の当時の頭取の人がいるんですよ。そ

の人を一応考えたんだけど、その人は非常にズバズバものを言って、大蔵省とちょっと仲が悪かったんですよ。そういうのは悪いだろうというので、第一勧銀の村本（周三）頭取に頼んで。あと二人は誰だったか忘れちゃったですけどね。それで、人選にもかなり……。牛場さんが決めたわけですけど、牛場さんが代表にならずと相談してくれたんで、印象に残っているんです。

ところが非常に残念なことには、米国の代表インガソル（元駐日大使）という人が、アメリカの国内で影響力が少ないんですね。牛場さんは日本の中で影響力があるんですけど、その結果、せっかく賢人が集まっても、それを役立てるところまでいかなかったという印象だったわけです。インガソルっておとなしい人ですね。

それから、イラン革命（一九七八〜七九年）。イラン革命は一説に、一部の人は「カーターの失敗だった」と言うんですね。カーターという人はいわゆるポピュリストで、選挙のときから、たとえば「朝鮮からも撤兵する」みたいなことを言ったんですよ。イランはもちろんシャーを見放すような政策を取った。それまでアメリカはイランに非常にテコ入れしていたわけです。それがホメイニのあいうことになったんだという説もあったけど、それは別として、日本にとっては三井がIJPC [Iran Japan Petrochemical Company]を進めていたし、ある程度、政府もバックアップしていたわけです。そこでああいうことになっちゃって、いろいろと一方で米国の立場があるわけですよ。これはたしかアメリカ大使館の占領だとか、非常にカッコしている。他方、日本はそういうような経済的利益があるんです。どういふことでそうなったかちょっと覚えてないんだけど、どこかの外国へ大来外相と僕が行って、アメリカは国防長官とディック・クーパーという国務次官がいて、話をしたことがあるんです。どこだったかな、パリかどこかで。

因みに、ディック・クーパーというのは、そのあとの東京サミットのヘンリー・オーエンの補佐役で国務次官だったわけです。ヘンリー・オーエンの補佐役は、国務次官のディック・クーパーと、大蔵次官のソロモン。ソロモンは、あとでニューヨーク連銀の総裁になった。そのディック・クーパーが大来さんと話をしている、大来さんはややこしい話をするのに簡単に割り切っちゃうから、僕はわいのわいのいろいろ訳のわからんことを言ったら、アメリカがかなりカッコかかして、「とにかくこういうことになったんだから、イランとの間に……」。その前に僕が、ヨーロッパはどうなんだとか、各国がどういふことをしようとしているんだとかなんとか、盛んに言っていたわけです。アメリカにとってはそれは嫌な質問なんですよね。「ヨーロッパがどうだろうと日本は聞いてくれなくちゃ困る」という前提なんだけど、ワアワア言っていたらだいたいぶ向こうもカッコかかして、とにかくビジネス・アズ・ユージュアルは困ると。石油の禁輸とかいろいろなことをやってくれという趣旨なんですがね。「ビジネス・アズ・ユージュアルでやるということはインセンティブだ」ということを言ったんです。ところが、大来外相がそのあと日本の新聞記者との会見で、僕が脇にいて、彼一人段に上がったの。そのときに「無神経」だって訳したんですよ。「それは無神経であるとアメリカが言った」というので、日本の新聞にデカデカと出た。「インセンティブ」というのは「無神経」とも訳せるんだけど、「無神経」というと日本語のニュアンスとしては非常に強く聞こえるんですね。そんなようなことがあって、しかし結局、禁輸はしなかったと思いましたがね。

北岡 それは巷間伝えられるところでは、日本が非常に高い値段でスポットの原油を買ったことに、バンスさんがそう言って怒ったというふうに伝えられていますけど、そうですね。

宮崎 ウーン……それはあんまり覚えてませんが、一般論とし

て、日本がスポットで買い漁ったときにいろいろと文句があったことは覚えてますよ。それがバンスだったかどうかは、ちょっと……。

北岡 バンスであるというのは、どこか証拠があると思います。当時はバンスですよ。 「インセンシティブ」というのは、日本語の「無神経」よりは弱いですか。

股野 コンテキストにもよりますね。

北岡 「インセンシティブ」は非常に強い言葉でもありえますよね。

股野 強い言葉としても使えますしね。「無神経」という言葉がその場合びったりだったのかどうか……。

宮崎 「無神経」というと日本語では非常に強くなるんですよ。

北岡 「インセンシティブ」はしかし、弱くはないですよ。

宮崎 弱くはないですよ。だけど、なにも正直に新聞記者にそういうことを言う必要はね(笑)。

股野 それはいかにも大来さんのです。私も大臣にお仕えして、日韓関係が非常に機微な時でしたが、大来さんはポーンと丸太を二つに割るようなことを言ってしまうんですね。こっちはそこに工夫が要るんですよ(笑)。

宮崎 折衝ではニュアンスがあつてね。同じことでも、よく会議で使うんだけど、エクспリシトリーに言うのと違うのとはずいぶん違うんですね。エクспリシトリーとかインプリシトリーというような言葉がしょっちゅう出てくるんですけど、大来さんは常にエクспリシトリーなんですよ(笑)。

北岡 キツイことを言うのでもニコニコしながら言うときとか、雰囲気とかでずいぶん違いますよ。

宮崎 ただ、外交交渉のテクニックという意味では損ですね。正直すぎちゃって。

北岡 大来さんは、特に世論の反応を非常にそれこれ無神経に

ポーンと言っちゃうわけですね(笑)。

宮崎 英語が出来るというのはたしかに強みなんだけれども、外相で英語が出来るのは宮沢さんとか大来さんぐらいしかいなかったんだけど、逆に通訳を通じてやると、担当課長が通訳していると、そういうところがうまいこと繕うことが出来るんですよ。ところが、英語で直接にやると、インセンシティブなことになっちゃうわけですね(笑)。

北岡 この実務の問題はいかがだったですか。イラン革命で直ちに性急に影響が出るだろうとか、三井のプロジェクトがどういう影響を受けるだろうとか、宮崎大使の管轄のうちですよ。

宮崎 しかし、その実務は経済局長が直接しますからね。

北岡 そうですか。そうすると、上までは来ない。

宮崎 来ていたんですが、直接私がどうこうするというのではなかったと思います。

北岡 特に経済局で対応が不十分なときには指導されることもあ……。

■東京サミットの知られざる一面

宮崎 もちろんそうですけどね。感性とかどうか知らないけど、手島君ですからね。手島(冷志)君は、私が課長のときに外から呼び戻して首席事務官にした人だから、ずっといろんなところで一緒なので、しょっちゅう連絡がありました。

その次はサミットですかね。サミットについてはたくさんあって、どこからどういうふうにお話ししていいか、よく分からないんです。

一般論としてサミットについての公表されているものは、直後のものはほとんどだめですね、宣言以外は。本当はそのあとで七カ国それぞれの新聞なり、あるいは当事者なりの話を聞いて総

合して見なくちゃいけないんです。船橋〔洋一〕さんのあれ『サミットクラシー』は、非常に長い期間に渡ってサミットというものを見ているし、ある程度、幅広くいろんなバックグラウンドも書いているという意味でいいと思います、定観測みたいなもので。ただ、中身の内容の本当のところは、もちろんそれは知る立場にないから書いてないということはたくさんあります。

サミットについてはいろいろあるんだけど、エネルギーの問題が結果として大変な目玉みたいになったわけです。しかし、それはあとでまとめて話すことにして、それ以外の気がついた点を先に申します。

東京サミット（一九七九年）って本当に苦労したし、かなりいろんなことがまだ記憶にあるものだから、話していると長くなっちゃうんですね。

北岡 どうぞたくさんお話しください。日本でやった最初のシェルの最大の証人でいらっしやいますからね。

宮崎 東京でやった、つまりホスト国としてのシェルの最初ですよね。吉野〔文六〕さんも、ロンドン・サミットでシェルの本物をやったわけですよ。船橋さんの本にシェルパはランブイエ・サミットと書いてあるんだけど、ランブイエ・サミットはシェルパなんてものはなかったわけです。だから、それは間違いなんだけど、それ以降はどうだったか。吉野さんからロンドン・サミットや何かの話を聞かなかったですか。

佐道 若干ですけども、断片的にお話しになっています。

宮崎 吉野さんは事務屋というんじゃないんですね。非常にアイデアマンで。だから、事務的につめてガチャガチャやるなんていうのは、あまり好きじゃないんですね（笑）。

北岡 どうもそんな印象だったような（笑）。

宮崎 そこで、エネルギー以外の東京サミットの、一般にあまり知られてない点を最初に申します。第一が、いわゆるマクロ的な

経済の問題。これがどのサミットでも最大の問題。この前、機関車論の話をしましたけど、つまり対日批判というのがいままでたくさんあったというのを、ボンのときもありましたけども、私の段階でかなり潰してきたわけです。それから東京サミットでも、その前の段階でいろんなところからいろんな議論が出てきたわけです。そういうようなことを回避するために私のアイデアは、ひとつは、短期的な問題からもう少し観点をかえるということです。つまり、短期的というのは景気循環とかなんかの問題から、OECDも若干そうなんですけど、OECDの経済政策委員会、ないしはOECDの経済政策の基本は、デイマンド・マネージメントなんです。需要管理政策というのかな。デイマンド・マネージメントのためにたとえば財政、金融政策はどういうふうなファンクションすべきかとか、財政はどうあるべきかとか、その間のコンビネーションとか「ファイナンチエーリング」なんていう言葉を使っていたんですけどね。基本的にそういう需要管理政策で、つまり需要が足りないときは需要を増やすような政策を取る。インフレになるような需要過多のときは、抑えるべくマクロの政策でやっていくと。つまり、個別の政策はOECDでは絶対嫌なんですよね。

日本は戦後ずっと、往々にして個別の政策を取ってきたわけです。その後、OECDに入ったりしてあまり取らなくなったんだけど、そういうような短期的な景気循環とか何とかに対応する政策の議論はOECDではずっと行われたし、サミットでもそういう議論が行われていたわけです。たとえば、もう少しお互いの政策はお互いに支持しあうようにしよう。「ミューチュアリー・リインフォーシング」なんていう標語が。どこのサミットで非常に、アメリカや日本やヨーロッパの政策が、お互いにミューチュアリー・リインフォーシング——強化するということのかな、そういうようなことが議論されていた。それをもう少し長期的な問題に目

を向けるべきであるというのが私の考えで、ボン・サミットのと
きもずいぶんそれを議論したんだけど、通らなかつたわけです
よ。東京サミットのとくに、それがさんざん議論した末に通つた
のが文書に残っているんです。それはほとんどプレスに喋つた
だけでも報道されなかつたんです。

「五、われわれは、各国経済の長期的な生産効率及び柔軟性を
向上させるため、一層力を尽くすべきであることに合意する。必
要とされる措置には、投資及び研究開発に対する一層の刺激、衰
退産業から新たな産業への資本及び労働が移動することを一層容
易にする措置、投資及び生産性に対して不必要な障害を与えない
既成政策、若干の公共部門の経常支出の伸びの削減、並びに貿易
及び資本の国際的流れに対する障害の除去が含まれる。」〔資
料・東京サミット宣言（仮訳）〕

これは非常に立派な文章で、いまでも通用するわけですよ。当
時、これをここに入れることは非常に難しかったわけです。とい
うのは、この中にアメリカにとって気になることがたくさんある
わけですよ。またたとえば「生産効率の柔軟性」なんていうの
は、ヨーロッパの経済は非常にいわばスタティックなんですよ。
それから硬直的なところがあるんですよ。

これはまた余談なんですけど、そのあとに、ドイツの大使だった
からボンにいたときかな、在外にいたときに飯の席でよく言った
のは、皆さん戦前の本をご承知かどうか、世紀末から今世紀初め、
ウィットフォーゲルという社会学者、経済学者みたいなのがいたん
です。ウィットフォーゲルが「アジア的停滞性」という言葉を発
明したわけです。訳された本があるんですけど、タイトルを忘れ
ちゃった。『ディ・アジアティッシェ・スタグナチオン』という
の。それをもじって『オイロペイシェ・スタグナチオン』ってい
うことを言うと、ドイツ人がカッコしている議論してくるん
で面白かつたんですがね（笑）。

そういう気配があったところに、たとえばドイツなんかは労働
の移動が非常に難しいんですよ。ドイツってそれこそブレン
ス・リブブリク——各州がまだ非常に強いわけです。言葉も違
うし、北から南に労働を移動するというのが簡単にいかないわけ
です。日本では沖縄の人が東京に働きに来たりなんていうのがわり
と簡単でしょう。ここに書いてあることは当時の日本にとっては、
それからその後、バブルになっちゃってバブルのあとショボンと
しているでしょう。こういう時期だということとは注目されな
いかもしれないけれども、本来これをやっていけばバブルにもな
らなかつたし、ボシヤンともいかなかったという。これをサミッ
トに入れたというのは空前絶後なんです。だから、ずいぶん努
力して私が入れた言葉なんです。

だけど、残念ながら日本ではまるきり報道されなかつたわけ
です。これは一言で言って「構造問題」という名で呼んだんですよ
ね。「構造問題」というと、当時の日本の新聞記者なんかは、産
業構造しか思い浮かべないんです。そうじゃなくて労働市場の問
題とか生産性の問題とか、資本市場の問題とか全部含めた、短期
的に対して長期的な問題を「構造問題」と言っていたんだけど。
「構造問題」がやかましくなったのは、日本が構造問題について
槍玉に挙げるようになったずっとあとのことですね。この当時は
専ら日本は国際収支が黒が大きすぎるとか、短期問題で機関車論
だとかやられていた時期なんです。これを入れたというのが一つ
のポイントであつたと思います。

それからちよつと逸話的なだけでも、シエルパ会議。何回
目かの会議のときにアメリカはオーエンが出ていたんです。その
オーエンの補佐として、さっき言ったディック・クーパーという
経済担当の国務次官が来てきたことがあるんです。彼が三ペー
ジぐらいの紙を出しまして、ある意味では先見の明があつたと思
うんだけど、二酸化炭素〔CO₂〕の規制をやることをサミットの

宣言の中に入れてくれと。バックグラウンドを含めた二、三ページの長い文章を、サミットの宣言の中に入れてくれということをお願い出したわけです。ところが、欧州勢は、〇〇の問題は当時はその前にどこか専門機関みたいなところで検討したくないですね。それをいきなりサミットで出すなんてことは、とても出来ないということだったし、私は国内に相談しなかったんだけど、相談したらおそらくヨーロッパと同じような反応があるだろうと思って、ヨーロッパ勢の言うのに任せておいてね。アメリカがワイワイ、ワイワイ言ったので、その妥協案を作ったのがね。とにかくエネルギー問題の中に、

「われわれは、代替エネルギー源、とりわけ、一層の汚染、特に大気中の二酸化炭素及び硫酸化物の増大を防止することに役立つ代替エネルギーも拡大する必要がある」〔資料・三項二段落目〕という恰好で、アメリカの顔を立てたわけです。〇〇という言葉は入ったわけで、これだとヨーロッパ勢も。これは私が出した妥協案でまとめた。それが〇〇なんです。これまた今まで全然報道されてなくて、いまでこそ〇〇は騒いでいるんですが。私もそこまで考えなかったんだけど、もっと大々的に入れておけば、ずいぶん前から〇〇の問題が意識に上ったのかもしれない。ただ、当時は日本の中でも意識はなかったわけです。ちなみに日本は、いわゆる環境問題とか公害問題については非常に先進国のつもりだったわけですけど、〇〇の問題は当時の日本でもまるっきり議論されていなかったんです。

北岡 大きな国際会議でこの問題が出てきたのは、わりあい唐突だったんですか。

宮崎 唐突だったんです。

北岡 クーパーさんが持ってきたというのは。

宮崎 そう。アメリカは時々やるんです。前に言いましたCIECのときにもね。ちなみにCIECの首席代表は、アメリカの

クーパーの前任の国務次官なんです。ちょっと名前を忘れちゃったけど、ビジネスマンで大きな会社の社長をやった人。それなんかも、突然として案を出すとか非常に困るんですね。現地にいる代表团としては、まるきり予期しないし、それについて本國に質していると本國もよく知っていないから、いろいろゴタゴタして簡単に通らないでしょう。アメリカというのは、外交的に見てそういうやや未熟なことを時々やるんです。それは別として。しかし、〇〇の前の段階。これは若干矛盾するんですけどね。というのは、「石炭をもっと使え」ということがあるでしょう。これは私は非常に躊躇したというか、賛成しなかったんだけど、ドイツとしては非常に強い要望でね。ドイツというのは、あとで申しますけれども、エネルギー源としては石炭と原子力しかないんです。そういうところで。

つまり、〇〇を減らすんだったら、石炭がいちばん悪いんですよ。石炭の次は石油。それから天然ガス。原子力。原子力は〇〇がゼロです。それが書いてあるということは矛盾じゃないかという指摘を受けてもしょうがないことで、それは妥協の産物で、一方でアメリカの顔を立って〇〇という言葉を一文字入れ、他方はドイツの顔を立ってこういうことも入れるということをやらざるを得ない。みんな妥協ですから、こっちが主張しづらいぶん落としていくわけです。対日批判を(笑)。その代償とかを出さなくちゃいけない。そういうやりとりの結果、出来ているものですかね。

北岡 ただ、これはアメリカから出てきたって。アメリカはいまに至るも〇〇問題であまり熱心な国ではないですよ。

宮崎 そうそう。それから当時、どういう背景でそうなったか分からないんだけど、つまりここで決めることによって国内をひっぱっていかうという魂胆があったと思うんです。だから、クーパーの背後で誰がこれをプッシュしているのか、忙しかった

んであまり調べる暇がなかったんです。誰かそういう……。サミットを利用しようというのは、アメリカはよくやるんですよ。「ここで決まったんだから」というので、国内を抑えるように使おうというね。

北岡 具体的には、二酸化炭素を入れることはドイツがかなり消極的だったんですか。

宮崎 いえ、みんな。ヨーロッパ勢全部。というのは、内容的に反対というか、思想的に反対というより議論してないじゃないかと。議論していかないのがいきなりシエルパ会議に出すのはどうだと。国際的な専門機関でさんざん議論したり、二カ国か三カ国で議論したのちにじゃないと、準備が出来てないからそんなものとはとても受けられないって、そういうロジックだったです。

北岡 前に言われました第五項のほうはどうでしょう。五項は、つまりこういう構造問題に入ること自体が非常に新しくたわけですね。構造問題に入っていくことに対する消極性ということと、それから具体的な何々のフレキシビリティとかそういうことについての判断、具体的な個々のポイントについての反対と、どっちが多かったんでしょう？

宮崎 その問題を取り上げること自体に対する反対が強かった。ボンのサミットのときにいろいろと私は言ったんだけど、機関車論に対してどう言うかと。ひとつの論拠としては、機関車論はもっぱら短期的な景気循環、世界の景気循環とか何かの問題でしょう。だから、そうじゃなくてもっと長期的なものに目を向けると。なぜヨーロッパが停滞したとか。そこまで言わなかったけど、デー・オイロペイシェ・スタグナチオンが出てきたとか、アメリカは大変な赤字になったとか、そういうことの元にあるものは何であるかということ議論しないで、目先の問題ばかり……。

北岡 そうすると、この場合、二回続けて宮崎大使がシエルパを

やっておられたことは非常に重要だったわけですね。

宮崎 そうそう。

北岡 前に議論して、そしてちょっとみんな納得しなかったのをもう一回プッシュしていったわけですね。

宮崎 そうそう。

北岡 これは背景が、日本国内の指示とかは。

宮崎 全然ない。

北岡 ないですか。かなりご自身の個人的なイニシアティブでやられたと。

宮崎 そうそう。だって、国内に話しても、国内でもさんざん柔軟性がどうだとか、むちゃくちゃになっちゃうから。

北岡 外務省は、他の省庁に関係する余計なことを言うなっていうのがあるかもしれませんね（笑）。

宮崎 「経済政策の根幹に触れるようなことを言うな」って言うでしょう。

北岡 やっぱりあるでしょうね。

■東京サミットでの原子力問題の扱い

宮崎 だから、シエルパというのはわりあい出来るわけですね。いまはどうなっているか知らないけども、私のときはかなり権威があったもので、他の省から文句を言ってきたりも大して……。だんだん外務省の権威が落ちてきた。

ちなみに川島〔裕〕って新次官ね。最近専ら政党が言うことが正しくて官僚の言うことはだめだという風潮になっちゃって嘆いていたけど、私のときはそんなことはなかったわけですよ。

それからもうひとつ、これはかなり重要な問題なんですけど、原子力の問題なんです。「今後数十年において原子力発電能力が拡大しなければ、経済成長及び高水準の雇用の達成は困難となる

う。これは国民の安全を保障する条件の下に行われなければならない。われわれはこの目的のために協力する。この点に関して、国際原子力機関（IAEA）は中心的役割を果たしうる」と。これも私はこの通りだといまでも思っていますけど、抵抗がものすごかったわけです。というのは、カーターというのが原子力反対の選挙で出てきたわけです。それから、国によっては反原子力の政治家が非常に強いのあるんです。これはひとつは、ドイツが入れてほしいと言ったわけです。というのは、当時のドイツの国内の政治情勢で、シュミットが首相で、社会民主党（SPD）の内閣なんですよ。ところが、SPDの左派は原子力反対なんですよ。大変な反対なんです。あとで私がボンに行ったときお話したいと思いますが、シュミットが重点を置いたのは三つなんです。一つは、いわゆる中距離ミサイル、パーシング2の問題。それからもう一つは、国際経済に関する彼のアイデアの貫徹。ジスカールと一緒にユーロの源を作ったんです。三番目が原子力なんです。その三つだけはどうしても自分のイニシアティブでやりたいという。それ以外の政策は左派に任せた。その関係でドイツ経済が悪くなったんですけど、それは別問題。そういうことがあるんで、ここでサミットで原子力問題についてできるだけ前向きの紙を書くことによって、シュミットの立場が強化されるわけです。日本でも原子力反対が非常に強いでしょう。私は、ドイツ側の希望を満たすべきであると。これに対する抵抗は、アメリカやなんか。OECDに議論させたら、もう大変な抵抗なんです。たとえばスウェーデンなんかそうです。原子力を「将来」ストップするというのは、いつだったかな。

股野 国会の決議がその少し後ですね（一九八〇年）。

宮崎 スウェーデンでもそうだし、いろんな国で大変な反対があるわけです。それをとにかく入れることにしたわけです。

北岡 それはすごいですね。アメリカの大統領が反対しているも

のを入れるというのは（笑）。

宮崎 もう一つ、ここに出ていないことで、もっとすごいのがあるんです。ただ、これは一切公表してないものだから、いまの時期に公表されると、いろいろと迷惑を被る人がたくさんいる。もともとこれは公表するということじゃないんでしょう。

北岡 公表するとしても、当分先の話です。

宮崎 私が死んだずっとあとね（笑）。要するに原子力発電というか、原子力平和利用については、一つは当時、日本の国内の問題があったわけです。日本の国内で最大の当時の問題は、原子力発電のいろんな各段階について、ウラン濃縮だとか、やれ何とかとかんとか各段階について、箸の上げ下ろしについてアメリカの干渉を受けていたわけです。日本の原子力関係者は、それほど箸の上げ下ろしまでいちいち束縛されないで何とかならないかという希望があったわけです。私もそれはもともとだと思っていたんです。サミットで議論すれば、という感じをボン・サミットのとくに思っていたんです。ところが、これはドイツが絶対反対だというので、ボンで日の目を見なかったわけ。それで、いろいろ東京サミットでもこれをどうするかということについて、ドイツから非常に強い要望があって、向こうの専門家の意見も聞いたんです。要するに、非常にはっきり言えば、シュミットとしてはカーターがアメリカの大統領でいる間には、原子力問題をアメリカと議論したくないという非常に強い希望があると言ってますよ。私に説明してくれた次官が、「サミットで議論したら、日本のおまえが言っているように、非常に細かい干渉を排除されるというメリットがあるいはあるかもしれん。しかし考えてみる。サミットのメンバーのうち、アメリカとイギリスとフランス、とにかく核兵器を持っているし、核不拡散防止条約の会議やいろいろなことがありまして、それぞれの立場が違うんだ」と。それから、カナダはアメリカと一体みたいなものでね。したがって、ここで議論

した場合に、日独伊だけが孤立した立場なんだと。しかも、カーターがああいう態度を取っているんだから、カーターのいるところで原子力問題を議論したくないと言っただけです。

そのために彼らが説明してくれたのは、いろいろな原子力に関する国際的な会合が、数年前からオーガナイズされていたわけです。ひとつは、IETG（国際エネルギー技術グループ）という会合なんですよ（一九七九年十一月〜八〇年三月に会合）。それから、まだ一つ二つ別のがあって、そういう国際的な会合で原子力の平和利用というか安全性とか、専門家が議論しているんだから、その結論が出るまでサミットでは議論すべきではないということだったわけです。ということをおアメリカに話をしたら、えらいことになるわけでしょう。「だから、おまえの一存で、最初にする案からそれを除いてくれ」と言うんですね。だから、それは除いた案を作って回したわけです。それで、アメリカが気がつかなかったんです。いまでも気がついてないと思いますよ。

というような経緯で、つまり原子力問題についてこの数行しか載らなかったという背景には、そういうことがあるということ。北岡 最初の宮崎大使の構想は、もし文章にしたとしたら、どんなような文章になるんですか。

宮崎 あんまり固まった文章はなかったけれども、要するに各国の自主性に任せて、安全性を確保するか、拡散は防止するか、その範囲内で各国で原子力発電を自由にやりなさいと。そうは書けないけれども。

北岡 原子力の平和利用を各国自主的にやることを歓迎するといふか、そんなようなことが……。

宮崎 そういったようなことね。それは、書き方によっていろんな案がありましょうけどね。

北岡 それがもし出来たらアメリカは相当、カッとなったに違いない。なるほど、なるほど。

宮崎 ドイツに説得されたわけですよ。

北岡 日独伊って敗戦国ですよね（笑）。だから、核兵器を持ってないんですね。

宮崎 当時、シュミットとカーターというのは本当に仲が悪かったんです。だけど、それ以外にもカーターに対するヨーロッパ人の批判が強かったわけです。これはドイツ人じゃないんだけど、「エニワン・バット・カーター」——「ABC」と言っただけ。ABCというのをよく……（笑）。

北岡 先ほどの第五項とか三項の中の〇〇の問題とか、これは国内の指示はあまりなかった、あるいはある程度宮崎大使の独断でおやりになった。

宮崎 そうです。

北岡 大平さんはどうだったんでしょう。

宮崎 大平さんにもあんまり相談しなかったです。

北岡 そうですか（笑）。よその国の場合は、やっぱりシエルパを通じてきた話でも、シュミットさんの意向だという話があるわけですね。でも、日本の場合、大平さんまであまり……。

宮崎 大平さんは何も言わないだもん。何らの指示がないわけですから。

北岡 報告はされたわけですか。

宮崎 報告はしましたけど、具体的な指示はまったくありません。だから、要するに「おまえに任せるからよろしくやれ」というような趣旨。いろいろとエンカレッジはされたけれども、そういうような独断専行は今後はできないでしょうね。

■東京サミットの宣言を起草

北岡 それから、さっきチラッとおっしゃいましたけど、こういう宣言というのは草案を大使が書かれるんですか。

宮崎 東京サミットのときは、草案はね。

北岡 主催国のシエルパが用意すると。

宮崎 そうそう。だから、それは非常に難しいわけですよ。というのは、いろんなよその省の大臣がいるでしょう。各省もいくつかいろいろ言ってくるわけですよ。ところが、案を作って各国に回さなくちゃいけないわけです。その案をほかの省の人に示して意見を聞いたりしたらね。よく私はこういう言葉を使うんだけど、ウイスキーの水割りね、シングルとかダブルとかあるでしょう。だから、プレインソーダみたいになっちゃうと思う(笑)。各省全部言うことを聞いて作ったら、プレインソーダを七カ国に回すわけにいかない。したがって、内容はだいたいこういうことでと口頭でいろいろ説明するんですけど「任せてくれ」と言って押し切っちゃってね。最初の案なんかはどこにも示さないで、各国に、いろいろリアクションがあるでしょう。それでだんだん出来ていくわけですよ。その過程でもあんまり示さなかったんです。というのは、ひとつひとつの項について、いま一端を申し上げただけで、それぞれの国の国内の問題とか、いろんなことがあるわけでしょう。日本の中の国内の問題がたくさんあるわけですよ。一度火を付けたら、もう収拾がつかなくなるんですよ。だから、「ここまで言って大丈夫だ」という私自身の判断でやる以外にしようがなかったわけです。

北岡 それはよその国の場合もそうなんですか。

宮崎 よその国の場合は、たとえばヘンリー・オーエンなんていうのは、カーターの言うことを後生大事に抱えて持ってきたし、ホルスト・シュルマンというドイツのあれも、シュミットから言われてその通りにやっていた。フランスはどうもそういう気配はないんですよ。あんまり発言しなかったんだけど、前にも言ったクラピエさんというフランスの中央銀行の総裁は、ジスカール・デスタンの学校の一年上かなんかで個人的に親しいんだけど

事務的な詰めはほとんどない人で、ジスカールと話をしている形跡があまりないんですよ(笑)。だから、フランスの他の人も話をしていない。

イギリスは、サー・ジョン・ハントという人ね。内閣書記官長だから、彼が閣議にずっと出ているわけでしょう。だから、イギリスの立場はどうだということをかなり心得てやっている。しかもハントの場合は、キャラハンからサッチャーに変わったわけです。サッチャーは、なったばかりで何も分らないでしょう。だから、ハントは相当、独断専行をやっていたようです。だから、人によってずいぶん違うと思います。

ちなみに、ハントと何回か会ったときに、サミットについていろいろ思い出話みたい。非常に困ったというのは、ヘンリー・オーエンというのは当時、サミットの専任みたいになって、ハントのところをやたらに電話をかけてくるというんですよ。「俺は仕事がたくさんあるんだ。おまえもそうだろう。非常に迷惑なんだ」って(笑)。

たしかに、シエルパにそれぞれ自宅の電話番号を交換していたんです。夜、オーエンとクラピエの二人は電話をかけてくるんですよ。でも、自宅にかかってくるというのは非常に具合が悪いんですよ。誰もアシスタントがいないし、資料も寝室には置いてないしね(笑)。向こうは「これは言いたい」と思って用意して考え抜いて言ってくるわけでしょう。

北岡 それはそうですよね(笑)。

宮崎 そういうことがあったんですが、それはともかくとして。ハントから終わってから「これについてもを書かないか」と。「いや、書く気はない」「俺のところもずいぶん来ているんだけど、やっぱり書く具合が悪い面がたくさんあるから書かない」と言っていたんだけど、「それじゃあ書かないことにしよう」といってこうしたわけです。

北岡 そういう申し合わせがあったんですね(笑)。

宮崎 書くと、シュミットとカーターがまったく仲が悪かったというこの具体的な例証はたくさんあるんですよ。そういうのを出せば、シュミットはまだ生きていますからね。カーターも辞めたけど生きていますね。

北岡 シュミットさんの書いたものの中にもチラホラ出てきますね。カーターといかに折り合いが悪かったか。

宮崎 それで、案を作るでしょう。かなりまとまった段階で、ある程度こういうものだと見せるわけですよ。そうすると、必ず新聞に漏れちゃうんですよ。ほとんどそれは通産省から漏れるんです。というのは、大蔵省はわりと秘密主義だし、自分が直接関わっている部分があるし。それから大蔵省は、私の場合は財務官が最初は松川だったかな、二回目は佐上だったと思いますけど、大蔵省は、私から情報を得たいので私が必要とする情報に相当のことを提供してくれるわけです。局長レベルでは全然なくて、いろいろなことを知っていたんだけど、大蔵省は口が堅いんですね。通産省というのは、サミットの準メンバーなんです。通産大臣は招待されていないわけですよ。たまたまドイツが、いまは違いますが、当時、外務大臣がゲンシャールで、FDP(ドイツ自由民主党)という。それから経済大臣もFDPなんですよ。あとになつて、ラムスドルフが経済大臣になったのかな。それから、大蔵大臣がCSU(キリスト教社会同盟)かな。そういうのがあって、片方だけ出すわけにはいかないので、しょっちゅう大蔵大臣と経済大臣がなんかの恰好でもぐり込んでくる。日本も大蔵大臣とか通産大臣をいつも連れていって、外務大臣会議に出させない、全体会議も出させない。大蔵大臣会議のごく一部の時間を通産大臣が代わって出るという。議題によって貿易問題の議論になるときとか、エネルギー問題が議論になるときは、ごく一部出るという恰好になっている。したがって、通産省というのは非常にやっ

かみが多いわけですね。それから、もともとプレスに対してルーズなものだから、案を渡すと新聞に出ちゃうんですよ。そうすると、「東京宣言がまとまる」とか何とか言ってるね。本当に困る……。

北岡 そうですか、通産省から漏れたんですか。よく出ますよね。

■エネルギー問題では二つの草案を用意

宮崎 だって、外務省は自分でやっていると不利になりますからね。国内でも、それから対外的にも不利になるから出さないし、大蔵省は口が堅い。専ら通産省です。毎回。だから、通産省にはそういうふうな細心の注意を払わざるをえなかったわけです。

このエネルギーについても、いろんな過去の経緯があるわけですよ。ひとつは、その前にストラスブールで当時はECの閣僚会議だったか首脳会議があって、EC全体としては石油の輸入をいかに抑えるという合意が出来たんですよ。そのときにもフランスは国別に、フランスはいくら、ドイツはいくら、イギリスはいくらって決めようとしたのが通らなくて、EC全体の枠が決まった経緯があるんですよ。ところが、フランスはそれに対してあくまで反対。それから、アメリカは本来はそれでいいはずなんですよ。ところが、カーターという人が、ECがひとつになつて何かやるということについて非常に反感を持っていたわけです。非常にナイーブな反感だと思えますけど、カーターという人は非常にナイーブな人だと思えます。そういうようなバックグラウンドがあるわけです。

それで、シエルパ会議でもいろんな議論があったんですが、かなり強引に私の判断で抑えましてね。たしかシエルパ会議では、二案作って首脳に提出したわけです。そのときにフランスのクラピエは反対しないわけですよ。だから全会一致で。反対は若干

あったんだけど、とにかくフランスの顔も立てるという意味で、たしか二案作って出したんです。ところが、ジスカー・デスタンがフランス案が入ってないとかなんとかワアワア言い出してね。あとで聞くと、その当時はエネルギー問題が大事だということで、ジローというフランスの工業大臣だとか、シュレージンジャー、アメリカのエネルギー長官がくっついてきていたわけです。特殊なとき以外は会議場には入れないんですけどね。

ところが、クラピエはジローの話なんか全然聞いていないわけですよ。シェルパがあんまり大物だと、非常に大事なことで小物の話を聞かないということかなんか知らないけど(笑)。したがって、他方ジスカーはジローに命じたから、それが通っているものと思っていたらしいんですが、とにかくそれでむくれちゃったんですよ。それでゴタゴタしちゃって、私のところにまた差し戻されたりしてね。

その場合に、ドイツはストラスブールでかち取ったように、EC一本で行きたいという強い主張だったわけです。それで、あんまりはっきりしたコミットをしたくないわけ。というのは、さっきも申しましたように、当時のECの中でイギリスは北海の石油があるでしょう。だから、輸入石油の依存度は忘れちゃったけど、ある意味では産油国ですよ。何パーセントかになるわけです。石油と天然ガスの両方があるんです。それからフランスは、エネルギーの八〇パーセントぐらいは原子力に頼っています。その当時の数は七〇だか八〇だか、もっとかもしれませんがね。だから、石油についてはわりと重要性が少ないわけですよ。ところが、ドイツはエネルギー源は石炭しかないんです。ところが、その石炭が高いわけです。石炭を使えば使うだけドイツの産業は国際競争力にマイナスになるわけです。だから、ドイツの石炭をいくら掘るかとか何とかいうのが毎年政治問題になる。しかし、石炭は掘っているし潰すわけにはいかない。石炭しかない。だから、

石油に依存するのが大きいということがあって、ECの中の国の対立がかなりあったわけです。

それからもうひとつ、その前にIEAというところでも議論したんですよ。当時はIEAにフランスが入っていないわけですよ。あとで入りましたけど、前にも申しましたように、IEAにフランスが入らなかつた理由は、表面上はアラブに対するコンフロンテーションを避けたいということなんだけど、内実は票決権でフランスがずっと下のほうになるところに政治的プレステージが許さんという問題があつて、当時は入ってなかつたわけです。したがって、IEAの議論にも、あるいはストラスブールの議論もチャラにして、サミットで採りたいということでジスカーが来たわけです。せっかくシェルパの段階では私がかかなり強引に押えていたのが、そこで出てきちゃったわけです。ジスカーが利用したのは、カーターの考えなんです。カーターは本来、石油の輸入枠なんていうのは、あまりとやかく言う必要はない。というのは、アメリカは産油国ですから、全然ワアワアいう必要がないわけであつて、それがEC一本だろうが国別だろうが、エネルギー政策としては関係ない。だけでも、カーターの非常にナイーブな考えだと思っただけど、EC一本で何でもやるということについて大変な反感があつたらしいんですね。そこで、それをジスカーが利用して、そっちのほうにジスカー案を通すように、最初の一日目の晩にそういうふうを持っていった。ちゃった。

他方ドイツは、結局、最後まで日本に対して「日本が反対してくれ」と言っていたんですけど、シュミットがもう降ろされちゃったわけです。これは本当にドイツの土壇場での変身なんですよ。

北岡 ドイツが下りちゃったわけですね。

宮崎 そうそう。それからカーターは、本来は国別の枠を作るということ自体に賛成ではないというのをヘンリー・オーエンから

聞いていたわけですよ。ところが、このエネルギー問題についてはジスカーールとカーターの芝居にやられちゃって、せっかくシエルパの段階で積み上げてきたのがダメになっちゃったということなんです。そこでいろいろあって。

ところが、枠を作る場合に日本の枠はいくらになるかというのは、それこそ経済成長率を左右するとかいろいろなことがあって、通産省も経企庁もカンカンなんです。しようがないから急遽、エネルギー大臣会議というのを、たまたまシュレージンジャーとジローが来ていたものですから、江崎〔真澄〕通産大臣にやるように仕向けてやったわけです。ところが、全然そこで妥協成立せず、江崎さんとしては「俺はつぶばった」という実績を残したいんでしょけど、まるきりね。七〇〇万バレルかなんか忘れちゃったけども、一步も下りないという。それで決裂。

その間に私自身、ジローとは話をしなかった。シュレージンジャーと話をした。ところが、シュレージンジャーはまた非常にひがんでいるんです。というのは、サミットになるとオーエンが全部取り仕切っちゃって、俺の言うことは十分インプットされないということ、廊下でポツンとしているのをいろいろ話したりしたんだけど。とにかくジスカーール、カーター、シュミットが下りちゃったものだから、枠を作ること、枠の問題になって。それでしようがないから、私がいぶんオーエンと話をした。アメリカはこのへんだったらいという感触を得たわけですよ。

ところが、それが国内では「とんでもない」という。江崎さんにしても、それから小坂徳三郎が経済企画庁長官だったものから、経企庁なんか何年計画って作っているでしょう。それが大幅にダウンしちゃうというね。枠がいくらってダウンしちゃうというところで、絶対飲めない。そんなことしたら内閣が潰れるとか、いろんなことを言ってきたわけですよ。それで、次の二日目の本会議でその問題が議論されて、大平さんは国内で江崎さんとかの関

係もあるし、ある程度がんばって。そうしたらジスカーールが怒って、何回も休憩せざるをえなかったわけですよ。それで私から、オーエンとの話で、このへんだったらアメリカは大丈夫だという話をしていた。ところがジスカーールが降りない。

で、呼ばれまして、「おまえはジスカーールと直接話をしてこい」というんです。それで私は直接ジスカーールと会って話をした。ジスカーールというのは非常にスタイリストなんだけど、緑色のインクが出る万年筆を使っているんですよ〔笑〕。彼がいろいろな案を書くわけです。だから、大変なドラフターなんです。英語でサーッと。飲めないというので、じゃあこれじゃどうだというのを書いてね。私はそれは飲めないと言って。結局、ジスカーールと話をした。「努力する」というような字を入れたんです。どこかに書いてありますよ。石油の。

ひとつは、ジスカーールと話をした。そこで合意したのは、幅を持たせたこと。六三〇万〜六九〇万バレル。これは日本の国内では六九〇万の一点張りでもいいわけですよ。だけど、それではいろいろと日本だけ優遇されているという批判があるから六三〇万というのを仮に書いて、そのあとは私が書いてジスカーールに飲ませたというかな。「最善を尽くすものである」と書いてあるでしょう。だから、最善を尽くせばいいんですよ〔笑〕。

北岡 しかし、変な言葉ですね。「範囲を越えない水準」というんですか。越えないなら上限だけ書いておけばいいんですよ。それが国内外の両方の意味合いがあるんですよ。

宮崎 それはジスカーールと二人でやったんで、英語も少し変な英語ですから〔笑〕。そういう経緯があって。

それでさんざんあとからいろんな人から怒られたというか、コンプレインが来たわけですけど、大平さんが飲んじゃったからそれでいいということで、私に対する批判は蹴飛ばしちゃったんだけど。そのあとで石油輸入実績を見たら、六三〇万を越えた年は

全然ないんですよ。だから、ダブダブなんですよ。ということも、私は分かっているだけですね。

北岡 そうですか。

宮崎 だけど、七〇〇万というのが長期計画のなんとかとか、通産大臣江崎真澄とかがごちゃごちゃ言っていたけど、小坂徳三郎が何回も電話をかけてきてね。高等学校の先輩でもあるんだけど、前から知ってはいるんですけどね。えらい剣幕で、直接大平さんに言えないものだから、当たり散らして来ましたけど。とにかくそういうことで、その案を持って大平さんに「これでセットしました」と。大平さんもそれを読み上げて、誰も文句を言わないのでおしまいということになったんです。シエルパでせっかく抑えてきたのが最後に爆発しちゃったという、思いがけないことであつたわけです。

北岡 いちばん最初にシエルパで二案用意されたと言われましたですね。その二案は、どういう違いがあつたんでしょうか。

宮崎 ちょっと記憶がはっきりしてないんですけど、国別みたいな何やらね。ひとつは、国別ではないやつ。もうひとつは、国別の色彩があるんだけどあんまりはっきりしない、モヤモヤとした表現だつたと思います。

北岡 なるほどね。では、国別案に若干歩み寄つたところもあつたわけですね。

宮崎 そうそう。だけど、国別でがっちりとした数字を決めるといふ恰好ではなかつたわけです。だから、ふわふわとした表現で。

北岡 それから、日本が最初に七〇〇万と言つたときは「とんでもない」という恰好の反応だつたと思うんですけど、それがよく六九〇万で納得したもんですね。

宮崎 それは（笑）。ジスカールを孤立させるように持つていったわけです。つまり、アメリカのオーエンを口説いて、アメリカ

とはだいたいこのへんで手を打って。

北岡 なるほど。ジスカールさんを孤立させたわけですね。

宮崎 だから、サミットの本番でワアワア言つたわけですから。本番でワアワア言うのは、孤立している人が言うわけですよ。

北岡 そうですね。これは船橋さんが書いておられるように、ジスカールが最初にフランスが入っていないと言つて、というのは、大筋はだいたいこれでいいですか。

宮崎 そうですね。入ってないと言つたわけですよ。だって、クラピエはそんなことは言わないんだもの。だから、クラピエというのは大物なんだけど、本当に大人物だと困ることがあるんですよ（笑）、事務的には。安川さんなんかは若干そういうのがあるんだな。かなり大人物ぶっているからね。

北岡 もうひとつ、この際、イギリスはこのコンセンサスを作るのに何か役割を果たしたんですか。

宮崎 自分の北海の石油がどのくらい組み込まれるかということには、さうとう議論してましたけど、北海の石油が組み込まれて、したがつてその結果、イギリスの項がどうなのかということはさうとう関心を持っていましたけど、全体をまとめるような方向には行つていなかった。

北岡 さっきからのお話でいちばん印象的だったのは、宮崎大使がそんなに要らないだろうって分かつていたとおっしゃつたのがね。この頃は、前のオイルショックのときも非常に冷静な分析で予測されておられたし、今回も、かなり価格が効いてきて節約努力が進むということは想像がおつきになったんですか。現に節約が進み始めていたんですか、産業界では。

宮崎 そうです。

北岡 そんな話は聞いたことがないですね。日本の中では、ほとんどさういう意見は稀だったでしょうね。

宮崎 だけど、それは全然外に言つてませんよ（笑）。

北岡 それはそうでしょう(笑)。言っでは。

宮崎 非常に頑張るだけ頑張ったということは事実です。シュレージンジャーではだめなんですよね、話にならない。やっぱりオーエンのほうが話は分かったわけですよ。オーエンとの間の話でもっていったというわけです。

北岡 いまのような話まではなさらないんですか。つまり、六九〇万とあって絶対そんなことにはならないから。そんなことは言わないでしょうね。

宮崎 絶対に言わない。振り返ってみると、六三〇万でもダブダブだったという事実ですよ。だから、なぜ江崎さんとか小坂徳三郎が内閣が潰れるとまで言って脅かしてきたかというのが分からなかったんです。

北岡 分らなかったと思いますね。メーカー自身も生産はそんなになかったんでしょうね。節約できるという。なるほど、なるほど。

宮崎 少し余談みたいなことなんですけど、最後はそういうわけで差し戻しになって、首脳に上げる案を作れということになって。ところが、オーエンの場合はクーパーとソロモンという両次官がくっついてきているわけでしょう。それから、各国ともシェルパ以外にいるわけですよ。日本もいたわけですね。私の提案でシェルパしか入らない会議をやるから、そのように心得て来てくれと。迎賓館の一室で、やり出したわけです、夕食後からずっと一所懸命、鉛筆を舐めてね。それこそヒートッド・デイスカッションですよ。クール・ヘッデッド・バット・ヒートッド・デイスカッションをやっていたの(笑)。

その最中に夜遅く、サッチャーがその部屋にやってきちゃったわけですよ。これはまったく予期せざることで。ただ、宮中晩餐会が終わってやってきたらハントがいなくて、どこにいつているか探せとかなんとか言ったららしいんだ。それで、二、三人連れ

てサッチャーが来ちゃったわけ。せっかくシェルパだけでやるうとしていのに、サッチャーや二、三人に入られたらとても困るでしょう。もし居すわられたら大平さんも呼ばなくちゃいけないですよ。しかし、サッチャーはさすがに心得ていて、入って顔を出すなり「この会合の議長は誰だ」というから「僕だ」と言ったら、「自分がここに入るのはおまえの許可が要るんだ」と言うから「そうだ」と言ったわけです。そうしたら「許可してくれるか」と言ってくるので、「ノー」とも言えないんだ(笑)。それでしょうがないから。そうしたら、宮中で聞いた雅楽が一体どういう歴史的な背景でどうのこうのって質問されて、僕は宮中で雅楽をやるということ聞いてないから、どんな雅楽をやったのか、そんなこと全然、忙しくてそれどころじゃない(笑)。ロジスティックは全部、梁井(新一)君がやっていたわけ。だから、そういう質問が出てまったく閉口した。しかし、一〇分ぐらいで帰っちゃったんですよ。それで助かった。サッチャーは代わりたてなんですよ。サミットも初めてだし、どういっていいかも分からないし。だから、サッチャーの場合はハントのアドバイスが非常に効いたと思います。次からは駄目なんですよね。彼女は独断、ワンマン……ワンウーマンだけ。

北岡 雅楽の質問をすべき場所かどうか、見れば分かると思うんですけど(笑)。

政治問題も取り上げた東京サミット声明

宮崎 それからまったく別の話なんですけど、サミットでは政治問題は一切議論したくないとジスカール・デスタンは言っているわけ。フランスの非常に強い決意だったわけです。だから、これは専ら経済サミットである。政治問題は安保理事会でやるんだ、議論してはいかんというのがずっと続いてきたわけです。

ところが、政治問題かどうか知らないけど、非経済問題で初め

てサミットの宣言が出たのは、ボン・サミットのときのハイジャックに関する宣言なんですよね。これが、シェルパの会合でもまったく一言も議論にならなかったことなんです。ところがいきなり、ハイジャック問題がライムライトを浴びたことになって、これは主催国のドイツが非常に強く主張した。殊にゲンシャーが強く主張して、ハイジャックに関する声明を作るといふことを言い出したわけです。それで福田さんが私にどうするかといふんだけど、随員の中にハイジャックの専門家がいないんですね。予期してないから。ハイジャックの専門家というとおかしいけれども、つまりハイジャックの場合の国内法がどうなっているか、国際的にはたとえば航空協定がどうなっているとか、その他エトセトラ、ハイジャックに関連する国内の法令とか条約とか、そういうものを一切知っている人がいないわけです。それにいちばん近い調査部というのがあったでしょう。あとで次官になった、イギリス大使をやっている林〔貞行〕君が、たしか調査部の何とか課長で来ていたんです。経済関係以外は彼だけしか。「おまえ出る」と言っただんなかの会議に出させて、出来てきたのがこういうものなんです〔資料〕。

非常に心配したのは、「航空機の運行を停止させるため」、それから相手国の航空機も止めるといふ趣旨の文句がありますよね。ところが、条約の航空協定があった場合に、そういうハイジャックなんていうのは予想してないから、ハイジャックがあったらすぐに飛行機が飛べるとか、出さないほうがいいけど、向こうから来るやつを止めるかといふのが法的に出来るかどうかといふのは、若干疑問があったわけです。といふことを、たしかこの件はシェルパのほうに下げ渡しにならずに、外務大臣会合で決めるということになっちゃって、園田さんが出たわけです。園田さんにそういう点分からない。本当にそういう航空協定があるかど

うかも分からないしね。たとえばハイジャックする国というのは限られているでしょう。そういう国との航空協定があるかどうかも分からないし、はっきりしませんといふことを言ったんだけどね。とにかく外務大臣会議、これはゲンシャーの非常に強い主張だったわけです。飲んじゃって、こういうのが出たわけです。

ちなみに、このあとで日本に帰ってから外務省の幹部会で、私に対して「これをなぜ飲んだんだ」と言う話をしました。たまたま園田さんがいたわけよね。園田さんが、「とてもそんな雰囲気じゃなかった」といふ一言でお終いになったんだけどね。反対することが出来なかったんでしょね。しかし、いずれにしてもこれが非経済問題のサミットの文書の初めなんです。

東京サミットのときに非経済問題も作ろうといふことで、これはシェルパの会合じゃなくて別に根回しをして、それで見習おうとしたわけですよ。その結果、二つ文書が出来たわけです。もうひとつは何だったか忘れたけど、一所懸命やったんだけどフランスにブロックされて出来なかったんです。当時のかなりのトピックスだったですけどね。中東問題だったか何か知らないけど。三つ作ろうとして、その結果、二つできたわけです。ひとつはハイジャックに関するプレスリリースと、もうひとつはサミットの特別声明で、ベトナム問題についての文書が出たわけです。それは私たちは関係してなくて、誰かがやったんです。柳谷〔謙介〕かな。柳谷がアジア局長かなんかだった。ベトナムのほうはね。

それで、だんだんと政治問題がサミットで議論されるようになって、日本が中に入って議論したというのは、私の承知している限り、ウイリアムスバーグの中曾根さんのときね〔ウイリアムスバーグ・サミット、一九八三年〕。そのときの主要議題が中距離ミサイルなんです。パーシング2とSS20。SS20はムーバブルであるよね。福田さんが目から鱗を落とした時と比べると、かなり進歩したわけです。中距離ミサイルのほうはまたあとで、

私がボンに行ったときに話をしたいと思います。

北岡 たとえばソ連のアフガニスタン侵攻とかそういうのは、こういうところでは出てこないんですか。

宮崎 それだったかな、もうひとつ作ろうとしたのは。ちょっと忘れちゃったけど、自分でやってないものだから。それかもしれない。

北岡 そういう問題だったら、安保理で議論しようたってソ連がノーですから、サミットは共同歩調が取れる手頃な場のひとつですよね。

宮崎 だから、フィロソフィーとして、あるいは原則としてフランスはそれをやりたくないということがありますから、実益よりもそっちのほうが大事だということを……。

北岡 アフガニスタンはいつでしたっけ。

井上 七九年の一月です。

北岡 だいぶ遅いですね。それより前は……。

宮崎 何があったかな。年表を見てないんですけど。

北岡 そうしたらイラン情勢ですかね。

宮崎 イランだったかな。要するに中東関係。当時の中近ア局長は誰かな。千葉〔一夫〕だね。だから、柳谷と千葉が一所懸命走り回っていたのは覚えてるんですよ。千葉のほうは、たしかでさなかつたわけです。だから、載ってないわけです。

北岡 イラン革命は前だけれども、しかしアメリカ大使館人質問題は、東京サミットよりあとでした。

佐道 八〇年のサミットで人質問題は。

宮崎 イラン革命はその前でしょう。石油禁輸問題とかいろいろあった、その前ですよ。だから、それかもしれない。記憶がはっきりしてないんだけど、中近東アフリカ局の主管の問題ですよ。だから、ベトナムに関する……。

北岡 ベトナムに関するサミット特別声明ですね。「ベトナム・

ラオス及びカンボジアからの難民の惨状は……」云々。

宮崎 それはだから、日本ががんばって独立声明を作るといっつまり、非経済問題は議論しないという鉄則をそこで破ったというわけです。

北岡 ハイジャックは非経済だけでも、人道問題だから必ずしも政治問題ではないということが入ってきたんですね。

股野 ちょうど難民が噴出して……。

北岡 そうでした。ということは、ボンのときにハイジャックについての声明が出たのはよかったと、世界に広く受け入れられたということですね。

宮崎 ウーン……外務省の一部を除いてはね(笑)。

北岡 外務省はどうして反対なんです。

宮崎 航空協定。詰めが甘いわけですよ。航空協定は条約ですから、条約締結国との間にこういう問題が起こったときに、向こうの飛行機が来るのを日本が拒否できるかという法律論があるわけですよ。

北岡 ただ、これは「努力する」んじゃないでしたっけ(笑)。

宮崎 そういうことを言う人がいるわけです。詰めとしてはね。

北岡 ハイジャックに対して甘い国に対して厳しい態度を取ろうというのは、ごく常識的な(笑)。

宮崎 政治的にはね(笑)。だけど、日本はまったく特殊だけど、条約というのは憲法と同列なんです。国内法で変えられないわけでしょう。だから、条約があって、それに違反した行為を取れば、裁判所にも上げられるわけですよ。

北岡 これは専門家はいないにしても、大使はアルジェリアで多少経験された……。

宮崎 ハイジャック後の問題はありますが、ハイジャックに関する国内法令とかね。いまもハイジャックについての国内法令があるでしょう、ハイジャッカーを処罰するように。いつ出来たのかな。

わりと最近ですよ。

北岡 そうですね。日本は無防備でしたからね。

宮崎 それから、そういったような国内の法令だとか、そういうのだとまるきり政治家じゃないんで、事務屋としてはそういうことを詰めずに簡単にコミットすることはできないというのが原則なんですよ。

その他の問題は、私は直接タッチしてなかったんでね。

■サミット主催国のシエルパの苦勞

北岡 先ほど来出てきました、面白いなと思ったひとつに、サミットが終わった直後に新聞に乗る評価はまったくだめだというお話は、私も、終わっていつもどことが勝った負けたなんていうことは、すぐ分かるのかなというも思っていたんですが、やっぱり怪しげなものなんです。

宮崎 だって、終わったときに宣言をね。これまた馬鹿げた話なんですけど、英語で出来るでしょう。英文と同時に日本語を作って、同時に他の国に遅れないように発表しなくちゃいかんということになってるんで、大変ですよ。一枚一枚別の部屋で日本語に直して、最後に出来たらこれだけ直すというね。バツと印刷して新聞社に配るといふ。そうすると、材料がそれしかないわけでしょう。あとは議長の記者会見とか何とかあるわけでしょう。それしかないから、それまでの若干の取材と記者の主観で書き殴るわけですよ。

北岡 よその国もそんなカバレッジをしているんでしょうか。

宮崎 そうですね。国によって違いますけども、時期によって違いますよ。つまりその国の大統領が、これを大いにPRしたいというときはそうとうサービスする。プレスの数はアメリカがいちばん多いです。その次は常に日本ですよ。

だから、サミットの中身じゃないんだけど、ボンにいますときに二回目のボン会議があって、ドイツのほうも引き受けざるをえなくなっただけでも、ボンというのは、ご承知のように小さな町でしょう。だから、ホテルの問題。殊に新聞記者を泊めるホテルの問題に非常に頭を悩ましたんです。

北岡 そうですね。ちょっと小さいですし、離れたところからのトランスポーターションもありますしね。

宮崎 まあ、そういうのは。ちなみに第一回のボン・サミットで、福田さんがどこに泊まるかというのが問題になって、公邸をね。吉野大使がボンにいたんだけど、公邸を明け渡してそこに泊まるという案があったわけですよ。ところが吉野さんは、ぜひともそれだけは避けてくれって一所懸命頼み込んで来てね。それで、ボンの公邸は、本当に日本の公邸は他の大使館の公邸に比べると、決して立派じゃないんですよ。別棟があって別棟に泊められるようになってるんですけどね。だから「ボンの公邸はどうもシャビーでして」とか言ってる。そうしたら安倍（晋太郎）官房長官が脇にいて、「それでも着物を着てうどんなでも食べるから、そのほうがいいかもしれないよ」と。僕は「あそこの公邸は非常にシャビーですから」と言ったら、福田さんが「俺の家よりまだろう」といふのね（笑）。それはそうなんですけど、小さくて随員をたくさん入れられないんです。したがって代表団との接触が難しいとかなんとかいって説得して、結局ホテルに泊めたわけですよ。ホテルも当時、いいのがなくてね。

因みにアメリカは、大使じゃなくて公使の公邸に泊まったんですよ。というのは、警備の関係上、大使の公邸は危ない……。ライン川に面しているのかな。ライン川の船から射撃されたら危ないとか何とか。公使の公邸も立派な建物らしいの。だから当時、宮沢君がボンの公使だったかな。何か忘れちゃったけど、あとで彼に「福田さんが君の家に泊まるというようなものだ」と言った

ら、「泊まってもらってもいいですが」とか何とか言ってたけどね(笑)。

北岡 これは船橋さんの本によると、大平さんは本当に疲労困憊で、あとで寝込んだかどうか知りませんが、だったようですね。

宮崎 でなければ、僕を呼んでジスカーと直接交渉せいなんで言わないですよ。おかしいでしょう？ みんながいるわけですから。リセスになっているんだけど、そのラウンドテーブルに他のサミットのメンバーがいるわけでしょう。そこで僕がジスカーとやっているわけだから、非常に異様な光景ですよ。

北岡 そうですね。格が違いますよね、大統領とシエルパでは。こういうのをご覧になると、ホストである大平さんは、宮崎大使から見えて頼りになる政治家かもしれません、会議の……。

宮崎 それはとてもダメね。

北岡 やっぱりそういうのはちょっと無理なんでしょうね。日本人で、なかなかいないでしょうね。

宮崎 会議で司会できるのはいないですね。取り仕切って、どこで打ち切るかとか、どこで話の落ちをつけるかなんていうことを、みんなの議論を聞いてやるといのは政治家では、これから出てくるかもしれませんけれども、いいでしょう。

北岡 船橋さんの本によると、それは大平さんのチェアマンシッブの不慣れというか、そういうのがかなり混乱の一因でもあったように書かれていますけど。

宮崎 まあ、予期せざる事が起こったわけですから、それは事実なんです。

北岡 そうですね。いちばん大きなアジェンダでいちばん大きなトラブルが起こったから、無理もない面もあるんでしょうけど、もっと議長らしく振る舞えという言葉はちょっと出てきたかのようには書いてあるんですね。

宮崎 船橋さんの本に、三木さんと福田さんの対談かなんかが

載ってましたかね。三木さんは、そういう批判をしたところというのが出てませんでしたか。

三木さんは、自分が首脳会議で何を言ったのかなんていうことは、全然伝わってこないんです(笑)。だから、分からないんですよ。ランブイエのときは首脳会議には、はじめは誰もいなかったわけです。それから一人入れてもいいということですね。初めは北原(秀雄)大使が入ったんです。これは三木さんの命令かなにかでね。だから、大使は大物だから、ノートを取ったりしないわけですよ。したがって、それでも分からない。結局わからずじまい。それからボン・サミットのときも、本当に首脳会議になると入れないですよ。ただ、首脳がボタンを押すとシエルパだけが入れるというシステムなんです。ところが、福田さんはその部分聞き落としたんでしょうね。ボタンを押さないんですよ、こっちははらはらしてるのに。隣の部屋で待っていて、そして昼飯かなんかのときに、「アメリカのオーエンなんかは非常に大事なときをやってきていろいろ助言したけど、おまえは全然来ないじゃないか」って文句を言われて(笑)。ボタンを押さないと行けないんですよって言って。

北岡 いまでもそうなんですか。

宮崎 いや、その後、ノートテーカーを入れるというシステムが出来たんですね。だから、東京サミットのときは、ノートテーカーがやってたんじゃないかな。

股野 ロンドン・サミットのときにもノートテーカーが入りましたね。

宮崎 だから、それは専らノートを。

北岡 どのクラスの方なんですか。

股野 岡本行夫君です。

宮崎 若い人ですよ。だから、まったく事務的なね。だけど、東京サミットのときは同時通訳で、通訳のブースを利用して、何が

起こっているかということとは分かったわけですよ。通訳の席にこっそり入って聞いて。宮崎さんがジスカールと交渉しているなんていうのが、僕が出てくる前に伝わっていたんです(笑)。

東京サミットは初めてだから、ロジスティックの面でもずいぶん苦労したようですよ。直接じゃないけど、梁井君が事務局長でいろいろ。そっちのほうは私は全然タッチしてなくて、全然任せっぱなしだった。

ただ、ある時に東京でシェルパの会合をやったときに警察のほうから、「サミットのとときの各首脳の警護を練習したい。各シェルパを首脳とみなした警護をやるから、そういうことにしてくれ」というんです。それで他のシェルパにみんな言ったわけですよ。だから、そのシェルパは警護付で会合をやっていたんです。東京の準備があるときに。そうすると、私にもついちゃうわけです。忙しいからホテルに泊まったんです。朝、新聞を買いにいこうと思ったら二人立っていて、「買ってきます」と言っ出て出してくれないわけね(笑)。もちろん車で移動するときに、必ず覆面パトカーみたいのがついてくるわけです。いざとなるとパッとあげて。だから、どこに行くのも全部それ。これは本当に不自由なものですよ(笑)。

北岡 (笑)。しばらく「大平さん」をやっておられたわけですね。

宮崎 一日か二日だけね。

北岡 準備会合は何回ぐらいおやりになったんですか。

宮崎 五回ぐらいじゃなかったかと思えます。

北岡 一回目は秋ぐらいですか。大平さんになってからですよね。

宮崎 直後。

北岡 必ずやってくれということをごの間。そうすると、十一月か十二月ぐらいですね。

宮崎 それから夏までのあいだに四回か五回やっています。

北岡 そうすると、ほぼ一ヵ月半に一回から一回という感じ

ですね。

宮崎 次の東京サミットは手島がシェルパだったんです。彼はどういうふうにしたか、あんまり聞いてないんですけど。けど、そのときとだんだんと様子が違ってくるんですけど、もうシェルパなんてのはやりたくないです(笑)。

北岡 五回ぐらい準備されていると、だんだん論拠や何かは煮詰まってくるものですか。しかし、いちばん大きな問題は最後までなかなか進まないというのがくっきり分かれてくるんでしょうね。

宮崎 だから、ボン・サミットのとときは機関車論の問題ね。東京サミットは石油の枠の問題ね。そういうのが各サミットであるわけですよ。けど、たとえばロンドン・サミットでどういう話があったのかあまり聞かなかったし、吉野さんは何て言っていましたか？ ロンドン・サミットの様子。

股野 あまりおっしゃらないですね。

北岡 やっぱり非事務的な(笑)。

宮崎 ランブイエのときは私に押しつけちゃって、プレス係になっちゃったんだもんね。海部さんと吉野さんがプレス係になって、私はお城に籠城してドラフティングをやらされて。東京サミットのとときのいろんな人に助けてもらったんですけど、直属の部下は国広(道彦)だったんです。総務参事官ね。彼に助けてもらったね。国広が小和田(恒)をつかまえてきて、彼にも助けてもらったし。ごく一部だけど、栗山(尚一)にも助けてもらったけど、さっき言ったようにシェルパも一人で出なくちゃいけないだし、とにかくこれから先どういった制度になるか分からなけれど、今度の沖繩サミット(二〇〇〇年)は、沖繩と福岡と宮崎と三つに分かれてどうするんだろう(笑)。

北岡 そうですね(笑)。宮崎大使が二回続けてやられたというのは、非常に重要な意味があったと思うんですけど、これはどんどん変わっていくと、どうなりますかね。

宮崎 そのうちに、シエルパがあまり要らないような政治家が首相になることを期待しなくちゃいけない(笑)。
北岡 実現しなかった問題は、こういう場以外でお聞きできることはないですから、たいへん貴重なお話を聞かせていただきました。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第10回 —

開催日：2000年1月20日

10：10～12：00

開催場所：政策研究大学院大学

プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

井上 寿一（学習院大学法学部教授）

佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）

■ 八〇年代初頭のヨーロッパ

井上　こちらで用意した質問の順番で、とくに印象に残られているところを重点的にお話しただけだと思いますので、どうぞよろしく願います。

宮崎　質問事項に入っていないところを重点的にお話ししたいと思います。質問事項をせっかく書いていただいたから何かコメントしたほうがいいということであれば、まず、ミッテラン当選〔二九八一年〕というのは、戦後のフランスの歴史から見ると大きな変革なんですよ。その前はご承知のようにド・ゴールがずっと続いておって、そのあとポンピドー、ジスカール・デスタンと続いて、もちろんポンピドー、ジスカール・デスタンは路線が違いますけど、ミッテランはちょっと変わり種。社会党ですからね。ド・ゴール以来の長い政権に国民が飽きたと言われていたんですが、ご承知のように第一回の投票ではジスカール・デスタンのトップだったわけです。ただ、過半数に達しなかったので、第二回の投票があつて。そのときに、シラクがジスカールを必ずしも応援してなかったわけで、応援すれば、ジスカール・シラクの連合が出来ていけば、もちろんそっちのほうが票数が多いわけですが、それがシラクはいろんな政治的意図から応援しなかったのでミッテランが当選したわけで、ジスカールはえらく怒っていますね。シラクの裏切りだと盛んに言っていたんです。そこで、社会党単独では到底多数議席を確保できないので、社共連合ということになったわけです。社共連合で西側の国で共産党が政府に入ったというのは、イタリアの共産党がいちばんでかいんだけど、フランスで初めてのことで、どうなるかということとをずいぶん噂されていたわけです。私は大して違いはないだろうと思っていたんですけども、結果において間違いがない。

なぜ違わないと思っていたかというところ、ご承知だと思います。

ども、フランスは大変な官僚国家なんですよ。グランゼコールという有名校がいくつかあつて、そこを出た官僚のエリートがすべて支配しているといつていいわけです。それからまたたいへんな警察国家なんですね。日本の比どころではないんです。逆に言うと、代議士の地位が低いんです。それはご存じかどうか……。西洋諸国の中で最も低いんじゃないかと思えますよ。代議士というのは、少なくとも僕が知っている限り、その後変わったかもしれないけども、選挙のときに二人組で出るんです。もちろん一人がメインで、あとはサブなんですけど、メインの人が当選しますよね。その人が大臣になると議席を辞めて、そのサブの人が代議士になるわけです。今度は大臣をやめても、サブが頑張っちゃうと戻れないというね(笑)。

それから、非常に不思議なんですけど、いろんな地方自治体と代議士あるいは官僚は、兼職が可能なんです。だから、私がよく知っていたフランスの政務総局長をやったり駐日大使をやったドゥー・ラブルレという人がいるんですけど、その人は駐日大使のときもノルマンディの何とかという町の市長を兼ねているんですよ。だから、年に一回ぐらい休暇を取って帰って市長職をやつて、また……(笑)。

佐道　それで市長職が務まるんですか。

宮崎　務まるんですよ。だから、たとえばフランスの現職の大臣がどこそこの市長を兼ねているというのがたくさんいるんですよ。非常に不思議なところで、さっき言ったように、権力の中核は官僚にあるわけです。官僚もたとえばアンスペクター・フィナンシエという資格を持った人が大蔵省とか銀行に行つて、若くてもその人はトントン、トントン出世するわけです。質問事項にある銀行国有化とか大企業の国有化というのは若干やったんですけど、銀行は前から国有化みたいなのなんです。銀行の頭取というのは役人がなっているわけです。それからまた中央銀行は権威が

ないんですよ。フランスの中央銀行は大蔵省の出先みたいな。

前にサミットのときに、クラピエという人が私のカウンタートパートのフランスのシエルバになったとき、その人は中央銀行の総裁で、ジスカールの友達なんです。だけでも、フランス銀行の総裁は非常に権限が少ないと前から言われていたし、外務省の経済局長をやったウォルムゼイという人がフランス銀行の総裁になって、それからもう一人なったんです。したがって、たいへんな官僚国家だし警察国家で、ミッテランと社共連合が出来ても、実際の政策面ではほとんど変えようがなかったということも言ってもいいと思うんです。

ただ、変わってきたのは、サミットにしても、あるいはOECDにしても、閣僚理事会やなんかのコミュニケを書くでしょう。そのときにOECDでは、いわゆる社会主義諸国のことを「セントラリー・ブランド・エコノミー」という言葉で言うんですよ。経済的な国際機関ですから、あまり「共産主義」とかの言葉を使わない。しかし、サミットでは言葉を使うことがあるんだけど、そういうセントラリー・ブランド・エコノミーの批判をすると、昔はそんなことはなかったんだけど、ミッテランの社共連合政権が出来てから、フランス側がその字句に反対するわけですよ。「俺のところは閣僚の中に共産党がいるんだ。だから、それを批判するようなことをコミュニケに入れてくれている」というようなことは言っていました。若干変わったわけですけど、そういうことなんです。

それから、ポーランドでワレサというグダニスクの造船工が労組の指導者になって、連帯という組織を作って騒いでいるわけです（一九八〇年）。それでポーランド共産党の政府が非常に手を焼いているということなんです。ちょうどそのときにポーランドの大使をやっていた原（富士男）君という人で、私はよく知っていたんで、その人が東京に送った報告などは写しをよく見てい

たんですけども、ポーランドの事態について話をすると非常に長くなるから……。その前にもポーランドで事件がありましたよね。ソ連が出てきて戦車をつぶしたのは何年だったっけな。ずいぶん前に。ハンガリーとチェコは有名だけでも、もっともポーランドは年がら年中だからね（笑）。

井上 六八年頃だったでしょうか。

宮崎 いったったか忘れちゃったけど。というのは、もともとポーランドは、歴史的に見てもソ連に占領された時期が長いんですね。独立していた時期のほうも短い。歴史的ないろいろないきさつがあるんだけど、そういう土壌があったんで、わりあい連帯というのがある程度力をつけて弾圧できなかったということはあるんですけどね。

だいぶあとになって、いわゆるポーランドやハンガリーが共産主義でなくなった直後に、私は訪ねたことがあるんです。その前にこの両国を訪ねていたことがあるんですよ。ハンガリーはワレサみたいな行き方じゃなくて、実質的に共産主義を守っているような顔をしながら、いわゆる市場経済の原理を導入するという手法を取っています。僕がベルリンにいた頃、一九七〇年代の初頭かな、両国へ行っただけですけど、そのときすでにハンガリーはかなり経済の面ではいわゆる市場経済の芽が出来ているという印象をもって。そっちのほうが、結果から見ると、共産党支配が終わったのちにもスムーズに行ったという感じがするわけです。

それから、閣僚理事会ないしサミットでは、常に保護貿易を廃して自由貿易を守らなくてはいけないということを宣言しているわけです。そのときの状況によってトーンが違いますけど。だから、いわゆる多角的開放的な貿易体制維持強化は、ずっと毎年のようにサミットの宣言に書かれているんです。このとき（八〇年六月「貿易宣言」）に特にどうということはないと思いません。

それからPAP（ポジティブ・アジャストメント・ポリシー）。ご記憶かと思いますが、東京サミットのときに構造問題という話をしましたでしょう。それと同根のコンセプトなんですよね。積極的調整政策。というのは、前にも何かのときに言ったと思いますけど、OECD諸国の多数を占めているヨーロッパというのは、非常に考え方がスタティックなんです。したがって、過去の蓄積の上にあぐらをかいて、それをなんとかして維持していきたいという発想法が非常に強いわけです。

たとえば造船なら造船を、造船部会がありまして私はずいぶんそこで苦労したんですが、造船部会の議論は、各国で造船のキャパシティはこれだけある。他方、船に対する需要はこれだけある。したがって供給過剰である。だから、キャパシティを増やしてはいけないという結論があるんです。ところがキャパシティというのは、本当に古くなってしまった老朽のキャパシティもキャパシティなんです。何か世界経済の伸びを押しやる必要が生じた場合に、どうしてもそういう議論なんです。日本もそういうことを言う。繊維なんかについてね。それから日本の国内で繊維を調整するときに、余剰供給能力というか施設があると、廃棄するでしょう。みんな一律に何社何パーセントと言うでしょう。だから、古いも新しいもいっしょくたに壊すということが、世界的にも国内でも往々にして起こりがちなんです。ところが、そういうようなスタティックなんじゃなくて、もっと積極的に前向きに議論すべきであるということはずいぶん前から、OECDでも私は言い続けてね。OECDの主流はいまでもデイマンド・マネージメント——需要管理政策というわけですね。総需要を財政、金融あるいはその両方を合わせたマクロ政策によって、需要を管理する、それによって経済を安定させて成長させるといふ需要管理政策というのがOECDの基本であるわけです。

それに対して若干、考えが変わって来ざるを得なくなったのは、

私が言ったせいではなくて、その間にレーガンが「サプライサイド」という言葉を言い出したでしょう。「サプライサイド」という言葉を。生産の面に、あるいは供給の面にもっと目を注ぐべきだという議論があったわけです。これに対するOECDのリアクションというのはいろいろあるんだけど、基本的にはそういうことについては消極的なわけです。しかしながら、とにかく供給面をまったく無視することはできないというのがひとつ。それからもうひとつは、デイマンド・マネージメントというのは、どうしても短期的な景気循環のサイクルに対する対処という色彩が強いんで、長期政策というのはどっちかといえばないがしろにされるといふ面があったわけです。その点を直そうじゃないかということはずいぶん言って、その結果、ひとつには長期政策を議論する経済政策委員会のWPIIというのが私の代に何回か開かれたりしたんですが、そのほかにここにあるような積極的調整政策ということを重視すべきであるということで、そういう話になってきたわけです。

その際にいちばんの問題は、政府がどれだけ積極的な役割を演ずるべきかという議論なんです。その中でいちばん問題なのは技術なんです。テクノロジー。テクノロジーについて、政府がどれだけ後押しをするかということが議論になっている。ちなみに、この時代、OECDではテクノロジカルギャップという言葉がよく言われたんですが、この当時のテクノロジカルギャップというものは、日米に対する欧州の間のテクノロジカルギャップだった。その前に私がOECDに行っていましたときに、一九六〇年代の末は、アメリカ対日欧の間のテクノロジカルギャップだったんです。その間にずいぶん日本のテクノロジーが進歩したために、この時代のテクノロジカルギャップは、日米の先進技術重点の経済に対するヨーロッパの立ち遅れということをどうして埋めるかということが主題になってきたの。

その前の政策として、いまの技術についてどこまで政策を反映するか。これはいふん議論があったわけです。たとえば「ピッキング・ザ・ウイナーズ」という言葉が、それはいかんという。つまり、ウイナーと思われるひとつの技術を見定めて戦略的に、そして、その分野に集中的に政府が何らかの恰好で援助するというのはいかん、日本がそれをやっているんじゃないかという話がよく出てきたわけです。

いろんな議論があったんだけど、長くなるから整理して言いますと、これはいまでも議論が残っているんだけど、よく「R&D」という言葉をお聞きでしょう。リサーチ・アンド・開発・ロップメント。「R&D」の「R」の中のベシックリサーチという基礎研究というんですかね、これは政府が後押ししてやるべきだ、主として大学がやるんだ、と。つまり、大学の理学部とか工学部とか、そういうところでやっているのが基礎研究である。それは政府が金を出してやるのが当然だと。民間企業はとて、そんなところに金を出したって結果が得られるまでにずいぶん長い時間がかかるから、そんな投資をする人はいないわけで、ベシックリサーチは政府がやるべきだけれども、その結果はすべてみんなが享受、利用できるよすべきであると。だから、ベシックリサーチへの政府補助はよろしいと。

それから今度は逆のほうで、そのR&Dのディベロップメントに近い、殊にコマーションリゼーションという、實際上、企業化しなくてものをつくり出すというそのディベロップメントは民間がやるべきであって、政府は一切補助金とか口出ししたり援助したりしちゃいかんと。その二つについては、誰も異論がないわけです。その中間のリサーチね。ベシックでないリサーチ。応用研究とか何とか。そういうものはどこまで政府が援助すべきであるかということを経々と議論したわけです。

その場合に、たとえば補助金を出すというのが各国でもあるわ

けですよ。ところが補助金についても、補助金の出し方はいろいろ議論になったんだけど、日本がいちばんうまくいったんです。極端に言えば、日本の場合は通産省とか工業技術院とか科学技術庁が、特に通産省ですが、業者・メーカーに対する睨みが効いておいて、たとえば通産省がみんな、各業界の技術担当の重役を集めて「今度は第五世代のコンピュータだ」とか「今度は何だ」とか首頭をとると、その技術担当の重役たちが本社に戻って、そして「今度は第五世代のコンピュータだ」ということで、社長を説得してそっちのほうに金を取ってくる、そして投資をする。そうすると、そっちのほうがどんどん伸びちゃう。結果として「ピッキング・ザ・ウイナー」になっちゃう。通産省は何を出したんだといったら、コーヒー代だけだと(笑)。それで、そういうことが出来るシステムが怪しからんというね。

ところが、たとえばドイツなんかの場合は、中小企業に直接補助金を出すわけです。だから補助金が目立つわけで、うまくいくことがあるんだけど、政府がそんなに睨みが効かないから、集めてコーヒーを出したって絶対に誰も聞かないと(笑)。それは極端な例なんだけど、そういったようなことで、非常に延々として議論が続いたんだけど、非常にはっきりした結論は出てこない。ベシックリサーチは当然政府がやるべきだし、ディベロップメントの下の方、コマーションリゼーションのほうは民間がやって政府が口出しすべきじゃないということとは合意はあるんだけど、その中間のところは定義もはっきりしないんですよ。何がベシックリサーチで何がそうではないのか、とかね。そういうことで延々としてやって、そういうことがPAPの背後にあったということだけ申しておきます。

ちなみに、工業委員会というのがOECDにあるんだけど、工業委員会というのは非常に人気がないんですよ。工業政策というものもはそもそもやるべきではないというのが基本的な。つまり、

マクロエコノミーの政策でデイマンドマネジメント・ポリシーで運営すべきだと。工業政策は部門的な政策をやってはいけないというのが基本姿勢だから、日本ががんばっても、工業委員会にあまり活性化しなかったわけです。

それから、OECDの閣僚理事会というのは毎年一回開かれて、そこでコミュニケーションを作るわけですけど、作るのはいがい徹夜の交渉なんです。つまりコミュニケーションというのが、どうしてもウイスキーソーダのウイスキーの部分が減ってソーダのほうが多くなってしまうのは、みんな困るところを各国が猛烈に頑張ってるから。したがって、各国が合意するものしか書けないと。その結果、ここにあるような誰も反論できないようなことは、つまりサステイナブル・グロースという、インフレを抑制しながらサステイナブル・グロースというのをやるのが、それについては反論できない。サステイナブル・グロースをやるための政策手段として、たとえば金利政策とか財政政策赤字とか何かを取ったり、それについての議論はあるんだけど、そっちのほうがいざばらの問題なんだけど、それについては当該国があんまり反対するので、コミュニケーションをみたいなどころには書けないという。だから、そのコミュニケーションを作った経過においてどういところが問題なんだということを探らないと、あまり意味がないんですけど、それがなかなか出てこない。当事者がいないと分からないわけです。

■ドイツの天然ガス・パイプライン計画

宮崎 「質問に」 IAEAが入っていますけど、この前のサミットのときにお話ししたIEA、エネルギー危機のあとに話をしたIEAとIAEAは全然違うものなんです。IAEAというのは国際原子力機関で、ウィーンに本部があるんです。それはご承知のように、北朝鮮の原子力の問題についてミッションが行ったり、

日本もずいぶん査察を受けているわけです。つまり、原子力の安全面とか核拡散防止に関連する問題はIAEAがやっているわけです。私はこれに間接的にしか関与してないんです。

IEAというのは、国際エネルギー機関なんですけど、これはまた閣僚会議が開催されコミュニケーションというのがあるんですが、IEAは実は最初のときから、出来る前から私は関与していたわけで、前に申しましたように、そもそも出発点はキッシンジャーが開いた外相経済相会議。ワシントンでやった、それが出発点で、それから長いこと議論して、パリで議論して、IEAはOECDの外郭団体に強引に私が持っていたという話も申しました。それ以来、IEAは活動していたんですけども、IEAを作ったときのいろんな経緯もあるし、日本やドイツ、殊にドイツががんばったんだけど、IEAの主要なオフィス、議長とか事務局長は、純粹の石油輸入国の人でなくてはいけないという、非常に強い信念があったわけです。純粹な輸入国ということは、つまり逆に言えば、アメリカ、イギリス、ノルウェー、こういうのは除外される。オランダも天然ガスがありますから。

そこで、事務局長はドイツ人になったし、初代の議長はベルギーだったんです。ダビニオンという非常に有名な男でいまも活躍しているんですが、ECの委員をやったりソシエテ・ジェネラルという大会社の社長会長をやった人です。ダビニオンというのが子爵ですけど、初代の議長。当時のECの代表だったかな。二代目が短い時間だったけど、エルスボーグというデンマークの人がなったんです。この人が欧州議会の事務総長なんかにもその後になっていった人なんですけど、この人は短かった。三代目が私だったわけです。

IEAの議長は、パリの時代に引き受けてやらざるを得なくなると、OECDの大使のときにやっていたんですけど、うまいこと後釜がいなくて、ドイツ大使になっても引き続いてボンからパ

りに通って議長職を続けていたんです。それで、IEAの議長をやっていますと毎年いろんなことがあって、閣僚理事会はもちろんあるんですけど、いろんな事態が生ずるわけです。いわゆる第二次石油ショックというかな（第二次石油危機、一九七九年）。と言われたかどうかちょっと忘れたけど、要するにイラクがゴタゴタしちゃって、石油が逼迫したことがあるんです。

そのときに、IEAのメンバーでトルコが石油がなくなっちゃって、破綻しかかったわけです。それで、日本という国は不思議なことに、人の国が困ったというのはいさ、殊にトルコなんか困っても新聞に全然出ないでしょう。だけど、全体で見ると、トルコがへばっちゃうと当時のNATOの南翼がだめになるって、対ソ包囲網が崩壊するわけです。したがって、アメリカ・ヨーロッパにとっては大変なことなんです。トルコをなんとかしなければいけないということで、IEAは前に申したかどうか、基本は節約とか備蓄とか。ほかに融通というのがあるんですよね。石油融通。いざとなったら、余っているところから足りないところに石油を融通するという。だから、石油融通スキームを発動してくれという話が出てきまして、それでIEAで議論したわけです。トルコがへばったら大変だから、いろいろと助けようと思っただけなんです。

ところが、これはIEAの欠点ではあるんですけど、この前言いましたように、意志決定が速やかにできるように……。OECD方式の票決では違って、OECDはウエイテッドな票数で、殊にフランスは入っていないとか何かあるんですが、票決できるんですよね。ところが、票決に至る前に問題がたくさん生じてきた。その具体例とすれば、要するに石油をトルコに持っていくといっても、一度どこかのタンクに入っちゃった石油をまたひっぱり出して持っていくというのは、大変なコストがかかるわけです。今度、運んでいる間のタンカーにのっかって海をうろろろしてい

るものを持っていくというのが経済的に合理性があるんですけど、ところがそれが民間の所有なんです。だから、それを政府の命令でトルコに持っていくについては、出来ないことはないんだけど、それぞれの国の法令上いろいろ問題がある。いろんなことがある。そういうことのほかに一番の問題は、その金をね。つまり、洋上で運んだタンカーを行き先を変更してアメリカに向かわず、トルコに持っていった。そうすると、キャンセル料がなんとかといろいろと金がかかるでしょう。それを含めてトルコに持っていった金を誰がどういうふうに払うんだという問題があるわけです。トルコは石油がないだけでなく、金もなかったんです。外貨が非常に不足して、まさに危機にあったわけです。そういうのを解決するのに時間がかかって、結局、結論は、それは発動しないで金のほうの手当てをして、トルコはどことか石油を買って解決したということなんです。だから、これはIEAの試験だったんですけども、ちょっとスムーズにいかないというひとつの前例を残したわけなんです。

その他、毎年こうしているんなことがあって、その度に議論していて、IEAの意向が私のところでまとまると閣僚理事会を開いて、それをハンコをついてもらうわけです。だから、閣僚理事会というのはそういう意味では演説会で、実質にあまり関係ないんです。

IEAについては非常に大きな、これも全然外に出ていないんですけど、申しておいたほうがいいと思われることがひとつあるんです。お話をしたいと思うんです。

それは、これまた例によって年代は忘れちゃったけど、私が議長をやっているときだから、OECDからドイツに行く、両方に跨がっているんですが、その当時、ソ連西シベリアから西ヨーロッパまで、天然ガスのパイプラインを敷くという話がありまして、かなり進行していた。實際上、敷設に一部着手していたわけ

です。それを聞いたレーガン米大統領が、もう非常に危惧しましたね。というのは、この前、OPECでアラブの諸国が油をひよっと締めたらたいへん石油価格が上がって、世界経済が混乱して政治問題になったでしょう。そのためにキッシンジャーが会合を開いて、IEAもそのために出来たといってもいいんじゃないかと。ところが、天然ガスのパイプラインをソ連から、ドイツを中心にするけど、ドイツを始めとする西欧に引くと、ソ連がご機嫌が悪くなって天然ガスの栓を閉めると、たちまちにしてその分だけ西欧経済が干上がっちゃうわけでしょう。ということは、東西冷戦下ですから、たいへんな力のバランスの変化が生ずる。したがって、これはどうしても止めなくてはいかんというのが、レーガンの非常に強い意向だったわけですよ。

それを私はあんまり知らなかったんだけどね。また、ドイツは天然ガスをソ連から引くことによって、天然ガスが安く入るわけです。ドイツというのはエネルギー資源がないんですよ。非常に高い石炭を掘ったりなんかして、それから原子力ですから。原子力の話はまたまとめてお話ししたいと思うんですけども、とにかく天然ガスが入ってくるのが大歓迎で、国を挙げてそれに金も出すし、政府ももちろんたくさん金を出して作るうとしていているわけです。ところが、レーガンはカンカンだし、これをサミットの、どこのサミットだか忘れちゃったんだけど、ウイリアムズバーグかな、レーガンが取り上げて大々的にこの問題を、もし西側がパイプラインの敷設工事を止めなければ議論するということをやっていたんですよ。それはまた、今度はそういうところで議論したら、冷戦下において大変な問題になるわけですよ。

そこで、アメリカのある高官が、本当に密かに私に接触を取ってきたわけですよ。パイプライン計画の大きさはちょっと数字を持っていないんだけど、大変なものでね。というのは、西シベリアからポーランドを通して——そういう意味ではポーランドは大

事なんですけどね(笑)。——ドイツから西欧まで天然ガスのパイプを敷くというのは、たいへんな金もかかるし、工事なんですけどね。

ちなみに、パイプラインレイヤーというパイプラインを敷設する装置は、世界で二社しか作ってないんです。ひとつはキャタピラーだったかな。もうひとつはコマツなんです。コマツは非常にそれに関心があって、ぜひやりたい。もっともパイプラインを敷設するいちばん金がかかるというかいちばんの目玉は、ポンピングステーションという、パイプラインがつながってきて圧力が落ちるでしょう。途中でまたポンプアップしないと流れないだけだね。

ちなみに、お二人とも政治学者で、経済学者じゃないからご存じないかと思うんだけど、パイプラインで天然ガスをひっぱるのはどういうメリットがあるかというのは、ご存じないでしょう。

日本は天然ガスを輸入していますよね。公害が少ないとか言って、天然ガスを輸入して、いまたくさん使っていますよね。だんだん増えているんですよ。ところが、天然ガスを輸入するためには、まず輸出港に天然ガスを液化する施設を作らなければいけない。リキファクションの施設を作らなくちゃいけません。今度輸入して日本に持ってきてから、それを気化する施設を作らなくちゃいけない。大変な金がかかるわけです。その間は、ご承知のようにLNG〔液化天然ガス〕輸送では、液化天然ガスを輸送する特殊な船を使わなくちゃいけない。そうすると、液化・気化の施設を両方合わせると、金がかかるんですよ。だから、日本のエネルギーというのは常に、そういう天然ガスが出るアメリカ・カナダとかイギリス・ノルウェーに比べて高いエネルギーを使わざるを得ない。

ドイツもそうなんです。ただし、パイプラインを使いますと液化・気化、両方とも施設が要らないわけです。だから、その

分だけ安くなる。しかし、その代わりにサプライヤーとのネゴの条件がどうなるかというの問題がありますけどね。しかし、いずれにしてもそういう大プロジェクトをドイツが国益ということやっておったわけです。ところが、それはたしかにレーガンが心配するように、ソ連がドイツをやっつけようと思ったら、天然ガスの栓を閉めるぞと脅せば外交上たいへんな武器になるし、本当にやった場合にはたいへんなことになるわけでしょう。

ということは、問題の重要性と認識していただけるだろうと思うんだけど、日本はあまり安全保障の感覚がないし(笑)、殊にそういうような政治的な感覚、たとえばトルコの危機なんていうのは鈍感でしょう。それから、いまのパイプラインの問題は私はずいぶん日本にも言ったんだけど、あんまりピンとこない。もっとも読む人が、通産省が読むと「俺には関係ないわ」ということになるし、外務省でもその係しか読まれないと全然ピンとこないわけ。それから政治家とかジャーナリストも関心が無い。歴史家は関心があるかもしれないけど。しかし、そういう話をして誰も関心がないのは、問題の重要性を理解していただけないからなんですよ。だから、そこで経済の知らない素人に対してその重要性を認識させるのは、ずいぶん時間がかかってしまうわけです。認識していただいたですか(笑)。

佐道 わかりました(笑)。

宮崎 どのぐらい大変なことだった。それがどのくらい大変なことかということが、まさに問題なんですよね。それで、レーガンはカンカンになるし、ドイツ政府はカンカンになるしね。これをサミットで米欧の大議論をやったらこれはもちろん世界に広がるし、これは大変なことになるわけですよ。そこで、アメリカの一部の人が非常に心配して、どうやって収めるかと。それを収めてくれということを頼みに来たわけですよ。

それも漏れると大変だからね。非常にもったいぶっている

思っただけで、あるとき私のところに連絡が入って、パリにいるアメリカの大使。在仏米大使にも、それからパリにはOECDの大使もいますね、私のカウンタートパートが。OECD大使にも知らせないで、こっそりと自分と会ってくれという申し入れが私にあったわけです。えらいもったいぶった言い方だなと思っただけで、別に殺されることもないだろうと思って(笑)、こっそり会ったわけです。そこで彼が述べたことは、「このまま放置しておく」とサミットの大激論になって、世界中でそれを知って、米欧の間にしこりが残るだけじゃなくてソ連を利用するだけになる。それをなんとか解決しなくちゃいかん。解決をIEAでやってくれないか。で、議長のおまえに頼むんだ」と言うんです。

それについてまず一つは、ソ連のパイプライン、西シベリアからヤクーツクだったかな、持ってくるパイプラインで運ばれる天然ガスが、西ヨーロッパの、あるいは世界のエネルギー上での程度のマグニチュード、ウエイトのある問題であるかをIEAの事務局を駆使して調べてくれということに。それが一つね。それは僕がやりましょうと言って、引き受けたわけです。それで事務局に命じて、厚い調書を二つ作っただけです。いまでもあります。そのためだけにね。そのためだということと事務局も動かないから、いろいろこれは大事なんだということも命令して作らせたのがあります。持っているんだけど、持ってきて読むだけでも何日かかるから。それから、そう言うては失礼だけど素人の諸先生方には、お目にかけてもピンとこないだろうと思って(笑)。そういうことでそれを作った。

もうひとつは、それに時間がかかりますよね。何かIEAで妥協案を出してくれと言うんです。いろいろアメリカのその人にも話をし、それからドイツがいちばん中心ですから、ドイツにも話をしたんです。その結果、僕が得た結論は、とにかく作りかけている一本のパイプラインはやめさせることが出来ない。これはド

イツが国を挙げて反対する。一本のパイプラインであれば、そんな大したことはない、と。数量的にね。ということをしてレーガンに納得させなくちゃいかんということが一つ。それから、その代わりに二本目以降は敷かないということをやドイツに確約せよ、と。だから、アメリカは一本目だけは目をつぶれというふうを持っていきたかったわけです。

ところが、二本目以降は作らないという確約をドイツは、政府というのは威信がありますから、そんなことをIEAだろうと何だろうと、はっきりとした恰好で言いたくないわけですよ。それから、アメリカも一本目は認めるということは言いたくない。しかし妥協点はそれしかないと思って、そのためにいろんな案を考えたわけです。その一本目だけは認めるように、二本目以降は認めないということをやね。これはみんな私の私案として流したんだけど、一つは一次エネルギーという言葉をご存じかな。一次エネルギーの五パーセント以上をIEAの加盟国はある一カ国に依存しないこと。もしくは、天然ガスの二五パーセント以上をある一カ国に依存しないこと。そういうような基準でどうだということをやフロートしたわけです。フロートというのは要するに提案ではなくて、内々で打診したわけです。

ところが、二五パーセント以上を依存しないことというのは日本から反対が、後ろから鉄砲が来ちゃってね(笑)。というのは、東京にこういうことなんだとこっさりした恰好では話はある程度していたんだけど、そういう話はずっと上の人しか知らないでしょう。ところが下の人が、つまり一次エネルギーの二五パーセント以上は普段は依存しないんだけど、場合によってはインドネシアに依存することがあり得ると。その場合に、IEAでいろいろコンサルテーションなんかをやられるのはかなわん。だから、その案はだめだといってきたわけです。そういう経緯があって、だからこれはそういう数量的なアプローチはいろんなところでい

るんな……。

たとえばフィンランドは、冬、海が凍るでしょう。だから、エネルギーの何パーセントか忘れたけど、ソ連に依存せざるを得ないわけよ。他のところから持ってこられないわけ。だから、そんなことをIEAの規則として決めてしまうと困ってしまうわけだな。いろんなことがあって、一次エネルギーの二五パーセント、天然ガスの五パーセント、いずれもうまくいかなかったわけです。殊に、後ろから鉄砲が来たのはびびりしちゃったな。日本なんていうのは誰も問題にしてないんですね。二五パーセント以上日本がインドネシアから買ったって、IEAが何も文句を言う筋合いはない(笑)。東西冷戦の問題なんだけど、そういう感覚がないんですね。日本のお役所には、担当官にはない(笑)。ということでもだめになって、そこでずいぶん苦労をしたわけです。

他方、リミットは迫ってくるしね。それで要するにさっき言った、一本目は認めるけど二本目は作らないということをや、どういう恰好で約束事にするかということに問題があったわけです。殊にアメリカを納得させなくてはいけないから、そこでさっき言った資料を、つまりそれが世界のエネルギー事情というか、そういうようなものを作りつつあるし、中間的ないろいろな数字が出てきてますから、それとかなんかを説明して、と同時にバイプレイヤーズをたくさん動員して、アメリカを納得させなくてはいけないというわけで、それぞれの国を説得して。

たとえば、オランダは天然ガスが取れるんですけど、だんだん資源が枯渇して、生産を抑えているんです。グーツと抑えてしまっただけ、いざそういうことになったときには天然ガスを増産しますという約束を取り付けたわけです。それからノルウェーは、これはもうジェスチャーだけなんですけど、北海の天然ガスが非常に豊富なんです。ノルウェーから中央ヨーロッパまでパイプラインを敷設するための計画を検討しますと。計画の検

討は出来ませよ。とても実現出来ないと思えますけど、そういったようなこと。そのほかバイプレイヤーズを動員して、それでアメリカを納得させて、一本目だけは認める、その代わりドイツを納得させて二本目は敷かないということだね。それを結局、数量ではダメなものだから、IEAの私がやった理事会の決議として、その文章は忘れましたが、「IEAのメンバー国は、エネルギー政策の基本を変えるような場合にはIEAと協議しましょう」という文章になったわけです。その心は、二本目をもし敷くことがあれば必ず相談するんですよということをドイツに飲ませて、それはヨーロッパもみんなOKして、そこでアメリカも飲ませて、IEAで決めたわけです。それで決めたやつを閣僚理事会なんかに言い換えられたら大変なんですよ。だいたいにおいて、さんざんネゴして作った理事会のコミュニケーション案を閣僚が来て思いつきで何かを言われると困るので、ネゴシエイティッド・ドキュメントだということまで全部断って、それが出来たのは私がボンに行っているとき。ボンからパリを往復して、ずいぶん苦労したわけです。そういうのがありました。

■日本経済にプラスになる外交が基本

宮崎 おそらくそういう話は、普通の人にしても「何をとぼけたことを言っているんだ」という話になるだろうと思います。というのは、その持っている大きさというか、マグニチュードが分からないわけです。

ちなみに、私は現役の時代に、外務省の中で経済局の勤務がない人、殊に政務局ばかり勤務している人に対して、よくしょっちゅう文句を言っていたんだけど、何か質問すると「そういう細かいことは知りません」という話をいうんですよ。だから、「『そういう基本的なことは知りません』と言いなさい」と(笑)。

たしかに僕はマルキストじゃないし、マルクス・レーニンには非常に反対なんだけどね。唯物史観も反対なんだけど、下部構造と上部構造とあるでしょう。下部構造は経済、マルクスがいうと生産力と生産関係とか。上部構造は政治だし、いちばん上部にイデオロギーがあるわけでしょう。あまりにも下部構造とかベーシックのことを知らない人がいる。

たとえば、ド・ゴールがずいぶん前にルーマニアを訪問したことがあるんですよ。それについて大騒ぎするわけですよ。これはたいへんなことだ、何かあるんじゃないかって。僕は、もう全然そんなのは騒ぐ必要はないと。ド・ゴールがルーマニアにチャウシエスクに会いに行ったんだけどね。余談だけでも、フランスというのはアクロバティックな外交をやるんですよ。よく言われているのは、一等車の切符を買わないで、二等車の切符を持って当然のように一等車に座っている。だけど、それをなかなか退かせられないというのが、フランスの国際上における地位だという話を聞いたことがありますか。

井上 いや、初めてです。

宮崎 まさにそういうことで、国力から見ると全然それに値しないにも関わらずそういうことをやるんで、その一環としてド・ゴールがまたよくやるんだけどね。ド・ゴールのみならずみんなやるんだけど、ルーマニアに行ったらって歴史的に見て何の価値もない。現になかったでしょう。そういうことを、政務局ばかりの連中は非常に大事件のように見るわけです。それはだいたい、チャウシエスクを基礎をなしているルーマニアの共産党とかルーマニアの経済状態や社会状態や政治状態が、そういうことを抜きにド・ゴールがびよこんと行ったにしても行かないにしても、ド・ゴールが代表するフランスの国力から見て何も動かない、ということを言うんだけど。

議事録は残さないでほしいんだけど、先に経済局に入ったやつ

はミクロから入るわけですね。だから、もう職人みたいに叩かれるわけですよ。「数字なしでなんで議論するんだ。おまえ、そういうことはどういう根拠があるんだ」というね。だから、全部議論を積み上げていかなくはない。ザッハリッヒじゃなくてはいけない。ところが、政務局に若いときに入って、専ら大統領が何と言ったとか何がどこに出掛けたとか、そういうことから見るでしょう。だから、全然読みが浅くなる。

もうひとつは、政務局というのは、日本が国連参加はずいぶんあとですから、政務局というのはないわけですよ。占領下には延長でね。實際上、アメリカに頼っていたわけだから。ところが、経済というの毎日毎日、ここで俺は何をするんだということを決めなくちゃいかん。そのために、どうしても読みが深くなるんですよ。そういう訓練を経てないやつが物事をやると、だめなんです。

経済局で育ったやつが他の局に、政務局に行っても十分通用する。現にそういうのがたくさんいるんですよ。ところが、逆はだめなんです。政務局で育った人は経済局に來ても、使い途がないわけですよ。あんまり大雑把すぎちゃってね。だから、たとえば経済担当の外務審議官はいろいろのがあるんだけど、ほとんどみんな私の部下だった人です。ごく最近までね。いまもそうかな。私の部下で育ったやつで、他のほうに行ってもよかったのはたくさんいるわけですよ。たとえば林（貞行）君というロンドンの大使とかね。

それは外務省の話で、政治学者と経済学者との対比では全然ないからね（笑）。ただ、この質問を見ると、若干そういうような感じがするわけですよ。

かつ、そういうようなことについては、私は直接関与してないこと、自分で考えなかったことは印象に残ってないし、外野的なコメントしかできないんですよ。外野的なコメントは、個人的コ

メントはたくさんあるんですけど、僕の私見にすぎないんで、あんまり皆さんに申し上げるようなことではないんですよ。だから、そういったようなことを申し上げようと思ってきたわけですよ。質問なり何なりあれば、もちろん。

井上 いまお話しされたことに関して、漠然とした質問で恐縮なんですけど、経済外交というのが「日本の経済的な利益を確保するための外交」というような形で誤解されている部分がある。一般にはあって、先ほど細かいことじゃなくて基本的なことなんだからおっしゃっていただくことかと思っただけです。そうすると、経済外交というのは単に日本の狭い意味での経済的な利益を確保するための外交というよりは、むしろ経済外交というのがベースになって、何らかの国家間の、たとえば安全保障上の秩序に一定の影響を及ぼすというか、望ましい安全保障秩序の経済的なベースを作っていくための外交として経済外交があるというふうなそういう発想で、大使はそれこそ日々の三〇〇回もの会議をこなしていらしたのか。そのへんの……。

宮崎 それは非常に難しいですね。何と言っても誤解が生ずると思うんですよ。かつ、非常に学問的にピシッとやらない面があると思うんですよ。というのは、「経済外交」という言葉自身は作られた言葉なので、われわれが言っている言葉じゃないんですよ（笑）。外交というのは、経済も文化も何もありません。一本であるべきであるということなんですけどね。その中で、経済局なり経済担当の外務審議官なりが……。経済局が担当した仕事は、個々の企業の利益を代弁するんじゃないんですよ。しかし、日本経済にとってプラスになることをやるという。まず細かいことでもね。だから、それがよく批判されるんですけど、フランスは外交官がセールスマンみたいになってやってくれ、ところが日本の外務省は何もやってくれない、在外公館がやってくれないというコンプレインがあるわけですよ。それは間違いなんですよ。日本

も何かの売り込みとか入札とかについては、二つ以上の日本商社が競争している場合は、どっちかの商社を押すということはできないんですよ。また、押しちゃいけないんですね。一本の場合は、日本商社対アメリカ商社とかヨーロッパ商社の場合は、日本商社を常に押しているんですよ。また、押すべきなんですよ。

それから、業界でも二つの業界の利益が対立する場合ね。たとえば日本は、昔の話でマグロを輸出したり。だけど、マグロを缶詰で輸出するのか冷凍マグロで輸出するのかは、日本の中の業界の利益が対立するわけです。その前にどうするかということは、日本の中でコンセンサスが出来た、コンセンサスをもってやらなくちゃいけない。だから、個々の問題についてそういうようなことをやって、それが積もり積もって日本経済のプラスになるというのが大事なんだということは、常に頭にあるわけです。かつまた、日本の業界というか、産業界にしても金融界にしても商社にしても、そういう人たちをバックアップすることをやらなくちゃいけない。

よく言われるのは、局長や何かのときに財界の人と話をして、「いろいろご苦労がある。それがわれわれの商売にどれだけ利益になりますか」という話があるわけだね。それは、非常に間接的にしか益にならない場合と直接益になる場合と両方あるんだけど、両方やらなくちゃいけないわけです。それはセールスマンにもなるし、業界の代弁者にもなるわけですよ。それから、外国の例ではだいたいそうですよね。たとえば、ボーイングとかロッキードが競争しているときに、アメリカ政府はどっちを押せということば言ってこないですね。

それからもうひとつは、日本経済全体をマクロ的に見て、経済がへたばっちゃったら、なにもどうにもならないわけですよ。安全保障の前にそういう前提が崩れちゃうわけだから、日本経済全体の利益を守るためには大いにやらなくてはならない。それが結

果として経済の安定なり成長なりに役に立って、それが安全保障にも影響してくるということはありますけどね。

その他に簡単に言えないというのは、直接関連する問題があるわけですよ。たとえば、僕はワシントンにいたときにペンタゴンにもよく行ったんだけど、いまアメリカで若干問題になっている武器輸出三原則の廃止という問題があるでしょう。これなんかは、私見はもちろんあるんだけど、私見はそもそも作ったのが間違いだということなわけで(笑)。というのは、非常にナイーブな考え方からすると、武器なんか輸出する死の商人はけしからんという、それはそれでいいんだけど。武器輸出国というのはアメリカ、前のソ連、中国、フランス。だいたいそれぐらいですよ。それから、それに次ぐぐらいにドイツがあんがい出しているんですよ。というのは、日本の武器製造メーカー、たとえば三菱重工にしても何にしても、お得意さんが防衛庁に限るわけです。したがって、量産ができないわけです。だから、コストが常に高くなる。したがって、永久に産業として立ち得ない恐れがあるわけです。アメリカの援助で辛うじて成り立っているだけだね。

だけど、武器輸出三原則は問題だけど、それでは何まで出していいかということ、コムというのがあって前にずいぶん議論したんだけど、外国ですぐ武器に転用されるものは出しちゃいかん。じゃあ何が武器に転用されるかということについては、非常に難しい問題があるわけですね。デュアルユースという、要するに平和的にも使えるし軍事的にも使えるというやつ。ほとんどすべてのものがデュアルユースなんですよ。布地を出しても軍服になるかもしれないし、パラシュートの布になるかもしれない(笑)。そうしたら布地を出しちゃうかかかという、そういうわけにもいかんでしょうね。

だから、そういうことで、それについて安全保障面と経済面との接点がたくさんあってね。じゃあそれをやめるとすると、武器

をどうするんだという日本の防衛庁の予算何兆円というのは、アメリカにとってはたいへん大きな市場ですからね。しかし、ドイツからタンクに乗せる大砲——対戦車砲を入れるという話があって、だいぶもめたんだけど結局入れたと思います。非常に性能のいい砲をドイツが開発したわけです。それを入れるということになると、アメリカとぶつかるわけね。国内ではぶつからないんだけど。だから、安全保障問題というのは非常に範囲が広いし、経済でも範囲が広いんで、接点があってね。それについてピシャッと割りきるといふ議論は、よく考えればできるかもしれないけど、なかなかそれは難しいと。その基本的な考え方はいま申し上げたようなことなだけで、それ以上スパッと割り切るのには難しいような気がしますね。よく考えれば別だけど。

これまた一般に、戦時中よりも戦前、陸軍が猛威を振るったでしょう。陸軍は、国内はもちろんな参謀本部だとか陸軍省とかうるさいのが勢威を誇っていたわけで、私もその会議に出てつくづくそう感じたことがある。下っ端でね。だけど、陸軍がなぜそれだけ力を振るえたかというその背景には、やっぱりあれだけの軍事予算を持って、発注するでしょう。したがって、財閥は全部、それに応ずることによってしか生きられなかったわけね。財閥というか、大きな会社はみんなそこに行かざるをえない。それは経済問題なんですよね。受注者と発注者。その背景には軍事予算というのがある。それじゃあ陸軍というのは何だと、政治的なひとつのグループであると同時に、経済的なグループなんだよね。だから、その接点というのは非常にたくさんあるわけです。そういう意味で、戦争中は非常に当たり前の話で、戦争前だけでも、政治と経済というのは分けられないんですよ。それから安全保障も分けられない。だから、ポリテコ・ミリタリーとエコノミックスとの間の接点というかボーダーラインはどこにあるのか、どこで分けるのかというのは、お役所の仕事としてはこれはどっちが

扱うかということと分けざるを得ないけど、突き詰めていくと非常に難しい面があるわけです。

ところが、往々にして事業家とか経済学者は専ら経済のロジックでしかものを見ないし、政治家というのは政治のロジックでしかものを見ない。あるいは政治関係の役人もね。だから、その間にポコーンと穴が空いてしまっただけで、往々にして議論が、私に言わせると基礎のない議論が上だけで展開しているというようですね。下部構造がしっかりしてないので上部構造はグラグラしている。

ちなみに、唯物史観を肯定する意味じゃないですね(笑)。それだけで動くとは決して言ってないんです。宗教もあればいろいろなことあるわけ。もっとも唯物史観を肯定してないというのは、戦争中にはふた言目には言わなくてはいけないけど、いまは必ずしも言わなくても誰もそうは思わないだろうけどね(笑)。佐道 いまの関連して、先ほど、経済局育ちの方と政務局育ちの方と、ものの方とかが考え方の違いとか、基礎がしっかりしているかどうかというお話があったんですけども、基本的な問題として、外務省に入られて、ある段階で経済局とか振り分けられるわけですよ。それで、これはたとえば、そういうふうになっていくときに、その人の特性とかそういうのを見てそうなるか、あるいは政務畑、経済畑の行き来は若干あると思いますが、だいたいにおいて経済畑と政務畑の方と分かれていくような感じがするんです。そういった交流は、大使がおっしゃるようにならんとあって、きちんとその基礎をふまえた上で政策を立てるかというふうにしなないと、これは日本外交の大いなる損失になると思うんですけど、そこらへんはどういうルールになっているんでしょうか。

宮崎 あんまりルールもないんですよ。それはお役所のお役所たるところで、たまたまそういうことで配置された。個人のある程度のチョイスはあるんですけどね。どこに行きたいかという希

望は、叶えられるかどうかは別として表明できる。それぐらいに経済関係をやりたいたいという希望は、私の場合はずいぶん初めから出したんだけど、そういう希望を全然持たない人がいるわけよね。経済関係をやって政治のほうに行く交流は、一方通行みたいなからね。だから、経済局が養成所みたいになっちゃって、それから外に出すんだけど、よそから持ってきても、つまり事務官をやっていない人をよそから持ってきて、課長までかな、とにかく局長時代に課長を採用するときに、全然やったことない人を課長にするという気にはならないですよ。

というのは、要するに経済局の場合には非常にミクロの案件が多いでしょう。ミクロの案件については、当然数字があったり業界の人の話を聞いたり、いろいろなことができるわけよね。基礎的なことが分かったのちにやらなくてはいけません。そういうプロセスが政務はあんまり漠然としていて、ド・ゴールがチャウシェスクに会いに行ったという一つのインフォメーションをインプットされて、その意味合いはどうかということを下から積み上げるといっては、下からの積み上げて専ら、たとえば大統領がどう演説したとかなんとかそれしか、これはまたあれだけど、要するに政治的な感覚とか政治学とかね。経済学じゃないんですけどね。経済的には積み上げでしょう。政治的には学問じゃないと思うんですけど、そういうような積み上げをやるような仕組みがなかなか難しいんですよ。だから、代議士がみんななそうでしょう。何もなくていきなりヒヨコンと代議士になってそれをやっているわけで、基礎的な積み上げがないわけですよ。それは日本に限らずいる。ただ、そういう政治家が育たないのは、日本がいちばん不幸なんだけども。たまに出てきて立派な人がいますけどね。

僕は、戦争中の政治学科卒業ということになっているんだけど、政治学というのはよく分からないですね(笑)。教えていただき

たいんで。私の習った政治学というのは非常に、あまりにもクラシックで、あれは「学」といえるのかどうかと(笑)。

佐道 先ほどIEAの議長をされたり例のバイブライン問題等々のときにご苦労されたお話を伺ったんですけど、後ろから弾が飛んできたという話ですよ。もちろん個々のケースにおいて違うのかもしれないけれども、明確に大使が方針を決めてこのほうがいいと思って交渉したりされていることと、本省の言っていることが違うということが、いろいろなことで起こると思うんです。そういう場合には、大使としてはどういうふうにされるものなんですか。やっぱりこれはこうだからと、向こうに球を投げ返して説得をするわけですか。

宮崎 それはケース・バイ・ケースですよ。私の場合は投げ返せるんですけどね。ただ、その前に外務審議官をやっていました。経済担当の外務審議官というのは、外務省の中の経済関係では最高のポストなんですよ。だから、「訓令を出せるやつが外務省にいないはずがない。だから、『おまえ、どうせい』という訓令は一切寄越すな。大蔵省はこう言っている、通産省はこう言っている、業界はこう言っている、なんとかはこうだ。世論はこうだとか、経済情勢はこうなっているという材料を寄越せ」ということを盛んに言って、部下が出る会合には『こうせい』と言っているのはいいけど、わしが出る会合には『こうせい』と「な」と言って、いる間は訓令はこなかったんですよ。それもちょっと善し悪しがあるんですけどね。デメリットもあるんですけど。

いまのIEAの場合は、これは通産省なりいろんな人が絡むでしょう。つないでいたんだけど、いまのような機微のことはあんまり下のほうにまでは言いたくないわけ。外務省もごく一部の人が知っているだけであってね。ところが、それに対して一次エネルギーの二五パーセントという計算してこうだとかなんとか

というのは、通産省のいちばん下の事務官でしょう。これを説得するのは大変なんだな(笑)。だから、そんなのはもう諦めちゃってね。つまり、ものによるわけですよ。外務省の外務大臣がこういっていると何かであればワンワン言って押し返すんですけども、下のほうの官僚組織の末端が言っていることは、官僚組織の末端に通用するロジックじゃないと、意見を交えられないんですよ。だから、それは外で議論してもだめなんです。ケース・バイ・ケースなんです。よ。

それを誤ると大変なことになるわけ。つまり、東京から来た電報をどういうふう処理するかというのは、在外大使のやり方で発電のほうは大臣名で出すんだけど、課長止まりで出る発電がたぶんあるわけですよ。局長まで上がったのと次官、大臣まで上がったのと、内容を見れば分かるし、比較的何年前かな、記号ができて誰が見ているかということとは分かるわけ。したがって、来た電報のウエイトを見て処置しなくちゃいけないわけです。

佐道 単純に考えて、先ほどおっしゃったように外務審議官をなさった方に、もし課長とかが書いて出したら、出すほうも出すほうだし、という。

宮崎 それは「誰それが行くからホテルを頼む」なんていうのは、これは当然(笑)。そういうのがたくさん来るんです。何人行くから、とか、こういう資料を持っていくから、とかね。まあ、いろいろ。

■旧ソ連と西ヨーロッパの関係

井上 先ほど天然ガスのパイプラインのお話がたいへん興味深かったんですが、おそらく同時代的に、それこそよく分かっている政治学者が言っていたこと、特に日本のだと思いますが、こう

いう言い方をしていたと思うんですね。それは、ソ連のアフガニスタン侵攻(一九七九年)というのをきっかけとして、新冷戦の時代に入ったと。八〇年代前半は、レーガンがソ連を悪の帝国とやって軍事的に封じ込めることに中曽根政権は関与していったところ。ところが、ヨーロッパを見るとそれは違う状況が起っていたとよく言われていて、それこそまさに天然ガスのパイプラインの例を引かれていて、ソ連とヨーロッパ諸国との間には経済的な相互依存関係が、実はもう七〇年代末から八〇年代にかけて進んでいて、新冷戦というのは米ソのレベルの話で、ヨーロッパでは信頼醸成が進んでいったんだと。日本はそれが全然見えていなくてアメリカに過度に協調してしまっただけで、冷戦終結が見えなくなっていたんだという言い方をよく、国際政治学者はするんです。やっぱりこれはむしろナイーブな見方ですよ。そこをぜひ大使のお立場から。

宮崎 もうとんでもない。ソ連と西ヨーロッパとの関係というのは、日本が見ているのと全然違って、もう大変なお互い同士の読みの深さね。それから、どういう手を打つかということについての、それこそ国の存亡をかけての話ですからね。

というのは、ドイツなんていうのは、当時のソ連軍が陸軍がタンクでもって攻めてきたら、当時の東独の国境から一気にやられる恐れがあるわけでしょう。したがって、ソ連の動向なんかについては、ものすごく神経質なんですよ。それに対してもうやめちゃおうという融和政策を取っているかというところ、決してそうじゃないわけね。パイプラインについても、いま言いましたようにパイプラインを敷くということが経済のために非常にプラスになることは確かなんだけど、それによってソ連に依存しようというところは、ドイツの高いレベルの人はそんな話は毛頭考えてないわけ。だから、この次のドイツ在勤時代の話に関連するんだけど、NATOの二重決議があるでしょう。シュミットがパーシ

ング2を導入したという、あれに代表されるように、ドイツの中ではソ連の脅威に対してどういうふうに対処するかということについて社民党ですらも、社民党は左派は別でしたけど、そういう社民党右派とその他の政党は大賛成だったというようなことを。

それから、国防についてのドイツ人の意識というのは大変な、日本人に比べて格段の違いがありますよ。それはさっき言った、フランスがアクロバティックな外交をやるという……。フランスとすれば、アクロバティックな外交が出来るのは、ドイツというバツファーがいるから。フランスから見れば、ちょうど車のバンパーの前に犬をつけているようなものです。犬がワンツと言ったらこれは危ない(笑)。そういうふうな安心感があるから、かなりアクロバティックな外交もやるという感じがあるし。

それからイギリスもやっぱり。NATOの最大の力はドイツなんでしょうね。ドイツがあるからNATOが維持できるんだということはあるしね。いちばん弱いのは南翼であるというわけでトルコの問題がたいへん大きな話になって。前にもゲアドループの四カ国会議のあとでトルコに対する支援を日本に要請してきたというのは、トルコというのはそういう意味ではたいへん重要なところにあるわけですよ。安全保障に関するヨーロッパの読みというの、ものすごい。それで意見も分かれていますけどね。

よく笑い話があつて、何人かが飛行機に乗って、一人か二人しか残れない、先に飛び下りるといったら、飛び下りる前に何か言いたいという。そうしたら、アメリカ人は何とか言い、イギリス人は何と言って、日本人はどう言ったと思いますか？ ドイツ人は「じゃあ、ドイツの安全保障の問題について議論する」と言ったら、アメリカや他のやつが「それじゃ俺が先に下りる」と言ってたって(笑)。これはたいへんなものですよ、右にしても左にしてもね。そのあとの二重決議に示されるように、片方ではソ連との対話を常に考える、片方では実力というか力を常に蓄えるとい

うことは常に頭に描いていたわけですから。だから、いまのようなことをいう学者がいるとすれば、政治学者はまったく国際情勢のベアシックを見ないで。

井上 わりといいますよね。

宮崎 そういう学者がいる間は、あんまり政治学は発達しないな。佐道 そういった大使のような見方について、政治学者は別として、外務省とか政府とかは対ヨーロッパ観ということではだいたいで共通していたんでしょか。

宮崎 もうだいたい共通していると思いますよ。ただ、外務省のキャリアの中で、それは地域の人に偏るでしょう。アメリカばかり行っている人は、やっぱり考え方が非常に単純になっちゃうわけね。フランスとかそういうところへ行っているのは、かなり屈折した考え方を持たざるを得なくなるわけ。だから、いろんなところに、若いときにあちこち回すというのはいいことだと思うんです。日本だけで生きていたら、アメリカよりもっと単純になっちゃうんじゃないかな(笑)。ジャーナリストがそうですよね。

■OECDの歴史と役割

佐道 そのジャーナリストの書いた記事を元にして、よく議論を組み立てる政治学者がいるものですから……。ちょっと違うんですけど、OECDという存在ははっきりいってよく分からない部分はあるんですけども、OECDという存在の意味ですね。大使は都合、公使・大使と二回勤務されているわけですけど、世界経済、七〇年代のオイルショックの大混乱、それからいろんな国際協調のために提言を出したり会議を開いたりとかやってきているわけですけど、国際経済や国際協調にとってOECDはいいかどうかという存在であるというふうにかえたらよろしいんでしょうか。

宮崎 歴史的にはOECDというのはマーシャル・プランの受け

皿としてヨーロッパが作ったわけですよ。だから、当時はアメリカもカナダも入っていなかったわけ。マーシャル・プランでアメリカが援助するときにヨーロッパは受け皿でまともって、それをうまく配分するために出来たものですよ。そこにアメリカ、カナダが入ってOECDになった。日本が加入したのはずっとあとですよ。

OECDのファンクションというのも、年代によって時代によって変わっているわけですよ。前に言ったかと思うんですが、ある程度、加盟国がOECDをどういうふうにご利用しようかという意志によって違ってくるし、事務総長の感じによっても違ってくるわけです。

初代事務総長のクリステンセンという人は学者なんですよ。経済学者なんだ。それで、デンマークの大臣もやったりなんかした人なので、その人はどっちかというシンカーなんですよ。だから、いろんなことを考えてね。OECDはその当時はどっちかというシンクタンクみたいな、世界経済が混乱していて何をどうしていいか各国でなかなか分からないときに指針を出すためのアイデアを出すというかな、あるいはその資料を作るというシンクタンクの性格が強かったと思うんです。ところが、それについてアメリカが不満でね。そういうシンクタンクのなものじゃなくて、つまり議論のための議論じゃなくて、もっと行動的な、アクション・オリエンテッドなものにしないでほしいと。デイシジョン・メイキングをしっかりせよというの。

そこで、そういう観点もあって選ばれたのが、ヴァン・ネレップという次代の事務総長で、たしかに今度はOECDがいろいろなることについてリコメンデーションを出したり、いろんなことをやるようなふうに変格が変わっていったわけですよ。それから、OECD自体の性格の変わりの他に、ヨーロッパのECがだんだん加盟国を増やしていくでしょう。OECDのメンバーのうちの

何カ国か、そのときによってだんだん増えていくんだけどECになっちゃうわけね。そうすると、ECはローマ条約以降のいろんな条約によって、貿易に関してはEC委員会が権限を持ってしまいうわけ。だから、たとえばケネディ・ラウンドとかなんかについては、EC代表が出てくるわけ。ところが、貿易以外のものは、各国がまだ持っていた。それがだんだんEUに統合されていくんだけど、その過程にあったわけでしょう。

そこでOECDの役割は何であるべきかということが、またそこで議論になってね。つまり、アメリカから見るとOECDはあまりにもヨーロッパ的であると。しかも一カ国一票だから、デイシジョンメイキングに適さないという。そうすると、アメリカはわりとウエイトを置かなくなるわけよ。日本はほかに場があまりないものだから、これを育てていくべきだということで一所懸命OECDの活性化のためにいろんな議論をして。たとえば環境委員会を作る。公使の時代に環境委員会を作ったり、PAPを推進したり、それからいろんなことを僕自身もやったしね。

それから今度は、サミットの関連づけをどうするかというね。これもずいぶん議論があったんだけど、結論を言えば、OECDの経済政策委員会が世界経済についてまとめて意見を出して、それを閣僚理事会がエンドースすると、それがサミットのマクロ経済政策のベースリック・データになるんだという慣例を作ったわけです。したがって、経済政策委員会というのは、その意味でハッスルしてやるわけね。これもサミットの前にOECDが閣僚理事会を開いたほうがいいのか、あとに開いたほうがいいのかについて議論がたくさん分かれたわけです。僕は当時の事務総長に言ったけど、前にやらなかったらOECDの意味がなくなるぞと。あとにやったら、サミットの言ったことを実施するだけの効果しかない。だから、前にやるべきだ。前にやれば、OECDの事務局のエリートを動員して分析をやって、閣僚理事会にその分析結果

を上げて、それをサミットに反映することが出来るじゃないかということ、そういうことになったわけなんだけど。そのほかいろいろ、エネルギーについては前に言ったような理由で、まったく別の機関になるはずなのをOECDにひつつけちゃったんだけどね。これは僕の独断でひつつけちゃったんだけど、IEAというのは本当は独立機関ですね。ただ、独立機関だということと日本で国会に出さなくてはいけないものだから。

そこでそういう経緯があって、「これから先どういうようなものであるか」というんじゃないかと、「どうすべきであるか」ということを考えた場合、どういうふうにご利用したほうがいいのかということ、日本は考えるべきだと思うんですよ。

アメリカはだいたい、どっちかといえば議会が、予算をどんどん切るわけです。OECDの予算も切っている。国連の予算も切っているでしょう。だから、一時はどう利用しようかということとをずいぶん議論して、アメリカは国際機関について非常にアレルギーがあるわけね。国連についてもそうでしょう。国連は、議会では非常に不人気だよ。アメリカがわりと利用しているのは、IMFなんです。IMFというのは、いざとなったら金を出す、貸す権限があるから、強いわけね。いわゆる途上国なんかに対して睨みが効くでしょう。かつてIMFは一国一票じゃなくて、ウエイテッドな票決になっているでしょう。アメリカはわりとIMFについてはまあまあなんだけど、それでもIMFの増資に議会が反対したり。OECDはそういう権限はないしね。だから、アメリカというところからみると、OECDは議論ばかりして、殊に欧州勢がゴチャゴチャいて、非常にナイーブなシンパルなアメリカの意見が通らないということにフラストレーションを（笑）。日本もそういう人が多いんだけど、日本はまだ利用できると思うんですよ、あれはね。ということを書いていたら、いつだったけな。おまえ、事務局長になったらいいじゃないかと、あ

る一部の人が考え出したので、とんでもないといって（笑）。やめてもらったんだけどね。

それから、国際機関というのは外にあって、法廷みたいに国際法廷。よく昔「ガットに提訴」とか、ああいうのが提訴って。提訴ってそんなものじゃないんですよ。ガットはいまWTOになったけど、どういうふうに使うかということを考えていかなくはないじゃないんで、どういう性格を与えたらいいかとか、どういうことをここに持っていったらいいかとかいうことを考えるべきであって、それによって変わってくると思うんです。いまOECDは若干、そういうスポンサーがいなくなっただんで、日本もスポンサーをあんまりやらないし、僕も言われたようにいろんなことをやって、OECDのアグリゲーションをやったんだけど。それから韓国が入ったりメキシコが入ったりして、人数が増えると議論がまとまらないんですよ。OECDはいつも先進国の集まりだけだということにミスがあったわけで、それがはっきりしなくなってくるね。

佐道 いまの話と全然違うレベルなんですけど、日本のOECD代表部、大使館がごさいますよね。あそこは他の大使館と違ってというか、各省庁からの出向者がべらぼうに多いところですよ。組織運営上もかなり難しいのではないかと思うんですけれども。宮崎 少なくとも僕のいるときは、まずどの書記官よりも僕のほうが余計に知っていたものだから（笑）。だから問題なかったけど。ただ、人が多いというのは、旅費のせいですよ。ヨーロッパの国はみんな、会議の度に専門家を本国から一時間ぐらいで派遣できるでしょう。それで二日間いてまたすぐ帰っちゃうわけ。日本は金がかかってしまうが、あそこに置いておかなくてはいけないうわけです。専門家を呼ぶものをね。だから、人数が増えてしまいうわけです。それは日本について、アメリカはまだ近いから

ね。韓国なんかはどうするか知らないけどね。したがって人数が多くなる。だけど、かなり各委員会は別々だし、全体のマネージメントといたら、たとえば交際費をどう使うとか、それは大変なんだけどね。それは基準を決めて、本省から各省が来るでしょう。その接待は、書記官はどのレベルのレストランでどのくらいかとか何回とか、その範囲内でやってくれとか、あとは自分のところへ呼んでくれとか。それから外国人を呼ぶ場合はここだとか、基準を決めてやったり。それから電信だとかそういうったようなことは、官房的なことがありますけどね。それからあとは、各委員会から出てきたやつは上まで上がるのが多いですから、大使のところに持っていかざるをえないわけよね。したがってマネージメントは僕のとときは、みんな非常によくやってくれたと思いますけどね。

佐道 それだけ大使にまた仕事が集まってしまうという……。

宮崎 だけど、大使の出る仕事というのは週に二回かな。理事会と執行委員会と、それ以外は出ないんですよ、原則はね。IEEAのなんかの議長をやるときは出ていたけど、そのほかいろいろ議長がやったものだから、そういうときは別ですけどね。

佐道 宮崎大使のときには、次席の公使は……？

宮崎 いましたよ、もちろん。

佐道 どなたが。

宮崎 何代もいたよね。深田君というのがいたり、村角君というのがいたり山中君、みんなあとで大使になって。長かったからね。ヌシになっちゃっているから(笑)。

だから、何も日本の中だけじゃなくて、OECD界限では他の大使が盛んに頼ってくるわけです。他の国の大使は、デンマークは外務大臣をやめたやつがOECDの大使になって来たり、昔はそんなのがいろんなことを頼みに来たりして。

さっきのエネルギーのとき、IEEAのパイプラインのとき議論

したときにどういうふうに聞きつけたのか、アルジェリアの大使がやってきて、アルジェリアはシチリアを通過してパイプラインを敷くという話があって、ロシアが西シベリアのパイプラインを敷くと、俺のところのパイプラインがペイするかしないかというのが非常に関心があったわけね。そういう意味で、エネルギー問題というのは非常に国際政治的には影響があるわけです。ところが、ソ連がアフガンに侵攻したって新聞を見ればすぐ分かるんですね。しかし、それについてエネルギー問題を議論するというのは、かなりバックグラウンドデータを調べないとね。それから基本的な知識がないと議論できないでしょう。そういうのがなければ、非常に日本の政治は、あるいは政治学も地につかないことになるんじゃないかと思うんだけどな。

佐道 耳が痛いことです。

宮崎 だけど、今は僕の習ったような政治学じゃないんでしょうからね。もっと非常に科学的になっているんだろうから。

佐道 どうなんでしょうか(笑)。科学的と思いたいというのが、本当のような気がします。

井上 これも漠然とした質問で恐縮なんですけど、きょうのお話は特に七〇年代から八〇年代へのカレンダー上の転換期の時期でもあったんですが、もう少し本質的な意味で日本の外交にとって七〇年代と八〇年代というのは、国際環境が大きく変化しているという実感があるのか、それともたまたまカレンダー上、七〇年代から八〇年代に行くというだけで、本質的な部分はあまり変わっていないというふうなお考えなのか、そのへん、どうなんですか。七〇年代と八〇年代という言い方が成り立ちうるのか、それともあまりそれには意味がなくて、それまでの課題というのが連続して八〇年代にも続いていくという感覚なのか、そのへんは……？

宮崎 非連続の、断絶ななんとかと書いたのは誰だったか。断絶の

何とかという本が一時、学生の間にも、ドラッカーだったっけな、流行ったでしょう。あれはデイスコンティニュードよね。「断絶」と訳したのは知恵で、たくさん売れたというんだけど(笑)。デイスコンティニューティというのがあまりないんですよ。常にコンティニューティの上にあるだけで、そのコンティニューティの上で非常に大きな変化があったのとなかったのとあるんだけど、僕は八〇年代の初めぐらいに、それこそ冷戦の末期のときのほうが大きな変化があったと思うんですよ。つまり、NATOの二重決議とか、そういったような。七〇年代にもその兆しが出ていたわけね。たとえばブラントという人が西独の首相になって、東方外交というオストポリティックというのを出したでしょう。オストポリティックというこのメリットは、西独が東独ないしはソ連といろいろ話をすることによって、ある意味で西側における外交的なマナーバビリティを得るというメリットがあったと思うんですよ。それじゃなければ、全部アメリカやフランスの言うとおりに動かざるをえないという西独がとったのは、俺自身がああいうところと話ができるんだ、またしているんだということが、ある程度イニシアティブを取って世界的に動けるということに。当時すでに、ドイツの経済が非常に強くなっていたからね。米日に次ぐ経済大国になっていたわけですから、そういうことをやりだしたわけね。

これまた飛ぶんだけど、僕はブラントのオストポリティックは失敗だと思っているんですけどね。いずれにしても、そういう兆しはあって、それによっていわゆる東西融和的なムードはある程度醸成されたわけです。しかし、交渉はずっと続いていました。それで、四カ国協定が出来たのは六九年の末だったかな、七〇年代の初めだったかな。そういうような協定が出来て、ベルリンの地位なんか法的にはっきりしてきたと。それからまた、東独のほうでもウルブリヒトが退任してホネッカーが出てくるとか、いわゆる東西問題については六〇年代のお終いから七〇年代にかけて若干の動きはあって、その動きはずっと続いていくんだけど、それが非常に顕著になってきたのはもう少しあとでね。それからパーシング2の問題とか、ああいう段階だと思うんですよ。あれによって一言にしていえば、西側の、殊にアメリカの力によってソ連が崩壊してきた。北風と太陽で、太陽に当たったから崩壊したんじゃないんですよ。もう完全にソ連はアメリカに対抗して軍備を増やせないということが、ソ連経済の崩壊によって明らかになったので、ああいうことになってきたわけね。その兆しはすでに七〇年代から若干あることはあるんだけど、まだ顕在化してないわけでしょう。政治学者に限らず経済学者もそうなんだけど、左翼の人の言うことは、まったく基礎なしの頭だけで考えている議論が多いんでね。あれを見ると、そういう学者たちをまったく軽蔑する以外にない。何を勉強していたんだと。

井上 (笑)。してないですね。

佐道 耳が痛くなるばかりです。

井上 毎回そうなんですけど、今回も特にこれまでの日本外交の既存イメージがガラガラと崩れていく、そういう現場を独占的に聞く機会を与えていただいて、本当にありがとうございます。

宮崎弘道

オーラル・ヒストリー

— 第11回 —

開催日：2000年2月22日
10：00～12：00

開催場所：政策研究大学院大学
プロジェクトセンター

■インタビュアー■（肩書きはインタビューの時点）

北岡 伸一（東京大学法学部教授）
股野 景親（元駐スウェーデン大使）
井上 寿一（学習院大学法学部教授）
佐道 明広（政策研究大学院大学助教授）
武田 知己（東京都立大学法学部助手）

■西ドイツのシュミット政権

宮崎 まず、シュミット政権の前のブランド政権について、ちょっと最初に私の感じを申し上げますと、ブランドという人はご承知の「オストポリティック」——「東方政策」と訳しているんですかね——で有名になって、その他いろいろなことをやったわけです。オストポリティックのメリットとデメリットというのは、おそらく何十年かしたら歴史家なり政治学者の間で議論になると思うんですが、いま言うのは早いのもかもしれませんけど、私が個人的に言いたいのは、メリットよりもデメリットのほうが大きかったというように思います。

メリットというのはもちろん、直接、当時のソ連とか東独との間でなにか事態がよくなったというよりも、むしろ西独が自分で東独なりソ連なり、いわゆる東ヨーロッパ諸国と話ができるということによって、西側に対する外交のマナーバビリティを増やしたというところにメリットがあっただろうと思いますけど、それは具体的な恰好ではあまり現れていなかったと思います。しかし、ドイツが国際政治における発言権が、それによって若干なり増大してきたということがあるかもしれません。

他方、オストポリティックの結果、なにか東側との関係で非常に進歩があったかという点、ほとんどなかったと言っていると思ふんですね。あれはむしろ当時の西独の世論にも受けたわけですが、果たしてどういう功罪があったのか、非常に……。私は必ずしもあんまり評価を高くしないんですが、日本では非常にブランドというのは有名だし人気がありますでしょう。あれは不思議なんだけども、私の評価が間違っているのか、スウェーデンのバルメという人も日本で人気があるんですけど、私は全然評価していないんですかね。そういうものかと思えますが。

股野 日本での評価は分かれておりますね。バルメについてはや

はり。

宮崎 わりと評価する人のほうが多いんじゃない？ 日本では。

股野 評価する人もいますけど(笑)。

北岡 パルメもブランドも、だいたい岩波じゃないですか、評価するのは。岩波系の文化人が評価するんですよ。

宮崎 ブランドは、前に西ベルリン市長だったわけですよ。それでそのあとで、もうだいたいぶあとですけれども四カ国協定が出来て、ベルリンの法的地位がはっきりするわけですが、ブランドが市長の頃はまだ壁もなかったわけですよ。壁が出来て、それでいろいろ経緯があって四カ国協定が出来て、法的には米英仏ソ四カ国の支配下にベルリンは置かれる。ですから、ベルリンの市長というのは四カ国の、「シュッツ・メヒテ」と言っているんですけど、メヒテの各国大使の支配下に置かれるという、法的にはそういうことになったわけですよ。

ブランドはその前ですけど、なぜそんなに人気があるのか、よくわからないんですが、ナチスに対して反対して亡命して、ノルウェーの軍服を着てベルリンに戦後来たというような伝説もあって、反ナチスでいろんな人の人気を得たということはあるのかも。もちろんけど、私が見ていたのはブランドの末期なんです。末期のブランドというのは、まったく政治家として「これがあのブランドか」と思われるぐらいに言動におかしなことが多いんですよ。何番目の奥さんか、とにかく最後の奥さんが非常に若い女性で、それがSPD「ドイツ社会民主党」の中の最左翼なんです。もう大変な左翼なんです。その人と結婚して、その結果だとは言いませんけども、とにかくブランドはどんどん、どんどん左翼思想を強くしていったわけですよ。で、大変な反米になりました。それで、SPDの中で後継者のシュミット首相と非常に対立することになったわけですよ。

そのときにヴェルナーという第三の男がいて、それがブラ

ントとシュミットの間をある程度調整していたのでなんとか持っていたのが、ヴェルナーがいなくなりまして、死んだんですけどね。そのあとでいろんなことがあって、殊にSPDの左派の造反とFDPの造反とその二つが重なって、形式的にはFDP「ドイツ自由民主党」の造反がきっかけになったんですが、シュミットが退陣せざるをえなくなったわけです。

シュミットにつきましては、私は何回も二人で話をしたことがあるんですが、ある意味では、ブランドンに比べてはるかにシュミットのほうが立派な政治家だと思います。彼の非常にいいところというか、私が政治的に見て功績だと思われるのは三点あるんです。そのひとつは、いちばん大きいのは、NATOの二重決議。有名な、ドイツ語の言葉でドッペル・ベシユルスと言うんです。これはあとで申します。

それから二番目が、国際経済における彼の見識。それから、ジスカール・デスタンと組んで、いまのユーロという統一通貨の萌芽を作った独仏協定というのは、これはかなりいろんな人の反対があったわけですよ。実務家から、あるいはエコノミストからいろいろんな人の反対があったのを、シュミットが強引にジスカールと組んで最初に独仏協定を作った。これも非常に立派なものだし、かつ、彼の国際経済に関する見識というのは非常に高く、私は評価するんです。

それから三番目は、原子力発電を推進したということ。この一番と三番は、SPDの左派の猛反対に遇ったにも関わらず、それを抑えてこれを推進したことでドッペル・ベシユルスは実現しましたし、原子力発電は彼のいる間ほとんど増やしていったわけですね。その三点は非常に高く評価するんですけれども、他方、かなりのデメリットというか、彼の政治的な失敗とまではいかないにしても制約というのは、いま述べた主な、彼自身が非常に強く関心を持ってやっていた三つの点以外の点は、ほとんどSPDの主

流たる左派に任せていたわけですよ。だから、国内経済政策、それから対外援助政策、それからその他内務もそうですけども。

ただ、彼がおそらく言うだろうと思うのは、当時、FDPとの連立政権だったので、左派に経済政策を任せておいてもFDPが反対するから、ちょうどいいところに落ちつくという読みがあったのかもしれない。しかし、相当これは左派が牛耳っておったし、援助なんかも左派が。援助大臣はたしかエプラーと言ったと思うんですがね。エプラーという人がいたんですが、フランス人は「アヤトラ・エプラー」と言ってあだ名していたぐらい左派なんです。

しかし、個々の人のことは言ってもしょうがないので、ちょっと雑談になると、当時だったと思いますが、シュムーデという法務大臣がいたんですよ。日本から坂田という当時の法務大臣、のちに衆議院議長になった人です。坂田……。

北岡 道太。

宮崎 そうそう、法務大臣がやってきたわけですよ。それで、予め向こうのシュムーデがいろんな話をしたいというので飯に呼んで話をしたときに、「坂田ってどういう人か」って言うから「独文科を出て政界に入った」って。「何が専門か」と言うから、「たしかゲーテだ」と言って。だったそうですよ(笑)。そうしたらシュムーデはびっくりしちゃってね。それから一週間足らずの間に、また私が公邸で両大臣を呼んで飯を食わせたんですけど、シュムーデさんは「あれからゲーテをもう一度読もうと思っただけだ、どうしても時間がなくて読めなかった」と言っているわけですよ(笑)。坂田さんにその話をしたら彼は喜んじやって、早速昼飯のときのスピーチに、まだ覚えていたゲーテの一節をやりましてね。日本語でだけ(笑)。

日本人って案外ドイツのことを知らないようで知っているようで、また知らないんですけどね。知っているほうは、音楽ね。た

たとえば「冬の旅」とか、ああいうのは小学校のときにメロディーを習っているわけでしょう？ だから日本で、ドイツの要人が来て飯を食わせるときに、芸者さんじゃなくてお膳を運んでくる仲居さんというんですか、仲居さんまでメロディーを知っているんですよ。ドイツ人がみんなびっくりしちゃって。若いドイツ人とか最近のは、ドイツの古いメロディーなんかは知らないんですよ（笑）。それで非常に向こうがびっくりするということがあるんだけど、とにかくそれは別として、シュムデーも社民党だったと思いますけどね。

そういうわけで、シュミットが非常に関心があった三つの問題以外は左派に任せておったと。その結果もあるんですが、その結果だけとは言いませんけども、ブランド、シュミットの時代を通じて、ドイツ経済の中におけるパブリックセクター。パブリックセクターというのはご承知ですよ。GNPに占める政府の支出、地方を含めてね。パブリックセクターの肥大が激しいんですよ。ということは、プライベートセクターがそれだけ圧縮されて、その中でいちばん圧縮されたのは民間投資の、特にR&D（「リサーチ・アンド・ディベロップメント」）なんですよ。

それで、この前のときに申し上げたように、最初、私はOECDに行ったときテクノロジーカル・ギャップすなわち、アメリカ対日欧の間のテクノロジーカル・ギャップは、たしかに厳然たるものだったんですね。ところが、その後のこの時期におけるテクノロジーカルギャップという言葉は、日米対欧州という恰好になったわけですよ。というのは、日本がその間に民間のR&Dが非常に進んじやあって、殊にいわゆるハイテク分野では、半導体とかそういういったようなものについてのレベルが、部分的ではあるけれどもかなり突出していたんですね。そこで、日米対欧州のテクノロジーカル・ギャップが問題になるようになったんだけど、そのバックグラウンドを辿っていくと、社民党時代におけるパブリックセク

ターの肥大というのが、結果としてそういうことを導いたとも言えないこともないんです。これは、ラムスドルフというFDPの経済大臣がいましたね。これとは私はOECDの初期の頃からずいぶんいろんなところで会って、この問題を議論していたんですが、その中のR&Dの問題、これはこの前も申し上げただけども、あとでまたまとめてちょっと触れたいと思います。

しかし、シュミットの最大の功績というか、最大というか……。ジスカルトとの通貨協定というのは功績ではあるんですけども、それ以上に最大の功績は、やはりNAATOの二重決議のイニシアティブを取ったということなんです。そのときのNAATOでの演説だったかな、有名なのがあって。一方においてソ連との対話を深めながら、他方においてアメリカの中距離ミサイル、パーシング2。クルーズミサイルはイギリスに入れたわけですが、パーシング2をドイツに入れるということを、そういう結果をもたらす二重決議というのが出来たわけですね。これは歴史的に見て非常に大事なことだと思います。私はそれがソ連崩壊のきっかけとなったと思っています。この点はずいぶんいろいろ、これは政治史のほうでも問題なんだろうと思うんですけども、これは国内のものすごい反対にも関わらず、シュミットがそれを自らイニシアティブを取ってやったところが非常に立派だと思います。だから、日本は非核三原則ですよ。ところが、ドイツは非核二原則なんです。ね。「持たず作らず」あるいは「持たされず」「作れず」ということなのかもしれないけど、だけど「持ち込ませろ」というのは持ち込ませろたわけでしょう。だから、二原則というかな、それについてはずいぶん国内では反対があったわけですよ。日本とちょっと似ているんだけど、核兵器を国内に持ち込むということについてはね。しかし、この二重決議で非常に明らかに、核兵器と中距離ミサイル両方を入れたということが大変な、あとの歴史にも影響することだったと思います。

これはおそらく皆様がご承知のように、ソ連にSS20という中距離核兵器があつてその射程がドイツを全部カバーするわけです。それに対して対抗するためには、どうしてもアメリカのパーシングを入れなくちゃいけないという。パーシングのほうが同じ中距離ミサイルでも正確度が断然いいらしいですよ、SS20よりも。しかし、SS20の脅威というのは本当に肌で感じているわけです。

前回でしたかね。どなたかからご紹介があつた、パイプラインのことを話をしているときに、日本の政治学者が西欧とソ連とはパイプラインを作ったりなんか非常に融和政策をとっておつて、そんなことは全然、中曾根は知らない云々という話をした政治学者がいたというお話があつたんですが、パイプラインの話をこの前さんざんしたわけです。

北岡 ええ、拝見しました。

宮崎 だけど、パイプラインを敷くということは、問題のマグネチュードと非常に大きな資料を作つて検証をしたわけですけど、前にも言いましたように、あのパイプラインで入れる量というのは、どの年をとつてもドイツの入れてる天然ガスの二五パーセント以下なんです。それから、一次エネルギーの五パーセント以下なんですよね。それだけのウエイトのものだから、仮に閉まってもドイツは転換できるという、逆に言えば確信があつたわけですよね。対処できるという。

アメリカは、全体の量的なアセスメントよりも先に、パイプラインを閉められたらドイツがやられちゃうというOPPECの経験に鑑みたら、そういう極めて政治的なイニシヤルリアクションだったわけですから、その重要性の程度をIEAで議長の職権を濫用して片づけたわけですけども、その一方で対話の窓口を開きながら、一方で力を備えるということが、これが当時のドイツとどうかシュミットの考えは、非常に学ぶべき点があると思うんで

すよね。これはよく、日本では石油危機のときもそうだったんですけど、とにかく対話、対話と言うんですかね、産油国に対する対話。全くこちらにパワーがなくて「対話」っていうのは「願います、頼みます」と言うことで、それは本当に相手に屈することになるんだと。だから、こちらに何か力があつて初めて対話というのが出来るんだということ、キッシンジャーなんかは盛んにそれを主張したんだけど、誠にその通りであつてね。だから、当時のシュミットとしては、パーシング2を入れることによってSS20と対抗することによって初めて、ソ連との対話が進捗できるといふ確信を持っていたと思うんですよ。

この問題は、實際上、コールの時代になってパーシング2が入られるんですけど、いわゆるドイツの安全保障の問題に関しては、右も左もいろんな新聞も、その議論のレベルが断然高いと思えますよ。つまり、いろんな角度からいろんな検討をして議論をしているんでね。その点、日本は安全保障って何かアレルギーみたいなのがあつて、ほとんどあんまり詰めて議論しないで、ただ情緒的に嫌だとか何か言っている人がかなり多いんじゃないかという、素人目にはそう映るんですが、この問題はいくら議論しても終わらないから、次に移ります。

北岡 ちょっと質問よろしいでしょうか。私は前回、たいへん失礼してしまつたのですが、そのパイプラインの問題で、当初ドイツの計画は二つ作る、ということでしたか。

宮崎 いや、一つなんです。だけど、二つ目を作るか作らないかは問題になってなかったわけですよ。

北岡 それは未定だったんですか。じゃあ、それはさうとう現実化した計画ではなくて、ドイツでも……。

宮崎 なくて、フリーハンドを持っていたといえましょう。

北岡 二五パーセント以下、一次エネルギーの五パーセント以下、それを越えるのはやっぱりまずいという判断は、大前提としてド

イツにも最初からあったのでしょか。

宮崎 あったかどうかははっきりしませんけどね。だけど、少なくとも二つ目を作るという計画は当時なかったわけですよ。それから、そのデシジョンメイキングが、この前は申し上げなかったかどうか、普通はこういうような問題はエネルギー省とかね。アメリカだったらエネルギー省で国務省の管轄なんですけど、本件についてもホワイトハウスのまったくの意向によって決まってきたわけ。ですから、私も議長としていろんな筋を通して、ホワイトハウスに直接いろんなメッセージを送ったりして、ドイツのほうはそれこそ首相とゲンシャー本人がかかざらわっていたわけですからかなり下におろした議論じゃなくてね。だから、もちろん安全保障問題も頭に入れた議論をドイツもしていたし、アメリカはそれ一点張りだったわけですね。

北岡 かなり詰めたところで衝突していたわけではないわけですね。もう一点だけ。日本でも当時話題になりましたけど、八〇年代の初めに世界的に非核運動とかノーファーストユースとか、そういう運動が非常に広まりましたですね。大使が仰った、けっこう反対が強かったというのをもそういうことを指しておられると思うんですけども、これは党内はどうだったんですか。民間の運動として非常に強かったんですか。

宮崎 いやいや、SPD左派はもう完全にそうですね。

北岡 そうですよ。これは党内的な集約をするわけですね。

宮崎 そうですね。

北岡 そのときに左派が負けたということだと。

宮崎 負けたというか、シュミットがなんとか押さえ込んだというわけです。左派にいろんな、他の面でアメをしゃぶらせてね。

政治家ですから、それで左派を黙らせたということですよ。

北岡 そういうプライオリティの選択なんかの見識を、大使は非常に評価されていると。

宮崎 そうそう。

■西ドイツの選挙制度と政治家

北岡 私はちょうどその頃、アメリカにいたんですけど、アメリカなんかでもけっこう非核運動とかノーファーストユースとかけっこう強かったですね。NATOはノーファーストユースは出ませんからね。これは非常に私はよく覚えていますが。

もしあとでお述べいただくならけっこうなんですけど、いまも出てきましたラムズドルフとかゲンシャーとか、FDPと連立を組んでいたことの意義とかというの、あとでも今でもけっこうな感じですけど、述べていただければ。

宮崎 連立を組んでいたらいいというのは、まず第一に連立を組まないで議会で多数が取れないから。どこと連立するかということとを、キージンガーの時代に大連立というのがあったんですね。グローセコアレチオンという、CDU「キリスト教民主同盟」とSPDが連立したの。そのときはFDPは野党になっちゃったわけですね。大連立をやったあとで、キージンガーというのは失敗で、そのあとブランドが出てきたわけですね。だから、大連立という発想法は、もうそのキージンガーの時代からしばらくの間は消えていたわけです。ブランドになり、それからシュミットになった場合に、どこと連立するかというのは、FDPは小党ですから、それと連立を組むのがいちばん政治の力学としてはやりやすかったわけでしょう。それで連立を組んだんだけど、本当はこの二つの党は、かなり考え方は違いがあったわけですよ。だから、FDPというのは何といいますかね、いわゆる経済界の主流でないような人のサポートするような党みたいなものなんですよ。ですから、ある意味ではCDUよりもっと右というか、非常にラジカルな議論を吐くし、ある意味ではえげつないことを

するんですよ。そして、ゲンシャーなんていう人は非常に複雑怪奇な人でね。長いこと外相をやって。やっぱりあのくらい複雑怪奇な人だし、頭はよかったけれども、だから外相を長いことできたということも言える。

北岡 ずいぶん長かったですね。

宮崎 長かったですよ。ラムスドルフというのはそれに比べると非常に理路整然とした、いわゆる自由経済の旗頭みたいなことを言う人なんですけどね。ドイツでは一方で社会保障とか、弱者に対する配慮をするという意味で、「社会的」市場経済というような言葉をよく使ってます。ところが、ラムスドルフは「社会的」ではないような感じの議論をする人で、それが組んでいてやっていたんだけど、さっきのシュミット政権の末期にSPDの左派がどんだん力を持ってきちゃって、シュミットが抑えきれなくなったというようなことと、それに対してFDPがえらい反発して。きっかけはFDPの造反ですけど、その背後にはシュミットがおさえられないような左派の跳梁というのがあったというふうに思います。

その次、コールなんですけどね。コールというのは、ラインラント・ファルツというドイツの州の首相を続けていた人で。ちなみにドイツというのは、連邦共和国。ブンデス・レプブリークというように、州の権限が非常に強いんですよ。中央よりも州が強い。おそらく、アメリカも合衆国で州がかなり強い州権というのはありますけど、州権がいちばん強いんじゃないですか。よく私はドイツにいるときにいろいろな講演で日独は縁が深いんだという話をして、昔、明治時代にドイツから日本はいろんなものを学んだんだという話をする、「いったいどこから学んだの」と。明治時代というのは、まだドイツは統一されていないわけですね。だから「プロイセンだ」と言ったら「ああ、それは大変な間違いだった」とバイエルンの人が言うんですよ(笑)。「それはバイ

エルンから学んだほうがもっとよっぽどよかったはずだ」と。それがプロイセンに対する他の国の対抗意識というかね、非常に強いんですよ。ところが、日本ではプロイセンがドイツになっちゃったわけですね、プロイセンが統一したから。

各州が非常に強いですよ。政治的にも各州のボスが非常に力が強いんですよ。ご承知のような小選挙区比例代表制、並立しているんですけど、ドイツの場合は、比例代表で偉い人が残っているんですよ。たとえば、コールにしてもゲンシャーにしてもラムスドルフにしても全部、小選挙区で落っこっているんですよ。それで比例代表で復活した人が、だいたい政治家として立派な人が多いんですよ(笑)。その比例代表の場合には、各州でも、あるいは小選挙区でも、候補者を決めるのにどこが決めるのかというところ、日本だと中央がわりと決めることが多いでしょう。ところが、向こうは州が決めることが多いですね。州の力が非常に強いんですよ。いまだこそほとんど統一になりましたけども、前は言葉が違いましたしね。

バイエルンに講演に行ったときに、日本の大使は「ドイツ語で講演してくれよ」と。「質疑応答もドイツ語でやってくれるんですけど、ただしバイエルン語でない標準ドイツ語で質問してくれ」と司会者が言うくらいね。

北岡 そんなに違うんですか。

宮崎 それは違いますよ。バイエルン語でやられたら——いちばん違うのはスイスのドイツ語ですけど、オーストリアのドイツ語も違いますよ。テレビは標準語ですからとても分かりやすいんですけど、州によって違うわけですが、コールはラインラント・ファルツの首相だったので、それより前の人も地方政治家から出てきている人が多いわけです。シュミットはハンブルクの助役だったわけです。それから、ブラントはベルリンの市長だったわけでしょう。アデナウアーというのはケルンの市長だったんで

すよね。もうずっと古くなるけど。州の首脳とか大きな都市の市長というのが、連邦政府の首相になることが非常に多いです。

CDUの中でいろんな候補者がいたんだけど、コールがの上上がってきたというのは、特別頭がよかったとか切れるというんじゃないで、もう大変なバランス感覚のある人なんですよね。で、バランス感覚があって、それによっての上上がってきたと。最近、党の金を変なふうに使ったというのでいろいろと騒がれているんですが、とにかく地方での政治家で、バランス感覚があるということでのし上がってきたという人で、彼に何回も会ったことがあるんですが、ある意味では立派な人だと思いますよ。いちばん彼の立派さが現れたのは、私がいなくなったあとと東独の吸収合併のときね。あのと時の手際は素晴らしいと思うんですが、これはあとの話です。

コール政権になってからの経済政策のほうでは、たまたまそのときにレーガン・サッチャーが、サッチャーはだいたいあとになりませうけどね、コールのほうが先ですよ、いわゆる「小さな政府」ということを言い出しているんですよ。レーガノミックスだとかなんとかって。コールも、いわゆる先ほど言いましたブラント・シュミット時代に非常に肥大したパブリックセクターを縮小するような方向に、かなりの反対を冒して経済政策をそういうように持っていったわけですよ。その効果はかなり上がりつつあったと思いますけどね。

それから、政治面ではシュミットのさっき言いましたように、ドッペル・ベシユルス、二重決議を踏襲して、結局、彼の時代にパーシング2を入れるということに踏み切るわけですよ。その時の物騒然だったのは大変なことですよ。デモがありましたしね。左派のデモがね。当時、もう退陣しちゃったけど、野党だったんでSPDは左派一点張りみたいになって、シュミットみたいな人はあまり影が薄くなっちゃって大変な騒ぎであったわけですよ。

話は飛ぶんだけど、何かのときにドイツ人と話をしている、たとえばもっただいぶあとで、中曾根さんがウイリアムスバークのサミットで、ソ連のSS20の三分の一ぐらいはいわゆる東シベリアに配置されて日本をカバーしている、あるいはSS20は移動し得るんだと。したがって、安全保障というのは不可分であるという議論をやってね。それで、フランスの反対を押し切って、サミットで初めて政治問題を正規の議題にした。これは、中曾根さんについては僕はいろいろな意見があるんだけど、その点は立派だと思えます。ただ、その際にドイツ人といろんな話をしている、日本は少し虫がよすぎるんじゃないかと。つまり、ドイツというのは国論を二分して、本当に政府が潰れたりなんか大変な混乱のある、危険を冒してまで自分の国にパーシング2を入れたんだ。日本は非核三原則で何も入れないで、それでただSS20の脅威は日本にもあるんだとかなんとか言っているのは、まったく虫がよすぎるんじゃないかというような話を、あるドイツ人がしたことがあるんですけどね。そういう面も、なきにしもあらずですよ。ドイツはそれだけ国をかけてそこまで決断したのに、日本はそういう痛みを何も伴っていない(笑)。口先だけでやっているというようなことを言っていたことがあります。

北岡 当時、たとえば日本の非核三原則なんていうのは、話題になって説明を求められたりすることがやっぱりあるわけでしょう？ 何と言われたんですか。

宮崎 いや、もうしょうがないから(笑)。それはしょうがない、政府が言っている通り説明しますね。私見なんていうことは許されないからね。日本を代表しているんだから。

北岡 実は二・五だとか、そんなことは言えないわけですよ(笑)。宮崎 (笑)。東欧の状態。ちなみに、ドイツの大使をやっていたときに、東大の高橋助教が私の部下で、当時、一等書記官待遇かな。大使と一等書記官って、あんまり話をするチャンスがない

んですよね。殊にルーティーンを持っていないでしょう。だから、彼が直接説明に来ることもないし、けっこう忙しいものだから彼の学説を拝聴する時間も作れなかったし、残念なことをしたと思うんです。

北岡 私も残念です。もっといろいろ教育していただけたら。これはバツです(笑)。

■八〇年代の東ドイツ・東欧の状況

宮崎 それで東欧のほうですが、非常に関心のある地域なんですよ、職掌柄。

最初にたとえば東独の話をしますと、ベルリン総領事的时候会には東独と国交が無くて東独には行けなくて、東ベルリンまでしか行けなかったわけです。だから、ボンにいったときに、たまたま村上(謙)君という私の友達が東独の大使だったんだけど、二人で打ち合わせて夏休みを一緒に取りまして、彼の車で東独をぐるっと回ったことがあるんですよ。いまは少し変わっていると思いますが、そのときの印象は、とにかく道が悪い。ヒットラーがドイツに作ったわけですね、アウトバーンというのは。同じだったわけですよ。ところが、西側の道が非常によくなっているのに対して、東独の道はガタタンゴットン。とても悪いんですよ。維持が出来てないし、改善はしていないし。それよりもさらに住宅のお粗末さね。これは旅行しているとすぐに目につくわけです。それから、景色が西側と違うんですよ。たとえば農村地帯が、西側だと各農家が勝手なものを作っているわけでしょう。麦を作る、俺は何を作る。ところが、向こうは命令によってやるから、見渡す限りビートの畑だったり小麦の畑だったりして、まったく変化がないんですよ。そういう東独。いまは違っているかもしれない

それで、村上大使が当時の共産党のザクセン地区の責任者と仲良くなって、その人から赤葡萄酒をもらったんです。ドイツというのはご承知だと思っただけでも、白葡萄酒はいいのが出来るんです。ラインとかモーゼルとかフランケンとか。赤葡萄酒というのは非常に少ないですよ。ボンの近くにちょこっと出来る。昔、ジークフリートが龍を倒したときに、龍の血が落っこってその血がいまの葡萄酒だという話で、ボンの近くに赤葡萄酒が少しあるんです。その他にザクセンの、チェコの国境に近いほうに赤葡萄酒ができる。僕は知らなかったんですが、それを飲んで、「これはうまいじゃないか」と言ったら、うまいんでその共産党の書記長か何かに頼んで「もっと寄越せ」と村上大使が交渉したら、「寄越していいんだけど、その代わりに是非欲しいものがある」と言ってきたのは、日本のなんとかいう農林試験所が最近開発したビート糖——ビートって砂糖大根っていうんですか——の種が欲しいと言ったってね。それで村上が照会したんだけど、そんなものは試験が出来たばかりで渡せないといってきたんです。

そのときに僕がその話を聞いてびっくりしたのは、まず第一にビートに関しては、それまで日本のなんとかいう農林研究所が作ったということまで情報をキャッチしていることの凄さということと同時に、他方においてビートというのは、つまり砂糖というの世界的に需要が伸び悩んでいるんですよ。これは所得弾性が低いわけですよ。所得が高くなると砂糖はあまり取らなくなる。殊に最近の健康ブームでは。だから、本当は東独がビートなんかたくさん作ったってしょうがないんで、何か新しい作物を作らなきゃいけないはずなんだけど、そんなふうが目が向かないんですよ。つまり、東独経済の中においては、いままでの実績を三パーセント増やしたら褒められると。ところが、新しいことを企てて失敗したら本当に失脚するわけですよ。そういう経

济体制になっっているから。ということとは、まったくビートと(笑)。働いている分野では情報収集して、かなりのものを持っていくという感じはしたわけですけども、とにかくこれも東独。

マイセンという磁器、ヨーロッパで初めて出来た磁器。日本の古伊万里と柿右衛門のコピーからスタートしたわけですからね、デザインなんか。アイデアも。マイセンというのはドレスデンの近くなんですが、私はそのときマイセンの磁器工場にも行ったんですけども、東独時代のね。いろんな逸話があるんですけど、こんな話をしているとちょっと時間が足りなくなるから(笑)。一所懸命しようと思っただけ全部カバーしようと思っただけで脱線しているとどこまでいっちゃうか分からないものだから。

マイセンで磁器を新しいものを。これは西ベルリンでも売っているんですけども、ドレスデンの工場で買うほうが安いので、チョイスはたくさんあるんですけどね。デザインを見て、これとこれとこれを欲しいと言って。そうしたら、注文生産だから半年かかるのかなんとか言っていましたけどね。それはいいとして。

そのあとで今度は、マイセンの工場長というのが出てきた。要するに、マイセンの工場をやっているいちばん偉い人ね。その人から手紙が来て、「俺のところに西独マルクで払ってくれ」とか「取りに来てくれ」と。取りに来て、そのときにはキャッシュで払ってくれというんですけどね。ところが、それは本来は禁止されているはずなんですよね。それですったもんだして、取りにいけないから送ってくれとか何回も交渉して、結局、直接西独マルクを払わないで、正規のルートでお金を払って手に入れる、間一髪でね。日本へ帰る直前にようやくと間に合っって手に入れたんですけども、そのマイセンの工場長はあとでやられたとかなんとかなうっかりこっちが払ってやったら、こっちまでそれにひっかかるんですよね。マイセンの工場長がその頃すでにそういう頭が働いてたというのは、これまた東独の末期の状況を物語るものじゃない

いかと思うんですけど。

しかし、そういうことで東独というのは、本当にいわゆる共産国の中の優等生だといわれていたんですが、とんでもないという感じがしましたよね。為替レートは五対一か四対一ぐらい。闇のレートでね、西ドイツのマルクに対して。それで、東独で唯一安いものはレコード。LPですか。レコードと本ね。それこそマルクス主義の本なんていうのは安いんですよ(笑)。いくらでも買える(笑)。それからもうひとつ安いのはオペラ。だから、闇で東独マルクを買って行くと、非常に安くオペラが見られるということなんですが、それが捕まると牢屋に入れられる。見つかる、ということなんですが。

東独以外に他の東欧の中で二つだけ例を申しますと、ポーランドはワレサというのがグダニスク——昔のダンツィヒですよ、造船工が連帯という労働組合を作ってワアワアやって、それをなかなか政府当局が抑えられないということで、グダニスクの組合の運動がどんどん進んでいた、行われていたわけで、どっちかといえば、共産政権崩壊は、連帯的な活動が後ろにあって、それがポーランドの改革をもたらしたと言えないこともないんですよ。他方、ハンガリーのほうは連帯じゃなくて、政治体制的にはソ連の言うことをそのまま聞いているような顔をしなから、實際上、市場経済を導入していたということが言えると思うんです。いずれも私は一九六〇年代の末かな、両国には行ったんですが、そのときのブダペストの町の状況なんかは、もうすでにかなりそういう傾向があったように思えます。

私がドイツを去ったあとなんですけども、たまたま海部(俊樹)総理が両国に行っただけで、それで両国の民主化を助けます、日本からミッションを派遣しますって約束してきちゃったわけですね。それで、池浦(喜三郎)さんという興銀の元頭取をヘッドにした財界人ばかり二、三十人のミッションを派遣したわけです。私は

その顧問ということ、池浦さんにくっついて行ったわけですよ。それで、両方の国の首脳とか、それから役人も会ったわけですね。それはドイツ大使を辞めたあとの話ですけども、そのときに印象に残っていたのは、ハンガリーのあの当時の首相、名前はちょっと忘れちゃったんだけど、ネメトとか言う人じゃなかったかな。ネメトといったような気がするんですが、元首相にも会ったわけですよ。彼がいわゆるハンガリー、ブダペストにたむろしていた旧東独人をオーストリアの国境に出したというのがきっかけになって、壁が壊れるような動きになった、そのときの原動力になった決定をした人なんです。その人が自分で、これは自分で言っていたんで、若干手前味噌かもしれないですけど、いわゆる共産主義体制が各国で壊れるような時期になってきたときに、自分は親衛隊を持っているというんですね。何万人か。だから、自分が親衛隊に言って抵抗すれば十分戦えた。ところが、いろいろ考えた末、親衛隊に一人で行って「抵抗するな」と。いわゆる民主革命に対して抵抗するなということ、これを親衛隊に言って説得したと言いますしね。その結果、ハンガリーは民主化というのがわりとスムーズに進んだ。経済も非常に混乱せずにスムーズに進んだわけですね。

それで、同じような事態に直面したチャウシェスク（ルーマニア大統領）、これも親衛隊を持っているのね。親衛隊とともに最後まで戦うという姿勢を示して、結局殺されちゃうわけですがね。あれと対照的な行動をしたんだそうですね。その話とか、さっきの東独人を脱出させたということね。その話を本人がしていたんで本当かどうか知らないけど、とにかくそういうことを。そのいわゆる共産レジームじゃなくなったあとも、われわれが行ったときもハンガリーの議会の議員に、無所属の代議士として立ってやっていたんですがね、いまはどうなったかは知りません。

そういうことが出来る背景としては、ハンガリーのほうは経済

の市場化というのが、市場経済というのがかなり浸透していた。だから、ポーランドの行き方とハンガリーの行き方がね。ポーランドは政治先行です。ハンガリーは経済先行というのは、非常に大雑把に言うところ、そういうようなことになったという感じがします。

■SDIと技術開発

宮崎 それからちょっと途中を飛ばして、ボンでサミットが行われたんですが（一九八五年）、そのときのサミット自体の議題ではないんだけど、そのとき私がいちばん印象に残っているのは、当時、非常に話題になったSDIというのがありました。SDIについて非常に議論になっていたときなんです。それで、これは「スターウォーズ」なんていうふうに誰かが言って、アメリカの中でもかなり反対論もあったし、日本ではとにかく何かよく分からない。実体が分からない前からSDIについての反対論だけはあって、なんでもかんでも反対というのが流行みただったんだけどね。

ただ、SDIはレーガンが強力に推進していたわけですね。それに対する各国のリアクションが国によって違ってあって、イギリスはもろん賛成。それからドイツも協力するという体制を作っていたわけですよ。それで、ドイツ人のある人と話を当時していたんだけど、なぜドイツはSDIに対して賛成をするかという質問に対するその人の答えは、つまり核は非核二原則がありますから、もう諦めたというか、ドイツはいまからその核兵器によって影響力を増大するということは絶対にやらない。だけど、SDIがもしかしたら核以降の戦略上の大変なキーになるかもしれない。したがって、その可能性があるものには協力しておかなかったら、大変な、将来の見通しを誤ることになる。それから、

S D I によって、S D I というのはアメリカの国防費に相当、五〇億ドルだったかいくらか忘れましたが、出すことになっていましたから、それによって技術が進歩して、その波及効果——スピノフがある。したがって、ドイツはこれに参加するんだという。参加というか協力するんだという態度を、これは経済界も、役人というか政府も、両方とも大変な熱意を持ってこれについての米独協力を話し合っていた時期なんです。それで結局、そのちょっとあとですけれども、米独の協定が出来たんです。これはラーメン・アブコメンと言ったと思いますが、枠組み協定が出来たわけです。

ところが、そのだいぶ前から、日本はこれについてまず無関心が一つ。それから、誰もそんなことを考えてもいない。で、私も経団連の人やなんか、いろんな人が来るし「こういう問題があるんですよ」ということを説明して、「日本も考えたらどうですか」と言ったことがあるんです。それに対して、当時の一部のリアクションは、日本でこのS D I に協力できるような技術を持っている会社のかんりの部分が、家庭電器なんかも作っている。そうすると、消費者のイメージというのがあるから、アメリカとこういうことを協力しているということになると、家庭電器が売れなくなる恐れがあるという。そういうこともあるし、つまり企業イメージがあるというようなことで。

それから、この前も申しましたように、日本は防衛産業というのを育ててないんですよ。というのは、武器輸出三原則によるんだけど、防衛庁だけを相手に商売していたんです。大量生産がきかないから、コストが高くなる。しいて言えば、三菱重工とか若干のものはあるわけです。そういうところも、S D I は必ずしもよく分らないし、躊躇しているということだったわけです。ちなみに、スピノフなんですけど、前回申しましたように、技術格差（テクノロジカル・ギャップ）というのは、六〇年代で

はアメリカ対日欧の間のテクノロジカル・ギャップということを言いましたけれども、私の意見だと、そのテクノロジカル・ギャップが生じた主な背景として、二つの大きな政府のプロジェクトを挙げるべきだと思うんです。それは、最初は「マンハッタン・プロジェクト」です。政府がべらぼうな金を出して、マンハッタン・プロジェクトのスピノフというのは膨大なものですね。民間のいわゆる原子力開発って、原子力発電とか原子力事業というのはマンハッタン・プロジェクトのスピノフの結果といてもいいぐらい。それから学者でも、当時ロス・アラモスにいたフォン・ノイマンという学者がいて、いまでもノイマン型コンピュータというでしょう。言わないかな。非ノイマン型というのもありますけどね。フォン・ノイマン以下、大変な学者があの原子力開発に携わっていたのが今度、コンピュータのほうにも関連したというマンハッタン・プロジェクト。その次にアポロ・プロジェクトというのがあるんですよ。両方とも膨大な連邦政府の予算を注ぎ込んだ、アメリカのプロジェクトなんです。

この前、政府が技術開発に対してどういう態度を取るべきかについてOECDでは延々と議論しているというのは申し上げただけども、R & D（リサーチ・アンド・デベロップメント）のDのほうはあんまり政治は口ばしを入れるべきじゃないが、ベリシックリサーチは政府がやるべきだという理論をご紹介したと思うんですが、ベリシックリサーチからR & DのDの近くまで膨大な金を出したのが、アメリカのその二つのプロジェクトなんです。マネハッタンとアポロ。それはたいへんな額で、その結果作られた技術がそのうち民間に使われるようになるということがあった。

アメリカの場合は、コントラクトでどこかの企業に委託して研究をさせたり開発させたりしますから、その請け負った企業というの、それだけノウハウとかいろいろなものも蓄積できるわけで

すよ。そこまでは、マンハッタン・プロジェクト、アポロ・プロジェクトの影響は非常にはっきりしていると思うんですが、その次のSDIプロジェクトというのがもし実現された場合に、SDIというのは戦略的というか戦術的に見ると、技術的に解明しなくちゃいけないものが非常に多いですよ。たとえば、そのためには超伝導技術がもっと発達しなくてはいかんとかいろんな、とにかく大変な新しい技術の革新を要するプロジェクトなんですよ。だから、そういうところにアメリカが金をどんどんそそぎ込んだら、ますますアメリカの技術はダントツになっちゃうだろうと。それに日本は協力して、そのスピントフにもあずかるべきだと私は思ったわけです。

ちなみに、日本の場合の技術——先ほど言ったように、六〇年代はアメリカ対日欧の技術格差で、八〇年代になると日米対ヨーロッパの技術格差で。日本の技術が非常に進んだのは、R&Dの民間部門のいわゆるハイテクブームで、半導体をはじめとする民間の投資が非常に巨額になった結果、日本のレベルがその部分に關してはかなり上がっちゃって、それが目につくものだから日米対欧州の技術格差ということで議論になって、それに対する政府の関与のありかたということが議論になったことは、この前OECDの話で申し上げたと思うんです。ところが、アメリカのそういうプロジェクトというのは、そんな議論を吹っ飛ばすぐらいでかいやつですよ。

そういうわけで、中曾根さんにドイツで直接その話をしたわけですよ。そうしたら中曾根さんは、「よく分かった。ぜひそれは日本もやるべきだ」ということで張り切っちゃったわけです。ところがそのあと一日遅れたかな、安倍〔晋太郎〕さんが来たの。外務大臣が。安倍さんにも話したら、安倍さんは絶対反対だと。「もし中曾根さんがおやりになるんだったら、私は村を挙げて反対します」と。村って、要するに安倍派を挙げて反対しますとい

うことを言っていたんですよ。それで、これはえらいことになるなということ、そのときはそれ以上進まなかったわけなんですけれども、先ほど言いました米独の枠組み協定に六ヶ月ぐらい遅れて、日米の間にも枠組み協定ができたんですよ。しかし、ドイツが取れたものとはほぼ近いところまで行っただけで、その真似をしてるわけですから、そこまで出来た分だけいいと思います。が、そういうのはとにかく曲がりなりにも、これはあまりPRしないで政府が作ったわけですから。そういう経緯があって、その後、レーガンが潰れると同時にSDIは潰れちゃったんですよ。ポシャっちゃった。したがって、私が言ったようなことにはならなかった。スピントフもないんですけども、ごく最近に、いちゃばん新しいことはさっぱり知らないんだけど、新聞なんかを見ているとMTI？

北岡 TMD？ はい。いまはナショナル・ミサイル・ディフェンスと言っていますかね。いまはNMDという、何度かバージョンが変わっていますけども、要するに同じようなものです。

宮崎 いや、ちょっと違うんだと思いますよ。SDIというのは……。

北岡 ごめんなさい。TMDとNMDは似たようなバージョンだと思います。

宮崎 ああ……。SDIというのは衛星から観測していて、向こうが発射したときにミサイルを狙い撃ちするということですよ。そのための技術というのは、たいへん革新的な技術が要るわけですよ。いまのやつはそれほどの革新的な技術は要らないんですよ？

北岡 ええ、それほど……上からじゃないと思います。

宮崎 いずれにしても、アメリカがSDIを開発すれば、日本みたいに自分で核を持たない、ミサイルを持たない国にとっては専ら防御のためには役に立つはずですよ。もっともシベリア

や中国から来たときに、アメリカに行くよりも距離が短いですから、果たしてそれだけ役に立つかどうかは問題があるんだけど、も。いずれにしても逆に言って、よくそのときの反対論の中に「技術的に非常に難しい」ということは言われたんです。技術的に難しいから、それを開発するために大変な金がかかる。その影響があるから日本は協力すべきだと私は思ったんですが、いま言ったようなことで、枠組み協定まで来て、ごく一部は協力しかかったんですけどポシャっちゃったという、これはあまり紹介されていないことじゃないかと思えますから。

北岡 安倍さんが反対されたのはどういう理由なんですか。

宮崎 どういう理由かは分かりません。国内の理由かな。僕が

「中曾根さんは非常に賛成で興味を示しておられます」と言ったら、「それは中曾根さんは総理なんだから、総理がおやりになることは私は止められない。しかし、国に帰って、村を挙げて反対します」と言ってるね(笑)。だから、もうげっそりしてそれ以上、話をしなかつたんですけどね。

北岡 これは八四、八五年のことですか。

宮崎 ボンのサミットのとき。

北岡 サミットの直前のとき。

宮崎 サミットのとき。だから、せっかくの案も結局、結果として、そういうのはオーバーテイクン・バイ・ハヴェンツだな。私の案はから騒ぎに終わったわけですけども。

ただ、さっき言ったようなドイツ人の発想法って面白いでしょう。ウイリアムスバークのサミット(一九八三年)で、安全保障は不可分であるという、日本も入れてくれという話。これは立派な議論だと思う。それはドイツ人的な発想法というところだと思ふんですね(笑)。それに対してドイツのリアクションというのは、やっぱり見習うべきだと思いますよね。そういう気持ちで物事を見ていくということですね。日本は残念ながらアレルギー

ばかり先行しちゃって、SDI反対論の本がありますよね。岩波新書かなんか。とにかくアメリカが何か言い出したら反対であるという(笑)。

股野 (中曾根首相発言の)不沈空母はウイリアムスバーク・サミットの年ですね。

宮崎 そうそう。

股野 あれは核抜き不沈空母ですね(笑)。

北岡 実は積んでいるかもしれないですね(笑)。

股野 ウイリアムスバーク・サミットでは、宮崎大使は……。

宮崎 もう関係ないです。

股野 もうボンに……。

宮崎 ボンじゃなくて、OECDかな。どっちかですけどね。

北岡 ウイリアムスバークは八三年ですから、八二年にもう大使になっておられますから、ドイツ……ボンの。

股野 もうボンにいらっしやっただんですね。私はウイリアムスバークで中曾根総理をお迎えした地元の総領事だったものですか、ウイリアムスバーク・サミットには思い出があります。

北岡 どちらの総領事ですか。

股野 アトランタの総領事です。

北岡 あそこはアトランタの管轄なんですか。

股野 ええ、バージニアも担当しておりますね。

北岡 ワシントンに近いですけどね。

股野 ええ、そうなんです。だから、ポトマック川の南側からアトランタ総領事の管轄が始まりますものだから。

宮崎 中曾根さんに限らず歴代の総理には、ずいぶんいろんなこといろいろなお仕えをしたわけですけどね。いろんなお仕えの仕方をしたんだけど、中曾根さんという人も面白い人で、僕らの年代のメンタリテイに非常に合う。つまり、昔の旧制高校というのは、シュトゥル・ウント・ドラックとかいって、朴歯の下駄を穿

いてマントを着て闊歩していた高校生という、私もやっていただけでも、それがそのまま大人になったような感じでね(笑)。

北岡 そうですか、うまいことをおっしゃる(笑)。

宮崎 それで、この前、申し上げたかな。コールが公式訪問で日本に来る。コールはもう何回か来ているんですけど、最初の公式訪問のときかな。日本の事務当局っていまでもそうだろうと思えますけど、いろいろ心配事があるんですよ。たとえば宮中晩餐会とか総理の午餐会かなんかのときに、音楽をやるのを何をやっていいかという。ポップをやるわけじゃないんですけどね。コールは音楽は何が好きかとか、文学は何が好きかということを見てあまり書いてないんですよ。コールとはその前に準備のために二回ぐらい会っているんですけど、そんな話を質問する時間的な余裕がないですよ、首相官邸のオフィスで。

しょうがないから、私の家内にコール夫人をお茶に呼ばせて、そこへ突然、私が戻ってきたみたいな顔をして入って行って、それでその質問をしたら、コール夫人がいろいろ言ってくれて、音楽はビヴァルディとバッハが好きだって。ちなみに、ビヴァルディは楽譜がないとか何とかで、宮内庁の楽隊がバッハしか演奏しなかったんですけどね。それから文学は、ヘルダリンというのが好きだというんです。ヘルダリンというのは『エンポリアム』という大作を書いた詩人なんですけど、ドイツ語が難しくてね。僕も読もうと思ったんですけど、さっきのシムムーデさんじゃないけど、何ページか読んで諦めちゃって、このヘルダリンを読んでコールと話しようと思っていたんですけどもやめちゃったんです。文学的なドイツ語って難しいんですよ、私には。易しい人もいるかもしれないけど(笑)。

北岡 それは難しいんじゃないでしょうか。

宮崎 それで、そういう質問をしていたら、コール夫人もさすが

に「それじゃあ、おまえのところの中曾根は、音楽は何が好きで文学は何が好きか」と聞き返してきたわけですよ(笑)。ところが全然……。中曾根は音楽？ 浪花節じゃないだろうと思うけれども、何が好きなか聞いたことがない(笑)。しょうがないから、「それは俺が調べることじゃなくて、おまえの国の日本にいる大使が調べることだ」と言ったんですよ(笑)。それで、帰ってきてから中曾根総理に「そういう話がありましたよ」と言ったら「ウーン」と言ってる。あれは晩餐会だか午餐会のとときだか、飯の席上、彼のスピーチの中に入れてましたね。「よく私はどういふ人かという質問を受ける」というんですよ。「それに対して私はこう答える」と。ひとつは、ドイツのイデアリスムスとか観念論ね。観念論というのはもちろんカントに始まって、シェリング、ヘーゲルに至るドイツの観念論と、アメリカのプラグマティズムと禅、ブディズムの三位一体であるというふうに言ったわけですよ。それで僕は周りを見回して、日本人はみんなニヤニヤしているんですよ。ところがドイツ人は、「フォーム」と感心して聞いているわけです(笑)。だから、そういうことを堂々として言えるというのは立派なものです(笑)。それ、使えるんじゃないですか、今度は。

北岡 (笑)。しかし、全般的には——これはオフレコなんですよけど——宮崎大使は中曾根さんのやったことは評価するけれども、底流にはあまり好ましい印象はお持ちでないみたいですよ(笑)。

宮崎 いや、別にそういうこともないんですけども(笑)、ずいぶん……。

北岡 いや、それは多くの日本人に多い感情だと思いますけど(笑)。

宮崎 しかし、いろんなことで関係がありましたからね。歴代総理に関係がありますから、それに対する私の個人的感情を申し上げ

げていたら、とても時間が足りない(笑)。

北岡 中曾根さんは最初のオイルショックのときは、なんかちょっといろいろ迷走されたようでしたけどね。あの頃は民族派で、アメリカとの協調よりもアラブ外交とか油外交が大事だという路線だったんじゃないかと思うんですけど。

宮崎 そうです。

股野 さっきの不沈空母は、ウイリアムスバーク・サミットに先立つ八三年一月の訪米ですね。

北岡 そうですね。

宮崎 しかし、サミットの歴史から見ても、経済以外の非経済的な宣言が議論が出来たのは、最初のボン・サミットのハイジャック宣言から始まって、東京サミットのベトナム問題についてののなんとか、フランスの猛烈な反対にも関わらず少しずつ政治的な面が入ってきたんだけど、ウイリアムスバークで初めて中曾根がピシャッと言ったんでフランスが黙ったという経緯があるので、それは立派なものですよね。

北岡 フランスはやっぱり大統領が変わっても、一貫してその問題には反対してきたということですか。

宮崎 そうです。というのは、もともとあれは経済サミットであって、政治はP5〔国連安全保障理事会常任理事国〕でやるべきであるというのが、ジスカール・デスタンもミッテランも一貫して主張してきたところですからね。

北岡 日本・ドイツはP5に入っていませんから、そのメリットはあるんですけども、英米はどっちでもいいんでしょうかね。

宮崎 それはやっぱり、アメリカにとってはP5というのはあんまり頼りにならないわけですよ。というのは、ロシアと中国でしよう。あれは言うことを聞かないことが多いでしょう。英仏というのは国力が弱くなっていますから、経済問題があると日独を入れないと全然話にならないわけですね。オイルショックのとき

もそうだったし。だから、アメリカとしては、P5が政治の中心であるべきだという議論はしないですね。専らフランスですよ。

それから、ECの統合問題で、これはどっちかといえば、昔から私に関連してきたので、この問題を話をすると長くなるけれども、長くなるし、かつ政治学者の皆様方には必ずしも参考にならないかと思えますから。

北岡 いや、これはわれわれのためにやっているのではないので、後世の記録でやっているものですから(笑)。聞き手としては頼りないんですけど喜んで伺いますので、お話しただけならばいいんです。

■ EU拡大の行方と日独の関係

宮崎 ECというものができかかってきたとき、どう見るかということについて——哲学的な話ですけど——二つ議論があったわけですよ。ローマ条約が出来た、その前の炭鉄共同体からECになるときに、つまりヨーロッパの国が集まっちゃうということは、それ以外の国に対しては差別的な、関税同盟から出発しているわけです。対外域外関税を課することになるわけです。日本にとってマイナスだという議論がかなりあったんですが、私はその当時から、世界経済の中でアメリカという太陽が一つある、ECという太陽がもうひとつ出来たら、それは日本にとっても得じゃないかという議論をやっていたんですが、あまり……。例によってマジョリティにはならなかったんですけどね。

それでその後、いろんな経緯があって、さっきジスカールとシュミットの合意によって通貨の取り決めからスタートしたというの、これは当時の双方の中央銀行だとか何かの反対にも関わらずスタートしたというの、大変な先見の明があったと思うんです。つまり、通貨のハーモニーゼーションが先か、経済政策の

ハーモニーゼーションが先かというのは、議論が延々とあって、おそらく学問的にも議論があるだろうし、実務的にも議論があるところなんですけど、それについて一種の見切りをつけたというのが、そういう意味で。それが結局いまのユーロになるわけですから、けれども、ひとつの見識だったと思います。

いまの問題は、EUの拡大というのかな。ドイツ語でエルヴァイタルンクというの。英語でエクспанション。これが行われていくんですけども、果たしてどういうことになるのかということについては。つまり、エクспанションがあれば、ますますEUは栄えるんだという議論があるんですが、私はちょっとそれには疑問があると思います。というのは、すでにそういう傾向はあるんですけども、エクспанションをした結果、新しくEUのメンバーになってくる国は東ヨーロッパはじめね。最初のECに比べてだいぶ広げましたけど、新しく加わってきた国というのは、中央ヨーロッパよりも所得水準も経済のレベルも低いんですよ。そういう低い国をたくさん抱え込むということがどういう影響を与えるかというのは、非常に意見が分かれるところだと思うんですよ。経済の問題としても。たとえば、所得水準の低い国がたくさん入ってくるということは、ナイーブに考えれば、その安い労働賃金で作った生産物が中央に流れこんできて困るといふ。だから何とかしなくちゃいかんというのが、アメリカなんかによくある保護貿易の思想。

私は、それはそんなに大したことないと思うんです。というのは、流れ込んでくるような産業は、本来であればEUの中核では、だんだんそういう国に任せざるべき産業であって、それにしがみついているというのはおかしいという意味から言って、それは必ずしもそう心配することはない。

ところが他方、投資のほうを見ますと、中以下の所得の国が入ってくるということは、つまり高い所得の国じゃないわけでは

よね。そうすると、投資を一体どっちのほうに振り向けるかという場合に、そういう国の需要を満たすような投資をやっていく、そこに重点が置かれるのか。アメリカや日本のもっと高い国、非常に高い所得の国に対する関係というか、輸出も含めてね。そういうことに重点を置く場合には、どうしてもどんだん、どんだんハイテクのほうに投資しなくちゃいけない。その投資のやり方に必ずしも全部がプラスになるということではない。いろんな面があるんで、エルヴァイタリングは経済的に問題があるし、それから政治的にもね。今度、オーストリアのあれにもあるように、ますます異質なものがある国を抱えることになるわけですよ。だから、そういうことなのかというのには非常に問題だと思います。ちなみに、この間、川島〔裕〕次官が言ってたんじゃないかと思うんだけどね、私の意見でいいますと、アメリカはナイーブな直截的な議論を振りかざして。ところが、ヨーロッパの「老獪で現実的だ」というイメージだったのが、最近ヨーロッパがたくさん異分子を入れたために、何か統一的な意見を出すすれば、たとえば人権問題みたいな問題しか出せなくなってきた。だから、アメリカとヨーロッパが逆転した。ヨーロッパは人権を言い、アメリカはわりと現実的になってきたというように、そうじゃないかもしれないけど、その趣旨のことを川島がチラッと書いていたでしょう。だから、川島に責めをさせるんじゃないけど、私はそういったような問題は新しい問題で、EUのエルヴァイタルンクがどんだん進めば進むだけそういうような問題が出てくるということこそ、経済的にも政治的にもいろんな話が出て、どうこうと言っているま決めつけるといふのは早計じゃないかというふうに思いますけどね。

それで、この質問事項の最後に、大使を辞めたあとのことを言えということなんですが、大使を辞めてから実は五年ぐらい前まではいろんなことをやっていたんですよ。どれを申し上げたらいい

いのか分からないんだけど、一つは、ドイツとの関係では、日独センターというベルリンにある機関の総裁を長いことやっていたんですが、それはともかくとして、日独対話フォーラムというのが出来たんですね、宮沢首相のときに〔日独対話フォーラム設立、一九九三年〕。そして、宮沢とコールの間で合意が出来て。つまり、日本とドイツというのは、経済的にアメリカに次ぐ第二、第三の大国であるんだけど、政治的その他は一般的には双方の、つまり日米・米独の関係に比べ、日独の関係は薄いわけです。お互いに知らない。だから、日独の議長が集まっていた知恵を出して、もっと密接化しようということで、そういうのを作ることが決まって三年後に報告を出せということで、私はその座長にさせられちゃったわけです。それでメンバーを選ぶのに苦労したようですけど、日本も経済界からどうするかとか、学界からどうするかいろいろあって、政界からどうするか。それでしようがなくて、政界は日独議員連盟の何かをやっていた海部〔俊樹〕さんね、元総理。それと、椎名素夫という議員の中ではわりと外交に向いている。それからもう二人か一人入れて。それから経済界は、そのときはそうじゃなかったけど経団連の会長になった豊田〔章一郎〕さんとか何とかかかっていろいろ入れて、学会は森〔亘〕さんという前の東大の総長をやった人。それで、木村さんとか、おたくの副学長。

北岡 佐藤誠三郎さん。

宮崎 佐藤誠三郎さんとか、いろんな人が入ってもらって。それからジャーナリストとか、労働界からは鷲尾〔悦也〕さんとかえらい人がたくさん、二十人何人か集まってちゃんと来てくれたんです。ところが、私が決めたんじゃない、私も関与して決めたんだけれども、そういう偉い人ばかり集めた会合というのはダメなんですよね。せっかくドイツまでひっぱって行くでしょう、その二十何人をね。ひっぱって来た以上は、みんなに出る幕がなく

ちゃいけない、そうすると時間がえらい制限されるわけね。だから議題ごとに割り振って、この議題になったらあなたがやってくださいということを事前にやるわけですよ。そうすると、議論が活発にならないんですね。殊に政治家は喋り出すと、海部さんなんか止まらないしね。だから、佐藤さんなんかは腹ふくる思いだったと思うんですね。時間も区切ったものだから〔笑〕。

それで、偉い人ばかり出すので、事務局がないんですね。しかもそのときの申し合わせで、英語を使わないで日本語とドイツ語でやるということにしたんですね。そうすると、ドイツ語の通訳がまたいいのが少ないですよ、正直な話。それでずいぶんいろんなことがあって、結局、事務局がないから、もうそんなことをやらなくても分かりきっているような私が考えた案を作って、向こうドイツ側へ渡すと。もちろんみんなの了解を取ったんだけど、誰も関心がないんですね、偉い人は。その通りに行っていればいいんだろうというわけで、読みもしなかったと思います。

それで、総理のコールと、それからこっちはそのときも世の中が変わっちゃって村山〔富市〕さんだったかな、に報告書を出してね。途中で向こうから来たときに、日本とドイツで交互にやっていったんだけど、細川〔護熙〕さんだったかな、みんな連れていったんだけど、細川さんにしても村山さんにしても、どうしたらいいか全然分らないでしょう。それでとにかく報告書を出しておしまになったんだけど。だから報告書は、そんなものは初めからなくても書けるものを書いたという〔笑〕。

北岡 代替わりして、私がいま入っております。いま座長は樋口廣太郎さん。

宮崎 私の後任がね。というのは、私は病氣しまして、後任を見つけるのが大変だったんです。メンバーを選定するのも大変だっ

たんですが、後任が大変で結局、樋口さんをお願いすることにしました。というのは、彼は日独協会の会長をやっていたんです。それをお願いすることにして。だから、残っているのは村田〔良平〕君ぐらいでしょう？

北岡 そうですね。ええ。

宮崎 村田君は前から残っている。

北岡 大きな変化は、政治家は非常に若い方になりました。今年四回目ですけども、最初、大使が五年おやりになりましたね。その知識はお互い、関係は日独は意外に薄いというのが印象ですね。

宮崎 たとえば小学校の生徒にお互いのイメージを書かせる、そういう企てをデュッセルドルフでやったことがあるんですよ。そうしたら、表題が「シュメタリンク・ウント・ハーケン・クロイツ」かな。シュメタリンクってチョウチョウ。要するに日本人のドイツに関するイメージでいちばん子供が抱くのは、ひとつはハーケンクロイツ。ハーケンクロイツとベートルベンなんです。それから、ドイツ人の子供が日本について描くのが、やっぱり富士山とか芸者さんみたいのが出てくる。そういう、まったくお互い同士の理解がないんですよ。日本人がドイツ人知らないというのは、本当に知らないと思いますけど、逆にドイツ人が日本を知ってる程度に比べれば、日本人は幾らかドイツを知っている。旅行者が行っているし、歌も歌えるし、という感じがしますけどね。

それからドイツについて一つだけ、これは私が関係しているんじゃないんだけど、壁が壊れてドイツが再統一される時のコールの立ち回り方、これは私もすごいと思いますね。実務家としても。つまり、彼が対外的にはフランスに何と、アメリカに何と、アメリカに何と、その手の打ち方ね。わずか一日か二日の間で国内外でいろんなことをやったわけですか

ら。それを日本人の政治家であるときにああいうふうに託されたときに、それこそ独断専行でやる以外ないと思うんですよ、そういうことが出来る人が果たしているだろうかと思うぐらい、手際がよかったです。

その当時、私はそう思ったんだけど、一つだけ間違えたあとから思ったのは、ドイツマルクと東ドイツの交換率をパーにしたんです。本当は四対一か五対一でよかったのをパーにしたというのが、そのあとの両方にとって大変なマイナスを与えたと思うんです。その通貨から手をつけなくちゃいけないというのは確かなんですけども、四対一か五対一の実質のやつと一対一にしたということは大変な間違いだと思わんですが「そうしないと、東独の人が多数西独に流れまして大問題になるというおそれがあったといわれていますが」、その結果、いろんなことが生じているんですがね。

ちなみに東独は、その後も何回も、ベルリンの日独センターの総裁をやっていたものですから、いろんな関係に行っていたんですけども、インフラが遅れていますよ。インフラとかなんとかいうのは、金を注ぎ込めばよくなるわけです。道だとか通信施設とかね。いちばん困るのは、人間のメンタリティーね。あれはもう本当に……。西独から何千人かの先生を連れていったんですからね。つまり、大学教授というのは、東独の教授はクビにすればいいのかもしれないんだけど。政治的なことをやっていた人たちはね。小学校の先生とか村役場のお役人なんていうのは、持っていくわけにいかないでしょう。東独のそういうメンタリティーを引きずっている期間は、非常に長いことかかったと。いまはだんだんよくなってきているような感じがします。

それから大急ぎでその他のことを言いますと、その他に日米の科学技術協定の高級諮問委員会というのの委員を長い間やっていたんです。初期の段階は要するに、アメリカは日本の科学技術政

策がなっておらんという大変な強い批判をしてきたわけです。たとえば、日本からアメリカに来る学生は何千人か何万人で、アメリカから日本に来る学生は何百人か何十人か。全然インバランスだ。それはインフォメーションでも一方通行だ。それは日本が悪いんだということから、日本はさっきも言ったように、R&Dのベシックリサーチにタダ乗りしているんじゃないかと。よその国で作ったベシックリサーチをタダ乗りして、コマリヤリゼーションがうまいものだから、それでやっているんじゃないかというんな議論があります、それに対して反駁したり、いろんなことがありました。最近はそのことを言わなくなってきたんですけどね。最近というか、僕がやめる前ぐらいは。

その他、たとえば宇宙開発の宇宙ステーションを設けるという話があったでしょう。今もあるんだけど、あれなんかは日本も協力することになって、何力国かで協力することになって、金まで作ったわけです。ところが、アメリカがポシャリそうになったわけです。それをけしからんと行ってワアワアまくしたてて、だいたい政権が変わるたびにそうやって政策が変わるといのは、長期的なことではできないじゃないかといって、向こうもあんまり反駁できなかったんですけどね。その例として前に申し上げたように、最初の日米エネルギー協定で、石炭ガス化のプロジェクトを日本は金まで作ったのに、向こうが政権が変わってダメになったという例まで挙げて。その点は結局、そこに出てきたアメリカの委員が、そうとう強く国内で言ったこともあって、アメリカも金が付くようになって宇宙ステーションはまだ続いていきますけどね。その他、日米の科学技術協定の高級諮問委員会というんですが、民間人が勝手なことを言えるわけですね。いろんなことがありました。

それから、そのベシックリサーチただ乗り論に対して日本はもうちゃんとやっているんだということを示すために、中曽根時

代にベシックリサーチについて日本はグラントを出すというね。それをどこのプロジェクトに出すかについてずいぶん国内でも議論して、対外的にも議論したんだけど、要するに二つの分野について学者なりに、グラントなりフェローシップなり与えてエンカレッジするという事になったわけです。それが、短絡していいますと、脳の研究。ブレインファンクション。もうひとつは、分子生物学というんですかね。モレキュラー・バイオロジーというの。その二つの分野で金を出すという国際的な一つの組織を作ったわけです。ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムというものです。それについてもずいぶんいろんな間で問題があって、本部をどこに置くかとか、誰を事務総長にするかという。さんざんその議論をした挙げ句、私はその初代の会長になって、六年ぐらい続けていたわけです。そんなようなことがあったり。

■私と台湾とのつながり

宮崎 それからまだいろいろなことがあったんだけど、一つだけ、時間があれば申し上げておきたいのは、台湾との関係なんです。要するに日本は台湾を認めていないから、役人の何とかのランク以上の人は台湾に行っちゃいけないわけでしょう。大陸には二回ほど行ったということは申し上げたと思うんですけど、台湾には行ったことがなかったんで、たまたま原(富士男)君という人が台北の事務所長をやっていたので、辞めてから彼がいる間と思って遊びに行ったわけです。そうしたら原君という人が、せっかくいい男が来たというわけでいろんな人に会わせたいというので、遊びに行ったらつもりが、李登輝、当時の副総統に会ってくれと行って会ったり、辜振甫という向こうの経団連の会長みたいな人に出たり、偉い人に会う結果になったわけです。だけど、そ

それは別にどうっていうことはなくて帰ってきたら、その次にOECDが、いわゆる……これはいろんな言い方があるんだけど、NICSと言ったりね、要するに韓国、台湾、香港、シンガポール、この中途国というか先進国になりかけている国との間の対話をするという話を日本が出して通って、それでそういう企てが進行していったときに、日本が言い出しっぱなものでから、韓国、シンガポール、香港には日本の外交ルートでインビテーションというか、「そういう企てをやるから、おまえ参加せい」と言ったわけです。ところが、台湾だけないわけでしょう。それで、それを呼び出してくれというので頼まれて。一方で、それを頼むという外務省の担当に、「大陸との関係あるからあんまり偉い人に会いなさんな」って言う。それで怒って、「偉い人に会うか会わないか、こっちは会わなくて向こうが会うと言ったら会うよ」と言っていて、当時はアジア局長は誰だったかな、啖呵を切って出掛けていったわけです。

それで、「そういうOECDのパネルがあるから出なさい」と言ったの。そうしたら、台湾は国際社会への復帰という問題をひとつ抱えていると同時に、そういうのに出たらどうなるかという危惧があったので国内の意見が分かれちゃって、対外経済省とか外務省とか大蔵省とか各省の大臣を歴訪して行って、それも意見が分かれて。いちばん分かれたのは、その当時はもう李登輝さんは総統になっていたんだけど、総統の下の首相格の人が反対なんですよ。そんなところに出ていくべきじゃないという。それで結局、李登輝までいかないと結論がつかないということになって、それで李登輝のところまで行ったわけ。もちろん通訳を付けてもらって、英語で喋れるところは英語でやっていて。そうしたら、李登輝のところに行ったら、前に会ってますからね。彼はちなみに日本の本が好きなんですよね、政治経済に関する本が。だから、いつもたくさん持って行って寄贈するんだけど、そのと

きも持っていたわけ。僕の顔を見るなり、「お互いに忙しくて時間がないんだから、日本語でやりましょう」と言い出した。そうすると、通訳がついているんだけど、向こうで反対派の総理、外務大臣は日本語が分からないんですよ。それで、今度は日本語でやって、決断して出ましょうということになったわけ。その会合は誰かが来て、それで一応やったわけ。だから、APERC（アジア太平洋経済協力会議）の参加とかいろんなことで台湾が戦っていたときなんですね。そういう話があったわけ。ちなみに、その前に遊びに行ったときにいろんな人に会ったというか、講演もさせられてね。台湾の経済をどうすべきかというようなことについて講演をさせられているいろいろなことを言っていて、それで外務省が困ったのかどうか知らないけども、とにかく「偉い人に会うな」と言ったけど結果として会っちゃって、そういうことになって。

三回目は、もうご記憶はないと思うんですけど、北鮮の漁船が日本にやってきたスダン号事件というのがあったんですよ（一九八七年）。それで北鮮の漁船の乗組員が日本に亡命を求めてやってきたわけですね。それをどうするかというのが日本で大変な問題になって。つまり、日本は受け入れると北鮮との関係もあれだし、韓国にやりたいわけですよ。だけど、そうすると北鮮はえらいむくれるし、いろいろプレッシャーがかかって困っちゃってね。「おまえは台湾に顔が利くそうだから」と僕のところを頼みに来たわけよ。「台湾に引き受けてもらえ」って。

それで、しょうがないからまたノコノコ出掛けて行ってね。そうしたら、台湾はなかなか引き受けられないわけですよ。その前に行ったときは経済関係の閣僚で、そのとき三回目ときは外務省ですよ、主として。それで外務省の次官とかに会いに行っていて、結局引き受けてくれないんだけど、瞬間タッチ方式というのかな。とにかく日本から台湾に来て、なんか知らないけど何時間か滞在

を許すわけですよ。そうすると、韓国がそれを台湾から韓国に連れていくという取り決めにして、それでおしまいにしたわけです。四回目は、今度はいろいろなことで台湾側が認めてくれたと見えて、丸抱えで招待してくれて、台湾をあちこち漫遊して歩いたというのがあるんですね。

それから、その他いろんなことをやっていたんですが、国内の委員会にたくさん出ていましたけど、五年前かな、四年前かな、心筋梗塞で手術を受けてそれ以来、国内外の一切の仕事を辞めまして、いまは何もしてない。何もしてないつもりだったら、辞めそこなったのが一つ二つあって、金曜日かなんかにまた行かないか、いやいやいらないんだけど、そういうことは極めて例外で、いまはまるっきり何もしていません、まさにどんどん、どんどんボケが進行していくという状況なんです。

その後も辞めてからいろんなことをやりましたけど、そのくらいです。

■政治的に重要なドイツ三州

北岡 ありがとうございます。ちょっといくつかお尋ねしたいことがあるんですが、日本、アメリカ、ヨーロッパの関係が変わっていった流れは大変興味深くお聞きしたんですが、他方ヨーロッパでもなんとかアメリカに対抗して独自性を持っていくという試みはいろいろあったと思うんですね。日独対話で、エアバスをもっと買わないかとか、その話がよく出るんですけども、ああいう動きはどういうふうにご覧になっていましたか？

宮崎 一方において日欧の関係はもっと密接化して、本当にいろんなことをしたろうし、親身な話し合いが入れるような関係になるといいと思いますけど、他方において、殊に安全保障面なんかヨーロッパは遠いんですね。だから、アメリカとの関係は

好むと好まざるとに関わらず切っても切れないようなことは、経済とかなんとかだけじゃなしにいろんな、殊に安全保障面にあるわけでしょう。それに対応するものをヨーロッパに求めるといのは、なかなか無理だと思えますよ。そこまでレベルアップするのがね。そうじゃなくて、経済とか文化とか、あるいはいろんな物の考え方とか、いろんな面で日欧の関係が密接化することは非常に望ましいと思うんですね。それがどこの分野かということがまさに問題だと思えます。結局、双方である程度力があるのは経済とか技術とかそういうことになるんじゃないから。

いま最近では日本が非常に自信喪失で、誰もそんなようなことは考えないんだけど、たとえば通貨にしてもユーロが。ユーロは、これまた私の私論で暴論ですけど、ドイツ経済がへたばっちゃったんでユーロが上がりませんよ。ドイツはシュレーダー政権というのが出来まして、ラフォンテーヌという人が大蔵大臣になってやめたんですけど、ラフォンテーヌなんていう人は、私のいた時代にザールランドの首相だったんですけど、その当時からとんでもないことを言って、だいたい各州の首相には会いに行くんだけど、彼だけ会いに行かなかったわけです。

北岡 そうですか(笑)。

宮崎 (笑)。それで、たいへんな、SPDの中の最左翼でね。ちなみに、ブランドがラフォンテーヌを非常にかわいがったんですよ。それが緑の党との連立政権で大蔵大臣になったでしょう。とんでもないことになると思っただけの理由でやめて、いま政界から引退したようですけどね。

いずれにしてもシュレーダー自身はシュミットの後継者みたいになりたかったんでしょうけれども、緑というのはまた非常におかしな政党でね、緑との連立を組んだので、ますますドイツの経済の先行きが非常に暗くなっているわけですね。それがドイツの経済がポシャッタラ、それに代わるような国はないわけですよ。

ユーロはどんどん下がっちゃって、ドルよりも下がっちゃったでしょう。そういうようなことになっているわけで、これもヨーロッパ自体が非常に構造改革が要るんだろうと思うんですよ。オイロペイシユ・スタグナチオンがあるわけですから。だから、そういうことを克服してヨーロッパが活性化してくれば、リ・アクティベートされて来れば、日本とヨーロッパというのが話し相手になれば、アメリカとある程度、対抗までいかななくても、その三角の対話ができるということに、経済とか技術とか、経済というのには要するに投資を含めて、できるようになると思うんです。それが望ましいと思うんですね。ところが、日本もポシャッちゃったし、ヨーロッパもいまの状況では非常に具合が悪いという状況下において、私はそれがうまく行くかどうか疑問だと思います。

北岡 あと、大使がドイツにおられたもう少し後かもしれませんが、日本のトレード・インバランス〔貿易不均衡〕で特にフランスあたりで、ローカル・コンデートとかいろいろ入りにくくすると。ドイツはわりあい良かったんですよ。

宮崎 ドイツは全然そんなことは言わないんですね。

北岡 もうそういうことはいろいろございましたか。やっぱりクレソンさんなんかいた、あの頃ですかね。

宮崎 はい。

北岡 最近また新聞に出てきましたけど。

宮崎 クレソンというのは本当にバカな女でね(笑)。そんなもの相手にしてもしようがないと思うんだけど。ドイツはさすがに、瘦せても枯れてもそもそもマルクト・ヴァルトン、旗頭だからそんなことは言わない。殊に経済は長い間、ラムスドルフが握っていましたでしょう。彼は非常に政治家としてはまったく理屈一辺倒みたいところがあって、ある意味では……。彼は経済省の大臣をやっていたんだけど、私のときは、たとえば次官が大使

を呼ぶというのは普通なんですけど、場合によっては局長を呼ぶことだってあると思うんだけど、ラムスドルフの場合は必ず、次官が用事があるときも、ラムスドルフが呼んでそこにも次官が陪席するという恰好で話をするような恰好にしていたんです。外務省の次官にもよく話をしました。なるべく下のほうには会わないようにしてね、大使の権威を保つためにやっていたんです。

北岡 先ほども連立のお話をお聞きしたんですけども、大きからいうと小さなところなんですけども、非常に重要な閣僚ポストを持っていたんですね。

宮崎 そうそう、そうなんですよ。外務省と経済省ね。

北岡 もちろんそれは一方に、SPDの外交や経済がいまいち信用がないということもあると思うんですけど。

宮崎 ゲンシャールという人は長いから、よく知っているしね。海千山千で食わせ者でね。本音がどこにあるか、なかなか会って話しても分からないような人だったんですね。コールのほうがよほど明快だったですよ。ただ、党が違うんで、首相府と外務省との間の連絡がよくなくて、非常にわれわれにとっては迷惑をしたことが多いんですけどね。本当にああいう党が違うのが首相と外相になっていると、日本でもそうなることがあるのかもしれないけど、非常に困るんですよ。

北岡 細川連立内閣が出来たときに、やはり元自民党の人が大蔵大臣とか外務大臣とかやっていましたよね。それとちょっと似ているかもしれません。

あと、もうひとつお聞きしたかったのは、ドイツはもちろん各州が非常に重要なんですけれども、なかでもドイツ全体の意向を探るためにこの州が特に重要だとか、この州の動きが鍵だとか、そういうのはあるんですか。

宮崎 州の重要性はノルトライン・ウエストファーレンという、デュッセルドルフかなんかのある州が政治的には。それとバイエ

ルンですね。それから経済的にいえばフランクフルトのあるヘッセンという、その三つの州が非常に大事だと思えますよ。

北岡 この三つの州は、政治的にはそれなりに安定しているんですけどでしょうか。

宮崎 ノルトライン・ウエストファーレンはラウというSPDの人が長い間首相で、SPDの右派ですから。いま大統領になっちゃったんですけどね。それから、バイエルンはCSUというのがずっとやってますから安定しているわけです。ヘッセンはあっちに行ったりこっちに行ったりして。

北岡 ですから、ドイツのいくつかの州は安定してどっちかの政党が押さえていますから、ある揺れが起こったときに政権がひっくり返るわけです。

宮崎 そうそう。それでご承知のように、ドイツの参議院といふのかな、ブンデスラートというのは、州の政府が州の人口比で五人とか三人とか代表を出すわけです。それが上院のメンバーになるから、州の政府が野党に行っちゃうと、いろんな法案が通らないわけです。そういう逆転現象はいまでもあるんじゃないかな。

北岡 私は最後の台湾のお話が面白かったですけど。このインタビューはオフィシャルなものかどうか知りませんが、それだけじゃなくて、大使のように経済をずっとやってこられて、その目からまた安全保障を独特の視点で見てこられた方から見て、今の日本の外交とか国際関係を一度自由にお話をお伺いしたいなと思っていましたけど、そういうのはどうなんでしょうか。

佐道 たとえば一旦最後までお聞きしたあとに、最後にまたそれだけお聞きするのは全然構わないと思います。

北岡 ずっと上り坂の日本の経済外交を運営してこられた大使から見て、いまちょっと日本がへたばっているところで、どういふところにいちばん問題を感じておられるかとか、どうしたらいい

と聞いていらっしやるのか一回、放談をお聞きしたい(笑)。

宮崎 それは、なんといいますかね、孔子の言葉に「学びて思わざるは暗く、思いて学ばざるは危うし」というのがあるでしょう。危ういんですね、学んでないから(笑)。インフォメーションのインプットがないわけでしょう。だから、非常に独断的になってもともと危うい性格なんだけども(笑)。殊に、まだそれでも現役にも若干関係があるものだから、まだ悪口は言いたくないしね(笑)。外務省ってわりに、先輩にブリーフしてくれるのね。大勢だけでも。その他にも個別的にいろいろなことがあって、現役のやっていることに何か言うとかやっぱり具合が悪い。ただ、一般的な話や、今までやったことについて何かご質問なりご意見なりあればもちろん喜んで伺いますし、補足して申し上げることはあると思いますけど。

北岡 じゃあ最後に具体的に一個だけ。台湾との関係は、経済及び安全保障において極めて日本にとって重要な国、と言っちゃいけないんですかね、と思うんですけども、どういうふうにいまご覧になっていますか。

宮崎 いま選挙をやっていますでしょう。

北岡 いや、選挙はまだ運動が始まったばかりで、来月(二〇〇〇年三月)の十八日から。中旬ですね。

宮崎 連戦という人が当選するような話が多いです。ところが、連戦という人はあんまり人気がないらしいのね。それで、あの運動にあるように、大陸との間をつかず離れずになっているでしょう。あれは非常に賢明な策だと思えます。つかず離れずで、実際には彼らの経済がますます発展して安定すれば、だんだん……。しかも、私は台湾で講演したときのいちばんのポイントが、台湾の経済は西側の経済に組み込まれるように自分で持つていくべきだと、「インターヴィュー」という言葉を使っただけです。インターヴィューされるべきであるということをおっしゃったわ

けです。そのためにいろんなところに西側とコンタクトして、経済がもう切っても切れないような関係を西側との間に結んじゅうのがいちばんいいという話をしていただけども、大陸とはつかず離れずの状況でそういうことをやって、安定しながら成長するというのがいちばんいいと思うんですよね。直接いろいろ独立だとかなんとかかんとかいうと、非常にいまは具合悪いかと思うんです。さっきのMDI、MIDI？

北岡 ナショナル・ミサイル・ディフェンスですね。

宮崎 なんかについて、台湾が色気を示しているでしょう。日本はあれは協力するわけですよ。日本ぐらい距離があると、もしディフェンスできるんだったら、やるべきだと思うんで、SDIよりもっと具体性のあるものだと思いますけどね。台湾の場合、果たしてそういうことによってディフェンスできるのかどうかね。あんまりそういう方面じゃなくて、経済的な面で投資をたくさん受けてね。行ってますけどね、日本の投資のみならずアメリカの投資も。それで、台湾の経済が西側経済の中で非常に重要性を持ってくるようになれば。たとえば、メキシコの通貨がガタガタしたこと大騒ぎになったでしょう？ ああいうように台湾がなれば、各国が放っておかないわけですよ。そういうふうになるべきだというのが、私が台湾に行って講演したときの中身だったんですが、いまでもそう思っています。

北岡 そうですね。どうもありがとうございました。

宮崎弘道氏は戦後日本の「経済外交」にきわめて大きな貢献をされた外交官である。宮崎氏は一九二一年のお生まれで、太平洋戦争最中の四四年に東京帝国大学を卒業し、外務省に入省された。対ソ外交などに従事されていたことはあるが、戦後はほぼ一貫して「経済外交」に関係されている。講和間近の五〇年に通商問題に従事されて以降、対米貿易を中心とした二国間貿易、ガットを中心とした多国間経済関係にほぼ一貫して携わり、経済局長を経て経済担当の外務審議官に就任し、七八年と七九年のサミットで首相の個人代表（シエルパ）を務められた。宮崎氏の歩みは、敗戦という未曾有の経験を経て、日本が国際社会に復帰していく過程で細々と始めた通商活動から、ガットやOECDへの加盟を経て経済大国として主要先進国首脳会議（サミット）のメンバーになるという、戦後日本経済外交の発展史と軌を一にしている。本オーラル・ヒストリー記録に明らかのように、宮崎氏は実務者として、五〇年代の国際経済への復帰、六〇年代の経済発展と多国間外交、そして七三年のオイル・ショックに代表される国際経済の激動への対応に従事されていたわけであり、その意味で本オーラル・ヒストリーが、戦後日本の「経済外交」の実相を知る上で貴重な証言記録となっていることは疑いない。

宮崎氏のオーラル・ヒストリーは、政策研究大学院大学の政策情報プロジェクトが実施した一連の「外交官オーラル・ヒストリー」の一環として行われた。政策情報プロジェクトは、C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクトが開始される以前から実施されていた政策研究大学院大学独自の研究プロジェクトで、C. O. E. オーラル・政策研究プロジェクト開始以降はこれに吸収される形となっているものである。外交官に対するオーラル・ヒストリーは、政策情報プロジェクトの発足当初から重要な柱と位置づけられていたもので、宮崎氏のオーラルはその初期の段階に実施された。メイン・インタビュアーは北岡伸一氏（東京大学教授）で、適宜、井上寿一氏（学習院大学教授）、伊藤隆氏（政策研究大学院大学教授）、股野景親氏（元駐スウェーデン大使）、武田知己氏（都立大学助手）、そして私・佐道明広（当時・政策研究大学院大学助教授、現・中京大学）が参加した。第一回は一九九九年三月九日で、最後の第一回は二〇〇〇年二月二二日であり、ほぼ一月に一度のペースで実施された。毎回の質問は参加者の協力を得て私が作成した。速記は、有限会社ペンハウスの水野智子氏が担当した。

宮崎氏は本オーラルに対し、じつに真摯に取り組んで下さり、時にユーモアを交えつつ、貴重な体験を丁寧にお話して下さいました。ただ、現役時代、仕事の厳格さに定評があった宮崎氏らしく、前もって提出した質問項目に対しても、現場の実感と異なる点や、問題の本質からずれていると考えられる点などは明確に指摘され、その意味で質問作成者としては毎回緊張の連続であった。大病の後ということで、時にお疲れのご様子ではあったが、明晰かつ合理的な宮崎氏の思考は事象の説明でも遺

憾なく發揮されており、戦後日本の「経済外交」を検証する記録として貴重なものとなっていることは前述のとおりである。われわれのオーラル・ヒストリーを、「最後の公務」と感じて積極的に応じてくださった宮崎氏に心からの感謝を申し上げます。また、同氏は、二〇〇一年九月、永眠された。宮崎氏のご冥福を心からお祈りする次第である。

なお、本オーラル・ヒストリーの記録は、宮崎氏のご遺族を代表して政美氏のご了解を得て刊行される。貴重な記録の公開を認めていただいたご遺族に感謝したい。

最後に、本オーラル・ヒストリーに参加してくださったインタビューの方々、速記を担当された水野氏、そして本記録公開に当たって編集を担当していただいた小内一氏に感謝を申し上げる次第である。

二〇〇五年一月

政策研究大学院大学客員助教授・中京大学助教授 佐道明広

平成16年度 文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号12CE2002〕
発行：2005年3月25日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

〒162-8677 東京都新宿区若松町2-2
TEL:03-3341-0458 FAX:03-3341-0446